

茨城県笠間市

埜谷遺跡 2

県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書

2011

笠間市教育委員会

有限会社 毛野考古学研究所

茨城県笠間市

埜谷遺跡 2

県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書

2011

笠間市教育委員会

有限会社 毛野考古学研究所



調査地区空撮（南西から。中央がB区、右奥はA区、左手前は長峰東遺跡。）



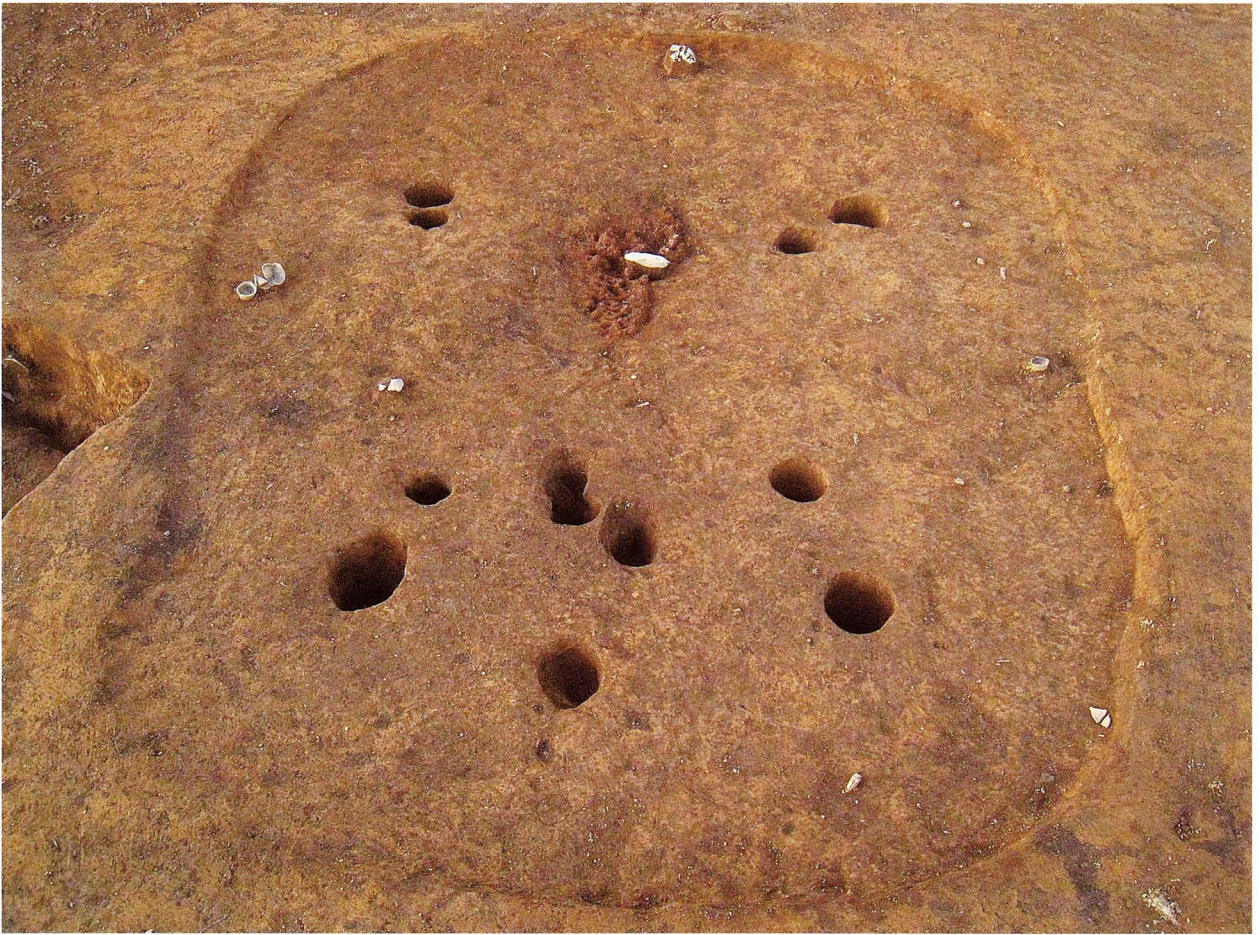
調査地区空撮（南東から。中央がA区、左はB3区。）



A区空撮
(上が西)



B区空撮
(北から)



A区54号住居跡完掘状況



A区41号住居跡カマド遺物出土状況



B 2 区 1 号石器集中地点と基本層序



遺物集合写真(弥生時代)

序

笠間市は、茨城県のほぼ中央に位置し、北西部には八溝山系が、南西部には吾国山・難台山・愛宕山が連なり、中央を北西部から東部にかけて涸沼川が大地を潤す自然豊かな地域です。また、河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから、原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

今回の調査は県営畑地帯総合整備事業に伴う埜谷遺跡の発掘調査であります。この調査の結果、弥生時代から古墳前期と古墳後期、奈良・平安時代を主体とする集落跡が確認されました。特に弥生時代の住居跡が69軒検出され、地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。この報告書を通して郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化向上の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに関係者に対しまして心より感謝申し上げます。

平成23年3月

笠間市教育委員会

教育長 飯 島 勇

例 言

1. 本書は、茨城県笠間市小原地区に所在する埜谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県営畑地帯整備事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査による記録保存を目的として実施された。
3. 調査及び報告書作成は、笠間市教育委員会の指導・委託を受けて、有限会社毛野考古学研究所が実施した。
4. 遺跡の所在地、調査期間、調査面積は以下の通りである。

所在地 笠間市小原 564 番地他
調査面積 11,849㎡ (A区 10,487㎡、B 1区 996㎡、B 2区 254㎡、B 3区 1,362㎡)
調査期間 平成20年8月18日～平成21年1月30日
整理期間 平成22年6月10日～平成23年3月15日
5. 発掘・整理担当者は以下の通りである(担当者は毛野考古学研究所)。

発掘調査 土生朗治 (A区・B 3区) 高橋清文 (B 2区・B 3区) 南田法正 (A区・B 1区)
整理調査 土井道昭 (旧石器時代) 高橋 (縄文時代) 南田・浅間陽・常深尚 (弥生～古墳時代前期)
土生 (古墳時代後期～近世)
6. 本書の執筆分担は、以下の通りである。





第 I～III章、第IV章第 2～4 節 (69～103 住、方形周溝状遺構)・第 5 節、第VI章第 3 節 1 (4 住)・第 4 節、
第VII章第 1 節 1 (2 住～)・第 2 節 1・2 (2 周溝墓)、第VIII章第 3～5 節、遺物観察表 (古墳時代後期以降の
遺物) - 土生
第IV章第 1 節 2、第V章第 3 節 2、第VI章第 2 節・第 3 節 (1～3 住)・第 5 節 1・2、第VII章第 1 節 1 (1 住)・
第 2 節 2 (1 周溝墓)、第VIII章第 1 節、遺物観察表 (縄文土器) - 高橋
第IV章第 1 節 1・第 2～4 節 (1～67 住)、第V章第 1 節 1・第 2 節・第 3 節 - 南田
第IV章第 2 節 2、第V章第 1 節 2、第VII章第 3 節、第VIII章第 2 節、遺物観察表 (弥生時代の遺物) - 浅間
第VI章第 1 節、遺物観察表 (石器・石製品) - 土井
遺物観察表 (古墳時代前期の遺物) - 常深
7. 本書の編集は、常深が担当した。
8. 調査で得られた資料は笠間市教育委員会で保管している。
9. 調査及び報告書作成に際し、下記の諸氏・機関からご指導・ご協力を賜った。記して感謝を申し上げます。

赤井博之 飯島一生 稲田健一 海老澤稔 大木伸一郎 大賀健 大関武 川口武彦 川崎純徳 瓦吹堅
齋藤弘道 坂口一 佐々木義則 笹澤泰史 菅谷通保 鈴木徳雄 鈴木正博 鈴木素行 谷藤保彦 鶴見貞雄
能島清光 藤田典夫 比毛君男 三宅敦気
スカイサーベイ (順不同・敬称略)
10. 本書の作成にあたっては、青柳美保、石田満理、石丸敦史、磯洋子、内田恵美子、大塚規子、鬼山由子
小野沢絹子、賀来孝代、加藤陽子、樺沢美枝、亀田浩子、木村宏次、小出琢磨、合田幸子、菅谷万須美
仙波菜津美、高橋真弓、永島美和子、根本正子、半澤利江、伴場りく、福江千英里、山下奈邦子の協力を得た。
11. 発掘調査参加者は以下の通りである。

青木馨、青木誠、飯田博美、飯田昭、石川克己、石川久男、海老原龍生、大山年昭、大内英雄、岡根光雄
大平昭夫、小坂部克己、大和田卓、小堤静江、小野瀬晃、小瀬靖夫、小山義則、川又誠二、川上孝子
梶山洋二、北村昶、黒沢明美、小柴常光、小山範子、坂倉巡一、佐久間順美、佐藤としえ、佐藤利男
塩田勝利、篠原一郎、白澤清三、菅谷正義、菅谷和子、鈴木とし江、鈴木浩、鈴木晃佳、関律子、仙波由美子
高橋真弓、高岡真士、瀧江稔、高田幸江、竹内郁夫、豊島英則、飛田和郎、仲田仙、中島とみ子、中島秀雄
中村伊重、中村薫、中村柄繁次、野村正子、埜英知、広水一真、吹野昇、福島えり子、松本修児、三河博志
武藤瑞良、山口致辰、横田忠利、吉田正子

凡 例

1. 本書で使用した地図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図、笠間市発行2千5百分の1都市計画図である。
2. 出土遺物の注記で使用した遺構の略号は以下の通りである。
S I…竪穴住居跡 S K…土坑 S D…溝 P…ピット K…カクラン
3. 実測図で使用した縮尺は以下の通りである。
竪穴住居跡…1/60 掘立柱建物跡…1/60 土坑・陥穴・井戸・地下式坑…1/60
溝・道路跡…1/60、1/300 方形周溝状遺構…1/60 周溝墓…1/80、1/100
ピット群・ピット列…1/60 石器集中地点…1/60
土器…1/3 旧石器…3/4 石器・石製品…1/1、1/2、1/3、1/4
土製品・金属製品…1/3
4. 土層と遺物の色調は『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄編著（財）日本色彩研究所）を使用した。
5. 遺構一覧表・遺物観察表の表記は（ ）内数値が計測推定値を、[]内数値は残存値を表す。
6. 遺物観察表（弥生土器）において附加条縄文の原体については鈴木素行1998を一部参考にし、附加条縄文の種類（軸縄の原体+附加した縄の条数と原体）のように表記した。
（例）附加条1種縄文（L R + 2 R）= 単節L R縄文に無節R縄文を2条附加
軸縄が不明のものについては「R - S」のように表記し、R - Sの場合は無節RをS巻き、R - Zの場合はZ巻きであることを表す。なお、小文字r、lは撚り紐（0段の縄）の撚り方向を表す。また、施文方向は基本的に横方向であるため、記述を省略し、横方向以外の場合のみ記載した。
7. 遺物観察表（弥生土器）においてコゲ等については、内容物が焦げ付き、厚く付着する場合を「コゲ」、薄く付着する場合を「ヨゴレ」、被熱によりススが消失した部分を「スス酸化消失」と表記した。
8. 実測図中のスクリーントーンは以下の通りである。

遺構		粘土		焼土
遺物		赤彩		油煙

目 次

巻頭写真図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

第 I 章 調査に至る経緯と調査の経過	1	第 2 節 奈良・平安時代	278
第 1 節 調査に至る経緯	1	1 竪穴住居跡	278
第 2 節 調査の経過	1	2 溝	280
第 II 章 遺跡の位置と環境	2	第 3 節 時期不明の遺構と遺構外出土遺物	280
第 1 節 地理的環境	2	1 時期不明の遺構	280
第 2 節 歴史的環境	3	2 遺構外出土遺物	280
第 III 章 調査の方法と基本層序	4	第 VI 章 B 2 区の遺構と遺物	281
第 1 節 調査の方法	4	第 1 節 旧石器時代	281
第 2 節 基本層序	5	1 石器集中地点	281
第 IV 章 A 区の遺構と遺物	12	第 2 節 縄文時代	287
第 1 節 縄文時代	12	1 竪穴住居跡	287
1 陥穴	12	第 3 節 弥生時代	289
2 遺構外出土遺物	13	1 竪穴住居跡	289
第 2 節 弥生時代	15	第 4 節 奈良・平安時代	293
1 竪穴住居跡	15	1 竪穴住居跡	293
2 遺構外出土遺物	109	第 5 節 時期不明の遺構と遺構外出土遺物	294
第 3 節 古墳時代	113	1 溝	294
1 竪穴住居跡	113	2 土坑・ピット	294
2 包含層及び遺構外出土遺物	153	3 遺構外出土遺物	295
第 4 節 奈良・平安時代	154	第 VII 章 B 3 区の遺構と遺物	296
1 竪穴住居跡	154	第 1 節 弥生時代	296
2 掘立柱建物跡	235	1 竪穴住居跡	296
3 方形周溝状遺構	242	第 2 節 古墳時代	329
第 5 節 中世以降	243	1 竪穴住居跡	329
1 地下式坑	243	2 周溝墓	331
2 井戸	248	第 3 節 遺構外出土遺物	336
3 土坑	250	第 VIII 章 総括	337
4 溜井状遺構	252	第 1 節 縄文時代	337
5 ビット群・ビット列	252	第 2 節 弥生時代	338
6 溝・道路跡	255	第 3 節 古墳時代	343
第 V 章 B 1 区の遺構と遺物	257	第 4 節 奈良・平安時代	344
第 1 節 弥生時代	257	第 5 節 中世	346
1 竪穴住居跡	257		
2 遺構外出土遺物	277		

写真図版

抄 録

奥 付

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	2	第56図	64号住居跡・出土遺物①	68
第2図	調査地区の位置図	3	第57図	64号住居跡出土遺物②	69
第3図	基本土層図	5	第58図	66号住居跡	70
第4図	遺構全体図	6	第59図	66号住居跡出土遺物	71
第5図	A区遺構全体図	7	第60図	67号住居跡・出土遺物	73
第6図	B1区遺構全体図	9	第61図	73号住居跡・出土遺物	74
第7図	B2区遺構全体図	10	第62図	74号住居跡・出土遺物	76
第8図	B3区遺構全体図	11	第63図	77号住居跡・出土遺物	78
第9図	1・2号陥穴・出土遺物	12	第64図	79号住居跡	79
第10図	A区遺構外出土遺物①	13	第65図	79号住居跡出土遺物①	80
第11図	A区遺構外出土遺物②	14	第66図	79号住居跡出土遺物②	81
第12図	2号住居跡	15	第67図	80号住居跡	83
第13図	2号住居跡出土遺物	16	第68図	80号住居跡出土遺物	84
第14図	3号住居跡出土遺物	16	第69図	83a号住居跡出土遺物	85
第15図	3号住居跡	17	第70図	83a・b号住居跡	86
第16図	6号住居跡	18	第71図	85号住居跡	88
第17図	6号住居跡出土遺物	19	第72図	85号住居跡出土遺物①	89
第18図	9号住居跡	21	第73図	85号住居跡出土遺物②	90
第19図	9号住居跡出土遺物	22	第74図	86号住居跡	91
第20図	14号住居跡	23	第75図	86号住居跡出土遺物①	92
第21図	14号住居跡出土遺物	24	第76図	86号住居跡出土遺物②	93
第22図	16号住居跡	25	第77図	88号住居跡出土遺物	94
第23図	16号住居跡出土遺物	26	第78図	88号住居跡	95
第24図	18号住居跡	28	第79図	90号住居跡	96
第25図	18号住居跡出土遺物①	28	第80図	90号住居跡出土遺物	97
第26図	18号住居跡出土遺物②	29	第81図	93号住居跡・出土遺物	98
第27図	27号住居跡	31	第82図	96号住居跡・出土遺物	99
第28図	27号住居跡出土遺物①	32	第83図	97号住居跡・出土遺物	101
第29図	27号住居跡出土遺物②	33	第84図	98号住居跡	102
第30図	29号住居跡出土遺物	34	第85図	98号住居跡出土遺物	103
第31図	29号住居跡	35	第86図	99号住居跡・出土遺物	104
第32図	30号住居跡	37	第87図	100号住居跡	104
第33図	35号住居跡	37	第88図	100号住居跡出土遺物	105
第34図	37号住居跡	38	第89図	101号住居跡・出土遺物	106
第35図	37号住居跡出土遺物	39	第90図	102号住居跡	107
第36図	39号住居跡・出土遺物	41	第91図	103号住居跡・出土遺物	108
第37図	44号住居跡	43	第92図	遺構外出土遺物①	109
第38図	44号住居跡掘り方	44	第93図	遺構外出土遺物②	110
第39図	44号住居跡出土遺物	45	第94図	1号住居跡	114
第40図	45号住居跡・出土遺物	46	第95図	1号住居跡出土遺物①	115
第41図	48号住居跡	48	第96図	1号住居跡出土遺物②	116
第42図	48号住居跡出土遺物	49	第97図	4号住居跡出土遺物①	117
第43図	49号住居跡	51	第98図	4号住居跡	118
第44図	49号住居跡出土遺物	52	第99図	4号住居跡出土遺物②	119
第45図	50号住居跡	53	第100図	5号住居跡	120
第46図	51号住居跡	54	第101図	5号住居跡掘り方	121
第47図	52号住居跡・出土遺物	55	第102図	5号住居跡出土遺物①	122
第48図	54号住居跡	57	第103図	5号住居跡出土遺物②	123
第49図	54号住居跡出土遺物	58	第104図	8号住居跡	126
第50図	56号住居跡	59	第105図	8号住居跡掘り方	127
第51図	57号住居跡	60	第106図	8号住居跡出土遺物①	128
第52図	57号住居跡出土遺物	61	第107図	8号住居跡出土遺物②	129
第53図	58号住居跡	63	第108図	8号住居跡出土遺物③	130
第54図	58号住居跡出土遺物	64	第109図	12号住居跡	132
第55図	61号住居跡・出土遺物	66	第110図	12号住居跡出土遺物	132

第111図	13号住居跡	133	第171図	47号住居跡出土遺物③	205
第112図	15号住居跡	135	第172図	53号住居跡・出土遺物①	207
第113図	15号住居跡出土遺物	136	第173図	53号住居跡出土遺物②	208
第114図	15号住居跡掘り方	137	第174図	55号住居跡・出土遺物	209
第115図	23号住居跡	138	第175図	59号住居跡	210
第116図	23号住居跡出土遺物	139	第176図	59号住居跡出土遺物①	211
第117図	32号住居跡	140	第177図	59号住居跡出土遺物②	212
第118図	33号住居跡	141	第178図	60号住居跡	214
第119図	33号住居跡出土遺物	142	第179図	60号住居跡出土遺物	215
第120図	81号住居跡	144	第180図	63号住居跡	216
第121図	81号住居跡出土遺物	145	第181図	63号住居跡出土遺物	217
第122図	83b号住居跡出土遺物	146	第182図	65号住居跡・出土遺物①	218
第123図	87号住居跡・出土遺物	147	第183図	65号住居跡出土遺物②	219
第124図	92号住居跡出土遺物	148	第184図	69号住居跡	221
第125図	92号住居跡	149	第185図	70号住居跡・出土遺物	222
第126図	94号住居跡	151	第186図	71号住居跡	223
第127図	94号住居跡出土遺物	152	第187図	71号住居跡出土遺物	224
第128図	包含層及び遺構外出土遺物	153	第188図	75号住居跡	225
第129図	7号住居跡	155	第189図	75号住居跡出土遺物	226
第130図	7号住居跡出土遺物①	156	第190図	76号住居跡・出土遺物	227
第131図	7号住居跡出土遺物②	157	第191図	78号住居跡	228
第132図	10号住居跡	158	第192図	78号住居跡出土遺物	229
第133図	10号住居跡出土遺物	159	第193図	82号住居跡出土遺物	230
第134図	11号住居跡	160	第194図	82号住居跡	231
第135図	11号住居跡掘り方	161	第195図	84号住居跡	232
第136図	11号住居跡出土遺物	161	第196図	84号住居跡出土遺物	233
第137図	17号住居跡	163	第197図	95号住居跡	234
第138図	17号住居跡出土遺物	164	第198図	95号住居跡出土遺物	235
第139図	19号住居跡	166	第199図	1・3号掘立柱建物跡・出土遺物	237
第140図	19号住居跡出土遺物	167	第200図	4・6号掘立柱建物跡	238
第141図	21号住居跡	168	第201図	7号掘立柱建物跡	239
第142図	21号住居跡カマド・掘り方	169	第202図	7号掘立柱建物跡出土遺物	240
第143図	21号住居跡出土遺物	170	第203図	11・12号掘立柱建物跡	241
第144図	22号住居跡	172	第204図	1号方形周溝状遺構	242
第145図	22号住居跡出土遺物	173	第205図	1号地下式坑	243
第146図	24号住居跡	174	第206図	2号・3号地下式坑	244
第147図	24号住居跡出土遺物	175	第207図	4号・5号地下式坑	245
第148図	26号住居跡	176	第208図	6号・7号地下式坑	246
第149図	26号住居跡出土遺物	177	第209図	地下式坑出土遺物	247
第150図	31号住居跡出土遺物	179	第210図	1号井戸・出土遺物	249
第151図	31号住居跡	180	第211図	2号井戸	249
第152図	38号住居跡	182	第212図	72号土坑出土遺物	250
第153図	38号住居跡カマド・掘り方	183	第213図	溜井状遺構出土遺物	252
第154図	38号住居跡出土遺物①	184	第214図	1号ピット群	253
第155図	38号住居跡出土遺物②	185	第215図	1号ピット列	253
第156図	40号住居跡	187	第216図	2号・3号ピット列	254
第157図	40号住居跡掘り方	188	第217図	7号溝・1号道路跡	256
第158図	40号住居跡出土遺物	189	第218図	溝・道路跡出土遺物	256
第159図	41・42号住居跡	191	第219図	1号住居跡	258
第160図	41・42号住居跡、42号住居跡出土遺物	192	第220図	1号住居跡出土遺物	259
第161図	41号住居跡出土遺物	193	第221図	2号住居跡	261
第162図	43号住居跡	195	第222図	2号住居跡出土遺物	262
第163図	43号住居跡出土遺物	196	第223図	3号住居跡	264
第164図	46号住居跡	197	第224図	3号住居跡出土遺物①	265
第165図	46号住居跡カマド・掘り方	198	第225図	3号住居跡出土遺物②	266
第166図	46号住居跡出土遺物	199	第226図	5号住居跡	267
第167図	47号住居跡	201	第227図	5号住居跡出土遺物	268
第168図	47号住居跡掘り方	202	第228図	6号住居跡	270
第169図	47号住居跡出土遺物①	203	第229図	6号住居跡出土遺物	271
第170図	47号住居跡出土遺物②	204	第230図	7号住居跡・出土遺物①	273

第231図	7号住居跡出土遺物②	274	第265図	5号住居跡出土遺物	312
第232図	8号住居跡	275	第266図	5号住居跡	313
第233図	8号住居跡出土遺物	276	第267図	6号住居跡・出土遺物	315
第234図	9号住居跡	277	第268図	8号住居跡・出土遺物	317
第235図	遺構外出土遺物	278	第269図	9号住居跡出土遺物	318
第236図	4号住居跡・出土遺物	279	第270図	9号住居跡	319
第237図	遺構外出土遺物	280	第271図	10号住居跡・出土遺物	321
第238図	1号石器集中地点(器種別)	282	第272図	11号住居跡	322
第239図	1号石器集中地点(石材別)	283	第273図	11号住居跡出土遺物	323
第240図	1号石器集中地点出土遺物①	284	第274図	12号住居跡	325
第241図	1号石器集中地点出土遺物②	285	第275図	12号住居跡出土遺物①	326
第242図	1号住居跡出土遺物	287	第276図	12号住居跡出土遺物②	327
第243図	1号住居跡	288	第277図	13号住居跡・出土遺物	328
第244図	2号住居跡	289	第278図	7号住居跡出土遺物①	329
第245図	2号住居跡出土遺物	290	第279図	7号住居跡	330
第246図	3号住居跡	291	第280図	7号住居跡出土遺物②	331
第247図	4号住居跡・出土遺物	292	第281図	1号周溝墓・出土遺物	332
第248図	5号住居跡・出土遺物	293	第282図	2号周溝墓	334
第249図	1号溝	294	第283図	2号周溝墓出土遺物	335
第250図	1号～5号土坑	295	第284図	遺構外出土遺物	336
第251図	ピット・遺構外出土遺物	295	第285図	茨城県における縄文前期前半の6本支柱穴住居跡	337
第252図	1号住居跡出土遺物	296	第286図	弥生土器の変遷図(2～4期を抜粋)	339
第253図	1号住居跡	297	第287図	典型的な十王台式土器から外れる個体	339
第254図	2号住居跡	298	第288図	弥生集落の変遷	341
第255図	2号住居跡掘り方・出土遺物①	299	第289図	付図・弥生土器のスス・コゲ	342
第256図	2号住居跡出土遺物②	300	第290図	「貯蔵穴の移動」より	343
第257図	3号住居跡	302	第291図	長峰東・埜谷遺跡 住居の比較	343
第258図	3号住居跡出土遺物①	303	第292図	竪穴住居の変化	344
第259図	3号住居跡出土遺物②	304	第293図	特殊な器形の須恵器	344
第260図	3号住居跡出土遺物③	305	第294図	須恵器大形高台付鉢	345
第261図	4号住居跡	308	第295図	8世紀の土師器供膳具	345
第262図	4号住居跡出土遺物①	309	第296図	「□山寺」墨書(60住)	345
第263図	4号住居跡出土遺物②	310			
第264図	4号住居跡出土遺物③	311			

表 目 次

表1	1号陥穴出土遺物観察表	13	表18	52号住居跡出土遺物観察表	56
表2	A区遺構外出土遺物観察表	14	表19	54号住居跡出土遺物観察表	56
表3	2号住居跡出土遺物観察表	16	表20	57号住居跡出土遺物観察表	62
表4	3号住居跡出土遺物観察表	16	表21	58号住居跡出土遺物観察表	63
表5	6号住居跡出土遺物観察表	17	表22	61号住居跡出土遺物観察表	67
表6	9号住居跡出土遺物観察表	21	表23	64号住居跡出土遺物観察表	67
表7	14号住居跡出土遺物観察表	22	表24	66号住居跡出土遺物観察表	70
表8	16号住居跡出土遺物観察表	24	表25	67号住居跡出土遺物観察表	72
表9	18号住居跡出土遺物観察表	27	表26	73号住居跡出土遺物観察表	75
表10	27号住居跡出土遺物観察表	31	表27	74号住居跡出土遺物観察表	75
表11	29号住居跡出土遺物観察表	35	表28	77号住居跡出土遺物観察表	77
表12	37号住居跡出土遺物観察表	39	表29	79号住居跡出土遺物観察表	81
表13	39号住居跡出土遺物観察表	40	表30	80号住居跡出土遺物観察表	82
表14	44号住居跡出土遺物観察表	42	表31	83a号住居跡出土遺物観察表	86
表15	45号住居跡出土遺物観察表	47	表32	85号住居跡出土遺物観察表	87
表16	48号住居跡出土遺物観察表	47	表33	86号住居跡出土遺物観察表	93
表17	49号住居跡出土遺物観察表	50	表34	88号住居跡出土遺物観察表	94

表35	90号住居跡出土遺物觀察表	97	表85	76号住居跡出土遺物觀察表	228
表36	93号住居跡出土遺物觀察表	97	表86	78号住居跡出土遺物觀察表	229
表37	96号住居跡出土遺物觀察表	100	表87	82号住居跡出土遺物觀察表	230
表38	97号住居跡出土遺物觀察表	100	表88	84号住居跡出土遺物觀察表	233
表39	98号住居跡出土遺物觀察表	103	表89	95号住居跡出土遺物觀察表	235
表40	99号住居跡出土遺物觀察表	104	表90	3号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	236
表41	100号住居跡出土遺物觀察表	105	表91	7号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	240
表42	101号住居跡出土遺物觀察表	106	表92	地下式坑一覽表	243
表43	103号住居跡出土遺物觀察表	108	表93	地下式坑出土遺物觀察表	248
表44	A区遺構外出土遺物觀察表	111	表94	井戸一覽表	248
表45	1号住居跡出土遺物觀察表	113	表95	井戸出土遺物觀察表	248
表46	4号住居跡出土遺物觀察表	119	表96	72号土坑出土遺物觀察表	250
表47	5号住居跡出土遺物觀察表	124	表97	A区土坑一覽表	251
表48	8号住居跡出土遺物觀察表	125	表98	溜井状遺構出土遺物觀察表	252
表49	12号住居跡出土遺物觀察表	133	表99	溝・道路跡出土遺物觀察表	253
表50	15号住居跡出土遺物觀察表	134	表100	1号住居跡出土遺物觀察表	257
表51	23号住居跡出土遺物觀察表	139	表101	2号住居跡出土遺物觀察表	260
表52	33号住居跡出土遺物觀察表	143	表102	3号住居跡出土遺物觀察表	263
表53	81号住居跡出土遺物觀察表	145	表103	5号住居跡出土遺物觀察表	268
表54	83b号住居跡出土遺物觀察表	146	表104	6号住居跡出土遺物觀察表	272
表55	87号住居跡出土遺物觀察表	146	表105	7号住居跡出土遺物觀察表	272
表56	92号住居跡出土遺物觀察表	148	表106	8号住居跡出土遺物觀察表	276
表57	94号住居跡出土遺物觀察表	150	表107	遺構外出土遺物觀察表	278
表58	包含層及び遺構外出土遺物觀察表	153	表108	4号住居跡出土遺物觀察表	279
表59	7号住居跡出土遺物觀察表	154	表109	B1区土坑一覽表	280
表60	10号住居跡出土遺物觀察表	159	表110	遺構外出土遺物觀察表	280
表61	11号住居跡出土遺物觀察表	162	表111	1号石器集中地点出土石器組成表	283
表62	17号住居跡出土遺物觀察表	162	表112	1号石器集中地点出土石器一覽表	285
表63	19号住居跡出土遺物觀察表	165	表113	1号住居跡出土遺物觀察表	287
表64	21号住居跡出土遺物觀察表	171	表114	2号住居跡出土遺物觀察表	290
表65	22号住居跡出土遺物觀察表	173	表115	4号住居跡出土遺物觀察表	291
表66	24号住居跡出土遺物觀察表	175	表116	5号住居跡出土遺物觀察表	294
表67	26号住居跡出土遺物觀察表	178	表117	B2区土坑一覽表	294
表68	31号住居跡出土遺物觀察表	181	表118	ピット・遺構外出土遺物觀察表	295
表69	38号住居跡出土遺物觀察表	186	表119	1号住居跡出土遺物觀察表	296
表70	40号住居跡出土遺物觀察表	188	表120	2号住居跡出土遺物觀察表	301
表71	41号住居跡出土遺物觀察表	194	表121	3号住居跡出土遺物觀察表	302
表72	42号住居跡出土遺物觀察表	194	表122	4号住居跡出土遺物觀察表	307
表73	43号住居跡出土遺物觀察表	196	表123	5号住居跡出土遺物觀察表	314
表74	46号住居跡出土遺物觀察表	200	表124	6号住居跡出土遺物觀察表	316
表75	47号住居跡出土遺物觀察表	202	表125	8号住居跡出土遺物觀察表	316
表76	53号住居跡出土遺物觀察表	206	表126	9号住居跡出土遺物觀察表	318
表77	55号住居跡出土遺物觀察表	208	表127	10号住居跡出土遺物觀察表	320
表78	59号住居跡出土遺物觀察表	213	表128	11号住居跡出土遺物觀察表	323
表79	60号住居跡出土遺物觀察表	215	表129	12号住居跡出土遺物觀察表	324
表80	63号住居跡出土遺物觀察表	217	表130	13号住居跡出土遺物觀察表	328
表81	65号住居跡出土遺物觀察表	217	表131	7号住居跡出土遺物觀察表	331
表82	70号住居跡出土遺物觀察表	221	表132	1号周溝墓出土遺物觀察表	333
表83	71号住居跡出土遺物觀察表	224	表133	2号周溝墓出土遺物觀察表	333
表84	75号住居跡出土遺物觀察表	224	表134	遺構外出土遺物觀察表	336

写真図版目次

- PL .1 A区の遺構（縄文時代・弥生時代） 1・2号陥穴、6・14・16・27・29・37号住居跡
- PL .2 A区の遺構（弥生時代） 44・45・48・49・54・56・57・58号住居跡
- PL .3 A区の遺構（弥生時代） 67・73・77・79・85・86・88号住居跡
- PL .4 A区の遺構（弥生時代・古墳時代） 93・97・102・1・4号住居跡
- PL .5 A区の遺構（古墳時代） 5・8・15・33・87・92号住居跡
- PL .6 A区の遺構（奈良・平安時代） 7・10・11・17・19号住居跡
- PL .7 A区の遺構（奈良・平安時代） 21・22・24・26・31・38号住居跡
- PL .8 A区の遺構（奈良・平安時代） 38・40・41・42・43号住居跡
- PL .9 A区の遺構（奈良・平安時代） 43・46・47・53号住居跡
- PL .10 A区の遺構（奈良・平安時代） 55・59・60・65・75・84号住居跡
- PL .11 A区の遺構（奈良・平安時代） 1・3・4・6・7・11・12号掘立柱建物跡、1号方形周溝状遺構
- PL .12 A区の遺構（中世以降） 1・2・3・4・7号地下式坑、1・2号井戸、土坑群
- PL .13 A区の遺構（中世以降） 溜井状遺構、1・2・5・7・8・9号溝、1号道路跡、1号段切り
- PL .14 B1区の遺構 1・2・3・4・6・7・8号住居跡
- PL .15 B2区の遺構 1号石器集中地点、1・2・4号住居跡、1号溝
- PL .16 B3区の遺構（弥生時代） 1・2・3・4・5・8・9号住居跡
- PL .17 B3区の遺構（弥生時代・古墳時代） 10・11・12・7号住居跡、1・2号周溝墓
- PL .18 A・B1～3区の遺物（縄文時代） A区1号住居跡陥穴・遺構外出土遺物、B1区遺構外出土遺物、
B2区1号住居跡・遺構外出土遺物、B3区遺構外出土遺物
- PL .19 A区の遺物（弥生時代） 14・18・27・44号住居跡出土遺物
- PL .20 A区の遺物（弥生時代） 48・49・54・57・58・66号住居跡出土遺物
- PL .21 A区の遺物（弥生時代） 64・79・80・86号住居跡出土遺物
- PL .22 A区の遺物（弥生時代） 85・100号住居跡・遺構外出土遺物
- PL .23 A区の遺物（弥生時代） 16・37・49・52・57・58・66・74・77・85・86・90・98号住居跡・
遺構外出土遺物
- PL .24 A区の遺物（古墳時代） 1・4・5号住居跡出土遺物
- PL .25 A区の遺物（古墳時代） 5・8・33号住居跡出土遺物
- PL .26 A区の遺物（古墳時代、奈良・平安時代） 7・10・11・15号住居跡出土遺物
- PL .27 A区の遺物（奈良・平安時代） 17・19・21・22・24・26号住居跡出土遺物
- PL .28 A区の遺物（奈良・平安時代） 31・38・40・41・43・46号住居跡出土遺物
- PL .29 A区の遺物（奈良・平安時代） 47・53・55・59・60号住居跡出土遺物
- PL .30 A区の遺物（奈良・平安時代以降） 26・65・76・84・87・92・94・95号住居跡・溜井状遺構出土遺物
- PL .31 B1区の遺物（弥生時代） 3・6号住居跡出土遺物
- PL .32 B2区の遺物（旧石器時代） 1号石器集中地点出土遺物
- PL .33 B3区の遺物（弥生時代） 2・3号住居跡出土遺物
- PL .34 B3区の遺物（弥生時代） 3・4・5号住居跡出土遺物
- PL .35 B3区の遺物（弥生時代） 9・11・12号住居跡出土遺物
- PL .36 B3区の遺物（弥生時代・古墳時代） 1・7・11・13号住居跡・2号周溝墓・遺構外出土遺物
- PL .37 A・B1～3区の遺物（金属製品・石製品・石器） A区83a・66号住居跡、B1区2・8号住居跡、
B3区3・4・5・7・11号住居跡出土遺物
- PL .38 A・B1～3区の遺物（土製紡錘車） A区18・48・61号住居跡・遺構外出土遺物、B1区1・2・3・
11号住居跡、B2区2号住居跡・遺構外出土遺物、
B3区4・11号住居跡出土遺物

第 I 章 調査に至る経緯と調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯

畑地帯総合整備事業は、農業に伴う道路・灌漑施設・農地などの生産基盤を総合的に整備することによって、作物品質の向上、生産作物の拡大、反収の増加、輸送費の削減、荷傷みの防止など、より高い生産性と品質のさらなる向上を目指している。

笠間市では基本施策を総合計画で目標を定め、農林業の振興を図ることを目的とした産業振興プロジェクトが重点的に進められている。また、農業生産基盤の整備の一環として、平成 13 年に小原地区土地改良組合が設立され、茨城県の指導の下、効率的な畑作農業地域を作るための整備事業が実施されている。

この整備事業の計画地は常磐線をはさんで南北に分かれている。この地区には市内最大級の山王塚古墳を有する一本松古墳群があり、重要な遺跡の包蔵地である。このことから整備事業計画の中で平成 15 年に三本松遺跡の発掘調査、平成 16・17 年に小原遺跡の発掘調査、さらに平成 20 年に埜谷遺跡（一部）の発掘調査が行われ、多大な成果が得られている。

今回の整備事業計画地は埜谷遺跡の範囲内であることから、笠間市教育委員会は平成 19 年度・20 年度に笠間市文化財保護審議会委員の能島清光氏に試掘調査を依頼した。その結果トレンチから住居跡が確認され、出土遺物などから弥生時代を主体とした集落があることが推定された。

工事主体者である水戸土地改良事務所（現県央農林事務所）は、茨城県教育委員会教育長に対して、平成 19 年 7 月 10 日付けで遺跡について文化財保護法第 94 条第 1 項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と判断し、平成 19 年 11 月 2 日付けで工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受けて、笠間市教育委員会は有限会社毛野考古学研究所と委託契約を締結して調査を依頼した。笠間市教育委員会・水戸土地改良事務所・有限会社毛野考古学研究所は三者協議を行い、試掘調査の結果に基づき、平成 20 年 7 月 18 日付けで文化財保護法第 92 条第 1 項の規定による発掘調査届出を茨城県教育委員会教育長へ提出、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏、笠間市文化財保護審議会委員の能島清光氏を指導委員として平成 20 年 8 月 18 日から平成 21 年 1 月 30 日まで、発掘調査を実施することとなった。

第 2 節 調査の経過

平成 20 年 8 月 18 日、重機による表土除去作業を A 区から開始する。8 月 20 日からは、作業員による遺構確認作業を開始し、A 区からは住居跡が 100 軒余り確認される。9 月 1 日からは、竪穴住居跡の掘り込み作業を開始する。9 月中旬には竪穴住居跡の調査を進めるとともに B 区の遺構確認作業を行い、20 軒余りの竪穴住居跡が確認される。9 月末から B 区の遺構調査を行い、10 月中旬に B 1・B 2 区の竪穴住居跡の調査を終了し、B 3 区と A 区の調査を開始する。11 月も引き続き、A 区と B 3 区の調査を継続し、12 月中旬には B 3 区の調査を終了する。平成 21 年 1 月 10 日現地説明会を実施し、最後まで残っていた A 区の調査は 1 月 19 日で終了し、図面作業を含むすべての調査は 1 月末で終了する。

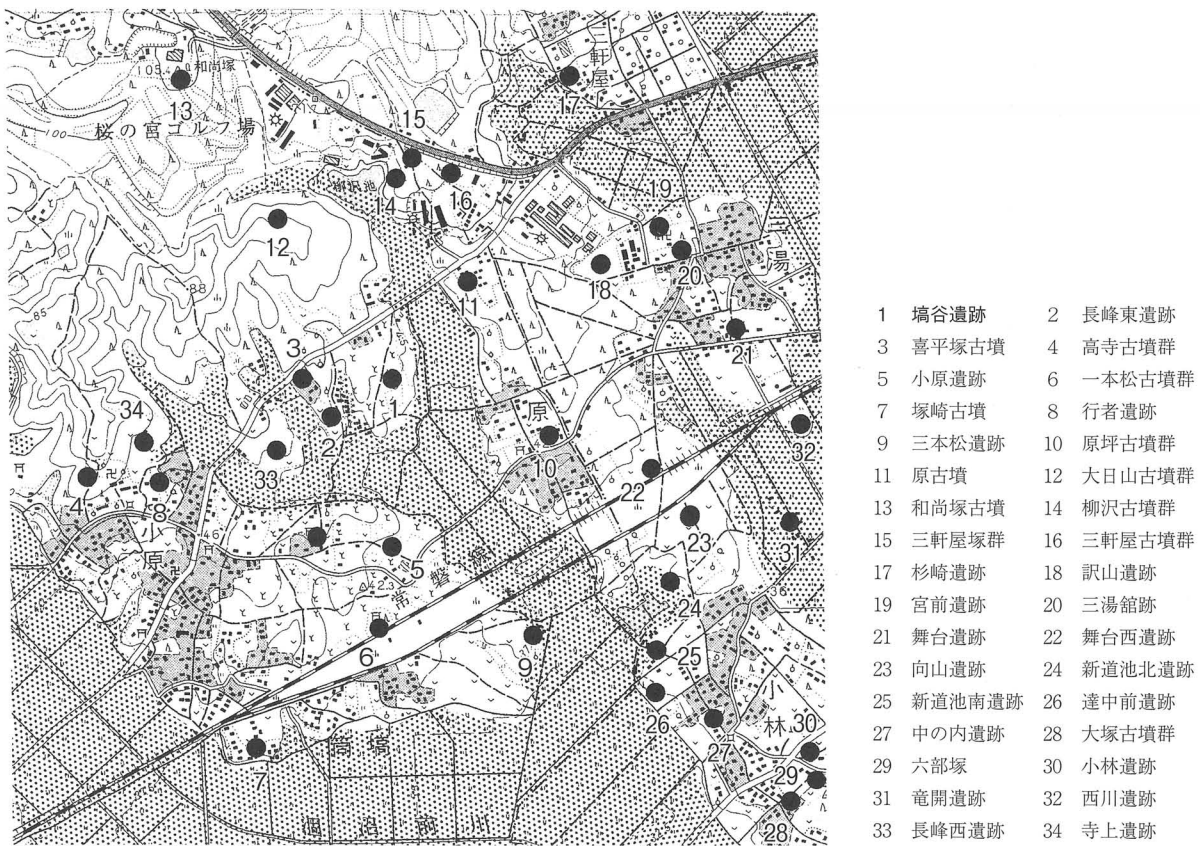
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

笠間市は茨城県のほぼ中央にあり、東は水戸市、西は桜川市、南は石岡市・小美玉市、北は城里町・栃木県茂木町にそれぞれ接している。市域の北部は八溝山系鶏足山塊から連なる友部丘陵が水戸市の西部にかけて広がる。一方、南西部は筑波山塊に接し、鶏足山塊と並んで県西と県央を東西に隔てている。市域の東部から南部は平坦な東茨城台地が展開しており、茨城町から大洗町まで伸長する。この台地上を涸沼川が下刻し、茨城県の中央を東走して太平洋に注ぐ。加えて、市域西部の飯田川・片庭川・稲田川、市域東部の涸沼前川・枝折川などが涸沼川に合流し、それぞれの流域で沖積世低地を形成する。

埜谷遺跡は小原地区の東寄りに位置する。友部丘陵南東端の緩斜面上にあり、涸沼前川に繋がる小支谷に接する。埜谷遺跡から北側は傾斜面が続き標高 100 m 前後の丘陵尾根部に至る。

現在は小河川の上流に溜池を配し、丘陵緩斜面地を畑地、小支谷の平坦地を水田として利用している。また、立ちはだかる筑波山塊と鶏足山塊の合間を見越して、北側の丘陵部には国道 50 号、南側の平地には鉄道の常磐線が通う。古代においても、地形的な制約から小原地区を通るルートが東西を結ぶ幹線に選ばれていたものと思われる。北関東地方における東西間交通ルートの結節点であるとともに、豊かな水と山野の資源に恵まれており、農耕や交易にも適した立地環境であると言える。



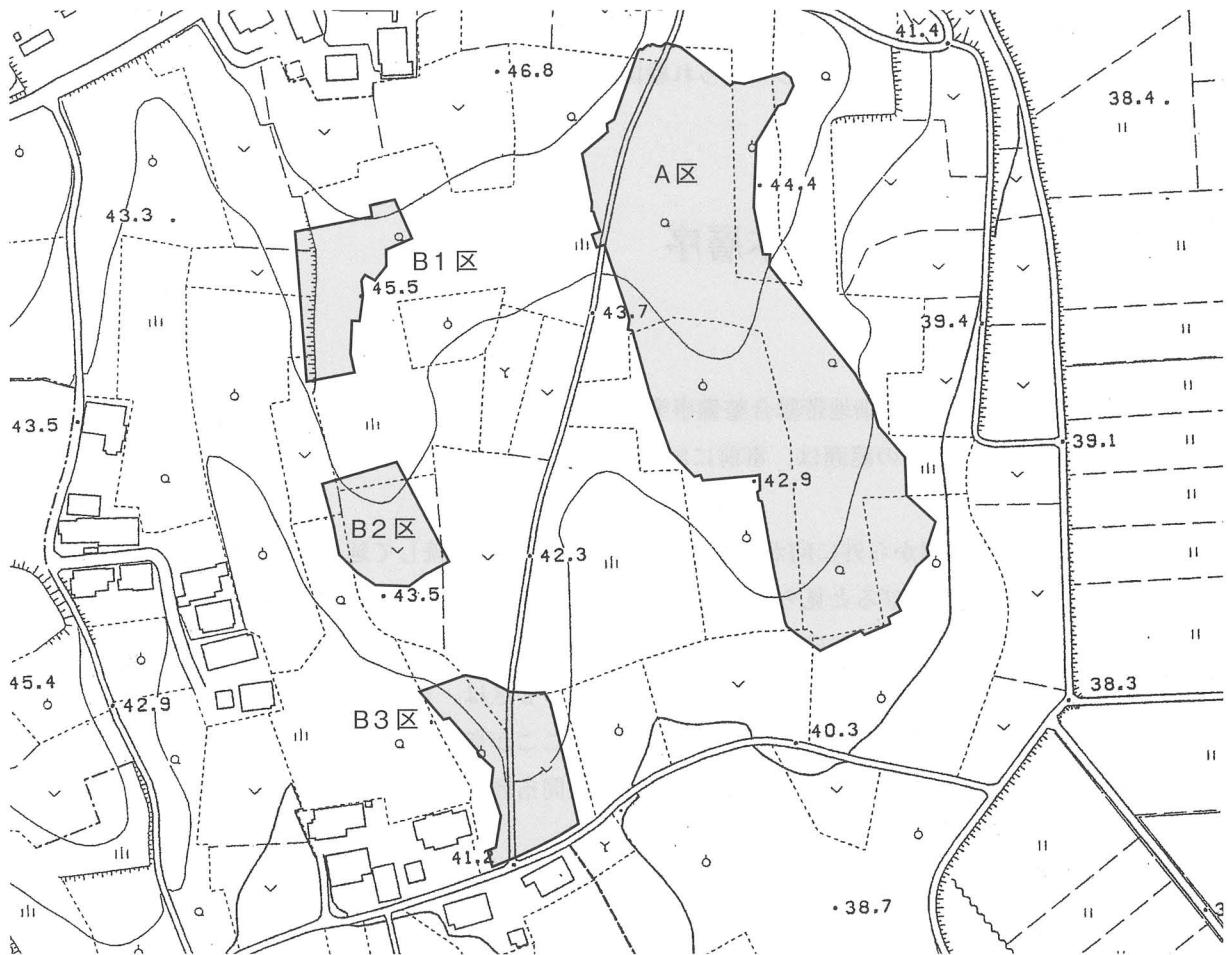
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1 : 25,000)

第2節 歴史的環境

小原地区は、これまで高寺古墳群や一本松古墳群、中世小原城跡の存在がよく知られていた。近年、小原地区では三本松遺跡(板野他 2003) から始まり、小原遺跡(吉田他 2005・能島 2007)、長峰東遺跡(土生 2010)、長峰西遺跡(大賀他 2010)、行者遺跡と広範囲に発掘調査が行われている。それらの成果から、小原地区の丘陵や台地上には、旧石器時代から中・近世にわたって繰り返されてきた人々の生活跡が残っていることが明らかとなってきた。

旧石器時代では、長峰西遺跡から珪質頁岩製のナイフ形石器が、行者遺跡から瑪瑙製の削器が出土している。本遺跡からも旧石器のユニットがB2区から確認されている。

縄文時代では、小原地区内における遺構・遺物の出土はやや少ない。陥穴が平成19年度調査の埜谷遺跡C区、長峰東遺跡、小原遺跡などに散在する。加えて、本遺跡で前期中葉の竪穴住居跡が認められた。また、遺構に伴わないものの、長峰東遺跡で前期中葉の関山Ⅱ式や黒浜式等、長峰西遺跡で早期前葉の無文土器および前期中葉・中期後半・後期前半といった縄文土器が報告されている。



第2図 調査地区の位置図(1:2,500)

弥生時代では、後期後半期に竪穴住居跡の数が非常に多くなる点が注目される。三本松遺跡で15軒、小原遺跡で2軒、平成19年度の埴谷遺跡C区で10軒、長峰東遺跡で9軒、長峰西遺跡で7軒、行者遺跡で1軒である。本遺跡を含めると弥生時代後期後半の住居軒数は県内でも特に多い地域と見られ、弥生時代後期後半から終末期にいたる地域的な特性が窺える。

古墳時代では、小原地区内からは古墳時代前期・中期・後期の集落が見られる。長峰東遺跡では弥生時代終末から古墳時代前期へ移り変わった時期の竪穴住居跡で弥生時代終末期の竪穴との配置関係や構造に関連性があると思われる竪穴住居跡が見られる。埴谷遺跡では古墳時代前期に住居数が多く、方形周溝墓も造られている。古墳時代後期には三本松遺跡や小原遺跡、長峰西遺跡等に集落の広がりが見られる。これは後期古墳の造成の盛んな時期に対応しているものと思われる。小原地区の古墳群では、高寺古墳群があげられる。高寺2号墳は花崗岩の割石積の横穴式石室を持ち、墳丘南東部から武人埴輪や円筒埴輪が、石室内からは、玉類、刀や鏃などの鉄製品が出土している。高寺古墳群に属すると見られる行者遺跡からは、高寺2号墳に先行する時期の2基の古墳が確認され、人物・馬形の形象埴輪と多数の円筒埴輪が出土している。

奈良・平安時代の集落は、三本松遺跡他、地区内で発掘調査が行われた遺跡すべてにおいて確認されており、いずれも8世紀後半頃から急激に竪穴住居跡は数を増し、9世紀～10世紀にかけて集落が継続している様子が窺える。奈良時代になってからの急激な集落の増加は、この地域の東西に隣接する、笠間市大淵窯や水戸市木葉下窯など須恵器生産地帯の成長との関わりも想定される。

中世のこの地区には、戦国期の城跡と伝えられる小原城が本遺跡の南西約1.2kmの位置にある。小原城は16世紀の初めころ、里見氏の居城として造られ戦国末期には佐竹氏との激しい攻防の末、滅ぼされている。

第Ⅲ章 調査の方法と基本層序

第1節 調査の方法

埴谷遺跡の発掘調査は、県営畑地帯総合整備事業に伴うに伴う埋蔵文化財発掘調査として行われた。畑地帯整備事業にかかる埴谷遺跡の範囲は、事前に試掘調査によって範囲が絞られ、A・B1・B2・B3区の各名称が使用されている。

調査範囲は、調査区の内側から外に向かって住居跡などの遺構が連続して延びる場合調査区の拡張をした。A区では、調査区外に長く延びると見られる溝と道路については、調査区内のみ調査を実施した。B1区とB3区については、調査区の外側で確認された遺構の中で、県営畑地帯総合整備事業による切り土の実施されない部分については、保存区域として調査から除いた。B2区は、当初予定していた調査区の北側で、旧石器のユニット、竪穴住居跡2軒、ピット群が確認され、ここが切り土される地区に当たるため調査区を拡張して調査を行った。その際、竪穴住居跡については、笠間市教育委員会が調査を実施し、本報告の中に含めた。

埴谷遺跡の平面測量は世界測地系第Ⅸ系上の公共座標に基づいて行なった。公共座標上で、各調査区の全体を含む範囲の北西角のX軸、Y軸の交点を起点として、南方向と東方向に20mおきにグリッドラインを設定し、交差したマス目に各区の全体図にあるようにA1、K7等のようにグリッド名をふり遺構の位置を示した。

調査は表土掘削、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、写真撮影、測量の手順で行った。

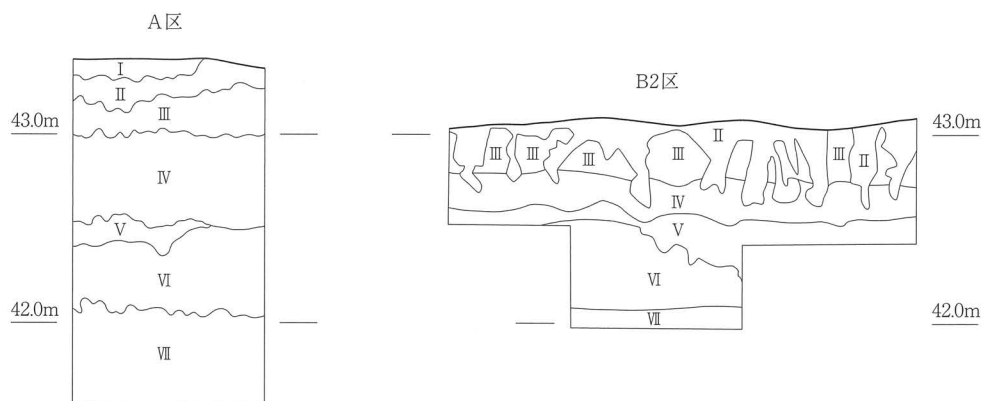
遺構の記録は1/20縮尺を基本として平面・断面図を作成し、遺構・遺物の規模や性格により、1/10、1/20、1/40縮尺を使用した。遺跡全測図は1/200で作成した。

写真撮影は、白黒35mm判、リバーサル35mm判、デジタルカメラを使用し、調査の各段階に随時行った。

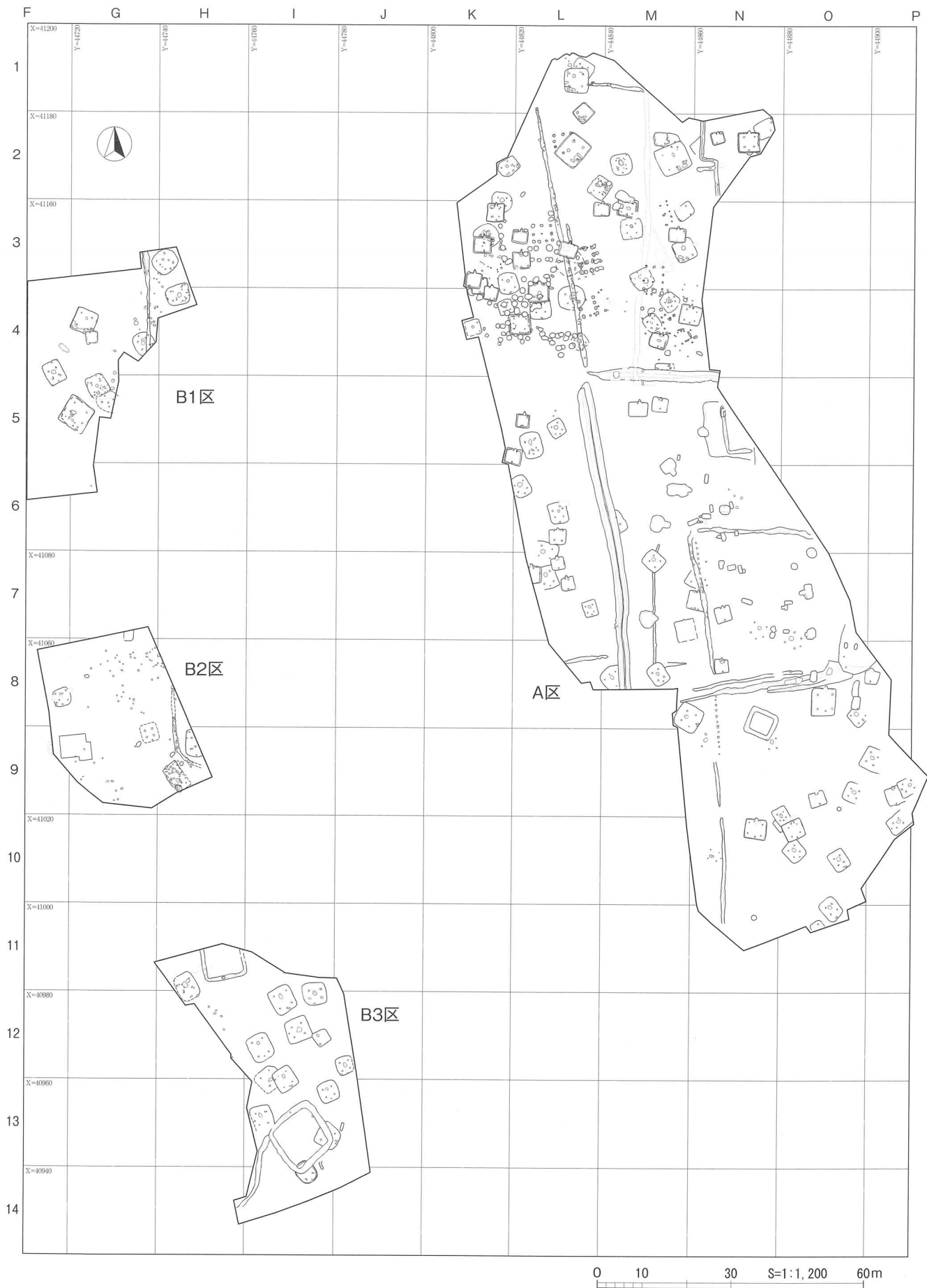
第2節 基本層序

基本層序はA区およびB2区において観察した。A区は調査区中央部に位置する4号地下式坑の主室西面(M6グリッド)、B2区は調査区南西部の試掘坑(F9グリッド)で記録している。

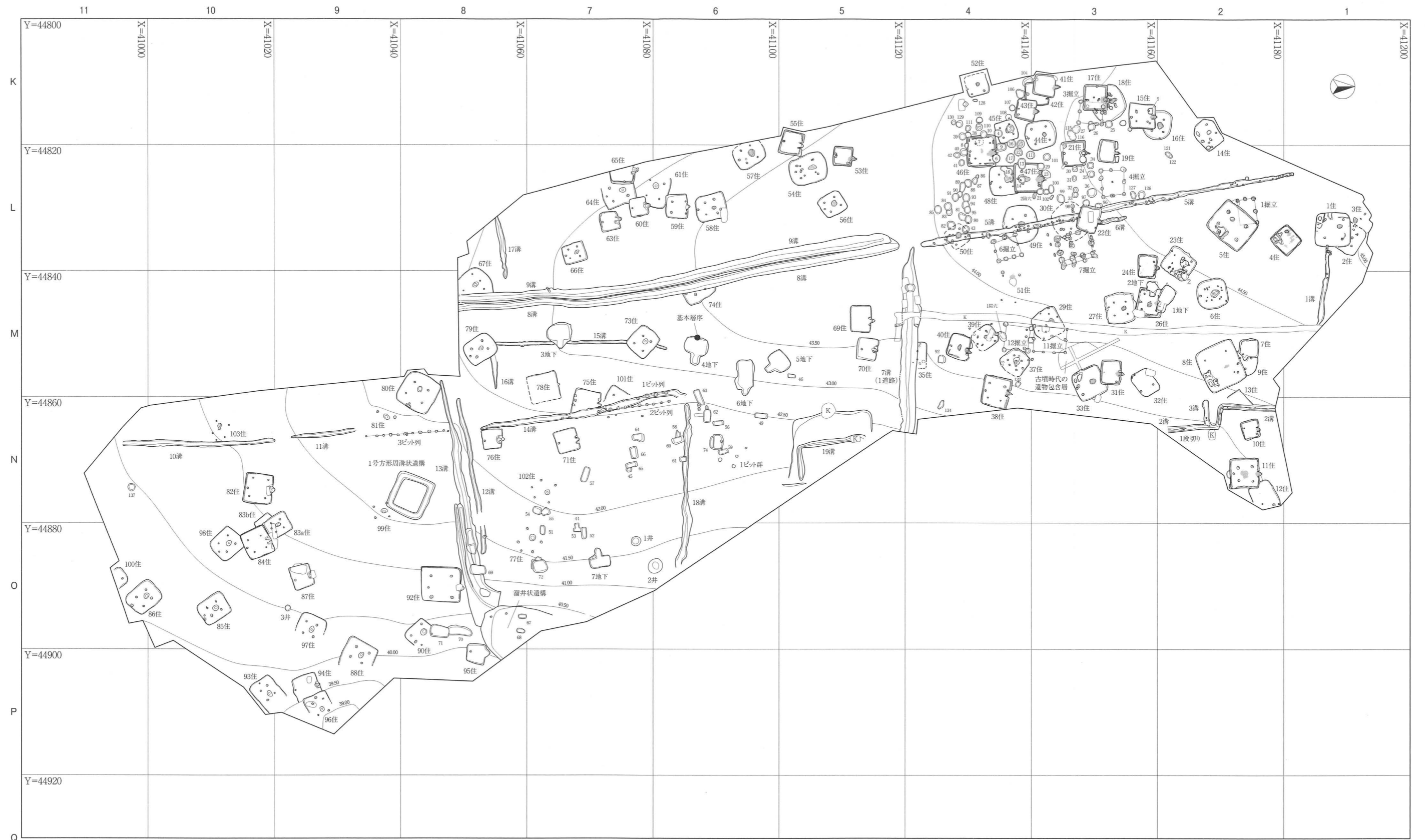
層序はIからⅦ層まで認められた。I層はにぶい黄褐色を呈するソフトローム層で、径2mmほどの浅黄色粒や微細な白灰色粒を少量含む。B2区の観察地点では削平されていたが、2mほど東側に位置する旧石器時代の調査地点で見ることができた(第238図)。Ⅱ層はハードロームへの漸移層であり、I層に比べて色調が暗い。B2区では層位の高低差が一定していなかった。Ⅲ～Ⅴ層は黄褐色ないしにぶい黄褐色を呈するハードローム層で、Ⅲ層はⅣ・Ⅴ層に比べて色調が明るい。Ⅳ・Ⅴ層には赤城-鹿沼テフラ(Ag-KP:31,000～32,000年前)が混入する。とくにⅤ層で多量に包含されており、一部に窪み状の層位が見受けられた。Ⅵ層は赤城-鹿沼テフラの一次堆積層に相当し、複数のフォールユニットが認められる。Ⅵ層は粘性のある暗褐色土で、混入物が非常に少ない。



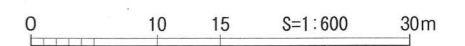
第3図 基本土層図 (1:40)



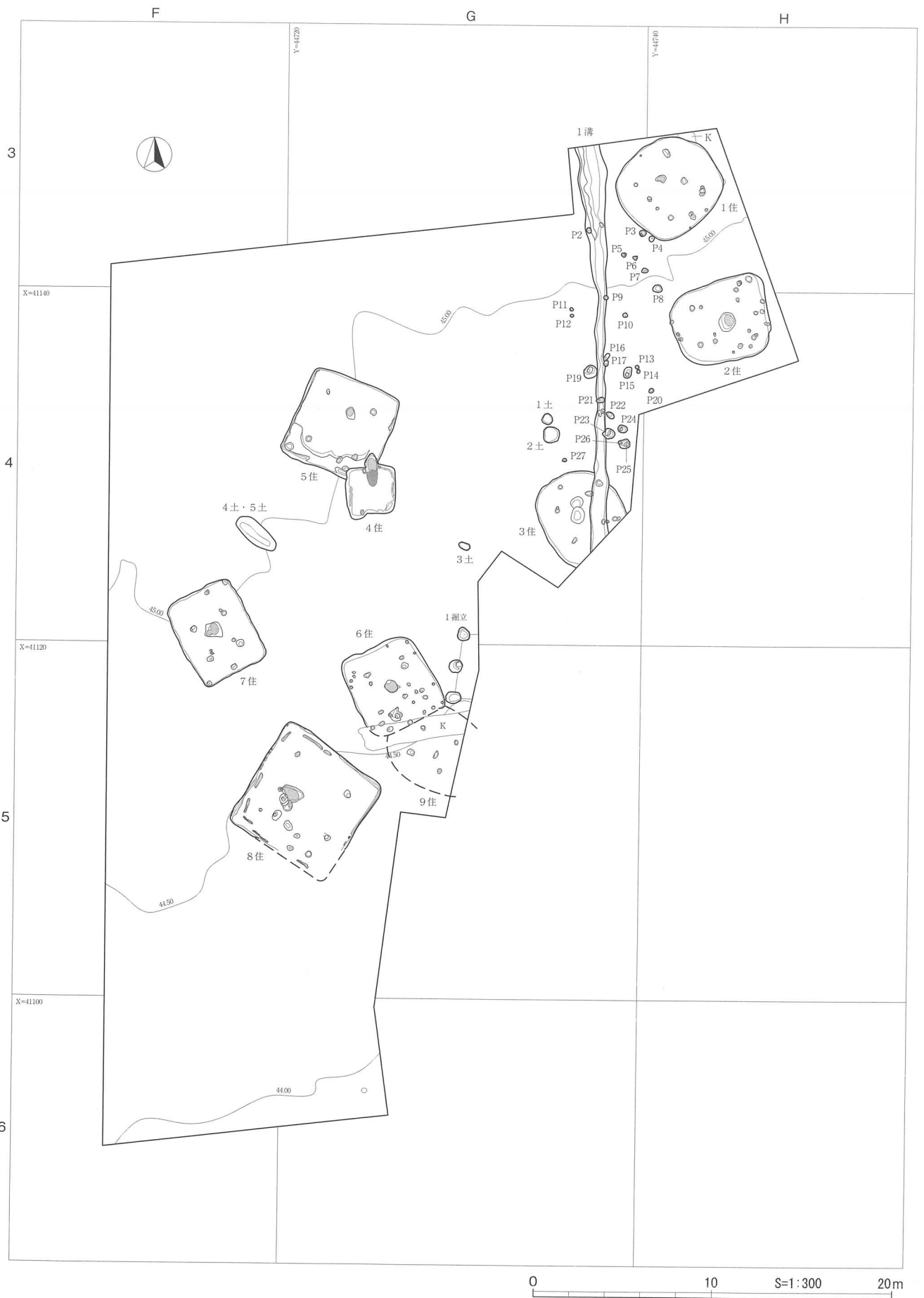
第4図 遺跡全体図



数字のみは土坑番号を示す



第5図 A区遺構全体図



第6図 B1区遺構全体図



第7図 B2区遺構全体図



第8図 B3区遺構全体図

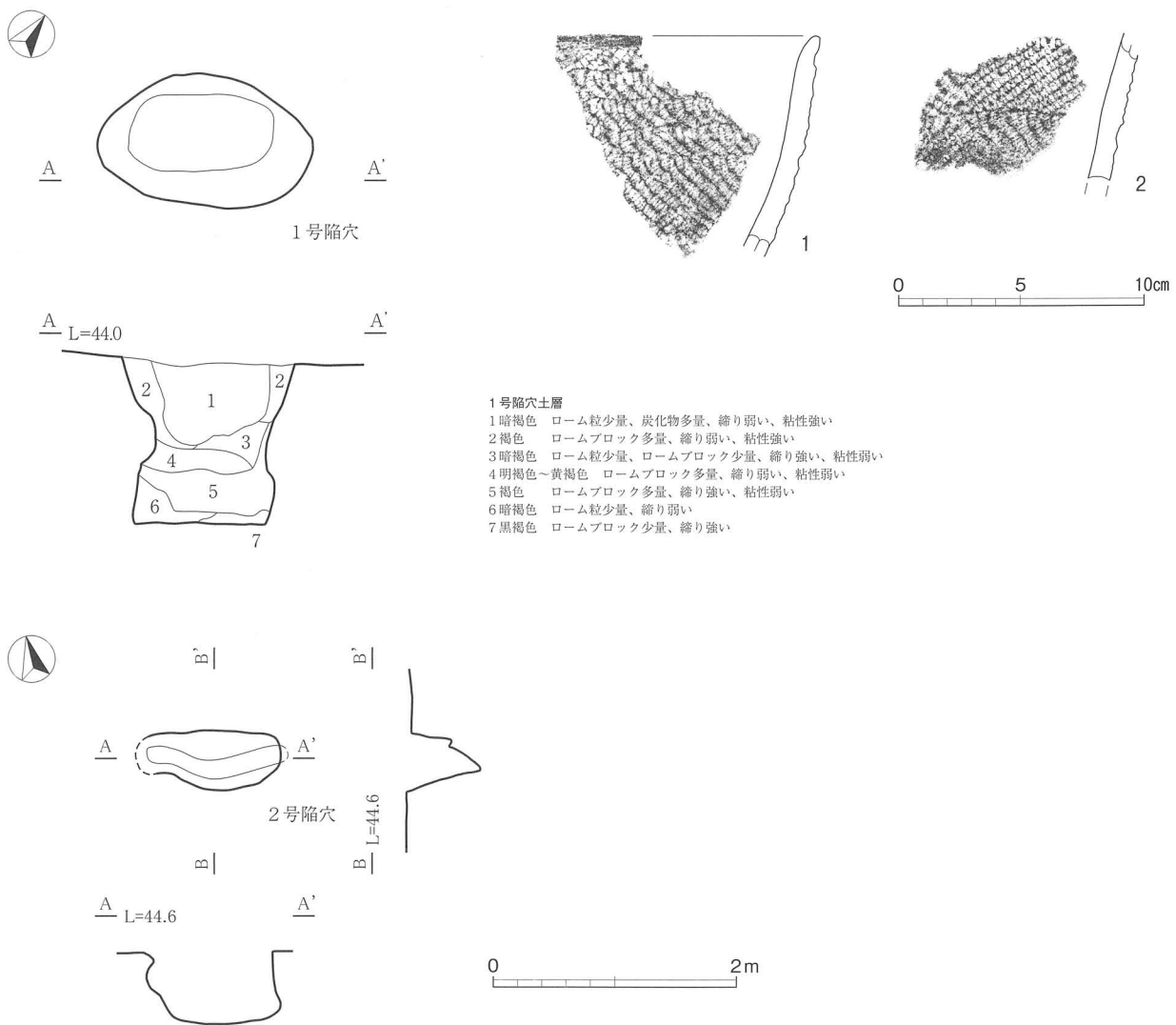
第IV章 A区の遺構と遺物

第1節 縄文時代

1 陥穴

1号陥穴（第9図）

位置 A区北部、M4グリッドに位置する。**平面形・規模** 長軸1.65m×短軸1.08m、深さ1.4m。平面は長楕円形を呈し、底面は不整隅丸長方形に近い。横断面形はわずかに袋状を呈する。**主軸方位** N-57°-E **覆土** 暗褐色土や褐色土がレンズ状に自然堆積する。**遺物** 覆土上層から、同一個体の縄文土器片が4点出土し、そのうち3点が接合した(1・2)。縄文前期中葉関山Ⅱ式に比定される。なお、著しい被熱痕を有する安山岩の破損礫が1点検出されている。**所見** 典型的な陥穴の形状である。関山Ⅱ式の土器しか認められないが、覆土上層で出土しているため、構築時期は前期中葉以前と幅をもたせておきたい。



第9図 1・2号陥穴・出土遺物

2号陥穴（第9図）

位置 A区北部、L3グリッドに位置する。 平面形・規模 長軸推定1.33m×短軸0.50m、深さ0.6m。平面は不整長楕円形を呈し、47号住居跡に西端を破壊される。 主軸方位 N-74°-W 覆土 中央部は暗褐色土、壁際はローム質の褐色土が堆積する。 遺物 一 所見 規模は小さいが、いわゆる溝型陥穴である。構築時期は縄文時代早・前期と推測する。

表1 1号陥穴出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	縄文土器 深鉢	- - -	口縁~胴部片。閉端環付単節縄文(RL、0段3条)を横位施文。口縁部には閉端環を密接に配す。内面は横位のミガキ。	繊維	不良	外：褐・暗褐色 内：にぶい黄橙色	関山Ⅱ式
2	縄文土器 深鉢	- - -	胴部片。閉端環付単節縄文(RL・LR、0段3条)を横位羽状施文。内面は縦位の丁寧なナデ。	繊維	不良	外：橙色 内：にぶい黄橙色	関山Ⅱ式

2 遺構外出土遺物

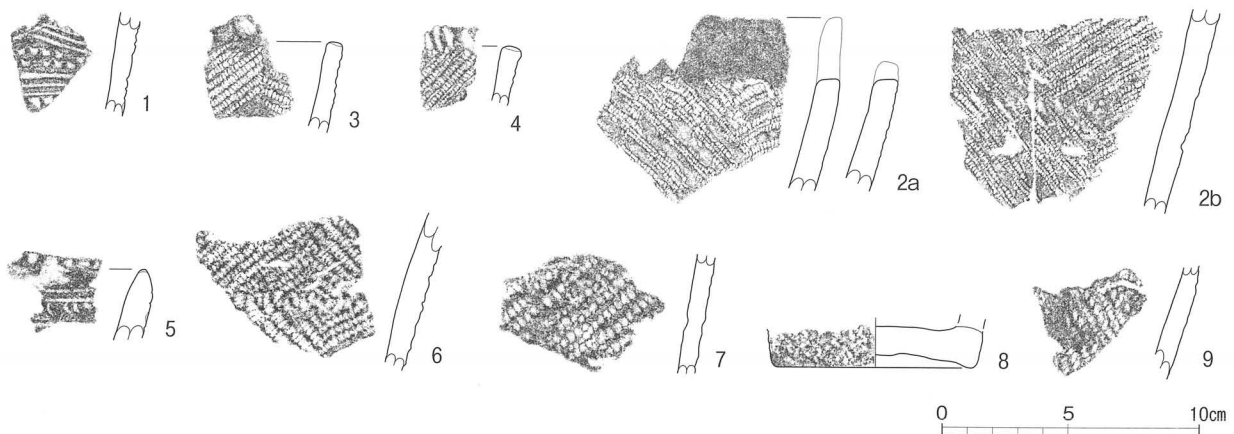
縄文土器（第10・11図）

弥生後期・古代の遺構や表土層等から36点の破片が出土した。調査区中央の未検出地点を挟んだ北側(M2~4・N2~4グリッド)および南側(N8~10・O8~11・P9グリッド)に偏在する。細別は早期中葉田戸下層式(1)・前期中葉関山Ⅱ式および黒浜式(2~8)・前期後葉諸磯a式(9)・中期前半(10)・後期初頭称名寺Ⅱ式(11)・後期前葉堀之内Ⅰ式(12)に比定され、前期中葉のものがほとんどを占める。

前期中葉の資料は調査区北側および南側の両方で認められ、37・38・82号住居跡に集中する。37・38号住居跡出土の遺物は、近在する1号陥穴のものとの関係も踏まえて検証する必要があるだろう。一方、他の時期の資料は調査区南側のみ分布する。検出点数が少ないことから有意な傾向は把握しづらいが、丘陵先端部を主体とした活動が予想される。

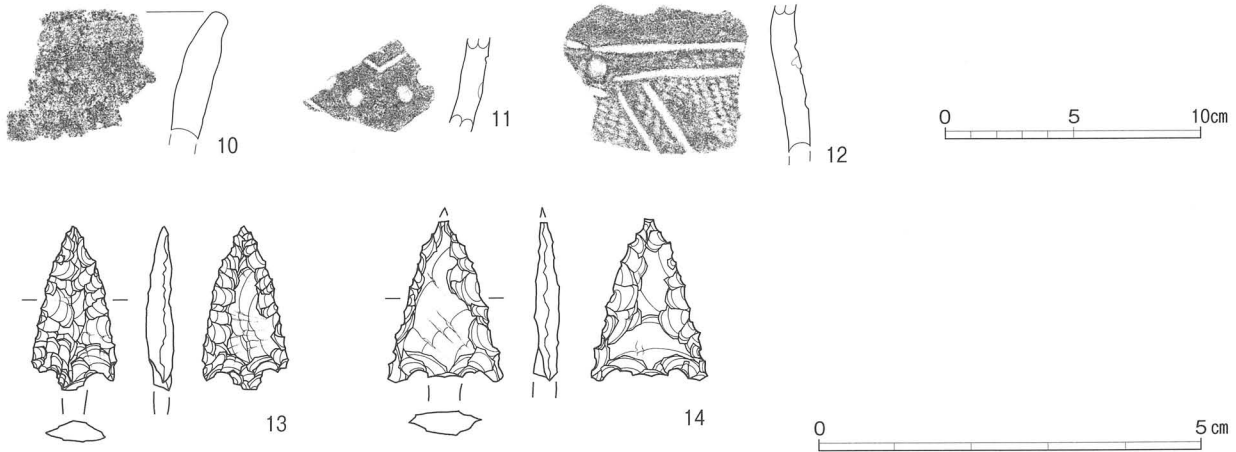
石器（第11図）

古代の遺構から2点の石鏃が出土した(13・14)。いずれも凹基有茎で、縄文晩期に多い形態を呈する。本調査区において該期の痕跡は希薄であることから、遺構や土器を伴わない活動ないし弥生後期に帰属する可能性等を考慮する必要があるだろう。



第10図 A区遺構外出土遺物①

第IV章 A区の遺構と遺物



第11図 A区遺構外出土遺物②

表2 A区遺構外出土遺物観察表

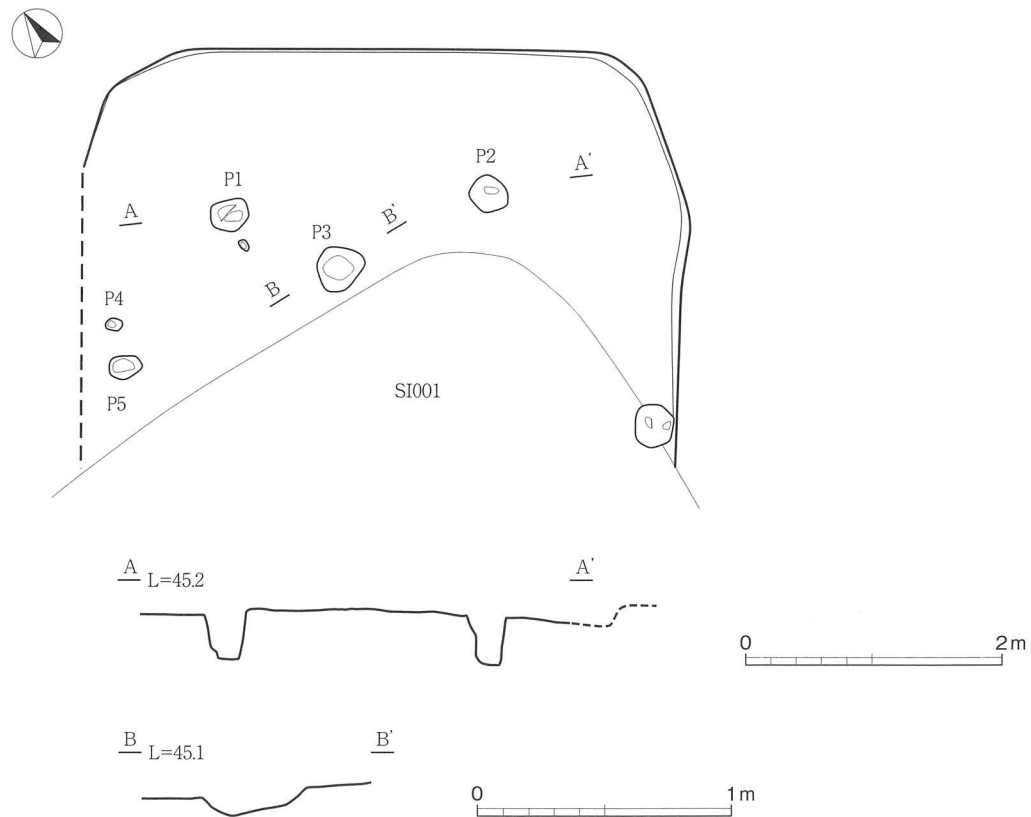
図版番号	種別 器種	口径器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	縄文土器 深鉢	- - -	胴部片。尖頭状工具による数条の単沈線で横位・三角形に区画→区画内に横位の貝殻腹縁紋・角頭状工具による刺突列。内面はナデ。	角閃石	不良	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	A区88号住居跡出土 田戸下層式
2	縄文土器 深鉢	- - -	口縁～胴部片。附加条縄文1種(RL+L・L, LR+R・R)を羽状に横位施文。口唇部に鋸歯状・板状突起。内面は横位のミガキ。	繊維・多量の白色粒	不良	外：灰黄褐・橙色 内：灰黄褐・橙色	A区1号方形周溝状遺構出土 関山Ⅱ式
3	縄文土器 深鉢	- - -	口縁部片。単節縄文(RL・LR, 0段3条)を羽状に横位施文、施文端部が盛り上がる。口唇部にヘラ状工具によるキザミ(を加えた突起)。内面は横位のミガキ。	繊維	不良	外：灰黄褐色 内：橙色	A区82号住居跡掘り方出土 前期中葉
4	縄文土器 深鉢	- - -	口縁部片。単節縄文(LR, 0段3条)を横位施文。口唇部にヘラ状工具によるキザミ(を加えた突起)。内面は横位のミガキ。	繊維	不良	外：明黄褐色 内：明黄褐色	A区82号住居跡掘り方出土 前期中葉
5	縄文土器 深鉢	- - -	口縁部片。半截竹管状工具による横位の平行沈線→沈線に沿って同様の工具による刺突列。口唇部に丸棒状工具によるキザミ。内面はミガキ。	繊維	不良	外：橙色 内：橙色	A区86号住居跡出土 黒浜式
6	縄文土器 深鉢	- - -	胴部片。閉端環付単節縄文(RL・LR, 0段3条)を横位羽状施文。内面はミガキ。	繊維	不良	外：黄褐・ 灰黄褐色 内：明黄褐色	A区37号住居跡上層出土 関山式
7	縄文土器 深鉢	- - -	胴部片。単節縄文(LR)を横位施文。内面はナデ。	繊維	不良	外：橙色 内：暗褐色	A区6号住居跡出土 前期中葉
8	縄文土器 深鉢	- - 7.8	底部片。組紐縄文カを施文。内面は指頭痕。底面はナデ。	繊維・多量の赤色粒	不良	外：明赤褐色 内：橙色	A区南側 関山Ⅱ式
9	縄文土器 深鉢	- - -	胴部片。結節を伴う単節縄文(RL)を横位施文。内面は横・縦位のナデ。	海綿体骨針	良好	外：灰褐色 内：明赤褐色	A区98号住居跡出土 諸磯a式
10	縄文土器 深鉢	- - -	口縁部片。横位のナデ。口唇下に指頭痕。内面はナデ。	多量の石英・雲母	良好	外：暗赤褐色 内：橙色	A区84号住居跡出土 中期前半
11	縄文土器 深鉢	- - -	胴部片。尖頭状工具による併行沈線→沈線間にヘラ状工具による刺突列。内面は縦位のナデ。	多量の白色粒	良好	外：橙・黒色 内：橙・黒色	A区92号住居跡出土 称名寺Ⅱ式
12	縄文土器 深鉢	- - -	頸部～体部片。体部に単節縄文(LR)を横・斜位施文→頸部・体部間を丸棒状工具による併行沈線で横位区画→併行沈線上に高文。体部に斜位等の併行沈線。内面は縦位のミガキ。	多量の砂、角閃石	良好	外：橙色 内：橙色	A区倒木痕出土 堀之内Ⅰ式
13	石器 石鏃		凹基有茎。基部先端が欠損。石材：チャート。残存長2.15cm・幅1.1cm・厚さ0.35cm・重さ0.7g。				A区7号土坑
14	石器 石鏃		凹基有茎。先端部・基部が欠損。小型剥片の縁辺に周辺加工。石材：チャート。残存長2.15cm・幅1.5cm・厚さ0.35cm・重さ0.9g。				A区19号住居跡出土

第2節 弥生時代

1 竪穴住居跡

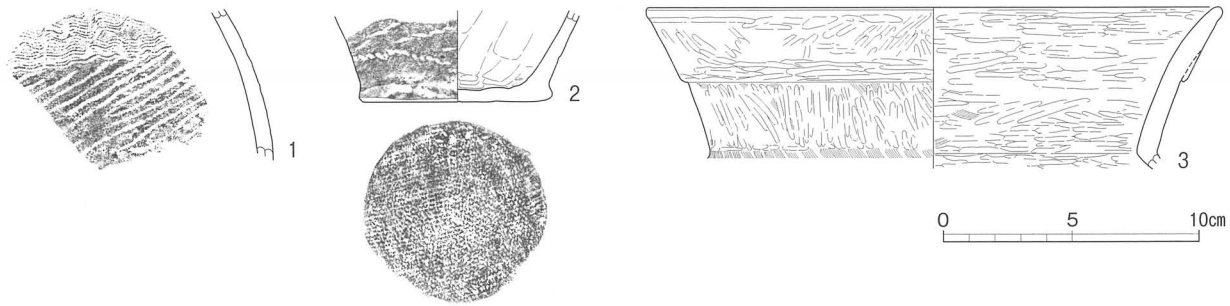
2号住居跡（第12・13図）

位置 A区北端、L1グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北方向は不明ながら、東西方向は約4.7mと推測する。平面は隅丸方形か。南西側は1号住居跡に、西側は攪乱によって壊され、3号住居跡とも重複する。**主軸方位** N-57°-W **壁** 壁高は北東辺で5~7cmを測り、垂直気味に立ち上がる。**床** 全体に平坦で、硬化面は認められない。**ピット** 5箇所ある。P1・P2が主柱穴、P4・5は壁柱穴と推測される。**炉** P3が炉の可能性はある。**覆土** 褐色土主体で、自然堆積状。**遺物** 覆土中から少量の弥生土器片が出土している。**所見** 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。3号住居跡との新旧関係は、攪乱のため不明である。A区において、弥生時代の住居跡同士が重複する例は、本例を含め2例（61住と64住）ある。



第12図 2号住居跡

第IV章 A区の遺構と遺物



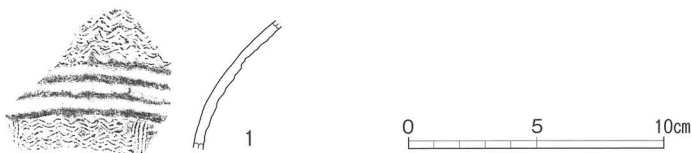
第13図 2号住居跡出土遺物

表3 2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(r-S)→頸胴界7本歯の横位区画波状文→頸部横位波状文(下→上)。	金雲母	普通	にぶい黄褐色	胴部外面スス付着、内面あばた状剥離
2	弥生土器壺	- - 7.5	胴部ナデ→軸縄不明の附加条縄文(L-S)。底部布目痕。内面は斜位のナデ。外面まばらにスス付着。	石英、白色粒	普通	にぶい黄橙色	胴部外面にスス付着
3	土師器壺	(22.6) - -	口縁部内外面ヘラミガキ、頸部内外面ハケメ後にヘラミガキ。	角閃石、骨針	良好	にぶい黄褐色	口縁部内外面あばた状剥離

3号住居跡(第14・15図)

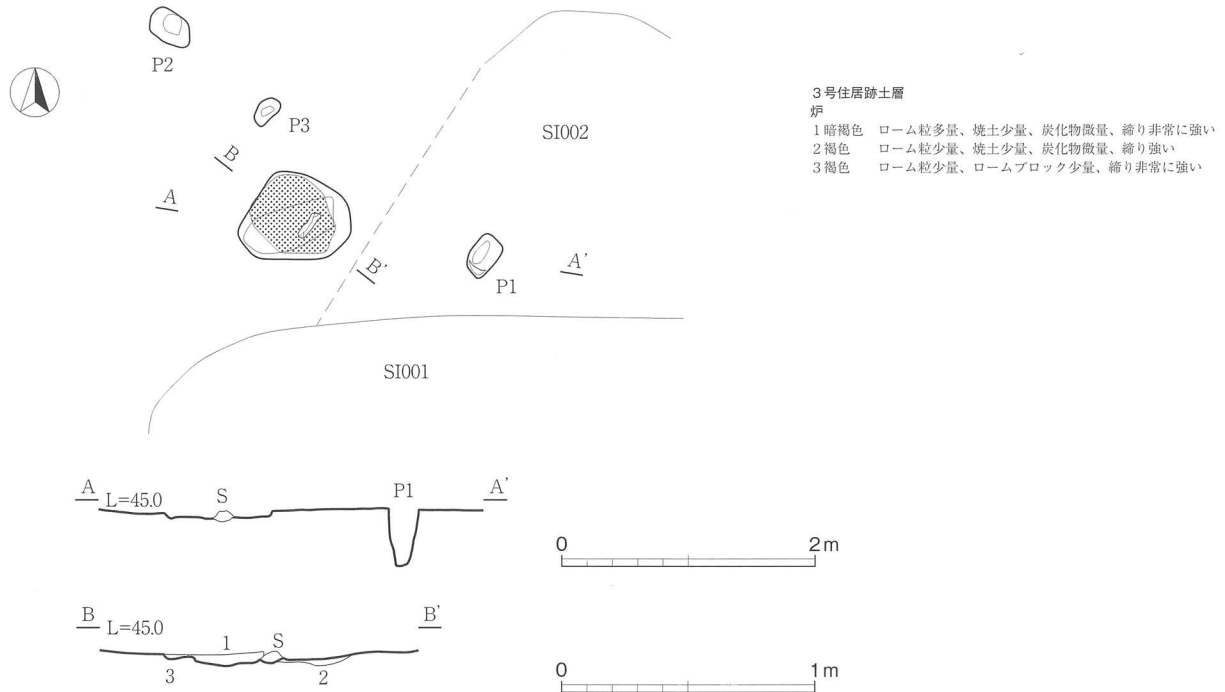
位置 A区北端、L1グリッドに位置する。**規模と平面形** 攪乱や重複によって不明である。南西半分は1号住居跡に、西側は攪乱によって壊されている。また、3号住居跡と重複する。**主軸方位** N-2°-W **壁 - 床 - ピット** 3箇所ある。P1・2が主柱穴と推測される。**炉** 平面不整円形で、浅い皿状を呈する。中央に不整形な砂岩製の炉石が設置されている。**覆土 - 遺物** 床面から弥生土器片が僅かに出土している。**所見** 2号住居跡との新旧関係は不明である。住居跡の時期は、弥生時代後期後半と推定される。



第14図 3号住居跡出土遺物

表4 3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	- - -	頸部押捺隆帯4条→口縁部4本歯の横位波状文(下→上)。頸部縦位直線文→横位波状文(下→上)。	金雲母、骨針	普通	にぶい褐色	



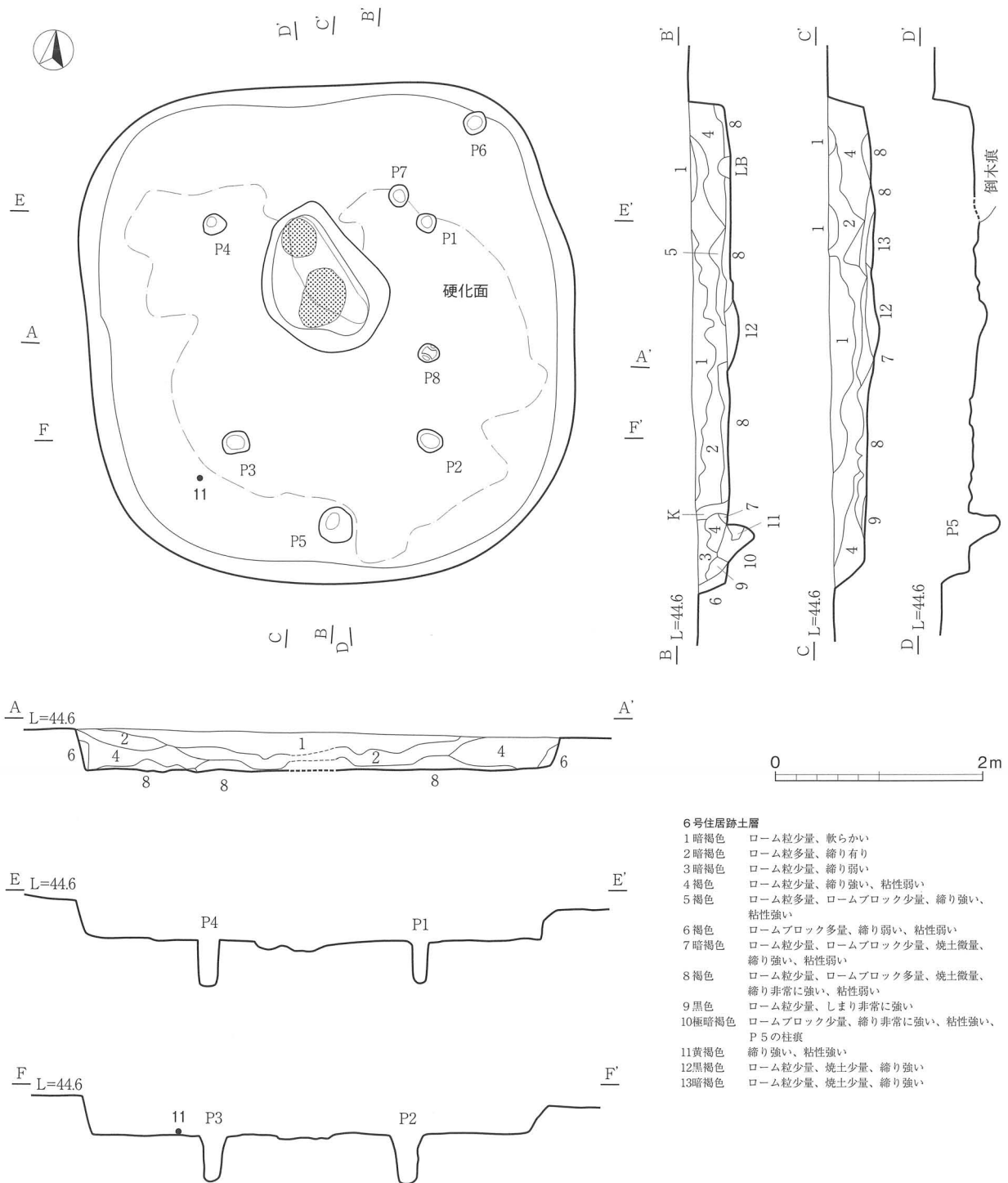
第15図 3号住居跡

6号住居跡 (第16・17図)

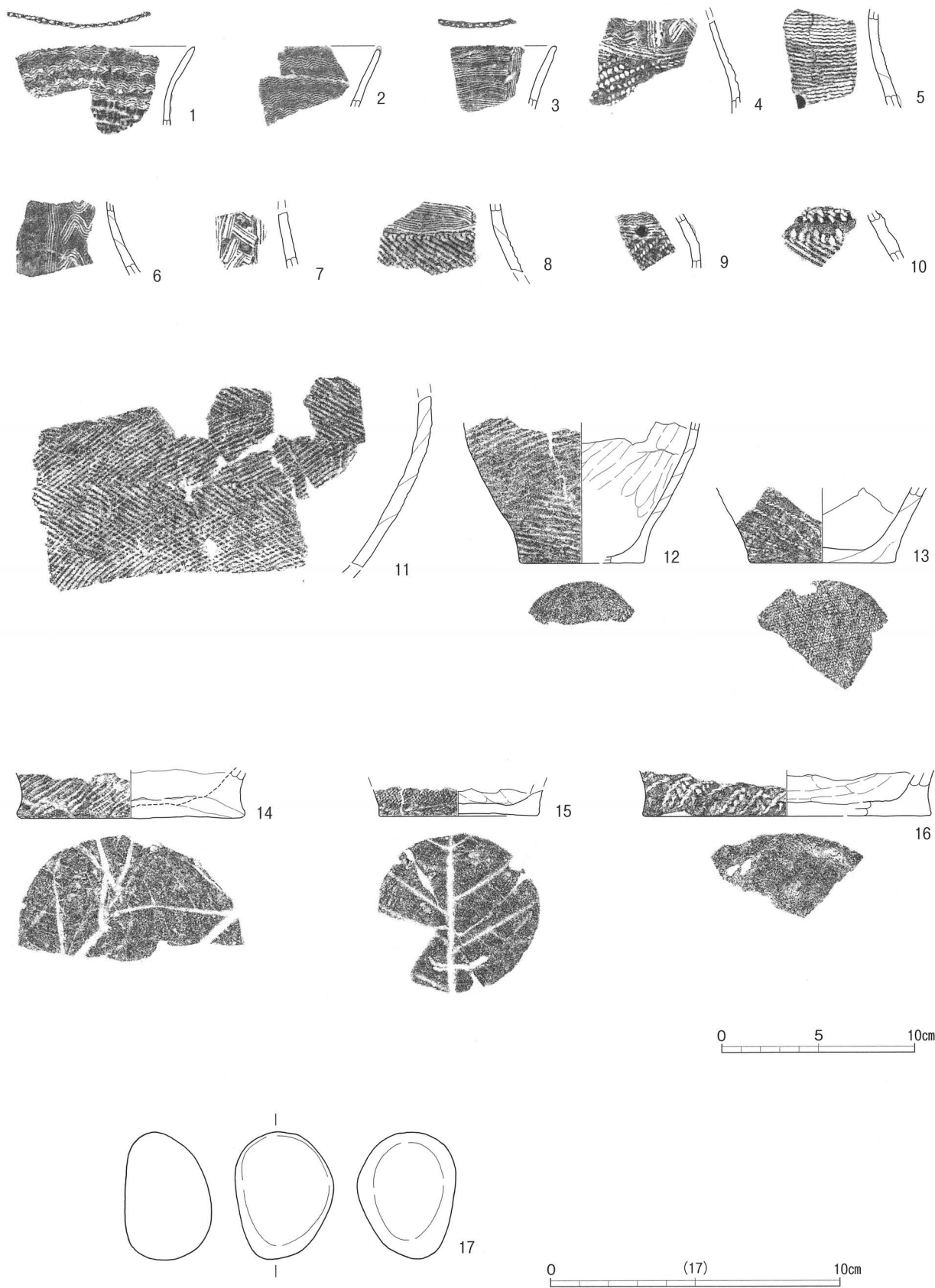
位置 A区北端、M2グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北の主軸方向4.85m、東西方向4.7mを測り、不整隅丸方形を呈する。床面には時期不明の複数のピットが不規則にある。竪穴の北壁側は風倒木痕を破壊して構築している。**主軸方位** N-11°-W **壁** 壁高は38cmを測り、垂直に近い。**床** 炉の北側と壁際以外の中央部が硬化する。**ピット** 6箇所ある。P1~4が主柱穴、P5が出入り口ピット、P6が壁柱穴と考えられる。P7・8は浅く、補助的柱穴であろうか。P1・4・5・6で明瞭な柱痕が観察された。**炉** 平面不整楕円形で、浅皿状を呈する。顕著な被熱部が2箇所認められた。**覆土** 壁際には褐色土、竪穴中央最上層には暗褐色土が堆積し、自然埋没と考えられる。床面直上の黒色土9層は非常に強くしまり、敷物等の存在、もしくは埋没初期過程での踏みしめ行為などを暗示させる。**遺物** 覆土中から弥生土器片が出土している。遺物の出土量はやや多く、小破片が多い。十王台式土器主体で、10・11・14など二軒屋式系の土器も目立っている。**所見** 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

表5 6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部3本歯の横位波状文(時計回り)。頸部爪痕のある薄い押捺隆帯3条。内面は横位のナデ。	石英、長石、角閃石	普通	外：にぶい橙色 内：褐灰色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部5本歯の横位波状文。内面は横位のナデ。	石英、長石	良好	にぶい黄橙色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。頸部は8本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。	石英、長石、金雲母	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	十王台式



- 6号住居跡土層
- 1 暗褐色 ローム粒少量、軟らかい
 - 2 暗褐色 ローム粒多量、締り有り
 - 3 暗褐色 ローム粒少量、締り弱い
 - 4 褐色 ローム粒少量、締り強い、粘性弱い
 - 5 褐色 ローム粒多量、ロームブロック少量、締り強い、粘性強い
 - 6 褐色 ロームブロック多量、締り弱い、粘性弱い
 - 7 暗褐色 ローム粒少量、ロームブロック少量、焼土微量、締り強い、粘性弱い
 - 8 褐色 ローム粒少量、ロームブロック多量、焼土微量、締り非常に強い、粘性弱い
 - 9 黒色 ローム粒少量、しまり非常に強い
 - 10 極暗褐色 ロームブロック少量、締り非常に強い、粘性強い、P5の柱痕
 - 11 黄褐色 締り強い、粘性強い
 - 12 黒褐色 ローム粒少量、焼土少量、締り強い
 - 13 暗褐色 ローム粒少量、焼土少量、締り強い



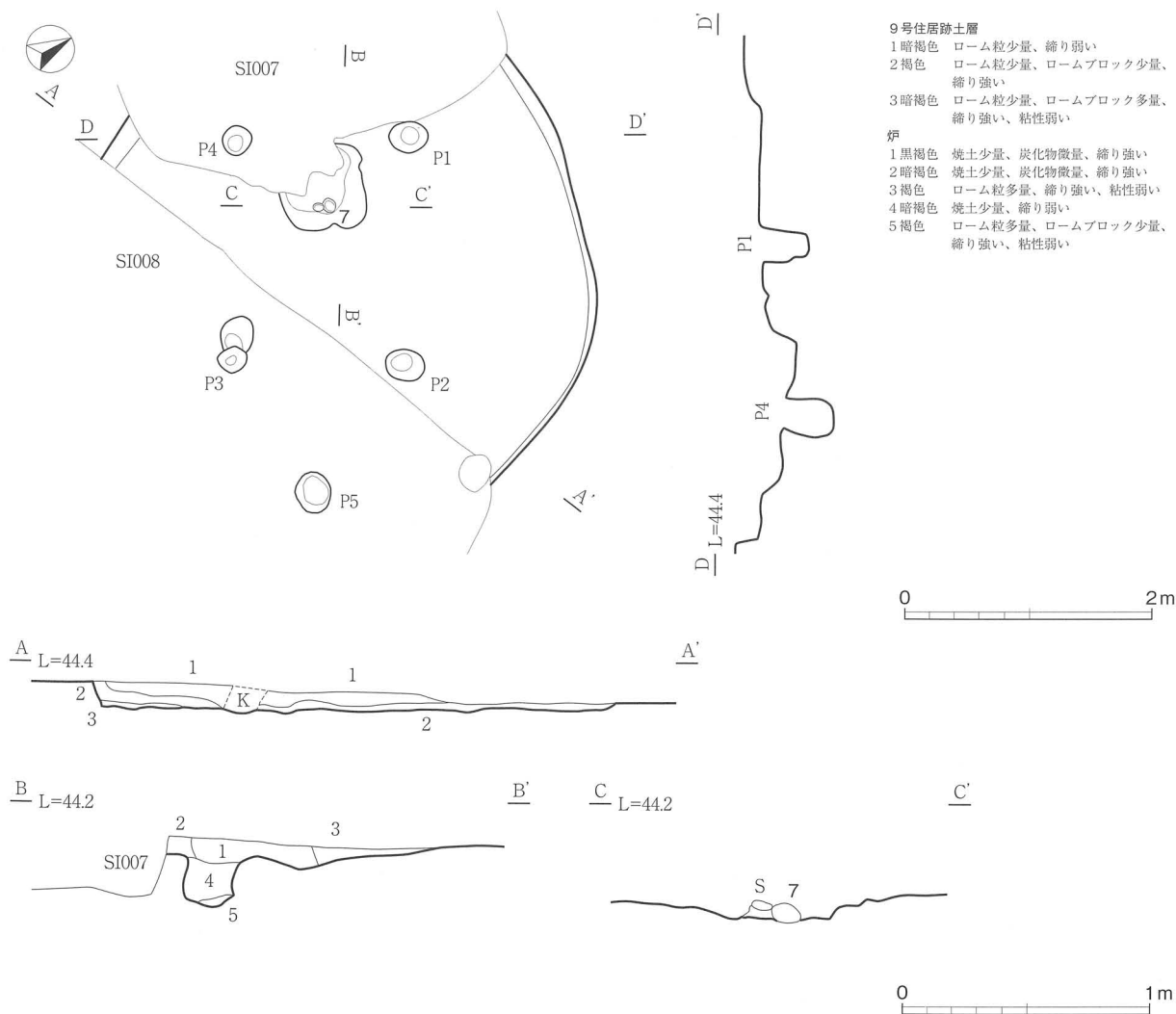
第17图 6号住居跡出土遺物

第IV章 A区の遺構と遺物

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z)→頸部4本歯の縦位直線文(反時計回り)→横位直線文→縦位直線文・横位波状文。内面は横・斜位のナデ。	石英、長石、角閃石	普通	外:にぶい黄褐色 内:にぶい橙色	十王台式
5	弥生土器 壺	- - -	頸部5本歯の横位波状文(下→上)→円形貼付文。内面はナデ。	石英、長石、角閃石、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	十王台式
6	弥生土器 壺	- - -	頸部4本歯の縦位直線文→波状文。内面は横・斜位のナデ。	石英、長石	普通	にぶい黄褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	- - -	頸部4本歯の縦位直線文→縦位羽状文(上→下)。内面は横位のナデ。	石英、長石	良好	外:にぶい黄褐色 内:明赤褐色	十王台式
8	弥生土器 壺	- - -	胴部無節縄文(L)→頸部6本歯の波状文(下→上)。内面は横・斜位のナデ。	石英、長石、赤色粒	良好	外:褐色 内:黒褐色	
9	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z)→頸部4本歯の横位波状文→横位直線文→円形貼付文。内面は横位のナデ。外面にスス附着。	石英、白色粒	普通	にぶい黄褐色	十王台式
10	弥生土器 壺	- - -	頸部軸縄不明の附加条縄文(R・Z)端部を押捺、沈線による無文帯、胴部は頸部と同様な縄文原体を横位施文。内面は剥落。	石英、多量の白色粒、赤色粒	普通	外:にぶい黄褐色、 内:にぶい黄褐色	
11	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z:上→下)。内面はナデ、剥落著しい。	多量の石英・長石	不良	外:灰黄褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式
12	弥生土器 壺	- - (6.4)	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z:上→下、反時計回り)。底部布目痕。内面は縦・斜位のナデ。外面スス・内面ヨグレ附着。	石英、長石	良好	灰黄褐色	床面直上 十王台式
13	弥生土器 壺	- - (7.4)	胴部附加条2種縄文(LR+R)。底部布目痕。内面はナデ。外面スス附着。	石英、角閃石	良好	外:にぶい黄褐色 内:橙色	十王台式
14	弥生土器 壺	- - (11.8)	胴部は附加条1種縄文(LR+2R)。底部木葉痕。内面は剥落のため不明。	多量の石英・長石	普通	外:灰黄褐色 内:褐色	二軒屋式カ
15	弥生土器 壺	- - (8.3)	胴部附加条1種縄文(LR+r)→底部下端横位のナデ。底部木葉痕。内面は斜位のナデ。	石英、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	
16	弥生土器 壺	- - (15.0)	胴部軸縄不明の附加条縄文(L・S)。底部砂痕、糊圧痕カ。内面は横・斜位のナデ。	石英、長石、角閃石、金雲母、骨針	良好	にぶい黄褐色	十王台式
17	石器 磨石		小型礫の表・裏面全体に磨耗痕。裏面は平滑。 石材:真岩。長さ:4.4cm・幅3.4cm・厚さ3.0cm・重さ59.22g。				

9号住居跡(第18・19図)

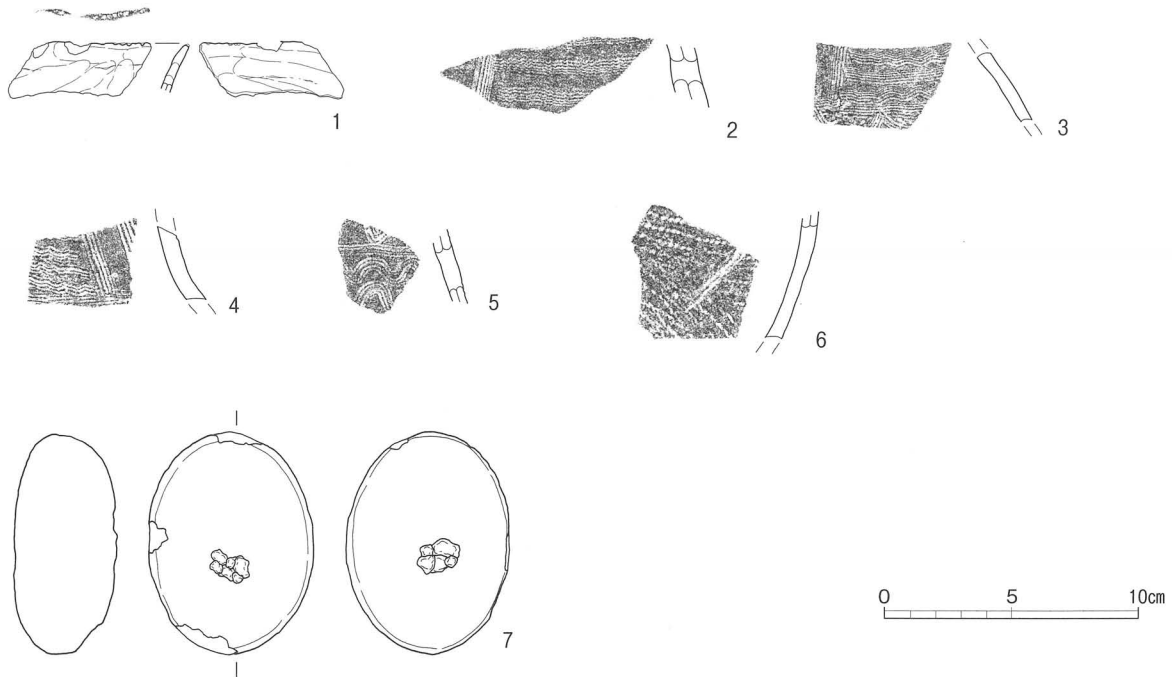
位置 A区北端、M2グリッドに位置する。 **規模と平面形** 南北方向約4.0m、東西の主軸方向約4.4mの不整円形状と推測される。7号住居跡・8号住居跡に壊され、全体の約1/3を失っている。 **主軸方位** N-58°-W **壁** 壁高は13cmを測り、垂直に近い。 **床** やや凹凸があり、硬化面は認められない。 **ピット** 5箇所ある。P1~4が主柱穴、P5が出入り口ピットと考えられる。P3・5は8号住居跡掘り方面で、P4は7号住居跡床面で確認した。 **炉** 7号住居跡のカマドによって一部壊されている。平面形は不整隅丸方形と推測され、浅い皿状を呈する。7の磨石と小円礫が並んで置かれていた。 **覆土** 褐色土を主体とし、最上層には暗褐色土が堆積する。 **遺物** 覆土中から少量の弥生土器片が出土している。3~5は頸部と胴部の区画が直線文で、十王台式土器でも前半期の様相を呈している。 **所見** 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。



第18図 9号住居跡

表6 9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。内・外面とも斜・横位のナデ。	石英	普通	黒褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	頸部8本歯の縦位直線文→横位波状文。内面はナデ。	石英、長石、角閃石	普通	にぶい黄橙色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(L・Z)→頸部6本歯の横位直線文→上開き連弧文・縦位直線文→横位波状文。内面は横位のナデ。	石英、長石、骨針	良好	明黄褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	頸部4本歯の横位直線文→縦位直線文・横位波状文。内面は縦・横位のナデ。外面にスス附着。	石英、長石、角閃石、赤色粒	不良	灰黄褐色	十王台式
5	弥生土器 壺	- - -	頸部は4本歯の横位波状文→横位直線文。内面はナデ。	石英、長石、角閃石	普通	にぶい黄橙色	十王台式
6	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z：下→上)。内面は縦位のナデ。内面に带状のヨゴレ附着。	石英、長石、角閃石	普通	にぶい黄橙色	十王台式
7	石器 磨石類		磨→凹。楕円形の礫を素材とし表・裏面全体に磨耗痕。表・裏面の中央に敲打痕。表面は被熱により変色。石材：石英安山岩。長さ8.75cm・幅6.4cm・厚さ4.1cm・重さ332.46g。				炉石



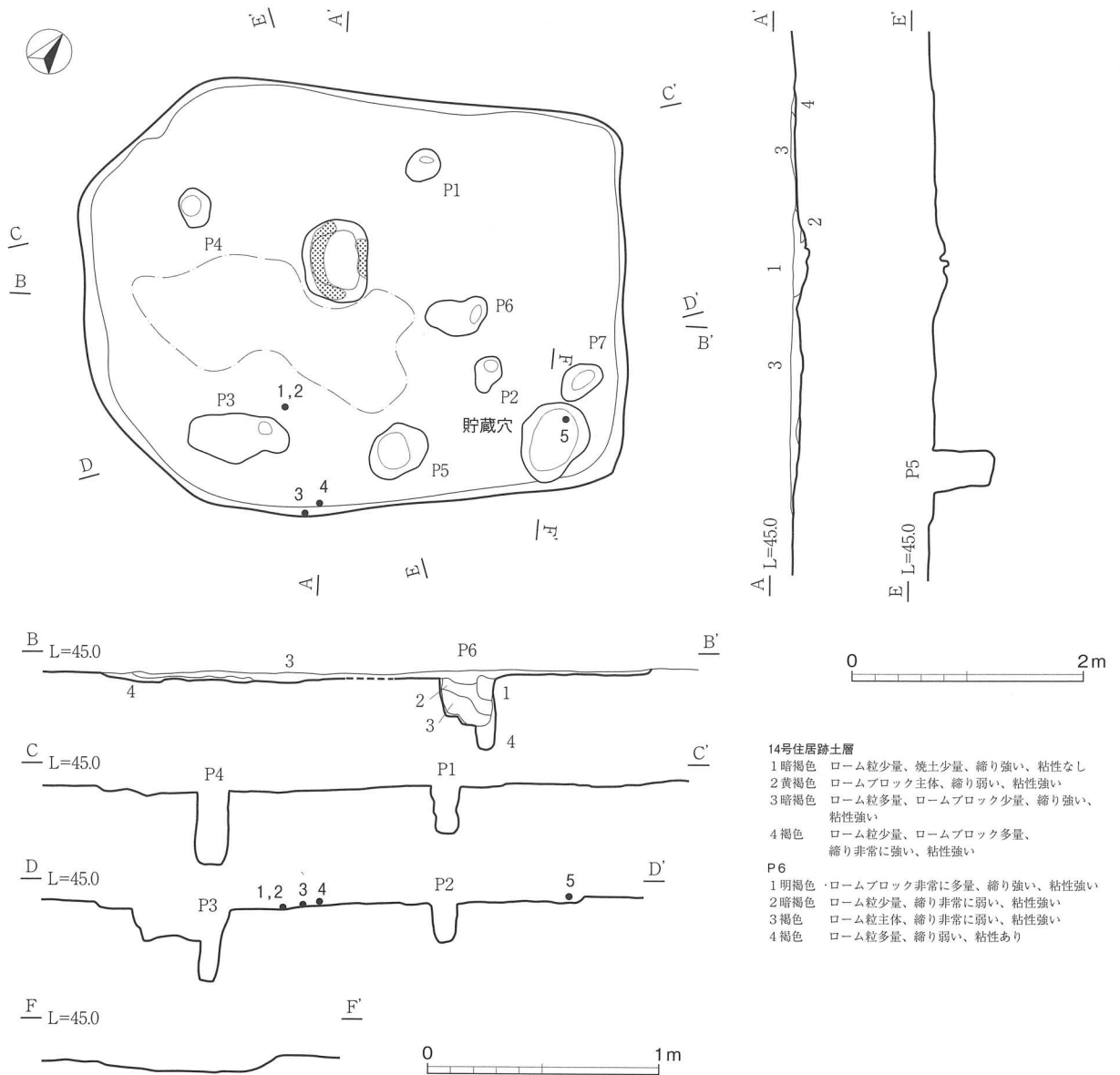
第19図 9号住居跡出土遺物

14号住居跡 (第20・21図)

位置 A区北端西側、K2グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北方向3.72 m、東西方向4.63 mの不整隅丸方形を呈する。東壁の位置と平面形に違和感があるが、覆土の堆積状況などからこの形状と判断した。北壁は調査区外の攪乱によって破壊されている。**主軸方位** N - 50° - W **壁** 壁高は3 cmを測る。**床** 炉の南側が帯状に硬化する。全体にやや凹凸がある。**ピット** 7箇所ある。P 1～4が支柱穴、P 5が出入口ピットと考えられ、P 6・7は性格不明である。P 3は攪乱によって破壊を受けている。P 1・2は黒褐色土の柱痕を、P 4・5ではロームブロックを多量に含む軟弱な柱材抜取痕を断面で観察した。また、南東隅には不整楕円形の浅い土坑があり、貯蔵穴と考えられる。**炉** 平面形は不整隅丸方形で、浅い皿状を呈する。**覆土** 褐色土を主体とした自然堆積層である。**遺物** P 3脇の覆土中からほぼ完形の弥生土器(1)が出土している。**所見** 住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

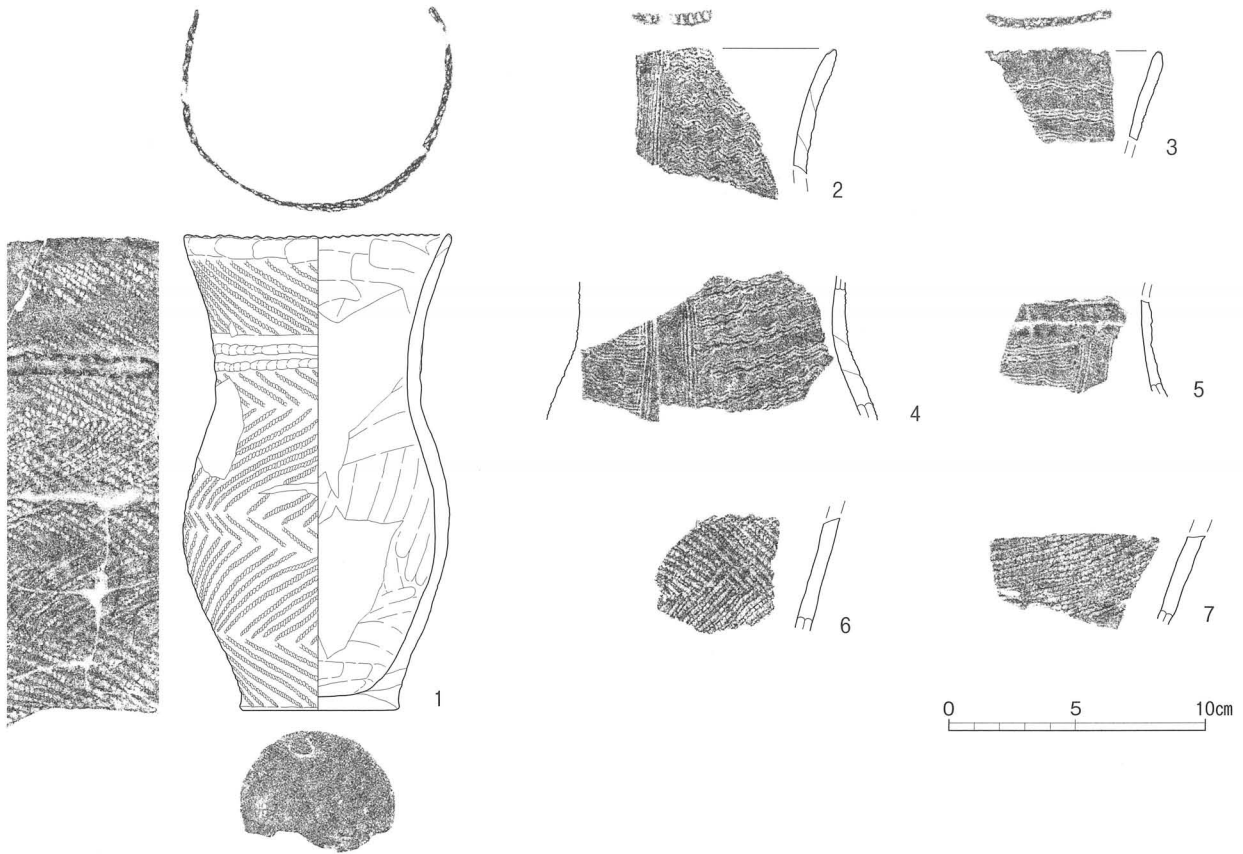
表7 14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	10.9 18.9 6.1	口唇部ヘラキザミ。口縁部軸縄不明の附加条縄文(L・Z)→横位のナデ。頸～胴部軸縄不明の附加条縄文(L・Z→R・Sの順に施文)。底部布目痕。内面横・斜位のナデ。	石英、長石、角閃石	普通	外：にぶい橙色 内：褐灰色	覆土下層 十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部の内側にヘラキザミ。口縁部は5本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面の口唇部付近は横位の丁寧なナデ。他は縦位の丁寧なナデ。外面にスス附着。	石英、角閃石	良好	にぶい黄橙色	覆土下層 十王台式



第20図 14号住居跡

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	弥生土器壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部5本歯の横位波状文。内面は縦・斜位のナデ。外面にスス附着	石英、多量の金雲母	普通	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄色	床面直上 十王台式
4	弥生土器壺	- - -	頸部5本歯の縦位直線文→横位波状文（時計回り）。内面は縦位のナデ。外面にスス附着	石英、角閃石、金雲母	普通	外：浅黄橙色 内：にぶい黄色	床面直上 十王台式
5	弥生土器壺	- - -	頸部2条の押捺隆帯→5本歯の縦位直線文（上→下）→横位波状文（下→上）。内面は斜位のナデ。外面にスス附着。4と同一個体カ。	石英、角閃石、金雲母	普通	浅黄色	床面直上 十王台式
6	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文（R-S、L-Z）。内面は器面荒れが著しい。	多量の石英・長石多量、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	床面直上 二軒屋式
7	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文（R-S）。内面は器面荒れが著しい。	石英、長石	良好	浅黄色	床面直上 十王台式カ



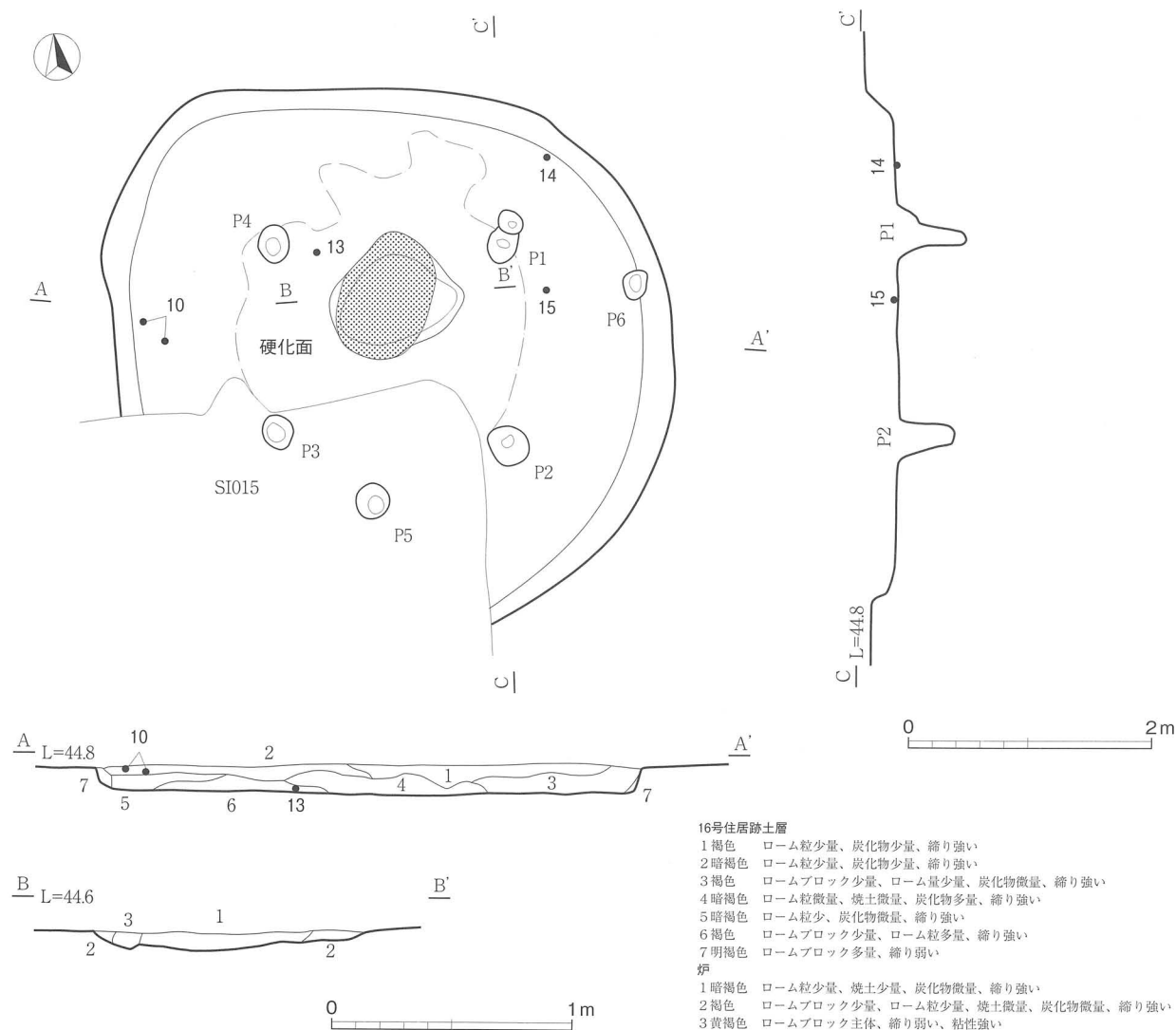
第21図 14号住居跡出土遺物

16号住居跡 (第22・23図)

位置 A区北西部、K2～K3グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北方向4.56m、東西方向4.70mの不整隅丸方形を呈する。竪穴の南西隅を、古墳時代後期の15号住居跡によって壊されている。**主軸方位** N-8°-E **壁** 壁高は20cmを測る。**床** 平坦で、中央部が硬化する。**ピット** 6箇所ある。P1～4が支柱穴、P5が出入口ピットと考えられ、P6は壁柱穴であろうか。P3・5は15号住居跡掘り方面で確認した。P1～3は暗～黒褐色土の軟弱な柱痕と褐色土の根固め層が土層断面で観察できた。**炉** 平面不整形で、浅い皿状を呈する。火床面の被熱は強い。**覆土** 下層は褐色土、上層は暗褐色土を主体とする自然堆積と思われる。**遺物** 出土した弥生土器の遺物量は比較的多いが、小片主体で時期にまとまりがない。15は紡錘車で、表面・側面に櫛描直線文・波状文が施される。**所見** 住居跡の時期は、弥生時代後期後半代と考えられる。

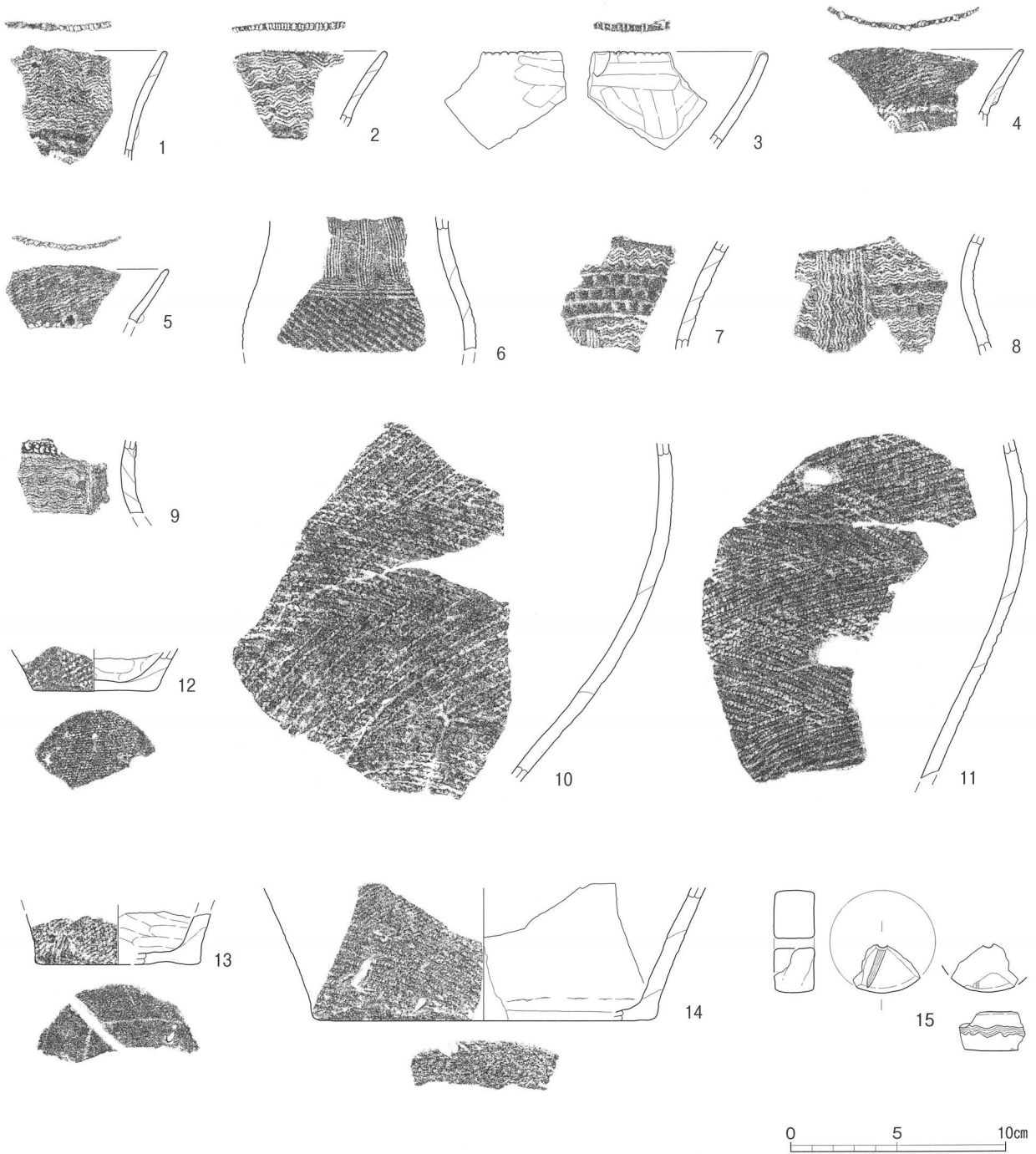
表8 16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ、小突起。頸部薄い押捺隆帯→口縁部4本歯の横位波状文(上→下)。頸部横位波状文。内面は口縁部横位のナデ、以下は縦位のナデ。	石英	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	床面直上 十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本歯の横位波状文(上→下)。内面は横位のナデ。	石英	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい橙色	十王台式



第22図 16号住居跡

図版番号	種別 器種	口径器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ、小突起。口縁部は無文（横・斜位のナデ）。内面は横位のナデ。	石英、長石	普通	外：にぶい橙色 内：灰黄褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	有段口縁。口唇部ヘラキザミ。口縁部は無節縄文（L）→下端にヘラキザミ→頸部2本歯以上の横位波状文。内面は口唇部付近横位のナデ。他は斜位のナデ。外面スス附着。	石英、角閃石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい橙色	
5	弥生土器 壺	- - -	有段口縁。ヘラキザミ。口縁部無節縄文（L）→下端にヘラキザミ→円形貼付文。内面は口唇部付近横位のナデ。他は斜位のナデ。口唇部外面に帯状にスス附着。	石英	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	
6	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文（L・Z）→頸部界に6本歯の横位直線文→頸部縦位直線文。外面全面にスス附着。内面は頸部が横・斜位のナデ、胴部が縦・斜位のナデ。肩部付近にヨグレ附着。	石英、長石、角閃石、赤色粒	良好	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	- - -	口縁部4本歯の横位波状文。口頸部は横位の細沈線4条→沈線間を押捺。頸部4本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は丁寧な縦・斜位のナデ。外面スス附着。	多量の石英、角閃石	普通	黒褐色	十王台式
8	弥生土器 壺	- - -	頸部5本歯の縦位波状文3条→横位波状文（下→上）。内面は縦・斜位のナデ。外面スス附着。	多量の石英、角閃石、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	十王台式



第23図 16号住居跡出土遺物

図版番号	種別	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
9	弥生土器壺	- - -	頸部は断面三角形の棒状工具によるキザミ隆帯→5本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は横位のナデ。	石英、角閃石、骨針	普通	外：灰黄褐色 内：褐灰色	十王台式
10	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文（R・S、L・Z：上→下）。内面は斜位のナデ。	石英、長石	普通	にぶい黄橙色	十王台式

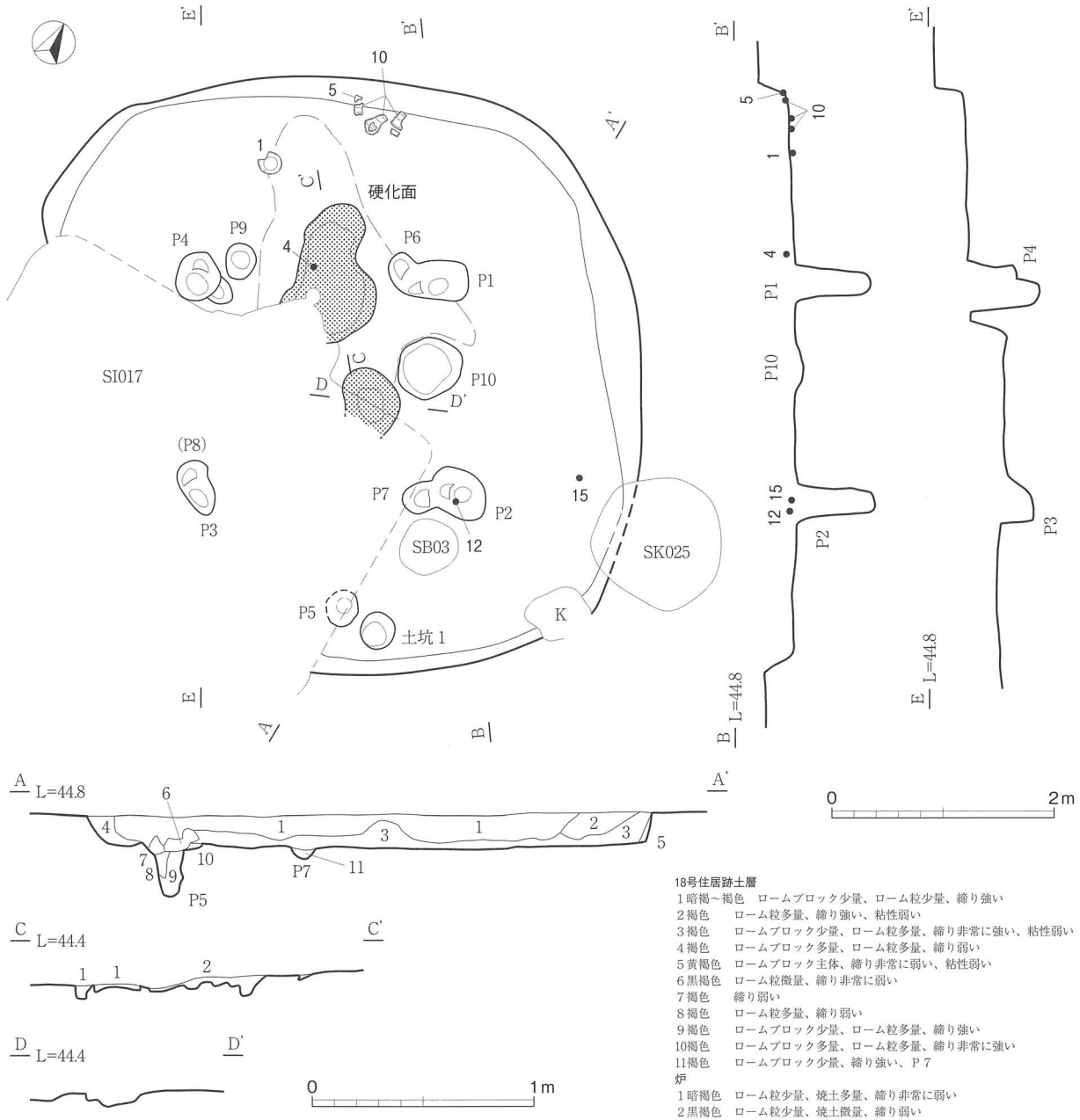
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
11	弥生土器 壺	- - -	胴部軸繩不明の附加条縄文 (R・S、L・Z:上→下)。内面は胴中～下位が縦位のナデ、底部付近が斜位のナデ。	石英、長石、角閃石	良好	にぶい黄褐色	十王台式
12	弥生土器 壺	- - (5.6)	胴部軸繩不明の附加条縄文 (R・S)。底部布目痕。内面は横位のナデ。	石英、長石	良好	にぶい橙色	十王台式
13	弥生土器 壺	- - (7.8)	胴部附加条1種縄文 (L+2L)。底部木葉痕。内面は横位のナデ。	多量の石英・角閃石	良好	外：黒褐色 内：にぶい褐色	二軒屋式カ
14	弥生土器 壺	- - (15.4)	胴部軸繩不明の附加条縄文 (R・S、L・Z:下→上)。底部砂痕。内面は剥落著しく、不明。	石英、長石、角閃石、金雲母	良好	にぶい黄褐色	十王台式
15	土製品 紡錘車		径 (4.9)、高 1.85、孔径 (0.35)、重量 [10.7] g。表裏面に4本歯の直線文。側面に4本歯の横位波状文。表面をナデ・ミガキ調整。	石英	普通	にぶい黄褐色	

18号住居跡 (第24~26図)

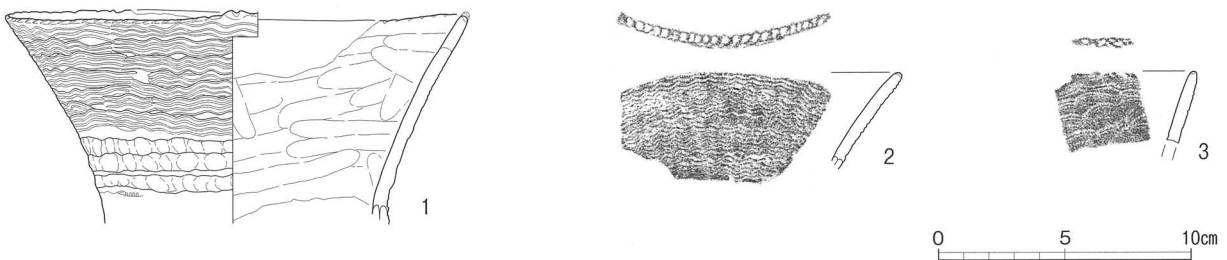
位置 A区北西端、K3グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北(主軸)方向は5.42mを測り、東西方向は5.7m前後と推測する。平面はやや円形に近い不整隅丸正方形を呈する。古代の17号住居跡によって、南西側約1/3を失う。3号掘立柱建物跡の柱穴と25号土坑によって一部破壊される。**主軸方位** N-33°-Wで、北北西を指向する。**壁** 壁高は23~28cmを測り、やや傾斜する。**床** 全体に平坦で、炉周辺が硬化する。**ピット** P1~4が新支柱穴、P6~9が旧支柱穴、P5は出入口ピットと考えられる。P1~4の底面には段差があり、それぞれ柱材端部の硬化圧痕(いわゆる、あたり)を検出した。浅い方の上面はいずれも貼床で閉塞されていた。よって、同一地点で2回利用したものと判断できる。P8は17号住居跡によって消滅したものと推測した。P6・7・9(各深度20cm・52cm・15cm)はその配置から支柱穴と判断した。支柱穴配置の変遷は、P6・7・(8)・9 → P1・2・3・4 → P1・2・3・4と想定する。土坑1は深さ21cmと浅く、貯蔵穴と推定される。P10は深さ約12cmで底面に凹凸があり、用途不明である。**炉** 浅く掘り込まれた炉が2箇所ある。洋梨状の不整楕円形(126×84cm)を呈する方が新炉と考えられ、竪穴中央に位置する不整円形(61×49cm)の方は被熱が弱く、旧炉と考えられる。新炉も平面形・規模から推測すると、隣り合う2基の炉であった可能性が高い。**覆土** 下層は褐色土、上層は暗褐色土が主体で、自然堆積状を呈する。**遺物** 北東部の覆土下層から、ややまとまって出土した。遺物の出土量は多く、大半が十王台式後半期の土器である。**所見** 支柱穴と炉は2回更新し、同一竪穴を3回利用したものと推察する。支柱穴配置の拡張にともなって、炉は竪穴中央から北東方向へと移設されたのであろう。竪穴自体の更新や拡張の痕跡は見いだせなかった。住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。

表9 18号住居跡出土遺物観察表

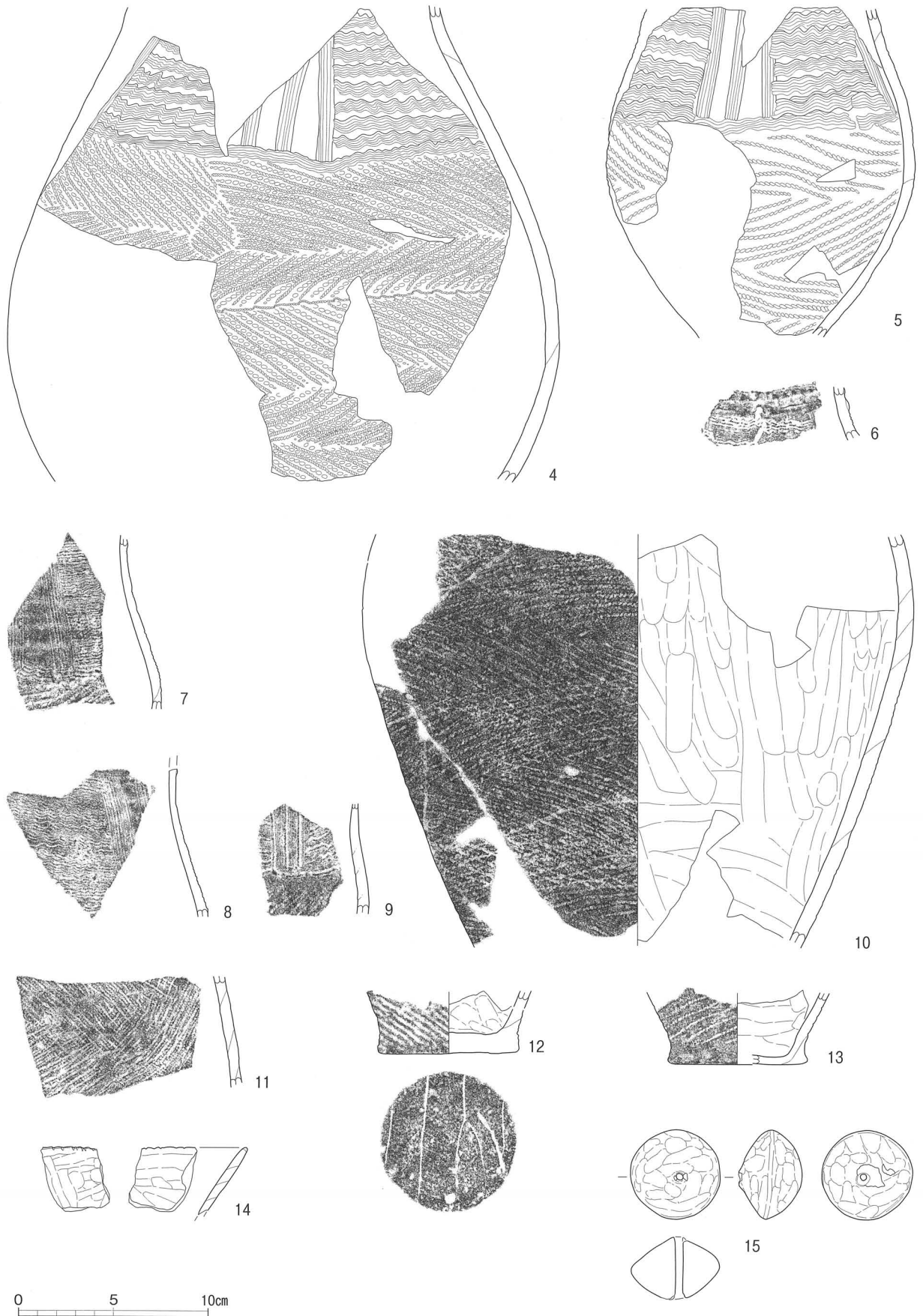
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(18.3) - -	口唇部ヘラキザミ、小突起。頸部薄い押捺隆帯3条→口縁部4本歯の横位波状文7条(上→下、反時計回り)。頸部縦位直線文→横位波状文。内面は横・斜位のナデ。外面全面にスス、内面全面にヨグレ付着。	石英、金雲母	普通	黒褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部6本歯の横位波状文(上→下、時計回り)。内面は丁寧な横位のナデ。	石英	普通	灰黄褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部は3本歯の横位波状文(下→上、反時計回り)。内面は横位のナデ。	石英、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	十王台式



第24図 18号住居跡



第25図 18号住居跡出土遺物①



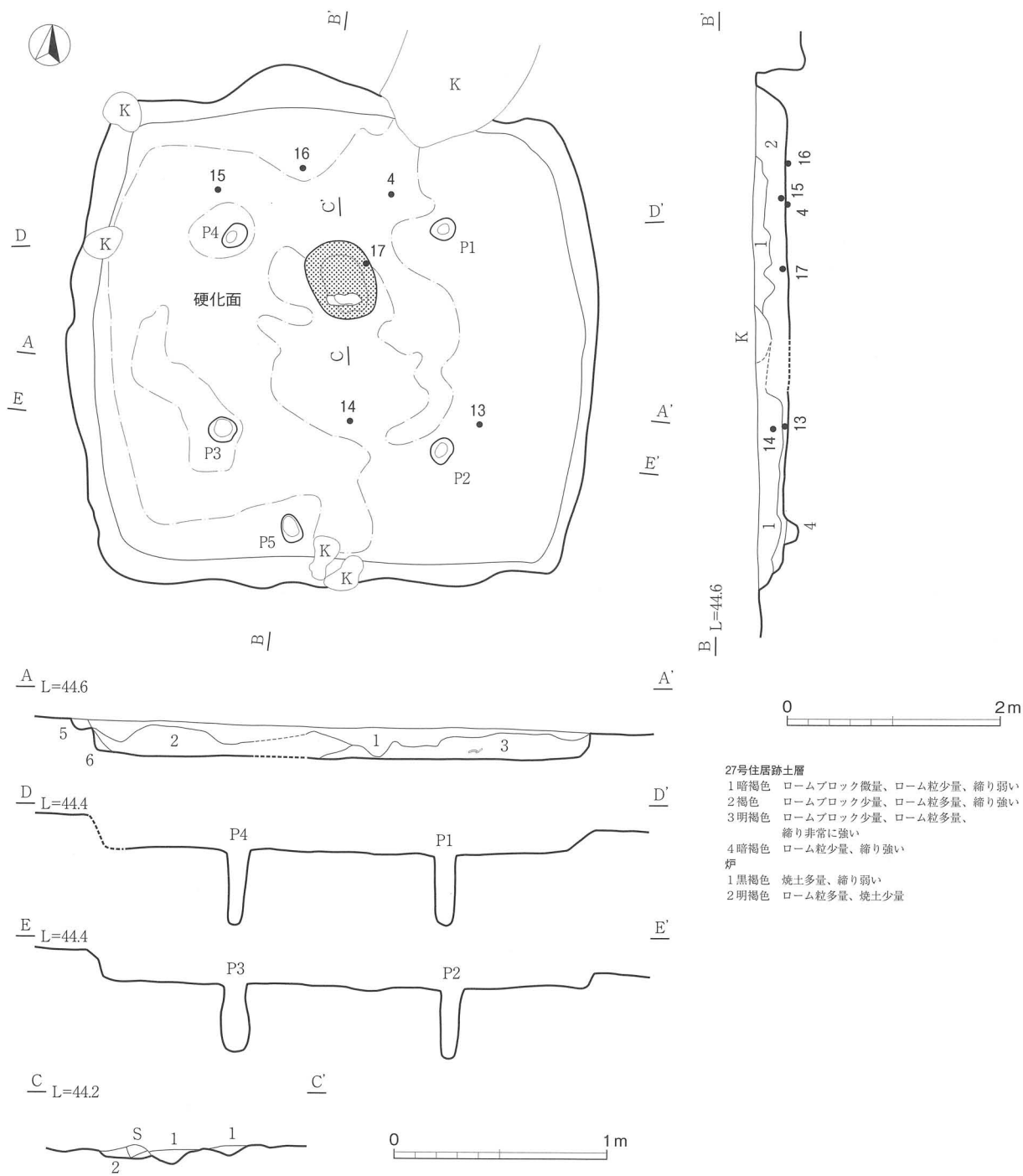
第26图 18号住居跡出土遺物②

第IV章 A区の遺構と遺物

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器壺	- - -	胴部附加条2種縄文(RL+2R, LR+2L:下→上)→頸部5本歯の縦直線文→横位(区画)波状文(上→下、反時計回り)。内面は頸部が横位、胴部が縦位のナデ。	多量の石英・長石、角閃石、骨針、赤色粒	良好	外:にぶい橙色 内:灰黄褐色	SI017 カマドと接合 十王台式
5	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S, L-Z:下→上)→頸部5本歯の横位区画波状文→3条1単位の縦直線文→横位波状文(下→上)。内面はナデ。外面スス附着。	石英	普通	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式
6	弥生土器壺	- - -	頸部押捺隆帯→頸部5本歯の縦直線文→横位波状文。内面は横位のナデ。4と同一個体カ。	多量の石英・長石、角閃石	良好	外:にぶい橙色 内:にぶい黄褐色	十王台式
7	弥生土器壺	- - -	頸部押捺隆帯。胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S)→頸部7本歯の縦直線文→横位波状文(下→上)。内面は縦位のナデ。頸部より上にスス附着。内面は縦位のナデ、パッチ状の剥落。8と同一個体カ。	石英	普通	外:灰黄褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式
8	弥生土器壺	- - -	頸部隆帯→頸部7本歯の縦直線文→横位波状文(下→上)。内面は縦位のナデ。内面は縦位のナデ。頸部より上にスス附着。内面は帯状のヨゴレ附着とパッチ状の剥落。7と同一個体カ。	石英	普通	外:灰黄褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式
9	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S)→頸部3本歯の横位区画波状文→3条1単位の縦直線文→横位波状文(下→上)。内面は縦・斜位のナデ。外面スス附着。	石英、角閃石、赤色粒	普通	外:黒褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式
10	弥生土器壺	- - -	胴部附加条2種縄文(RL+2R, LR+2L:下→上)。内面は胴部中～下位が縦位のナデ、底部付近が縦・斜位のナデ。	多量の石英・長石、赤色粒	良好	にぶい黄褐色	十王台式
11	弥生土器壺	- - -	胴部附加条1種縄文(RL+2L, LR+2R:上→下)。内面は横・斜位のナデ。外面スス附着。内面は下位に帯状のヨゴレ附着とパッチ状の剥落。	石英、角閃石	普通	外:灰黄褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式
12	弥生土器壺	- - 7.3	胴部軸縄不明の附加条縄文(r-Z)。底部木葉痕。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・長石	普通	にぶい黄褐色	二軒屋式
13	弥生土器壺	- - (7.3)	胴部下端横位のナデ→軸縄不明の附加条縄文(R-S)。底部砂痕。内面は横位のナデ。	石英、長石、金雲母、赤色粒	普通	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式
14	弥生土器高坏	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部縦・横位のナデ。内面は横・斜位のナデ。	石英	良好	にぶい黄褐色	十王台式
15	土製品紡錘車		径(4.75)、高3.3、孔径(0.3)、重量[55.3]g。表裏面ともナデ調整。片側穿孔。	石英、角閃石	普通	黒褐色	

27号住居跡(第27~29図)

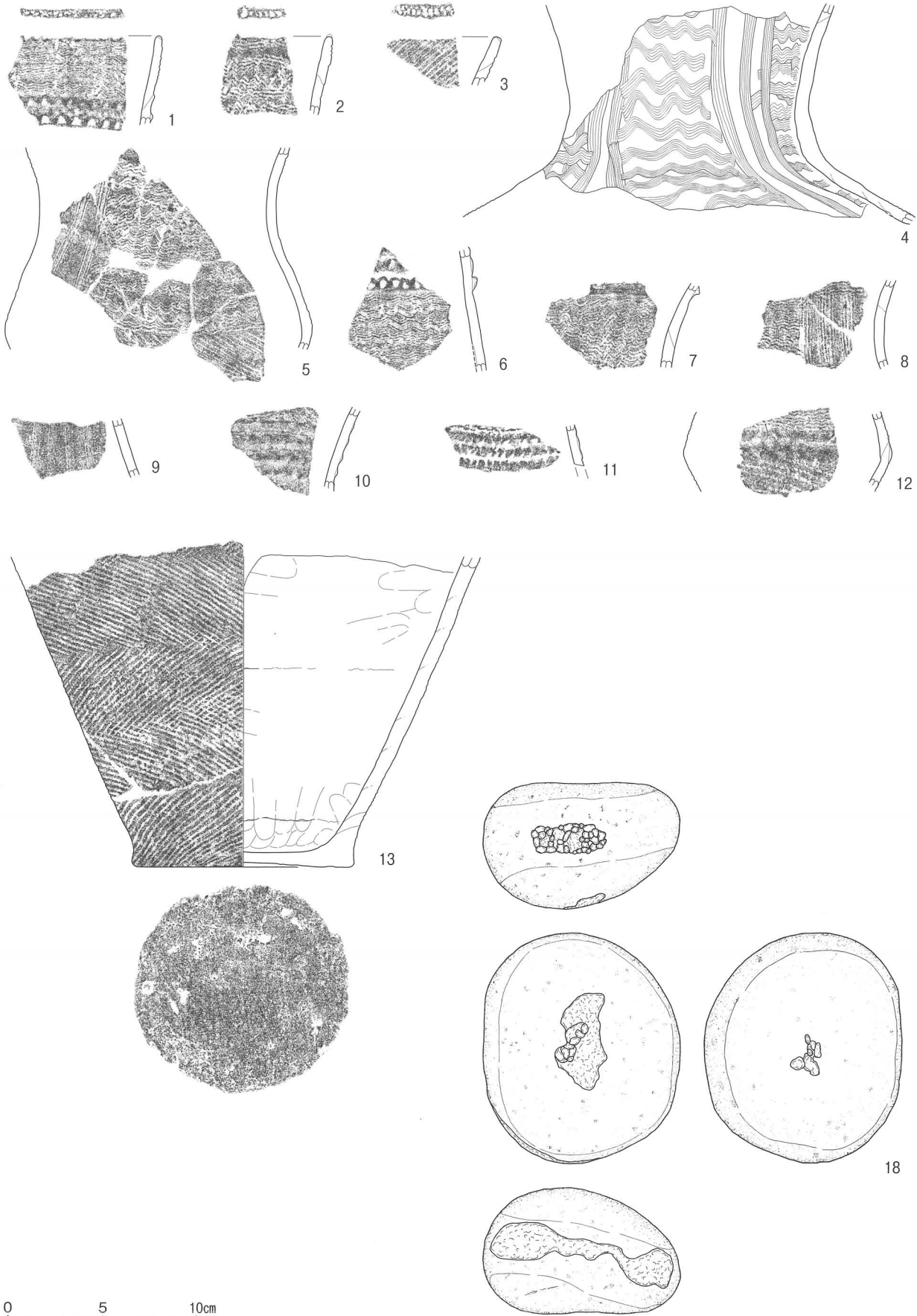
位置 A区北端部付近、M3グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北(主軸)方向は4.26m~4.56mを測る。北壁は崩れているため、最大値は4.95mとなる。東西方向は4.38m~4.96mを測る。平面は東西辺がわずかに膨らんだ隅丸正方形を呈する。北壁の一部が攪乱で壊され、床面にはピット状の攪乱が認められる。**主軸方位** N-6°-Wで、真北に近い。**壁** 壁高は15~33cmを測り、傾斜がやや強い。**床** はほぼ平坦で、堅穴の西側2/3が硬化する。特に、P1~4を結んだラインの内側が最も硬く、炉の南側床面が軟弱で、硬化面が馬蹄形に残存している。**ピット** P1~4が主柱穴と考えられる。P5は出入口ピットの可能性がある。南壁際にピット状の攪乱があるため、出入口ピットが失われている可能性もある。主柱穴の覆土はいずれも軟弱で、P2では直径14cmの柱痕とローム質の根固め土を断面観察で確認した。**炉** 床面中央北寄りに構築される。平面不整楕円形で、規模は76cm×59cmを測り、浅く掘り込まれている。被熱は著しく、南側に三角柱状の自然礫を炉石として設置している。炉石は平坦な面を上向きにしている。**覆土** 下層が褐色土、上層が暗褐色土で、自然堆積状を呈する。**遺物** P2北東の覆土下層から13が、炉の北側床面から4の口頸部破片が出土している。炉から17の高坏の破片が出土している。遺物の出土量は多く、遺存状況は比較的良好である。十王台後半期の土器が主体だが、二軒屋式系の壺(15・16)も少量出土している。4は十王台式の壺形土器だが、肩が極端に張る。17は体部と脚部に横位の櫛描波状文を施文する高坏である。**所見** 住居跡の構築および廃絶時期は、弥生時代後期後半と考えられる。



第 27 図 27号住居跡

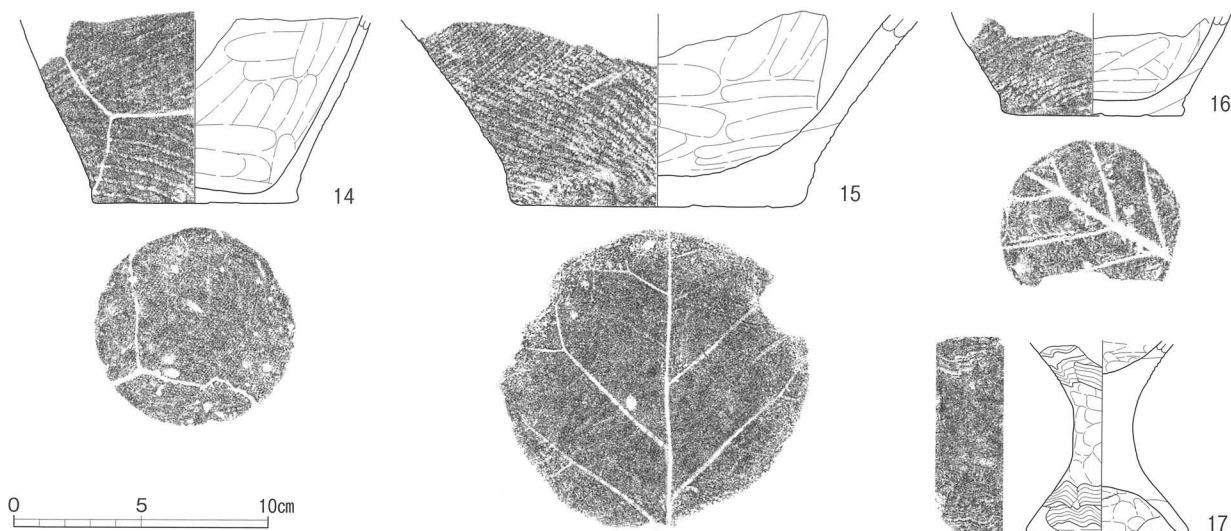
表 10 27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。頸部押捺隆帯→口縁部6本歯の横位波状文(下→上、反時計回りカ)。内面は横位のナデ。	石英、角閃石、金雲母、赤色粒	普通	にぶい黄橙色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ、小突起。口縁部4本歯の横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。	石英、長石、角閃石、赤色粒	普通	にぶい黄橙色	十王台式



0 5 10cm

第 28 図 27号住居跡出土遺物①



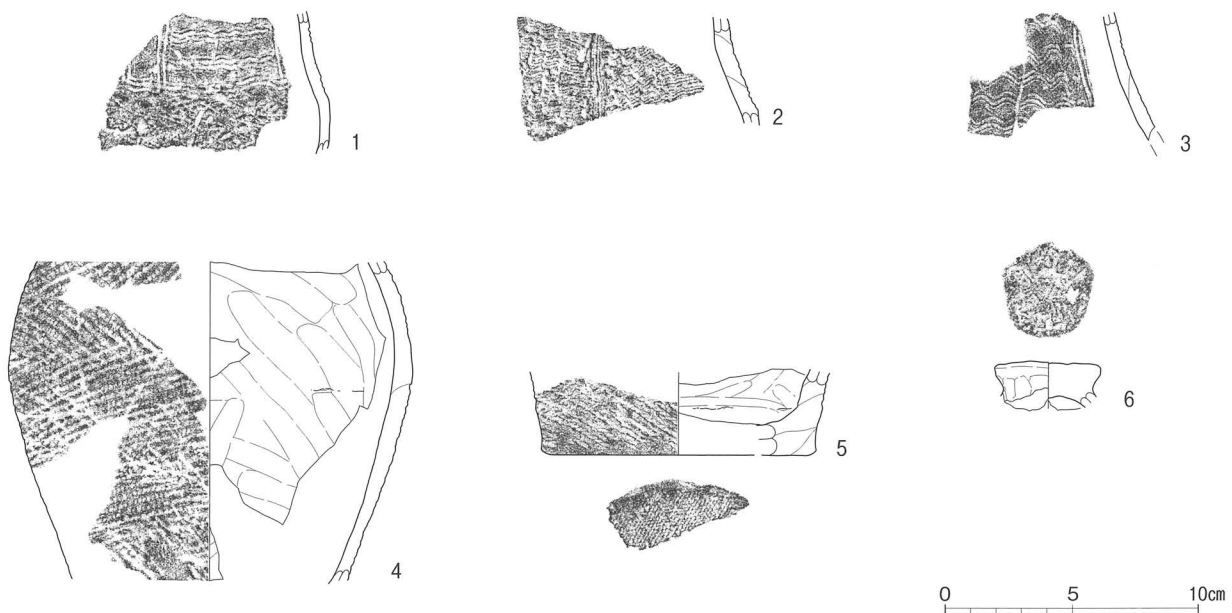
第29図 27号住居跡出土遺物②

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	弥生土器壺	- - -	口唇部軸繩不明の附加条1種縄文(L R + Rカ)を回転施文。口縁部は同様の原体を横位施文。内面は横位のナデ。	石英	普通	にぶい黄橙色	
4	弥生土器壺	- - -	頸部5本歯の縦位直線文(3~4条を一単位)→横位波状文(下→上)→縦位直線文(一部)。内面は頸部上位が横位のナデ、中~下位が斜位のナデ。剥落著しい。	多量の石英・長石、角閃石、金雲母	良好	橙色	覆土下層 十王台式
5	弥生土器壺	- - -	胴部附加条1種縄文(R L + 2 1)→頸部押捺隆帯→縦位5本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)12段。内面は頸部上位が縦位のナデ、中~下位が横位のナデ。外面スス附着。	石英、角閃石、骨針	普通	外：灰褐色 内：灰黄褐色	十王台式
6	弥生土器壺	- - -	頸部厚い押捺隆帯→6本歯の横位波状文(下→上)。内面はナデ。	角閃石、金雲母、赤色粒	普通	にぶい黄橙色	十王台式
7	弥生土器壺	- - -	胴部断面三角形の厚い隆帯→4本歯の横位波状文(上→下)。内面は横・斜位のナデ。	石英、長石	不良	外：黒褐色 内：にぶい黄橙色	十王台式
8	弥生土器壺	- - -	頸部4本歯の縦位直線文(3条一単位)→横位波状文、縦位直線文(中央)。内面は横・斜位のナデ。外面スス附着。	石英、長石	良好	外：黒褐色 内：にぶい橙色	十王台式
9	弥生土器壺	- - -	頸部5本歯の縦位直線文(4条一単位)→横位波状文。内面は縦位のナデ。	石英、角閃石、赤色粒	普通	にぶい黄橙色	十王台式
10	弥生土器壺	- - -	頸部薄い押捺隆帯4条→口縁部5本歯の横位波状文、頸部縦位直線文→横位波状文。内面は横・斜位のナデ。外面スス附着。	石英、長石、骨針	良好	にぶい黄褐色	十王台式
11	弥生土器壺	- - -	頸部爪痕のある薄い押捺隆帯→口縁部歯数不明の横位波状文。内面は縦位のナデ。	石英、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	十王台式
12	弥生土器壺	- - -	頸部押捺隆帯→頸部5本歯の横位波状文、胴部軸繩不明の附加条縄文(L - Z)。内面は縦位のナデ。	石英、長石	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい橙色	十王台式
13	弥生土器壺	- - 11.5	胴部軸繩不明の附加条縄文(R - S、L - Z：下→上、反時計回り)。底部は布目痕で周縁部ナデ消し。内面は胴部中位が横・斜位のナデ。底部付近が縦・斜位のナデ。他は剥落。	多量の石英・長石、赤色粒	不良	外：にぶい黄褐色、灰白色 内：にぶい橙色	覆土下層 十王台式カ
14	弥生土器壺	- - 8.0	胴部軸繩不明の附加条縄文(R - S、L - Z：下→上)。底部布目痕、植物種子カ圧痕。内面は横・縦位のナデ。内面全体に薄いコゲ附着。	石英、骨針	良好	外：にぶい橙色 内：灰黄褐色	覆土上層 十王台式
15	弥生土器壺	- - 11.4	胴部軸繩不明の附加条縄文(R - S、L - Z：下→上)、胴部下端横位のナデ。内面は胴部下位が縦・斜位のナデ。底部付近横位のナデ。	多量の石英・白色粒、角閃石、赤色粒。	普通	にぶい黄褐色	覆土下層 二軒屋式カ

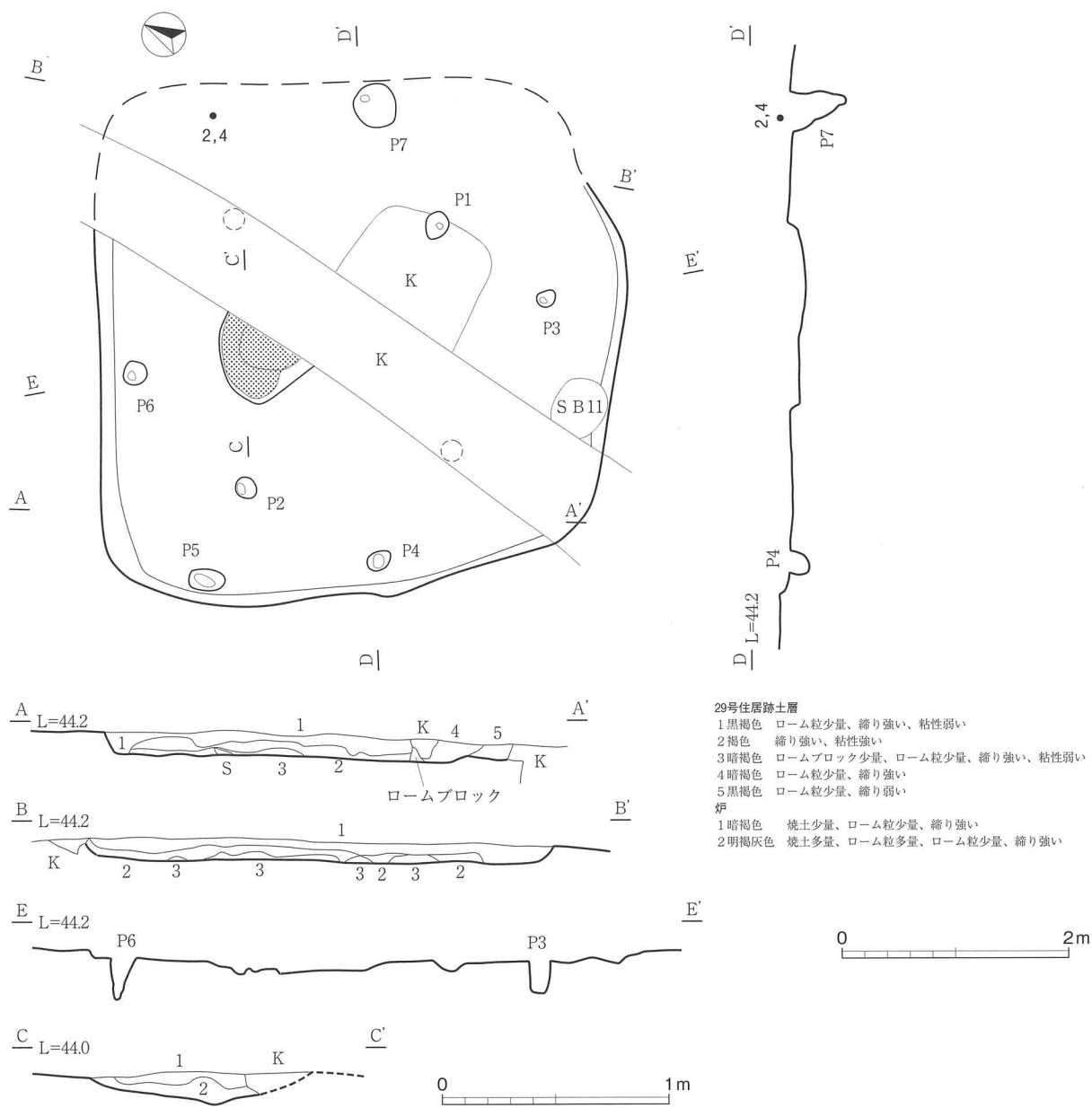
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
16	弥生土器壺	— — (7.0)	胴部附加条1種縄文(LR+2R:時計回り)。底部木葉痕。内面は横・斜位のナデ。外面スス附着。	多量の石英・白色粒、角閃石	良好	外:黒褐色 内:黄灰色	床面直上 二軒屋式
17	弥生土器高坏	— — (6.3)	体部・脚部下位に5本歯の横位波状文(時計回り、下→上)。脚部中位は横・斜位のナデ。内面は体部が横・斜位のナデ、脚部が縦・横位のナデ。	多量の石英・白色粒、角閃石、赤色粒	普通	にぶい黄橙色	炉 十王台式
18	石器敲石		自然礫を素材とし表・裏面中央や上・下面に敲打痕。 石材:石英安山岩。長さ12.25cm・幅10.35cm・厚さ7.75cm・重さ1276.4g。				

29号住居跡(第30・31図)

位置 A区北部、M3グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北(主軸)方向は4.4m~4.66mを測る。東壁は残存しないため、東西方向は約4.5mと推測する。平面は、不整形な隅丸逆台形もしくは隅丸正方形と思われる。北東部は風倒木痕を壊して構築しており、中央部は攪乱の溝・土坑によって大きく壊され、11号掘立柱建物跡とも重複する。**主軸方位** N-31°-W **壁** 壁高は7~29cmを測り、傾斜する。床はほぼ平坦で、顕著な硬化面は認められない。**ピット** P1・2(各深度31cm・39cm)が支柱穴、P3が出入口ピットと考えられる。北東・南西の支柱穴は攪乱で消滅しており、推定位置を破線で示した。P3・4・6・7は各辺(壁)の中央あるいは中軸付近に位置している。**炉** 床面中央北寄りに構築され、南東部は攪乱によって壊されている。残存規模は89cm×56cmを測り、浅く掘り込まれている。被熱は顕著である。**覆土** 下層が褐色土、上層が暗褐色土で、自然堆積状を呈する。**遺物** わずかに弥生土器片が出土している。P2・P3脇の覆土下層から、破碎した同一個体と見られる自然角礫が出土している。遺物の出土量は少なく、大半が小破片で出土している。十王台式後半期の土器が主体で明確な二軒屋式系の土器は出土していない。6は蓋形土器の摘み部である。**所見** 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。



第30図 29号住居跡出土遺物



第31図 29号住居跡

表11 29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条2種縄文(L+L)→頸胴界4本歯の横位区画波状文→頸部縦位直線文→横位波状文。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石	普通	外：明赤褐色 内：にぶい黄褐色	覆土上層 十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	頸部4本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・白色粒、赤色粒	良好	外：オリーブ褐色 内：明赤褐色	覆土上層 十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	頸部5本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英	普通	にぶい黄褐色	覆土上層 十王台式

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z:下→上)。内面は胴部上～中位が斜位のナデ、下位～底部付近は横位のナデ。外面胴部上位に帯状のスス、内面はコゲ付着。	石英、多量の白色粒	良好	外:にぶい黄褐色 内:にぶい褐色	覆土上層 十王台式
5	弥生土器 壺	- - (11.0)	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、R・Z:下→上)。底部布目痕。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石	良好	外:明赤褐色 内:橙色	覆土上層 十王台式
6	弥生土器 蓋	- - -	摘み径1.95cm。摘み部側面にナデ(指頭圧痕)、頂部に植物種子カの圧痕。内面は体部がナデ。	石英	不良	外:明赤褐色 内:赤褐色	

30号住居跡(第32図)

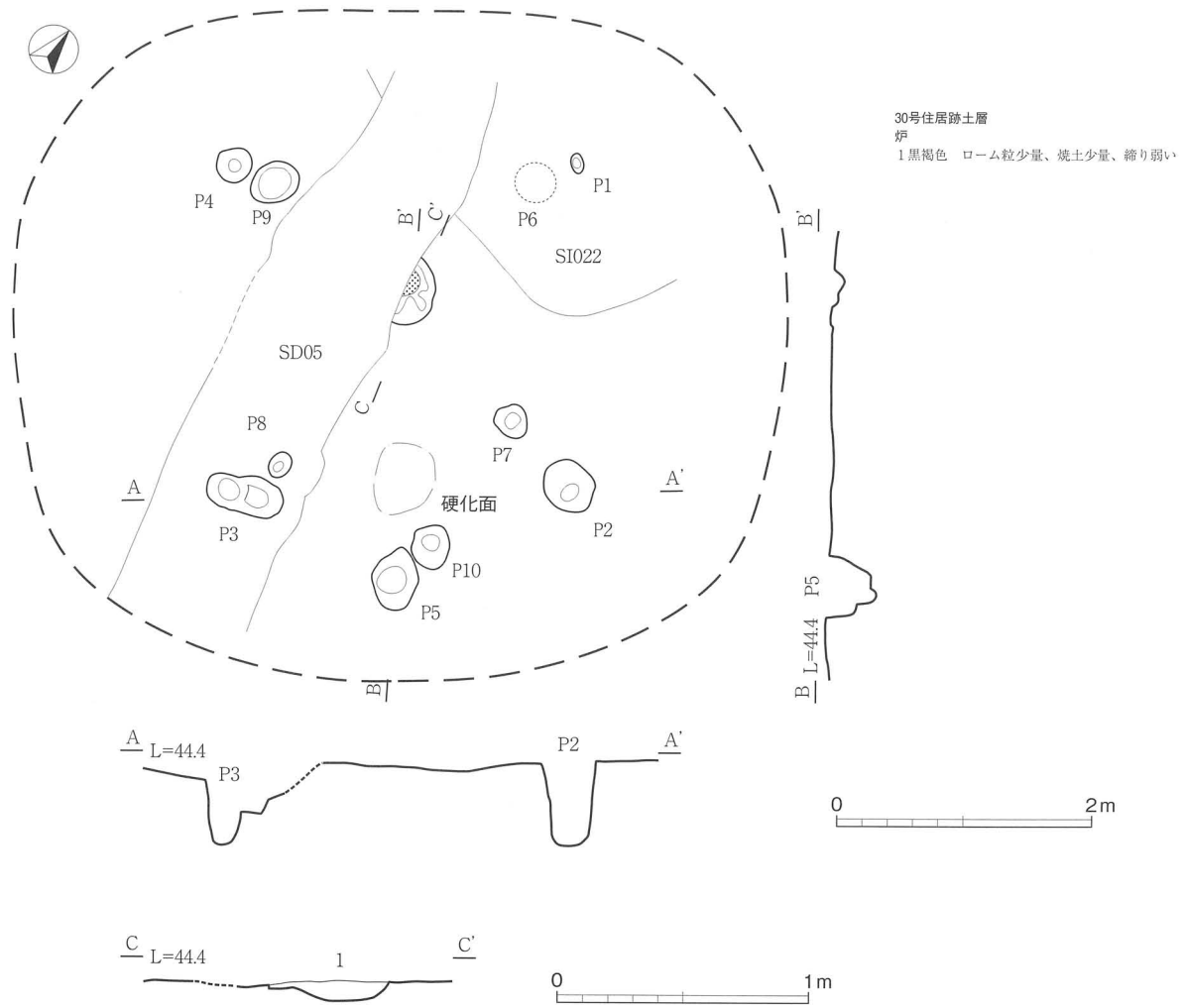
位置 A区北部、L3グリッドに位置する。**規模と平面形** 確認面では竪穴は残存しなかったため、柱穴配置と49号住居跡を参考にして竪穴規模を推定復元している。本住居跡は5号溝・22号住居跡・7号掘立柱建物跡・時期不明の土坑群によって一部壊されている。**主軸方位** N-40°-W **壁** - **床** 床面は、ほとんど残っていない。P5・10の北側に硬化面がわずかに残存している。**ピット** P1~4が新主柱穴、P6~9が旧主柱穴、P5・P10(深さ38cm)が新・旧の出入口ピットであろう。P6は推定位置を破線で示した。P1も22号住居跡掘り方面にわずかな窪みとして残存するのみである。P7・8が深さ38cmと35cmあるのに対し、P9は深さ13cmしかないが、その位置から主柱穴と判断した。**炉** 床面中央やや北寄りに位置する。北東部は5号溝によって壊されている。残存規模は57cm×25cmを測り、浅い掘り込みを伴う。**覆土** - **遺物** 柱穴内から弥生土器の小片が出土した。**所見** 住居跡の時期は弥生時代後期後半と考えられる。本遺跡の弥生時代の住居跡の中では、比較的規模が大きい。

35号住居跡(第33図)

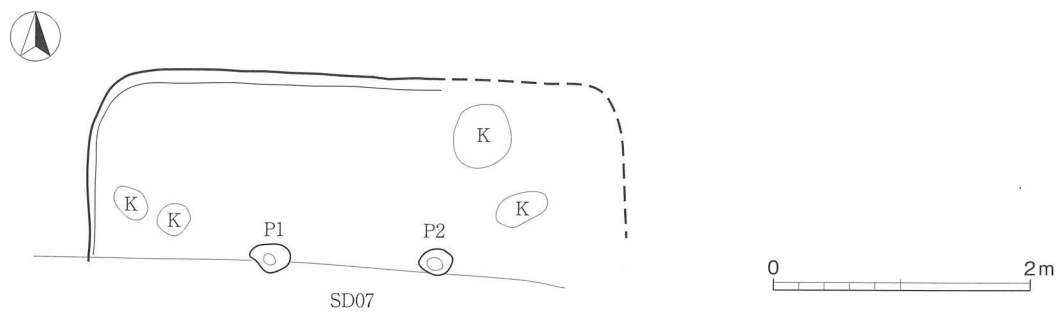
位置 A区北部、M4グリッドに位置する。**規模と平面形** 竪穴の壁の一部が残存している。東西は推定4.2m、南北は不明である。大半は7号溝・1号道路跡によって壊されている。**主軸方位** N-1°-E **壁** やや傾斜し、最大で5cmを測る。**床** ほぼ平坦である。**ピット** P1・2は、深さ24cm・30cmを測り、主柱穴の可能性はある。**炉** - **覆土** - **遺物** - **所見** 残存する壁やピット等の構造から、弥生時代の住居と推測する。

37号住居跡(第34・35図)

位置 A区北部、M4グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北(主軸)方向は4.11m、東西方向は3.7m~4.21mを測る。平面は不整形な隅丸台形状であるが、西壁については主柱穴配置や主軸と整合しない。漸移層に掘り込まれた西壁が木の根等によって侵食された可能性があり、本来は隅丸長方形であったと推測する。床面にはピット状攪乱が点在する。**主軸方位** N-59°-W **壁** 壁高は9cmを測り、傾斜する。**床** やや凹凸のある地床で、炉の周りに不整形な硬化面が広がる。**ピット** P1~4が主柱穴、P7が壁

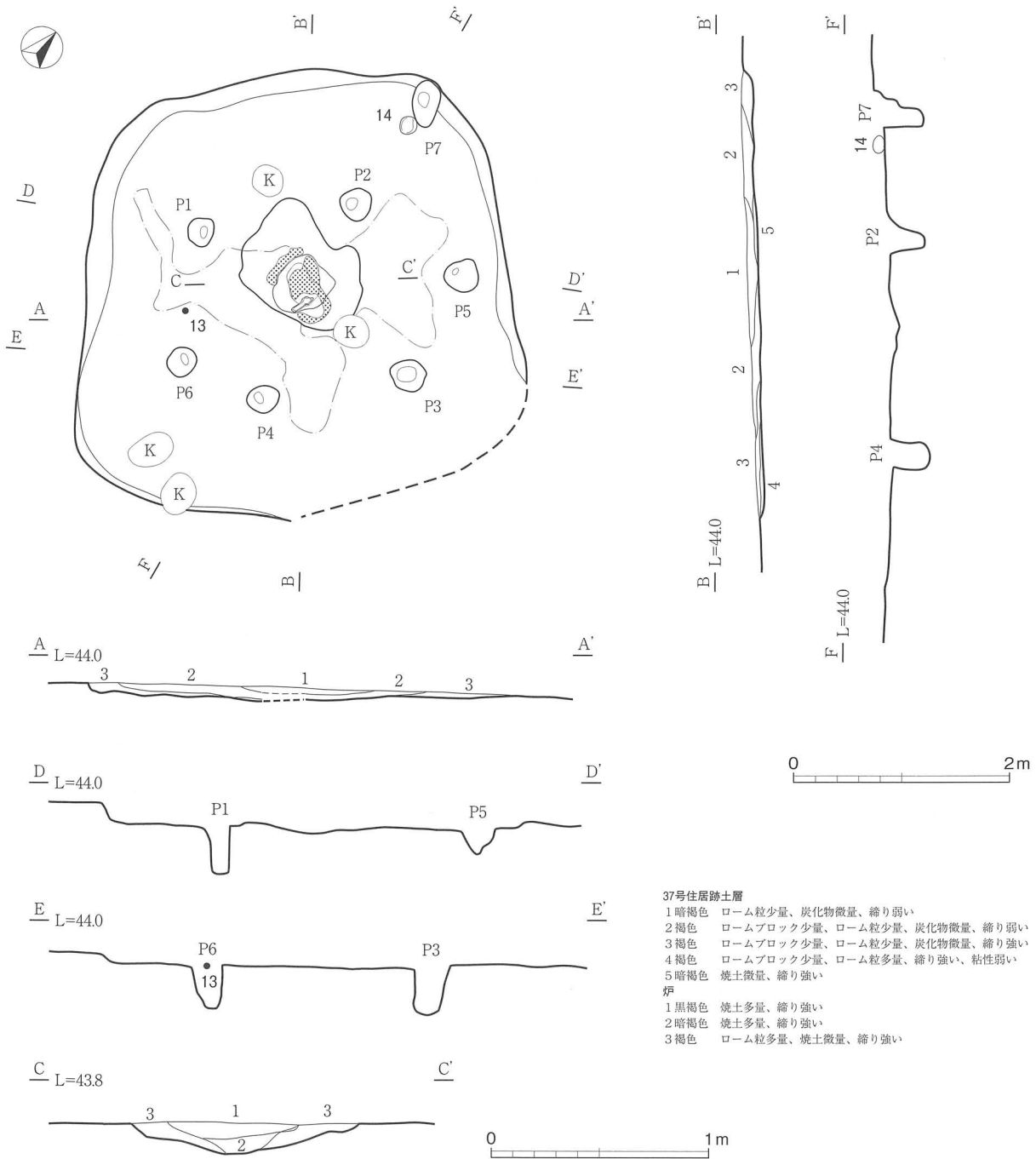


第32図 30号住居跡

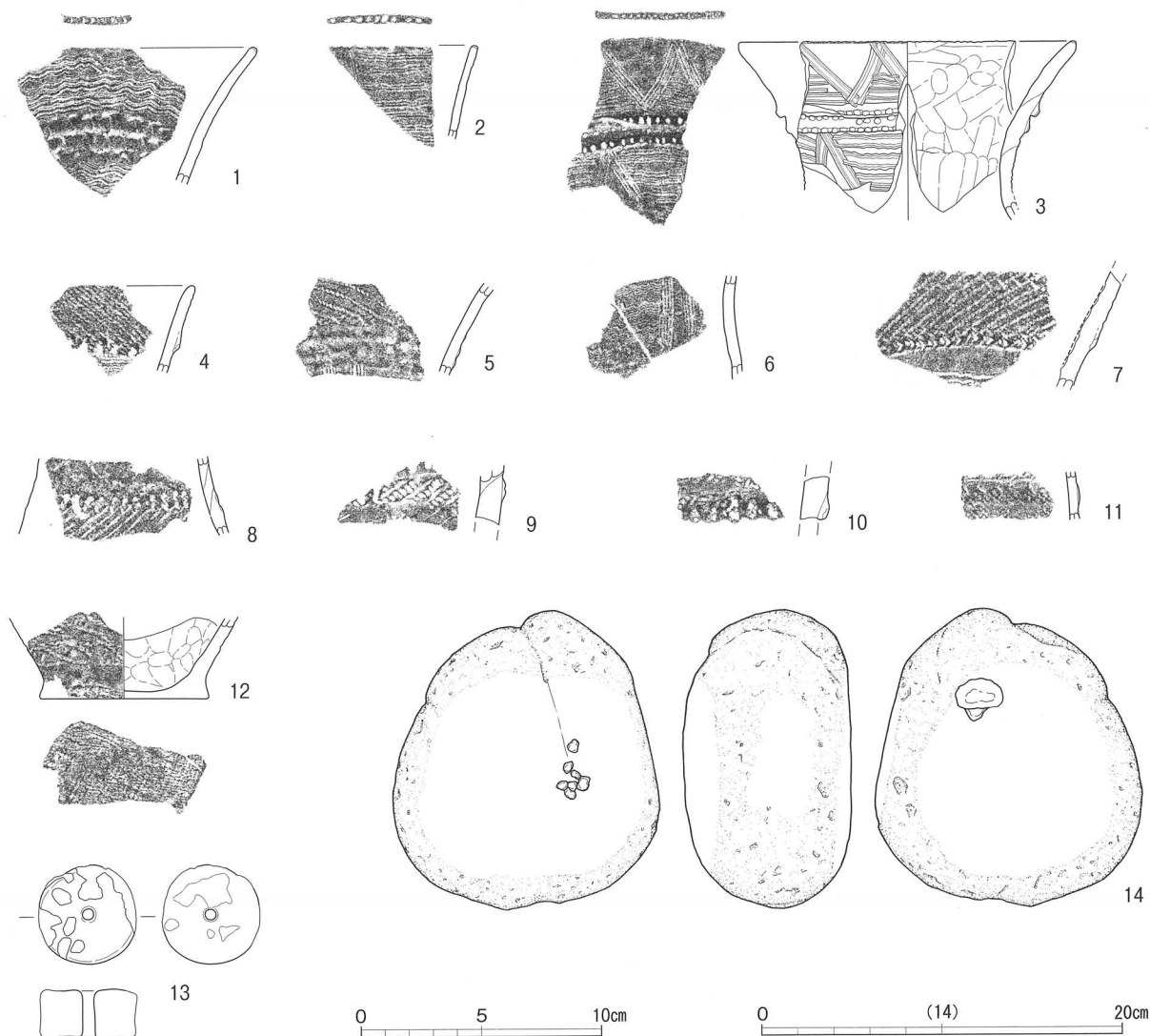


第33図 35号住居跡

柱穴であろう。P5・6は補助柱穴と推測するが、出入口ピットの可能性も残される。 炉 床面中央に位置し、土坑状に広く、やや深く掘り込まれている。不整形な棒状礫を炉石としている。 覆土 下層が褐色土、上層が暗褐色土で、自然堆積状を呈する。 遺物 少量の弥生土器片が出土している。P7脇の床面からは14の台石が出土している。遺物の出土量はやや少なく、大半が小破片で出土している。十王台式前半期の土器と二軒屋式系の土器が混在する。3は十王台式の範疇であるが、口縁部と頸部に櫛描鋸歯文を施文する。4・7・8は二軒屋式系の土器である。 所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。



第34図 37号住居跡



第35図 37号住居跡出土遺物

表12 37号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— — —	口唇部ヘラキザミ。頸部爪痕のある造り出しの隆帯2条→口縁部・頸部5本歯の横位波状文(上→下)。内面は横位のナデ。外面スス附着。	石英、多量の白色粒、赤色粒	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	覆土上層 十王台式
2	弥生土器 壺	— — —	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部4本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は横位のナデ。	石英	良好	外：灰黄褐色 内：橙色	覆土上層 十王台式
3	弥生土器 壺	(13.8) — —	口唇部ヘラキザミ。丸棒状工具による刺突のある厚い隆帯2条→口縁部・頸部山形文(反時計回り)→山形文間を一带おきに横位波状文で充填(上→下)。外面全面にスス附着。内面は縦・斜位のナデ。	石英	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄橙	覆土上層 十王台式
4	弥生土器 壺	— — —	口縁部下端に縄文端部を押捺→軸縄不明の附加条縄文(R・Z)、頸部6本歯の横位波状文。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石、赤色粒	普通	にぶい橙色	覆土上層
5	弥生土器 壺	— — —	頸部薄い押捺隆帯3条→口縁部附加条2種縄文(L+L)、頸部5本歯の縦位直線文。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ附着。	石英、角閃石	良好	外：にぶい褐色 内：黒褐色	覆土上層 十王台式

第IV章 A区の遺構と遺物

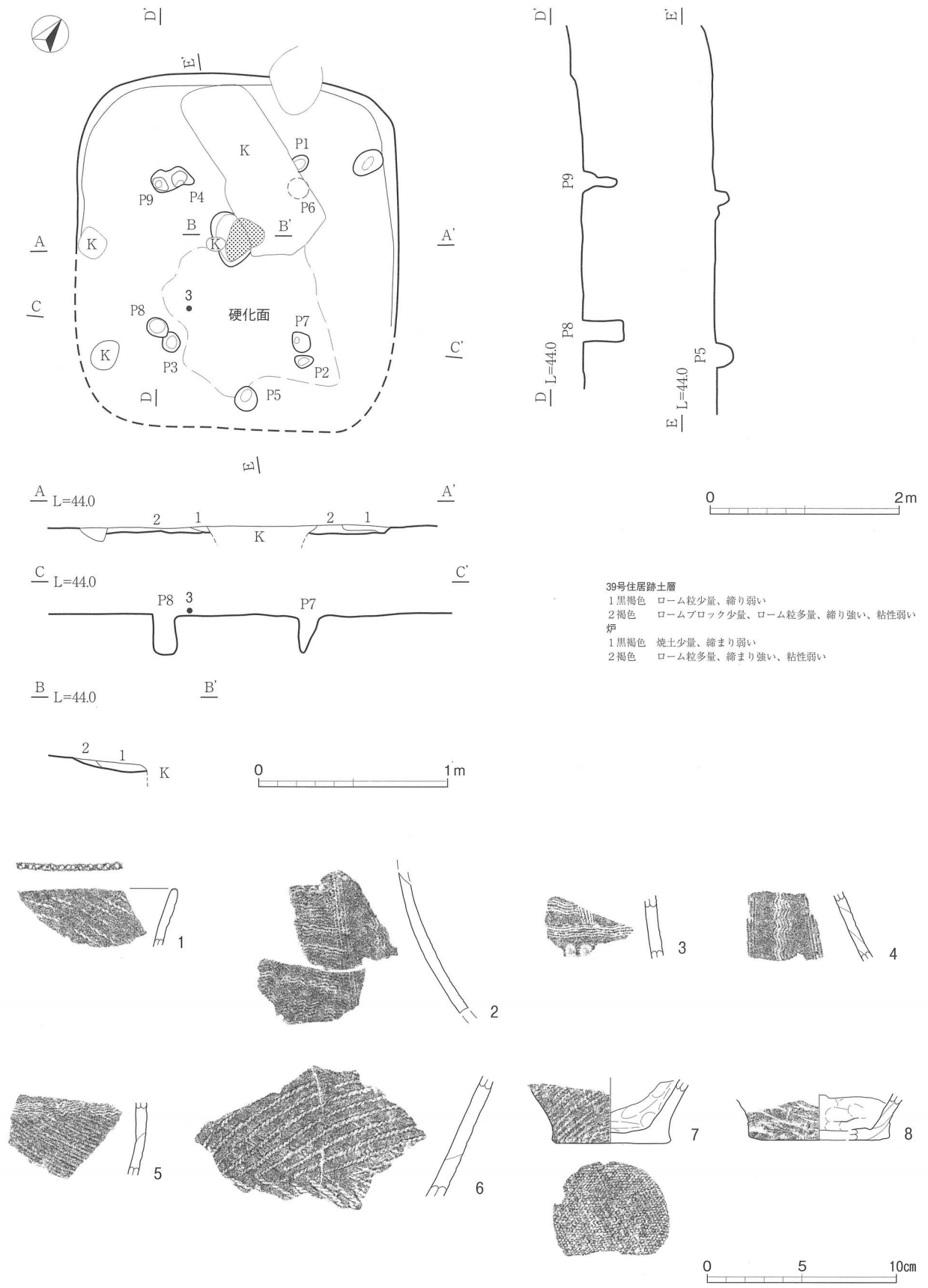
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
6	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S)→頸部5本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、赤色粒	不良	外：黒褐色 内：灰黄褐色	覆土上層 十王台式
7	弥生土器 壺	- - -	口縁部附加条1種縄文(LR+2Rカ)と軸縄不明の附加条縄文(R・S)を下から上へ施文。口縁部下端に同様の縄文原体端部を回転施文。頸部3本歯以上の横位波状文。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・長石、赤色粒	普通	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	覆土上層 二軒屋式
8	弥生土器 壺	- - -	頸部無文帯(横位のナデ)→頸部丸棒状工具による刺突列カ→胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S)。内面は横位のナデ。	多量の石英、長石、赤色粒	不良	外：にぶい黄色 内：にぶい黄褐色	P1 二軒屋式
9	弥生土器 壺	- - -	頸部附加条1種縄文(LR+2R)を回転施文した隆帯。隆帯脇は横位のナデで調整。内面は横位のナデ。	多量の石英・長石	良好	にぶい黄褐色	覆土上層
10	弥生土器 壺	- - -	頸部附加条1種縄文(LR+2R)を回転施文した厚い隆帯→隆帯下端に同様の原体端部を押捺。内面は斜位のナデ。	多量の石英・長石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	覆土上層
11	弥生土器 壺	- - -	頸部爪痕のある薄い押捺隆帯、隆帯上に頸部に附加条2種縄文(LR+2L)。内面は斜位のナデ。	石英、チャート、骨針	不良	にぶい橙色	覆土上層
12	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・Z)。底部布目痕。内面は斜位のナデ。	石英	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	覆土上層 十王台式
13	土製品 紡錘車	- - -	径(4.1)、高2.0、孔径(0.5)、重量[43.28]g。表裏面とも剥落著しいが、ナデ調整カ。	多量の石英・白色粒	不良	褐灰色	床面直上
14	石器 台石		大型礫の表・裏面や右側面に磨耗痕。磨耗範囲の一部に敲打痕とみられる凹穴。 石材：石英安山岩。長さ16.45cm・幅14.85cm・厚さ9.4cm・重さ3360.0g。				床面直上

39号住居跡(第36図)

位置 A区北部、M4グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北(主軸)方向は推定3.75m、東西方向は3.40mを測る。南壁はローム層上面では残存しないが、平面は不整隅丸長方形であろう。中央部は長形状の攪乱に破壊される。**主軸方位** N-35°-W **壁** 壁高は5cmを測り、やや傾斜する。**床** やや凹凸があり、炉の周りに不整形な硬化面が広がる。**ピット** P7~9が主柱穴、P5が出入口ピットであろう。P6は不明ながら、推定位置を破線で図示した。P1~4は深さ13cm~27cmと浅いが、P7~9とはほぼ同位置であり、古い主柱穴の可能性もある。**炉** 床面中央やや北寄りに位置し、浅い皿状を呈する。攪乱によって一部を失うが、被熱範囲が検出できた。**覆土** 自然堆積状を呈するが、ロームブロック・ローム粒がやや目立つ。**遺物** 少量の弥生土器片が出土している。遺物の出土量は少なく、小~中破片で出土している。十王台式後半期の土器が主体で明確な二軒屋式系の土器は出土していない。**所見** 住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。

表13 39号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部附加条2種縄文(LR+2L)。内面は口唇部付近横位のナデ、他は斜位のナデ。	石英、長石	普通	灰黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	頸部5本歯の縦位直線文・縦位波状文→横位波状文。外面薄いスス、全面コゲ付着。	石英	普通	外：にぶい黄褐色 内：黒色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	頸部5本歯の横位区画波状文、その直下にナデ(指頭圧痕)→頸部縦位直線文→横位波状文。内面は斜位のナデ。	石英、角閃石、赤色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	覆土下層 十王台式



第36図 39号住居跡・出土遺物

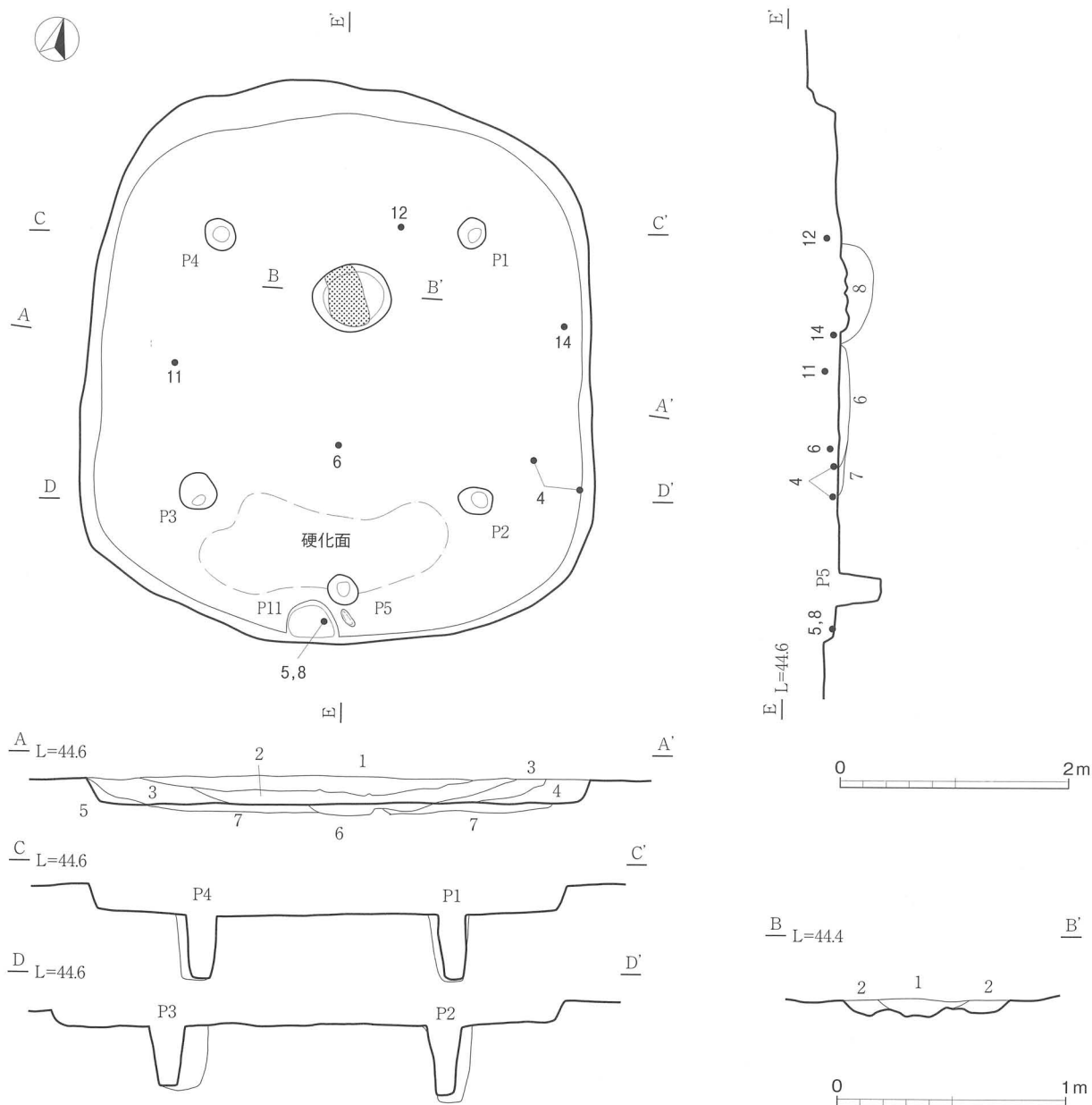
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 壺	- - -	頸部5本歯の縦位直線文、間に縦位波状文を挟む。内面は縦位のナデ。	石英	普通	外：灰黄褐色 内：黒色	十王台式
5	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条2種縄文(LR+2L)→頸胴界5本歯の横位区画波状文。内面は斜位のナデ。外面全面にスス、内面全面にコゲ付着。	石英	不良	灰黄褐色	十王台式
6	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条2種縄文(R+R)と軸縄不明の附加条縄文(R・Z：上→下)。内面は縦・斜位のナデ。	多量の石英・長石・骨針	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	- - 5.9	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S)。底部布目痕。内面は胴部が斜位のナデ、底部付近が横位のナデ。外面スス付着。	多量の石英、長石、角閃石	良好	外：にぶい黄褐色 内：明赤褐色	十王台式
8	弥生土器 壺	- - (7.4)	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・Z)。底部砂痕。内面は横位のナデ。	石英、長石、金雲母	不良	にぶい黄褐色	十王台式

44号住居跡（第37～39図）

位置 A区北部、K3～K4グリッドに位置する。 **規模と平面形** 南北（主軸）方向は5.00m、東西方向は4.52mを測る。平面形は隅丸長方形。 **主軸方位** N-15°-W **壁** 壁高は8～22cmを測り、傾斜する。 **床** 新旧2面あり、堅穴を拡張・更新している。新床面は平坦で、中央部は旧床面を埋め戻した貼床である。出入口部前面が帯状に硬化している。旧床面は中央部がやや窪んでいる。その他の部分で新しい床面とは明瞭な高低差がなかった。 **ピット** P1～4が主柱穴、P6～9（深さ34～46cm）が旧主柱穴、P5が出入口ピット、P10（深さ33cm）が古い出入口ピットであろう。いずれも柱痕は検出できず、抜取と思われる。P11は深さ5～8cmと浅い。 **炉** 床面中央部北寄りに位置し、被熱は顕著で、浅い皿状を呈する。 **覆土** 自然堆積状を呈する。1・2層の暗～黒褐色土と、3～5層の褐色土が明瞭に別れる。 **遺物** 3～5層から少量の弥生土器が出土している。P11の直上からは5・8の壺が出土し、P5脇の床面には棒状の自然礫が置かれていた。また、2層からは土師器の高坏（15）が出土し、注意される。遺物の出土量はやや多く、中～大破片の割合が高い。十王台式後半期の土器が主体である。7は縄文地の胴部に円形刺突文が施文される。8は撚り紐rをS巻きにした軸縄不明の附加条縄文と附加条2種縄文（附加2条）を非羽状構成で施文している。15は土師器高坏の口縁部片で赤彩が施されている。 **所見** 堅穴と柱穴の拡張・更新が明瞭で、上屋を含む建て替えと判断できる。旧堅穴の推定規模は南北4.0m×東西3.7mで、平面形は新堅穴と相似形と推定し、破線で図示した。炉を移設・更新した痕跡が全く認められないため、連続的な建て替えであろう。遺物の出土状況から、少なくとも1・2層は古墳前期以降の埋没と想定される。住居跡の構築および廃絶時期は、弥生時代後期後半に求められる。

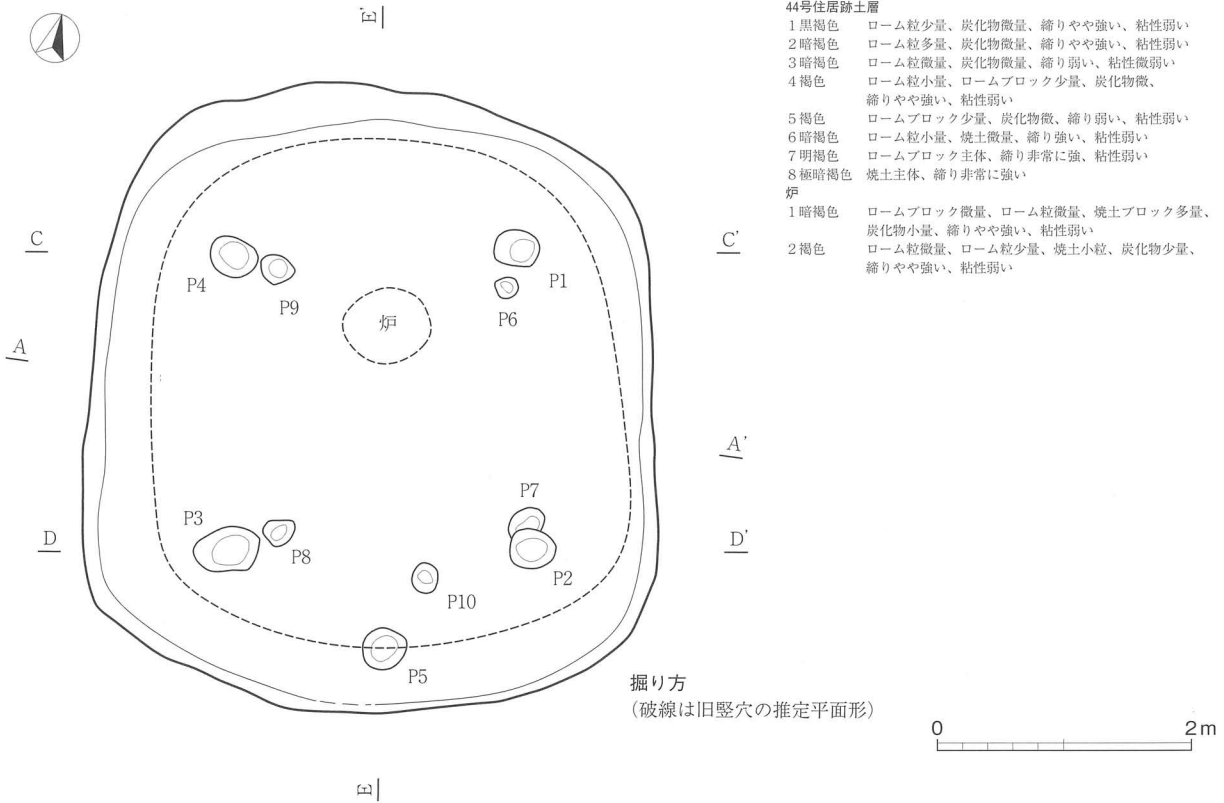
表14 44号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部縄文を回転施文カ。口縁部横位波状文(上→下)。内面は横位のナデ。	石英、金雲母、赤色粒	良好	浅黄橙色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部6本歯の横位波状文(上→下)→縦位直線文。内面は横位のナデ。	石英	良好	にぶい黄橙色	十王台式



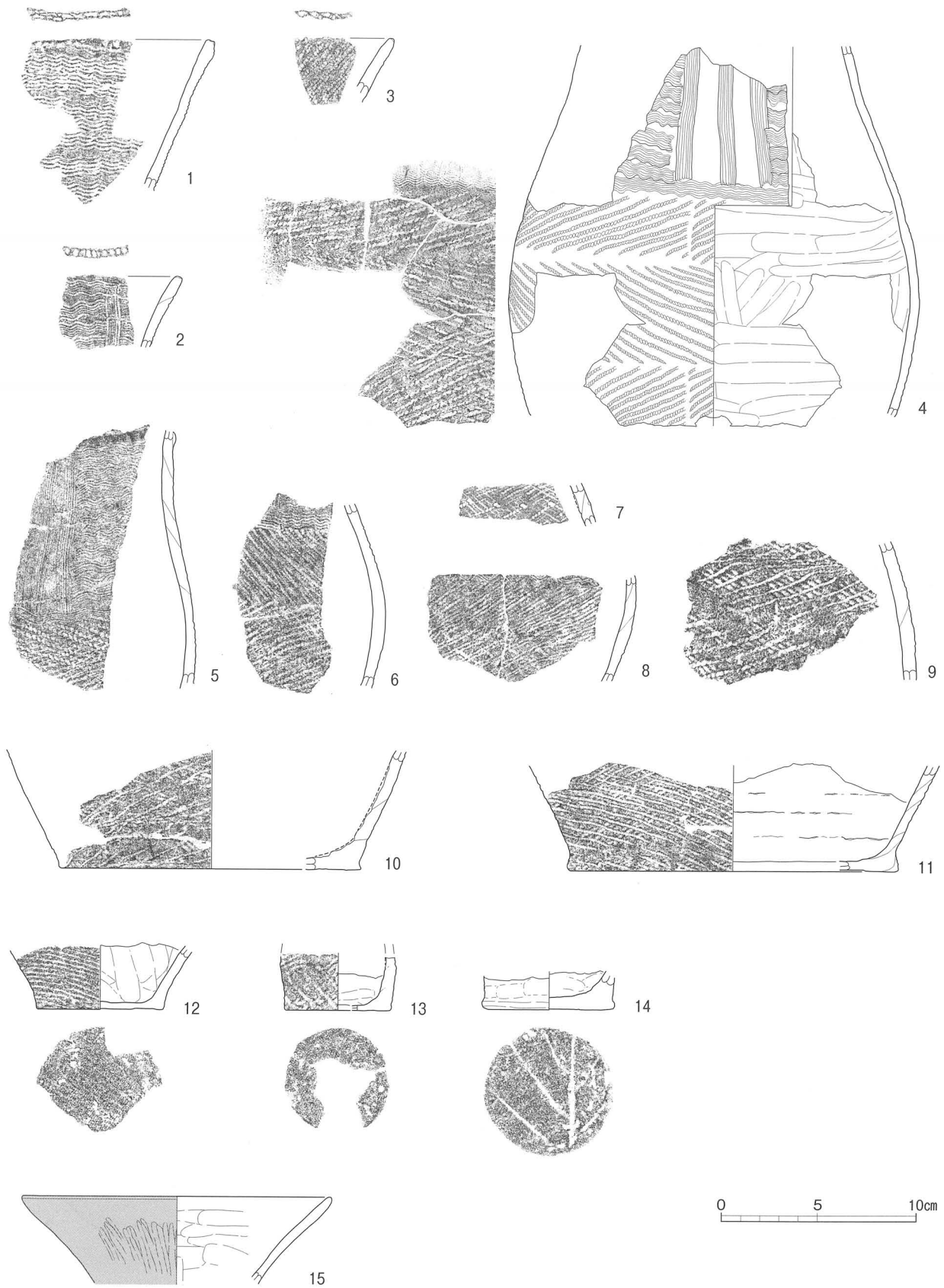
第 37 図 44号住居跡

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
3	弥生土器 壺	- - -	口唇部縄文原体によるキザミ。口縁部軸縄不明の附加条縄文 (R・S)。内面は横位のナデ。外面に濃いスス附着。	石英、角閃石	普通	にぶい黄橙色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文 (R・S、L・Z：下→上、反時計回り) → 頸胴界7本歯の横位区画波状文 → 頸部縦位直線文3条一単位 → 横位波状文 (左側：下→上、右側：上→下)。内面は頸部斜位のナデ、胴部が縦・斜位のナデ → 横位のナデ。緻密な胎土。外面頸部～胴上位に濃いスス、胴中位に薄いスス、内面胴下部に帯状のコゲ附着。	石英	良好	にぶい黄橙色	覆土下層 十王台式
5	弥生土器 壺	- - -	頸部押捺隆帯、胴部軸縄不明の附加条縄文 (L・Z、L・S：下→上) → 5本歯の縦位直線文 → 横位波状文 (下→上)、頸胴界横位区画波状文。内面は頸部が横・斜位のナデ、胴部が横位のナデ。外面頸胴界～頸部にスス、内面胴部に帯状のヨゴレ附着。	多量の石英・長石、骨針、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	覆土下層 十王台式



第 38 図 44号住居跡掘り方

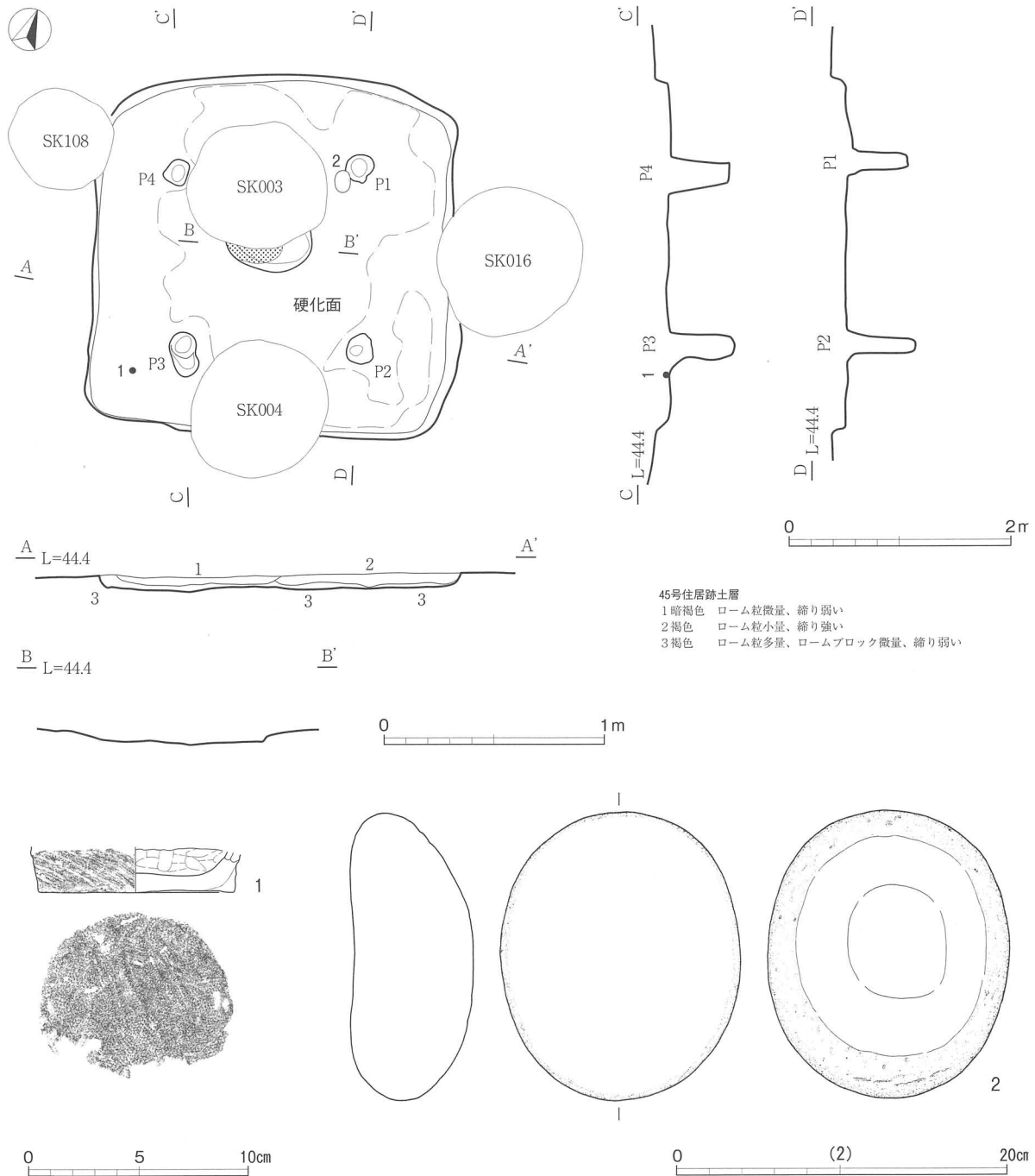
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
6	弥生土器壺	— — —	胴部軸縄不明の附加条縄文 (R - S、L - Z : 下→上)。頸部5本歯の縦位直線文・横位波状文、頸胴界横位区画波状文。内面は頸部縦位のナデ、他は器面荒れ。外面スス付着。	多量の石英・白色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：橙色	覆土中層 十王台式
7	弥生土器壺	— — —	頸部軸縄不明の附加条縄文 (R - S、L - Z) → 細い丸棒状工具による横位刺突文1条。内面は横位のナデ。	石英、チャート、角閃石、赤色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：浅黄褐色	
8	弥生土器壺	— — —	頸部軸縄不明の附加条縄文 (r - S)、附加条2種縄文 (R + 2 Lカ) の順に上→下へ施文→頸胴界5本歯以上の横位区画波状文。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	多量の石英・白色粒、角閃石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	覆土下層 十王台式
9	弥生土器壺	— — —	胴部附加条2種縄文 (R + R)。内面は斜位のナデ。	石英、長石、角閃石、多量の金雲母、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	十王台式
10	弥生土器壺	— — (15.5)	胴部附加条2種縄文 (R + Rカ)。底部砂痕。内面は剥落。	石英、長石、角閃石、金雲母、赤色粒	不良	明黄褐色	十王台式
11	弥生土器壺	— — (17.0)	胴部附加条2種縄文 (L R + 2 L、R L + 2 R : 下→上)。底部砂痕。内面は剥落。	石英、長石、角閃石、金雲母	普通	にぶい黄褐色	十王台式
12	弥生土器壺	— — (6.4)	胴部軸縄不明の附加条縄文 (L - Z)。底部布目痕。内面は斜位のナデ。外面被熱による赤色化、スス付着。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	覆土中層 十王台式
13	弥生土器壺	— — (5.5)	胴部附加条1種縄文 (R L + 2 L)、軸縄不明の附加条縄文 (R - S)。底部布目痕。内面は横位のナデ。	多量の石英・長石	普通	外：にぶい黄褐色 内：黒褐色	
14	弥生土器壺	— — 6.8	胴部軸縄不明の附加条縄文 (l - Zカ)。胴部下端横位のナデ。底部木葉痕。内面は横位のナデ。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	覆土下層
15	土師器壺カ	(15.8) — —	外面縦位のミガキ。内面は横位のナデ。外面赤彩。	石英、角閃石	普通	外：橙色 内：にぶい黄褐色	



第39图 44号住居跡出土遺物

45号住居跡 (第40図)

位置 A区北部、K4グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北(主軸)方向は3.32m、東西方向は3.41mを測る。平面は隅丸正方形を呈する。3・4・16・108号土坑に壊されている。**主軸方位** N-20°-W
壁 壁高は13cmを測り、やや傾斜する。**床** 中央部が硬化している。**ピット** P1~4が支柱穴である。P1・2・4では直径15cm前後の柱痕を断面で検出した。**炉** 床面中央に位置し、3号土坑によって北半分を失っている。浅い皿状を呈し、被熱は顕著である。**覆土** 自然堆積状を呈する。**遺物** P1



第40図 45号住居跡・出土遺物

脇の床面には2の台石が置かれており、P3付近の床面直上からは弥生土器の底部破片(1)が出土している。遺物の出土量は非常に少なく、大半が小破片で出土している。十王台式を主体とする。所見 住居跡の構築および廃絶時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

表15 45号住居跡出土遺物観察表

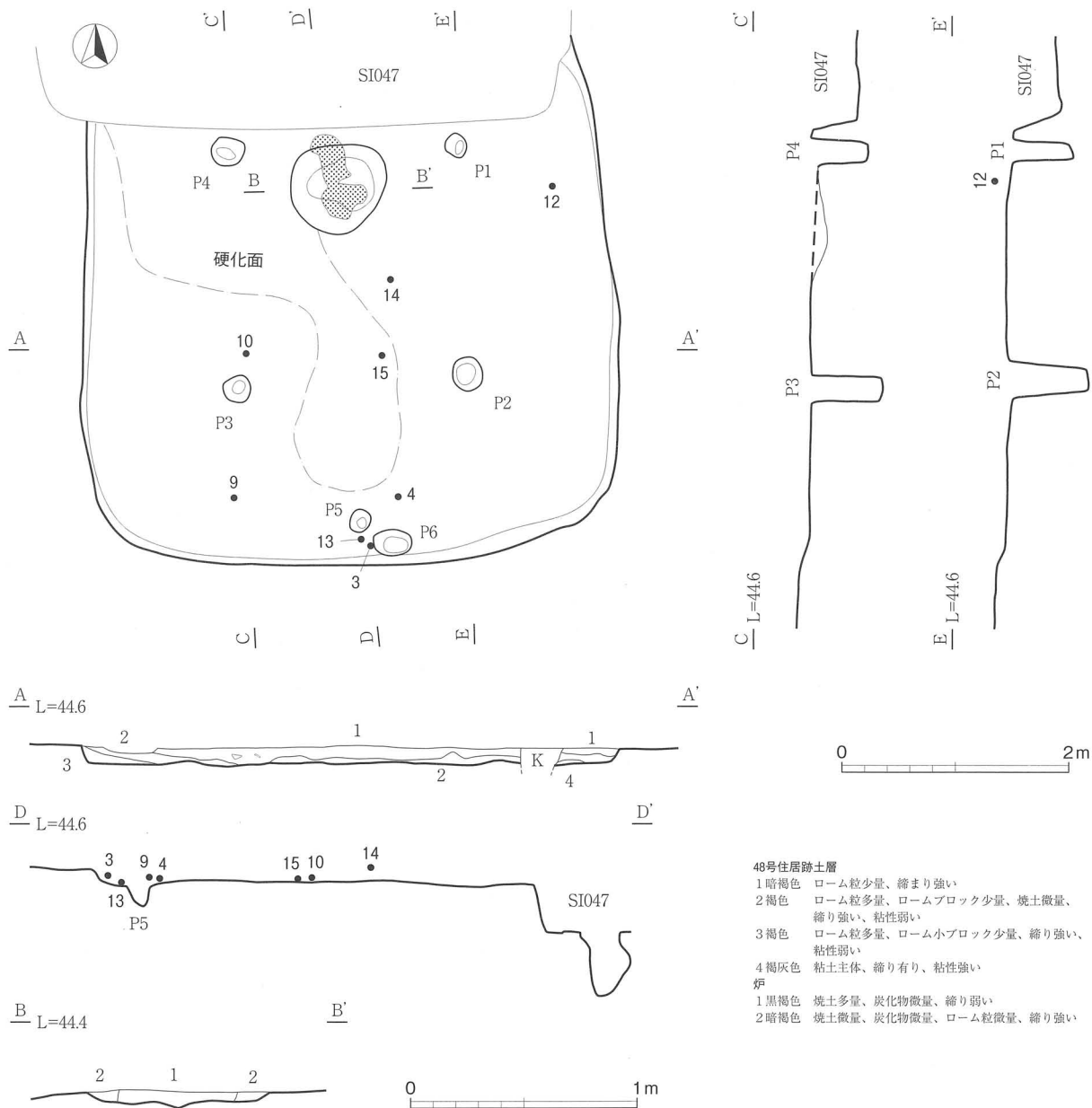
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	— — 9.0	胴部軸繩不明の附加条縄文(R-Z)。底部布目痕。内面は横・斜位のナデ。緻密な胎土。	石英、角閃石、金雲母	良好	にぶい橙色	覆土下層 十王台式
2	石器台石		大型礫の表・裏面に磨耗痕。裏面は顕著な磨耗により中央部分が浅く窪む。石材：砂岩。長さ17.5cm・幅14.7cm・厚さ7.5cm・重さ2719.1g。				床面直上

48号住居跡(第41・42図)

位置 A区北部、L4グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北(主軸)方向は推定5.00m、東西方向は北側で4.46m、南側で4.76mを測る。平面は隅丸方形を呈する。47号住居跡および18・19号土坑によって、北側を壊されている。**主軸方位** N-3°-W **壁** 壁高は10~15cmを測り、やや傾斜する。**床** ほぼ平坦で、P5から堅穴北西部にかけて帯状に硬化している。**ピット** P1~4が支柱穴、P5が出入口ピットであろう。P1とP3では、それぞれ直径11cm・13cmの柱痕を断面で検出した。P6(深さ26cm)はいわゆる貯蔵穴であろう。**炉** 床面中央部北寄りに位置し、浅い皿状に掘り込まれ、被熱は著しい。**覆土** 2・3層はローム粒・ブロックがやや多く、人為的埋没の可能性がある。また、4層は白色粘土主体である。**遺物** 堅穴中央の覆土下層からは土製紡錘車(15)が、P5脇の床面直上からは弥生土器の高坏(13)が出土している。また、堅穴中央部の1層からは土師器(14)が出土している。遺物の出土量はやや多く、中~大破片の割合が高い。十王台式後半期の土器が主体である。明確な二軒屋式系の土器は確認できない。13は無文の弥生系高坏、14は外面に刷毛目を施す土師器(壺カ)である。15はほぼ完形の土製紡錘車である。**所見** 古墳時代前期の土師器が、埋没最終過程の時期を示している。住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。

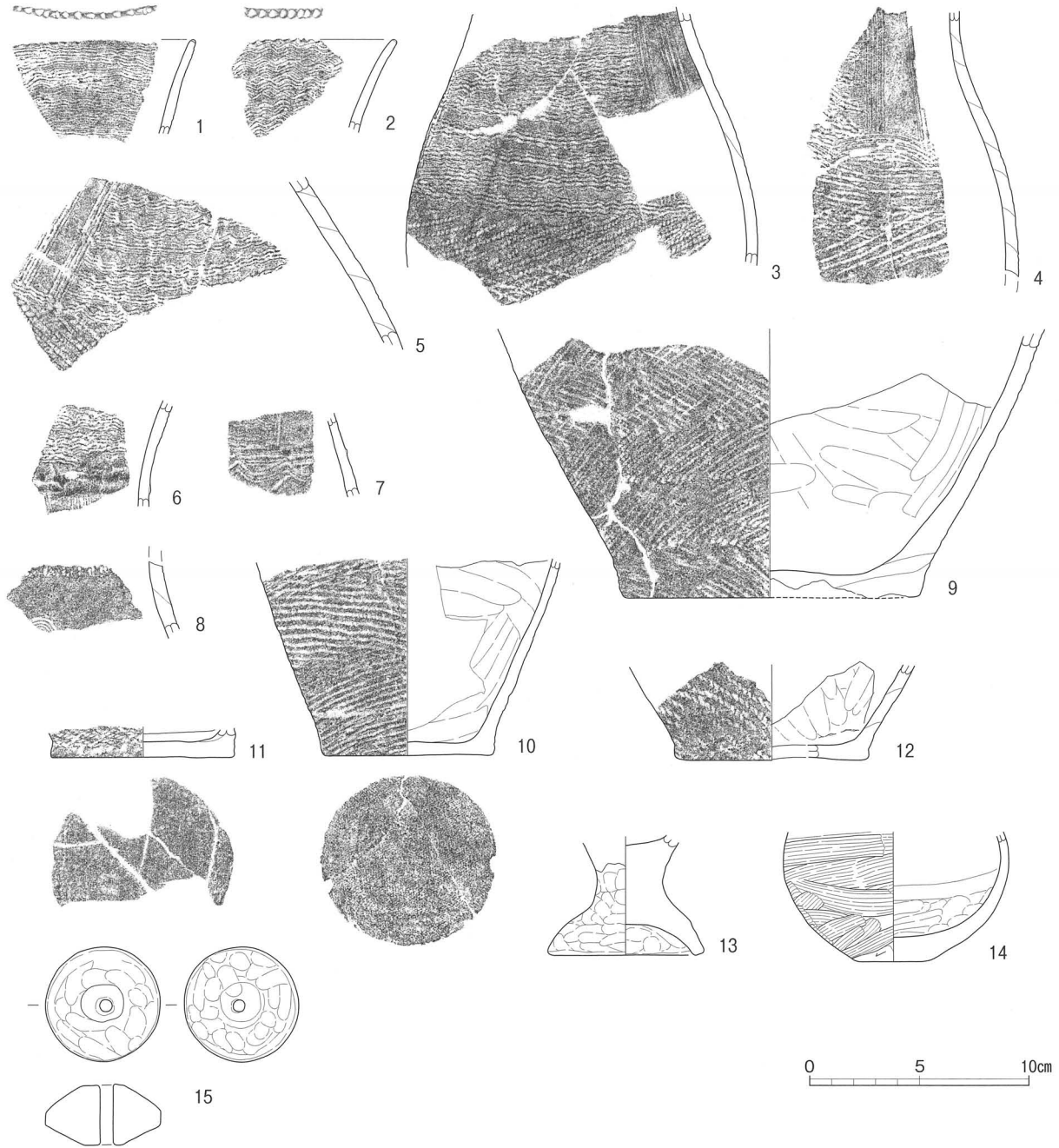
表16 48号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	— — —	口唇部角棒状工具によるキザミ。口縁部4本歯の横位波状文(上→下)。内面は口唇部付近が横位の丁寧なナデ、他は斜位の丁寧なナデ。外面スス付着。	石英	良好	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器壺	— — —	口唇部角棒状工具によるキザミ。口縁部4本歯の横位波状文(概ね上→下)。内面は横位の丁寧なナデ。	石英、骨針	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	十王台式
3	弥生土器壺	— — —	胴部軸繩不明の附加条縄文(R-S、L-Z：下→上、反時計回りカ)→頸胴界4本歯の横位区画波状文→縦位直線文3条一単位→横位波状文(下→上)。内面は頸部下位~胴部上位が縦・斜位の丁寧なナデ、頸部上位が横位の丁寧なナデ。外面は全体に濃いスス付着。	石英、骨針	良好	にぶい赤褐色	覆土上層 十王台式
4	弥生土器壺	— — —	胴部軸繩不明の附加条縄文(R-S、L-Z：下→上)→頸胴界5本歯の下開き連弧文(時計回り)→縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は頸部中位が横位のナデ。頸部下位~胴部が縦・斜位のナデ。外面にスス、内面の頸胴界に帯状のヨゴレ付着。	石英、角閃石、金雲母、多量の白色粒	良好	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	覆土中層 十王台式
5	弥生土器壺	— — —	胴部軸繩不明の附加条縄文(L-Z)→頸部5本歯の縦位直線文→頸胴界横位区画波状文→頸部横位波状文(上→下)。内面は縦・斜位のナデ。	多量の石英・長石、赤色粒	良好	外：明赤褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式



第 41 図 48号住居跡

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
6	弥生土器 壺	- - -	頸部薄い押捺隆帯3条→縦位直線文→、口縁部横位波状文(下→上、反時計回りカ)。内面は斜位のナデ。	石英、長石、角閃石	普通	外：暗褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S)、頸胴界4本歯の横位直線文→上開きの連弧文、頸部縦位直線文→横位波状文→円形貼付文。内面はナデ。外面被熱による赤色化。	石英、多量の白色粒、赤色粒	不良	外：淡赤橙色 内：浅黄色	十王台式
8	弥生土器 壺	- - -	頸部4本歯以上の横位波状文、単節縄文(RLカ)。内面は横位のナデ。	石英、赤色粒	普通	にぶい黄橙色	
9	弥生土器 壺	- - 13.5	胴部附加条1種縄文(RL+2L、LR+2R:下→上)。底部痕跡は不明。内面は縦・横位のナデ、底面付近は剥落。	石英、角閃石、金雲母、骨針	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	



第42図 48号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
10	弥生土器 壺	— — 7.7	胴部軸繩不明の附加条繩文 (R - S、L - Z:下→上、反時計回り)。底部布目痕。内面は横位・斜位のナデ。外面全体にまばらにスス附着。内面の胴部下位に带状のコゲ、他は全体的にヨゴレ附着。	石英、長石、角閃石	普通	外: にぶい黄褐色 内: 黒色	覆土中層 十王台式
11	弥生土器 壺	— — (8.3)	胴部軸繩不明の附加条繩文 (R - Z)。底部木葉痕。内面はナデカ。内面コゲ附着。	多量の石英・白色粒、赤色粒	普通	外: にぶい黄褐色 内: にぶい黄褐色	十王台式カ
12	弥生土器 壺	— — (8.8)	胴部軸繩不明の附加条繩文 (L - Z)。底部砂痕。内面は斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ附着。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	外: 灰黄色 内: 灰黄褐色	覆土上層 十王台式

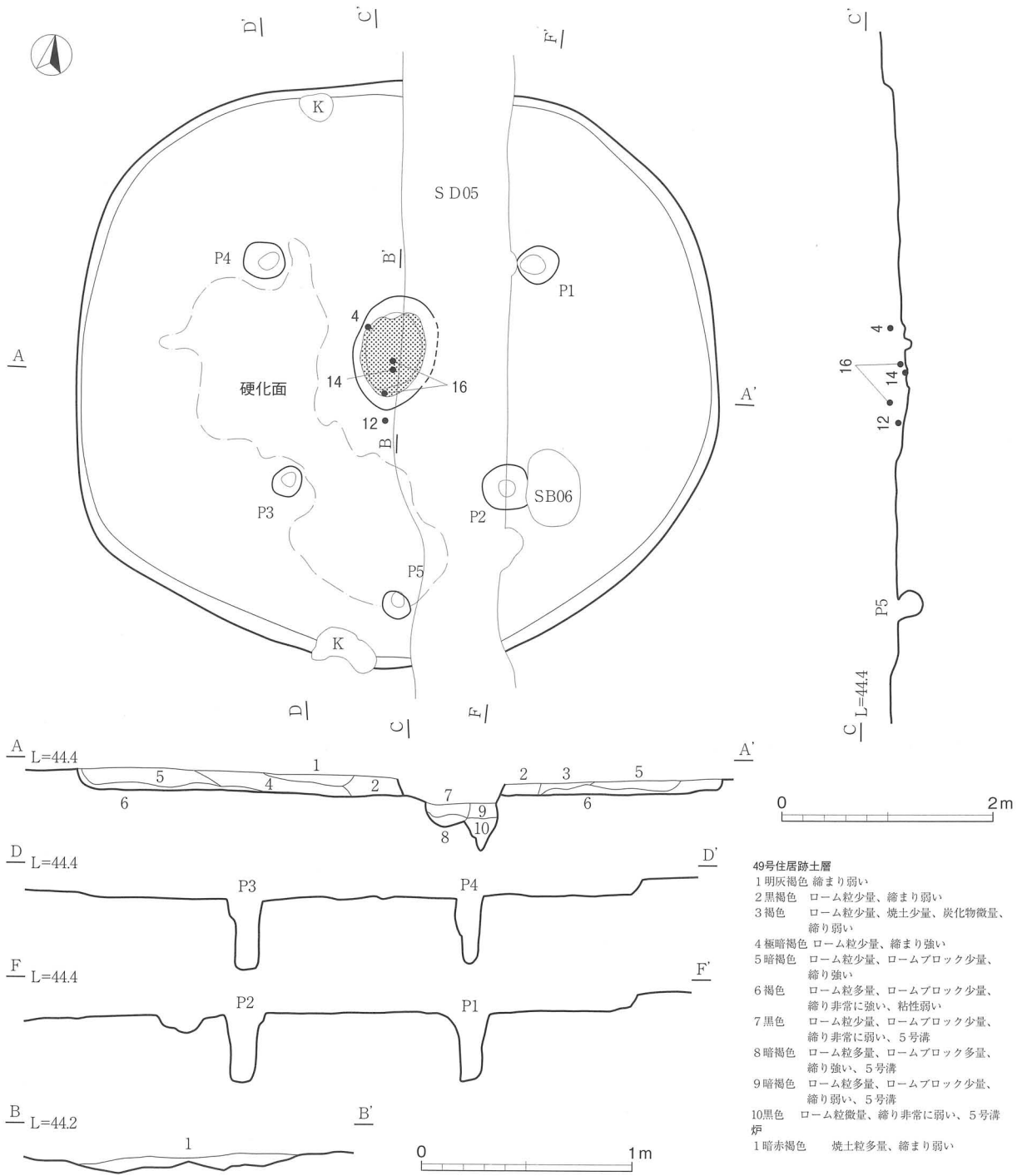
図版番号	種別	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
13	弥生土器 高坏	— — 6.6	脚部横位のナデ（概ね反時計回り）。脚端部木葉痕。内面は脚部が横・斜位のナデ。	石英、角閃石、金雲母、骨針、赤色粒	良好	にぶい黄橙色	床面直上
14	土師器 壺カ	— — 3.25	外面はヘラケズリ→横・斜位のハケ。内面は横位のナデ。外面スス付着。	多量の石英、角閃石、骨針	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい赤褐色	覆土上層
15	土製品 紡錘車		径5.2、高2.7、孔径0.55、重70.08g。表裏面ともナデ調整。片側穿孔。	石英、角閃石、骨針	良好	にぶい黄橙色	覆土中層

49号住居跡（第43・44図）

位置 A区北部、L4グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北方向は5.58m、東西方向は6.06mを測る。平面形は楕円形。中世以降の5号溝が中央部を縦断し、多数のピットが重複する。また、古代の6号掘立柱建物跡の柱穴が重複している。**主軸方位** N-10°-W **壁** 壁高は5～20cmを測り、傾斜する。床ほぼ平坦である。P4からP5にかけて硬化している。**ピット** P1～4が支柱穴、P5が出入口ピットであろう。**炉** 床面中央に位置し、浅い皿状に掘り込まれ、火床面の被熱は顕著である。**覆土** 自然堆積状である**遺物** 遺物の出土量はやや多く、中～大破片の割合が高い。4・12・14・15・16はいずれも炉の直上にあたる覆土中から出土した。十王台式後半期の土器が主体で5・9・10・12は櫛描文・縄文原体・胎土の特徴から二軒屋式系と考えられる。**所見** 住居跡の構築および廃絶時期は、弥生時代後期後半と考えられる。住居規模は、比較的大きいが、建替えの痕跡は全く認められない。

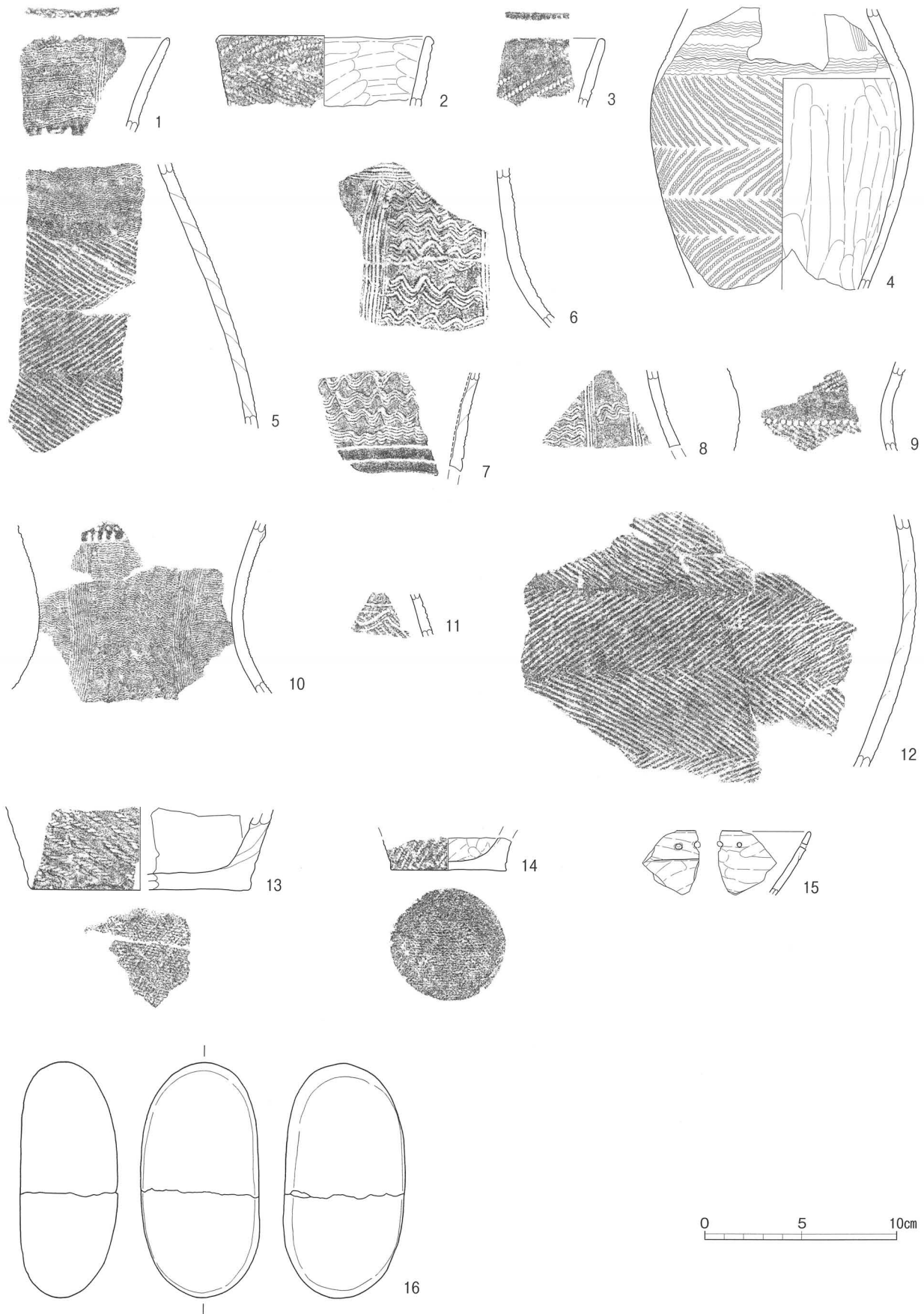
表17 49号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— — —	口唇部ヘラキザミ。頸部薄い押捺隆帯→口縁部6本歯の縦位直線文→横位波状文→(下→上)。内面は口唇部付近横位のナデ、以下は斜位のナデ。外面スス付着。	石英	良好	外：褐色 内：にぶい橙色	十王台式
2	弥生土器 壺	— — —	口縁部軸縄不明の附加条縄文（R・S、L・Z：上→下）。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英	良好	黒褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	— — —	口唇部キザミ。口縁部軸縄不明の附加条縄文（R・S）。内面は斜位のナデ。	石英	良好	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	— — —	胴部軸縄不明の附加条縄文（R・S、L・Z：下→上）→頸部5本歯の横位区画波状文（反時計回り）→縦位直線文、横位波状文。内面は縦位のナデ。外面胴部にスス付着。	石英、角閃石	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
5	弥生土器 壺	— — —	胴部附加条1種縄文（RL+2L、LR+2R：下→上）。頸部10本歯の横位波状文。内面は斜位のナデ。	多量の石英・長石	良好	にぶい黄褐色	
6	弥生土器 壺	— — —	頸部5本歯の縦位直線文→横位波状文（上→下）→頸部横位直線文。内面は横・斜位のナデ。	石英、金雲母、骨針	不良	赤褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	— — —	頸部無文の造り出し隆帯→口縁部4本歯の横位波状文。内面は剥落。	石英、長石、角閃石、金雲母	良好	にぶい黄褐色	十王台式
8	弥生土器 壺	— — —	頸部4本歯の縦位直線文→横位波状文（上→下）。内面は横位のナデ。	石英、金雲母、赤色粒	普通	黒褐色	十王台式
9	弥生土器 壺	— — —	頸部軸縄不明の附加条縄文（R・S）、胴部軸縄不明の附加条縄文（L・Z）→頸部丸棒状工具による横位の刺突文1条。頸部に無文帯（横・斜位のナデ）。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ヨグレ付着。	多量の石英・白色粒、角閃石	普通	黒褐色	二軒屋式カ



第43図 49号住居跡

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	弥生土器 壺	- - -	口頸界に交互刺突文を有する隆帯→頸部10本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。	多量の石英・長石	良好	にぶい黄褐色	
11	弥生土器 壺	- - -	胴部軸繩不明の附加条繩文(L-Z)→頸胴界2本同時施文具による横位直線文→上開きの連瓦文。内面は縦位のナデ。外面スス付着。	石英	普通	外: 黒褐色 内: 灰黄褐色	十玉台式

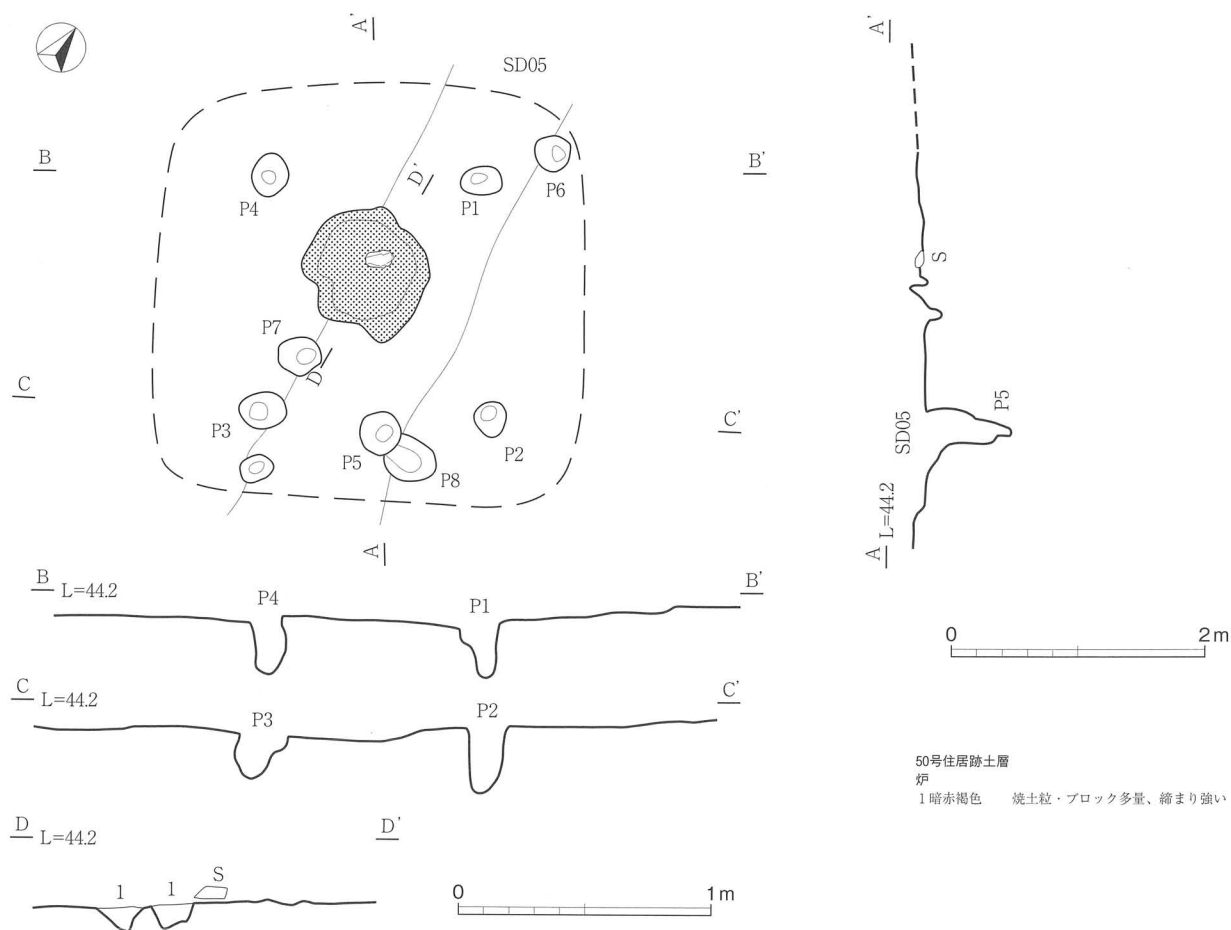


第44図 49号住居跡出土遺物

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
12	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文 (R - S、L - Z : 上→下)。内面は横・斜位のナデ。外面被熱による赤色化、内面胴部中に带状のコゲ付着。	多量の石英	普通	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄褐色	二軒屋式
13	弥生土器壺	- - (11.4)	胴部軸縄不明の附加条縄文 (R - Z)。底部布目痕。内面は剥落。	多量の石英・白色粒、角閃石	普通	にぶい黄橙色	十王台式
14	弥生土器壺	- - 6.0	胴部軸縄不明の附加条縄文 (R - S)。底部布目痕。内面は斜位のナデ。	石英、角閃石	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
15	弥生土器高坏	- - -	折り返し口縁。外面・内面ともに横・斜位のナデ。補修孔2箇所。	石英、金雲母	普通	にぶい橙色	
16	石器磨石		自然礫の表面全体に磨耗痕。被熱により表面全体が赤褐色に変色。石材：石英安山岩。長さ12.3cm・幅6.3cm・厚さ5.05cm・重さ599.7g。				

50号住居跡 (第45図)

位置 A区北部、L4グリッドに位置する。規模と平面形 炉と柱穴が確認されている。竪穴の規模は残存していないため不明であるが、45号住居跡を参考にして竪穴の推定破線を示した。中央を5号溝が縦断し、壊されている。主軸方位 N-37°-W 壁 残存していない。床 - ピット P1~4が主柱穴、P5が出入口ピットであろう。P6・7 (深さ39cm・34cm)は壁柱穴・補助柱穴であろうか。P8 (深

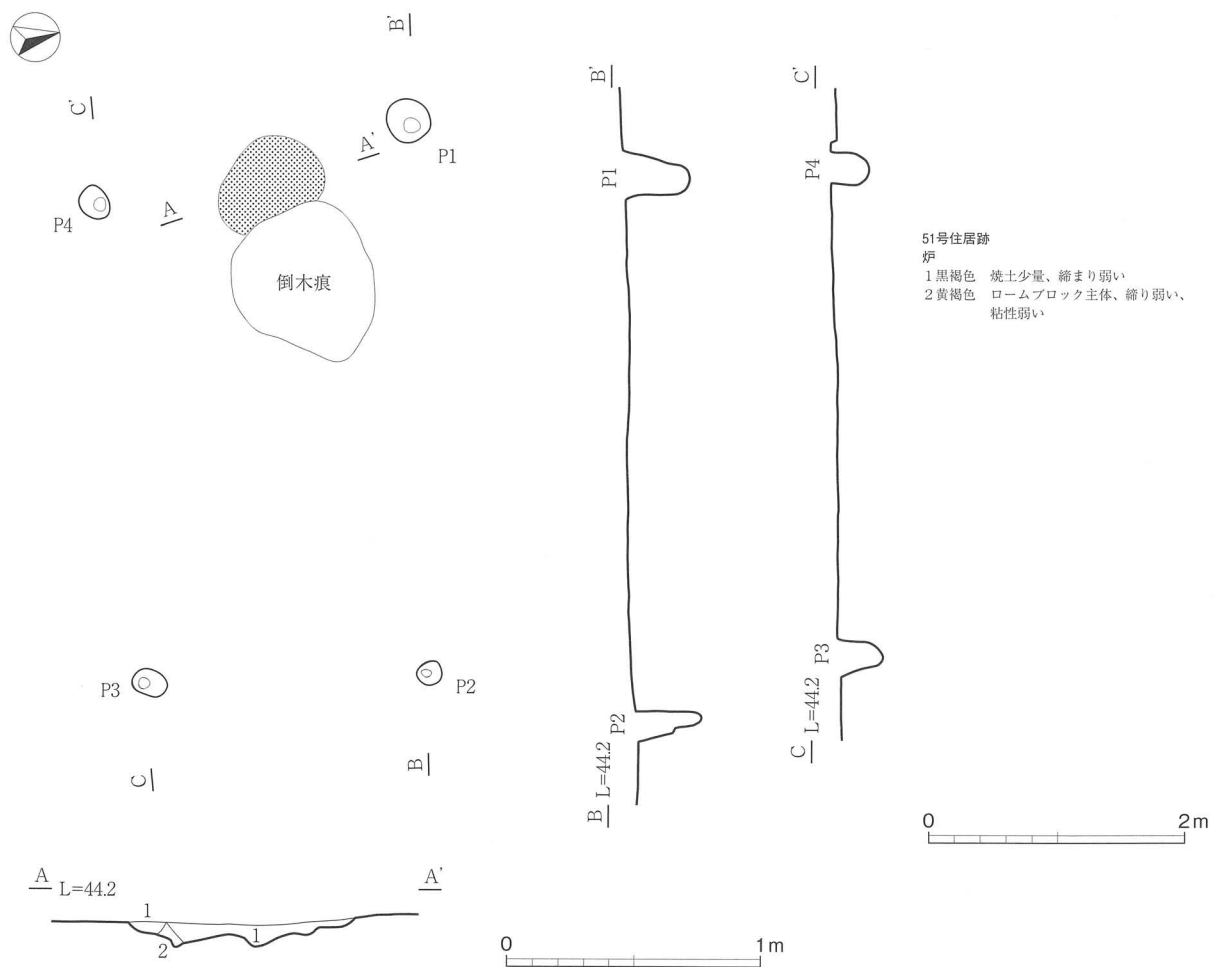


第45図 50号住居跡

さ 23cm) は貯蔵穴の可能性ある。 炉 床面中央に位置し、掘りこみはなく、被熱は強い。火床面からわずかに浮いた位置で、炉石が出土している。 覆土 - 遺物 柱穴から弥生土器の小片がわずかに出土している。 所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

51号住居跡 (第46図)

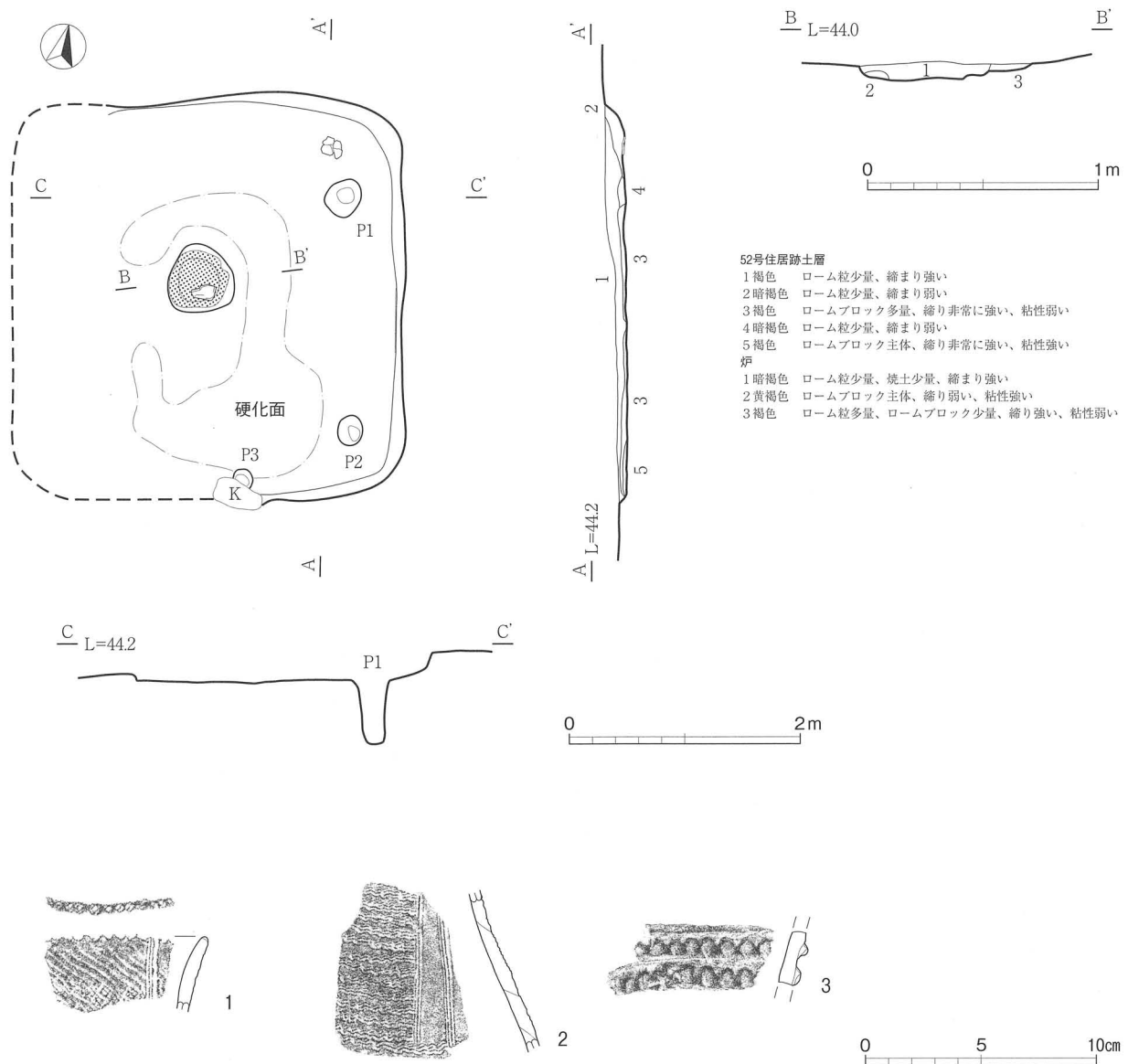
位置 A区北部、M4グリッドに位置する。 規模と平面形 竪穴は残存せず、主柱穴も確定できないため、規模・平面形は不明である。 主軸方位 - 壁 - 床 - ピット P1~4は、主柱穴の可能性あるが断定はできない。 炉 浅い皿状に掘り込まれ、被熱はやや強い。 覆土 - 遺物 - 所見 所属時期を判断する資料に欠けるが、炉や柱穴内の堆積土の状況から、弥生時代に帰属する可能性がある。



第46図 51号住居跡

52号住居跡（第47図）

位置 A区北部、K4グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は3.55mを測り、東西方向は約3.4mと推定する。平面は不整隅丸正方形であろう。主軸方位 N-15°-W 壁 壁高は6~16cmを測り、傾斜する。床 南壁際にのみ貼床がある。炉の周囲を除いた中央部が硬化し、周辺よりもわずかに高い。ピット P1・2が支柱穴、P3が出入口ピットであろう。支柱穴は北東隅と南東隅に寄った位置にある。炉 床面中央に浅い皿状の炉があり、被熱は著しい。片岩系の自然礫を炉石としている。覆土 自然堆積状を呈する。遺物 遺物の出土量は少なく、大半が小破片で出土している。北東隅の覆土下層から、弥生土器の大型破片が出土している。十王台式主体で1は縦位の櫛描直線文と附加条1種縄文によるやや異質な文様構成を呈する。所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。



第47図 52号住居跡・出土遺物

表 18 52号住居跡出土遺物観察表

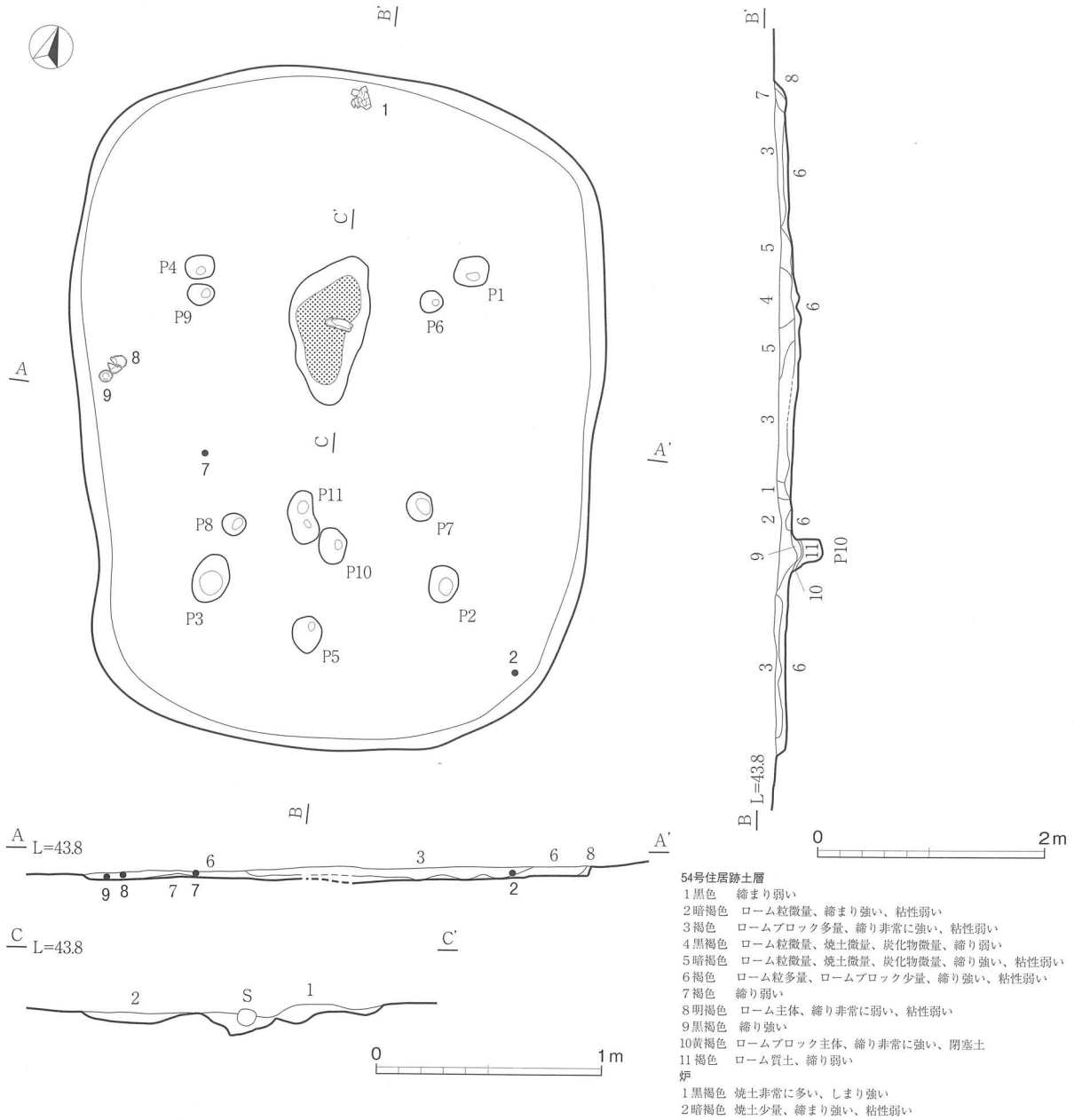
図版番号	種別	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	— — —	口唇部縄文原体によるキザミ。口縁部附加条1種縄文(R L + L)、軸縄不明の附加条縄文(R - S)を下→上へ施文→2本同時施文具による縦位の直線文。内面は横位のナデ。	石英	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	
2	弥生土器壺	— — —	頸胴界3本歯の横位区画波状文→頸部縦位直線文→横位波状文。内面は縦位のナデ。外面スス、内面ヨグレ付着。	石英	良好	にぶい黄褐色	十王台式
3	弥生土器壺	— — —	頸部爪痕のある厚い押捺隆帯。内面は横位のナデ。	石英、長石	普通	外：暗赤褐色 内：にぶい赤褐色	十王台式

54号住居跡（第48・49図、巻頭写真図版3）

位置 A区北部、L5グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北（主軸）方向は6.11m、東西方向は4.76mを測る。平面は不整長楕円形と不整隅丸長方形の中間形状を呈し、いわゆる小判形に近い。**主軸方位** N - 18° - Wを指し、北北西に近い。**壁** 壁高は6～10cmを測り、傾斜する。**床** ほぼ平坦な地床で、中央部がわずかに窪み、明瞭な硬化面は確認できない。**ピット** P1～4が新支柱穴、P6～9が旧支柱穴、P5が新出入口ピット、P10・11が旧出入口ピットと判断する。P1では、直径19cmの暗褐色土の柱痕とローム質土の根固めを明瞭に検出した。また、P6・9・10ではローム質土による閉塞あるいは貼床を確認している。P2～4は抜取と判断したが、P2底面では自然円礫を根石としていた。**炉** 床面中央北寄りに位置する。浅く掘り込まれ、被熱は著しい。平面は不整形で規模がやや大きく、同一地点で2時期の利用が考えられる。中央部には自然角礫の炉石が設置されているが、火床面からわずかに浮いている。**覆土** 自然堆積状を呈するが、6層はローム粒・ブロックが多く、人為埋没の可能性がある。炉とP10の上では埋没の進行が遅く、特に4・5層については埋没過程においても炉の直上で被熱行為が継続したような状況が想定できる。**遺物** 北壁中央直下の床面において、1の略完形個体土器が横位で出土している。8・9弥生土器の底部が、西壁際から出土している。遺物の出土量は多く、中～大破片の割合が高い。十王台式後半

表 19 54号住居跡出土遺物観察表

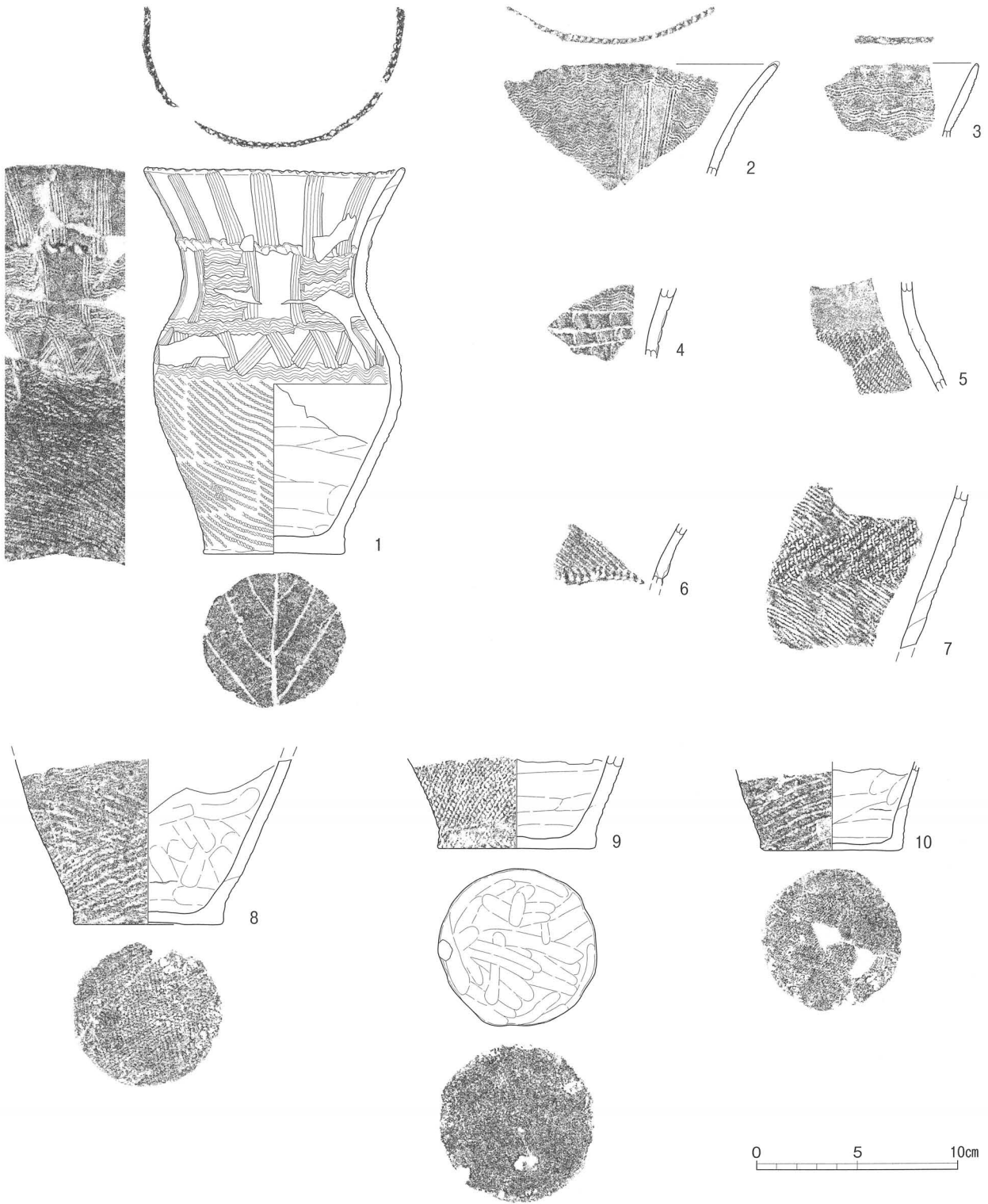
図版番号	種別	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	(12.7) 19.4 7.0	口唇部ヘラキザミ。頸部押捺隆帯1条→口縁部5～6本歯の縦位直線文、胴部附加条1種縄文(R L + 2 L)と軸縄不明の附加条縄文(R - Z)を下から上、反時計回りに施文→肩部・頸胴界に1条ずつ横位区画波状文→肩部山形文(反時計回り)、頸部縦位直線文2・3条×5単位→頸部横位波状文5条(下→上)。底部木葉痕。内面は横位・斜位のナデ。外面肩部より上に濃いスス付着、肩部以下と底部周縁に薄いスス付着。内面口縁部全体と肩部に帯状のヨグレ付着。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	灰黄褐色	
2	弥生土器壺	— — —	口唇部ヘラキザミ、小突起。口縁部縦位直線文3条一単位→横位波状文(下→上)、口縁部最上段に横位区画波状文1条。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英	良好	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
3	弥生土器壺	— — —	口唇部ヘラキザミ。口縁部5本歯の横位波状文。内面は横位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・白色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：浅黄色	十王台式
4	弥生土器壺	— — —	頸部3条のヘラ描き細沈線で横位区画→区画内を帯状刺突文で充填→口縁部5本歯の横位波状文。内面は横位のナデ。	石英	普通	外：にぶい黄色 内：灰黄褐色	十王台式
5	弥生土器壺	— — —	頸部無文帯(横・斜位のナデ)。胴部単節縄文(R L)を横位施文。内面は斜位のナデ。頸部上位が縦位のナデ、頸部下位が横位のナデ。	石英、骨針	良好	にぶい黄褐色	
6	弥生土器壺	— — —	口縁部附加条1種縄文(R L + 2 L)→口縁部下端を同様の原体で押捺カ。内面は横位のナデ。外面スス、内面ヨグレ付着。	石英	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	二軒屋式系



第48図 54号住居跡

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	弥生土器 壺	- - -	胴部無節縄文(R)と前々段附加条1種縄文(附加条1種R L + rを左に燃った原体)を交互に下から上へ施文。内面は縦位のナデ。	多量の石英・長石、角閃石	良好	外：にぶい黄橙 内：明赤褐色	
8	弥生土器 壺	- - 7.4	胴部軸縄不明の附加条縄文(L - S、L - Z：下→上)。底部布目痕。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面コゲ付着。	多量の石英・長石、角閃石、金雲母、骨針、赤色粒	良好	にぶい黄褐色	十王台式
9	弥生土器 壺	- - 7.9	胴部附加条1種縄文(L R + 2 R：下→上)。底部ナデ調整。内面は横位のナデ。内面全面にヨゴレ付着。	多量の石英・長石	良好	にぶい黄橙	二軒屋式系
10	弥生土器 壺	- - 7.0	胴部附加条2種縄文(R L + 2 R、L R + 2 L：下→上)。底部布目痕。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面コゲ付着。	石英、長石、角閃石	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式

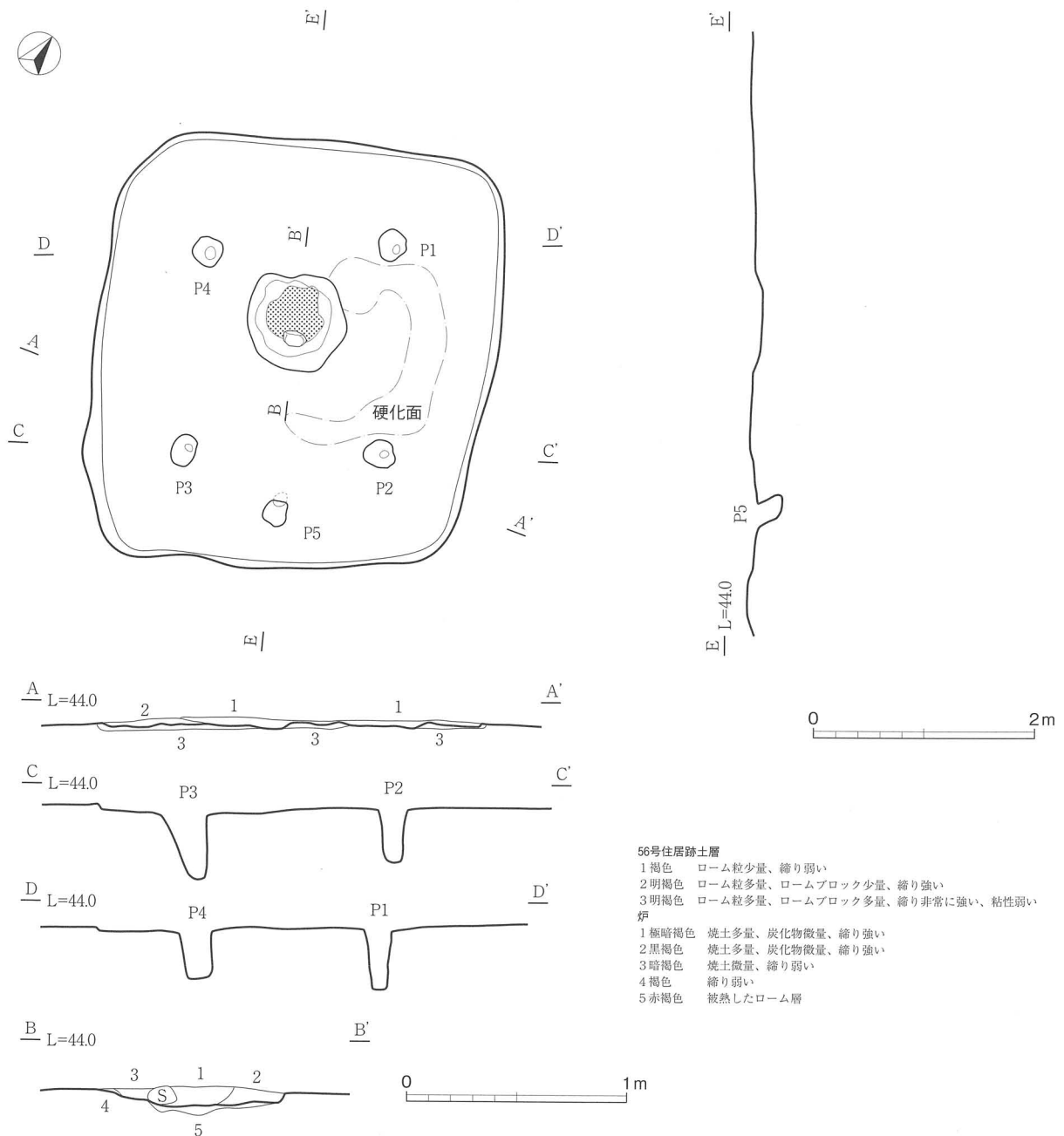
期の土器が主体だが、1は十王台式と二軒屋式の要素が混在する。5は頸部に無文帯を有し、胴部に単節R L縄文を施す。7は無節Rと前々段附加条1種の特種な縄文原体を使用している。9は底部圧痕がなく、ナデによって調整されている。 所見 支柱穴配置は、P9を起点にして拡張・更新している。竪穴の拡張も十分想定できるが、その痕跡は見いだせなかった。住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。



第49図 54号住居跡出土遺物

56号住居跡（第50図）

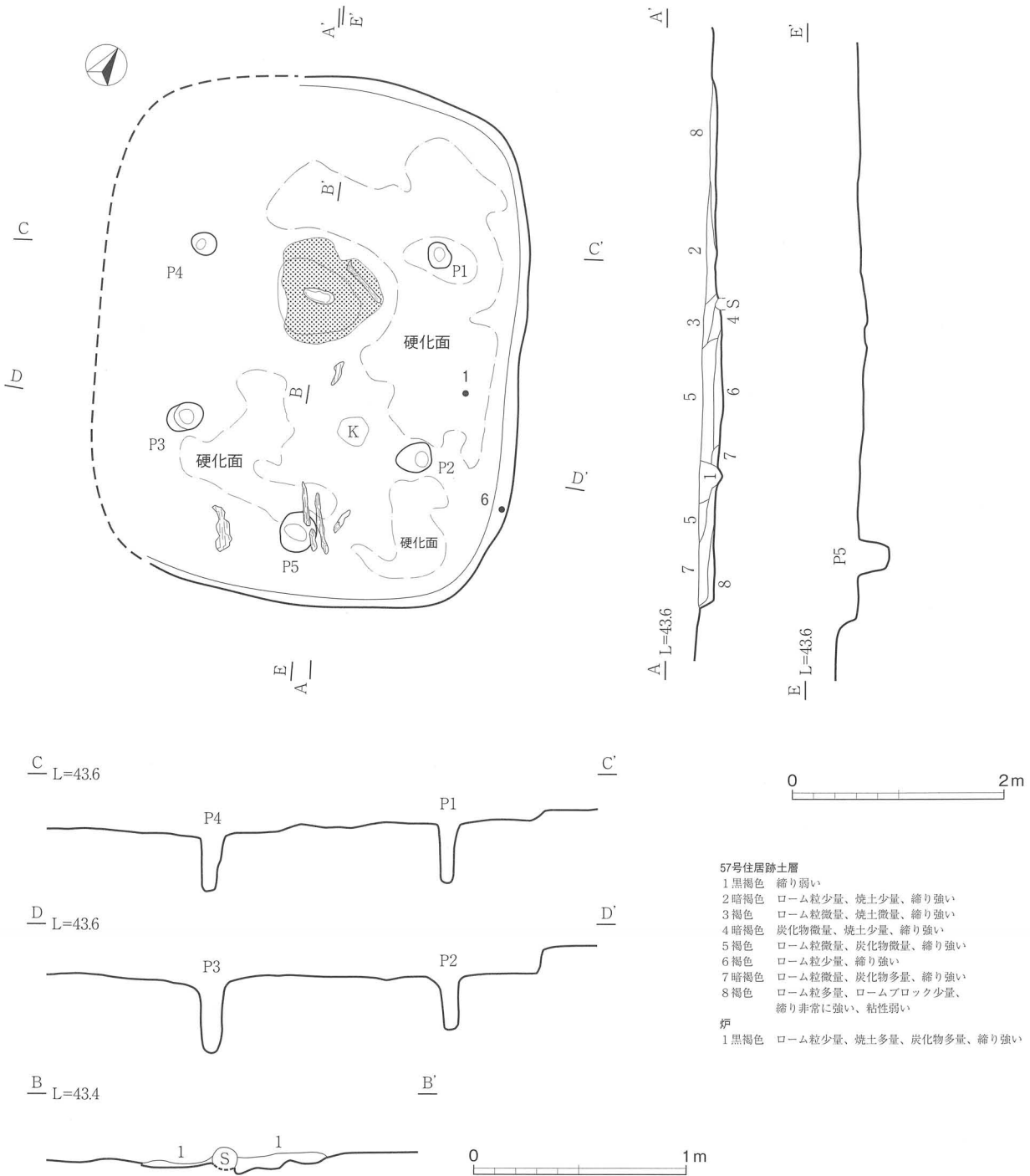
位置 A区北部、L5グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は3.95m、東西方向は3.67mを測る。平面は不整隅丸長方形形状を呈する。主軸方位 N-33°-W 壁 壁高は4cmを測り、やや傾斜する。床 やや凹凸があり、炉の周りが馬蹄状に硬化する。薄い貼床を伴う。ピット P1~4が主柱穴、P5が出入口ピットと考えられる。P2では、直径10~15cmの軟弱な黒褐色土の柱痕を検出したが、ほかは抜取と判断された。P5は斜めに穿たれている。炉 床面中央やや北寄りに構築され、砂岩の自然円礫が炉石として設置されていた。覆土 自然堆積であろう。遺物 覆土中からごく少量の弥生土器が出土したものの、図示できる遺物はなかった。所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。



第50図 56号住居跡

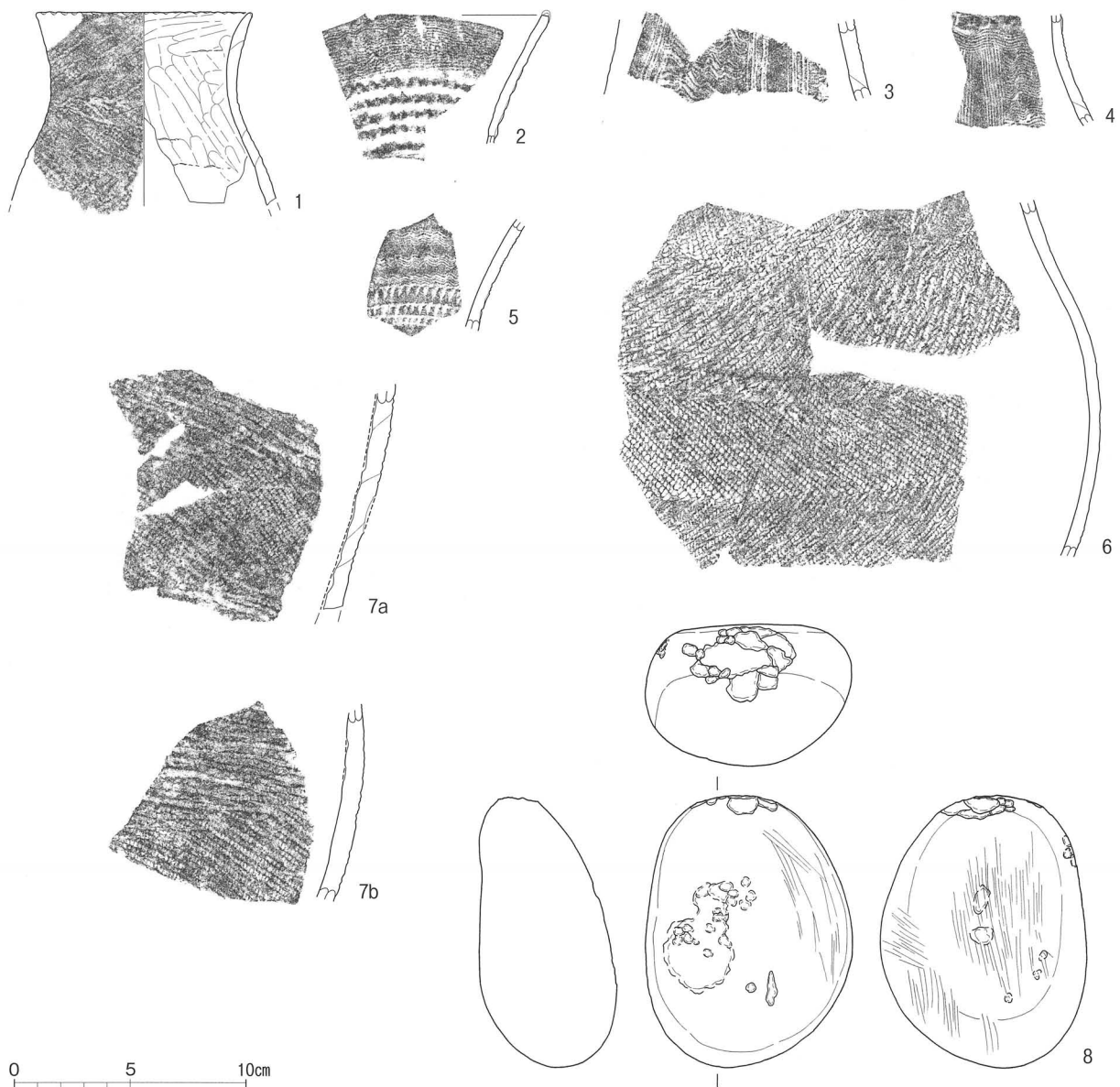
57号住居跡 (第51・52図)

位置 A区北部、L6グリッドに位置する。規模と平面形 西壁側は攪乱によって壊されている。南北(主軸)方向は5.02mを測り、東西方向は約4.0mと推定する。平面は不整隅丸長方形であろう。主軸方位 N-32°-W 壁 壁高は3~26cmを測り、傾斜する。床 やや凹凸があり、床面の東側から南側にかけて硬化する。ただし、主柱穴周辺と炉の南側はやや軟弱である。ピット P1~4を主柱穴、P5を出



第51図 57号住居跡

入口ピットと判断する。柱痕と根固めを明瞭に検出できたピットはない。 炉 床面中央やや北寄りに位置し、規模がやや大きい。被熱は顕著で、中央には砂岩の自然円礫が炉石として設置されている。ただし、石の被熱は弱い。 覆土 8層は人為埋没の可能性がある。7層は炭化材が含まれる層である。2～4層の堆積状況は、炉直上の埋没が最も遅かったことを示しており、埋没過程にあっても、炉が使用され続けていた可能性がある。 遺物 遺物の出土量はやや少なく、小～中破片の割合が高い。南東隅の覆土上層から6の胴部の大型破片が、東壁近くの竪穴中央部からは1の口縁部破片が出土している。十王台式土器が主体である。5は頸部に带状刺突文が3条施文される。6・7は附加2条の附加条1種縄文が施文されている。竪穴南側と炉の南側および炉内から、床面から少し浮いた位置で炭化材を検出している。 所見 8層埋没後に上屋が焼失したものと想定する。住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。



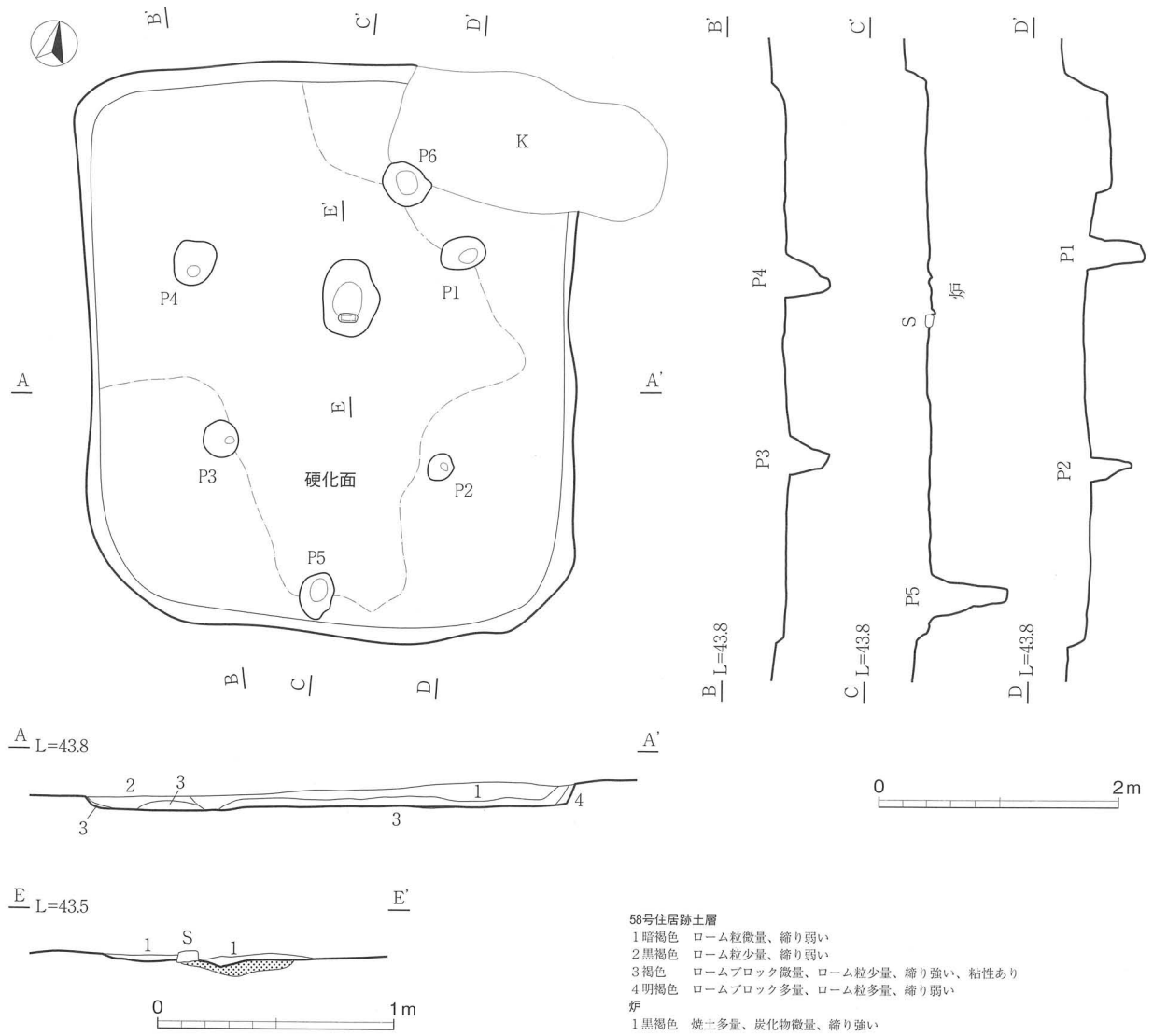
第52図 57号住居跡出土遺物

表 20 57号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	(9.2) — —	口唇部ヘラキザミ。口縁～胴部附加条1種縄文(RL+L、LR+R:下→上)→口縁部ヨコナデ。内面は頸～胴部斜位のナデ→口縁部ヨコナデ。外面にスス付着。	石英、角閃石	普通	外:黒褐色 内:灰黄褐色	
2	弥生土器壺	— — —	口唇部小突起。頸部押捺隆帯5条→口縁部5本歯の横位波状文(下→上)、頸部横位波状文。内面は口唇部付近横位のナデ、他は斜位のナデ。	石英、長石、多量の金雲母	良好	外:にぶい黄色 内:暗灰黄色	十王台式
3	弥生土器壺	— — —	頸部5本歯の縦位直線文2条一単位→横位波状文(下→上)。内面は斜位のナデ。	石英、角閃石、金雲母、赤色粒	普通	外:にぶい黄橙色 内:灰黄褐色	十王台式
4	弥生土器壺	— — —	頸部爪痕のある押捺隆帯→7本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)頸部隆帯直下の横位波状文。内面は縦位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石、赤色粒	普通	灰黄褐色	十王台式
5	弥生土器壺	— — —	頸部横位のヘラ描き細沈線→帯状刺突文3条→口縁部5本歯の横位波状文。内面は横位のナデ。	石英	良好	外:黒褐色 内:にぶい黄橙色	十王台式
6	弥生土器壺	— — —	頸～胴部附加条1種縄文(RL+2L、LR+2L:下→上、反時計回り)。内面は頸部が横位のナデ、胴部が縦・斜位のナデ。	石英、角閃石、骨針、赤色粒	良好	外:にぶい黄橙色 内:灰黄褐色	
7	弥生土器壺	— — —	胴部附加条1種縄文(RL+2L:上→下)を横・斜位施文。内面は器面荒れ、剥落。外面被熱による剥落、内面コゲ付着。	多量の石英・長石	普通	外:にぶい黄褐色 内:灰黄褐色	
8	石器磨石類		表・裏面(敲→磨)、上面(磨→敲)。自然礫の表面全体に磨耗痕や擦痕。表・裏面や上面に敲打痕。下面に鉄分沈着。石材:石英安山岩。長さ11.7cm・幅8.9cm・厚さ6.1cm・重さ877.0g。				

58号住居跡(第53・54図)

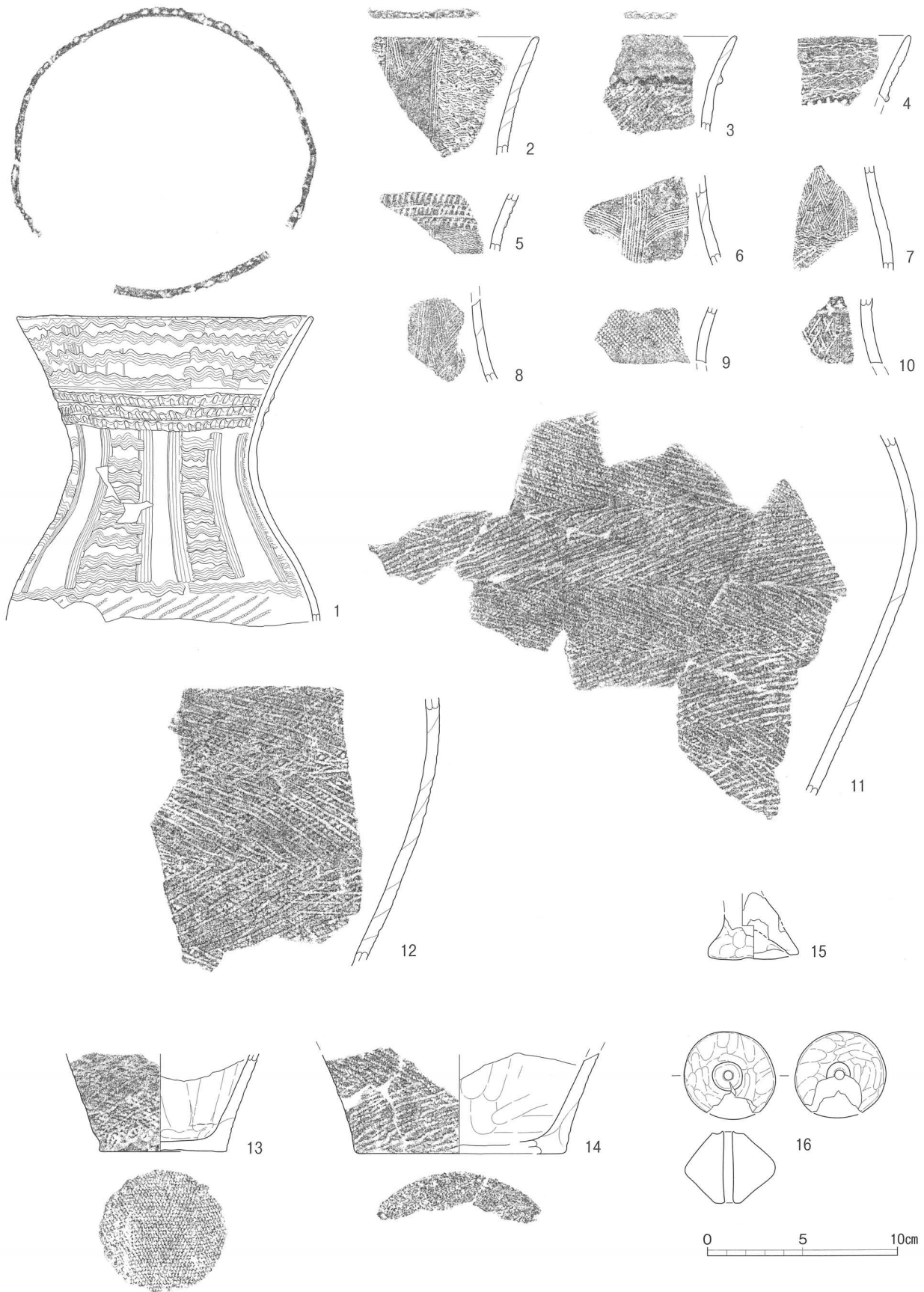
位置 A区中央部、L6グリッドにある。**規模と平面形** 4.60×3.90mのやや縦に長い長方形。**主軸方向** N-2°-W **壁** 壁高は10cmを測り、やや外傾する。**床** P5から住居中央部、さらにP4周辺部にかけて硬化している。**ピット** 6箇所。P1～4は主柱穴。P5は炉の対面の壁際にあり、出入り口ピットと考えられる。P6は性格不明。**炉** 長径60cm、短径45cmの楕円形で深さ4cm。**覆土** 床上を全体に暗褐色土主体とした2枚の層が被覆している。**遺物** 住居中央部や東側の床面から弥生時代後期の壺の破片が出土している。遺物の出土量は多く、中～大破片の割合が高い。十王台式後半期の土器が主体で1は頸部隆帯に棒状工具による刺突が加えられ、表面は濃いススが付着している。5は頸部に帯状刺突文が施文される。6は櫛描文の特徴・胎土から二軒屋式系と考えられる。**所見** 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第 53 図 58号住居跡

表 21 58号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	15.2 — —	口唇部丸棒状工具によるキザミ。頸部同様の工具によるキザミ隆帯3条→口縁部4～5本歯の縦位直線文(一部)→横位波状文(下→上、反時計回り)、胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S)→頸部横位区画波状文→頸部縦位直線文2条×6単位→横位波状文。(下→上、右→左)。内面は胴部縦位、頸部斜位、口縁部横位のナデ(概ね下から上へ調整)。外面頸部上位～口縁部、頸部下位～胴部上位に濃いス、内面は斑点状のヨグレ附着。	石英、角閃石、骨針	良好	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器壺	— — —	口唇部ヘラキザミ。口縁部5本歯の縦位直線文2条一単位→横位波状文(下→上)、スリット内山形文(左→右)。内面は横位のナデ。	石英、角閃石、赤色粒	良好	にぶい黄褐色	十王台式
3	弥生土器壺	— — —	口唇部ヘラキザミ。口縁部無文(横位のナデ)。頸部押捺隆帯1条→附加条1種縄文(LR+R)。内面は横位のナデ。外面スス附着。	石英	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	



第54図 58号住居跡出土遺物

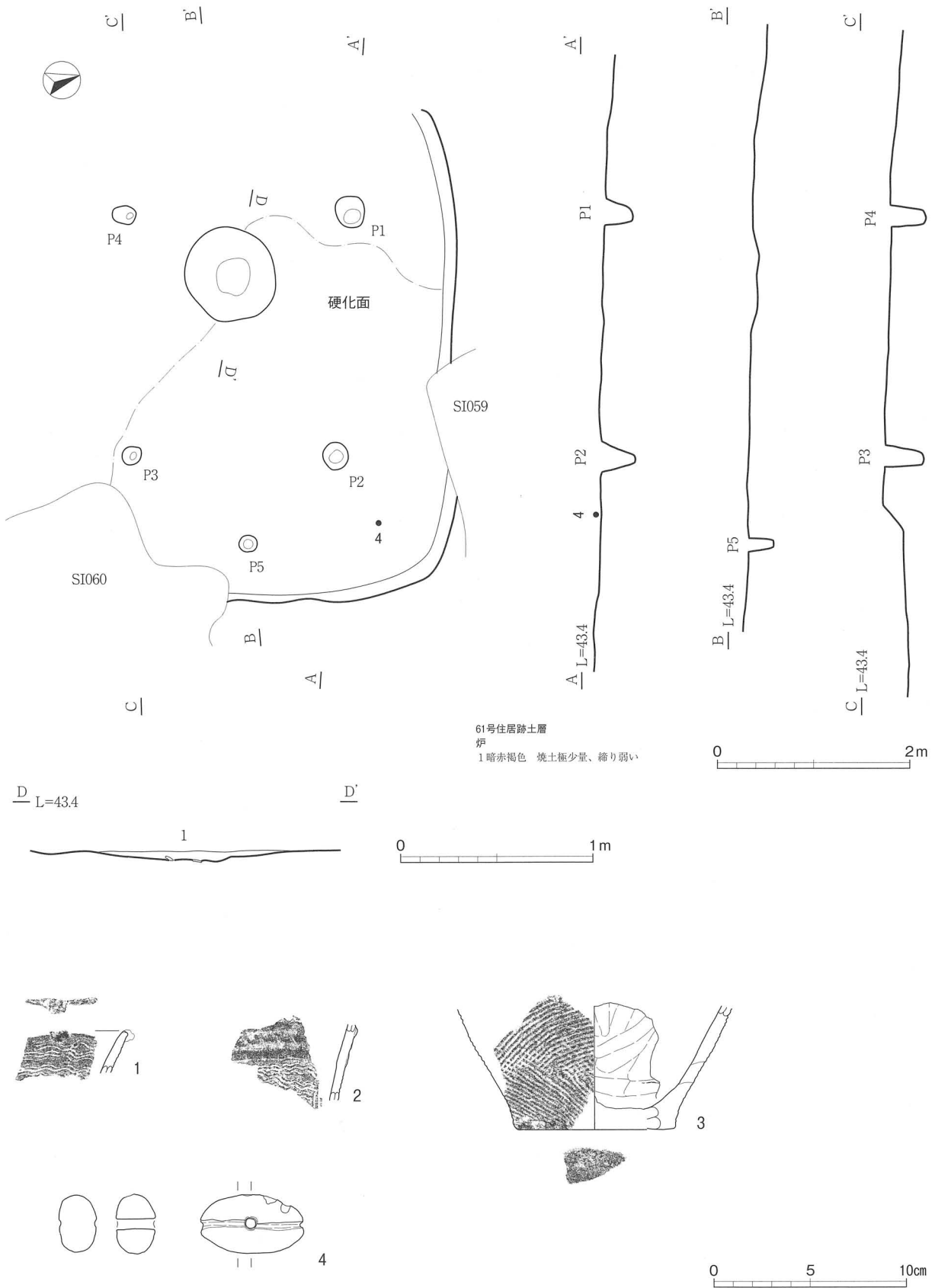
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器壺	- - -	頸部丸棒状工具によるキザミ隆帯→口縁部3本歯の横位波状文。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十王台式
5	弥生土器壺	- - -	頸部横位のヘラ描き細沈線→帯状刺突文→3本歯の縦位直線文、横位波状文。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
6	弥生土器壺	- - -	頸部9～10本歯の下開き連弧文→縦位直線文。内面は横位のナデ。	多量の石英・長石	良好	にぶい赤褐色	二軒屋式系
7	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S)→頸胴界横位区画波状文2条→頸部縦位直線文→縦位羽状文(下→上、左、右)。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英	普通	外：灰黄色 内：にぶい黄色	十王台式
8	弥生土器壺	- - -	頸部8本歯の縦位直線文→縦位羽状文(下→上、右→左)内面は斜位のナデ。外面スス付着。	石英、骨針	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
9	弥生土器壺	- - -	口縁部附加条1種縄文(RL+2L)、頸部無文帯(縦位のナデ)。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	普通	灰黄褐色	
10	弥生土器壺	- - -	頸部押捺隆帯→4本歯の縦位直線文→横位波状文、ヘラ描き斜格子文(左上がり→右上がり)。内面は斜位のケズリ・ナデ。	石英	良好	にぶい黄褐色	十王台式
11	弥生土器壺	- - -	胴部附加条2種縄文(LR+2Lカ)、軸縄不明の附加条縄文(R・S)を下→上へ施文。内面は縦・斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。肩部付近に黒斑。	石英、長石、角閃石、骨針	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい橙色	十王台式
12	弥生土器壺	- - -	胴部附加条2種縄文(LR+2L、RL+2R)。内面は胴上部が斜位、胴下部が横位のナデ。	石英、長石、角閃石、金雲母	良好	明黄褐色	十王台式
13	弥生土器壺	- - 6.6	胴部下端指頭圧痕→胴部附加条2種縄文(R+R)。底部布目痕。内面は縦位のケズリ(下→上)→縦位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英、長石	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	十王台式
14	弥生土器壺	- - (10.8)	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z：下→上)。底部布目痕(周縁磨耗)。内面は斜位のナデ。	石英、長石、角閃石、金雲母、赤色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい橙色	十王台式
15	弥生土器ミニチュア高坏	- - 4.7	外面ナデ。内面ナデ。脚端部折り返し。	石英、多量の白色粒子	不良	黒褐色	
16	土製品紡錘車		径(4.7)、高3.8、孔径(0.45)、重[48.08]g。表裏面ナデ調整。片側穿孔カ。	石英	良好	褐色	

61号住居跡(第55図)

位置 A区中央部、L6～L7グリッドにある。規模と平面形(5.00)×(3.50)mで、59号住居・60号住居によって床面の一部が壊されている。主軸方向N-68°-W壁-床炉の東側全体が硬化している。西側の床面は地形傾斜で削平されている。ピット5箇所。P1～4は支柱穴。P5は炉の対面の壁際にあり出入り口ピットと考えられる。炉長径96cm、短径88cmの楕円形で深さ4cm。覆土

遺物 遺物の出土量は非常に少なく、大半が小破片で出土している。住居西側の隅部床面から4の土錘が出土している。

所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第55図 61号住居跡・出土遺物

表 22 61号住居跡出土遺物観察表

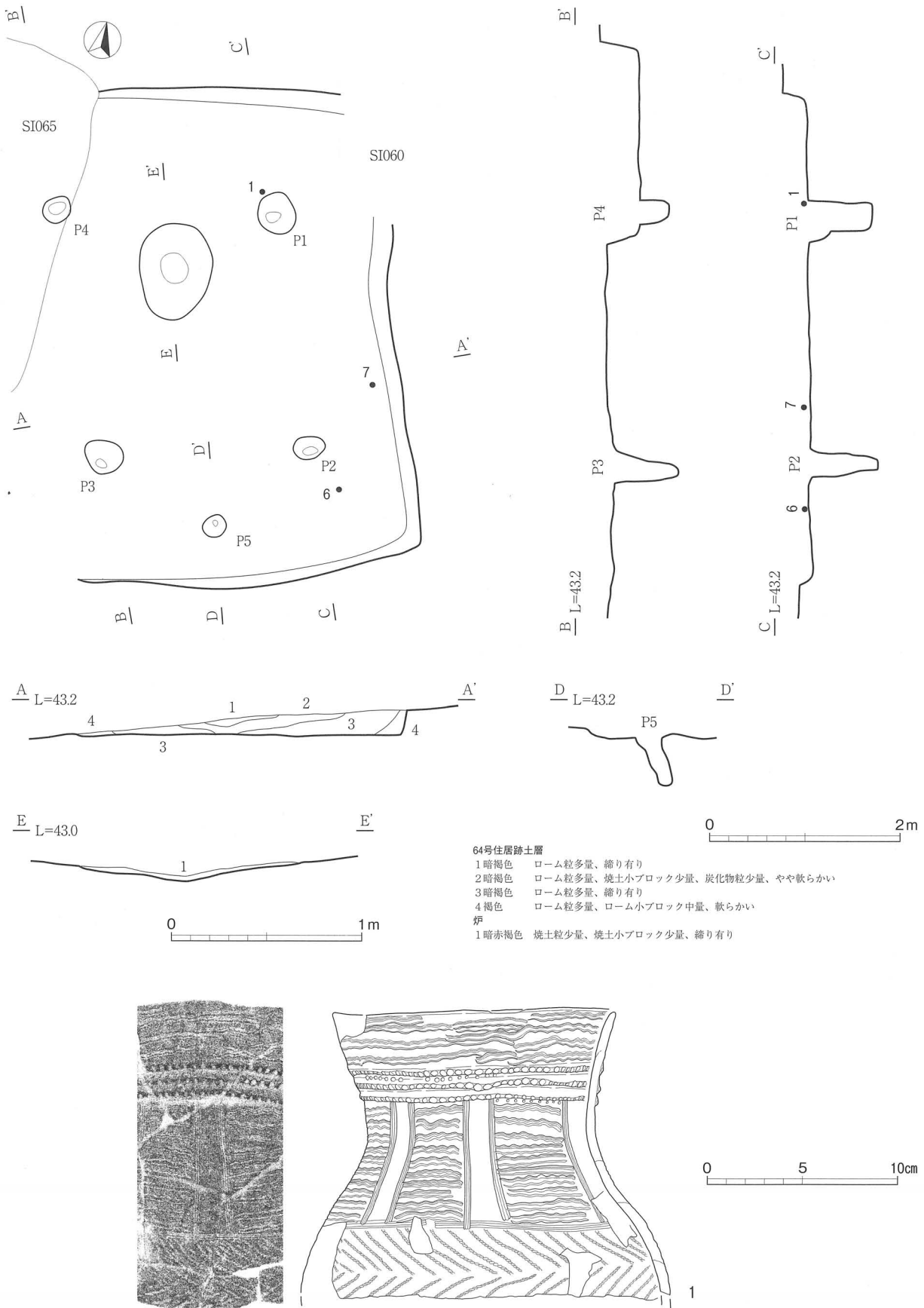
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部縄文キザミを施した突起貼付け→ヘラキザミ→口縁部3本歯の横位波状文(下→上)。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英	普通	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	頸部薄い押捺隆帯3条→口縁部3本歯の横位波状文、頸部縦位直線文→横位波状文(上→下)。内面は横・斜位のナデ。	石英	普通	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - (8.2)	胴部附加条1種縄文(RL+2L、LR+2R：上→下)。底部砂痕。内面は斜位のナデ。外面まばらなスス、内面濃いヨゴレ付着。	多量の石英・長石	良好	外：明褐色 内：褐色	
4	土製品 土錘	- - -	長53、幅30、厚20、孔径(0.55)、重[31.77]g。表裏面雑なナデ調整。片側穿孔。	多量の石英・角閃石、赤色粒	普通	浅黄色	

64号住居跡(第56・57図)

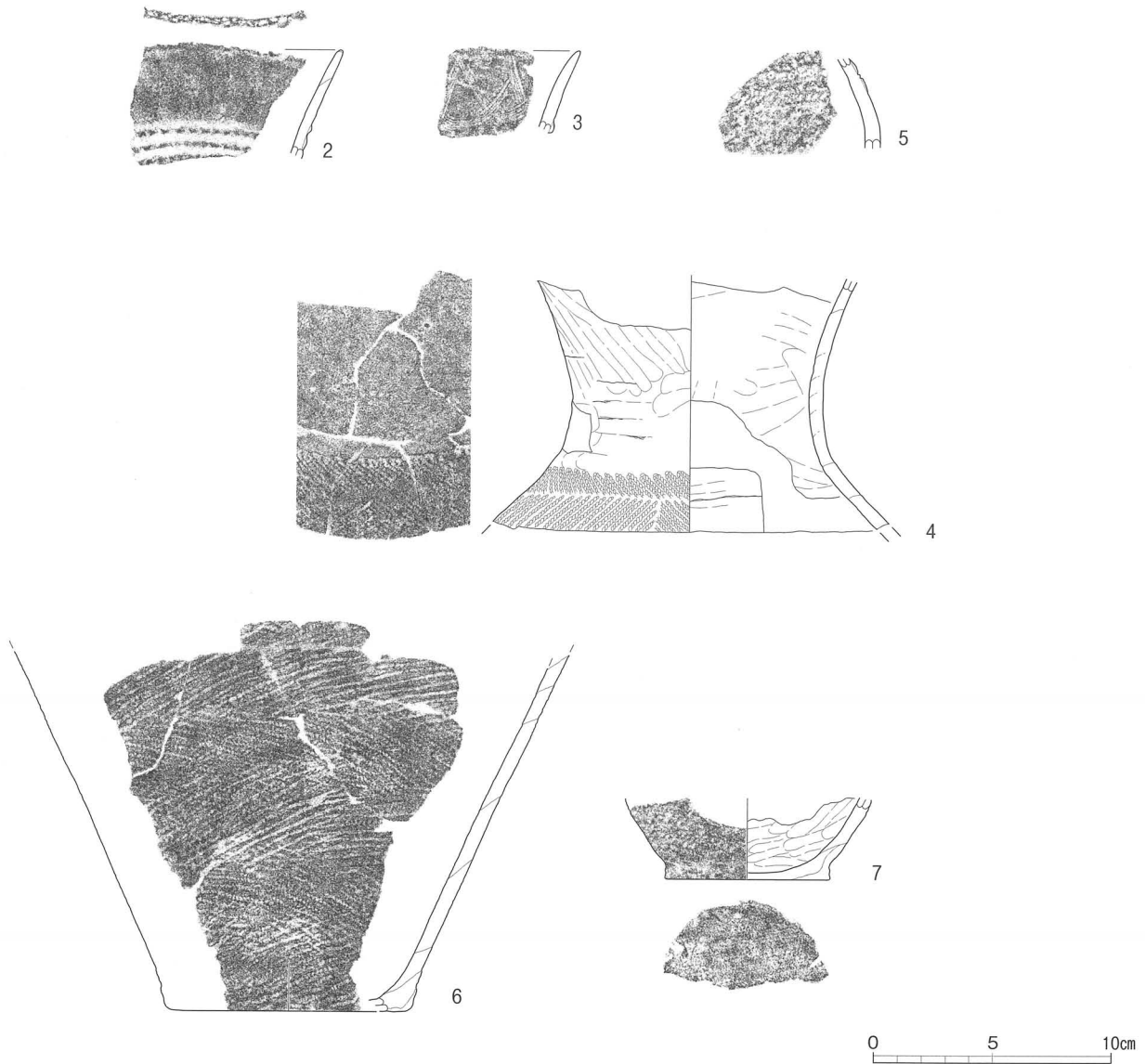
位置 A区中央部、L7グリッドにある。**規模と平面形** 5.03×(3.50)mで、60・65号住居によって床面の一部が壊されている。**主軸方向** N-17°-W **壁** 壁高は約23cm、ほぼ垂直に立ち上がる。**床** 住居全体に弱く硬化している。**ピット** 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は深さ50cmで斜に約68°の角度で掘りこまれている。出入口ピットと考えられる。**炉** 長径94cm、短径73cmの楕円形で深さ5cm。**覆土** ローム粒を多量に含んだ暗褐色土を主体にした覆土。**遺物** P1の周辺から1、P2の周辺からは6・7の弥生土器が覆土3層中より出土している。遺物の出土量はやや多く、中～大破片の割合が高い。十王台式前半期の土器を主体とする。4・5は十王台式でなく、4は頸部に無文帯を有し、単節RLとLRの原体により羽状縄文が構成されている。5は肩部に竹管文が施文される。**所見** 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

表 23 64号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(14.9) - -	頸部丸棒状工具によるキザミ隆帯3条→口縁部3本歯の横位波状文(下→上、反時計回り)、胴部軸縄不明の附加条縄文(R-Z、L-S：上→下、反時計回り)→頸部横位区画直線文→頸部縦位直線文2条×6単位→横位波状文(上→下、右→左)。内面は口縁部が横位のナデ、頸部が縦位のナデ。外面全体まばらにスス付着。肩部付近は濃いスス付着。	石英、長石、多量の骨針	良好	にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部縄文キザミ。口縁部無文(横位のナデ)。頸部押捺隆帯。内面は横位のナデ。	石英、角閃石	普通	褐灰色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	頸部押捺隆帯→口縁部4本歯の山形文(反時計回り)。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英、長石、金雲母、骨針	普通	にぶい黄褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	口縁～頸部は無文(横・斜位のナデ、摩滅)。肩部以下単節縄文(RL、LRを横位施文：上→下)。内面は頸部斜位のナデ、肩部は横位のナデ。	多量の石英・長石、骨針	普通	にぶい黄褐色	掘方
5	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S)。肩部は押捺隆帯で隆帯間に竹管状工具による刺突文。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・白色粒、金雲母	不良	黄灰色	
6	弥生土器 壺	- - (10.0)	胴部附加条1種縄文(RL+2L)、軸縄不明の附加条縄文(R-S)を下→上へ施文。内面は縦・斜位のナデカ(器面荒れ)。底部砂痕カ、刳カ圧痕。外面まばらにスス付着。	石英、長石、角閃石、金雲母、骨針	良好	外：にぶ褐色 内：にぶい褐色	
7	弥生土器 壺	- - (7.0)	胴部軸縄不明の附加条縄文(L-Z)。底部布目痕。内面は横・斜位のナデ。外面まばらにスス付着。	石英、長石、骨針	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい褐色	十王台式



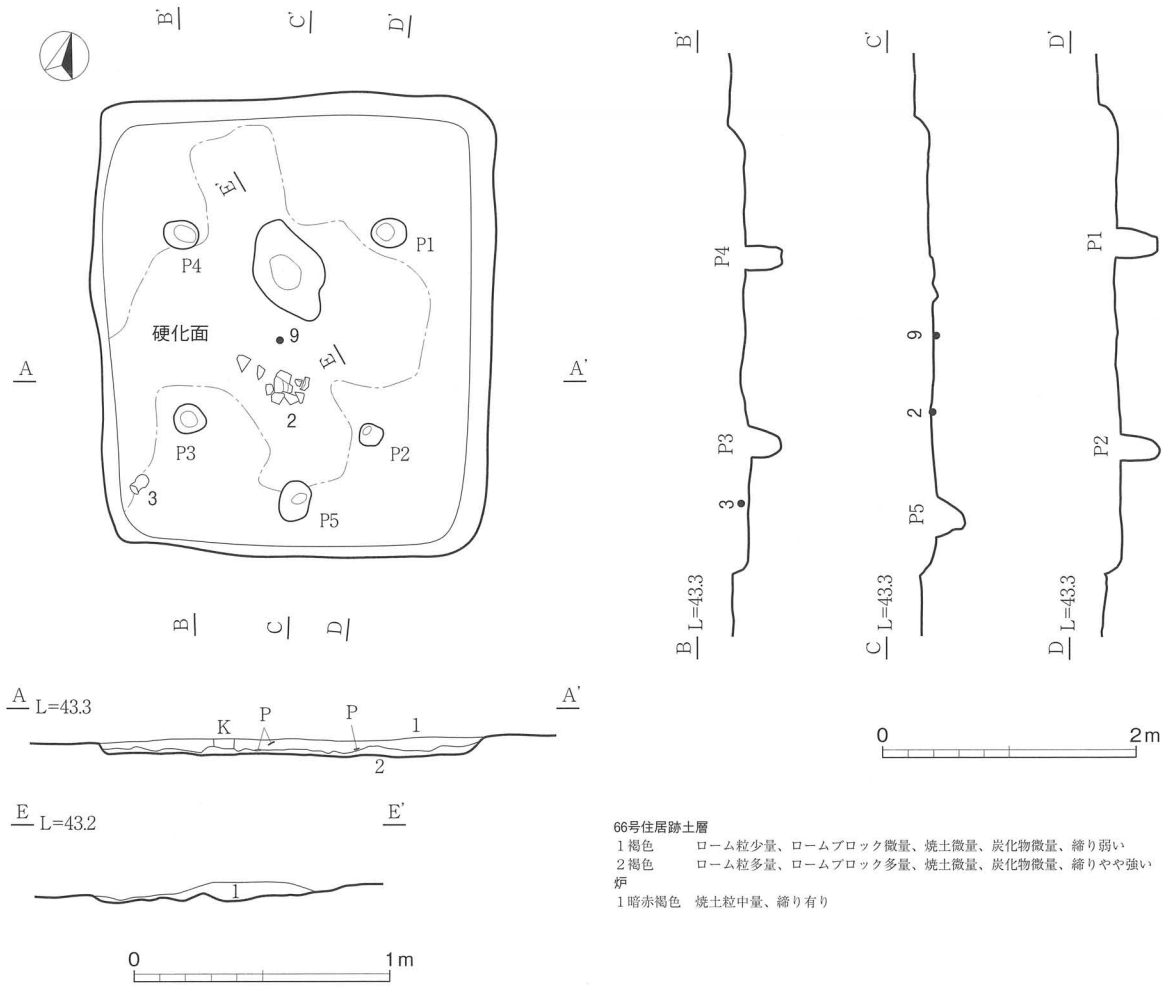
第56図 64号住居跡・出土遺物①



第57図 64号住居跡出土遺物②

66号住居跡（第58・59図）

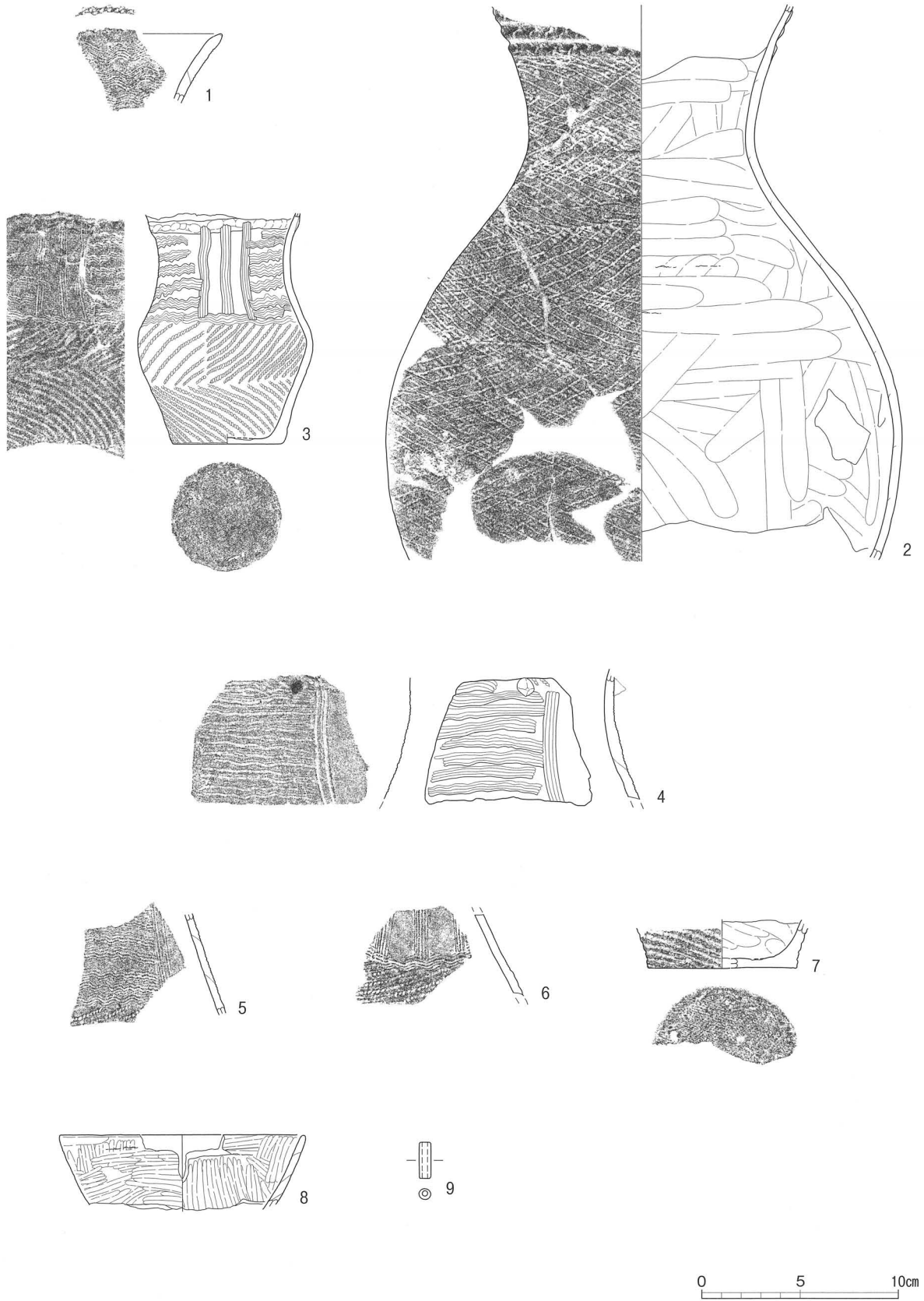
位置 A区中央部、L7グリッドにある。規模と平面形 2.90 × 3.40 mの縦長長方形。主軸方向 N-12°-W 壁 壁高は約13cm、やや外傾して立ち上がる。床 住居の中央部を中心に硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は支柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径82cm、短径51cmの楕円形で深さ7cm。覆土 褐色土を主体にした覆土で、床面を直接被覆する下層堆積にはロームブロックが多量に含まれる。遺物 炉の南側床面から9の緑色凝灰岩製の管玉が、住居南西隅の床面から3の小型壺が出土している。遺物の出土量は多く、大破片の割合が高い。十王台式後半期の土器を主体とする。4は円錐状の貼り付け文を施す。8は土師器の埴でミガキが施されている。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第 58 図 66号住居跡

表 24 66号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本歯の横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。	石英	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	頸部爪痕のある押捺隆帯3条→頸～胴部附加条2種縄文(L+l, R+r:下→上)。内面は縦・斜位のナデ→横位のナデ。外面まばらな黒斑。	石英、長石、角閃石、チャート、金雲母	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい橙色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - 5.6	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S, L-Z:下→上)。口頸界薄い押捺隆帯、頸胴界4本歯の横位区画波状文→頸部縦位直線文3条×4単位→横位波状文(下→上、時計回り)。底部布目痕。内面は頸部横・斜位のナデ、胴部はあばた状の剥落著しい。外面全体にスス附着、頸～肩部は赤色化著しい。	石英	普通	灰黄褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	頸部軸縄不明の附加条縄文(R-Z)→4本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)→円錐形の突起。内面は横・斜位のナデ。	石英、多量の角閃石、骨針、赤色粒	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	十王台式
5	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S)→頸部5本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は縦位のナデ。	石英、骨針	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい橙色	十王台式
6	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S)→頸部5本歯の縦位直線文3条→頸胴界横位区画波状文(反時計回り)→頸部横位波状文。内面は縦・斜位のナデ。	石英、骨針	良好	外：にぶ黄褐色 内：にぶい橙色	十王台式



第59図 66号住居跡出土遺物

第IV章 A区の遺構と遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
7	弥生土器 壺	— — (7.6)	胴部附加条2種縄文(L+Rカ)。底部布目痕・植物種子 圧痕カ。内面斜位のナデ。外面まばらにスス、内面全面 にコゲ付着。底面には粘土付着。	石英、長石、角閃 石	普通	外：灰黄褐色 内：黒褐色	十王台式
8	土師器 埴	(12.5) — —	口縁部縦位のミガキ→横位のミガキ、口唇部付近横位の ナデ。内面は横位のハケメ→縦・斜位のミガキ。	石英、金雲母	普通	灰黄色	
9	石製品 管玉		長1.85、幅0.6、厚2.0、孔径0.3、重1.1g。片側穿孔カ。丁寧な研磨。緑色凝灰岩製。				

67号住居跡（第60図）

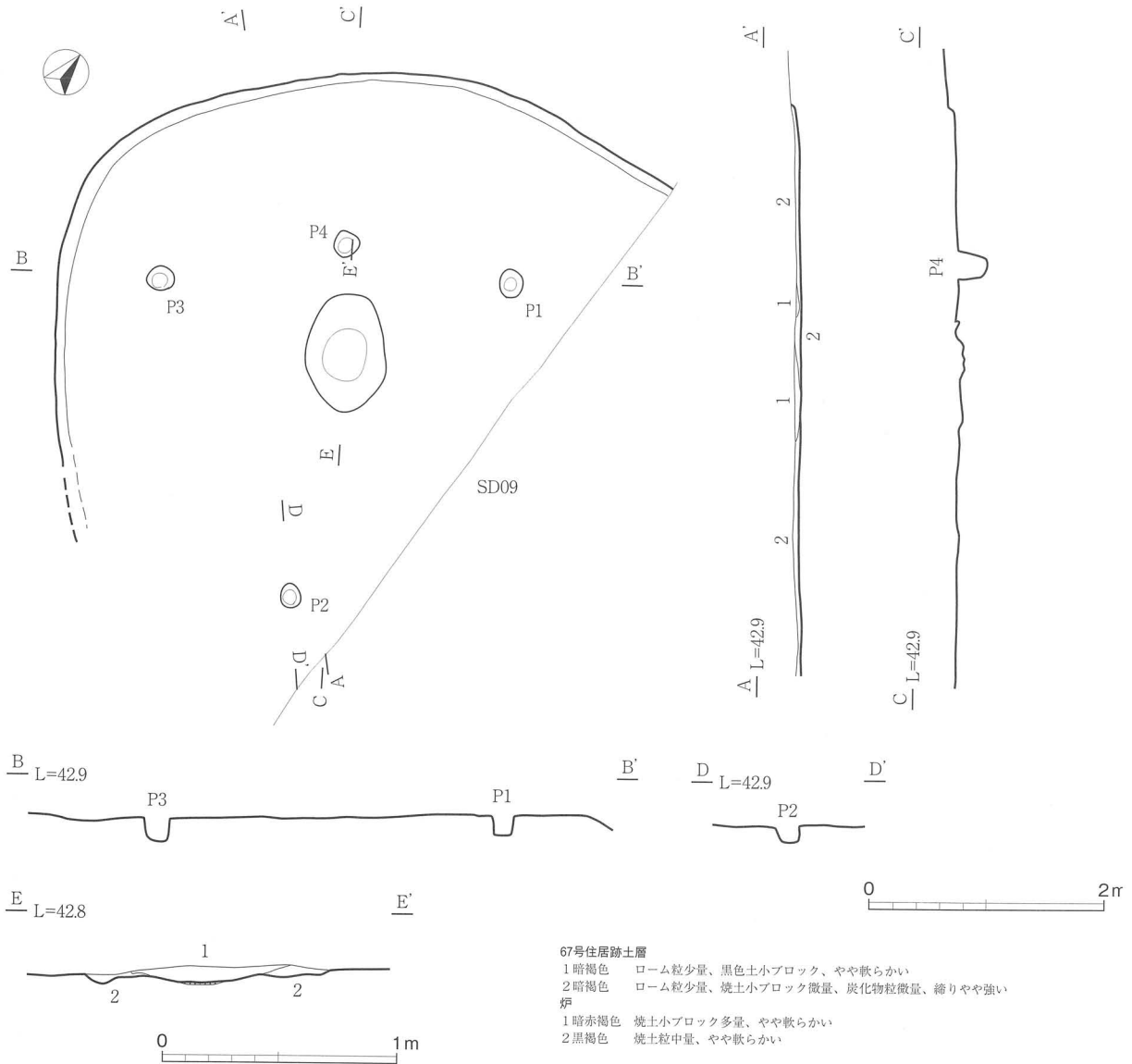
位置 A区中央部、M8グリッドにある。 **規模と平面形** 4.22 × 3.98 m **主軸方向** N - 2° - E **壁**
壁高は約4cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 **床** 全体に弱く硬化している。 **ピット** 4箇所。P1は深さ
13cm、P2は深さ12cm、P3は深さ16cm、P4は深さ23cm。 **炉** 長径96cm、短径66cmの長楕円形で深
さ6cm。 **覆土** 暗褐色土を主体としている。 **遺物** 遺物の出土量は非常に少なく、大半が小～中破片
で出土している。弥生時代後期の壺小片が出土している。すべて十王台式期の所産と考えられるが、詳細な
時期は不明である。 **所見** 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

表25 67号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— — —	口唇部ヘラキザミ。口縁部6本歯の横位波状文(時計回 り)。内面は横位のナデ。	石英、長石	普通	にぶい黄橙色	十王台式
2	弥生土器 壺	— — —	口縁部無文(横位のナデ)。頭部縄文原体によるキザミ隆 帯。内面は横位のナデ。	石英、多量の金雲 母・白色粒	普通	外：にぶい黄橙色 内：黒褐色	
3	弥生土器 壺	— — —	頸～胴部附加条2種縄文(R+R)、軸縄不明の附加条縄 文(L-Z)を上→下へ施文。内面は縦・斜位のナデ。	石英、角閃石、金 雲母	普通	明黄褐色	十王台式

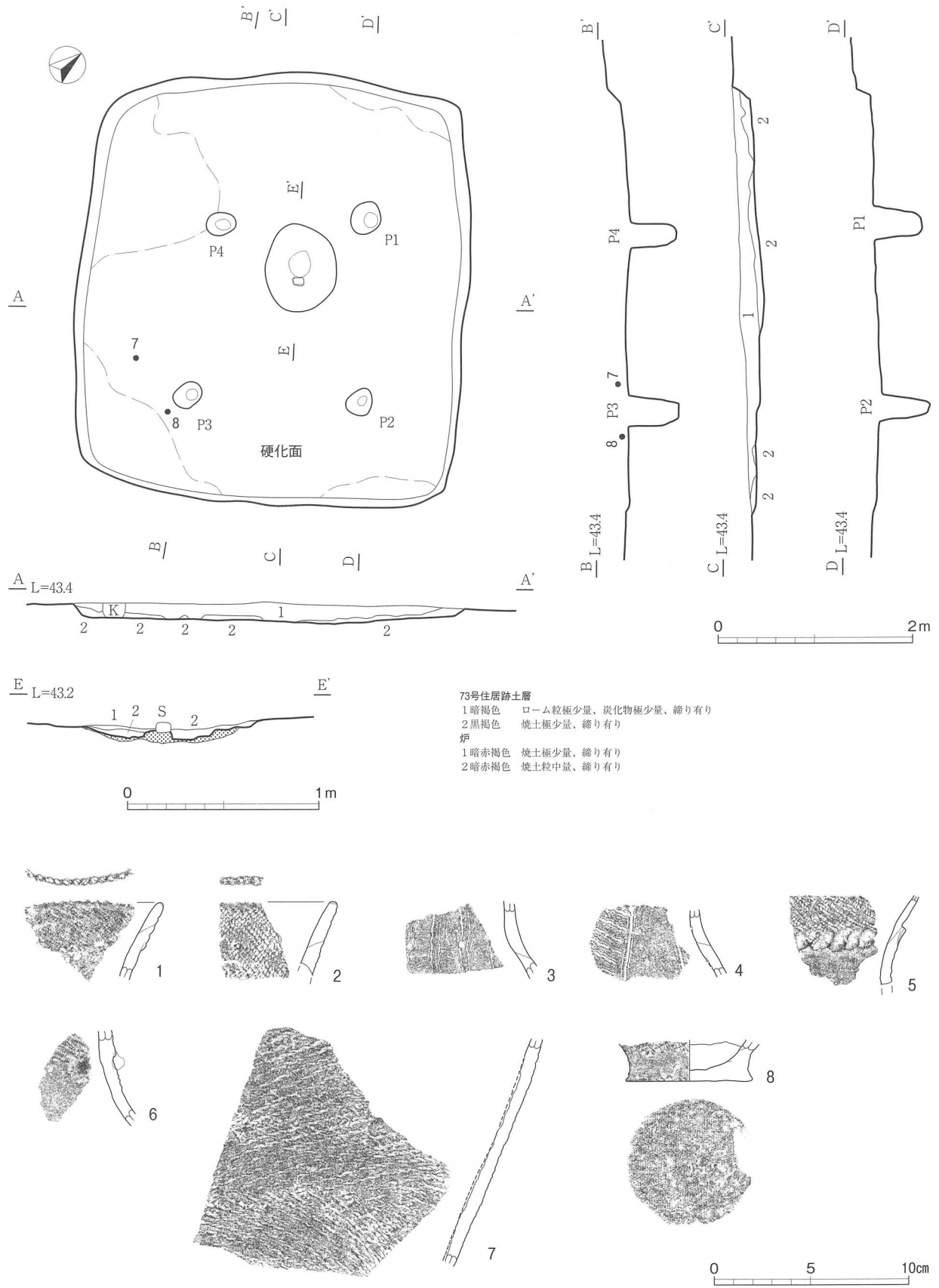
73号住居跡（第61図）

位置 A区中央部、M6・M7グリッドにある。 **規模と平面形** 3.9 × 4.35 mの僅かに縦長の方形。 **主**
軸方向 N - 48° - W **壁** 壁高は約17cm。 **床** 全体に硬化しているが、住居四隅とP4の西側の硬化が
弱い。 **ピット** 4箇所。P1からP4は支柱穴。 **炉** 長径92cm、短径74cmの楕円形で深さ7cm。炉
石を持つ。 **覆土** 暗褐色土主体の覆土である。 **遺物** P3付近の覆土から、8の壺底部片、7の胴部片
が出土している。遺物の出土量は少なく、小～中破片の割合が高い。十王台式主体だが、二軒屋式系(5・6)
やその他の系統の土器(2)も含んでいる。 **所見** 出土遺物から弥生時代後期の十王台式期の住居跡と考
えられる。



第60図 67号住居跡・出土遺物





第 61 図 73号住居跡・出土遺物

表 26 73号住居跡出土遺物観察表

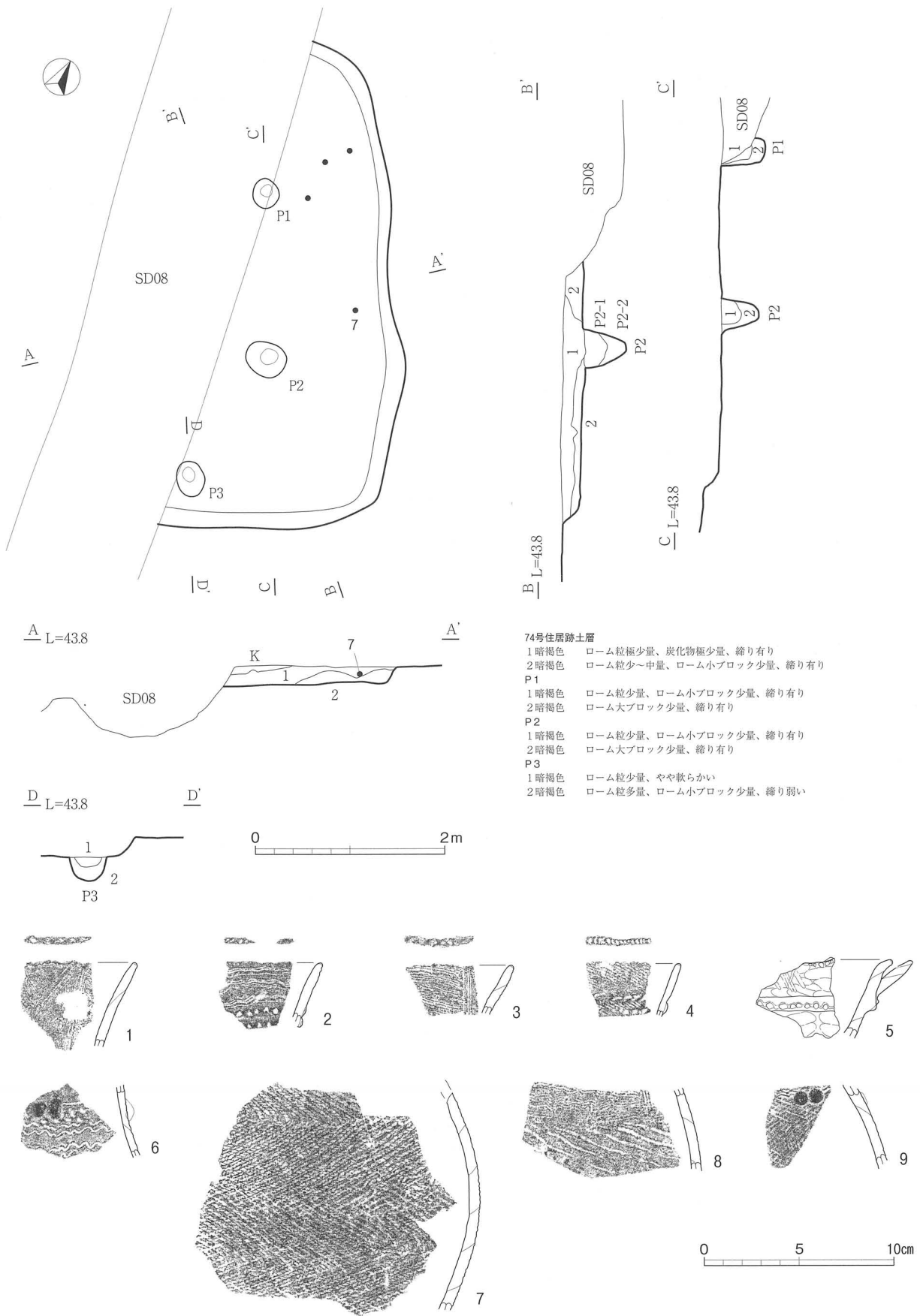
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部縄文キザミ。口縁部附加条1種縄文(RL+2L)。口縁下端に棒状工具によるキザミ。内面は横位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	普通	にぶい褐色	二軒屋式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミカ。口縁部単節縄文(RL)、一部ナデ消し。内面は縦・斜位のナデ。	石英、長石、角閃石、赤色粒	良好	明褐色	
3	弥生土器 壺	- - 5.6	胴部7本歯の縦位波状文。内面は縦・斜位のナデ。	石英、長石、角閃石	普通	外：暗灰黄色 内：浅黄色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	頸部4本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は横・斜位のナデ、剥落。	石英、角閃石、多量の白色粒	不良	外：黄褐色 内：暗灰黄色	十王台式
5	弥生土器 壺	- - -	口縁部無文(横位のナデ)、指頭圧痕のある隆帯→軸縄不明の附加条縄文(L・Z)。内面は口縁部横位のナデ、頸部は縦・斜位のナデ。	石英	普通	黄灰色	
6	弥生土器 壺	- - -	口縁部軸縄不明の附加条縄文(L・Z)→口縁部下端に貼付文(窪みに押し込む)。頸部無文(横・斜位のナデ。)内面は横位のナデ。	多量の石英・長石	良好	外：にぶ黄褐色 内：褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・Z、L・S：下→上)。内面は縦・斜位のナデ、大半が剥落。	多量の石英・長石、角閃石、骨針	良好	橙色	
8	弥生土器 壺	- - 6.7	胴部下端横位のナデ→胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S)。底部布目痕。内面は器面荒れ、底面にヘラ状工具の刺突痕。	石英、角閃石、赤色粒	良好	橙色	十王台式

74号住居跡(第62図)

位置 A区中央部、M6グリッドにある。規模と平面形 5.20 × (2.24) mで、8号溝に住居の西側半分を壊されている。主軸方向 N - 32° - W 壁 壁高は約 22cm、外傾して立ち上がる。床 全体にやや軟質な床面である。ピット 3箇所。P1は深さ48cm、P2は深さ19cm、支柱穴と考えられる。P3は深さ25cm、出入り口ピットと考えられる。炉 - 覆土 炭化物を極少量含んだ暗褐色土が主体である。遺物 遺物の出土量はやや少なく、中～大破片の割合が高い。十王台式前半期の土器が主体であり、5は片口壺である。覆土1層から7の胴部片が出土している。所見 出土遺物から弥生時代後期の十王台式期の住居跡と考えられる。

表 27 74号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部スリット内に5本歯の山形文(反時計回り)、縦位直線文→横位波状文。内面は横位のナデ。	石英、多量の角閃石、赤色粒	普通	浅黄橙色	
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部3本歯の横位波状文。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、骨針	普通	外：灰黄褐色 内：にぶ黄褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部5本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。	石英、角閃石、骨針	良好	浅黄褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。頸部隆帯→隆帯脇を押捺→口縁・頸部隆帯上に附加条1種縄文(R+2R)。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英	普通	外：灰黄色 内：黄灰色	
5	弥生土器 片口壺	- - -	口唇部・頸部隆帯に丸棒状工具によるキザミ。内面は口縁部横位のナデ→斜位のミガキカ。頸部横位のナデ。内面は横・縦位のナデ。	石英、角閃石、金雲母	良好	外：灰黄色 内：にぶ黄褐色	十王台式



第62図 74号住居跡・出土遺物

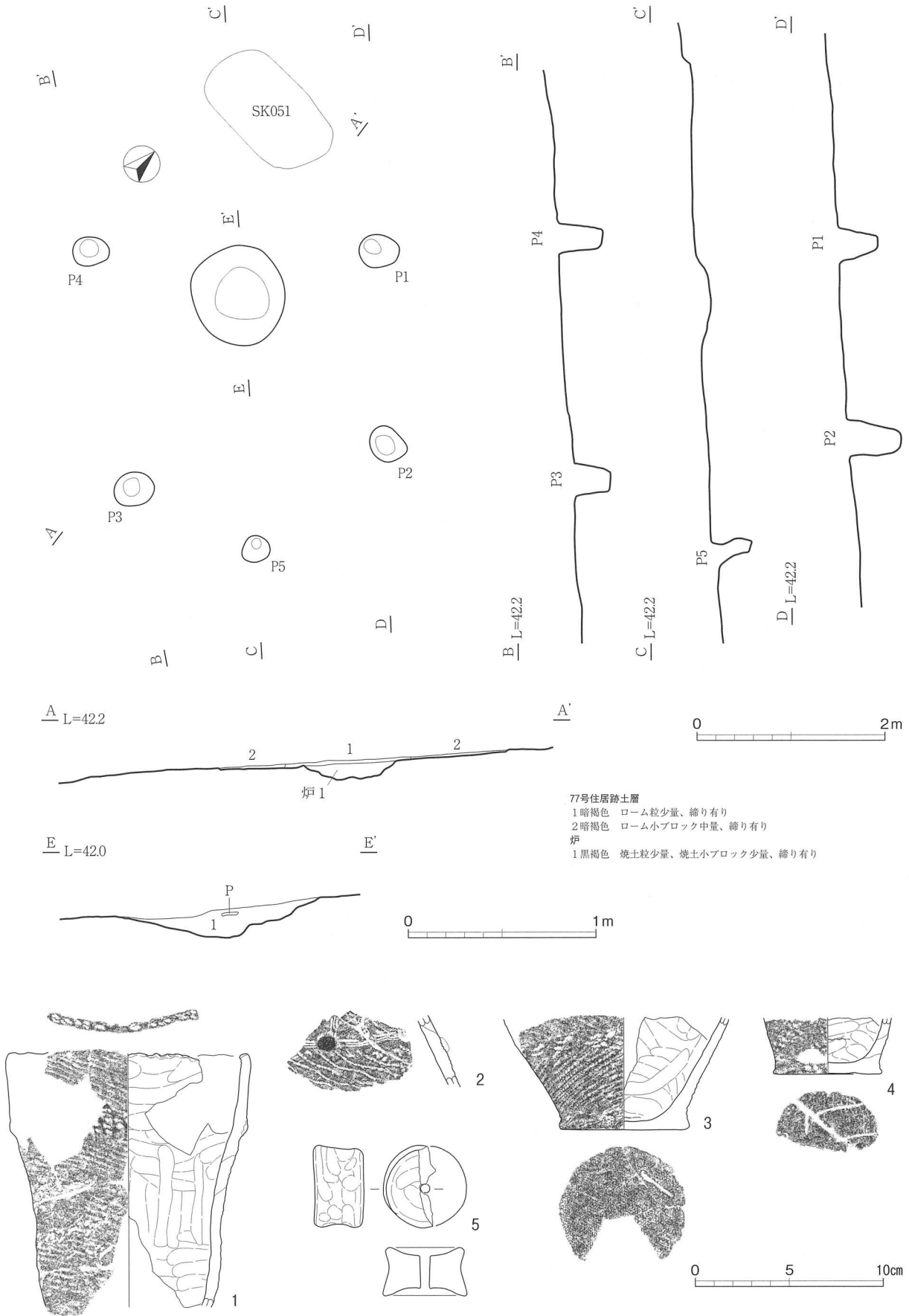
図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
6	弥生土器壺	— — —	頸部管内痕の残る半裁竹管状工具による横位沈線→同様の工具による横位波状文、丸棒状工具による刺突文→2個一対の貼付文。内面は斜位のナデ。	石英	普通	灰黄褐色	
7	弥生土器壺	— — —	胴部軸繩不明の附加条縄文 (R - Z、L - S : 下→上)。内面は縦・斜位のナデ。粘土紐接合部を横位のナデ。	石英、長石、角閃石、骨針、赤色粒	良好	外：黒褐色 内：にぶい褐色	
8	弥生土器壺	— — —	胴部軸繩不明の附加条縄文 (L - Z) → 頸部5本歯の横位区画直線文→頸部縦位直線文→横位波状文。内面は縦・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、長石、多量の金雲母、骨針	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
9	弥生土器壺	— — —	胴部附加条1種縄文 (L R + 2 R)、軸繩不明の附加条縄文 (L - Z) → 頸部3本歯以上の横位波状文→2個一対のボタン状貼付文。内面は横位のナデ。	石英、角閃石	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	

77号住居跡 (第63図)

位置 A区中央部、O7～O8グリッドにある。規模と平面形 - 主軸方向 N - 48° - W 壁 - 床 全体にやや締りのある床面として確認された。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径106cm、短径98cmの楕円形で深さ15cm。覆土 極薄く暗褐色土が残存していた。遺物 炉の覆土から壺の底部や胴部片、紡錘車等が出土している。遺物の出土量はやや少なく、中～大破片の割合が高い。1は十王台式の深鉢形土器である。所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

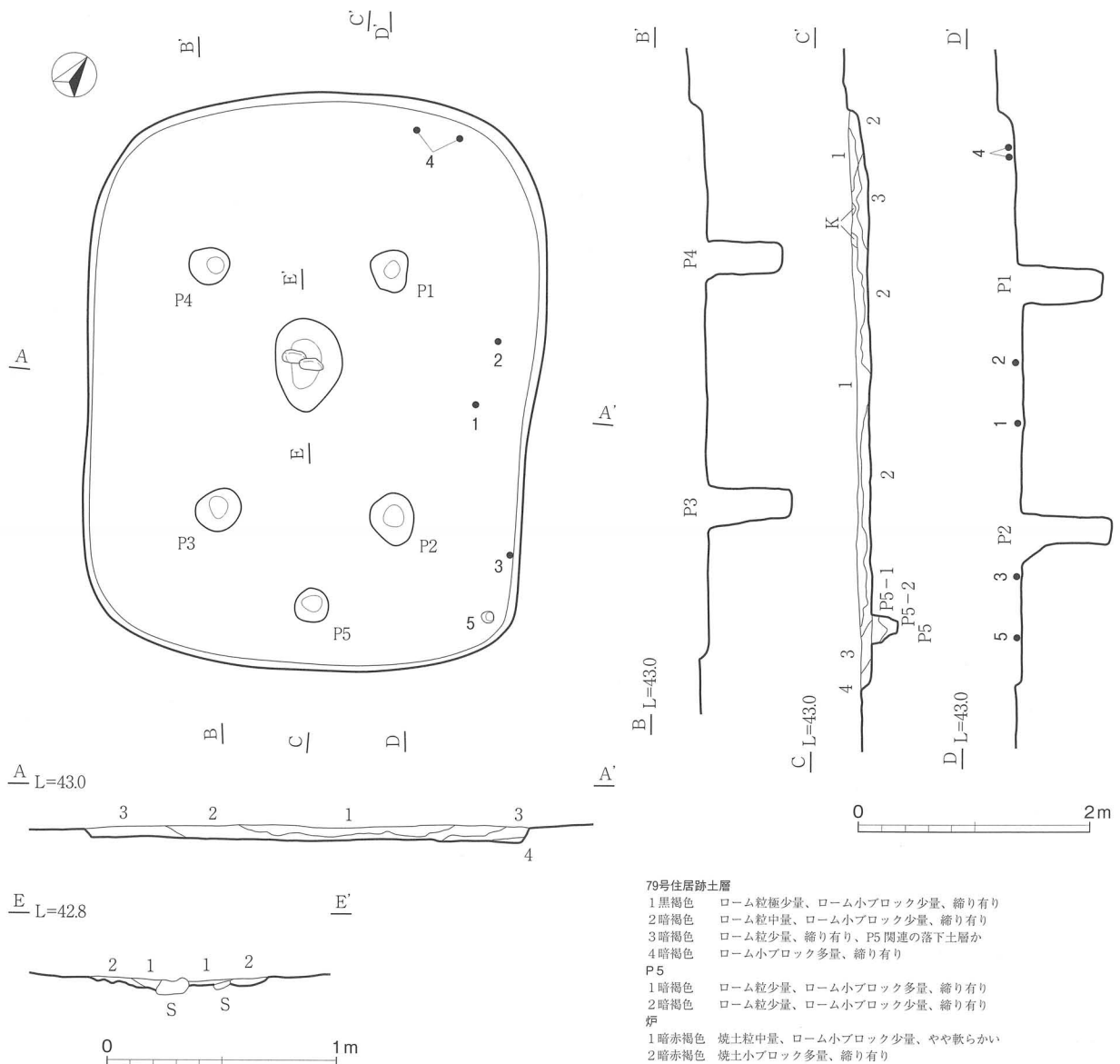
表28 77号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器深鉢	— — —	口縁～頸部軸繩不明の附加条縄文 (L - S、L - Z) で一部羽状構成。口唇部・頸部に同様の原体による縄文キザミ。内面は口縁・胴部横位のナデ、頸部縦・斜位のナデ。外面口縁部に厚いスス、以下に薄いスス付着。内面は口縁～頸部にヨゴレ付着。	石英	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	十王台式
2	弥生土器壺	— — —	胴部附加条2種縄文 (L + 1) → 頸部3本歯の横位区画直線文→頸部縦位直線文→ヘラ描き斜格子文 (左上がり→右上がり) → 頸部ボタン状貼付文。内面は器面荒れ。外面スス付着。	石英、長石、骨針、赤色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
3	弥生土器壺	— — 6.7	胴部軸繩不明の附加条縄文 (R - S、R - Z : 下→上、時計回り施文)。底部布目痕。内面は横・斜位のナデ、斜位のヘラナデ。外面まばらにスス付着、底面は粘土付着。内面まばらにヨゴレ付着。	石英、角閃石	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	十王台式
4	弥生土器壺	— — (5.6)	胴部軸繩不明の附加条縄文 (L - Z) → 胴部下端横位のナデ。底部木葉痕。内面は斜位のナデ。	石英	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	
5	土製品紡錘車		径 (4.4)、高 2.7、孔径 (0.5)、重 [27.9] g。表裏面ナデ調整、側面は横・斜位のナデ調整。片側穿孔。	石英、長石、骨針	良好	にぶい橙色	

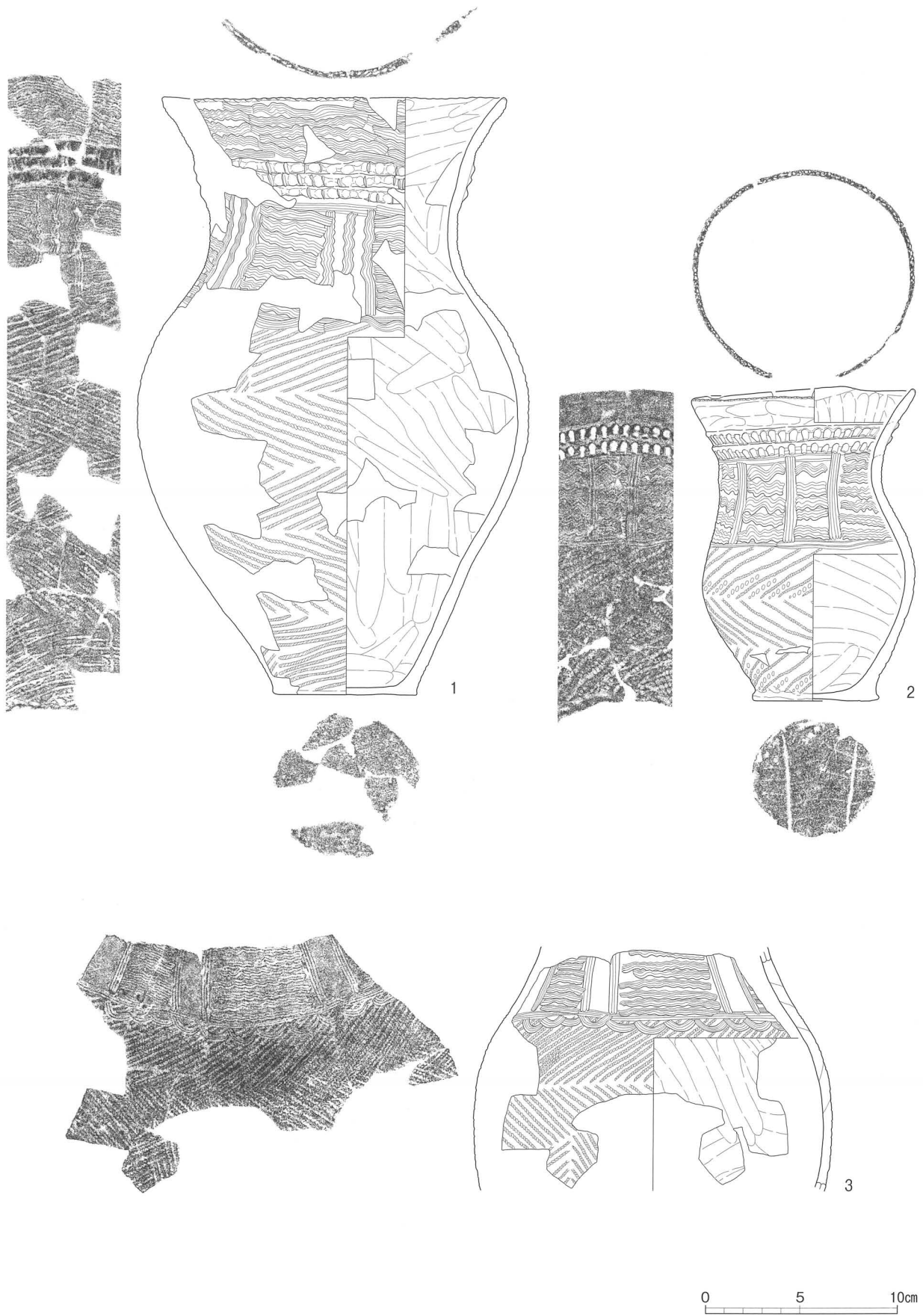


79号住居跡（第64～66図）

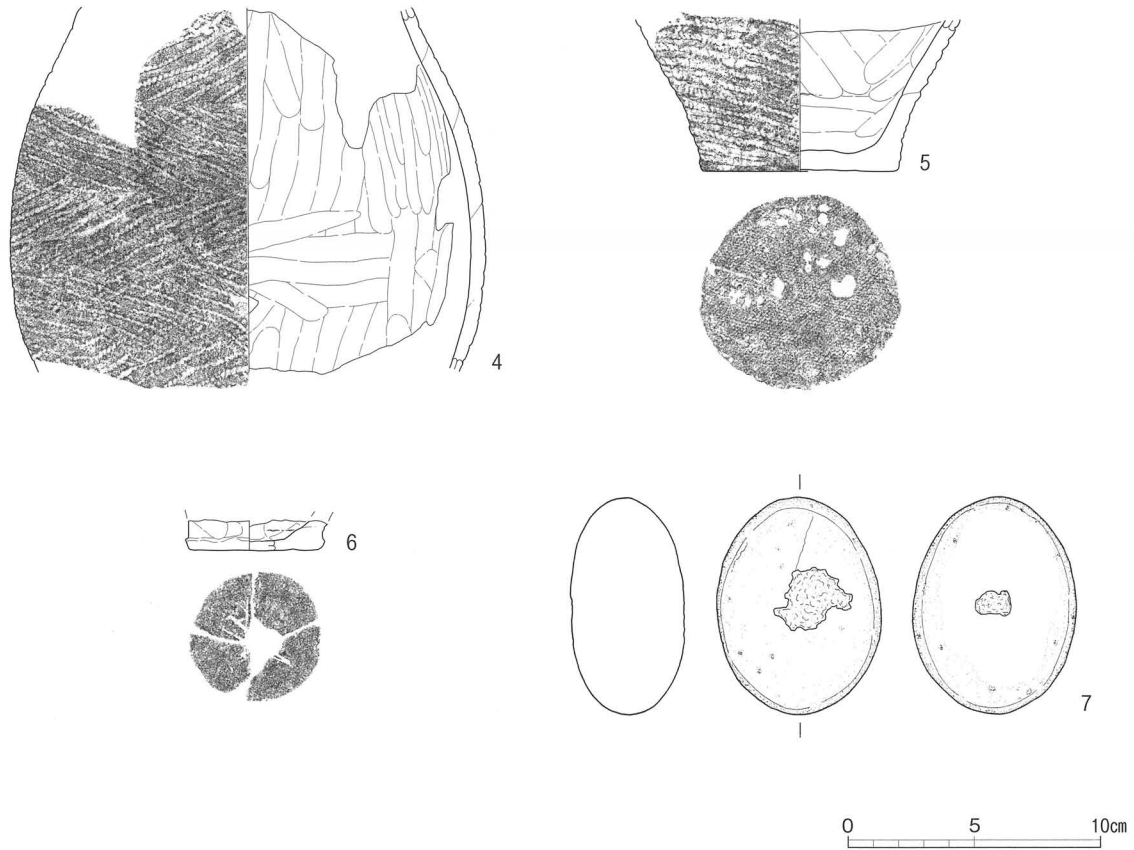
位置 A区中央部、M8グリッドにある。**規模と平面形** 5.07 × 3.90 mの縦に長い長方形。主軸方向N - 38° - W **壁** 壁高は約11cmである。**床** 全体にやや弱いが硬化している。**ピット** 5箇所。P1からP4は支柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。**炉** 長径82cm、短径59cmの楕円形で深さ5cm。中央やや南寄りに自然石を2つ設置して炉石としている。**覆土** 上層が黒褐色土層、下層が暗褐色土の自然堆積層。**遺物** 1・2は東壁際、3・5は南東隅の壁際、4は北東隅の壁際で床面から僅かに浮いた状態で出土している。また、1は小～中破片でまとまり、2は形状をとどめ、横倒しの状態で出土している。遺物の出土量は多く、中～大破片の割合が高い。十王台式前半期の土器を主体とし、明確な二軒屋式土器は出土していない。1は頸胴界の区画文に直線と波状文、3は直線文と上開きの連弧文が施文される。**所見** 出土遺物から、弥生時代後期十王台式期の住居跡と考えられる。



第64図 79号住居跡



第 65 図 79号住居跡出土遺物①



第66図 79号住居跡出土遺物②

表29 79号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器鉢	(18.0) 31.8 (7.5)	口唇部無節縄文(R)を回転施文カ。頸部爪痕のある押捺隆帯3条→口縁部4本歯の横位波状文、胴部軸縄不明の附加条縄文(r-S、L-Z:上→下)→口頸界・頸胴界横位直線文→上開き連弧文→頸部縦位波状文3条×推定6単位→横位波状文(下→上)。底部布目痕。内面は胴部下半縦位のナデ、底面付近横位のナデ、他は斜位のナデ。外面胴部中位から上はスス、以下はスス酸化消失。内面はススに対応するヨゴレが付着、一部帯状をなす。	石英、骨針	良好	灰黄褐色	十王台式
2	弥生土器壺	11.5 16.8 6.5	口唇部ヘラキザミ。口頸界丸棒状工具によるキザミ隆帯2条→口縁部無文(横位のナデ)、胴部下端斜位のナデ→胴部附加条1種縄文(LR+2R)と軸縄不明の附加条縄文(L-Z)を下から上へ施文→頸胴界4本歯の横位直線文→頸部2条一単位の縦位直線文→横位波状文(下→上、右→左)。底部木葉痕。内面は口縁部縦位のナデ、口唇部付近・頸~胴部は横・斜位のナデ。胴部下半は薄いスス・まばらな赤色化、口縁部・頸~胴部上半は部分的に濃いススで他は薄いスス付着。内面は胴部下半~肩部に濃い帯状のヨゴレ、以上は薄いヨゴレ付着。	石英	良好	にぶい橙色	十王台式
3	弥生土器壺	— — —	胴部附加条1種縄文(RL+2L、LR+2Rを横・縦位施文:下→上)→頸胴界4本歯の横位直線文→上開き連弧文(反時計回)、頸部縦位直線文2条×3単位以上→横位波状文(下→上)。内面は縦・斜位のナデ。外面頸~肩部に濃いスス、他は薄いススが全面に付着。内面は薄いヨゴレがまばらに付着。	石英、角閃石、金雲母、赤色粒	良好	灰黄褐色	十王台式
4	弥生土器壺	— — —	頸~胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S、L-Z:上→下)。内面は胴部上・下位に縦位のナデ、胴部中位に横位のナデ。外面頸~胴部上位に濃いスス、他は全面薄いスス付着。内面は胴部下位に帯状の濃いヨゴレ付着。	石英、角閃石、骨針、多量の白色粒、赤色粒	普通	外: にぶい黄橙色 内: にぶい褐色	十王台式

第IV章 A区の遺構と遺物

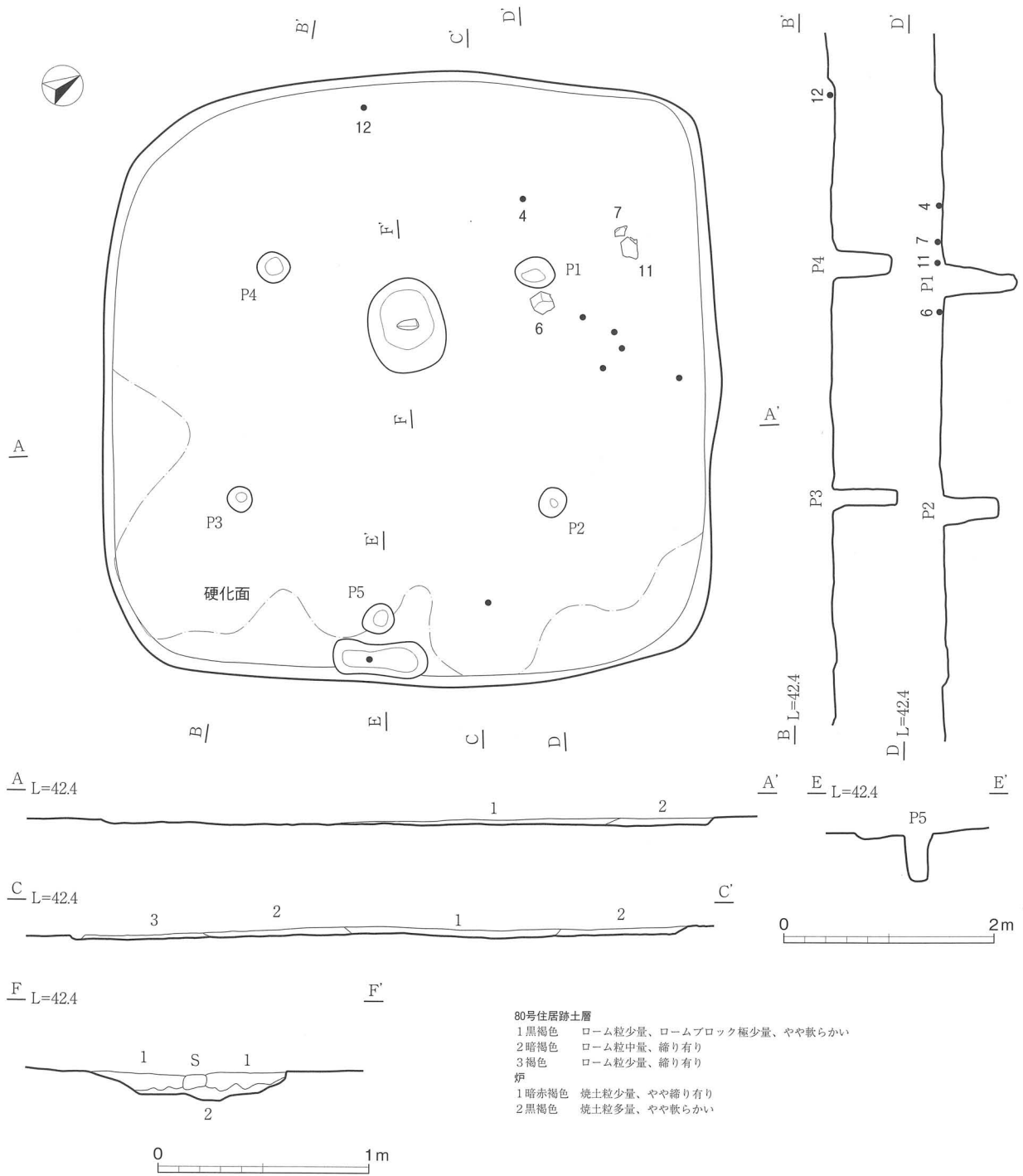
図版番号	種別 器種	口径器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
5	弥生土器 壺	- - 7.7	胴部軸縄不明の附加条縄文(L・Z:時計回り)。底部布目痕。外面は部分的にスス附着、赤色化。内面は底面付近が薄いヨゴレ、以上が濃いヨゴレ附着。	石英、長石、角閃石、骨針、赤色粒	良好	にぶい黄橙色	十王台式
6	弥生土器 壺	- - 5.2	胴部下端横位のナデ。底部木葉痕→周縁部ナデ消し。内面は横位のナデ。破損面を再加工。底部焼成後に穿孔カ。	石英	良好	外:にぶい黄橙色 内:灰黄褐色	
7	石器 敲石		自然礫を素材とし表・裏面中央に小さな敲打痕。裏面に磨耗痕。 石材:石英安山岩。長さ8.5cm・幅6.5cm・厚さ4.5cm・重さ357.0g。				

80号住居跡(第67・68図)

位置 A区南部、M8・N8・M9・N9グリッドにある。規模と平面形 5.88×5.82mの方形。主軸方向 N-62°-W 壁 壁高は約8cm。床 全体に硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は支柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径88cm、短径72cmの楕円形で深さ13cm。中央部に炉石が設置されている。覆土 中央部には黒褐色土、周辺部にいくにしたがい褐色土が堆積している。遺物 遺物の出土量は多く、小～中破片の割合が高い。4・6・7・11はP1周辺の床面上から出土している。十王台式前半期の土器を主体とするが、4・13・15など二軒屋式系の比率がやや高い。所見 出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

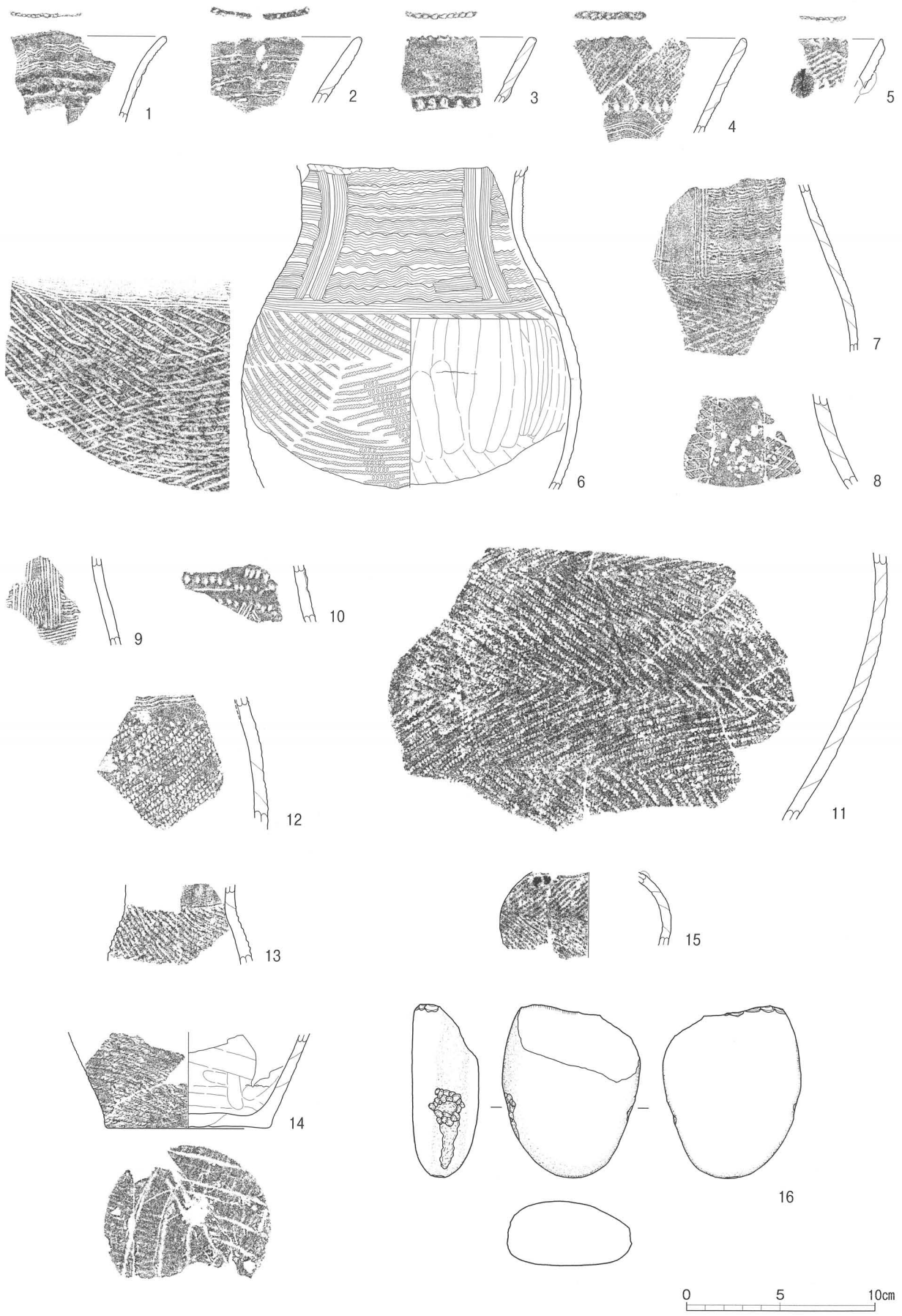
表30 80号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部横位のナデ→ヘラキザミ。頸部薄い押捺隆帯3条→口縁部3本歯の横位波状文。頸部縦位直線文。内面は横位のナデ。外面スス附着、赤色化。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	灰黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部3本歯の横位波状文(反時計回りカ)。内面は横・斜位のナデ。	石英、多量の骨針	良好	にぶい橙色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部無文(横・斜位のナデ)。頸部押捺隆帯。内面は横位のナデ。外面スス附着。	石英、骨針	普通	にぶい黄橙色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部下端に丸棒状工具によるキザミ、附加条1種縄文(LR+2R)。頸部8本歯以上の横位波状文。内面は横位のナデ。外面スス附着。	多量の石英・長石・白色粒、角閃石	不良	灰黄褐色	二軒屋式
5	弥生土器 壺	- - -	口唇部横位のナデ、キザミカ。口縁部軸縄不明の附加条縄文(R・S)→口縁部下端に縄文端部キザミ→楕円状の貼付文。内面は横位のナデ。外面スス附着、赤色化。	石英	普通	外:にぶい褐色 内:灰黄褐色	P4
6	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条2種縄文(RL+2R、L+r)→頸部6本歯の横位区画直線文→頸部縦位直線文2条×推定4単位→横位波状文(上→下、一部下→上、右→左)。内面は頸・胴部下に斜位のナデ、胴部中に縦位のナデ。外面まばらにスス附着、内面胴部下にコゲ附着。	多量の石英・角閃石	良好	灰黄褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・Z、L・S:下→上)→頸部5本歯の横位区画波状文→頸部縦位直線文→横位波状文。内面は丁寧な縦・斜位のナデ。外面スス附着、赤色化。	石英、金雲母、多量の白色粒	良好	外:灰黄褐色 内:にぶい黄橙色	十王台式
8	弥生土器 壺	- - -	頸部ヘラ描き縦位直線文→無文帯を1帯挟み、ヘラ描き斜格子目文(左上がり→右上がり、右上がり→左上がり)を充填。内面は横位のナデ、器面荒れ。	石英、長石、骨針、赤色粒	良好	外:にぶい橙色 内:にぶい黄褐色	十王台式
9	弥生土器 壺	- - -	頸部6本歯の横位区画直線文→頸部縦位直線文2条→縦位波状文、横位波状文。内面は縦位のナデ。外面スス附着。	石英、角閃石	良好	外:灰黄褐色 内:にぶい黄褐色	P2 十王台式



第 67 図 80号住居跡

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
10	弥生土器 壺	- - -	頸部薄い隆帯で隆帯上・脇に竹管状工具による刺突文。 頸部4本歯の縦位羽状文(左上がり→右上がり)内面は 斜位のナデ。	石英	良好	外：にぶい黄褐色 内：明赤褐色	十王台式
11	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S・L・Z:上→下)。 内面は縦・斜位のナデ。外面胴部下位にスス、内面は胴 部下位に帯状のヨゴレ付着。	石英、長石、角閃 石、金雲母、骨針、 赤色粒	不良	淡黄色	十王台式

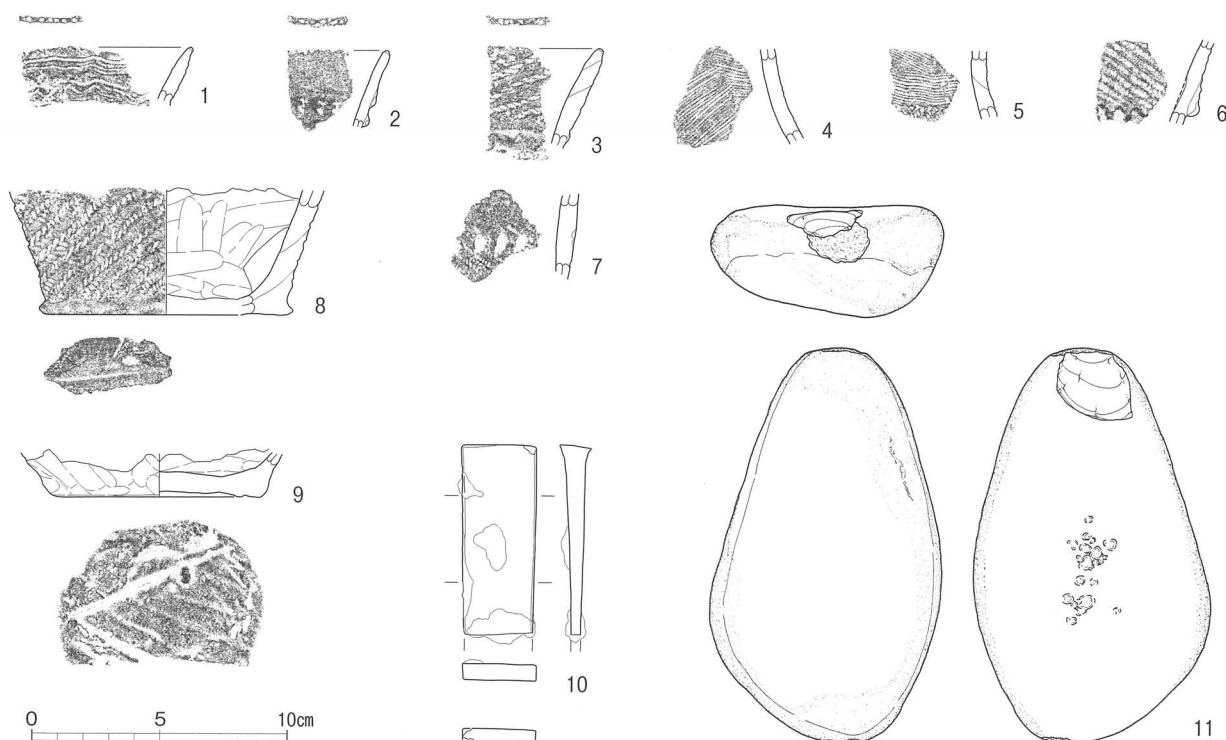


第 68 図 80号住居跡出土遺物

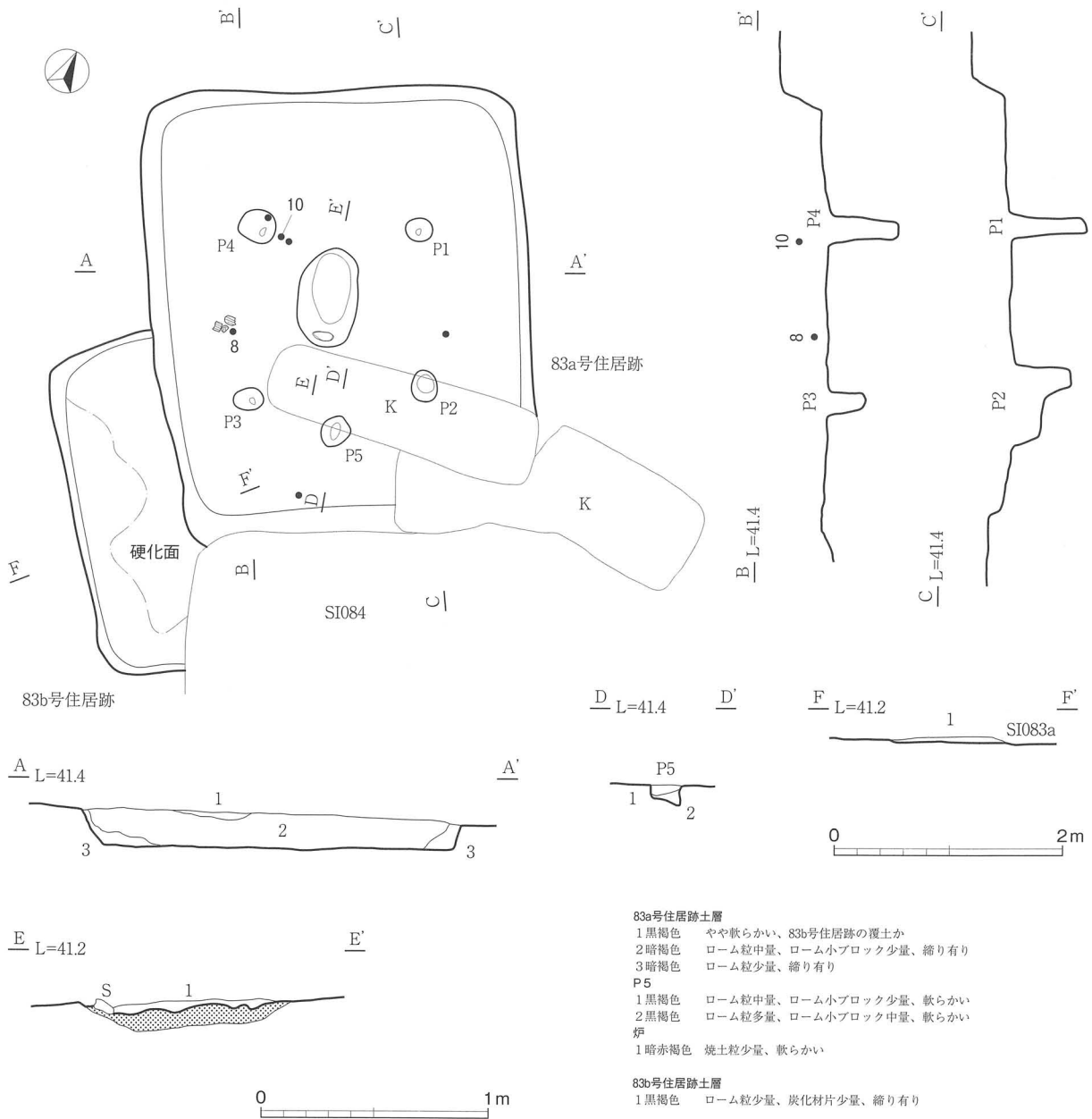
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
12	弥生土器壺	- - -	胴部附加条1種縄文(LR+R)→頸胴界3本歯の横位区画波状文ないし直線文。内面は横・斜位のナデ。	石英、長石、角閃石、金雲母、骨針、赤色粒	普通	にぶい黄橙色	
13	弥生土器壺	- - -	頸部無文帯(横位のナデ)。胴部附加条1種縄文(RL+2L)。内面は斜位のナデ。	多量の石英・長石	不良	外：にぶい黄色 内：灰黄色	P6 二軒屋式系
14	弥生土器壺	- - 8.8	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-Z:時計回り)。底部木葉痕。内面は横・斜位のナデ。内面全面にコゲ付着。	石英、長石、青灰色粒	普通	外：にぶい黄橙色 内：灰黄褐色	
15	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(r-S, l-Z)→頸部3本歯カの横位区画直線文→2個一對の円形貼付文×推定7~8単位。内面は器面荒れ。外面スス付着。	多量の石英・長石	普通	外：にぶい黄橙色 内：明褐色	二軒屋式系
16	石器 磨石類		磨→敲。自然礫の表・裏面に磨耗痕。左側面に顕著な敲打痕。上部部に剥離痕および磨耗痕。石材：石英安山岩。長さ9.25cm・幅7.4cm・厚さ3.5cm・重さ320.0g。				

83a号住居跡(第69・70図)

位置 A区中央部、・南東部N9・O9・N10・O10グリッドにある。規模と平面形 3.80×3.34mのやや縦長長方形。83b号住居跡に壁と覆土上層を掘りこまれている。主軸方向 N-30°-W 壁 壁高は約30cm、外傾して立ち上がる。床 全体にやや硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径90cm、短径32cmの楕円形で深さ5cm。覆土 ローム粒を含んだ締りのある暗褐色土が主に堆積している。遺物 遺物の出土量は少なく、小破片のみの出土である。十王台式主体であるが、5・6など二軒屋式系の比率がやや高い。9は底面に木葉痕を有する土師器の壺、10は鍛造品の板状鉄斧である。いずれも覆土2層中から出土している。所見 出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第69図 83a号住居跡出土遺物



第 70 図 83a・b号住居跡

表 31 83a 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部3本歯の横位波状文。内面は横位のナデ。外面スス附着。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	明赤褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部無文(横位のナデ)。頸部縄文原体(無節R)を押し捺した隆帯。内面は横位のナデ。	石英、骨針	普通	外: 黒褐色 内: にぶい褐色	
3	弥生土器 壺	- - -	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部軸縄不明の附加条縄文(L・S)。頸部薄い押し捺隆帯。内面は横位のナデ。	多量の石英・長石、骨針、赤色粒	普通	橙色	炉 十王台式

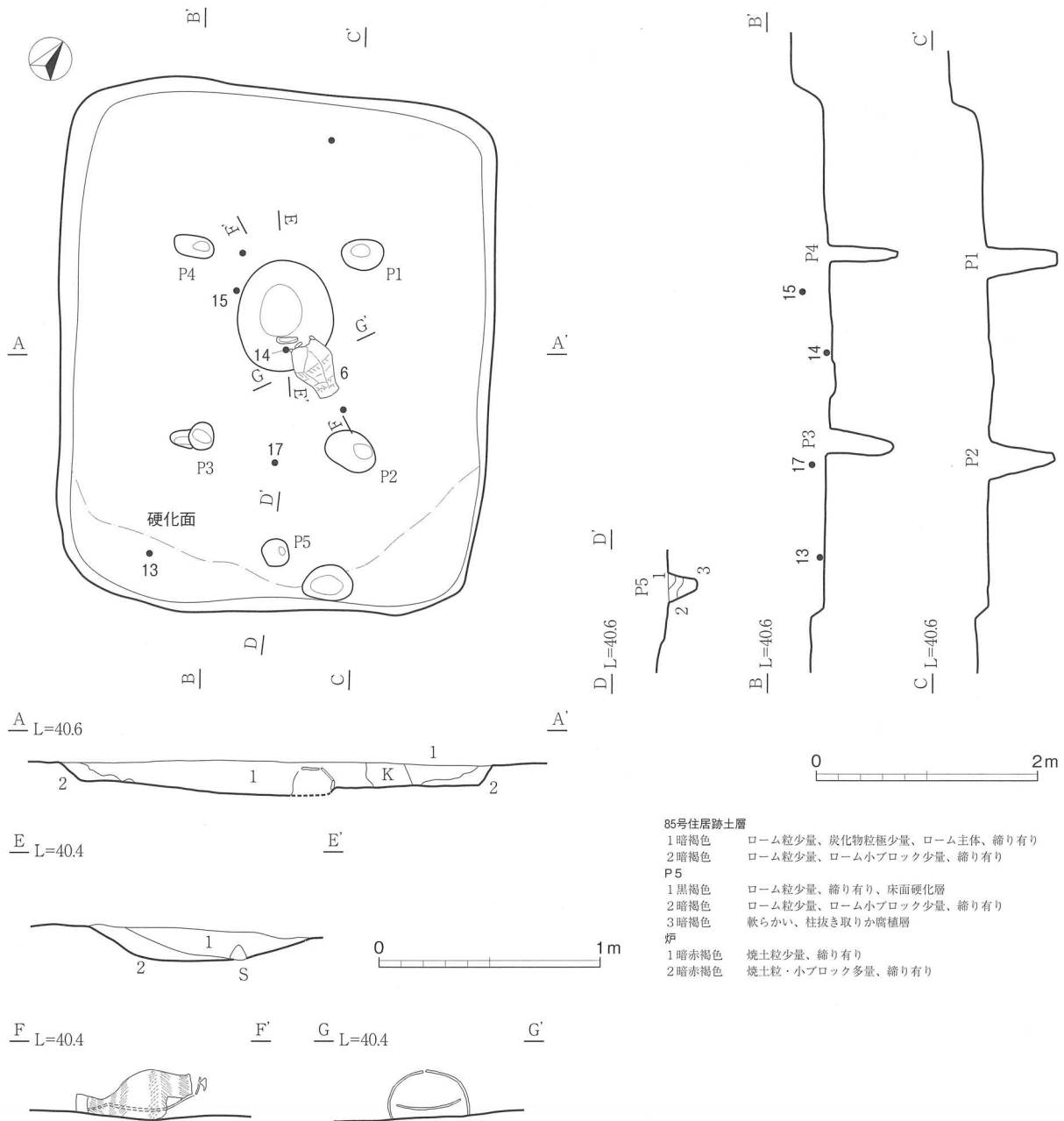
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器壺	- - -	頸部5本歯カの縦位羽状文(左上がり→右上がり)。内面は縦位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英	良好	外:にぶい黄橙色 内:褐灰色	十王台式
5	弥生土器壺	- - -	胴部附加条1種縄文(LR+2Rカ)→頸部10~11本歯の横位区画直線文ないし廉状文(時計回りカ)→下開き連弧文。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	二軒屋式
6	弥生土器壺	- - -	頸部縄文原体(無節L)を押捺した隆帯→口縁部軸縄不明の附加条縄文(L・Z)。頸部横位の波状文(歯数不明)。内面は剥落。	多量の石英・長石、角閃石	良好	外:明赤褐色 内:橙色	二軒屋式
7	弥生土器壺	- - -	頸部無文カ(横位のナデ)、軸縄不明の附加条縄文(L・Z)と同様の原体端部を列状に押捺。内面は斜位のナデ。	多量の石英・長石	普通	外:にぶい黄橙色 内:にぶい橙色	
8	弥生土器壺	- - -	胴部附加条2種縄文(RL+2Rカ)。胴部下端横位のナデ。底部木葉痕。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英、角閃石	良好	外:にぶい黄橙色 内:にぶい褐色	
9	土師器壺カ	- - -	胴部下端ヘラケズリ→ナデ。底部木葉痕。内面は横位のナデ。	石英、角閃石、多量の白色粒	良好	外:橙色 内:明赤褐色	
10	鉄製品鉄斧	- - -	長[7.5]、最大幅2.95、最小幅2.75、基部厚1.2。板状鉄斧(鍛造品)。刃部欠損。	-	-	-	
11	石器磨石類		敲→磨。自然礫の表・裏面に磨耗痕。上・下端部や裏面の一部に敲打痕。磨耗範囲は被熱により黒色に変色。石材:砂岩。長さ15.45cm・幅9.1cm・厚さ4.45cm・重さ819.0g。				炉石

85号住居跡(第71~73図)

位置 A区南東部O10グリッドにある。規模と平面形 4.76 × 3.90 mの長方形。主軸方向 N-34°-W 壁 壁高は約18cm。床 南側のコーナー部を除いて全体に硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径100cm、短径86cmの楕円形で深さ16cm。覆土 ロームを多く含んだ暗褐色土が堆積している。遺物 炉の南東側床面に、6の大型壺が横位で出土している。遺物の出土量は多く、中~大破片の割合が高い。十王台式前半期の土器を主体とするが、十王台式以外の土器も目立つ。4・5・10は二軒屋式系、16はS字結節文を施文する南関東系土器と考えられる。所見 出土遺物から、弥生時代後期の十王台式期の住居跡と考えられる。

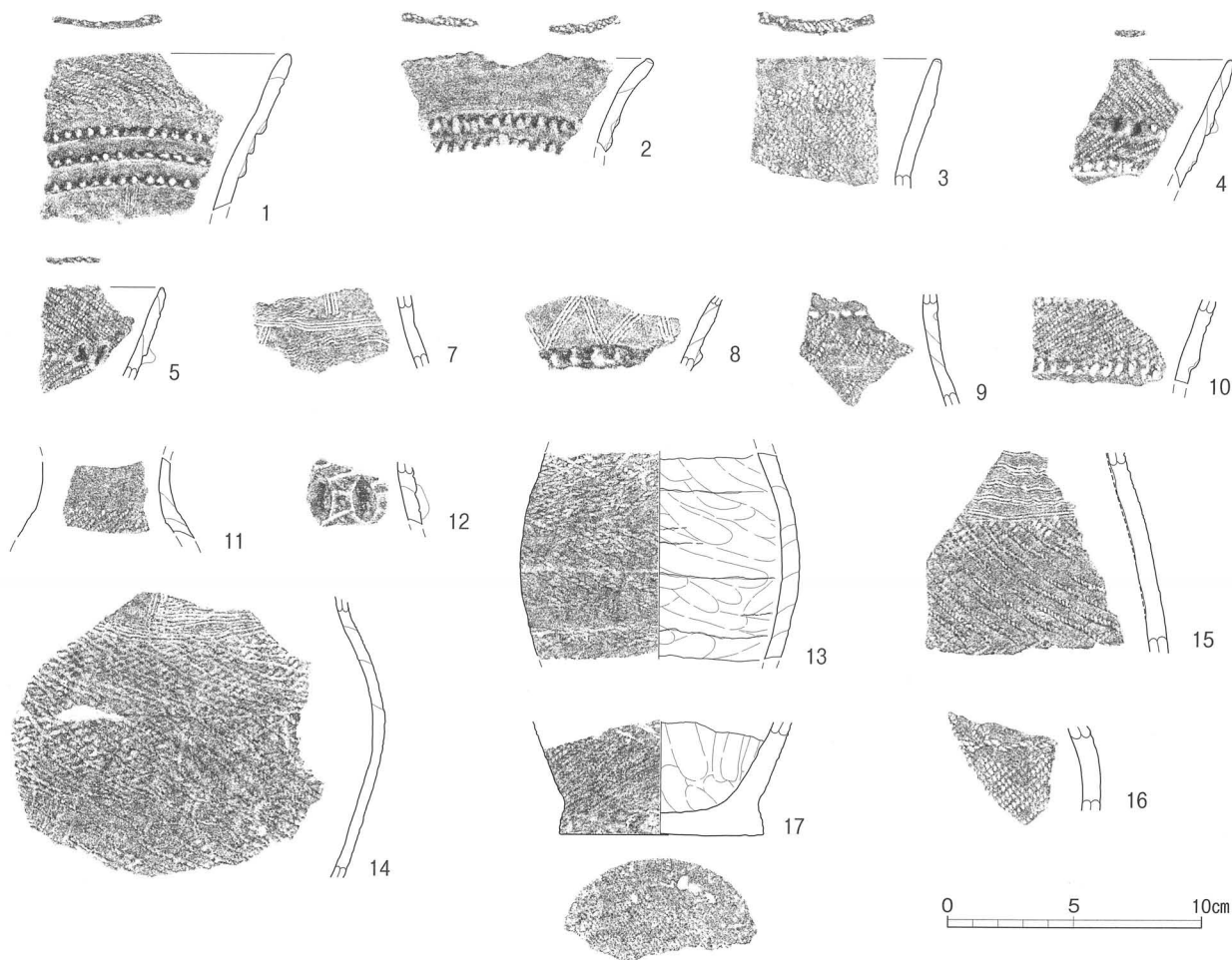
表32 85号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	- - -	口唇部縄文原体によるキザミカ。頸部縄文原体カによるキザミ隆帯3条→頸部5本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は口縁部横位のナデ、頸部斜位のナデ。	石英、骨針、赤色粒	普通	にぶい黄橙色	十王台式
2	弥生土器壺	- - -	口唇部縄文原体カキザミ。頸部竹管状工具による刺突のある隆帯→口縁部無文(横位のナデ)。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	普通	黒褐色	十王台式
3	弥生土器壺	- - -	口唇部縄文原体(単節RLカ)キザミ。口縁部単節縄文(RL)→口唇部付近横・斜位のナデ。内面は横位のナデ。	石英、骨針	良好	橙色	
4	弥生土器壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z)。口縁部下端に同様の原体によるキザミ→2個一対の貼付文。内面は横・斜位のナデ。5と同一固体カ。	多量の石英・長石	良好	橙色	二軒屋式
5	弥生土器壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z)→2個一対の貼付文。内面は横位のナデ。4と同一固体カ。	多量の石英・長石	良好	橙色	二軒屋式
6	弥生土器壺	- - 16.2	頸部丸棒状工具によるキザミ隆帯2条以上→頸~胴部附加条1種縄文(RL+L、LR+R)。頸部下位から上は下→上施文、頸部下位から下は上→下施文。底部砂痕カ。内面は底部付近縦位のナデ、他は剥落。	多量の石英・長石、角閃石、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	



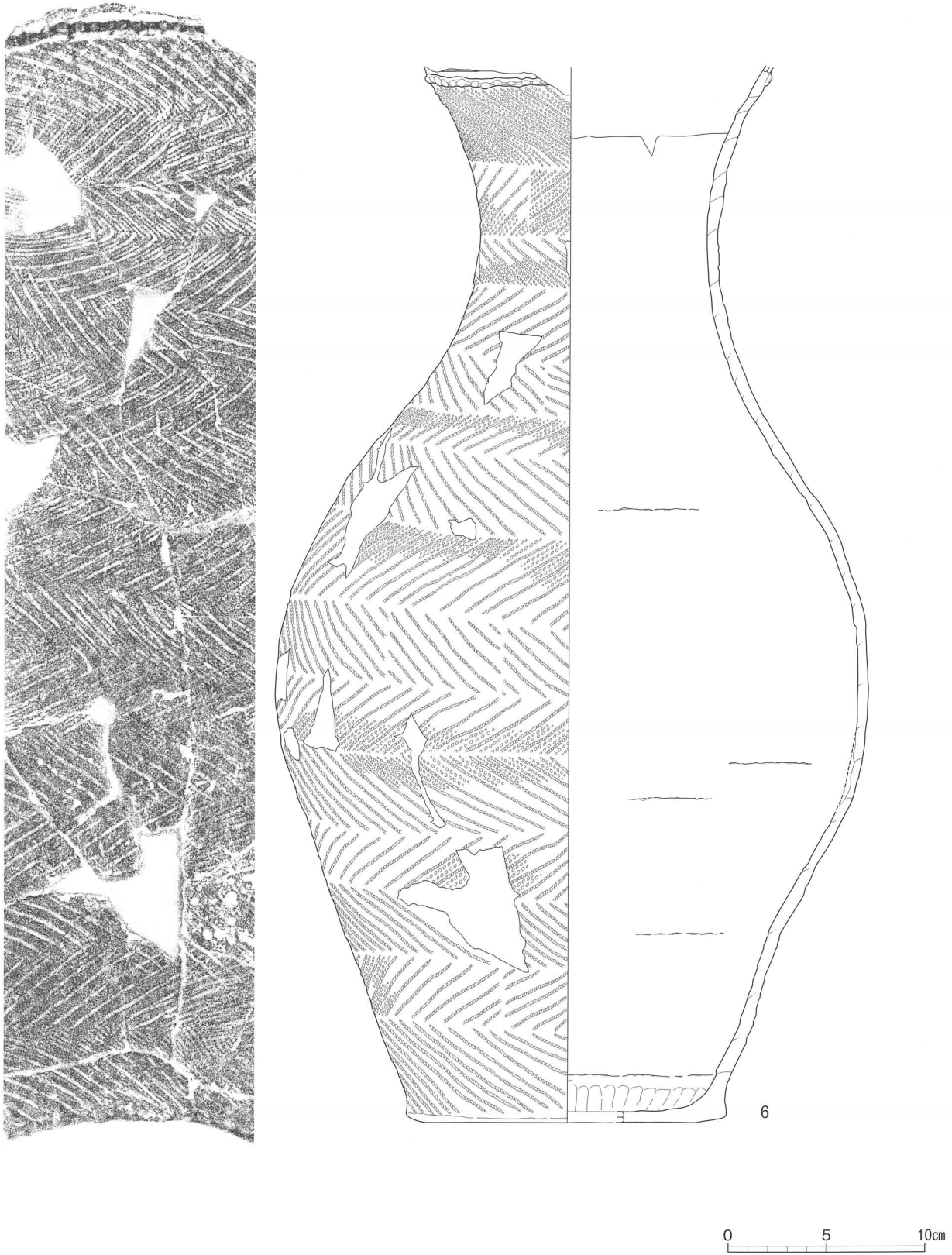
第 71 図 85号住居跡

図版番号	種別 器種	口径器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
7	弥生土器 壺	- - -	頸部4本歯の横位区画直線文→縦位直線文→横位波状文。内面は横位のナデ。	多量の石英・長石、骨針	普通	にぶい黄褐色	十王台式
8	弥生土器 壺	- - -	頸部押捺隆帯→口縁部3本歯の山形文（時計回り）。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	石英、長石、角閃石、多量の白色粒	不良	にぶい黄褐色	十王台式
9	弥生土器 壺	- - -	頸部無文帯（横位のナデ）を挟んで竹管状工具による刺突文2条、単節縄文（LR）。内面は横位のナデ。	石英、角閃石	普通	灰黄褐色	



第72図 85号住居跡出土遺物①

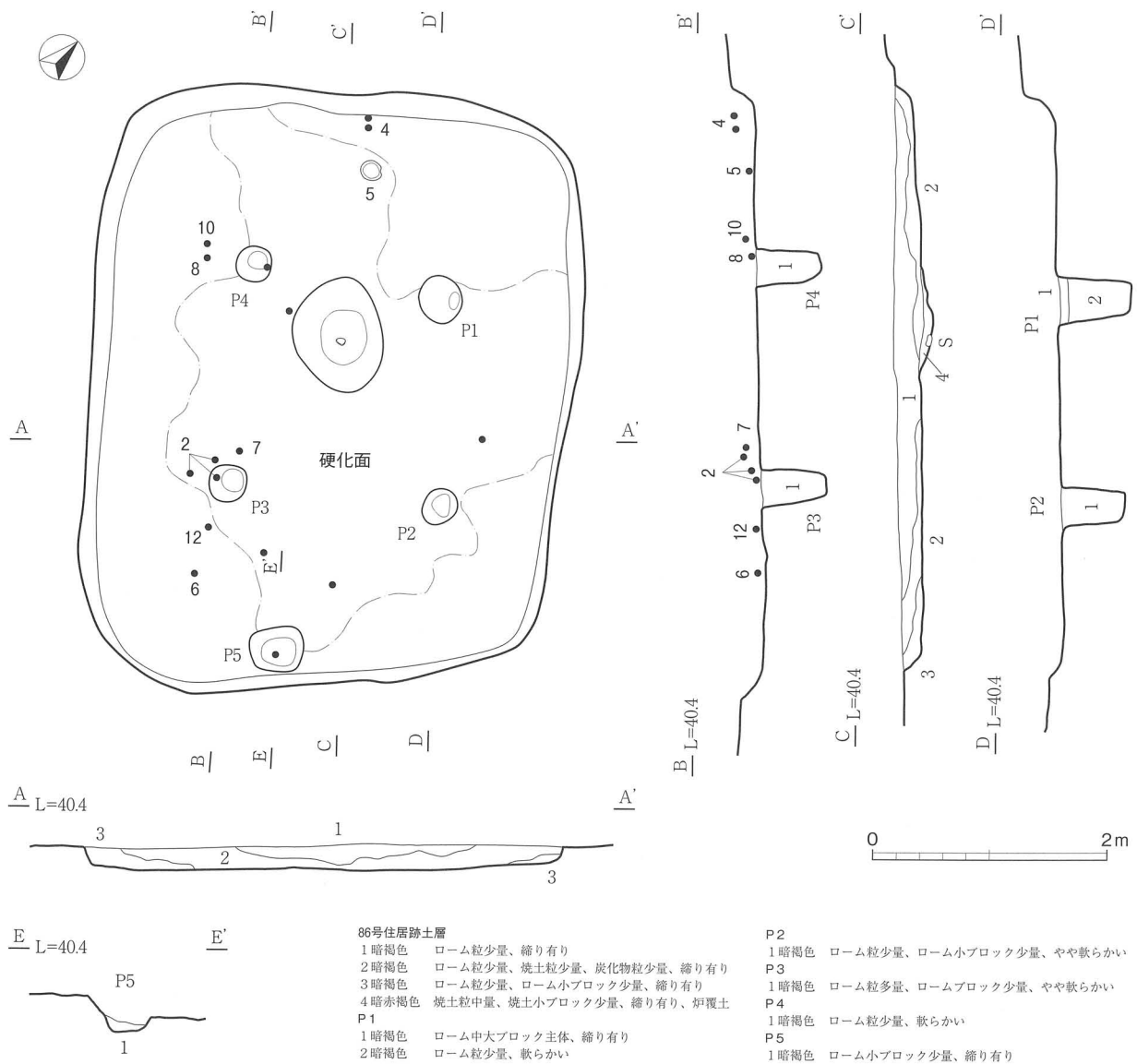
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
10	弥生土器 壺	- - -	口縁部附加条1種縄文(LR+2R)、口縁部下端に同様の原体によるキザミ。頸部2本歯以上の横位波状文。内面は横位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	良好	外：暗灰黄色 内：にぶい黄褐色	二軒屋式
11	弥生土器 壺	- - -	頸部無文帯(横位のナデ)。胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z)。内面は縦位のナデ、粘土紐接合部は横位のナデ。外面スス付着。	石英	良好	明黄褐色	
12	弥生土器 壺	- - -	頸部有段、附加条2種縄文(RL+2Lカ)。→2個一対の貼付文。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、骨針、赤色粒	普通	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	
13	弥生土器 壺	- - -	頸~胴部軸縄不明の附加条縄文(L・S、L・Z:下→上)。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・長石、角閃石	良好	橙色	
14	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条2種縄文(L+L)→頸胴界4本歯の横位区画波状文→頸部縦位直線文→横位波状文。内面は頸部斜位のナデ、胴部縦位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石、角閃石、骨針	良好	にぶい黄褐色	十王台式
15	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条2種縄文(L+L)と軸縄不明の附加条縄文(R・S)を下→上へ施文→頸胴界3本歯の横位区画直線文→横位波状文。内面は剥落。	石英、赤色粒	良好	外：にぶい黄褐色 内：橙色	十王台式
16	弥生土器 壺	- - -	胴部S字結節文、単節縄文(LR)。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石	良好	橙色	
17	弥生土器 壺	- (8.1)	胴部附加条1種縄文(L+Lカ)と軸縄不明の附加条縄文(L・Z)を下→上へ施文。胴部下端横位のナデ。底部布目痕→ナデ調整。内面は縦・斜位のナデ。	石英、角閃石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄色	



第73図 85号住居跡出土遺物②

86号住居跡（第74～76図）

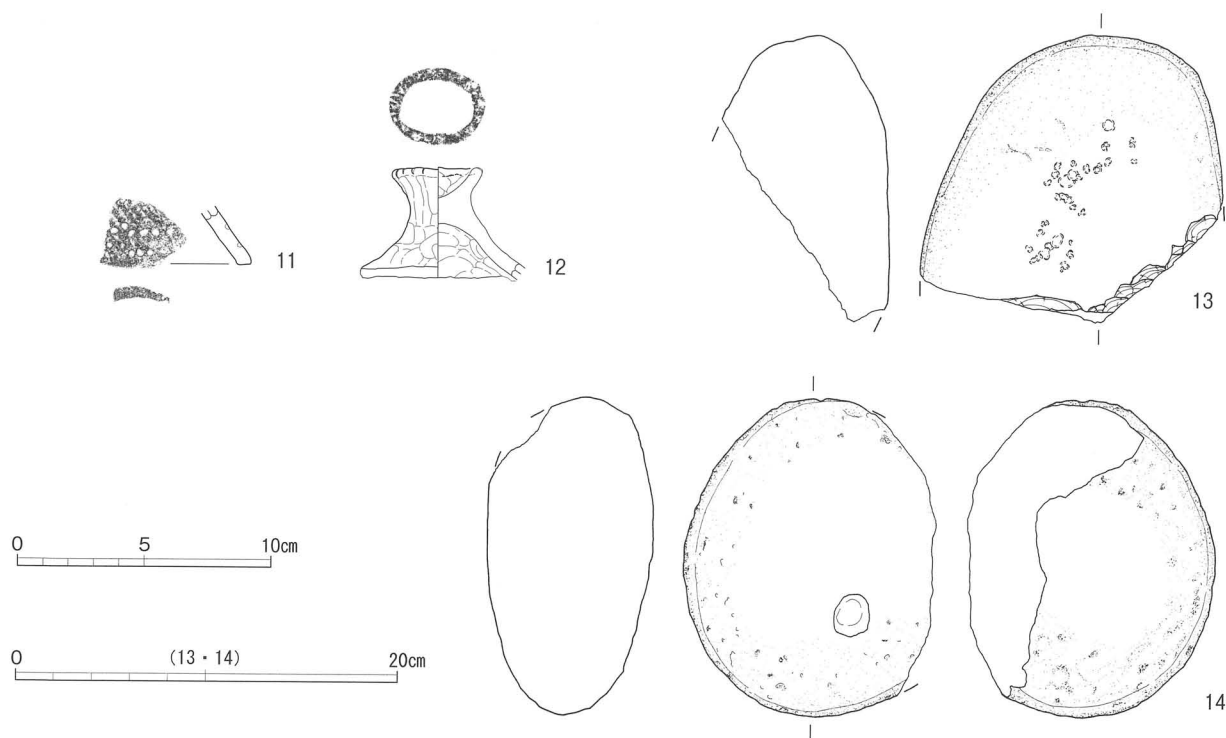
位置 A区南東部、O 10・O 11 グリッドにある。規模と平面形 5.08 × 4.92 mの隅丸長方形。主軸方向 N - 45° - W 壁 壁高は約 20cm、やや外傾して立ち上がる。床 住居のコーナー部と西壁際を除いて硬化している。ピット 5箇所。P 1からP 4は主柱穴。P 5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径 98cm、短径 73cmの楕円形で深さ 16cm。炉の中央やや南寄りに小型の炉石が設置されている。覆土 暗褐色土主体の自然堆積層。遺物 覆土中の遺物の出土量はやや多く、中～大破片の割合が高い。北壁中央部（4・5）、P 3周辺（2・6・7・12）、P 4周辺（8・10）に遺物の集中が認められる。4は壁際の1層上位、その他は1層下位～2層中より出土している。十王台式前半期の土器を主体とする。7は二軒屋式系、11は2列の円形刺突文が施文される高坏、12は蓋形土器と考えられる。所見 出土遺物から弥生時代後期の十王台式期の住居跡と考えられる。



第74図 86号住居跡



第75図 86号住居跡出土遺物①



第76図 86号住居跡出土遺物②

表33 86号住居跡出土遺物観察表

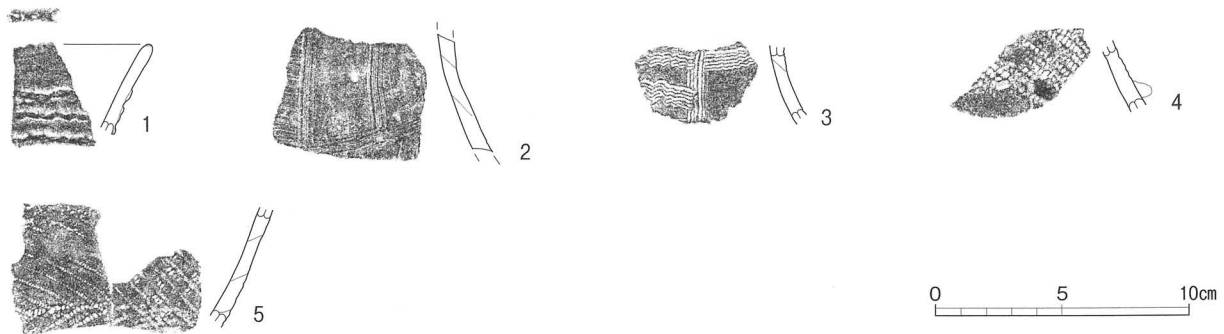
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。頸部丸棒状工具によるキザミ隆帯3条→口縁部4本歯の横位波状文、頸部縦位直線文。内面は横位のナデ。外面スス附着。	石英、角閃石、赤色粒	良好	外：黒褐色 内：灰褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条2種縄文（RL+R、LR+2L：下→上、反時計回り）→頸部3本歯の横位区画直線文→頸部縦位直線文→縦位羽状文（左→右、下→上）、振り幅の小さい横位波状文。内面は縦・斜位のナデ。	石英、角閃石、骨針、多量の白色粒	良好	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	頸部造り出しの押捺隆帯3条→口縁部・頸部3本歯の横位波状文。内面は縦位のナデ。外面スス附着。	石英	普通	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文（R-S、R-Z：下→上）。内面は横・斜位のナデ。	石英	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい赤褐色	十王台式
5	弥生土器 壺	- - 9.75	胴部軸縄不明の附加条縄文（R-Z、L-S）。胴部下端横位のナデ。底部布目痕。内面は底部付近横位のナデ、他は縦・斜位のナデ。	石英、角閃石、骨針	良好	橙色	十王台式
6	弥生土器 壺	- - 7.1	胴部附加条1種縄文（R+R、L+L：上→下、時計回り）。胴部下端横位のナデ。底部布目痕（格子状の圧痕あり）。内面は縦・斜位のナデ。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	
7	弥生土器 壺	- - 8.1	胴部附加条1種縄文（LR+2R：反時計回り）。底部木葉痕（中央部ナデ消し）。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面全面ヨグレ附着。	多量の石英・長石	普通	にぶい黄褐色	二軒屋式
8	弥生土器 壺	- - 6.3	胴部附加条1種縄文（RL+2L）。底部布目痕。内面は横位のナデ。外面スス、内面帯状のヨグレ附着。	石英、骨針、多量の白色粒。	不良	にぶい黄褐色	
9	弥生土器 壺	- - (7.8)	胴部附加条2種縄文（L+Lカ、R+Rカ：下→上）。底部布目痕（粘土附着）。内面は横・斜位のナデ。	石英	普通	外：にぶい黄褐色 内：浅黄色	十王台式
10	弥生土器 壺	- - (7.6)	胴部軸縄不明の附加条縄文（L-Z）。底部ナデ調整（光沢を帯びる）。内面は横位のナデ。内面コゲ附着。	多量の石英・長石	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	

第IV章 A区の遺構と遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
11	弥生土器 高坏	- - -	脚部軸繩不明の附加条縄文(L・Z)→竹管状工具による刺突文2条。脚端部布目痕。内面は横位のナデ。	石英	良好	外：にぶい橙色 内：にぶい褐色	
12	弥生土器 蓋	- - -	摘み口唇部爪カによるキザミ。摘み部縦位のナデ→横位のナデ、受け部縦位のナデ。内面は摘み・受け部とも斜位のナデ。受け部の破損面再加工カ。摘み径3.3cm。	石英、角閃石	良好	明赤褐色	
13	石器 台石		敲→磨。欠損品。大型礫の表面中央に磨耗痕および敲打痕。下端部に欠損後の剥離痕。 石材：砂岩。残存長15.15cm・残存幅15.85cm・残存厚8.7cm・重さ2288.1g。				
14	石器 磨石類		磨→凹。欠損品。自然礫の表・裏面中央に磨耗痕。表面下部に凹穴。 石材：石英安山岩。残存長12.5cm・残存幅9.75cm・厚さ6.55cm・重さ1026.7g。				

88号住居跡（第77・78図）

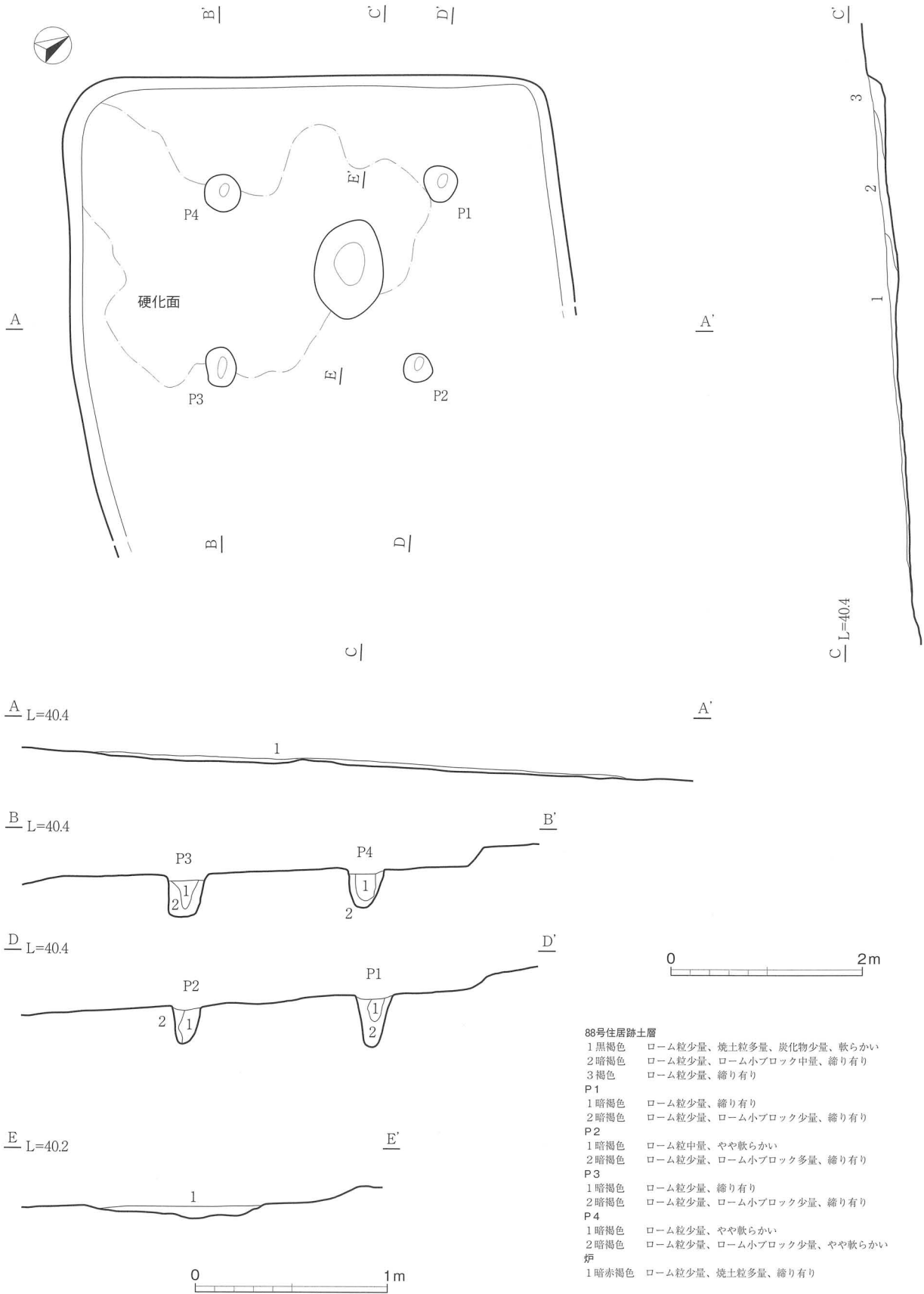
位置 A区南東部、O9・P9グリッドにある。規模と平面形 5.22 × (4.60) mで東側が地形傾斜によって削平されている。主軸方向 N-30°-E 壁 壁高は約6cm。床 炉の周囲から南西側が特に硬化している。ピット 4箇所。P1からP4は支柱穴。炉 長径104cm、短径72cmの楕円形で深さ6cm。覆土 褐色土主体の堆積土が床上を薄く覆っている。遺物 覆土から弥生土器の壺片が出土している。遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみの出土である。十王台式主体で4は単節RL縄文を施文する。所見 出土遺物と炉や柱穴の配置関係から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第77図 88号住居跡出土遺物

表34 88号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部縄文カキザミ。口縁部無文(横位のナデ)。頸部薄い押捺隆帯。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	頸部7～8本歯の横位区画直線文→頸部縦位直線文を繰り返して頸部横位直線文ないし、波状文。内面は横・斜位のナデ、器面荒れ。	多量の石英・長石、金雲母、骨針	普通	外：にぶい褐色 内：明褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	頸部6本歯の縦位直線文→横位波状文、スリット内に横位波状文1条。内面は縦位のナデ→横位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	普通	外：黒褐色 内：にぶい褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	頸部単節縄文(RL)、無文帯(横位のナデ)→円錐状の貼付文。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石、金雲母、多量の白色粒	良好	にぶい黄褐色	
5	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条1種縄文(RL+2L、LR+2R:下→上)。内面は斜位のナデ。内面全面濃いヨゴレ付着。	石英	普通	外：にぶい橙色 内：黒褐色	

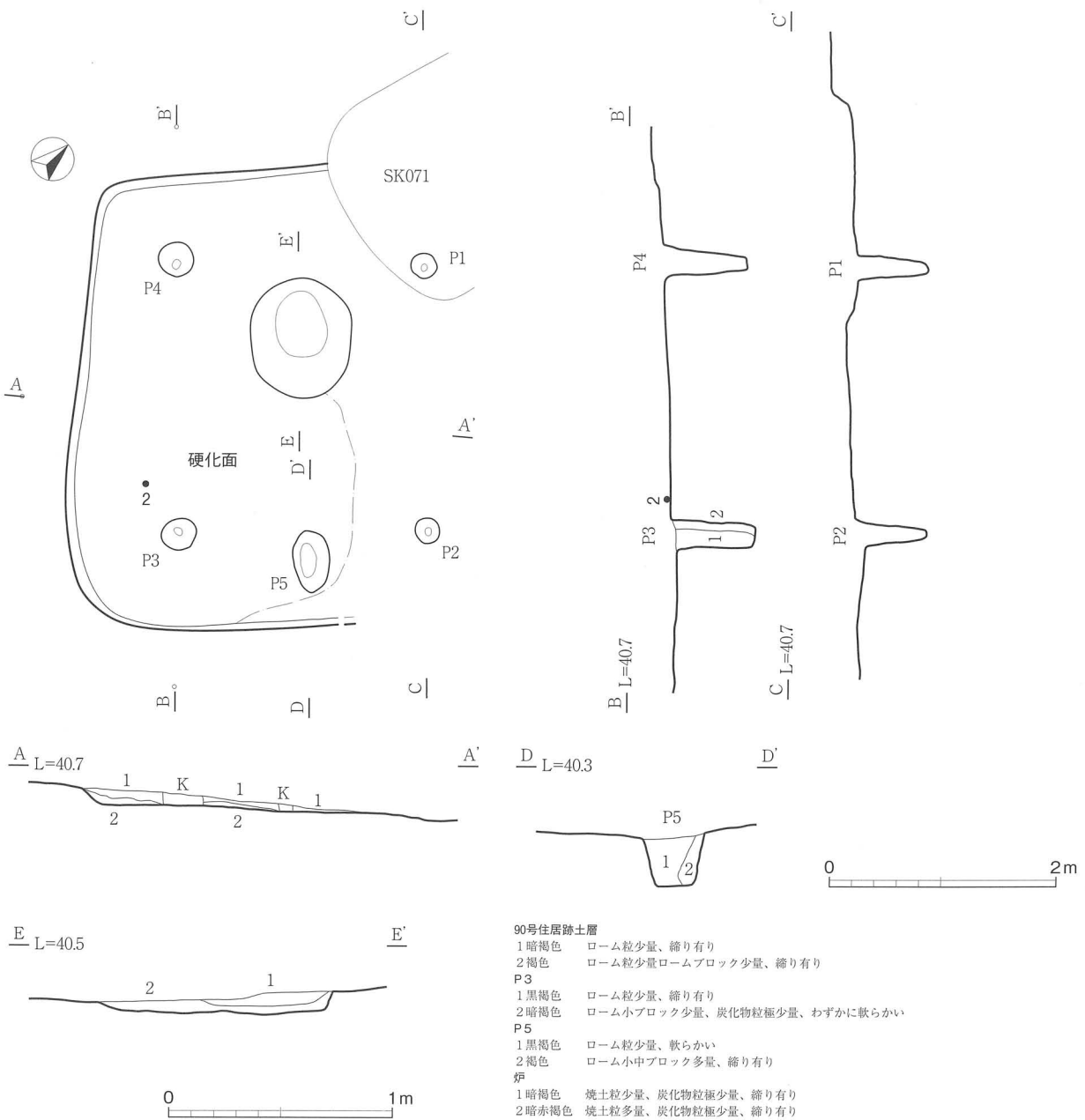


- 88号住居跡土層
- 1 黒褐色 ローム粒少量、焼土粒多量、炭化物少量、軟らかい
 - 2 暗褐色 ローム粒少量、ローム小ブロック中量、締り有り
 - 3 褐色 ローム粒少量、締り有り
 - P1
 - 1 暗褐色 ローム粒少量、締り有り
 - 2 暗褐色 ローム粒少量、ローム小ブロック少量、締り有り
 - P2
 - 1 暗褐色 ローム粒中量、やや軟らかい
 - 2 暗褐色 ローム粒少量、ローム小ブロック多量、締り有り
 - P3
 - 1 暗褐色 ローム粒少量、締り有り
 - 2 暗褐色 ローム粒少量、ローム小ブロック少量、締り有り
 - P4
 - 1 暗褐色 ローム粒少量、やや軟らかい
 - 2 暗褐色 ローム粒少量、ローム小ブロック少量、やや軟らかい
 - 炉
 - 1 暗赤褐色 ローム粒少量、焼土粒多量、締り有り

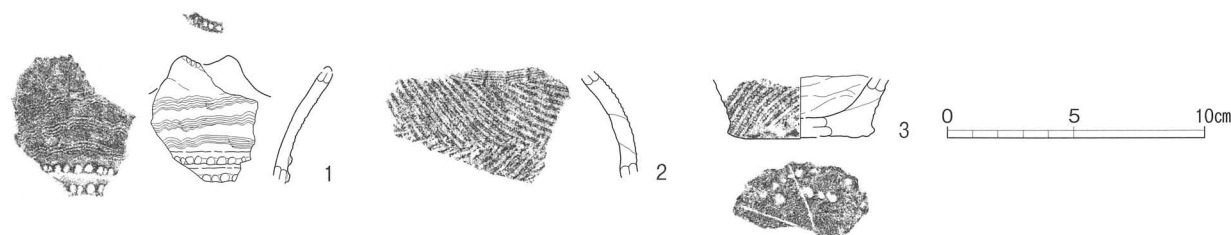
第78図 88号住居跡

90号住居跡（第79・80図）

位置 A区南東部、O8グリッドにある。規模と平面形 4.14 × (2.50) m。主軸方向 N - 48° - W
 壁 壁高は約14cm、外傾気味に立ち上がる。床 床面東側が地形の傾斜によって削平されている。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径108cm、短径88cmの楕円形で深さ9cm。覆土 自然堆積と考えられる暗褐色～褐色土が堆積している。遺物 床面直上から2の壺胴部片が出土している。遺物の出土量は非常に少なく、小破片の割合が高い。1は十王台式の片口壺、2・3は二軒屋式系の土器である。所見 出土遺物と炉や柱穴の配置関係から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第79図 90号住居跡



第80図 90号住居跡出土遺物

表35 90号住居跡出土遺物観察表

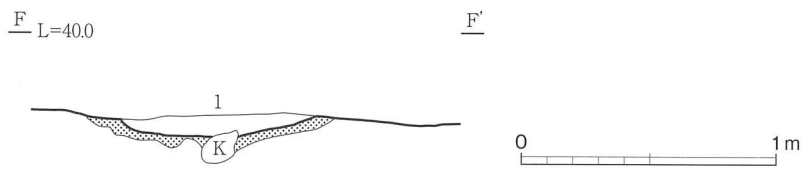
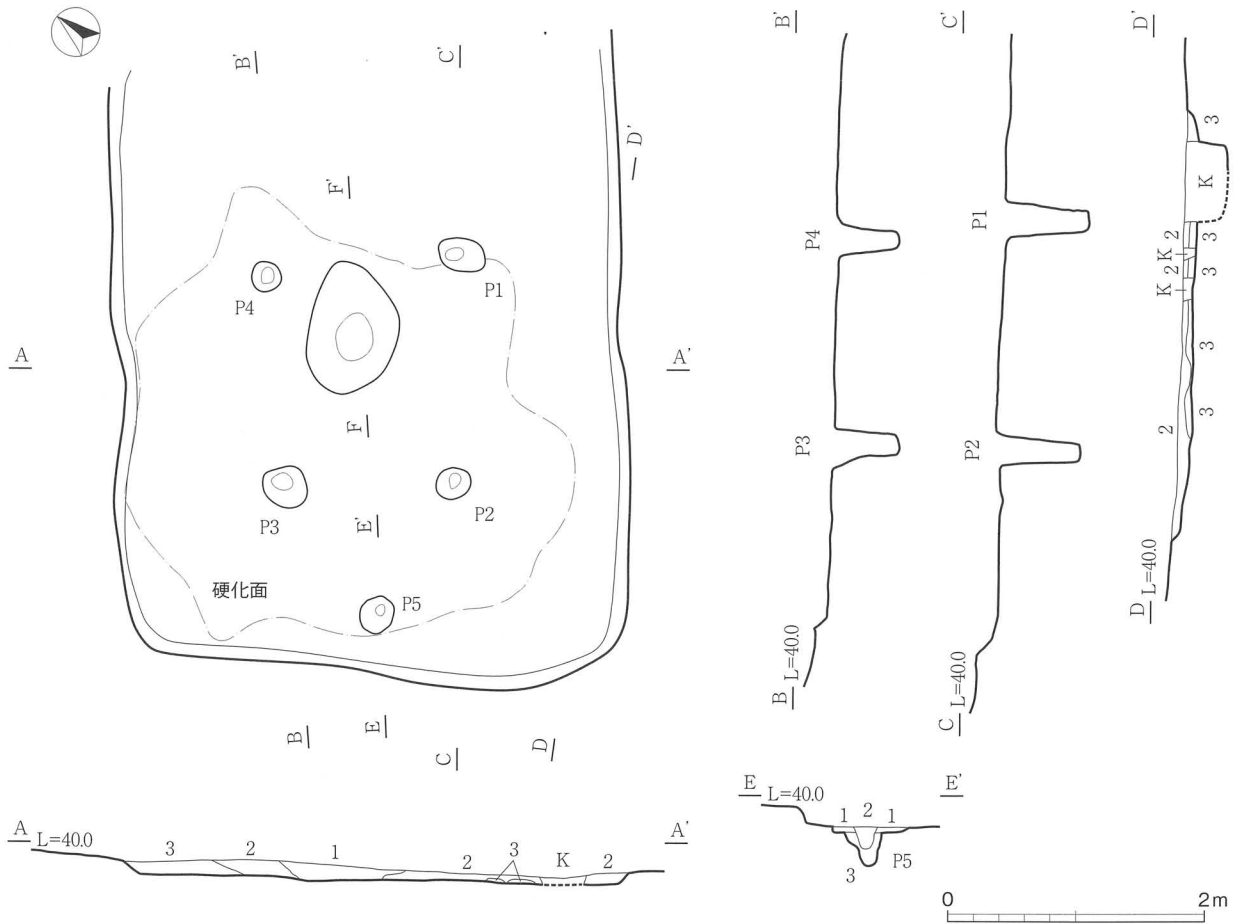
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	片口壺。口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部4本歯の横位波状文。頸部口唇部と同様のキザミ隆帯。内面は(横・斜位のナデ)。注ぎ口付近に黒斑。	石英、角閃石、赤色粒	普通	にぶい黄橙色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条1種縄文(RL+2L, LR+2R:上→下)。→頸部5本歯以上の等間隔止め縹状文(時計回り)。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・長石	良好	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄橙色	二軒屋式
3	弥生土器 壺	- - (5.8)	胴部附加条1種縄文(LR+2R)。底部木葉痕。内面は横・斜位のナデ。	石英	普通	外:にぶい黄褐色 内:灰黄色	二軒屋式

93号住居跡(第81図)

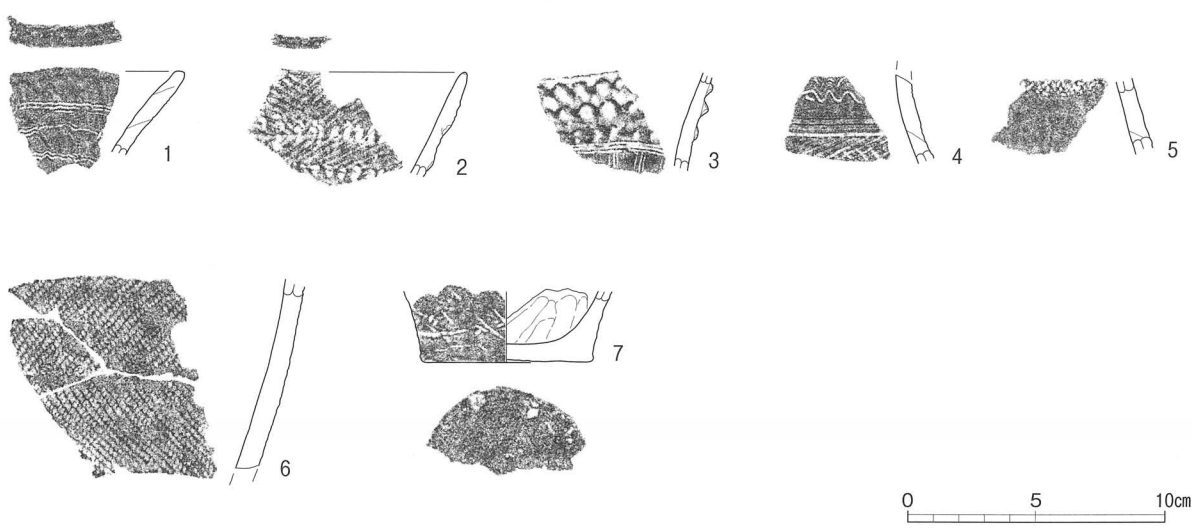
位置 A区南東部、P9・P10グリッドにある。規模と平面形(5.00)×4.10m 主軸方向 N-50°-E 壁 壁高は約10cmである。床 主柱穴から出入口ピットにかけて全体に硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径104cm、短径72cmの楕円形で深さ14cm。覆土 - 遺物 遺物の出土量は少なく、小~中破片の割合が高い。十王台式前半期の土器を主体とするが、二軒屋式(2・4・5)の比率も高い。所見 出土遺物や遺構の形態から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

表36 93号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部施文不明。口縁部3本歯の横位波状文。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	普通	外:褐灰色 内:にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部縄文カキザミ。有段口縁を呈し、口縁部上段は軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z:反時計回り)を横位施文し、縦位の羽状構成をなす。下段は軸縄不明の附加条縄文(R・S)を横位施文。口縁部下端は縄文原体によるキザミ。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英、長石	普通	外:にぶい黄色 内:にぶい黄褐色	二軒屋式
3	弥生土器 壺	- - -	頸部厚い押捺隆帯(上下から押捺)3条→隆帯直下に3本歯の横位区画直線文→頸部縦位直線文。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	石英	普通	外:灰黄褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Zカ)→頸部7~8本歯の横位区画直線文、頸部波状文。内面は横位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石、赤色粒	普通	外:灰黄褐色 内:にぶい黄褐色	二軒屋式
5	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条1種縄文(LR+2R)→頸部無文帯(縦位のナデ→横位のナデ)。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・長石	良好	外:にぶい褐色 内:褐色	二軒屋式
6	弥生土器 壺	- - -	胴部単節縄文(RL, LR)を横位施文。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石、赤色粒、多量の白色粒	普通	外:にぶい褐色 内:にぶい黄褐色	
7	弥生土器 壺	- - (6.6)	胴部附加条2種縄文(L+L)。底部布目痕→ナデ調整。内面は斜位のナデ。内面ヨゴレ付着。	石英、長石、角閃石、赤色粒	普通	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式



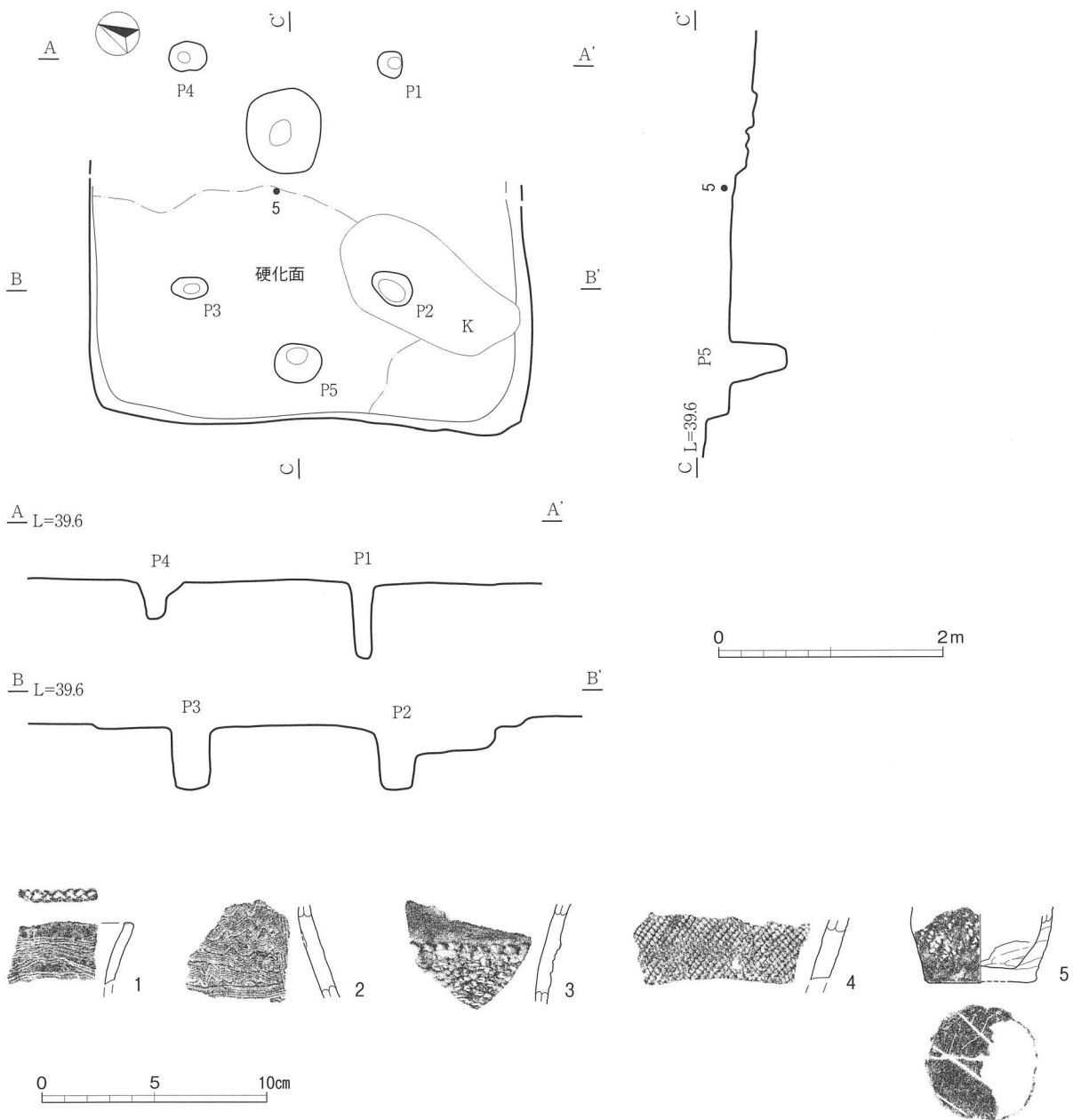
- 93号住居跡土層
- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒少量、やや軟らかい
 - 2 暗褐色 ローム主体、ローム小中ブロック多量、締り有り
 - 3 暗褐色 ローム主体、ローム小中ブロック多量、締り有り
- P5
- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量、締り有り
 - 2 黒褐色 ローム粒少量、やや軟らかい
 - 3 褐色 ローム主体、やや軟らかい
- 炉
- 1 暗褐色 焼土小ブロック少量、炭化物少量、やや軟らかい



第 81 図 93号住居跡・出土遺物

96号住居跡（第82図）

位置 A区の南東部P9グリッドにある。規模と平面形 3.86 × (3.40) mで、94号住居跡に壁の一部が壊されている。主軸方向 N-63°-E 壁 壁高は約20cm残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居の西側半分は硬化面が残存しているが、東半分は傾斜地形によって削平されている。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径76cm、短径66cmの楕円形で深さ6cm。覆土 西壁際に暗褐色のやや軟らかい覆土が堆積している。遺物 遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみの出土である。覆土中から5の壺底部片が出土している。4は単節LR縄文を施文する。所見出土遺物や遺構の形態から、弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第82図 96号住居跡・出土遺物

表 37 96号住居跡出土遺物観察表

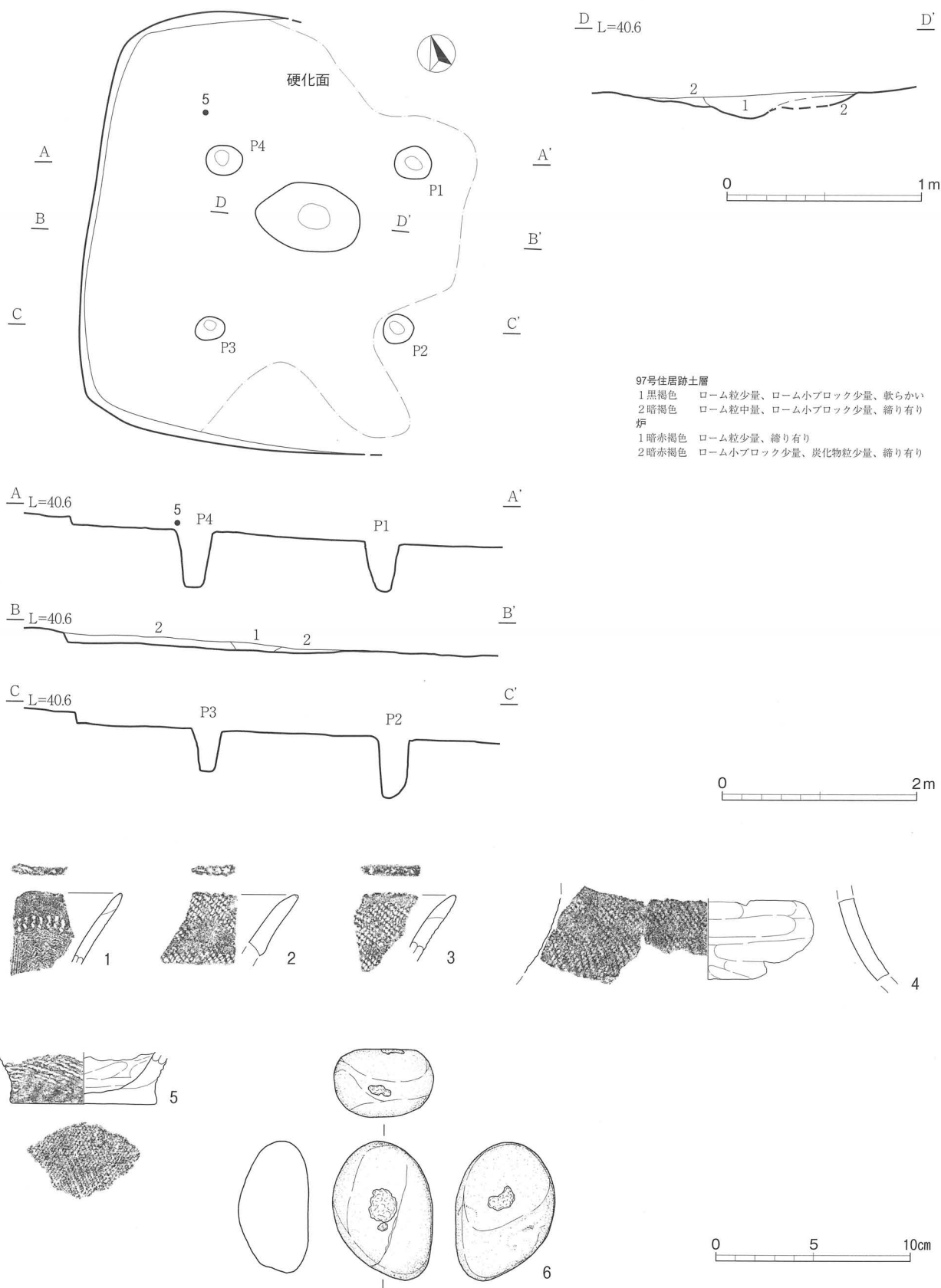
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	- - -	口唇部縄文キザミ(単節R Lカ)。口縁部5本歯の横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。	石英	普通	オリーブ黒色	
2	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-Zカ)。頸胴界6本歯の横位区画直線文→頸部縦位直線文→振り幅の大きい横位波状文(下→上)。内面は器面荒れ。	石英、長石、多量の白色粒	不良	外：にぶい黄褐色 内：明赤褐色	十王台式
3	弥生土器壺	- - -	口縁部無文(横位のナデ)。頸部押捺+縄文カキザミ隆帯1条→胴部軸縄不明の附加条縄文(R-Z)。内面は縦・斜位のナデ→横位のナデ。外面スス付着。	石英	良好	にぶい褐色	十王台式
4	弥生土器壺	- - -	胴部単節縄文(L R)を横位施文。内面は斜位のナデカ、器面荒れ。	石英、長石、角閃石	普通	外：にぶい黄褐色 内：橙色	
5	弥生土器壺	- - 4.85	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S)。胴部下端縦位のナデ。底部木葉痕。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。黒斑2箇所。	石英、長石、多量の白色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：明黄褐色	

97号住居跡(第83図)

位置 A区の南東部O9グリッドにある。規模と平面形 4.96 × (3.60) m。主軸方向 N - 25° - E
 壁 壁高は約14cm残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。床 床面全体が硬化している。ピット 4箇所。
 P1からP4は支柱穴。炉 長径108cm、短径70cmの楕円形で深さ11cm。覆土 下層にはロームの含有の多い暗褐色土が堆積している。遺物 遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみの出土である。十王台式後半期の土器を主体とする。1は頸部に帯状刺突文が施文される。単節縄文を施文する個体(2~4)が目立つ。5の壺底部は床面から出土している。所見 柱穴の配置と炉の位置、出土遺物などから弥生時代後期十王台式期後半の竪穴住居跡と考えられる。

表 38 97号住居跡出土遺物観察表

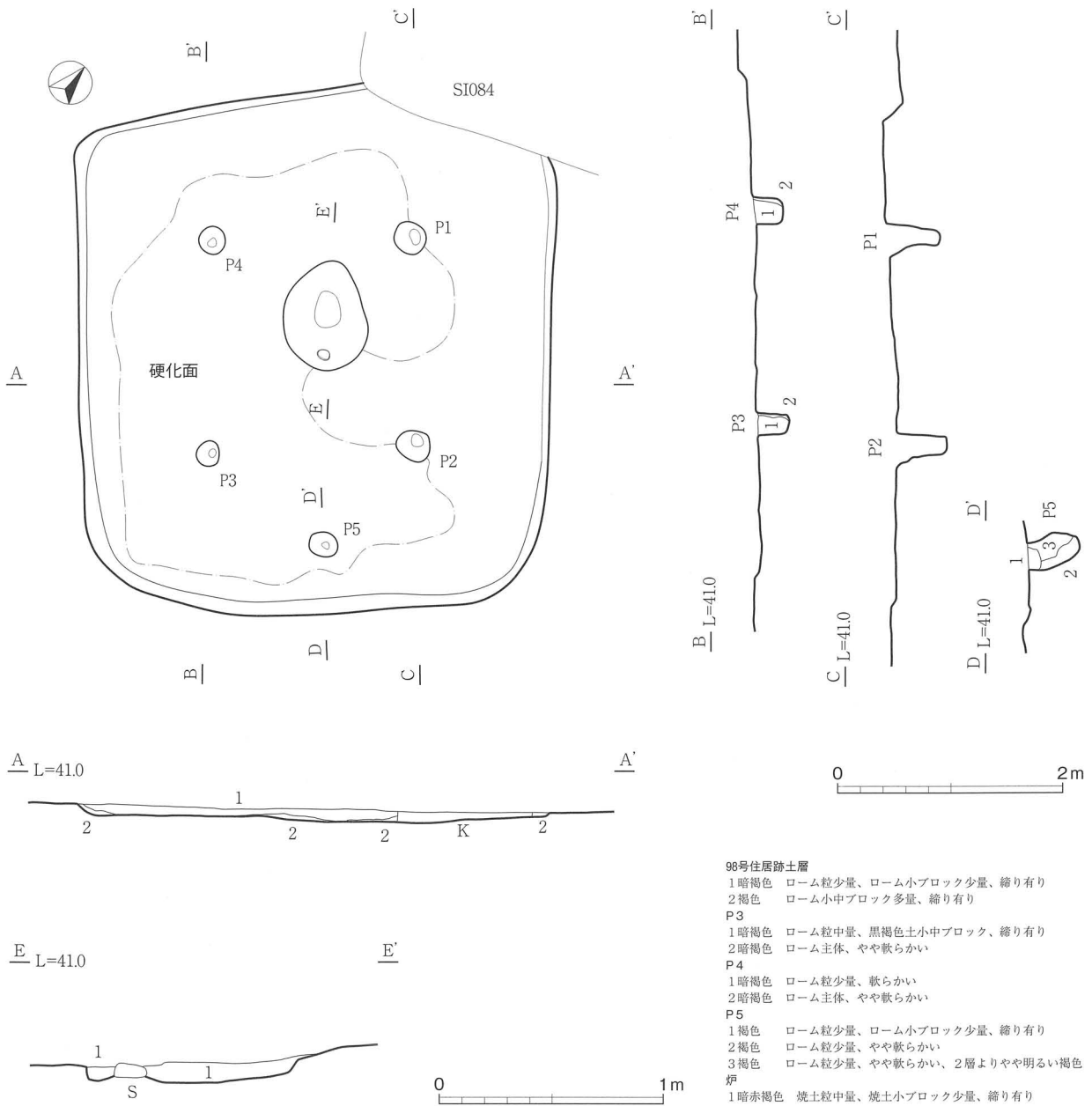
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部無文(横位のナデ)、縄文原体(無節Rカ)による押捺文2条。頸部6本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は頸部斜位のナデ→口縁部横位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部単節縄文(R L)を横位施文。内面は横位のナデ。	石英	普通	にぶい黄褐色	
3	弥生土器壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部横位のナデ、単節縄文(R L)を横位施文。内面は横位のナデ。	石英	普通	にぶい黄褐色	
4	弥生土器壺	- - -	頸部単節縄文(R L)を横・斜位施文。内面は横位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英、多量の白色粒	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	
5	弥生土器壺	- - (7.4)	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-Z)。底部布目痕(粘土付着)。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着、内面コゲ・ヨゴレ付着。	石英、多量の白色粒	良好	にぶい褐色	十王台式
6	石製品 磨石類		小型礫の表・裏面や上部に敲打痕。 石材：輝緑岩。長さ7.1cm・幅5.1cm・厚さ3.55cm・重さ186.1g。				



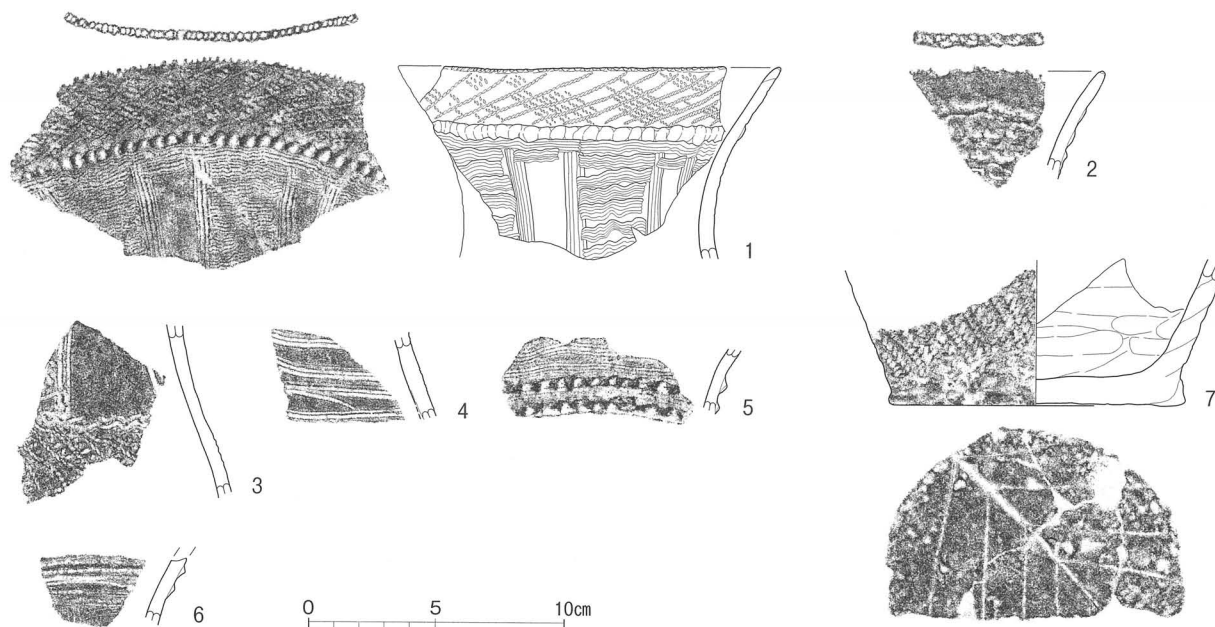
第83図 97号住居跡・出土遺物

98号住居跡 (第84・85図)

位置 A区の南東部O 10グリッドにある。 **規模と平面形** 4.76 × 4.24 m。 **主軸方向** N - 44° - W
壁 壁高は約10cm。 **床** 住居中央から南側にかけて硬化している。 **ピット** 5箇所。P1からP4は
 支柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。 **炉** 長径100cm、短径76cmの楕円形で深さ18cm。 **覆**
土 締りのある暗褐色～褐色土が堆積している。 **遺物** 遺物の出土量は少なく、小～中破片の割合が高い。
 十王台式を主体とするが、新旧の個体が混在する。 **所見** 出土遺物などから弥生時代後期後半の竪穴住居
 跡と考えられる。



第84図 98号住居跡



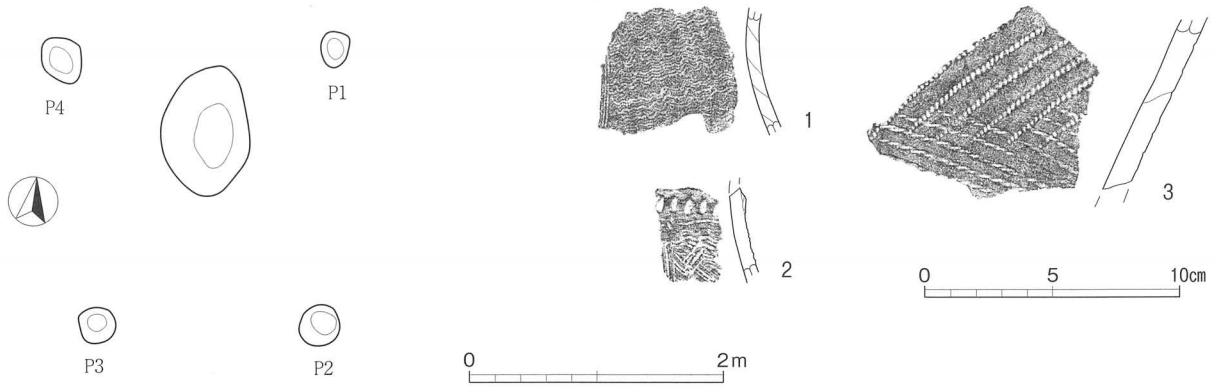
第 85 図 98号住居跡出土遺物

表 39 98号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部押捺隆帯1条→口縁部附加条2種縄文(RL+R)。隆帯直下に5本歯の横位区画波状文→頸部縦位直線文2条一単位→横位波状文(上→下)。内面は頸部斜位のナデ→口縁部横位のナデ。外面濃いスス附着。	石英、骨針	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい黄色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部縄文キザミ。口縁部無文(横位のナデ)。頸部薄い押捺隆帯3条→3本歯以上の横位波状文。内面は斜位のナデ。外面スス附着。	石英、金雲母	普通	灰黄褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条2種縄文(L+L)→頸部3本歯の横位区画波状文→頸部縦位直線文2条一単位→横位波状文。内面は横位のケズリ→縦位のナデ。	石英、金雲母、骨針、赤色粒	普通	灰黄褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	頸部3本歯の横位直線文。内面は横位のナデ、器面荒れ。	石英、角閃石、多量の白色粒	良好	外：明褐色 内：橙色	
5	弥生土器 壺	- - -	頸部厚い押捺隆帯→3本歯の横位直線文ないし、波状文。内面は斜位のナデ。	多量の石英・白色粒	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十王台式
6	弥生土器 壺	- - -	頸部無文の隆帯(断面三角形)→3~4本歯の縦位直線文、横位波状文。内面は斜位のナデ。	石英	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	- - 11.5	胴部単節縄文(RL)を斜位施文。胴部下端横位のナデ。底部木葉痕。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・長石・骨針、赤色粒	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	

99号住居跡(第86図)

位置 A区の南東部N9グリッドにある。規模と平面形 ピットと炉が確認されている。主軸方向 N-13°-W 壁 - 床 削平されて残存していない。ピット 4箇所。P1~P4は主柱穴。炉 縦長の楕円形で、火床面は焼土化している。覆土 - 遺物 遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみの出土である。所見 柱穴の配置と炉の位置から弥生時代後期後半の竪穴住居跡と考えられる。



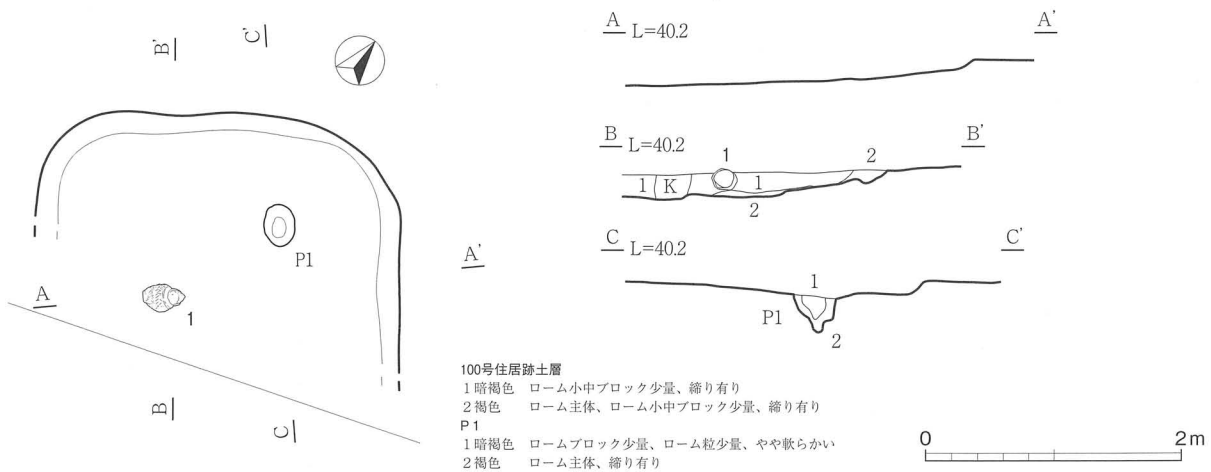
第 86 図 99号住居跡・出土遺物

表 40 99号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	頸部7本歯の縦直線文→横位波状文(下→上)。内面は斜位のヘラナデカ→縦位のヘラナデカ。外面スス附着。	多量の石英・白色粒	普通	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	頸部丸棒状工具によるキザミ隆帯→隆帯直下に4本歯の横位区画カ波状文→頸部縦直線文→縦位羽状文(右→左、下→上)。内面は横位のナデ。外面スス附着。	石英	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	胴部軸繩不明の附加条縄文(R・S、R・Z：下→上)。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・白色粒	良好	にぶい黄褐色	十王台式

100号住居跡（第87・88図）

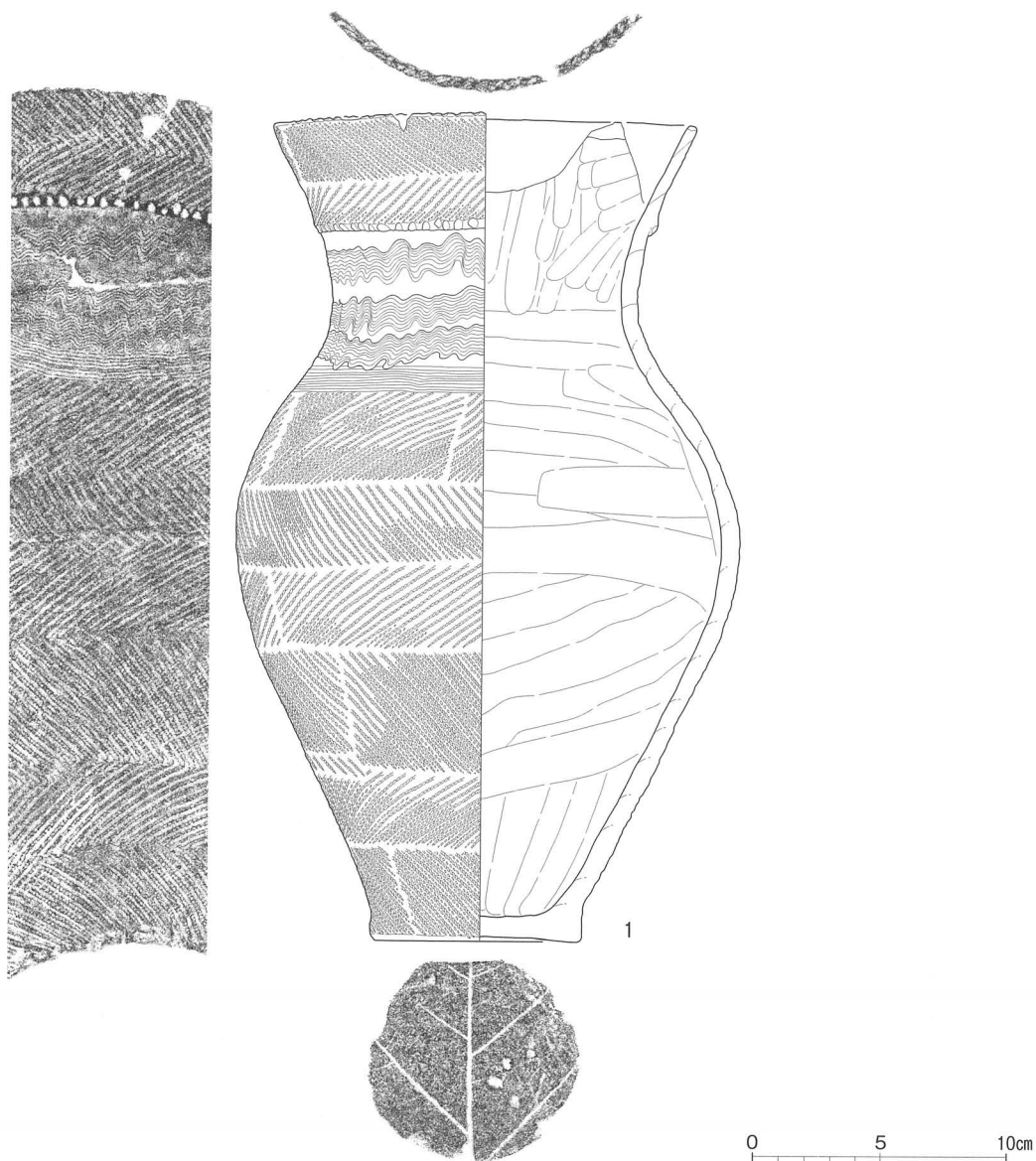
位置 A区の南東部O11グリッドにある。規模と平面形 2.90 × (2.40) m。主軸方向 N - 38° - W
 壁 壁高は約12cm。床 - ピット 1箇所。P1は深さ28cm。炉 - 覆土 ローム小中ブロックを含んだ締りのある覆土である。遺物 1は二軒屋式のほぼ完形個体である。その他、十王台式土器の小片が極少量出土している。所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



100号住居跡土層

- 1 暗褐色 ローム小中ブロック少量、締り有り
- 2 褐色 ローム主体、ローム小中ブロック少量、締り有り
- P1
- 1 暗褐色 ロームブロック少量、ローム粒少量、やや軟らかい
- 2 褐色 ローム主体、締り有り

第 87 図 100号住居跡



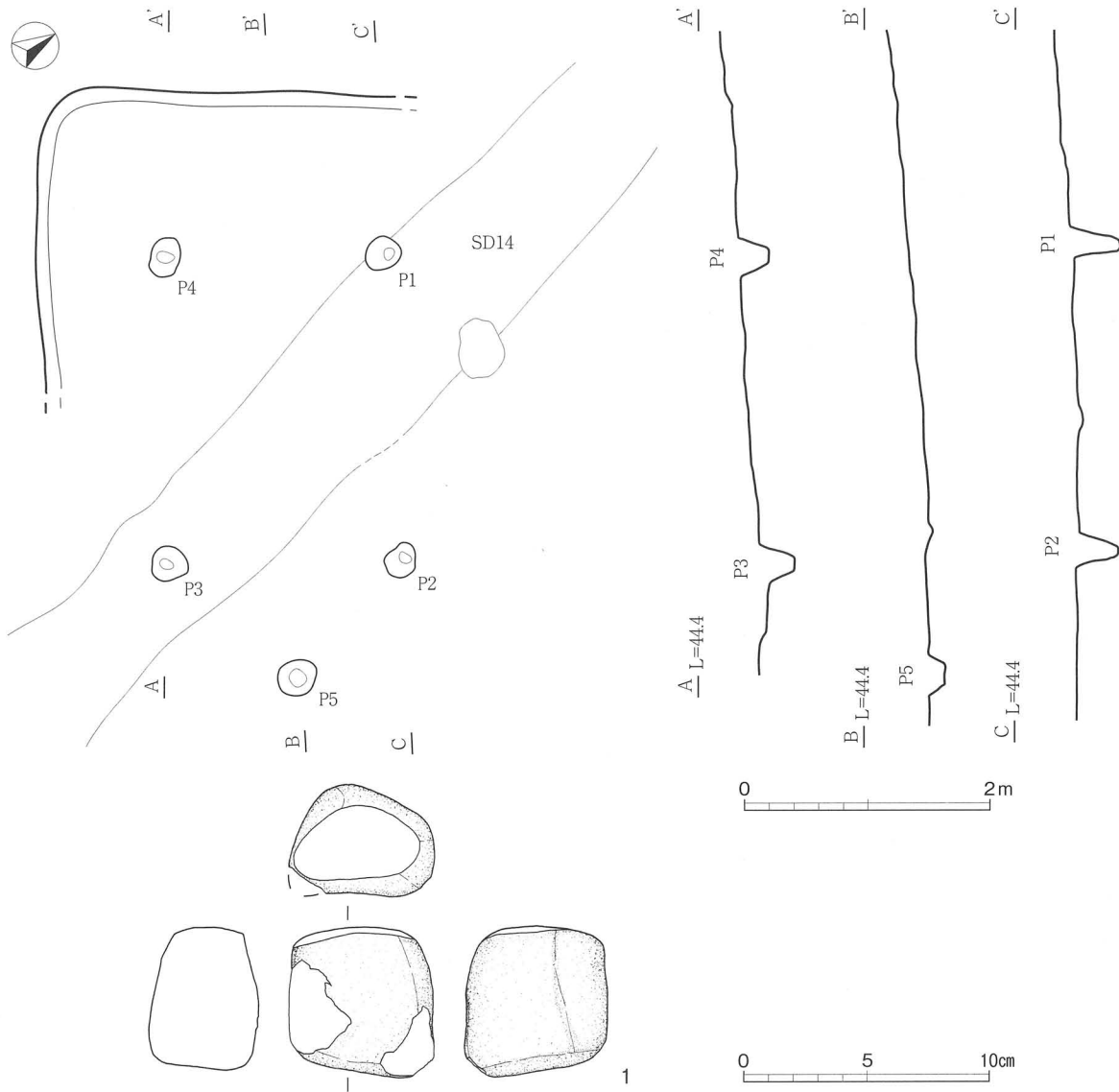
第88図 100号住居跡出土遺物

表41 100号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(169) 33.1 8.2	口唇部縄文キザミ。口縁部は折り返し状を呈し、附加条1種縄文 (RL+2L、LR+2R:下→上) を横位施文。胴部附加条1種縄文 (RL+2L、LR+2R:下→上) →頸部9本歯の横位区画直線文1条→横位波状文3条 (上→下、反時計回り)。底部木葉痕。内面は胴～頸部下位は横・斜位のヘラナデカ。頸～口縁部は斜位のナデ。外面肩～頸部、胴部下位に濃いスス附着。胴部中位はスス酸化消失。内面は胴部中位以下に顕著なヨゴレ、以上は薄いヨゴレ附着。	多量の石英・長石	良好	外：灰黄褐色 内：黒褐色	二軒屋式

101号住居跡（第89図）

位置 A区中央部、M7・N7グリッドにある。規模と平面形（5.08）×（3.88）m。主軸方向 N-62°-E 壁 - 床 硬化した床は残存していない。ピット 5箇所。P1からP4は支柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。覆土 非常に浅くほとんど残存していない。遺物 - 所見 柱穴の配置と炉の位置などから弥生時代後期の竪穴住居跡と見られる。



第89図 101号住居跡・出土遺物

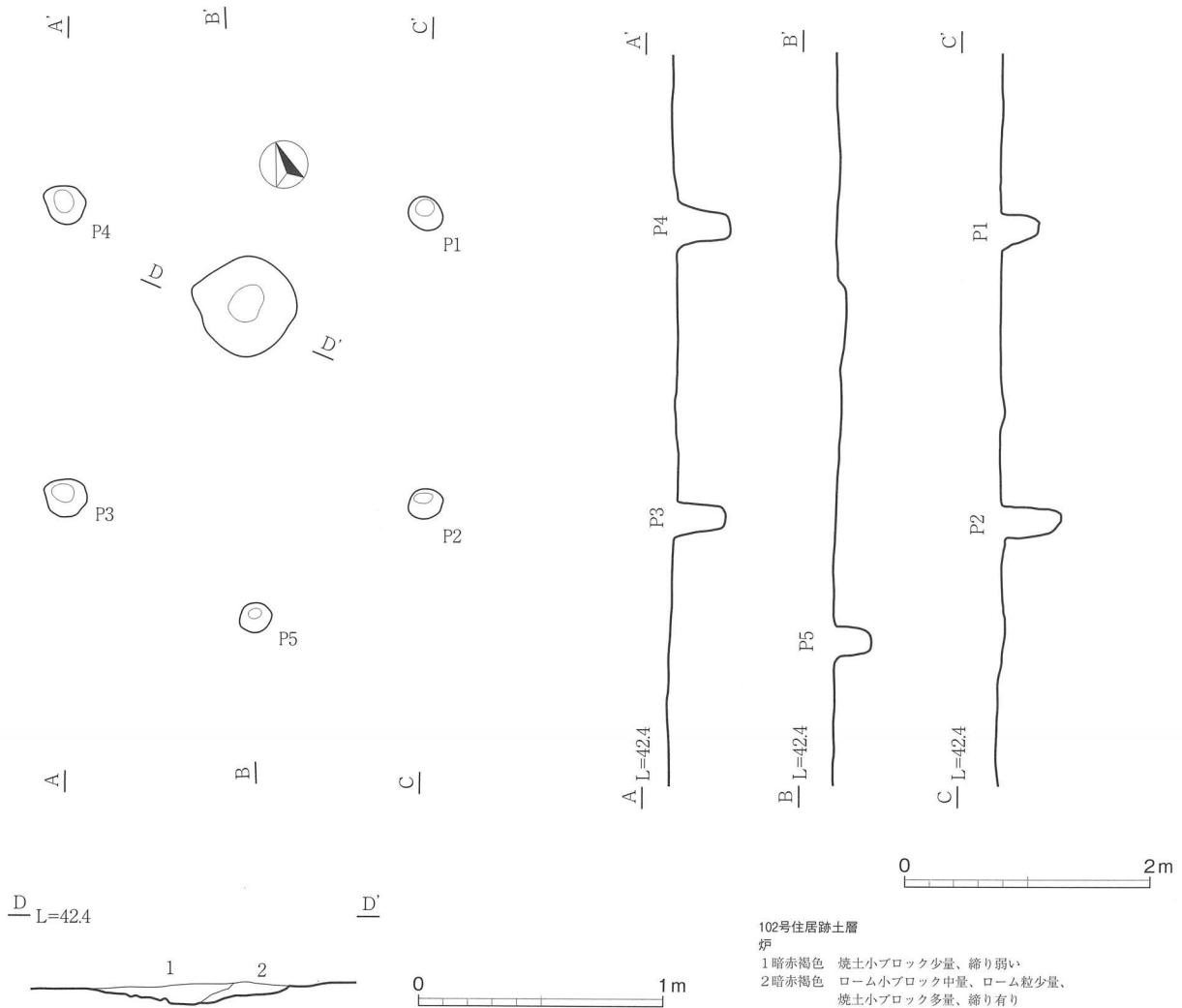
表 42 101号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	石器 磨石		自然礫の上面に顕著な磨耗痕。磨耗面の一部は茶褐色に変色。両側縁の一部に破砕痕。 石材：砂岩。長さ6.15cm・幅5.9cm・厚さ4.65cm・重さ243.0g。				

102号住居跡（第90図）

位置 A区中央部、N7グリッドにある。規模と平面形 ピットと炉が確認されている。主軸方向 N-17°-E 壁 - 床 削平されて残存していない。ピット 5箇所。P1からP4は支柱穴。P5は

出入口ピットと考えられる。 炉 長径 86cm、短径 80cm の楕円形で深さ 8 cm。 覆土 - 遺物 遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみのため図示し得ない。 所見 柱穴の配置と炉の位置などから弥生時代後期の竪穴住居跡と見られる。

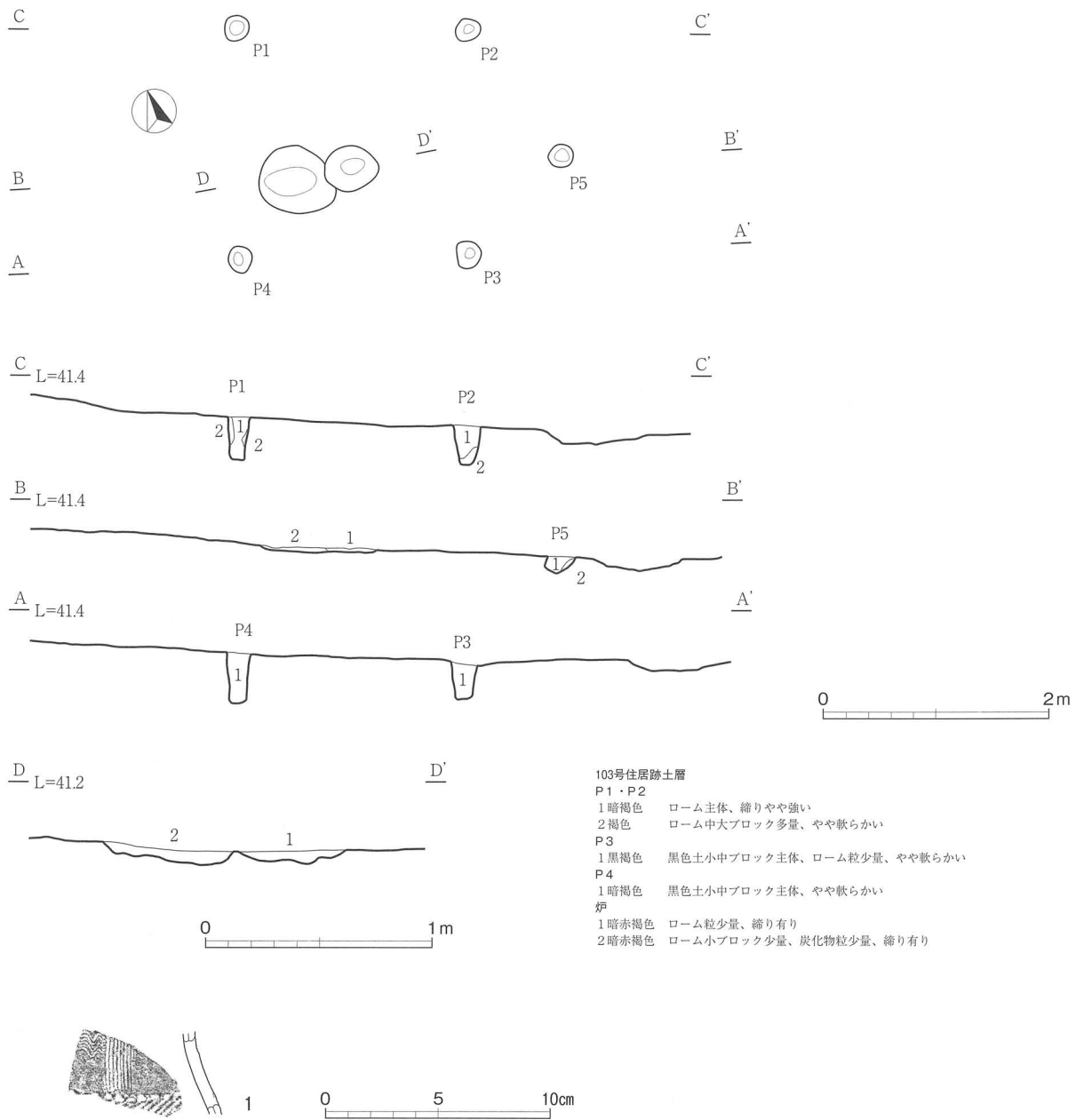


第90図 102号住居跡

103号住居跡 (第91図)

位置 A区南部、N 10 グリッドにある。 規模と平面形 床面は削平を受けており、4本の支柱穴と出入口ピット穴、炉跡の掘り込みが確認されたのみで、遺構の平面形は捉えられなかった。 主軸方向 N - 73° - W 床 大部分は削平されている。 ピット 5箇所。 P 1から P 4は支柱穴。 P 5は出入口ピットと考えられる。 炉 2か所ある。 炉 1は、長径 48cm、短径 40cm の楕円形で深さ 5 cm。 炉 2は長径 70cm、短径 60cm の楕円形で深さ 6 cm。 遺物 遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみの出土である。 1は十王台式の範疇だが、頸胴界を縄文原体端部(無節R)で押捺し、区画する。 所見 柱穴の配置と炉の位置、出土遺物などから弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

第IV章 A区の遺構と遺物



第 91 図 103号住居跡・出土遺物

表 43 103号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別種	口径器高底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S)→頸胴界同様の原体端部による押捺列→頸部8本歯の横位波状文→縦位直線文。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英	普通	外：黒褐色 内：灰黄色	十王台式

2 遺構外出土遺物

1～5、9～17、23～27は十王台式土器の範疇で捉えられる壺である。4は口縁部の最上段に上開きの櫛描連弧文が施文される。9は傾きの程度から壺としたが、高坏の可能性もある。口縁部の内外面に櫛描波状文が施文される。15は縦位の櫛描波状文と横位区画直線文が施文される細頸壺でやや異質な文様構成を呈する。16は櫛描直線文と附加条縄文を縦位に施文する希少な個体である。胴部は軸縄不明の附加条縄文(23・25・27)、ないし附加条2種縄文(24・26)が施文され、底部は布目痕(26・27)である。

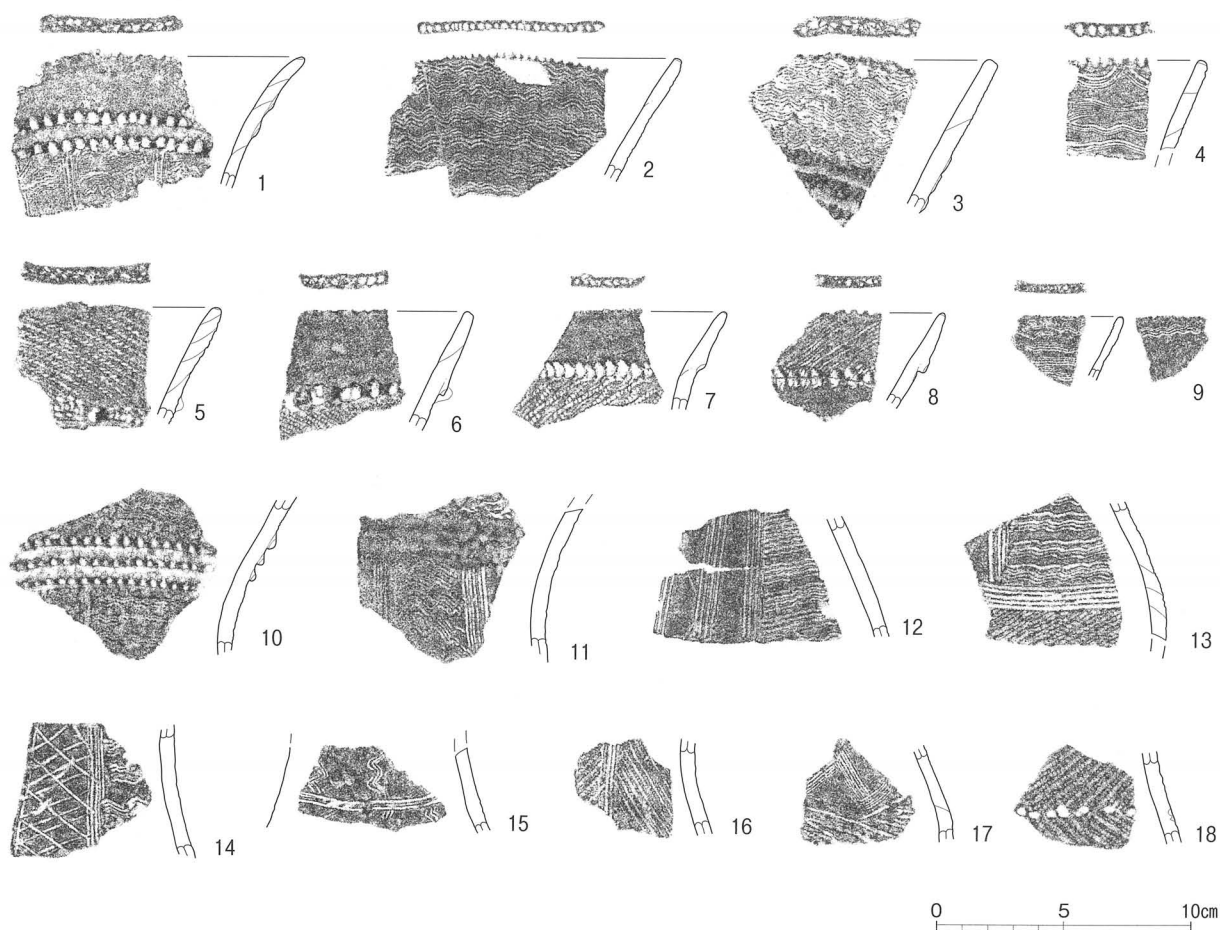
18は円形の刺突列と附加条1種縄文が施文され、19は頸部に無文帯を有し、単節LR縄文・円形貼付文が施文される。いずれも霞ヶ浦沿岸から南関東に出自をもつ土器群と考えられる。

20～22・28・29は二軒屋式土器の範疇で捉えられる壺である。多条の櫛描文(20～22)、附加2条の附加条1種縄文(22・29)、底部の木葉痕(28・29)、多量の石英・長石が含まれる胎土などの諸特徴を備える。

30～34は弥生系(十王台式カ)の高坏である。脚部の成形技法には中空のもの(30・32)と中実のもの(31・33・34)の2種類が認められる。

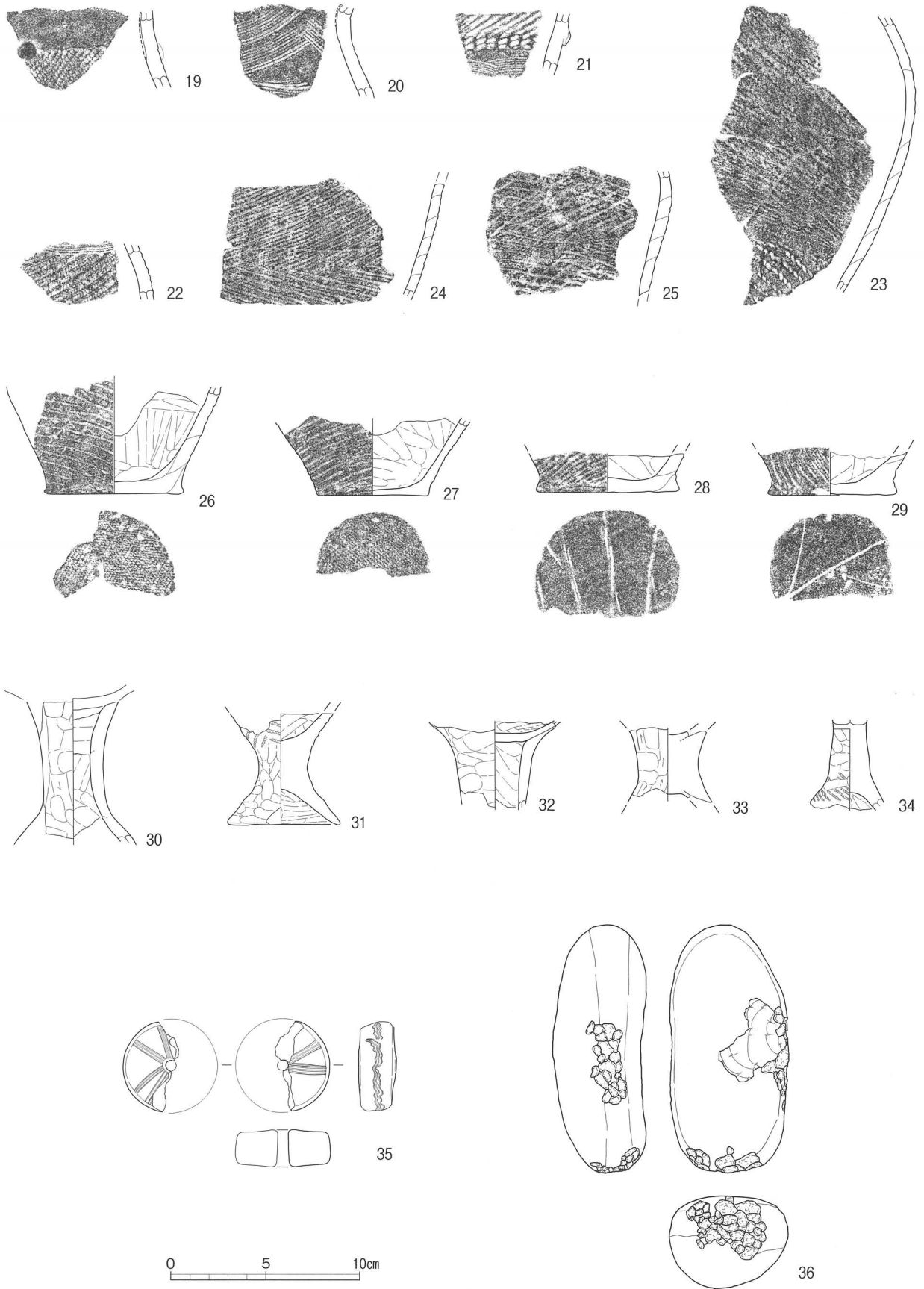
35は土製紡錘車である。表裏面に3本歯の櫛描放射状文、側面に櫛描波状文が施文される。

36は磨石類である。36には磨耗痕とともに顕著な敲打痕が認められる。



第92図 遺構外出土遺物①

第IV章 A区の遺構と遺物



第93図 遺構外出土遺物②

表44 A区遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部縄文原体キザミカとヘラキザミ。頸部棒状工具によるキザミ隆帯2条→4本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は口縁部横位のナデ、頸部縦位のナデ。	多量の石英・白色粒、角閃石	良好	外：黒褐色 内：橙色	SI076 混入 十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本歯の横位波状文。内面は口縁部斜位のナデ→口唇部付近横位のナデ。外面スス付着。	石英	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	表土 十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	口唇部縄文原体(無節Lカ)キザミ。頸部押捺隆帯3条カ→口縁部6本歯の横位波状文(下→上)。内面は横・斜位のナデ。	石英、金雲母	良好	外：明黄褐色 内：にぶい黄褐色	表土 十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本歯の上開き連弧文、横位波状文。内面は横位のナデ。	石英、骨針	良好	にぶい橙色	SD08・09 西の 表土
5	弥生土器 壺	- - -	口唇部無節縄文(Lカ)を回転施文。口縁部軸縄不明の附加条縄文(R-Z、R-Sカ)→口頸界3本歯以上の横位波状文→頸部貼付文。内面はナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	普通	外：にぶい橙色 内：にぶい黄褐色	SZ01 混入
6	弥生土器 壺	- - -	口唇部縄文原体(無節L)キザミ。頸部附加条1種縄文(RL+2L)→口縁下端棒状工具による刺突→2個一対の貼付文。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	良好	外：黄褐色 内：暗灰黄色	SD13-A 混入
7	弥生土器 壺	- - -	頸部軸縄不明の附加条縄文(R-S)→口縁下端同様の原体でキザミ。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英	普通	にぶい黄褐色	SI092 混入
8	弥生土器 壺	- - -	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部附加条1種縄文(LR+2R)→口縁部下端同様の原体によるキザミ。頸部無文(横位のナデ)。内面は横位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	良好	にぶい黄褐色	SI082 混入
9	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本歯の横位波状文(下→上)。内面は横位波状文1条、以下は横位のナデ。	石英、赤色粒	普通	外：橙色 内：浅黄褐色	SI007 混入
10	弥生土器 壺	- - -	頸部丸棒状工具によるキザミ隆帯3条→口縁部4本歯の横位波状文。頸部縦位の直線文→横位の波状文。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・白色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：橙色	A区一括
11	弥生土器 壺	- - -	口縁部軸縄不明の附加条縄文(R-S)。口頸界指頭押捺列→頸部6本歯の縦位の直線文→横位波状文。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ヨグレ付着。白色粒	石英、角閃石	普通	黄褐色	SD05 混入
12	弥生土器 壺	- - -	頸部附加条1種縄文(LR+2L)→頸部縦位直線文3条一単位→横位波状文。内面は縦・斜位のナデ。外面スス、内面ヨグレ付着。	石英	良好	外：暗灰黄色 内：にぶい黄褐色	SD13B 混入
13	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条1種縄文(L+2L)→頸部附加条4本歯の横位区画波状文→頸部縦位直線文→横位波状文。内面は頸部が横位のナデ、胴部が斜位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石、骨針、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	3号地下式坑混入
14	弥生土器 壺	- - -	頸部5本歯の縦位直線文→ヘラ描き斜格子子文→横位波状文。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石、赤色粒	良好	橙色	3号地下式坑混入
15	弥生土器 壺	- - -	頸部二本同時施文具による横位の区画直線文→3本歯の縦位波状文。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ヨグレ付着。	石英	普通	黄褐色	SI082 カマド混入
16	弥生土器 壺	- - -	頸部4本歯の縦位直線文→附加条1種縄文(LR+2R、RL+2L)を縦位施文。内面は縦位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石、赤色粒	普通	外：暗灰黄色 内：橙色	SI060 混入
17	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(L-Z)→頸部附加条7本歯の山形文(反時計回り)。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	石英、骨針	普通	外：黒褐色 内：明赤褐色	SI051 カクラン
18	弥生土器 壺	- - -	頸部附加条1種縄文(LR+2R、RL+2L)を縦位施文。羽状縄文の取束部に丸棒状工具による横位の刺突文1条。内面はナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	3号地下式坑混入
19	弥生土器 壺	- - -	頸部単節縄文(LR)を横位施文。縄文施文部下は無文帯(横位のナデ)→円形貼付文。内面は斜位のナデ、器面荒れ。	多量の石英、角閃石	良好	外：明褐色 内：明赤褐色	SX01 上層
20	弥生土器 壺	- - -	頸部8本歯の横位直線文、上開きの連弧文なし、山形文(時計回り)。内面は縦位のナデ。	多量の石英・長石	普通	外：明黄褐色 内：橙色	6号地下式坑混入 二軒屋式
21	弥生土器 壺	- - -	口縁部無節縄文(L)を横位施文、口縁部下端は同様の原体端部によるキザミ。頸部は8本歯カの下開き連弧文(時計回り)。内面は縦位のナデ。	多量の石英、赤色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：橙色	SI007 混入 二軒屋式
22	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条1種縄文(LR+2R)→頸部附加条間隔止めカの廉状文(時計回り)。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	にぶい黄褐色	SI082 混入 二軒屋式

第IV章 A区の遺構と遺物

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
23	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・Z、L・Z:下→上)下から2段目のみR・Z。非羽状構成。内面は肩部が斜位のナデ、胴部が縦位のナデ。外面スス(肩部に顕著)、内面胴部下半にヨゴレ付着。	石英、長石、骨針、赤色粒	良好	外: 橙色 内: にぶい黄橙色	表土 十王台式
24	弥生土器壺	- - -	胴部附加条2種縄文(RL+2R、LR+2L:下→上、反時計回り)。内面は斜位のナデ。	石英、長石、角閃石、金雲母	良好	外: にぶい黄色 内: にぶい黄橙色	SD09 混入 十王台式
25	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z:上→下)。内面は縦・斜位のナデ。外面スス付着、被熱による赤色化・剥離。	石英、多量の白色粒	普通	外: 黒褐色 内: にぶい黄褐色	弥生土器混入 十王台式
26	弥生土器壺	- - (7.3)	胴部附加条2種縄文(L+L)。底部布目痕。内面は縦位のヘラナデ→横位のヘラナデ・ナデ。	石英、角閃石、骨針	良好	にぶい黄橙色	5号地下式坑混入 十王台式
27	弥生土器壺	- - (5.9)	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、:時計回りカ)。底部布目痕。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石、多量の白色粒、赤色粒	普通	外: にぶい黄褐色 内: 浅黄色	5号地下式坑混入 十王台式
28	弥生土器壺	- - 7.5	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S)。底部木葉痕。内面は斜位のナデ。破損面再加工。	多量の石英・長石、赤色粒	良好	暗灰黄色	4号地下式坑混入 二軒屋式
29	弥生土器壺	- - (6.6)	胴部附加条1種縄文(RL+2L)。底部木葉痕。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	普通	にぶい黄橙色	SX01 混入 二軒屋式
30	弥生土器高坏	- - -	脚部中空。脚部縦位のヘラケズリカ→横・斜位のナデ。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石、骨針	普通	にぶい黄橙色	SI47 混入
31	弥生土器高坏	- - (6.0)	脚部中実。坏部軸縄不明の附加条縄文(L・S、L・Z:反時計回り)。脚部縦・斜位のナデ→裾部横位のナデ。内面は坏部横・斜位のナデ、脚部横位のナデ。	石英、角閃石、赤色粒	良好	にぶい黄橙色	SD05 混入
32	弥生土器高坏	- - -	脚部中空。坏部・脚部横・斜位のナデ。内面は斜位のナデ。	石英、角閃石、多量の白色粒・赤色粒	普通	にぶい黄橙色	SD08 混入
33	弥生土器高坏	- - -	脚部中実で坏部をソケット式に接着。脚部縦位のヘラケズリ→横位のナデ。内面はナデ。	多量の石英・白色粒、角閃石、赤色粒	普通	にぶい黄橙色	SP02 混入、表土
34	弥生土器高坏	- - -	脚部中実。脚部横・斜位のナデ。裾部軸縄不明の附加条縄文(L・Z:時計回り)→横位のナデ。内面は裾部斜位のナデ。	石英、角閃石、赤色粒	普通	にぶい橙色	SI026 カクラン
35	土製品紡錘車	- - -	径(5.0)、高2.0、孔径(0.6)、重[26.47]g。表裏面ナデ調整→3本歯の放射状直線文。側面同様の工具による波状文。片側穿孔カ。	石英、多量の白色粒	普通	灰黄褐色	SI017 混入
36	石器磨石類		磨→敲。自然礫の表面全体に磨耗痕。表面は平滑。両側面や下端部に顕著な敲打痕。石材:石英安山岩。長さ13.05cm・幅6.3cm・厚さ4.9cm・重さ602.8g。				A区1号溝カクラン出土

第3節 古墳時代

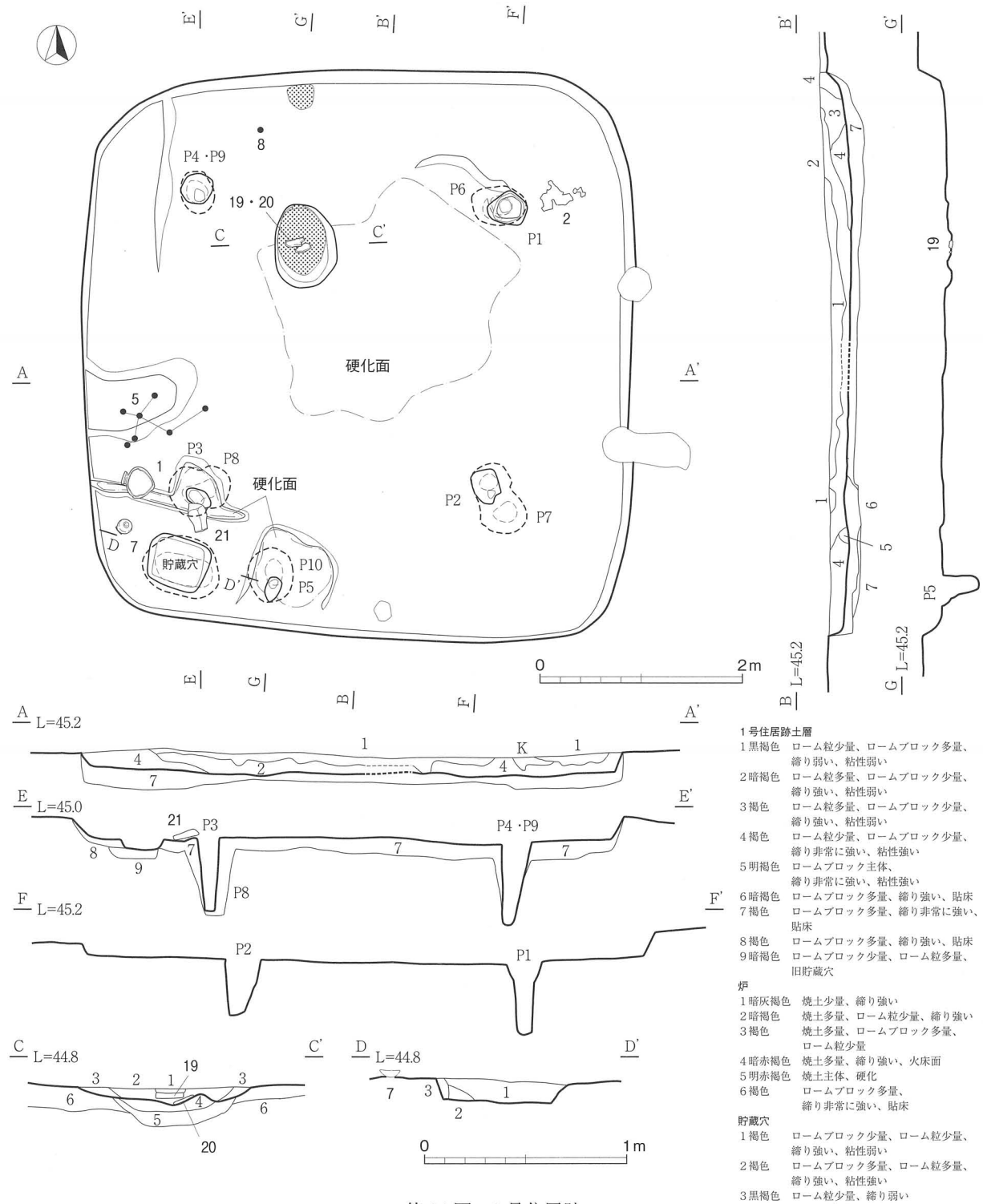
1 竪穴住居跡

1号住居跡（第94～96図）

位置 A区北端、L1グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北方向5.62m、東西方向5.46mを測り、台形に近い隅丸正方形を呈する。弥生時代の2・3号住居跡を壊し、1号溝によって東壁の一部が壊される。**主軸方位** N-2°-W **壁** 壁高は26cmを測り、やや傾斜する。**床** 中央部が硬化する。また、出入り口部周辺と貯蔵穴の周堤北側の2箇所を高まりが認められる。掘り方平面図は掲載していないが、壁際に幅60～100cm程の浅い溝状掘り方がある。**ピット** 10箇所ある。P1～4が支柱穴、掘り方で確認したP6～9が古い支柱穴、P5・10が出入口ピットであろう。P1～4の掘り方とP6～9は破線で表現してある。P1～3は直径約20cmの柱痕が断面で観察され、P1～5、P8～10の柱穴底面には直径10cm前後の灰褐色化した硬化圧痕を明瞭に検出した。P4・9はほぼ同一地点を利用しており、P4の硬化圧痕を掘り抜くと、黒色土を挟んでP9の硬化圧痕が現れた。P5は斜めに穿たれている。南西隅部には隅丸形状の貯蔵穴がある。北側には硬化した周堤が設けられる。**炉** 竪穴中央北西寄りに位置する。平面は不整楕円形で、浅い皿状を呈する。被熱は顕著である。中央部に平たい棒状に成形・焼成された土製品が2個並んで設置されており、炉石として使用したものと思われる。**覆土** 竪穴中央最上層から壁際下層にかけて、暗～黒褐色土、褐色土、明褐色土の順に自然堆積する。**遺物** 貯蔵穴の西脇からほぼ完形の7の鉢が逆位で、貯蔵穴北側の周堤上から1の壺が横位の状態で出土している。P3の脇には21の台石が置かれている。**所見** P5の出入り口部の高まりと貯蔵穴および周堤は軸方向がほぼ一致するが、竪穴主軸とは直交していない。貯蔵穴も新旧が認められ、古い貯蔵穴（破線で表現）の底部を貼床状に埋め戻している。各支柱穴はほぼ同一位置で建て直しされている。住居跡の時期は、古墳時代前期に比定される。

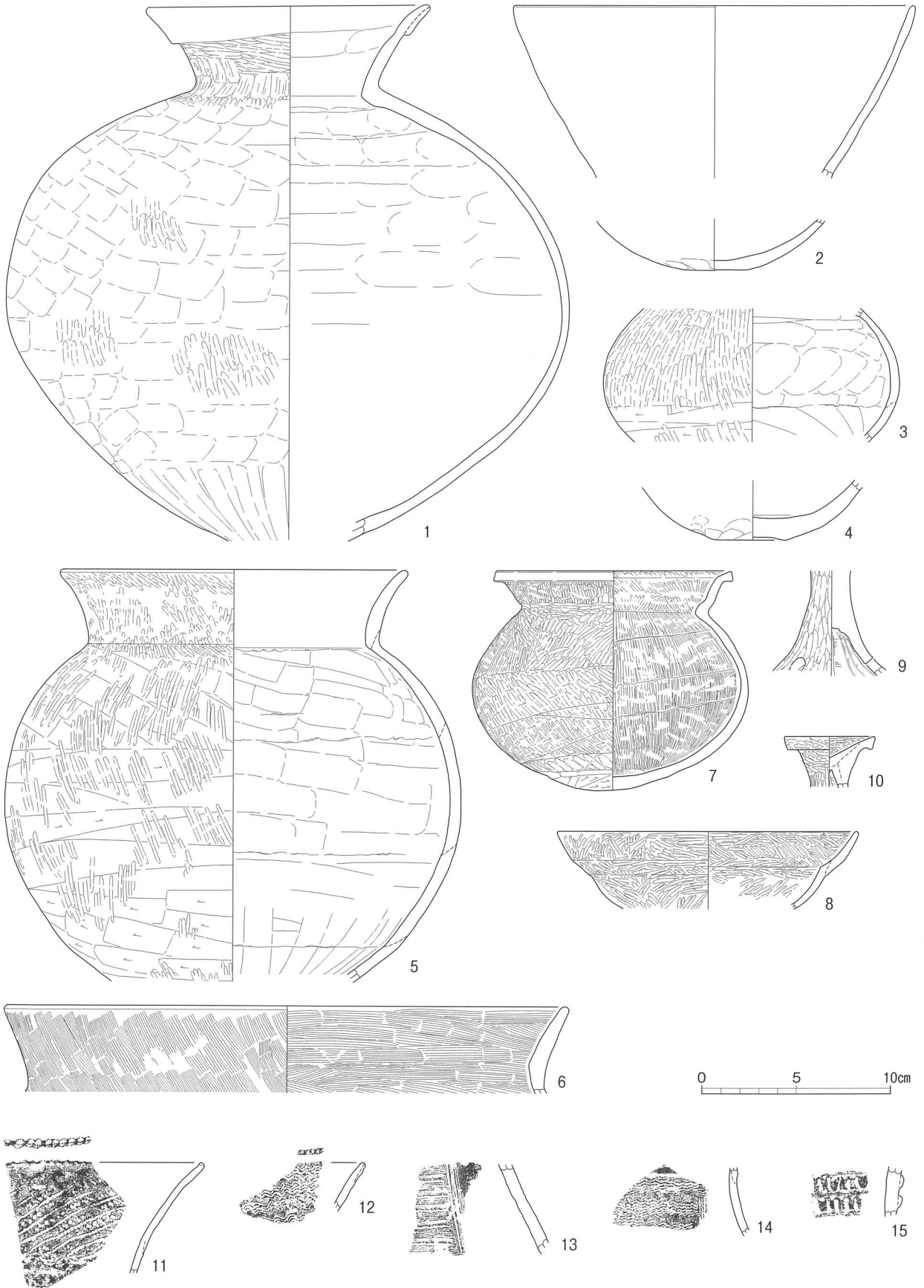
表45 1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	14.9 — —	口縁部ヨコナデ、外面頸部～胴部ヘラケズリ後にヘラミガキ、口縁部内面指頭痕、内面胴部ナデ。胴部外面に赤彩の痕跡。	石英粒	良好	にぶい黄橙色	内面頸部以下あばた状剥離
2	土師器 壺	11.2 — —	口縁部ヨコナデ、胴部～底部外面ヘラケズリ後に胴部ナデ、胴部～底部内面ナデ。	石英、雲母	普通	にぶい橙色	口縁外面スス、胴部～底部内面あばた状剥離
3	土師器 壺	— — —	胴部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、胴部内面ヘラケズリ後にヘラナデ。	雲母	良好	にぶい黄褐色	
4	土師器 壺	— — 3.7	胴部外面ヘラケズリ後にナデ、底部外面ヘラケズリ、胴部～底部内面ナデ。	石英、チャート、雲母	良好	にぶい黄褐色	胴部～底部内面あばた状剥離
5	土師器 甕	18.4 — —	口縁部ヨコナデ後に外面ヘラミガキ、胴部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、胴部内面ヘラナデ。	石英、雲母、白色粒	普通	橙色	外胴部中位にスス、内面胴部下半あばた状剥離
6	土師器 甕	29.8 — —	口頸部内外面ハケメ。	石英、角閃石	普通	橙色	
7	土師器 鉢	12.6 11.7 —	口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ、胴部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、底部外面ヘラケズリ、胴部～底部内面ナデ後にヘラミガキ。	石英、雲母、角閃石	普通	にぶい黄褐色	内面胴部中位以下に褐色物質付着
8	土師器 鉢	15.9 — —	口縁部～体部外面ヘラミガキ、口縁部～体部内面ハケメ後にヘラミガキ。	石英、雲母	普通	明赤褐色	内外面赤彩、体部内面あばた状剥離



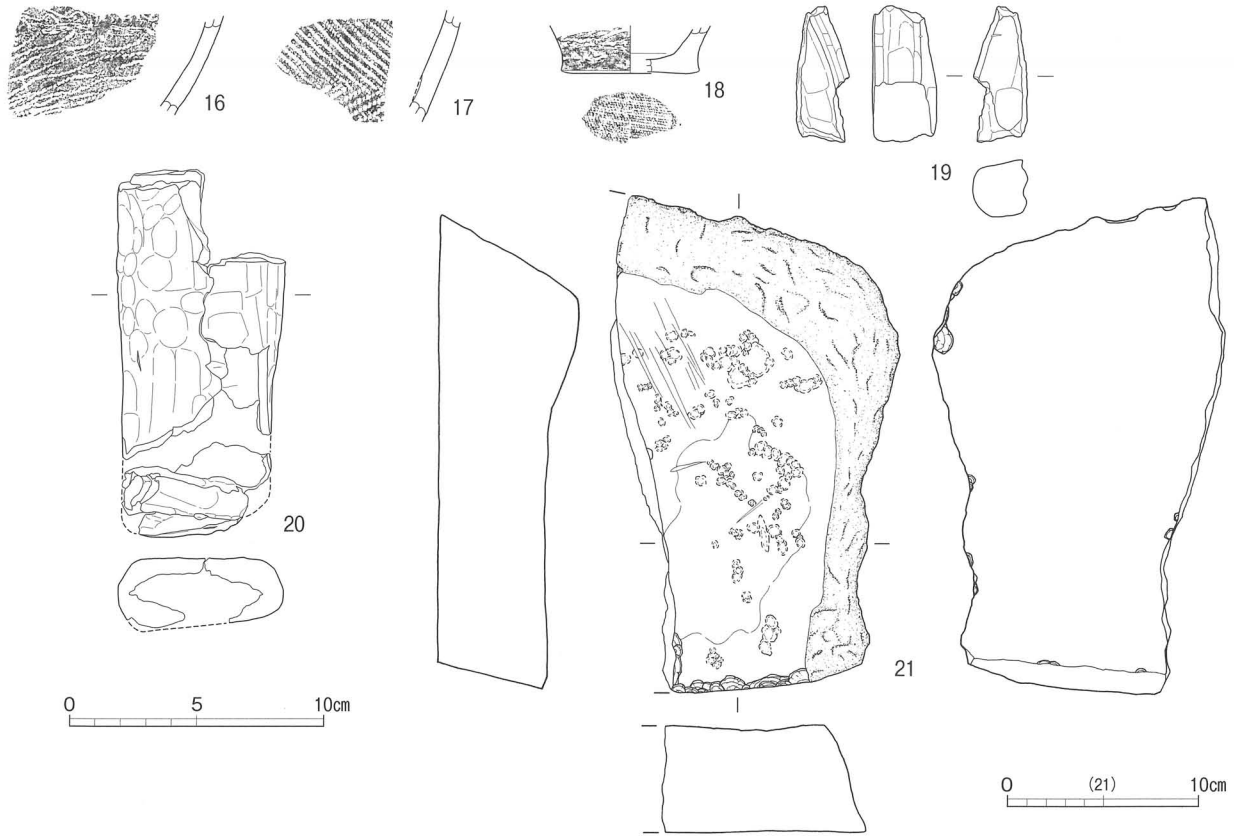
第94図 1号住居跡

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
9	土師器高坏	-	脚部3方向に透孔。脚部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、脚部内面ヘラナダ。	雲母、角閃石、褐色粒	普通	浅黄橙色	
10	土師器器台	4.8	口縁部内外面雑なヘラミガキ。	石英、雲母	普通	灰黄褐色	



第95図 1号住居跡出土遺物①

第IV章 A区の遺構と遺物

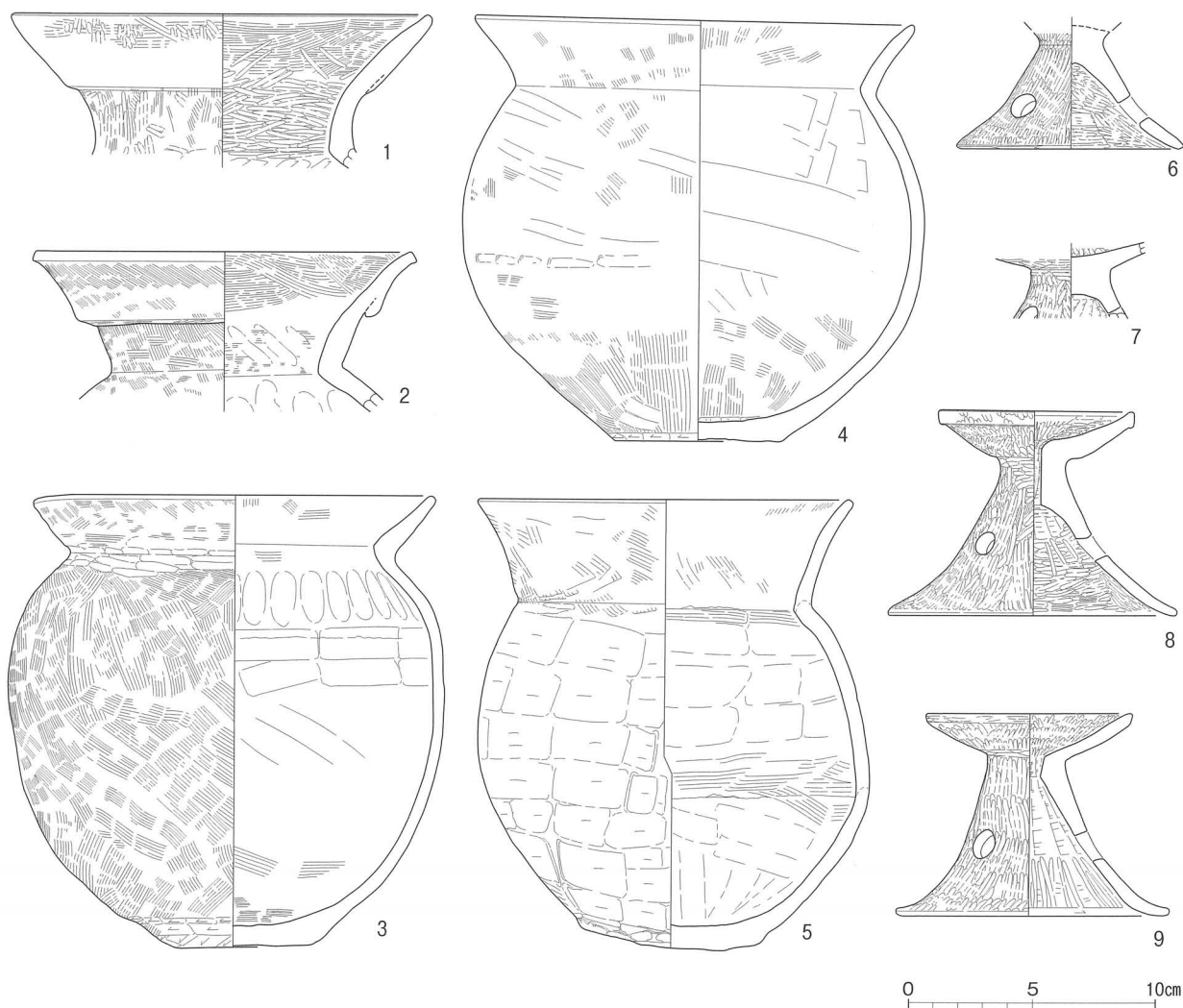


第96図 1号住居跡出土遺物②

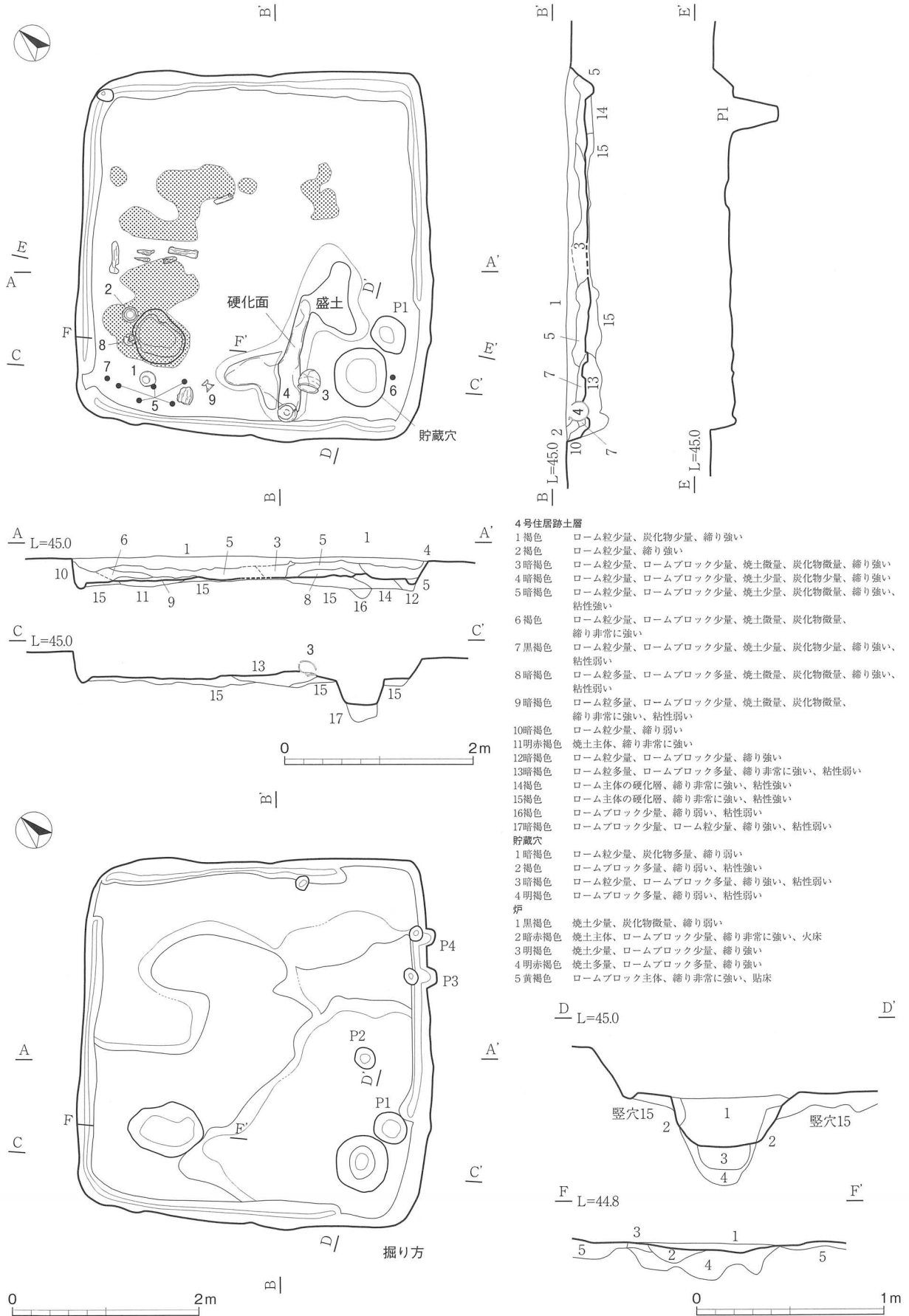
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
11	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部附加条2種カ縄文。	雲母、骨針	普通	にぶい黄橙色	十王台式
12	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本歯の横位波状文。	石英、雲母	普通	橙色	十王台式
13	弥生土器 壺	- - -	頸部6本歯の横位直線文→縦位直線文→横位波状文。	石英、チャート	普通	橙色	十王台式
14	弥生土器 壺	- - -	頸部6本歯の縦位直線文→横位波状文。外面スス付着。	雲母	普通	にぶい黄褐色	十王台式
15	弥生土器 壺	- - -	頸部隆帯上にヘラキザミ。	雲母、角閃石	普通	にぶい黄橙色	
16	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R - S)。	石英、雲母、角閃石	普通	灰黄褐色	十王台式
17	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R - S、L - Z:上→下)。	石英、雲母、骨針	普通	にぶい黄橙色	十王台式
18	弥生土器 壺	- - (5.4)	胴部軸縄不明の附加条縄文(R - S)。底部布目痕。	石英、雲母	普通	にぶい黄橙色	十王台式
19	土製品 不明		残長5.4cm、厚さ2.1cmの板状土製品。外面ナデ。	石英、チャート	普通	橙色	炉
20	土製品 不明		残長14.7cm、幅6.6cm、厚さ2.8cmの板状土製品。外面にナデと指頭痕。二次的な被熱による破碎される。	石英、雲母、骨針	普通	にぶい橙色	炉
21	石器 台石		欠損品。敲→磨。大型板状礫の表・裏面に顕著な磨耗痕。裏面は平滑。表面に敲打痕および擦痕。石材：砂岩。残存長26.25cm・残存幅15.2cm・残存厚7.2cm・重さ3850.0g。				床面直上

4号住居跡（第97～99図）

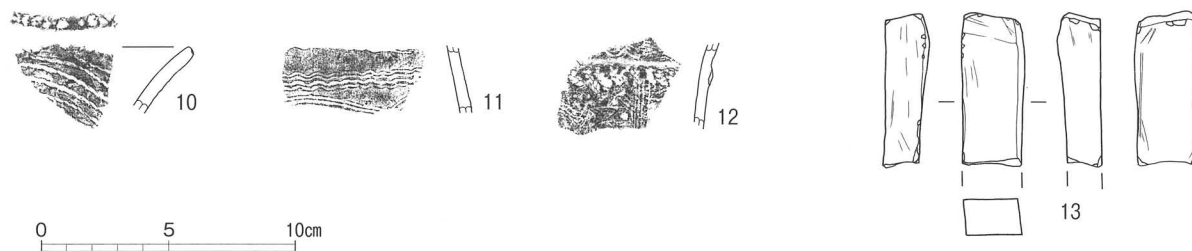
位置 A区北端、L1～L2グリッドに位置する。規模と平面形 主軸方向3.77 m×3.96 m、隅丸正方形に近い。主軸方位 N-42°-W 壁 壁高は26cmを測り、やや傾斜する。床 貯蔵穴北側にある周堤盛土上が硬化する。周溝はほぼ全周する。掘り方は、貯蔵穴周辺がやや深く掘り込まれている。ピット 4箇所。P1は出入口ピット。P2～4は掘り方で確認した。P3・4は竪穴壁にやや斜めに穿たれている。南西隅には、ほぼ楕円形の貯蔵穴があり、断面漏斗状である。炉 位置は北西隅に近い。平面は不整楕円形で、浅皿状を呈する。炉の東側床面は著しく被熱しており、上屋焼失時のものと推測される。覆土 1・2・10層以外からは焼土塊・炭化材が検出され、上屋の焼失が想定できる。遺物 貯蔵穴北側の周堤状の高まり部の直上から、正位・横位の状態で2点の甕（3・4）が出土している。炉の周りの床面からも、1・2の壺口縁部や8・9の器台が出土している。所見 住居跡の時期は、古墳時代前期に比定される。同時期の焼失事例には23号住居跡が挙げられ、炉の周りの床面が著しく焼けている点や主柱穴をもたないことが共通する。貯蔵穴施設周辺からほぼ完形の土器が出土する事例は1号住居跡でも認められ、生活時の状況を反映している可能性がある。



第97図 4号住居跡出土遺物①



第98図 4号住居跡



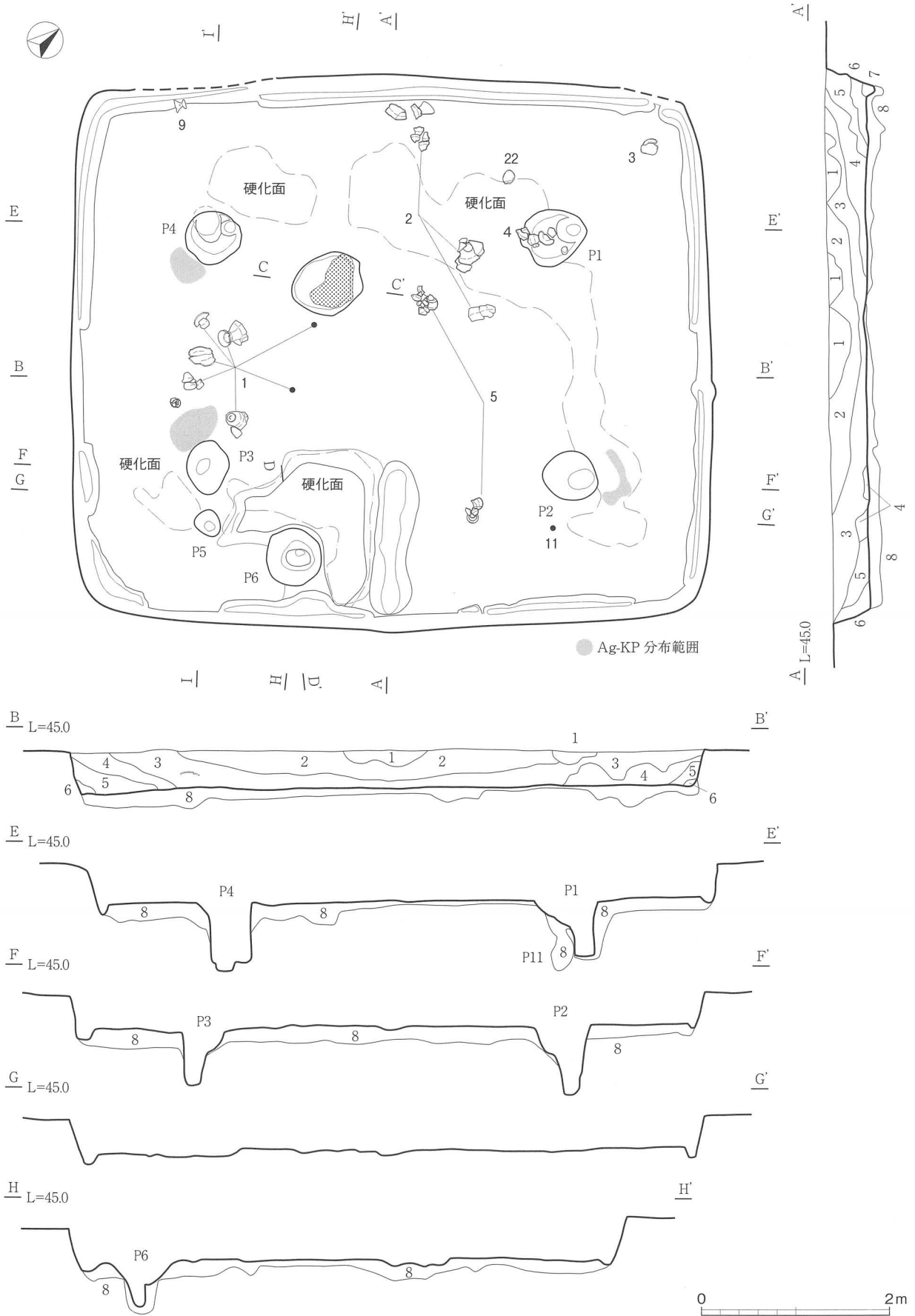
第99図 4号住居跡出土遺物②

表46 4号住居跡出土遺物観察表

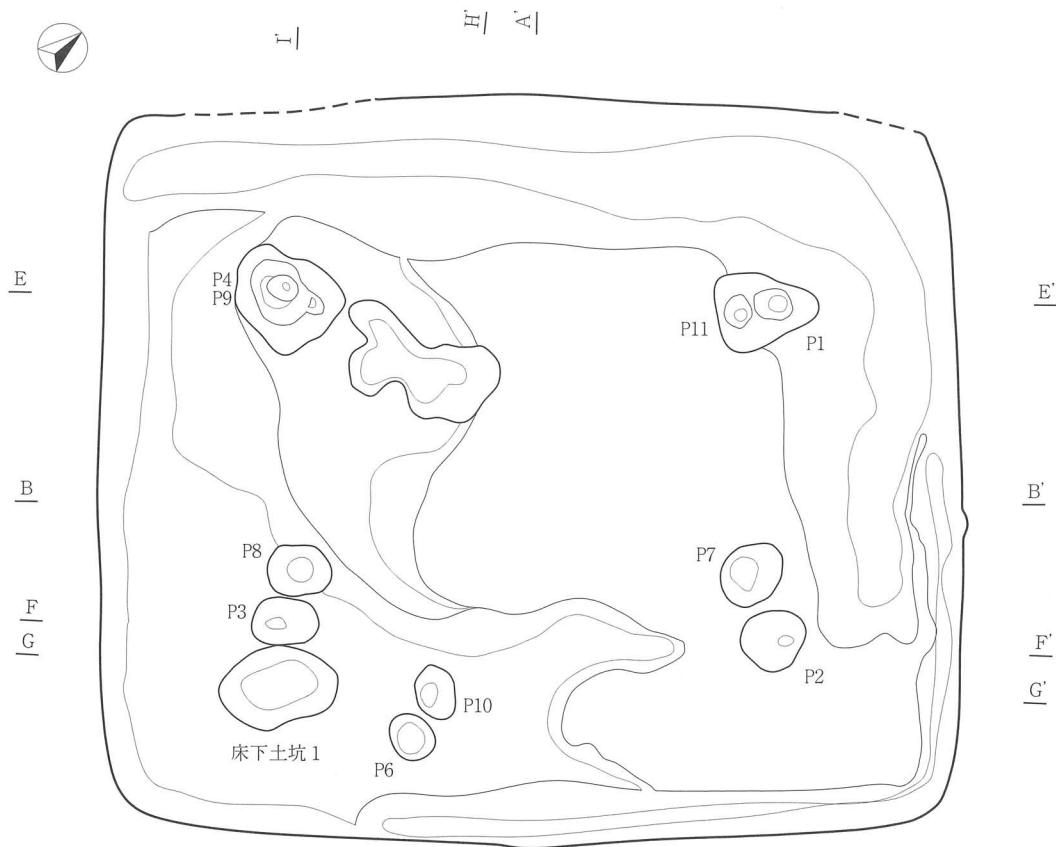
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器壺	17.2 — —	口頸部ハケメ後にヘラミガキ。	石英、チャート、骨針	普通	橙色	頸部打ち欠き調整し器台転用
2	土師器壺	15.7 — —	口頸部外面ハケメ後にナデ、口頸部内面ハケメ後に頸部ナデ。	石英、雲母、白色粒	良好	橙色	頸部打ち欠き調整し器台転用
3	土師器甕	16.5 18.7 5.5	口縁部内外面ハケメ後にヨコナデ、頸部外面ナデ、胴部外面ヘラケズリ後にハケ状具、底部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ、底部内面ハケメ。	石英、骨針	普通	橙色	胴外面にスス、内面胴部中位以下あばた状剥離
4	土師器甕	17.9 12.5 6.3	口縁部内外面ハケメ後にヨコナデ、胴部外面ハケメ後に上半ナデ、外面胴部下端～底部ヘラケズリ、内面胴部上半ヘラナデ・下半～底部ハケメ後にヘラナデ。	石英、雲母	普通	にぶい橙色	外面胴部上半にスス付着
5	土師器甕	15.3 18.6 7.5	口頸部ハケ状具後にヨコナデ、胴部～底部外面雑なヘラケズリ、内面胴部～底部ハケ状具とヘラナデ。	石英、雲母	普通	橙色	外面被熱とスス、胴部中位以下あばた状剥離
6	土師器高坏	— — 9.2	脚部3方向に透孔。脚部内外面ハケメ後にヘラミガキ。	石英、チャート、白色粒	良好	橙色	
7	土師器高坏	— — —	脚部3方向に透孔。坏部～脚部外面ヘラミガキ、坏部内面ヘラミガキ、脚部内面ナデ。	石英、骨針	良好	明赤褐色	
8	土師器器台	7.8 8.5 11.7	脚部3方向に透孔。坏部内外面ヨコナデ後にヘラミガキ、脚部外面ハケメ後にヘラミガキ、脚部内面ヘラケズリとヨコナデ後にヘラミガキ。	石英、チャート、骨針	普通	橙色	坏部と脚部の内面あばた状剥離
9	土師器器台	8.4 8.3 (11.1)	脚部3方向に透孔。坏部内外面ヨコナデ後にヘラミガキ、脚部外面ヘラミガキ、脚部内面ヘラケズリ後に雑なヘラミガキ。	石英、チャート、骨針	良好	橙色	
10	弥生土器壺	— — —	口唇部縄文カキザミ。口縁部軸縄不明の附加条縄文(L-Z)。	雲母	普通	にぶい黄橙色	十王台式
11	弥生土器壺	— — —	頸部4本歯の横位波状文、弧状文。	石英、雲母	普通	にぶい黄橙色	十王台式
12	弥生土器壺	— — —	頸部縄文原体によるキザミ隆帯→口縁部5～6本歯の横位波状文。頸部縦位直線文→横位波状文。	石英、角閃石	普通	にぶい黄橙色	十王台式
13	石製品砥石		欠損品。4面使用。砥面はいずれも平滑。石材：流紋岩。残存長6.1cm・幅2.55cm・厚さ1.45cm・重さ48.5g。				

5号住居跡 (第100～103図)

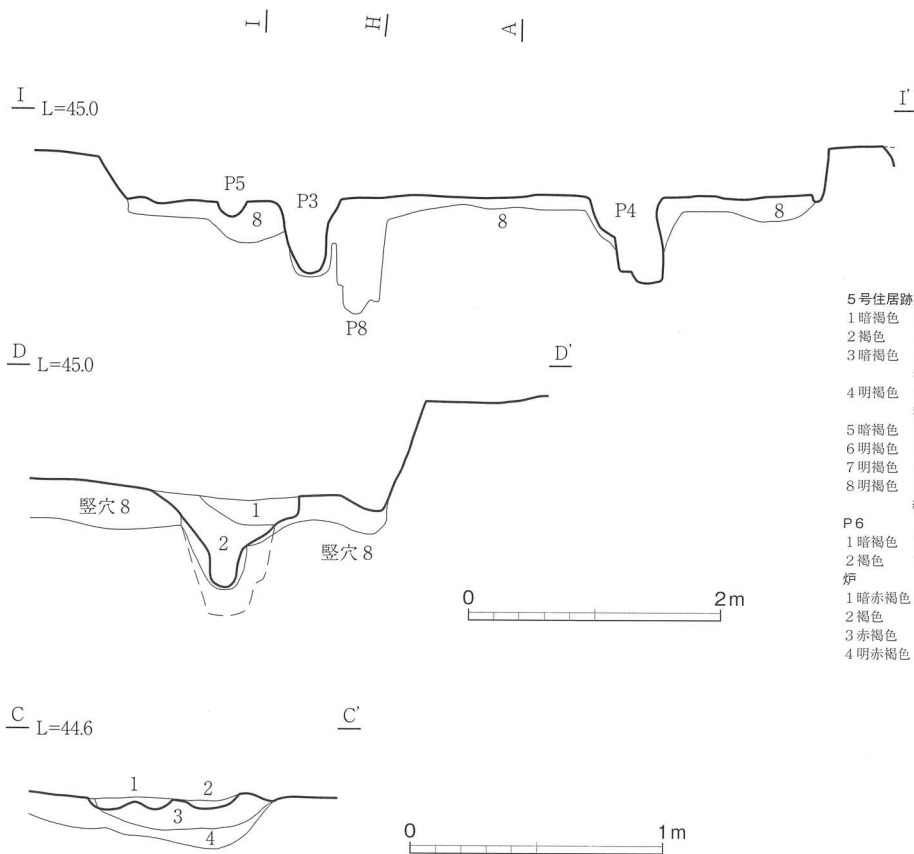
位置 A区北端、L2グリッドに位置する。規模と平面形 5.95 m × 6.77 mで、隅丸長方形。古代の1号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が古い。主軸方位 N-51°-W 壁 壁高は42cmを測り、垂直に近く立ち上がる。床 やや凹凸があり、主柱穴をつなぐように帯状に硬化する。P6の周堤も硬化し、主軸上に浅い溝がある。溝状掘り方を伴う。ピット 11箇所ある。P1～4が主柱穴で、掘り方面で確



第100図 5号住居跡



掘り方



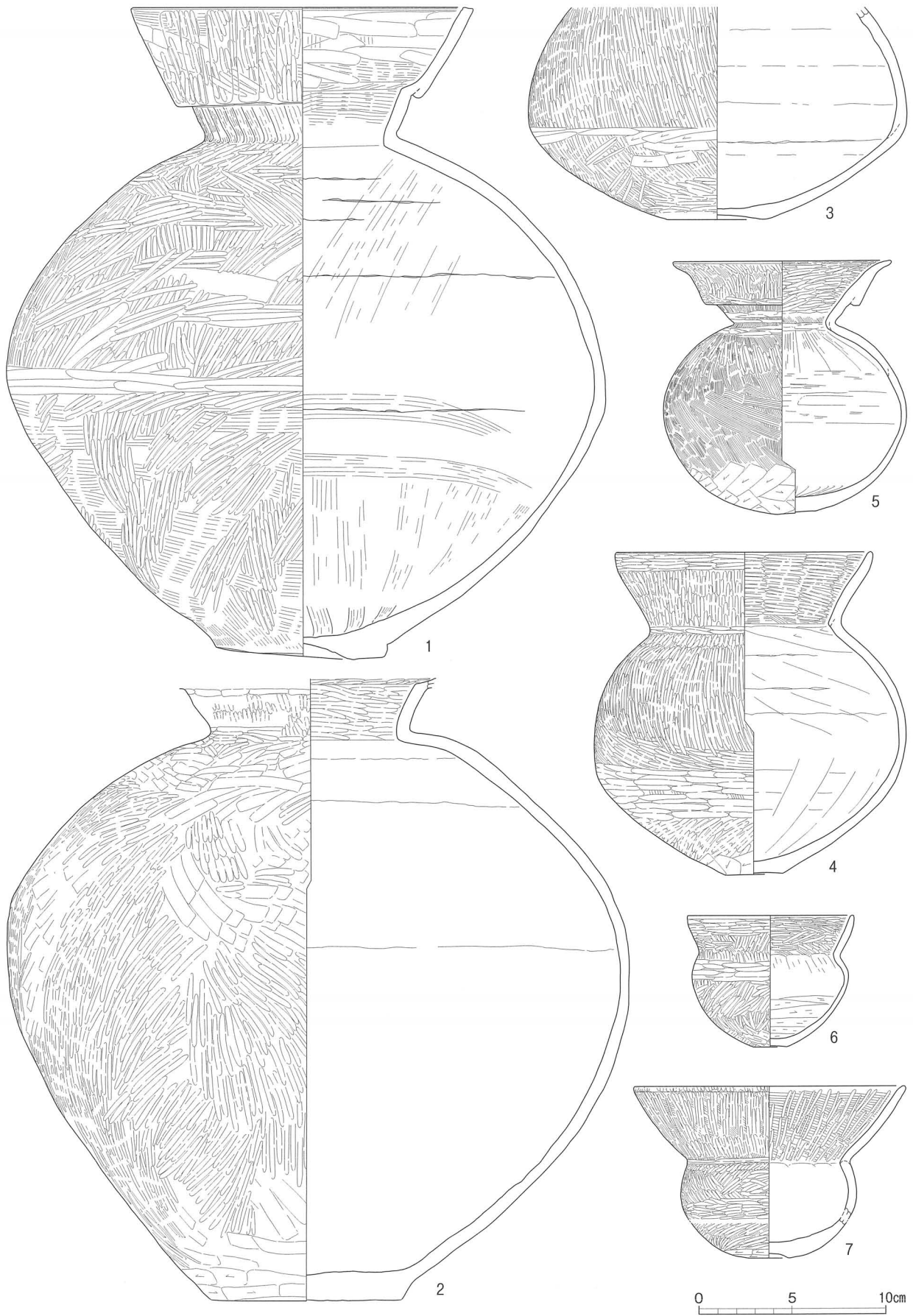
5号住居跡土層

- 1 暗褐色 ローム粒少量、締り強い
- 2 褐色 ローム粒少量、ロームブロック少量、締り強い
- 3 暗褐色 ローム粒多量、ロームブロック少量、締り強い、粘性弱い
- 4 明褐色 ローム粒多量、ロームブロック少量、締り強い、粘性弱い
- 5 暗褐色 ローム粒少量、ロームブロック少量、締り弱い
- 6 明褐色 ロームブロック多量、締り弱い、粘性強い
- 7 明褐色 ロームブロック多量、締り弱い、粘性強い
- 8 明褐色 ローム粒多量、ロームブロック多量、締り非常に強い、粘性弱い、貼床

P6

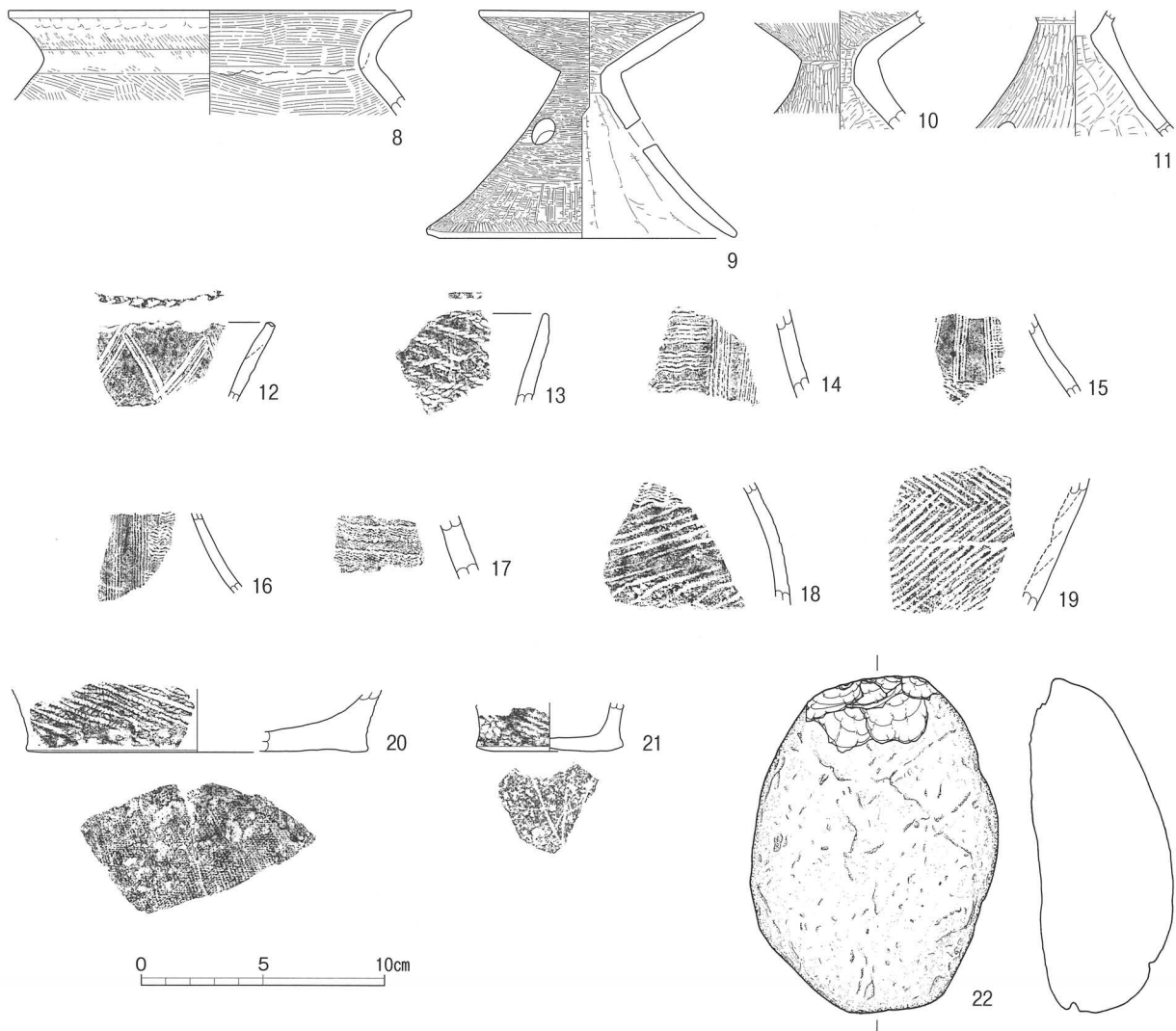
- 1 暗褐色 ローム粒少量、締り非常に弱い、粘性弱い
- 2 褐色 ローム粒少量、締り弱い、粘性強い
- 3 赤褐色 焼土多量、締り非常に強い、火床面
- 4 明赤褐色 焼土多量、ロームブロック多量、締り非常に強い

第101図 5号住居跡掘り方



第102図 5号住居跡出土遺物①

認したP 7～9・11（深さ65～92cm）は古い主柱穴、P 6が新しい出入り口ピットで、P10が古い出入口ピットと考えられる。主柱穴配置は拡張して建替えられており、拡張規模を柱穴心々距離から測定すると、西方向に約19cm、東方向に約28cm、南方向に約58cmとなる。P 2～4の脇の床面にのみ、Ag-KPブロックが検出され、新主柱穴掘削時の排土をそのまま貼床にしたのであろう。P 5は掘り方調査で、その下部から貯蔵穴と推測される床下土坑1を確認した。この土坑は貼床によって埋め戻されており、古い主柱穴に伴うものと想定される。P 6は断面漏斗状を呈し、硬化した盛土で囲まれる。 炉 竪穴中央北西寄りに位置する。平面は不整楕円形で、浅い皿状を呈する。被熱部は東側に偏っている。平面的に炉の位置に新旧の差は認められない。 覆土 褐色～暗褐色土の自然堆積状である。 遺物 竪穴中央部や北壁際の覆土上層～下層にかけて、破碎した壺類が出土している。西隅付近の北壁直下からは9の完形の器台が出土している。また、P 1覆土上層には壺（4）が含まれている。住居跡廃絶時にP 1の柱材を抜取り、その穴に遺棄あるいは廃棄されたものと推測する。 所見 住居跡の廃絶および構築時期は、古墳時代前期に比定される。



第103図 5号住居跡出土遺物②

表 47 5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	18.2 35.2 9.2	口縁部～胴部外面ハケメ後に雑なヘラミガキ、底部外面ヘラケズリ、口縁部内面ハケメ後に雑なヘラミガキ、胴部～底部内面ハケメ後にナデ。	石英、白色粒、骨針	良好	橙色	胴部外面に籠目覆土上～下層
2	土師器 壺	— — 10.2	頸部外面ハケメ後にヘラミガキ、胴部外面ヘラケズリとハケメ後に雑なヘラミガキ、底部外面ヘラケズリ後にナデ、口縁部内面ヘラミガキ、胴部～底部内面ナデ。	石英、白色粒、骨針	良好	橙色	口縁打ち欠き、胴部～底部内面あばた状剥離
3	土師器 壺	— — 5.2	胴部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、底部外面ヘラケズリ、胴部～底部内面ヘラナデだが磨減。	石英、白色粒、骨針	普通	橙色	覆土下層
4	土師器 壺	13.8 17.4 3.1	口縁部～胴部外面ハケメ後にヘラミガキ、胴部下端～底部外面ヘラケズリ、口縁部内面ハケメ後にヘラミガキ、胴部内面ナデ後に雑なヘラミガキ。	石英、白色粒、角閃石	良好	明赤褐色	胴部～底部内面あばた状剥離 P 1 上層
5	土師器 壺	11.7 14.7 2.2	口縁部内外面ハケメ後にヘラミガキ、胴部外面ハケメ後のヘラミガキ磨減、胴部下位外面ヘラケズリ後のヘラミガキ磨減、底部外面ヘラケズリ、胴部～底部内面ヘラナデ。	石英、角閃石、白色粒	良好	橙色	覆土下層
6	土師器 罎	8.9 7.1 1.8	口縁部内外面ハケメ後にヘラミガキ、胴部外面ヘラケズリ後のヘラミガキ磨減、底部外面ヘラケズリ、胴部上半内面ヘラナデ、胴部下半～底部内面ヘラケズリ。	石英、チャート、角閃石	普通	橙色	胴部～底部内面あばた状剥離
7	土師器 罎	14.6 9.3 2.2	口縁部内外面ハケメ後にヘラミガキ、胴部～底部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、胴部内面ナデ。	石英、角閃石、骨針	普通	にぶい黄橙色	胴部～底部内面あばた状剥離
8	土師器 甕	(16.5) — —	口縁部ハケメ後にヨコナデと指頭痕、胴部内外面ハケメ。	石英、角閃石	良好	橙色	
9	土師器 器台	9.2 9.4 12.7	脚部3方向に透孔。受部～脚部外面ヘラミガキ、受部内面ヘラミガキ、脚部内面ヘラナデ。	石英、チャート、角閃石	普通	橙色	覆土下層
10	土師器 器台	— — —	受部～脚部外面ヘラミガキ、受部内面ハケメ後にヘラミガキ、脚部内面ヘラケズリ。	石英、角閃石、白色粒	普通	にぶい赤褐色	
11	土師器 器台	— — —	脚部3方向に透孔。脚部外面ヘラミガキ、脚部内面ヘラケズリ。	石英、角閃石、骨針	普通	橙色	覆土下層
12	弥生土器 壺	— — —	口唇部縄文カキザミ。口縁部4本歯の山形文(反時計回り)。	雲母、角閃石	普通	にぶい黄橙色	十王台式
13	弥生土器 壺	— — —	口唇部縄文原体によるキザミ。口縁部軸縄不明の附加条縄文(R-Z)。	雲母、チャート、角閃石	普通	橙色	十王台式
14	弥生土器 壺	— — —	頸部4本歯の縦位直線文→横位波状文。	石英、雲母	普通	にぶい黄橙色	十王台式
15	弥生土器 壺	— — —	胴部軸縄不明の附加条縄文(L-Z)→頸部4本歯の横位区画波状文→頸部3条一単位の縦位直線文→横位波状文。	石英、雲母	普通	にぶい黄橙色	十王台式
16	弥生土器 壺	— — —	頸部5本歯の縦位直線文→横位波状文。	石英、雲母	普通	にぶい黄橙色	十王台式
17	弥生土器 壺	— — —	頸部7～8本歯の横位波状文。	石英・雲母多量、チャート	普通	にぶい黄橙色	
18	弥生土器 壺	— — —	胴部附加条2種縄文(R+r)→頸部7本以上の横位区画波状文。	石英、雲母	普通	にぶい黄橙色	十王台式
19	弥生土器 壺	— — —	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S、L-Z:上→下)。	石英多量、雲母	普通	にぶい橙色	二軒屋式カ
20	弥生土器 壺	— — 14.0	胴部軸縄不明の附加条縄文(L-Z)。底部布目痕。	石英、チャート、白色粒	普通	にぶい黄橙色	
21	弥生土器 壺	— — 6.0	胴部原体不明の縄文。底部木葉痕。	石英、角閃石	良好	橙色	
22	石製品 敲石		自然礫の上端部に剥離痕。石材：チャート。長さ13.8cm・幅10.15cm・厚さ5.9cm・重さ1087.2g。				覆土下層

8号住居跡（第104～108図）

位置 A区北端、M2グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向6.55m、東西方向7.07mを測り、隅丸正方形に近い形状を呈する。弥生時代の9号住居跡を破壊する。主軸方位 N-26°-Wを指向し、12・33号住居跡に非常に近似する。壁 壁高は8～31cmを測り、やや傾斜する。床 貯蔵穴～出入口口部にかけて硬化した周堤状盛土がみられる。住居床下の掘り方は壁際がわずかに窪んでいる。

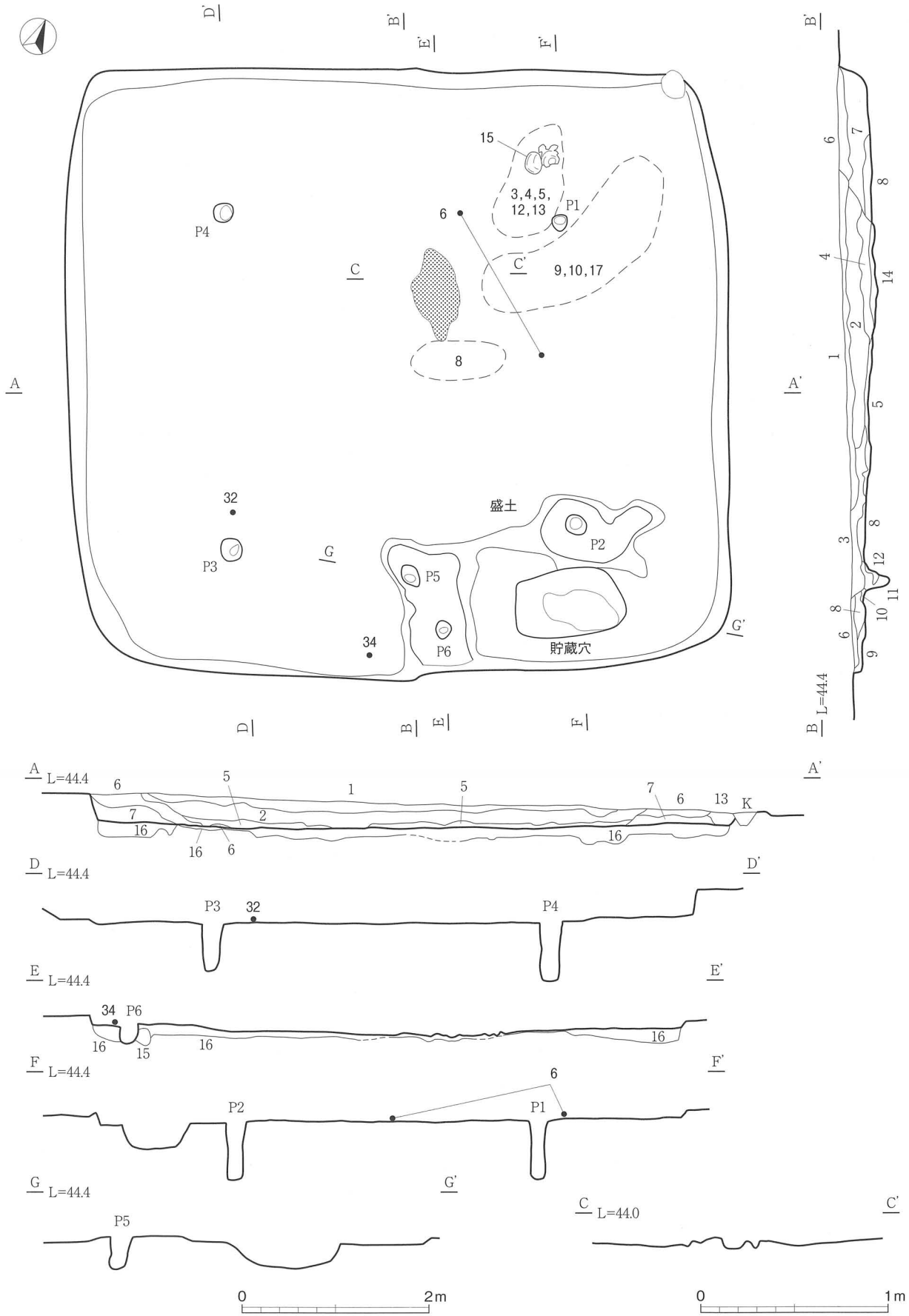
ピット 10箇所ある。P1～4が支柱穴、掘り方面で確認したP7～10が古い支柱穴、P5・6がいわゆる出入口ピットであろう。P1～4は直径18～24cmを測り、それぞれ軟弱で均質な黒色土・褐色土の柱痕とローム質土の根固めを検出した。新旧支柱穴はほぼ同位置に掘削されており、上屋規模に大きな変化はなかったと推測される。P6には柱痕を検出できなかったが、非常に軟弱な土質であった。旧支柱穴（深さ59～69cm）はロームブロックを多く含む土で一様に埋め戻されていた。南東隅部には、隅丸長方形の貯蔵穴があり、同一地点での造り替えを確認した。古い貯蔵穴は掘り方面で確認でき、暗褐色土で底面・壁面を硬く埋め戻して、一回り小さい規模の新しい貯蔵穴を構築していた。貯蔵穴の北側には明瞭に硬化した周堤状の盛土があり、P2はこの盛土を掘り込んでいる。

炉 竪穴中央北寄りに位置し、ほぼ主軸ライン上である。平面は菱形状の不整楕円形である。火床は赤硬化し掘り込みはない。覆土 壁際から竪穴中央最上層にかけて、明褐色土・褐色土・暗～黒褐色土の順に自然堆積する。遺物 P1の周りとは炉の南東側一帯（破線で表示）で、多量の土器が出土している。数個体の甕や鉢等が、竪穴北東隅から廃棄された状況で、壁際の覆土上層から炉付近の床面直上まで、埋没土のレンズ状堆積と同様の出土状態を呈する。床面からは32・34などの磨石・砥石類が出土している。また、南西隅部付近の覆土中位から、炭化材を1点検出した。

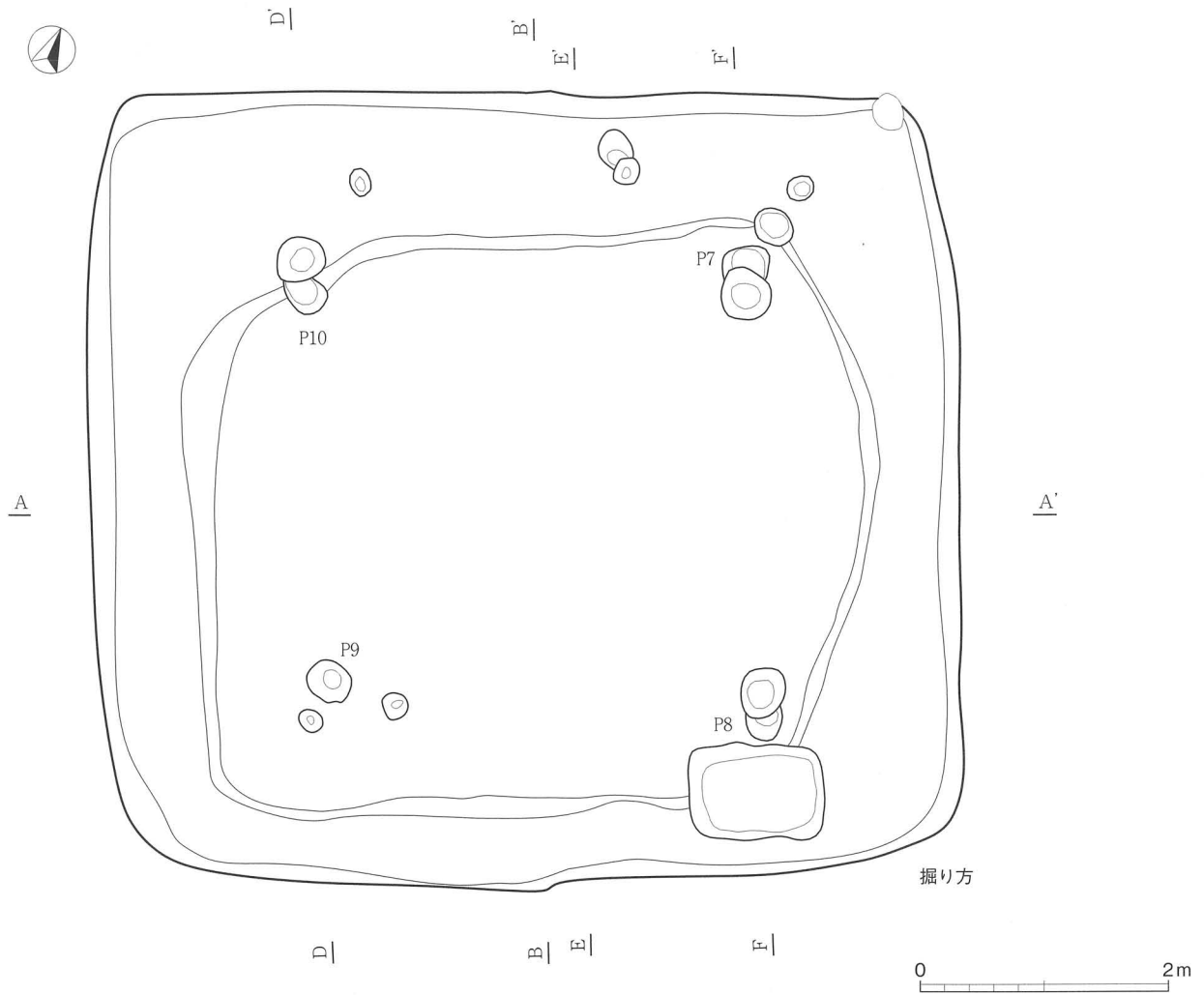
所見 支柱穴・貯蔵穴は造り直しているが、炉や竪穴にはその痕跡が認められない。住居跡の時期は、古墳時代前期に比定される。

表48 8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	(15.4) — —	口縁部内外面ヨコナデ後にヘラミガキ。	石英、チャート、 角閃石	普通	橙色	口縁部内面あば た状剥離
2	土師器 壺	— — —	口縁部内外面ハケメ後にヘラミガキ、頸部外面隆帯貼付後にヘラミガキと刻み、胴部外面ヘラミガキ、頸部内面指頭痕。	石英、角閃石、骨 針	普通	橙色	
3	土師器 壺	— — 4.9	胴部内外面ナデ、底部木葉痕。	石英、雲母	普通	にぶい黄橙色	
4	土師器 埴	9.2 5.5 1.6	口縁部内外面ヘラミガキ、胴部～底部外面ヘラケズリ後に胴部ヘラミガキ、胴部～底部内面ヘラミガキ。	石英、角閃石	普通	橙色	胴部～底部内面 あばた状剥離
5	土師器 甕	19.7 26.1 6.2	口縁部内外面ヨコナデ後にハケメと内面ヘラミガキ、胴部外面ヘラケズリ後に上半ハケメ、底部外面ヘラケズリ、胴部～底部内面ヘラナデ。	石英、チャート、 雲母	普通	橙色	外面にススと吹 きこぼれ痕、内 面あばた状剥離
6	土師器 甕	24.1 — —	口縁部外面ヨコナデ後にハケメ、胴部外面ヘラケズリ後にハケメ、口縁部～胴部内面ヘラケズリ後にヘラナデ。	石英、チャート、 骨針	普通	にぶい橙色	外面胴部中位に スス附着
7	土師器 甕	(18.1) — —	口縁部内外面ヨコナデ後に疎らなヘラミガキ、胴部外面ヘラナデ後に疎らなヘラミガキ、頸部内面の一部にハケメ、胴部内面ヘラナデ。	角閃石、雲母	普通	にぶい黄橙色	
8	土師器 甕	(17.7) — —	口縁部内外面ヨコナデ後にハケメと内面はヘラミガキ、頸部外面ミガキ状のナデ、胴部外面ハケメ、胴部内面ヘラミガキ。	石英、雲母	良好	にぶい橙色	

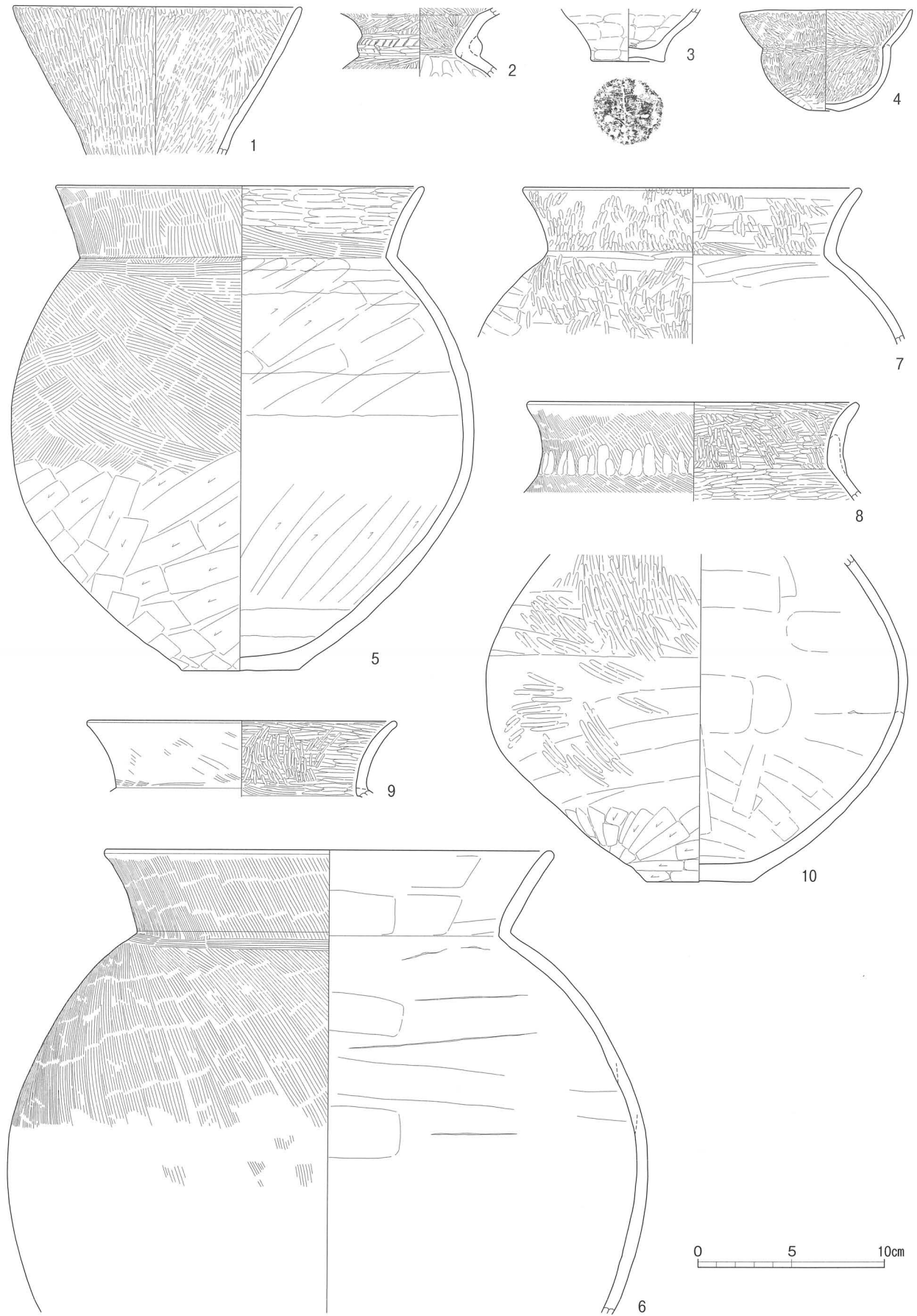


第104図 8号住居跡

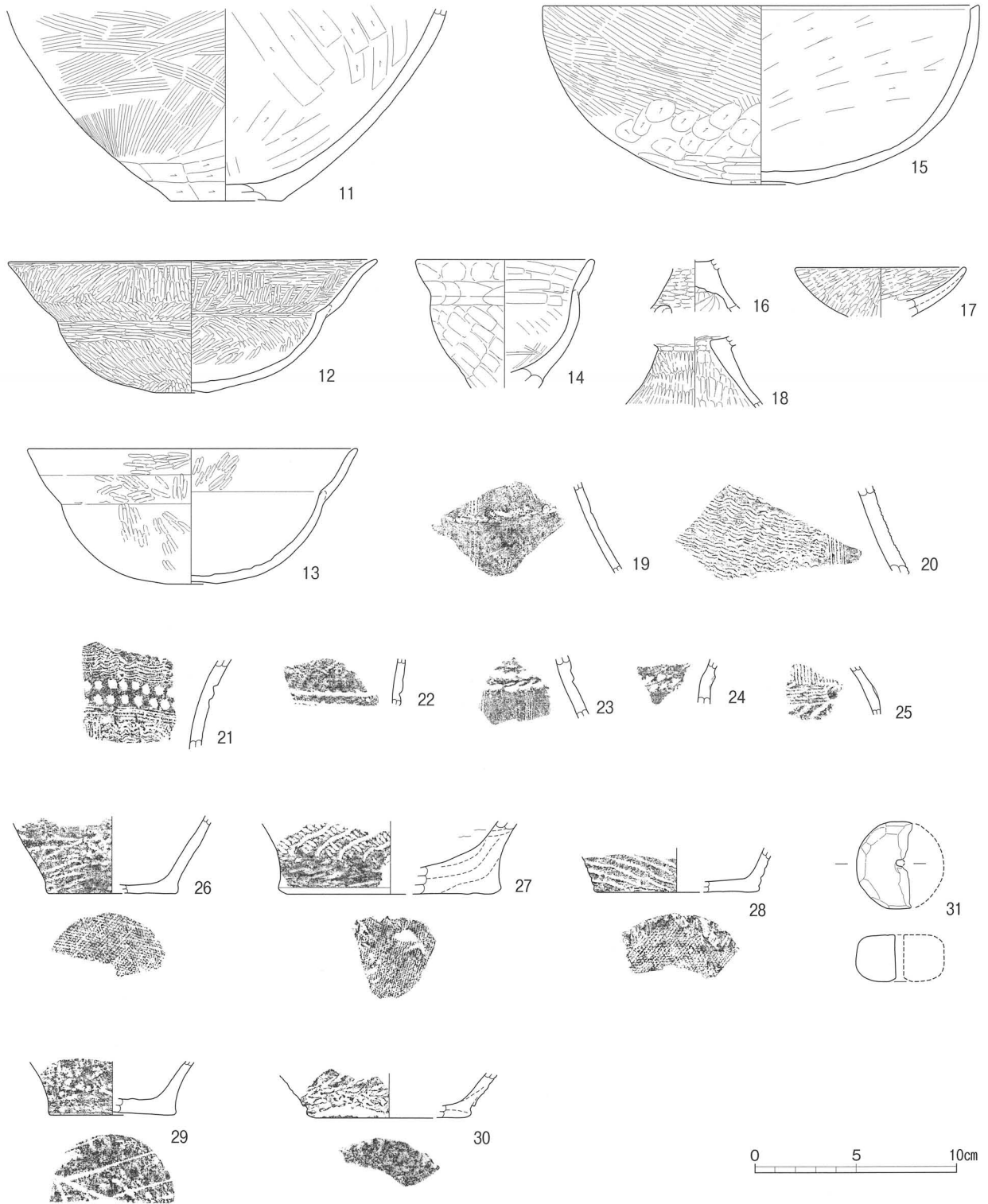


- 8号住居跡土層
- 1 黒褐色 締り弱い
 - 2 黒褐色 ローム粒少量、締り弱い
 - 3 暗褐色 締り強い、粘性弱い
 - 4 黒褐色 ローム粒少量、焼土少量、締り強い、粘性弱い
 - 5 暗褐色 ローム粒多量、ロームブロック少量、締り強い、粘性弱い
 - 6 褐色 締り強い、粘性弱い
 - 7 褐色 締り非常に強い、粘性弱い
 - 8 褐色 ローム粒多量、ロームブロック少量、締り強い、粘性弱い
 - 9 褐色 ローム粒多量、締り強い、粘性弱い
 - 10 明褐色 ローム主体、締り強い、粘性弱い
 - 11 明褐色 ロームブロック少量、締り非常に弱い
 - 12 明褐色 ローム粒主体
 - 13 明褐色 ローム質土
 - 14 明褐色 ローム粒多量、焼土多量、締り強い、炉覆土
 - 15 褐～極暗褐色 ロームブロック多量、ローム粒多量、締り強い、貼床
 - 16 黒褐色 ロームブロック多量、締り強い、P 5掘り方

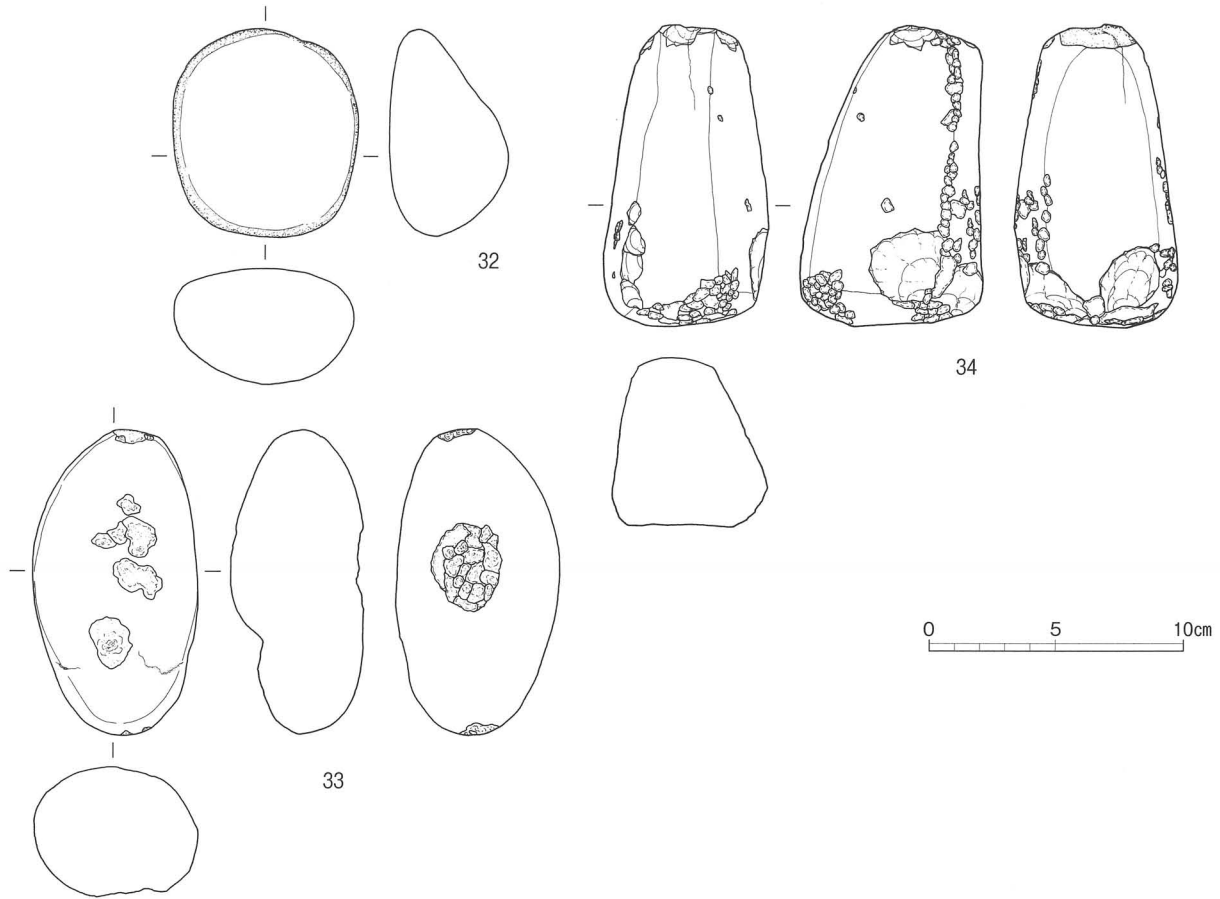
第105図 8号住居跡掘り方



第106図 8号住居跡出土遺物①



第 107 図 8号住居跡出土遺物②



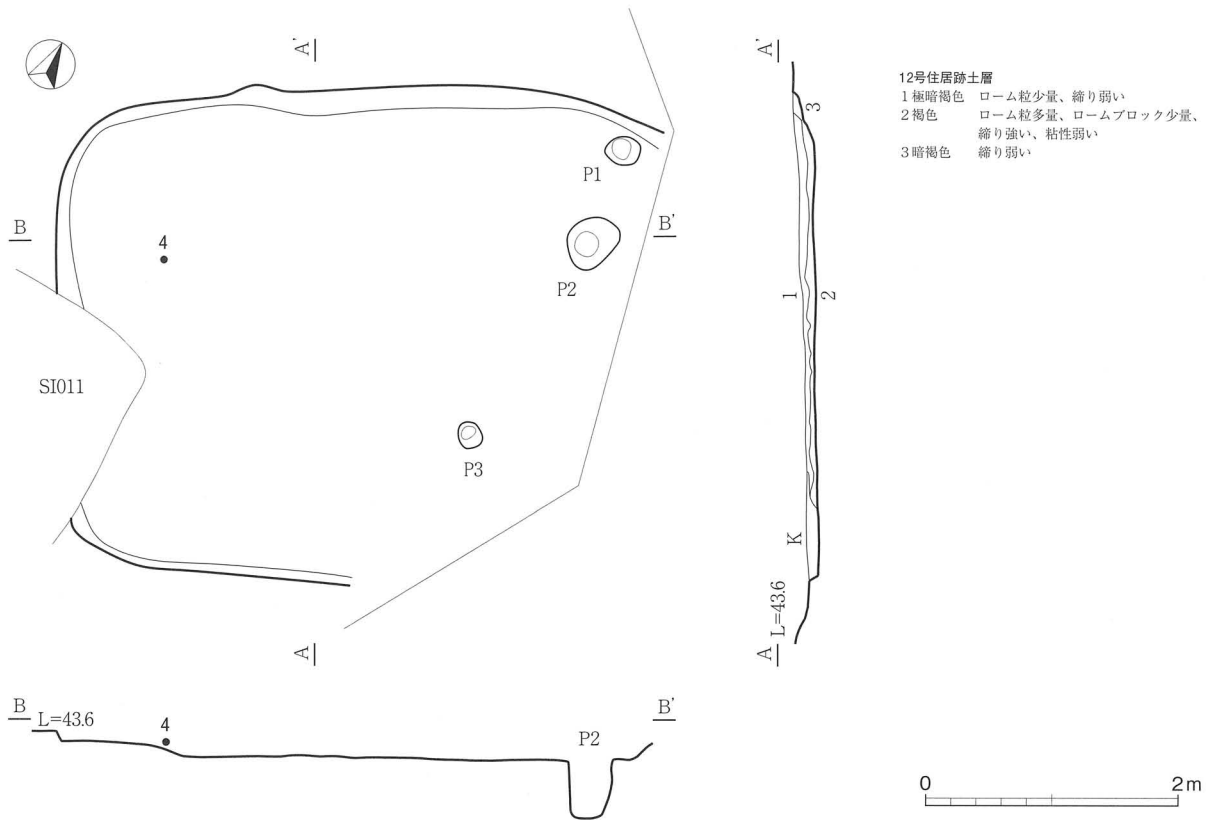
第108図 8号住居跡出土遺物③

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
9	土師器 甕	(16.5) — —	口縁部外面ハケメ後にヨコナデ、口縁部内面ヨコナデ後にヘラミガキ。	石英、角閃石、骨針	良好	明赤褐色	口縁部外面に吹きこぼれ痕
10	土師器 甕	— — 5.6	外面胴部上半ハケメと雑なヘラミガキ、胴部下半ヘラケズリ後に雑なヘラミガキ、底部外面ヘラケズリ、胴部～底部ヘラナデ。	石英、角閃石、雲母	良好	にぶい黄橙色	外面胴部中位にスス付着
11	土師器 甕	— — 5.4	胴部外面ハケメ、胴部下端～底部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ、底部内面ヘラケズリ後にヘラナデ。	石英、チャート、雲母	良好	橙色	底部内面あばた状剥離
12	土師器 鉢	(18.2) 6.6 2.5	口縁部内外面ヘラミガキ、体部～底部外面ヘラケズリ後に体部ヘラミガキ、体部内面ヘラミガキ。	石英、チャート、角閃石	普通	橙色	体部内面あばた状剥離
13	土師器 鉢	(16.3) 6.7 2.5	口縁部内外面ヨコナデ後に雑なヘラミガキ、体部～底部外面ヘラケズリ後に体部雑なヘラミガキ、	石英、チャート、角閃石	普通	橙色	内面体部～底部あばた状剥離
14	土師器 鉢	(8.9) — —	口縁部外面ヨコナデと指頭痕、体部外面ヘラナデ、口縁部～体部内面ヘラナデ。	チャート、雲母	普通	明赤褐色	口縁部外面にスス付着
15	土師器 鉢	21.6 13.9 3.2	甕未成品の転用（口唇部に黒斑）、口唇部はヘラケズリにより面取り。体部～底部外面ヘラケズリ後に体部ハケメ、体部～底部内面ヘラケズリ後にヘラナデ。	石英、雲母	良好	橙色	体部外面スス、内面体部～底部あばた状剥離

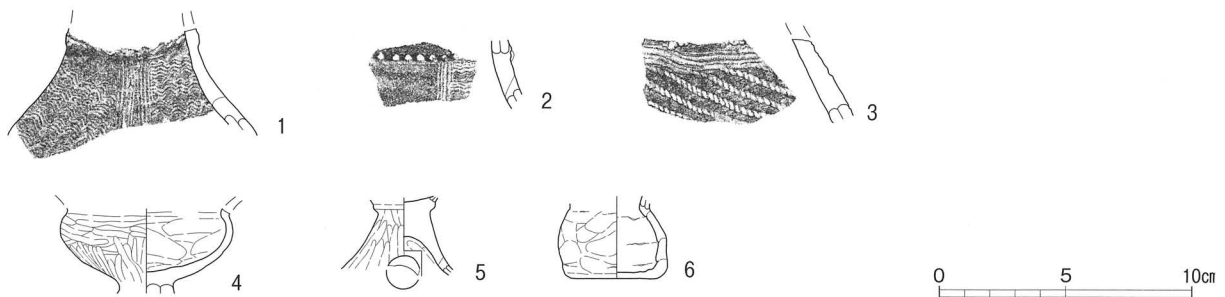
図版 番号	種 別 器 種	口 径 器 高 底 径	特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
16	土師器 高坏	— — —	脚部3方向に透孔。脚部外面ヘラミガキ、脚部内面ナデ。	石英、白色粒	良好	橙色	
17	土師器 器台	8.5 — —	受部内外面ヘラミガキ。	石英、角閃石、骨 針	良好	橙色	
18	土師器 器台	— — —	脚部外面ヘラミガキ、脚部内面ヘラナデ。	石英、チャート、角 閃石	普通	明赤褐色	
19	弥生土器 壺	— — —	頸部3本歯の縦位直線文と同様の工具による横位刺突文。	石英、雲母、チャ ート	普通	橙色	
20	弥生土器 壺	— — —	頸部4本歯の縦位直線文→横位波状文。	石英、雲母	普通	にぶい黄褐色	十王台式
21	弥生土器 壺	— — —	頸部5～6本歯の横位区画波状文→縦位直線文→横位波 状文。区画波状文上に2条の横位刺突文。	石英、チャート	普通	にぶい黄褐色	十王台式
22	弥生土器 壺	— — —	頸部隆帯3条カ。口縁部原体不明の縄文。	雲母	普通	灰黄褐色	
23	弥生土器 壺	— — —	頸部キザミ隆帯3条カ→5本歯の縦位直線文。	チャート、骨針	普通	橙色	
24	弥生土器 壺	— — —	頸部隆帯上にヘラ状工具先端による刺突列。	石英	普通	にぶい黄褐色	
25	弥生土器 壺	— — —	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S)→頸部6本歯の横位 区画直線文→縦位直線文→円形貼付文。	雲母	普通	にぶい黄褐色	
26	弥生土器 壺	— — 6.6	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S)。底部布目痕。	石英、チャート	普通	にぶい黄褐色	十王台式
27	弥生土器 壺	— — 11.0	胴部附加条2種縄文(R+R)。底部布目痕。	石英、チャート	普通	にぶい黄褐色	十王台式
28	弥生土器 壺	— — 8.0	胴部軸縄不明の附加条縄文(L・Z)。底部布目痕。	石英、骨針	普通	にぶい褐色	十王台式
29	弥生土器 壺	— — 6.4	胴部原体不明の縄文。底部木葉痕。	石英、チャート	普通	にぶい黄褐色	
30	弥生土器 壺	— — 8.2	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S)。底部磨減。	石英、雲母、チャ ート	普通	にぶい黄褐色	
31	土製品 紡錘車		径4.3cm、厚さ2.3cm、孔径4mm。わずかに多角形状を呈する。	雲母、骨針	普通	褐灰色	
32	石器 磨石類		磨→凹。自然礫の表面全体に磨耗痕。上・下端部に敲打痕。表・裏面に凹穴。被熱により赤褐色に変色。 石材：石英安山岩。長さ12.1cm・幅6.5cm・厚さ5.2cm・重さ557.0g。				床面直上
33	石器 磨石		自然礫の表面に磨耗痕。石材：ホルンフェルス。 長さ8.25cm・幅7.2cm・厚さ4.7cm・重さ378.4g。				
34	石器 砥石		砥→敲。6面使用。砥面はいずれも平滑。上・下端部や各砥面の稜上に敲打痕。 石材：緑色岩類。長さ11.9cm・幅6.45cm・厚さ7.1cm・重さ725.8g。				床面直上

12号住居跡 (第109・110図)

位置 A区北東端、N2グリッドに位置する。 **規模と平面形** 南北方向3.89m、東西方向4.78mの隅丸形状と推測する。11号住居跡に西壁の一部を壊されている。 **主軸方位** N-21°-W **壁** 壁高は17cmを測り、ほぼ垂直に近い。 **床** ほぼ平坦である。 **ピット** 浅い柱穴が3箇所あるが、いずれも主柱穴ではない。 **炉** - **覆土** 下層が褐色土、上層が暗褐色土で、弥生時代の住居跡の土層堆積と似た堆積状況である。 **遺物** 覆土中から少量の弥生土器片と4・5の土師器高坏、器台、6のミニチュアの壺が出土している。 **所見** 炉と主柱穴が認められないことから、竪穴状遺構と考えられる。時期は、古墳時代前期と考えられる。



第109図 12号住居跡



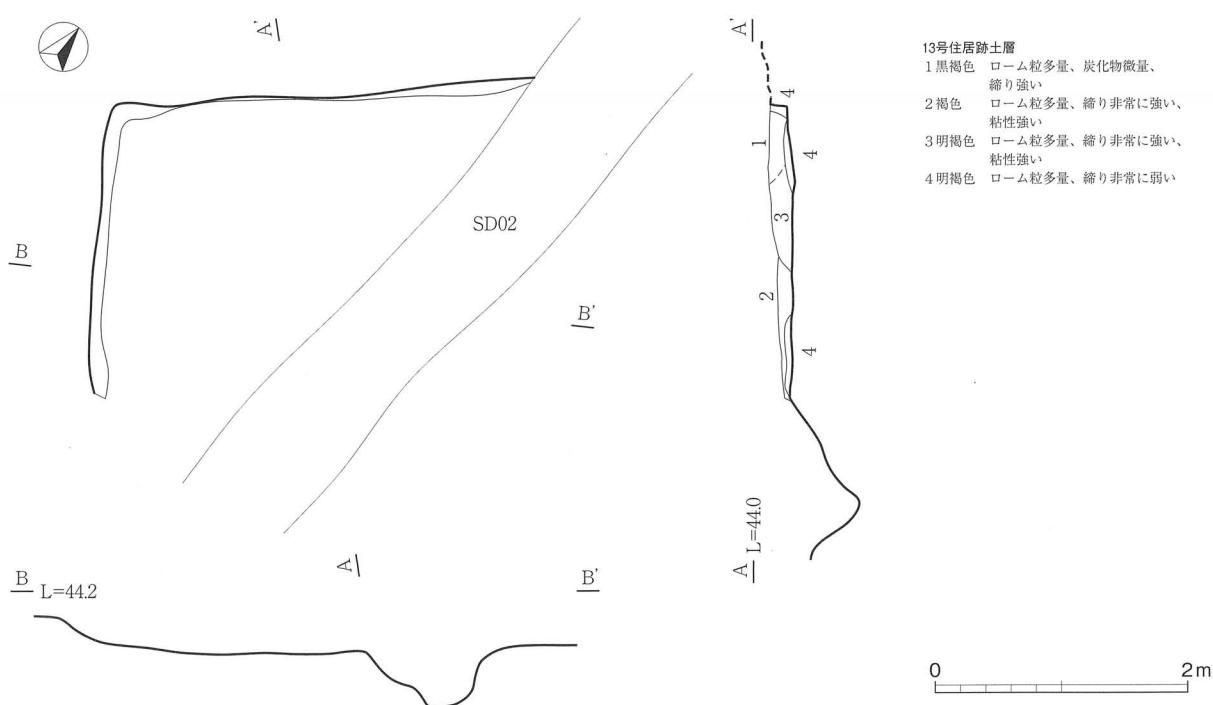
第110図 12号住居跡出土遺物

表 49 12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	頸部薄い押捺隆帯→5本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は縦・斜位のナデ。	石英、長石	良好	外：明黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	頸部は角棒状工具による刺突を施した隆帯→4本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は横位のナデ。外面にスス付着。	石英、角閃石	良好	にぶい黄褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条2種縄文(L+L)→頸胴界4本歯の横位区画直線文(反時計回り)→縦位直線文、横位波状文。内面は横位のナデ。	石英	良好	にぶい黄褐色	十王台式
4	土師器 高坏	- - -	外面は横・斜位のミガキ。内面は横位のナデ。	多量の石英・長石、角閃石	良好	にぶい黄褐色	覆土中層
5	土師器 高坏	- - -	外面は縦位のミガキ。内面は縦位のナデ。脚部3方向に透孔。	石英、赤色粒	普通	黒色	
6	土師器 ミニチュア壺	- - 3.4	外面は横・斜位のナデ。内面は雑なナデ。	石英、長石、角閃石	良好	にぶい黄褐色	

13号住居跡 (第111図)

位置 A区北端、M2～N2グリッドに位置する。規模と平面形 東西方向(3.39)m、南北方向(2.33)m。南側は地形の傾斜によって消失し、竪穴中央部には攪乱が入り、東側は2号溝によって壊されている。主軸方位 - 壁 壁高は16cmを測る。床 わずかに凹凸があり、掘り方はない。ピット - 炉 - 覆土 褐色～黒褐色土による自然堆積である。遺物 図示の困難な細片が出土している。所見 遺物からは時期を特定できないが、覆土の特徴は古墳時代の住居跡に類似する。



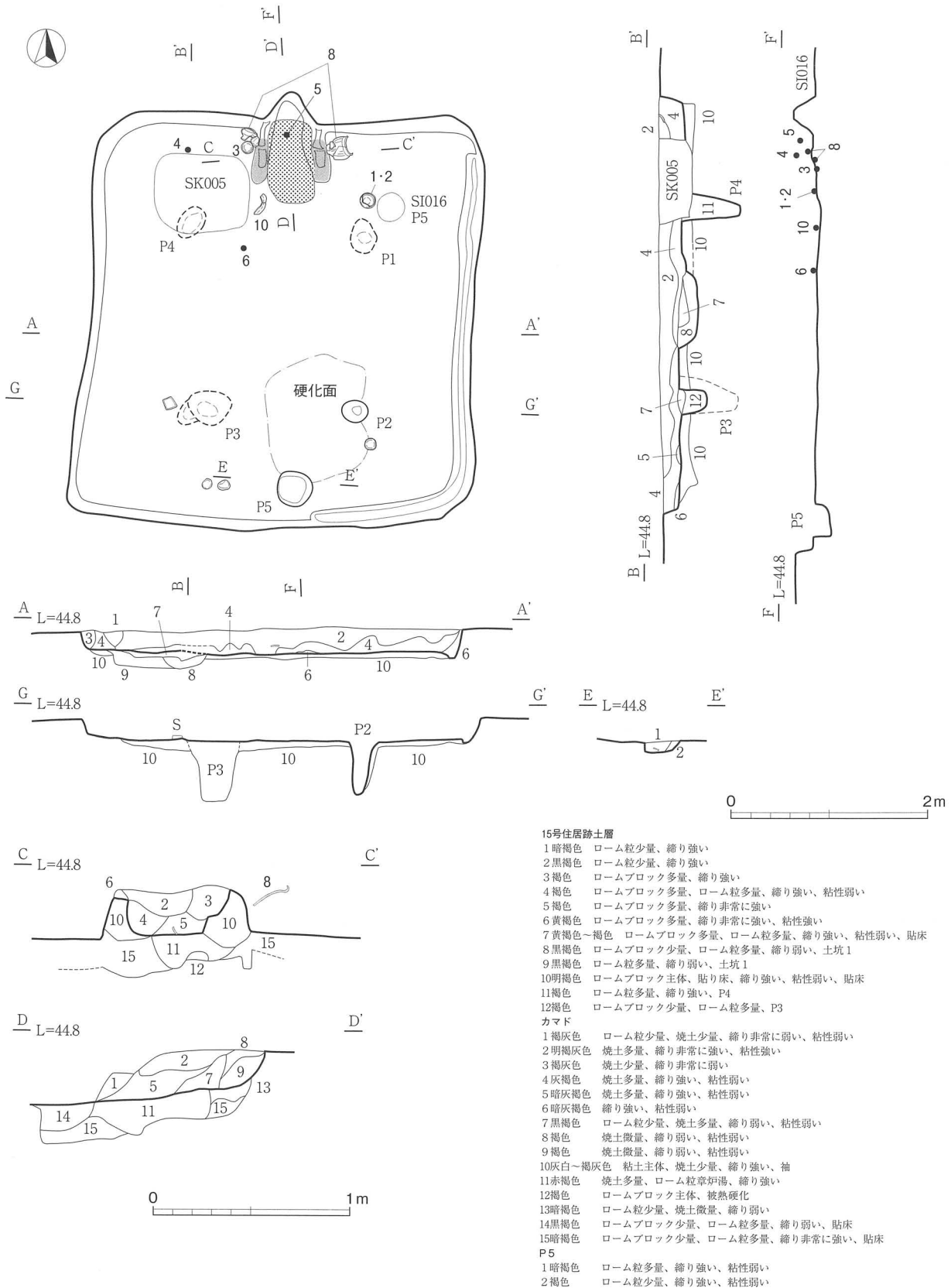
第111図 13号住居跡

15号住居跡（第112～114図）

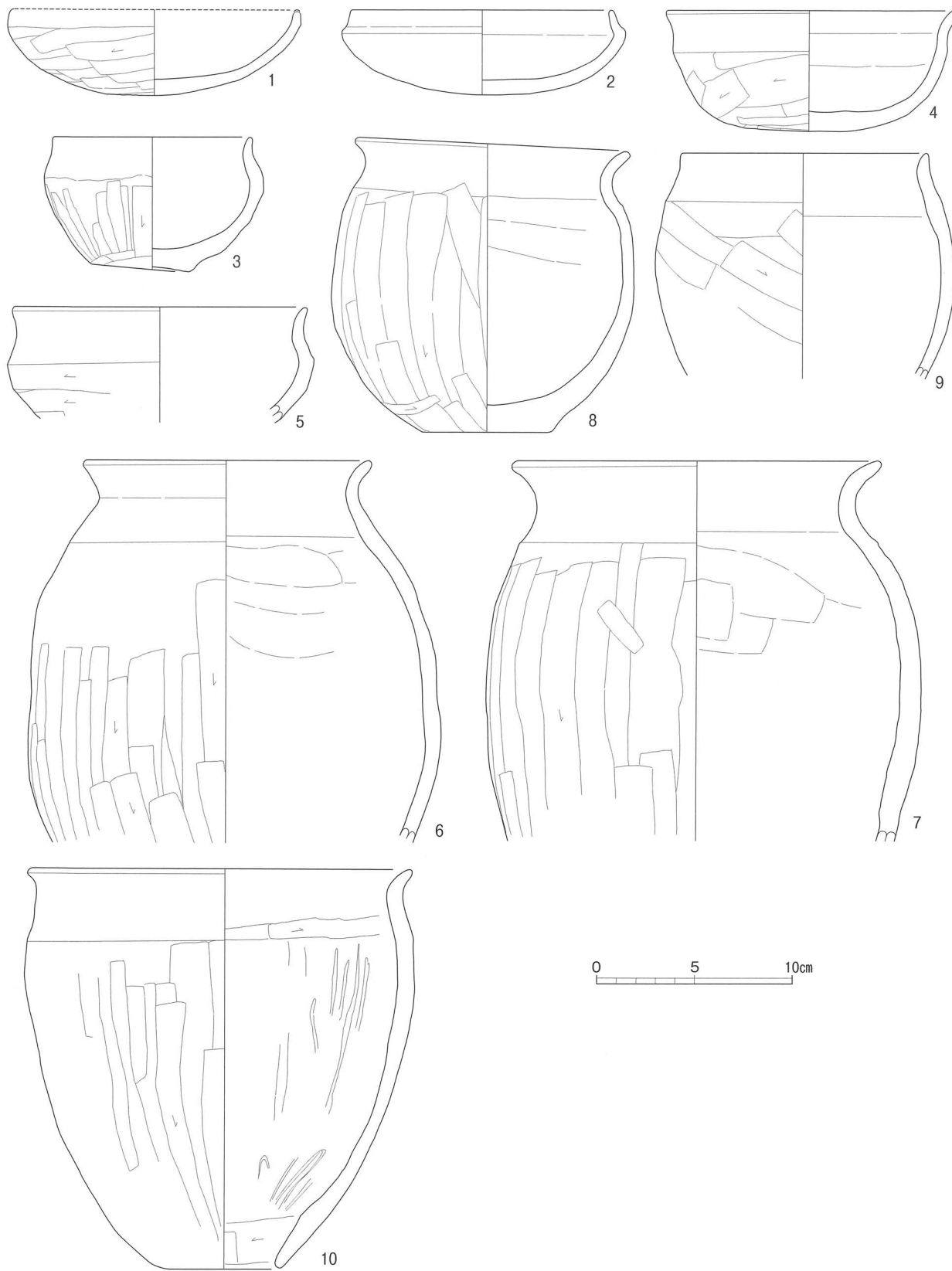
位置 A区北端、K3グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北の主軸方向4.27m、東西方向4.07mを測り、隅丸縦長長方形を呈する。弥生時代の16号住居跡を壊している。竪穴北西部は5号土坑によって壊されている。東壁～南壁中央部にかけての床面の縁には周溝がみられる。**主軸方位** N-1°-E **壁** 壁高は24cmを測り、傾斜している。**床** やや凹凸があり、P2とP5の周辺が硬化する。北壁周辺の掘り方が幅広い溝状を呈する。**ピット** 5箇所ある。P1～4が主柱穴、P5が出入口ピットである。P1・3・4は掘り方調査時に確認した。竪穴中央部西壁寄りには、不整形の土坑1があり、床面を壊した後で埋め戻され、貼床で閉塞されている（7～9層）。**カマド** 北壁中央に付設され、煙道部は16号住居跡の床面と覆土を切り込んで構築されている。両袖は良好に残り、赤変化も顕著である。**覆土** 均質な褐色～黒褐色土による自然堆積状を呈する。**遺物** カマド右袖脇からはほぼ完形の8の土師器甕が、左袖脇からは3の土師器坏が出土している。P1付近の床面からは、1・2の2点の土師器坏が重ねられた状態で出土し、P3脇の床面からは扁平で正方形の板状自然礫が置かれたように出土している。丸底の坏、やや深手で口縁部が小さく外反する鉢、甕や小型甕、胴部が膨らんだ単孔式の甑など、体部ヘラケズリの6世紀後半頃の土器が主体となっている。**所見** 住居跡の時期は、古墳時代後期6世紀後半頃と考えられる。

表50 15号住居跡出土遺物観察表

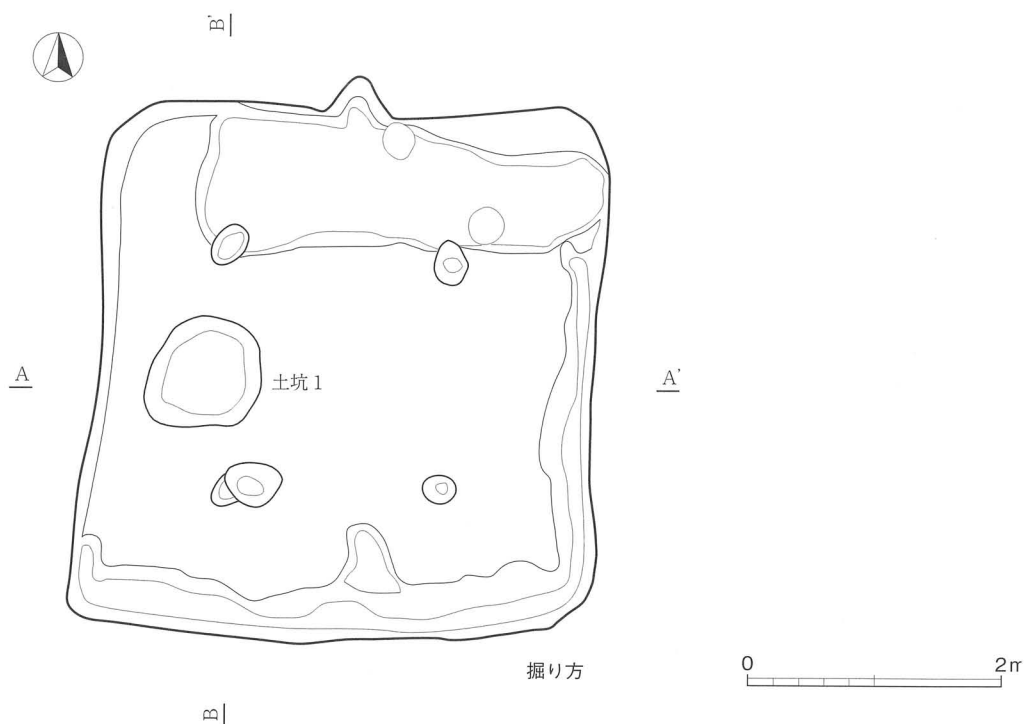
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	14.8 4.5 -	体部外面ヘラケズリ、内面ヨコナデ。	長石、石英、骨針	良好	橙色	床面直上
2	土師器 坏	(13.2) - 8.4	体部外面摩耗。	長石、石英、角閃石	良好	橙色	床面直上
3	土師器 坏	11.2 6.9 5.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面縦方向ヘラケズリ。	長石、石英	良好	にぶい橙色	覆土下層
4	土師器 坏	14.6 6.2 -	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ後ヘラケズリ。	長石、石英、骨針	普通	にぶい赤褐色	覆土上層
5	土師器 坏	(14.8) - -	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面横方向ヘラケズリ。	石英	普通	赤褐色	カマド
6	土師器 甕	14.0 - -	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	長石、石英、骨針	普通	橙色	覆土中層
7	土師器 甕	(18.8) - -	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
8	土師器 甕	13.7 14.9 6.5	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	にぶい橙色	90% 覆土下層
9	土師器 小型甕	12.4 - -	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面斜方向ヘラケズリ、内面ナデ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
10	土師器 甑	(19.6) 20.5 (6.0)	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面ミガキ。底部単孔式。	長石、石英	良好	にぶい橙色	30% 覆土下層



第112図 15号住居跡



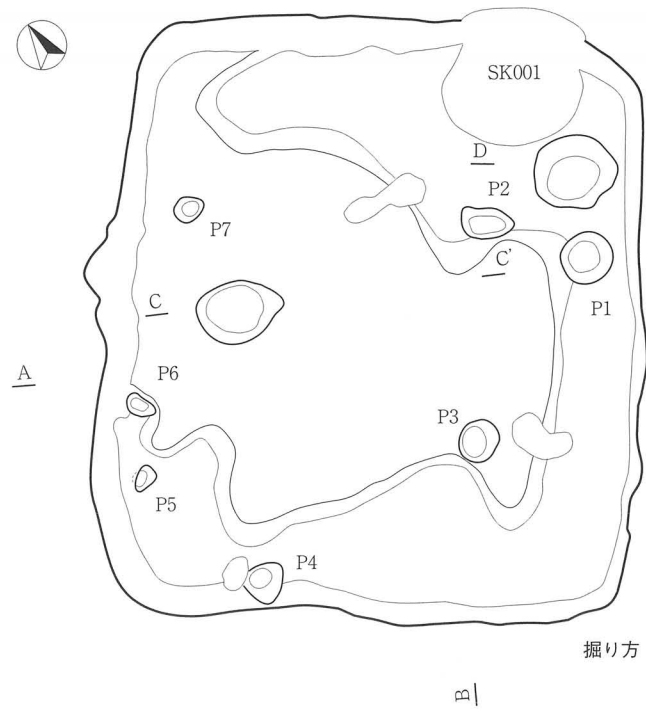
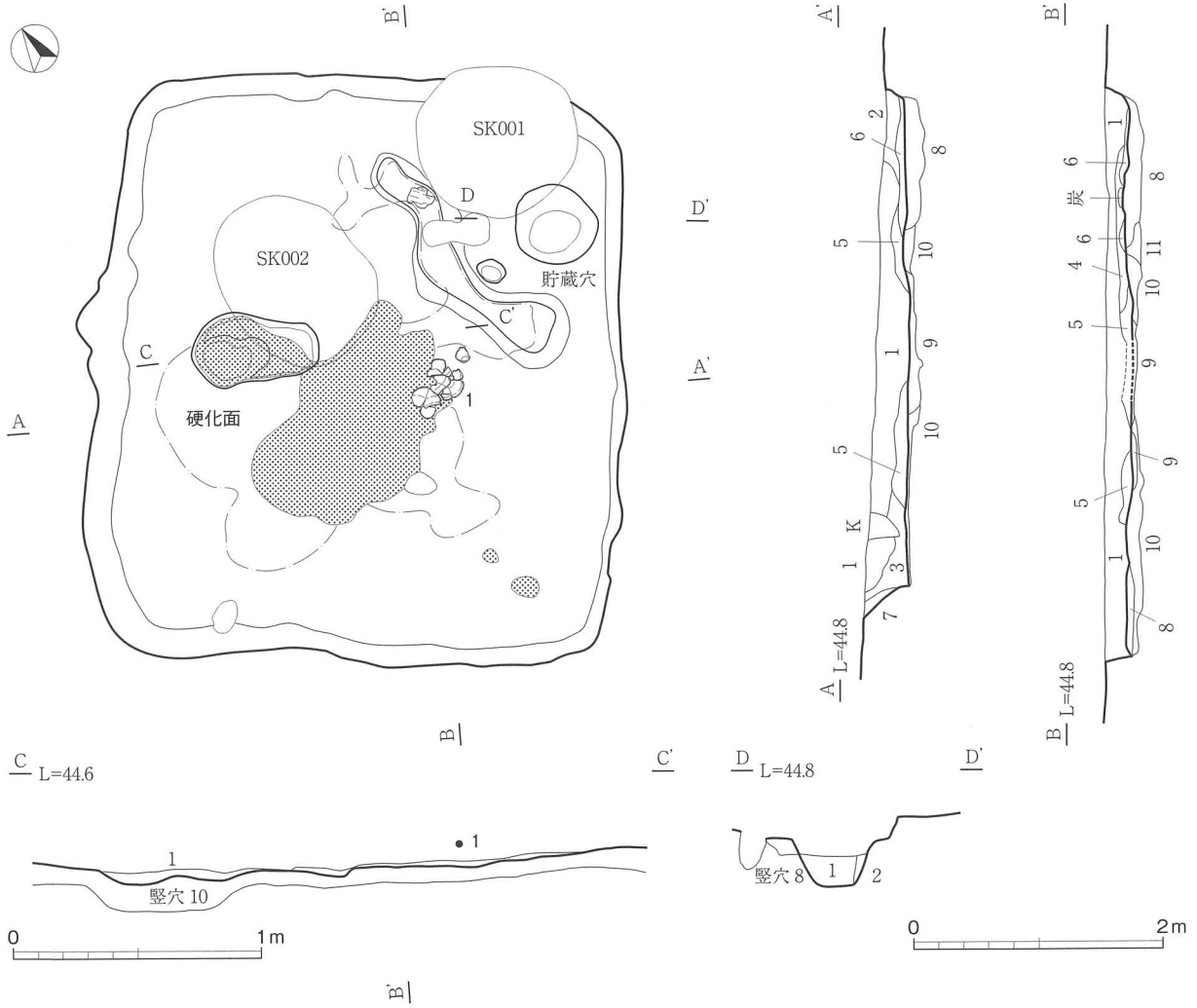
第113図 15号住居跡出土遺物



第114図 15号住居跡掘り方

23号住居跡（第115・116図）

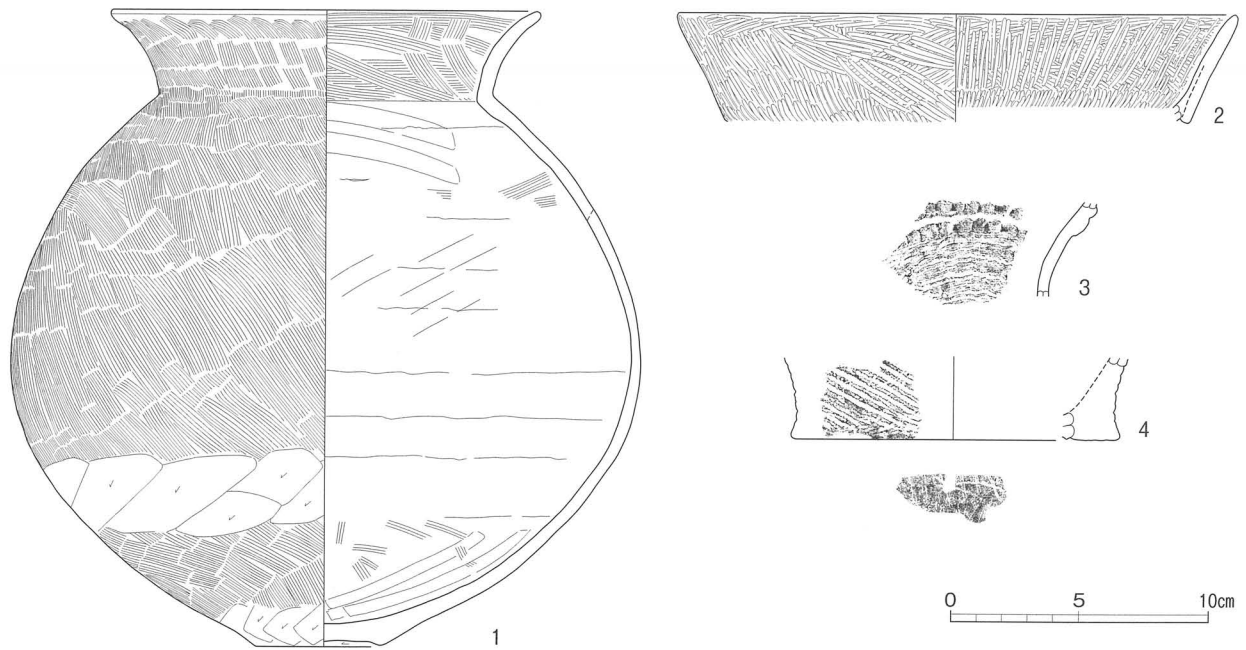
位置 A区北端、L2～M2グリッドに位置する。**規模と平面形** 4.81 m × 4.31 mの隅丸長形状を呈する。1・2号土坑によって一部壊されている。床面にはピット状の攪乱も多数みられた。**主軸方位** N - 53° - Wを示し、5号住居跡に近似する。**壁** 壁高は37cmを測り、傾斜して立ち上がる。**床** 凹凸があり、あまり平坦・水平ではない。中央部と、貯蔵穴西側の周堤盛土上が硬化する。また、床面中央部は広範囲に著しく被熱しており、4号住居跡との類似性が注意される。**ピット** 7箇所ある。P1（深さ32cm）が通称出入口ピット、P4・5・6・7（各深度22cm・22cm・19cm・10cm）が壁柱穴、P2・3は用途不明である。東隅には貯蔵穴と考えられる円形の土坑を確認した。この土坑の周囲には、不整形な周堤状の高まりがある。**炉** 中央部北寄りに位置する。平面は不整形楕円形で、浅い皿状を呈する。被熱による赤変硬化は著しい。被熱範囲は炉の南西側に広く展開している。**覆土** 褐色～暗褐色土の自然堆積状である。**遺物** 竪穴中央部の覆土下層から、甕のほぼ完形個体（1）が出土した。覆土中～床面からは少量ながら炭化材や焼土ブロックが検出されている。**所見** 床面の炉以外の広い被熱範囲は上屋焼失に関わる痕跡とみられる。住居の時期は、古墳時代前期に比定される。



23号住居跡土層

- 1 褐色 ローム粒少量、締り強い
 - 2 暗褐色 ローム粒少量、締り強い
 - 3 褐色 ロームブロック少量、締り強い
 - 4 褐色 ローム粒少量、焼土少量、炭化物多量、締り強い
 - 5 黒褐色 ローム粒多量、焼土多量、炭化物多量、締り強い
 - 6 褐色 ローム粒多量、ロームブロック少量、
焼土微量、締り強い
 - 7 明褐色 締り弱い
 - 8 褐色 ローム粒少量、ロームブロック少量、
締り非常に強い、貼床
 - 9 暗褐色 焼土主体、締り非常に強い
 - 10 明褐色 ロームブロック多量、締り強い、粘性弱い、貼床
 - 11 黄褐色 ロームブロック主体、締り強い、締り弱い、貼床
- 炉
1 暗赤褐色 焼土多量、炭化物微量
- 貯蔵穴
1 褐色 ロームブロック少量、締り強い、粘性弱い
2 黄褐色 ロームブロック多量、締り強い、粘性あり

第115図 23号住居跡



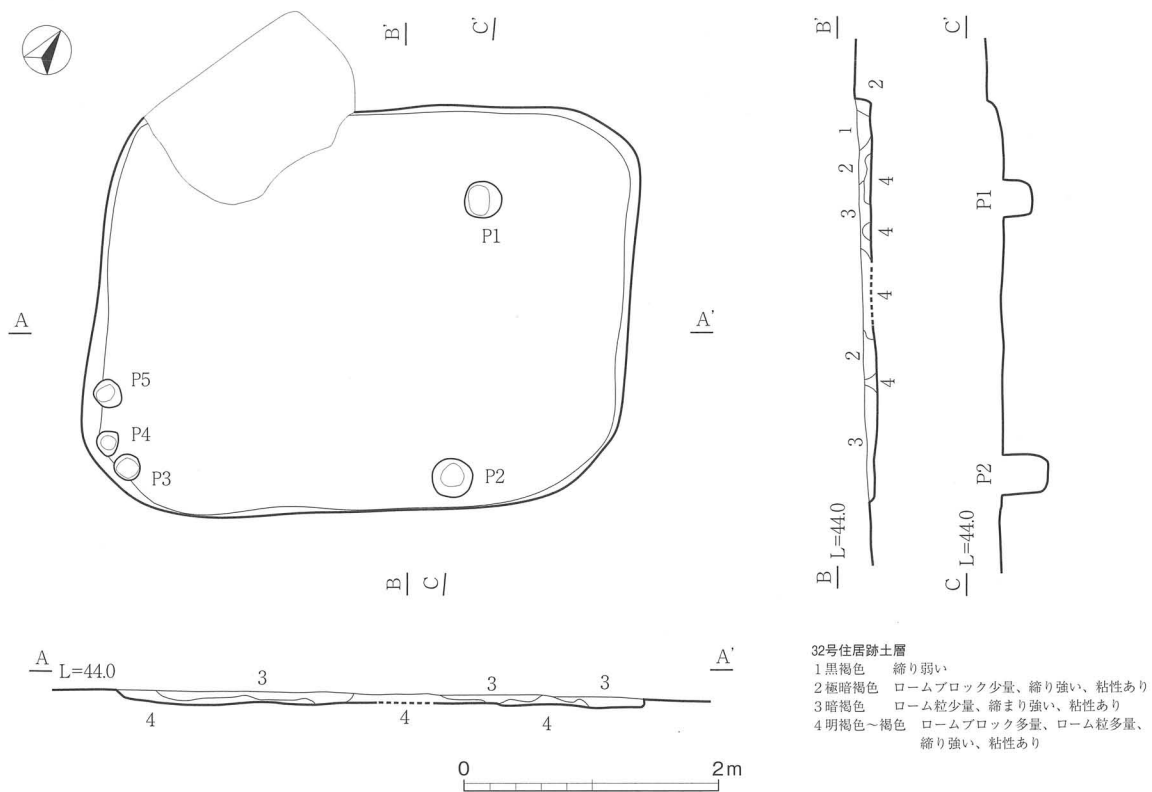
第116図 23号住居跡出土遺物

表51 23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 甕	16.8 25.3 4.8	口縁部内外面ヨコナデ後にハケメ、胴部～底部外面ヘラケズリ後に胴部ハケメ、胴部～底部内面ハケメ後にヘラナデ。	石英、チャート、角閃石	良好	赤色	内面胴部～底部あばた状剥離
2	土師器 壺	21.8 — —	口縁部内外面ハケメ後にヘラミガキ。	雲母、角閃石、骨針	良好	明赤褐色	口縁部外面赤彩の痕跡。
3	弥生土器 壺	— — —	頸部押捺隆帯。隆帯の上下は歯数不明の横位波状文。	石英、雲母	普通	にぶい黄橙色	十王台式
4	弥生土器 壺	— — 12.8	胴部附加条1種縄文(RL+2L)。底部木葉痕。	石英多量	普通	橙色	

32号住居跡（第117図）

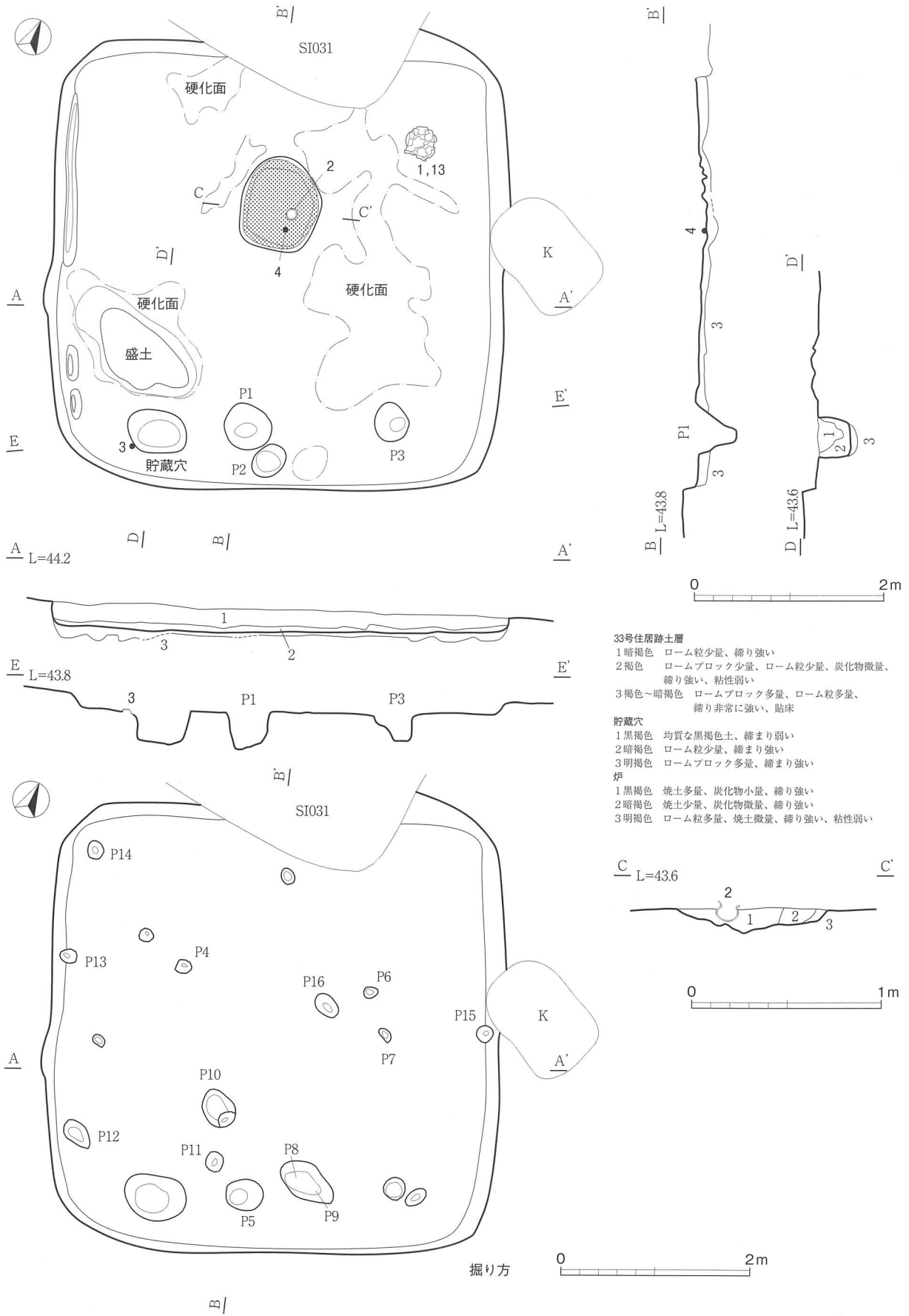
位置 A区北東部、M3グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北方向3.2m、東西方向4.19mを測り、平行四辺形に近い隅丸長方形である。北東隅は攪乱に壊されている。**主軸方位** N-27°-W **壁** 壁高は11cmを測り、傾斜する箇所と垂直に立ちあがる部分がある。**床** 平坦で、掘り方はない。**ピット** P1・2・3・4・5（各深度35cm・28cm・30cm・36cm・25cm）、いずれも支柱穴ではない。P1・4は断面観察で柱痕と根固めを検出した。**炉** - **覆土** 褐色～暗褐色土の自然堆積状を呈する。**遺物** 図示できない土器細片がわずかに出土している。**所見** 出土遺物に乏しいため時期を特定できないが、覆土の色調・土質、平面形は古墳時代前期の住居跡に似ている。



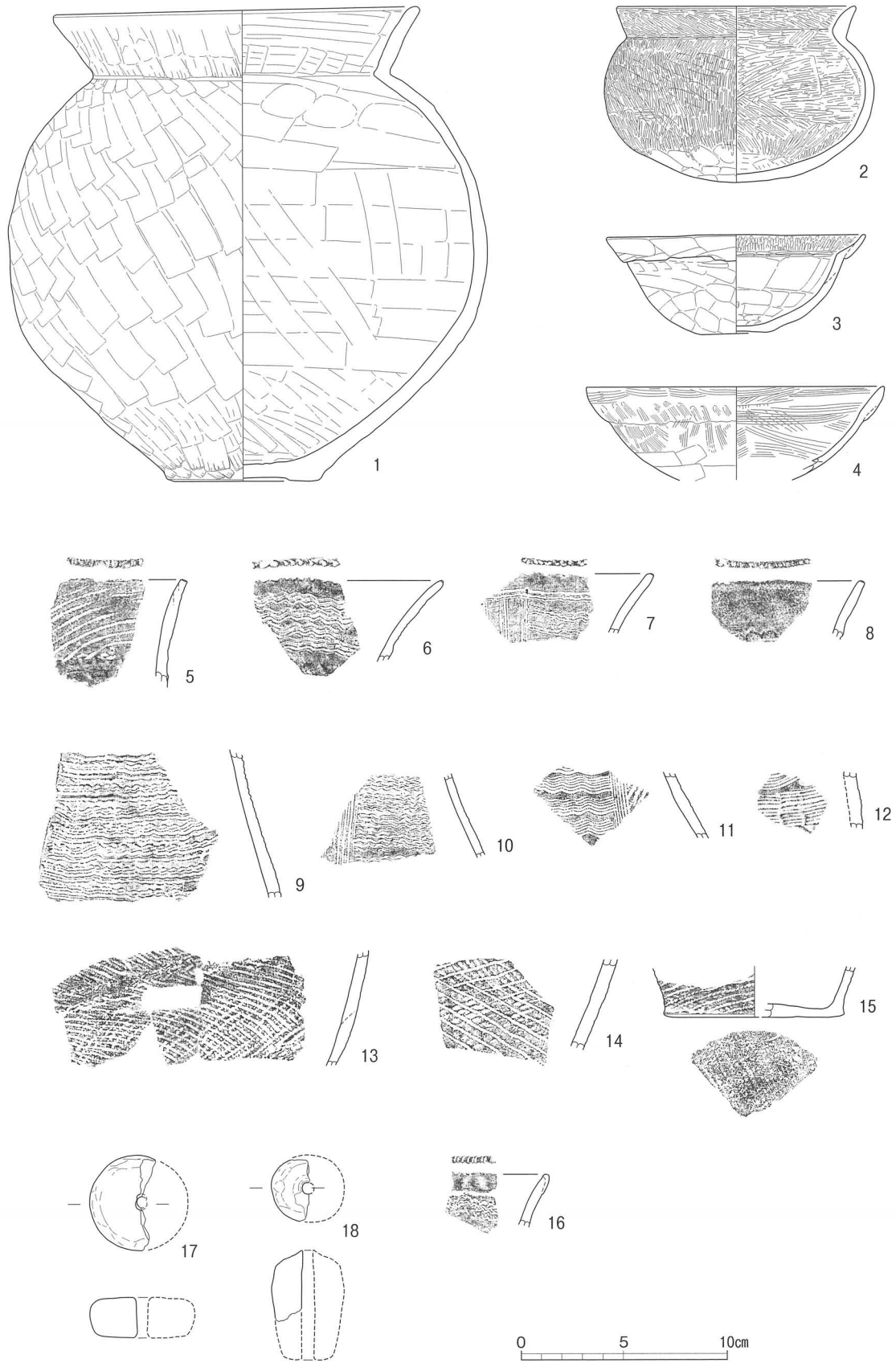
第117図 32号住居跡

33号住居跡 (第118・119図)

位置 A区北東部、M3グリッドに位置する。規模と平面形 4.80 m × 4.82 mの隅丸正方形。31号住居跡に北壁中央を壊されている。**主軸方位** N - 25° - W、8・12号住居跡に近似する。**壁** 壁高は24cmを測り、やや傾斜する。**床** 中央部東側や炉の周り、貯蔵穴北側にある周堤盛土などが部分的に硬化する。**ピット** 床面で3箇所 (P1～3)、掘り方面で小ピットが13箇所 (深さ10～35cm・平均22cm) ある。P1が出入口ピットで、柱材抜取痕を確認できた。P2 (深さ17cm) も出入口に関係する柱穴であろう。P3 (深さ30cm) の用途は不明である。南西隅部には、平面形が隅丸長方形の貯蔵穴があり、底面はローム質土で埋め戻されていた。貯蔵穴の北側には硬化した周堤状の高まりが見られる。**炉** 中央部の北寄りに位置する。平面不整楕円形で浅い皿状を呈している。全体に赤変硬化が顕著である。**覆土** 褐色土・暗褐色土の2層で、自然堆積であろう。**遺物** 竪穴北東隅付近の覆土下層から、ほぼ完形の1の甕が横位につぶれた状態で出土している。炉からも完形の2の鉢が出土しているが、火床面には接地しておらず、住居廃絶時の遺棄遺物かどうか判断が難しい。貯蔵穴脇の床面からは、ほぼ完形の3の鉢が逆位で出土している。また、覆土中から土製紡錘車と土錘が出土している。**所見** 周溝は西壁にのみ認められている。竪穴・炉の造り替えは認められなかったが、2箇所の出入口ピットと貯蔵穴の底部嵩上げは、部分的な造り替え痕跡と判断できる。住居跡は、古墳時代前期に比定される。



第118図 33号住居跡



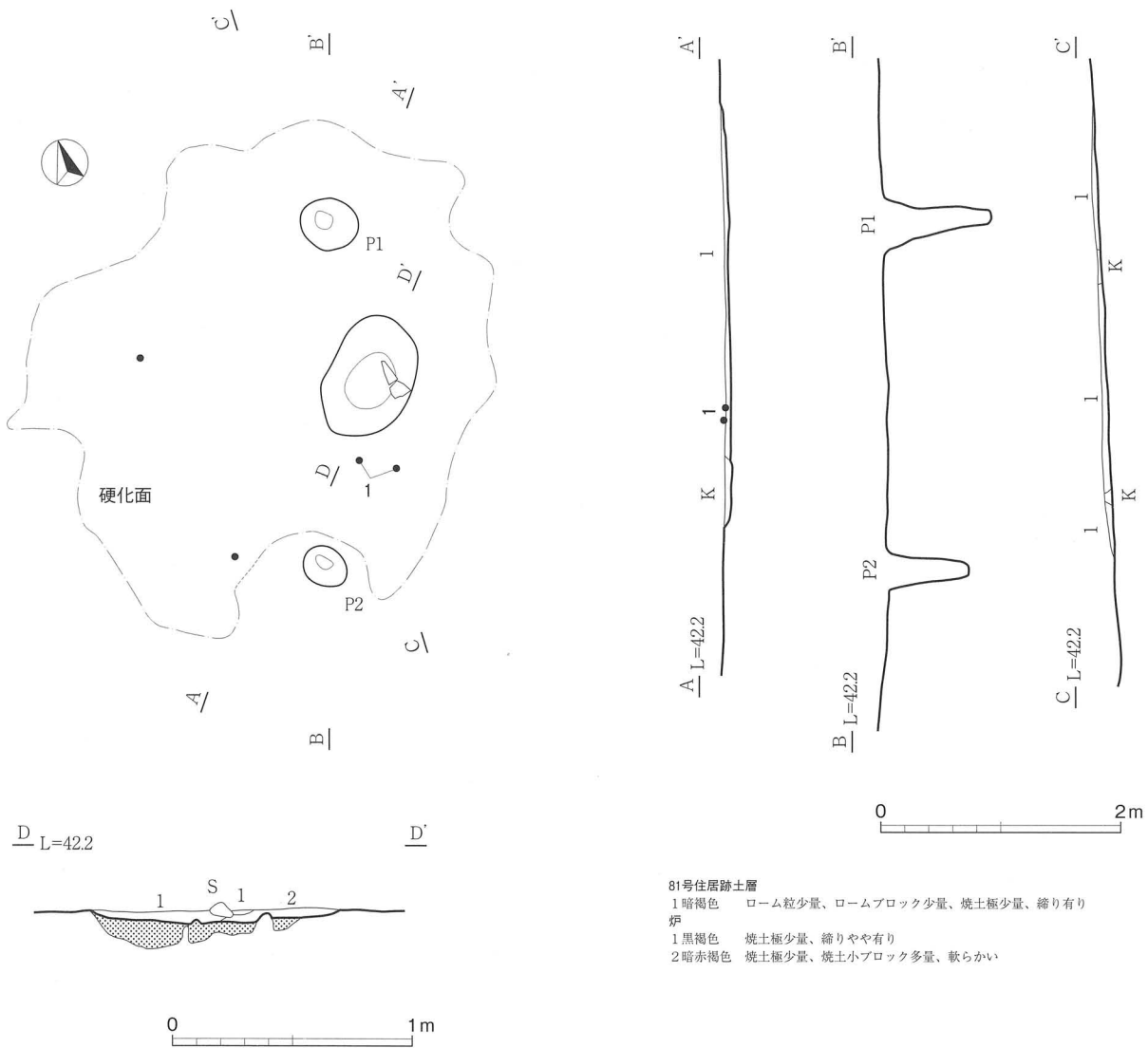
第119図 33号住居跡出土遺物

表 52 33号住居跡出土遺物観察表

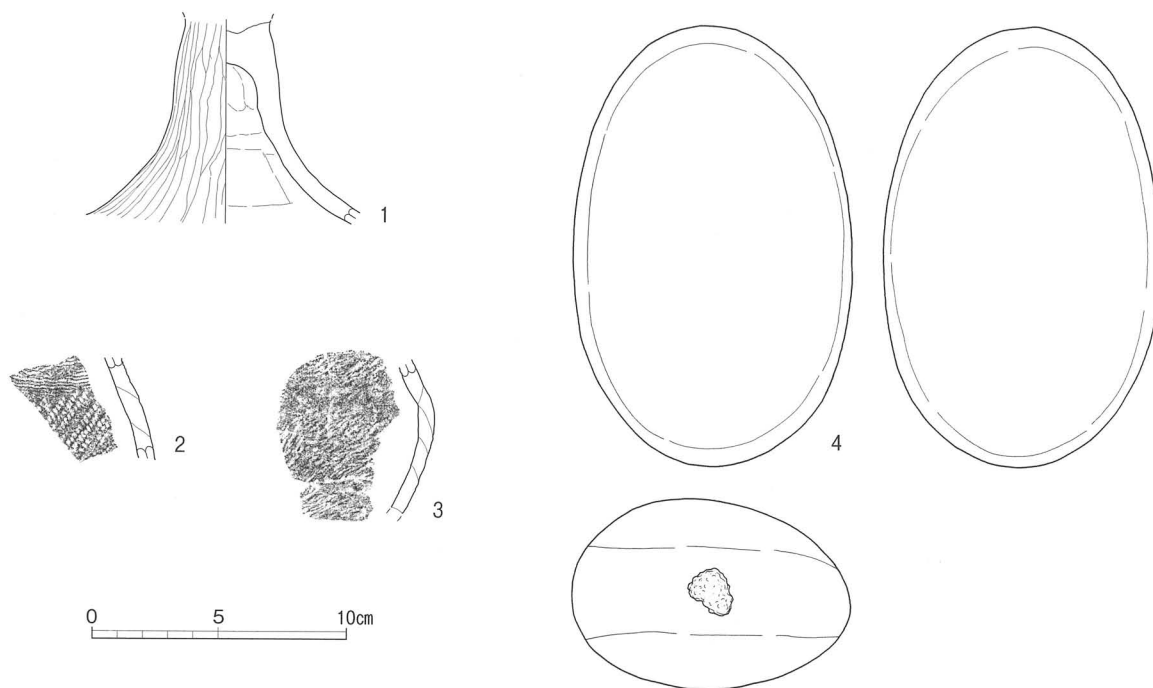
図版 番号	種 別 器 種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 甕	17.8 23.5 7.4	口縁部ヨコナデ後に頸部外面ナデ、胴部～底部外面ヘラケズリ後に雑なヘラナデ、口縁部～底部内面ヘラナデ。	石英多量、雲母	良好	橙色	覆土下層
2	土師器 鉢	11.6 8.7 -	口縁部ヨコナデ後にヘラミガキ、胴部～底部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、胴部～底部内面ヘラミガキ。	石英、チャート、 角閃石	普通	橙色	炉
3	土師器 鉢	12.6 4.9 3.0	口縁部外面強いナデ後に雑なヘラミガキ、体部～底部ヘラケズリ後に雑なヘラミガキ、口縁部内面ヘラミガキ、体部～底部内面ヘラケズリ後に雑なヘラミガキ。	石英、雲母、角閃 石、骨針	普通	明赤褐色	底部内外面に黒 斑 床面直上
4	土師器 鉢	14.5 - -	口縁部～体部内外面ハケメ、底部外面ヘラケズリ。	雲母、骨針	普通	橙色	炉
5	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキサミ。口縁部軸縄不明の附加条縄文(R-S)。頸部2条の押捺隆帯。	雲母、骨針	普通	明黄褐色	十王台式
6	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキサミ。口縁部6本歯の横位波状文(下→上)。	雲母、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	- - -	口縁部5本歯・3条一単位の縦位直線文→横位波状文。	石英、雲母	普通	にぶい黄褐色	十王台式
8	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキサミ。口縁部無文(横位のナデ)。頸部押捺隆帯。	雲母	普通	にぶい黄褐色	
9	弥生土器 壺	- - -	頸部4本歯の縦位直線文→横位波状文。	石英、雲母、骨針	普通	明黄褐色	十王台式
10	弥生土器 壺	- - -	頸部4本歯の縦位直線文→横位波状文。	雲母	普通	にぶい黄褐色	十王台式
11	弥生土器 壺	- - -	頸部5歯の縦位直線文→横位波状文、軸縄不明の附加条縄文(R-S)。	石英、雲母	普通	にぶい黄褐色	十王台式
12	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(L-Z)→頸部10本歯の等間隔止めカ簾状文(反時計回り)、横位波状文。	石英多量	普通	にぶい黄褐色	二軒屋式カ
13	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S、L-Z:上→下)。	石英、チャート、 骨針	普通	にぶい橙色	十王台式
14	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条2種縄文(R+R、L+L:下→上)。	石英、雲母、骨針	普通	にぶい黄褐色	十王台式
15	弥生土器 壺	- - (8.8)	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S)。底部布目痕。	石英、角閃石	普通	にぶい褐色	十王台式 内面底部周縁に コゲ付着
16	弥生土器 壺	- - -	口唇部ヘラキサミ。口縁部折り返し口縁。頸部3本歯カの横位波状文。高坏の可能性もあり。	雲母、チャート	普通	にぶい黄褐色	
17	土製品 紡錘車		径4.7cm、厚さ2.0cm、孔径5.0mm。表面は丁寧なナデ。	雲母、角閃石、骨 針	普通	にぶい黄褐色	
18	土製品 土錘		推定径3.2cm、残存長3.5cm、孔径5.0mm。表面に指頭痕。	石英、チャート	普通	黒褐色	

81号住居跡 (第120・121図)

位置 A区南部、N8・N9グリッドにある。**規模と平面形** - 主軸方向 - 壁 - 床 炉とピット周辺に床面が残存している。**ピット** 2箇所。P1は深さ89cm、P2は深さ70cm。**炉** 長径104cm、短径68cmの楕円形で深さ16cm。中心から東側に僅かに寄った位置から炉石が出土している。**覆土** 床上に締りのある暗褐色土が薄く堆積している。**遺物** 炉の南側から、基部が細く中空で裾部が「ハ」の字に開く1の土師器の高坏脚部片が出土している。**所見** 炉及び炉石を持つことと出土遺物から、古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第120図 81号住居跡



第 121 図 81号住居跡出土遺物

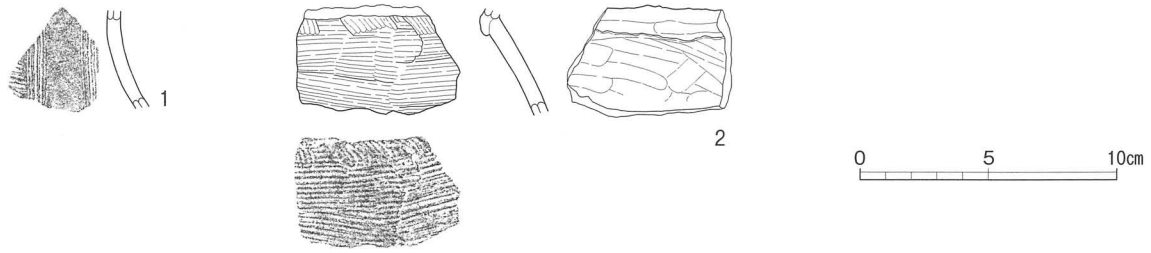
表 53 81号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種 別 器 種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 高坏	- - -	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。外面ミガキ、内面ヘラナデ。	長石、骨針	良好	にぶい赤褐色	
2	弥生土器 壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文（R・S）→頸胴界5本歯の横位直線文→横位波状文。内面は斜位のナデ。	多量の石英・長石	普通	にぶい黄褐色	
3	弥生土器 壺	- - -	胴部無節縄文（L：下→上）と附加条1種縄文（L+L）で非羽状構成。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	普通	外：にぶい黄褐色 内：明褐色	
4	石器 磨石類		磨→敲。大型礫の表面全体に磨耗痕。上・下端部に敲打痕。裏面の一部に鉄分が沈着。 石材：砂岩。長さ17.45cm・幅10.8cm・厚さ7.6cm・重さ2012.6g。				

83b号住居跡（第70・122図）

位置 A区南東部N10・O10グリッドにある。規模と平面形 3.00 × (1.10) m。主軸方向 N - 10° - W 壁 壁高は約6cm。床 - ピット - 覆土 炭化材片を含んだ黒褐色土が堆積している。
遺物 覆土から、土師器甕片が出土している。所見 出土遺物から古墳時代の小型住居跡と考えられる。

第IV章 A区の遺構と遺物



第 122 図 83b号住居跡出土遺物

表 54 83b 号住居跡出土遺物観察表

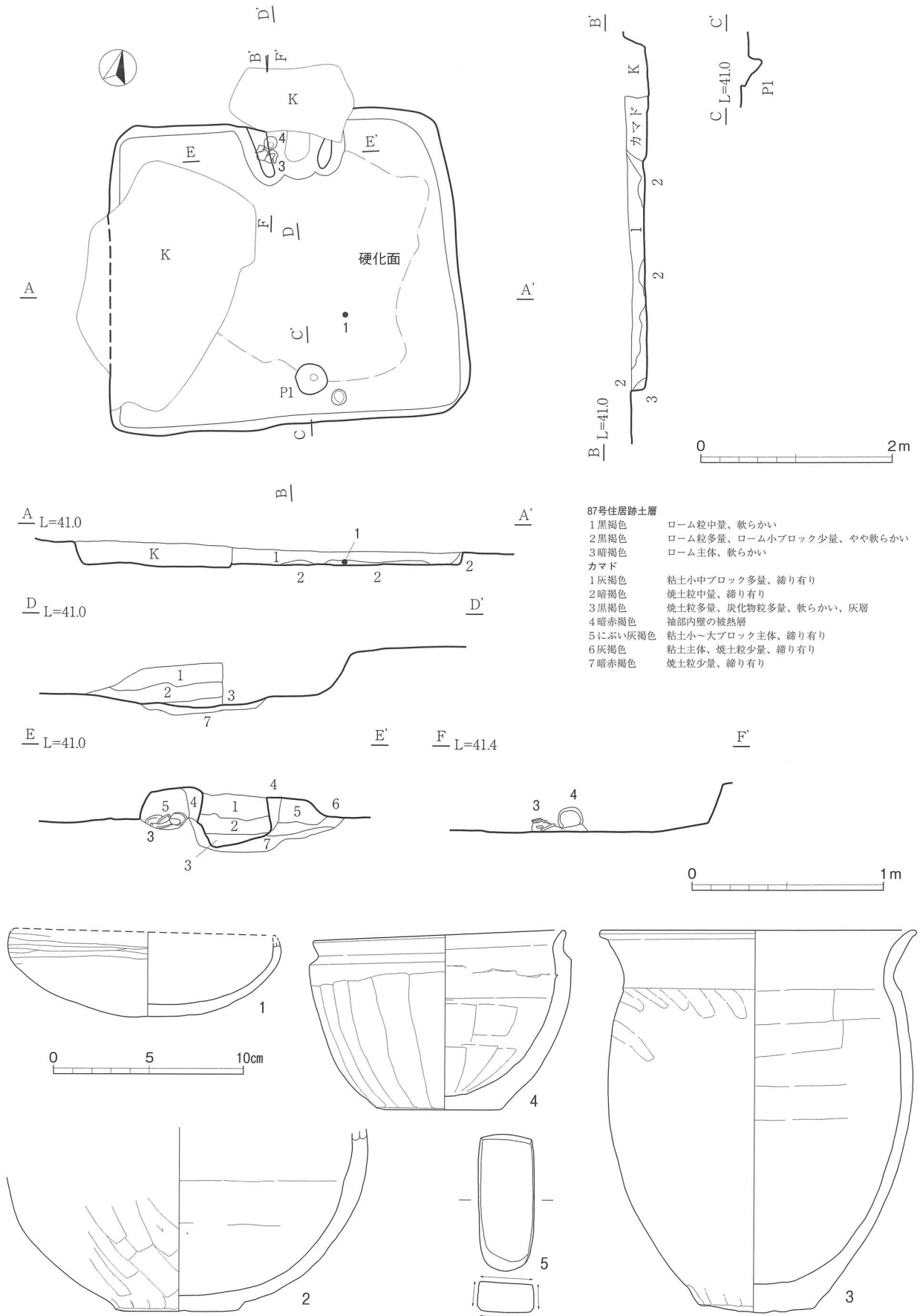
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— — —	頸部5本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は横・斜位のナデ。外面スス附着。	石英、骨針、赤色粒	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
2	土師器 甕	— — —	外面横位のハケメ→縦位のハケメ。内面は横・斜位のナデ。外面スス附着。	石英、角閃石	良好	外：黒褐色 内：にぶい赤褐色	

87号住居跡（第123図）

位置 A区南東部O9グリッドにある。規模と平面形 3.68 × 3.32 mの方形。主軸方向 N - 20° - W
壁 壁高は約16cm。床 P1の北側から住居中央部が特に硬化している。ピット 1箇所。P1は深さ12cm、出入り口ピットと考えられる。
カマド 煙道部分は攪乱によって壊されている。焚口部から住居の北側壁を結ぶ線までは約50cmあり、カマド袖部や燃烧部を住居内に突出させたしっかりとしたカマドで、袖部幅は109cm、灰褐色粘土と土師器の甕を袖部構築の芯材として使用している。
覆土 下層にローム粒・ロームブロック混じりの黒褐色土が、上層には自然堆積と思われる黒褐色土が堆積している。
遺物 丸底で体部に横位のミガキを施した1の土師器坏が床面から出土している。カマド左側袖部内からカマド構築材として使用されたと見られる、4のやや小型の土師器甕と3の器高の低い鉢型の土師器が出土している。
所見 床面出土の土師器坏から見て古墳時代後期の住居跡と考えられる。

表 55 87号住居跡出土遺物観察表

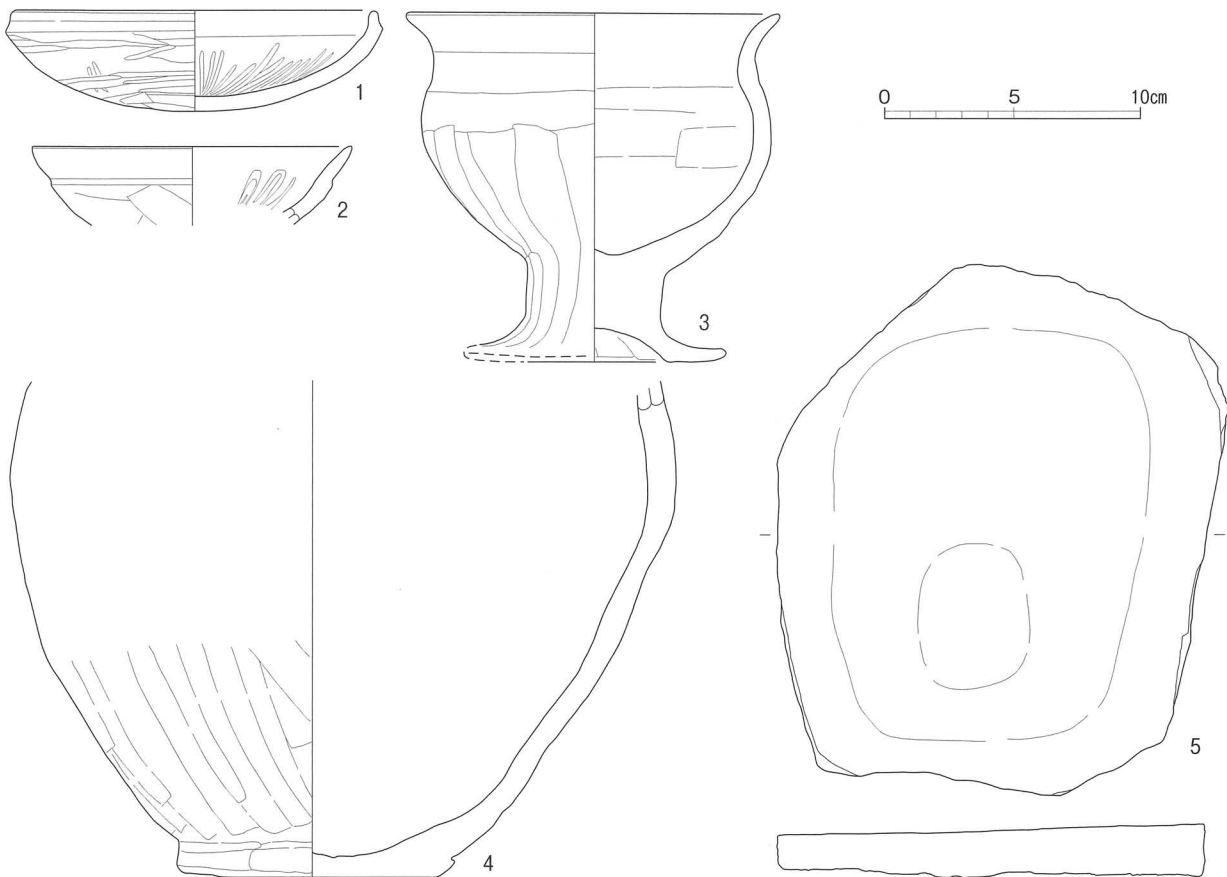
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(13.2) (4.5) —	体部外面ミガキ、内面ヨコナデ。	長石、石英	普通	黒褐色	
2	土師器 甕	— — 6.4	胴部外面ナデ、下半部ヘラケズリ、内面ナデ。底部ヘラケズリ。	長石礫、石英	普通	黒褐色	
3	土師器 甕	16.7 21.4 6.1	口縁部内外面ヨコナデ、胴上半部ヘラナデ。内面ヘラナデ。	長石・石英細粒	良好	にぶい橙色	ほぼ完形
4	土師器 鉢	13.4 9.6 6.5	口縁部内外面ヨコナデ。胴部縦方向ヘラケズリ、内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	長石、石英	良好	黒褐色	ほぼ完形
5	石製品 砥石	長7.3cm、幅2.9cm、厚1.6cm、重70.68g、凝灰岩					



第123図 87号住居跡・出土遺物

92号住居跡（第124・125図）

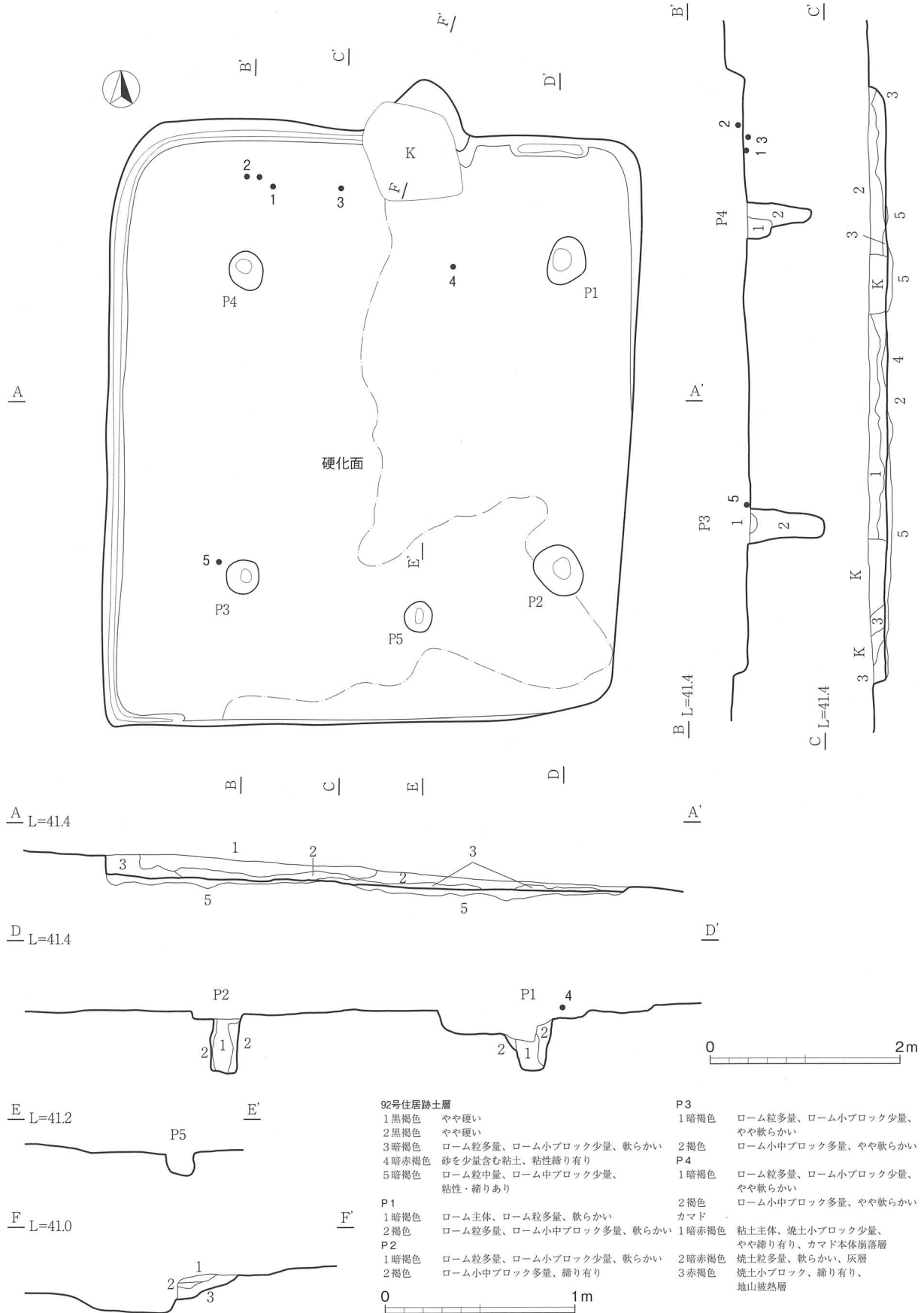
位置 A区南東部、O8グリッドにある。規模と平面形 6.36 × 5.56 m、やや縦長の方形。主軸方向 N-3°-E 壁 壁高は約20cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居の南側寄りと西側半分が硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は支柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。カマド 攪乱穴によって中心部が壊されている。煙道部に向かう、壁外への掘り込みは約28cmある。覆土 やや硬化した黒褐色土を主体とした覆土である。遺物 1の土師器の坏、3の脚台の付いた鉢はカマド左側の床面から出土している。5の板状の砥石はP3近くの床面から出土している。所見 出土遺物から古墳時代後期の住居跡と見られる。



第124図 92号住居跡出土遺物

表56 92号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	14.1 4.0 -	口縁部ヨコナデ。体部内外面ミガキ。	骨針	普通	褐色	80%
2	土師器 坏	12.6 - -	口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、内面ミガキ。	目立つ砂粒・鈹物 粒なし、精良	普通	黒褐色	口縁部片



92号住居跡土層

- 1 黒褐色 やや硬い
 - 2 黒褐色 やや硬い
 - 3 暗褐色 ローム粒多量、ローム小ブロック少量、軟らかい
 - 4 暗赤褐色 砂を少量含む粘土、粘性締り有り
 - 5 暗褐色 ローム粒中量、ローム中ブロック少量、粘性・締りあり
- P1
- 1 暗褐色 ローム主体、ローム粒多量、軟らかい
 - 2 褐色 ローム粒多量、ローム小中ブロック多量、軟らかい
- P2
- 1 暗褐色 ローム粒多量、ローム小ブロック少量、軟らかい
 - 2 褐色 ローム小中ブロック多量、締り有り

P3

- 1 暗褐色 ローム粒多量、ローム小ブロック少量、やや軟らかい
 - 2 褐色 ローム小中ブロック多量、やや軟らかい
- P4
- 1 暗褐色 ローム粒多量、ローム小ブロック少量、やや軟らかい
 - 2 褐色 ローム小中ブロック多量、やや軟らかい
- カマド
- 1 暗赤褐色 粘土主体、焼土小ブロック少量、やや締り有り、カマド本体崩落層
 - 2 暗赤褐色 焼土粒多量、軟らかい、灰層
 - 3 赤褐色 焼土小ブロック、締り有り、地山被熱層

第125図 92号住居跡

第IV章 A区の遺構と遺物

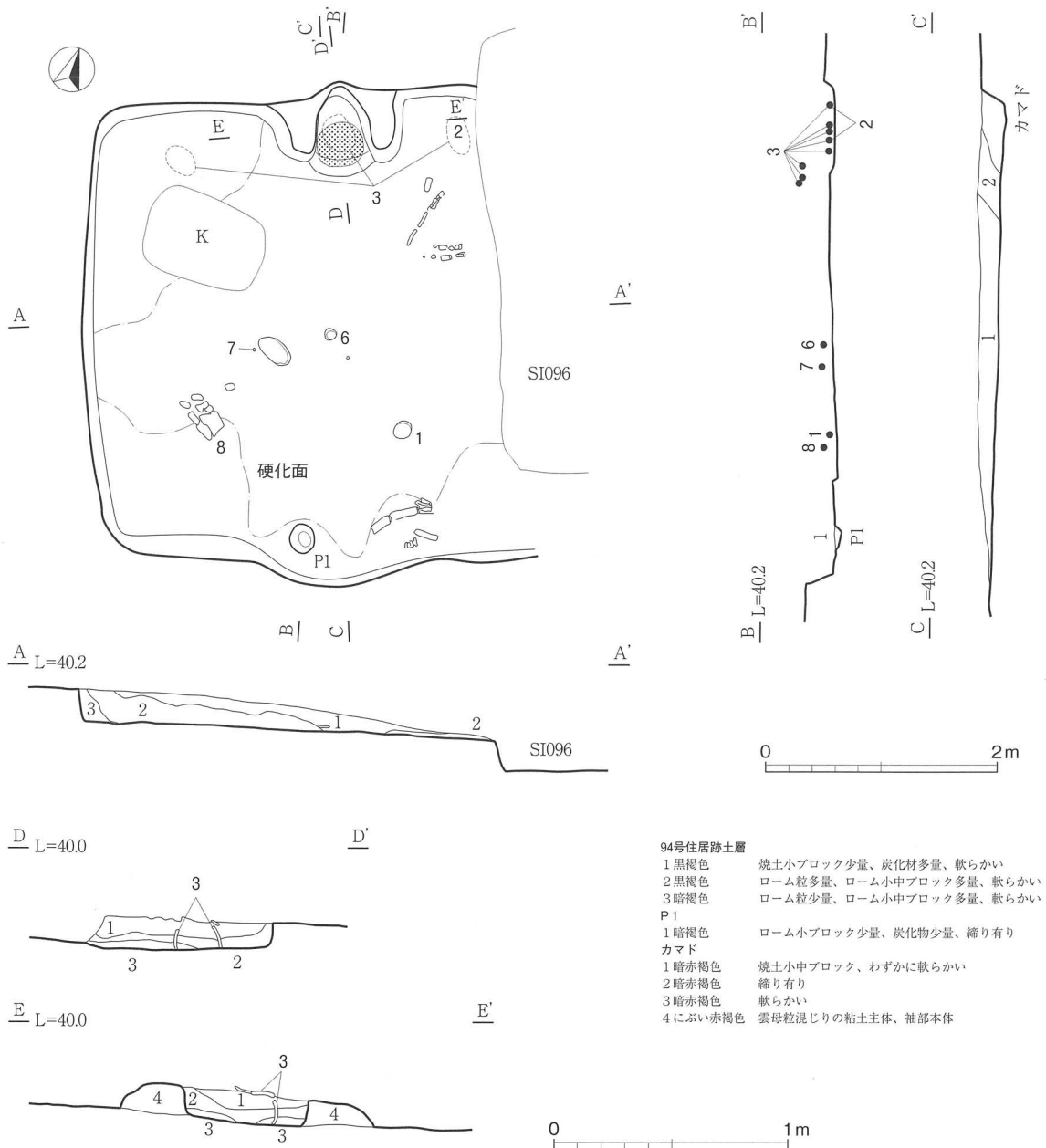
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考	
3	土師器 脚付鉢	14.7 13.9 (9.8)	口縁部ヨコナデ。体部上位外面ナデ、下半部～脚部ヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	暗褐色	80%	
4	土師器 甕	- - 11.0	底部ヘラケズリ。胴部外面上半部ミガキ状のナデ、下半部ヘラケズリ後ヘラナデ。内面ナデ。	長石、石英	普通	褐色		
5	石製品 砥石	長 20.7cm、幅 16.8cm、厚 2.1cm、重 1185g、砂岩。						

94号住居跡（第126・127図）

位置 A区南東部、P9グリッドにある。**規模と平面形** 4.40 × (3.60) m。**主軸方向** N - 23° - W
壁 壁高は約46cm、ほぼ垂直に立ち上がる。**床** 住居中央部が特に硬化している。**ピット** 1箇所。P1は深さ10cm、出入り口ピットと考えられる。**カマド** 焚口部から煙道部までは82cm、袖部幅90cmで、壁外への掘り込みは12cmである。**覆土** 壁際にロームブロックやローム粒を多く含む下層堆積があり、全体を被覆する上層堆積は、炭化材を多量に含む覆土である。**遺物** 2の土師器坏は床上から、他の土器や石製品は覆土1層中から出土している。**所見** 土層の堆積状況から、住居は廃絶後暫くしてから焼失している。古墳時代後期の焼失家屋と見られる。

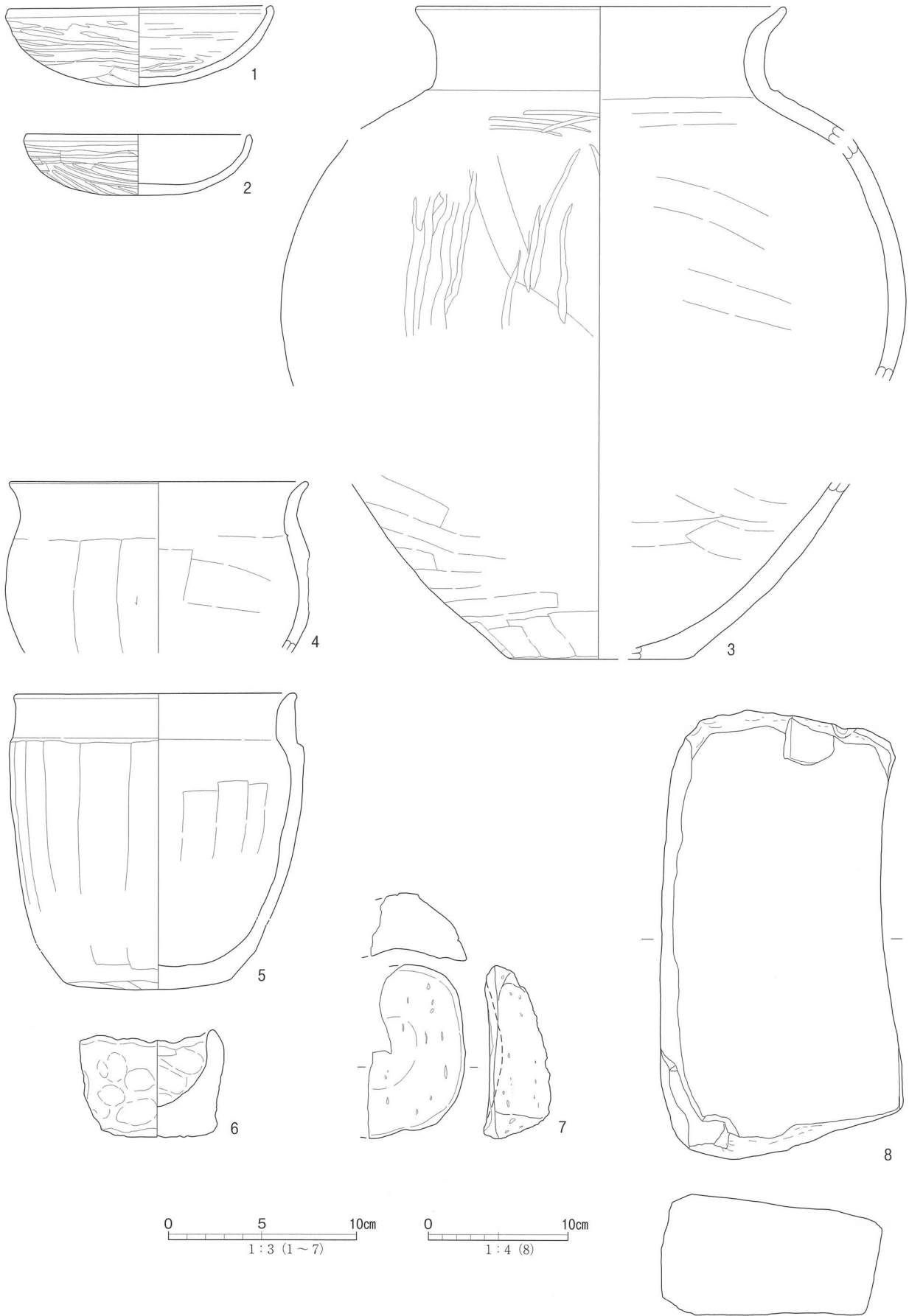
表57 94号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考	
1	土師器 坏	14.0 4.3 -	体部内外面ミガキ。底部外面ヘラケズリ。	長石、石英、骨針	良好	暗褐色	完形	
2	土師器 坏	12.0 3.3 -	体部外面ミガキ。内面ヨコナデ。	長石、石英	良好	暗褐色	50%	
3	土師器 甕	19.8 - 9.4	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部ミガキ、下半部ヘラナデ。内面ヘラナデ。	長石礫、石英	良好	にぶい橙色	80%	
4	土師器 甕	(16.0) - -	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	石英、長石	不良	にぶい褐色		
5	土師器 甕	15.5 (16.0) 8.8	口縁部内外面ヨコナデ。胴部縦方向ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	長石礫、石英	普通	明褐色	80%	
6	手捏土器	(7.0) 5.8 6.3	外面指頭痕。内面指ナデ。	石英	普通	黒褐色	90%	
7	石製品 砥石	長 8.9cm、幅 - cm、厚 3.1cm、重 25.62g、軽石製。						
8	石製品 砥石	長 32.0cm、幅 17.1cm、厚 8.6cm、重 7.645g、粘板岩製。						



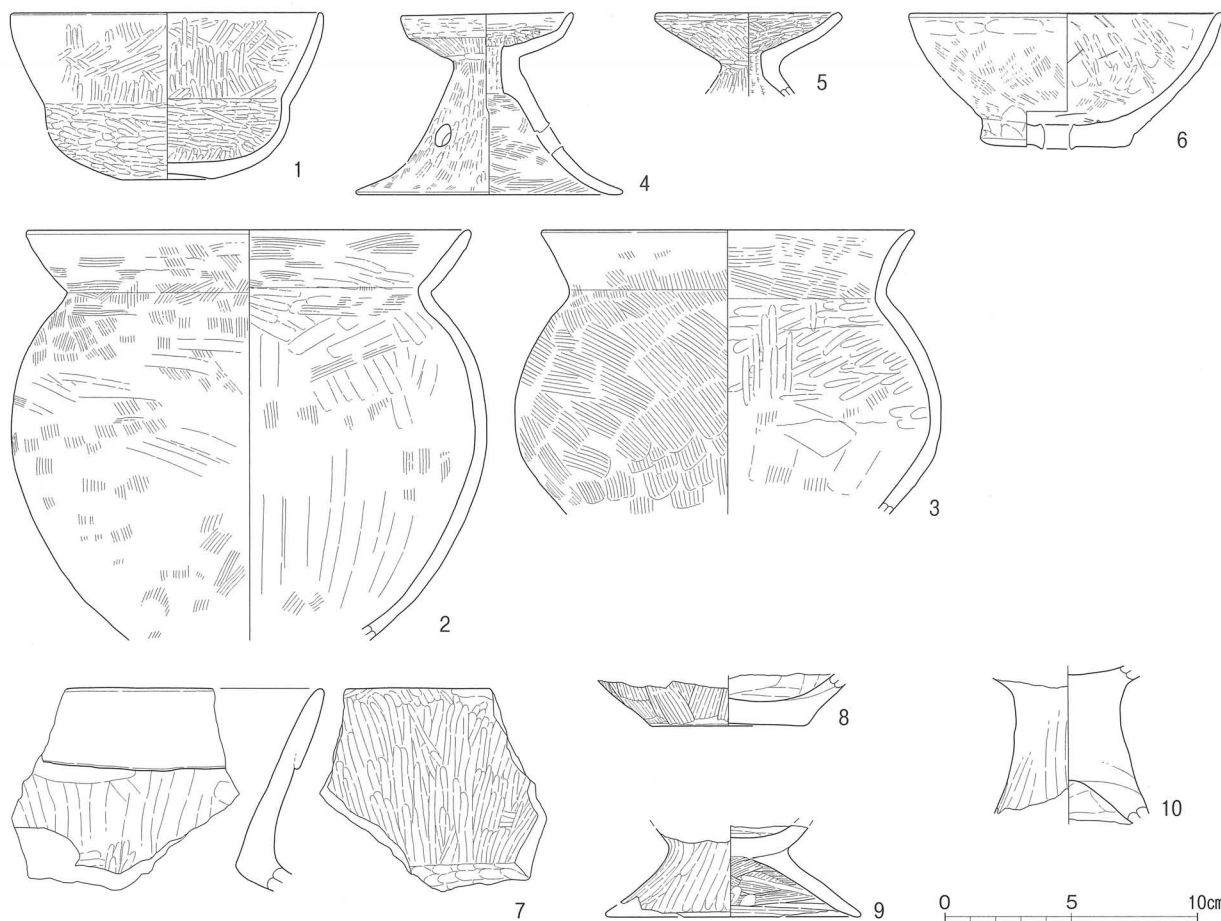
第126図 94号住居跡

第IV章 A区の遺構と遺物



第127図 94号住居跡出土遺物

2 包含層及び遺構外出土遺物 (第128図)



第128図 包含層及び遺構外出土遺物

表58 包含層及び遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器鉢	-	口縁部外面ハケメ後にヘラミガキ、体部～底部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部～底部内面雑なヘラミガキ。	石英、雲母、骨針	普通	にぶい褐色	包含層
2	土師器甕	-	口縁部ヨコナデ、頸部～胴部外面ハケメ後に雑なナデ、胴部内面ナデ。	石英、雲母、骨針	普通	にぶい褐色	包含層
3	土師器甕	-	口縁部ヨコナデ、頸部～胴部外面ハケメ、頸部内面ハケメ、胴部内面ヘラケズリ後に雑なヘラミガキ。	石英、チャート、骨針	普通	にぶい褐色	包含層
4	土師器器台	-	脚部の3方向に透孔。口縁部ヨコナデ、脚部ハケメ後にヘラミガキ、脚部内面ハケメ。	石英、角閃石、骨針	普通	にぶい黄橙色	包含層
5	土師器器台	-	口縁部内外面ヨコナデ後にヘラミガキ。	雲母、角閃石、骨針	普通	にぶい黄橙色	包含層
6	土師器有孔鉢	-	底部に焼成前穿孔。口縁部ヨコナデ、胴部～底部外面ヘラケズリ後にナデ、胴部～底部内面ナデ。	石英、角閃石、骨針	普通	にぶい黄橙色	包含層
7	土師器壺	-	折り返し状口縁。口縁部横位のナデ。頸部縦位のナデ→横・縦位のミガキ。内面は口縁部横位のナデ→縦位のミガキ。頸部横位のナデ。外面スス、内面頸部にヨグレ付着。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：黒褐色	表土 古墳前期
8	土師器壺	-	胴部縦位のハケメ。底部ヘラケズリ→ナデ。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・白色粒、角閃石、骨針	普通	外：にぶい黄褐色 内：黒褐色	SI082混入 古墳前期
9	土師器高坏	-	脚部中空。坏部横位のナデ。脚部縦・斜位のミガキ。内面は斜位のハケメ→一部縦位のナデ→脚端部横位のミガキ。	多量の石英・白色粒、長石、角閃石、骨針	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	表土 古墳前期
10	土師器高坏	-	脚部中空。脚部縦位のミガキ、一部剥落。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・白色粒	不良	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	カクラン 古墳中期

第4節 奈良・平安時代

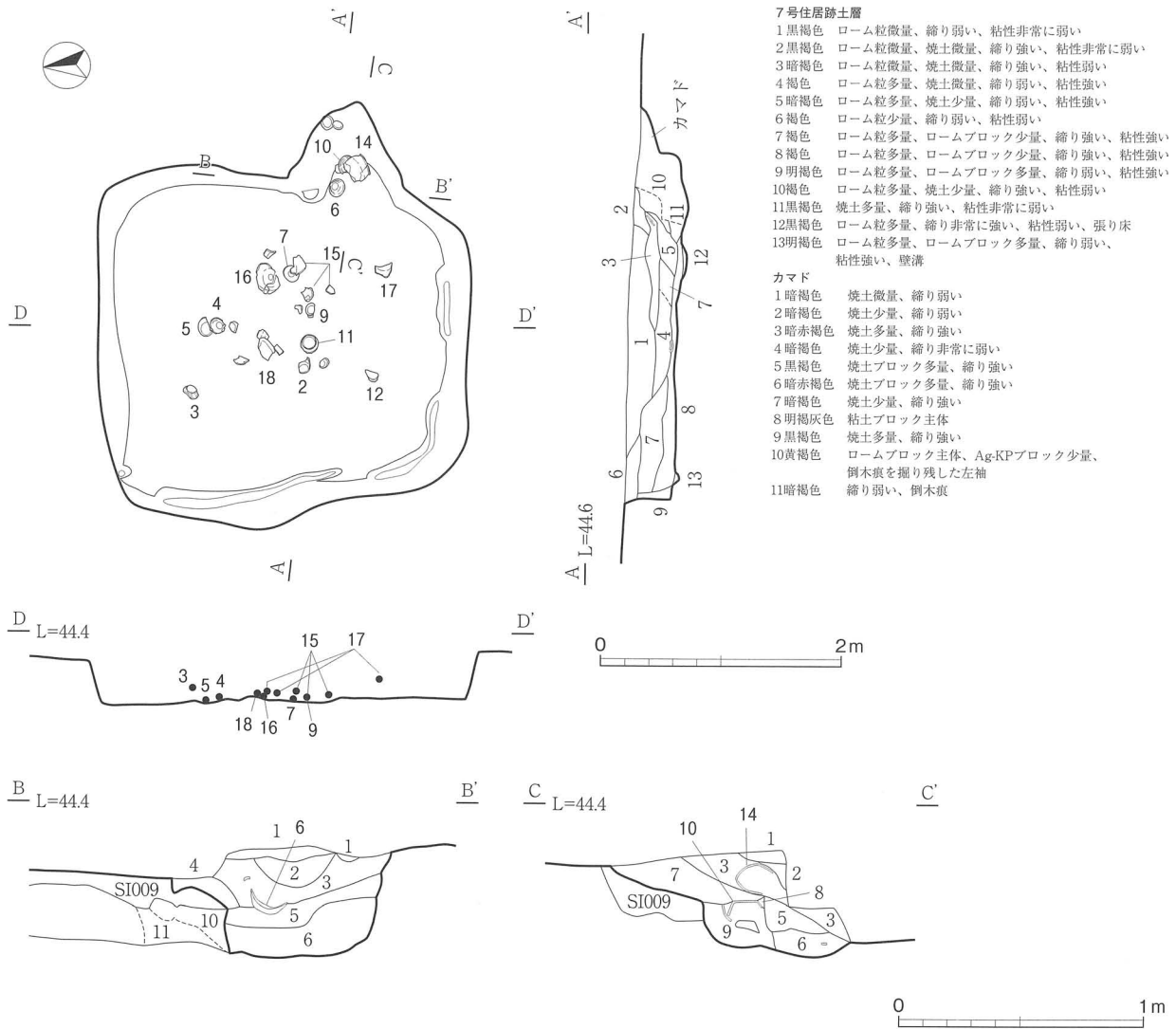
1 竪穴住居跡

7号住居跡（第129～131図）

位置 A区北端、M2グリッドに位置する。**規模と平面形** 東西方向は2.95 m、南北方向で3.06 mを測り、不整隅丸台形を呈する。弥生時代の9号住居跡と風倒木痕を壊している。**主軸方位** N-93°-E
壁 壁高は38cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。**床** やや凹凸があり、全体によく締まる。掘り方はなく、部分的に周溝がめぐる。**ピット - カマド** 東壁のやや南寄りに付設され、9号住居跡の炉を壊して構築されている。ローム層の地山を掘り残した短い左袖が残っている。火床面よりもやや浮いた位置で、支脚と推定される不整直方体状の自然礫が横位で出土し、その上には高台付坏を逆位に被せていた。坏の直上からは土師器の甕が横に倒れて出土している。カマド廃絶時にこの状態で遺棄されたものと推測される。**覆土** 均質な褐色～黒褐色土による自然堆積状を呈するが、4層は人為堆積と思われる。**遺物** カマドから、6の須恵器坏や10の高台付坏、14の土師器甕などが出土している。竪穴中央部の覆土下層～中層からは須恵器、土師器が数多く出土している。覆土4層の堆積時に大半が一括投棄され、順次1・3層の埋没に伴って廃棄され続けたものと推測される。出土遺物は、8世紀後葉～9世紀前葉頃の須恵器を主体としており、蓋、坏、盤、短頸壺、甌、甕が見られる。10の高台付坏と12の盤はロクロ成形の酸化焰焼成である。10の高台付坏は内・外面に漆状の付着物が見られ、二次的に燈明皿として使用されており内面に油煙痕が残る。**所見** 掘り方をほとんどもたない小型の住居で、時期は9世紀前葉頃と考えられる。

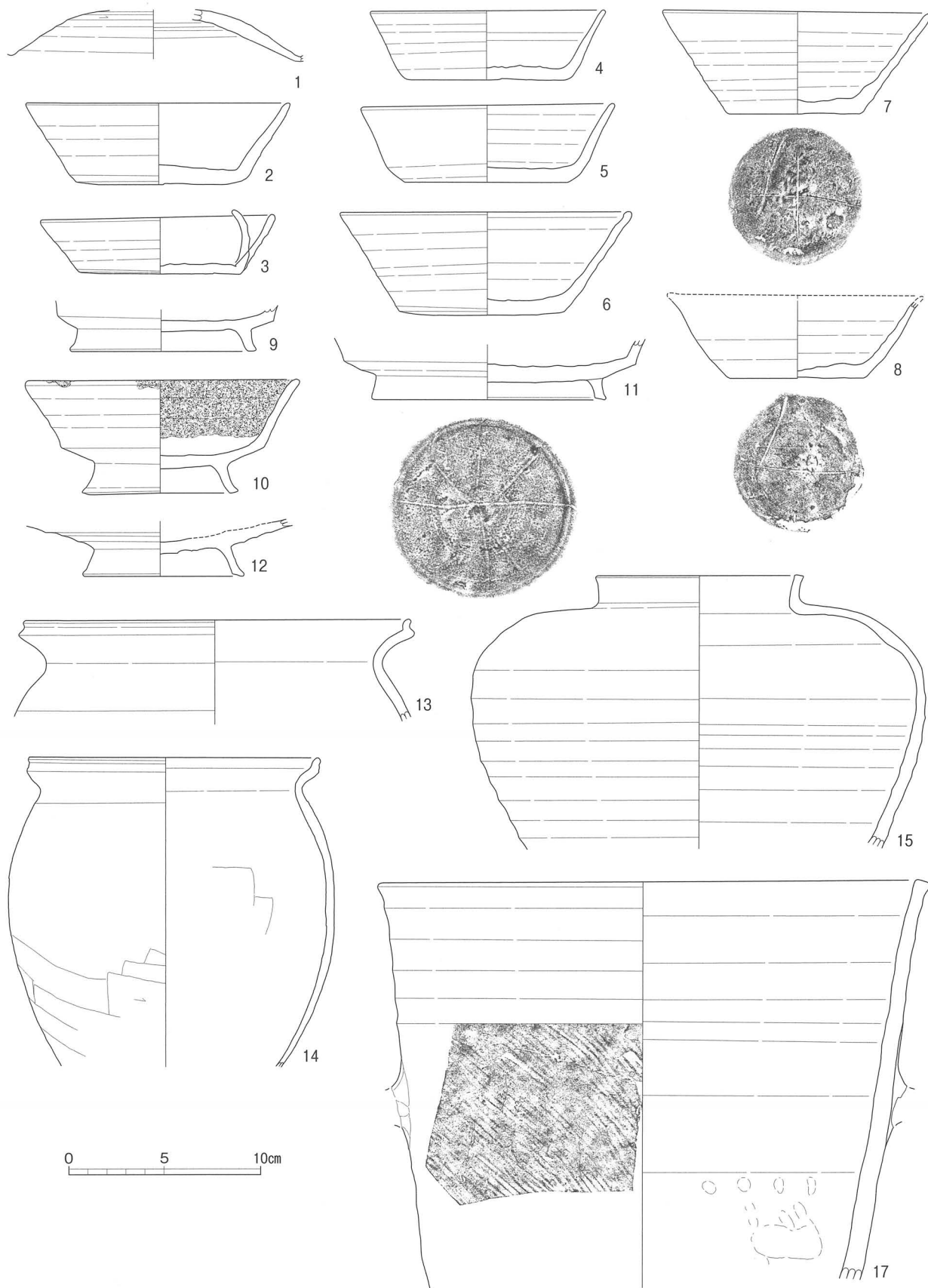
表59 7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器蓋	- - -	蓋破片。天井部は緩やかなドーム状で、天井部の1/2の範囲に丁寧な回転ヘラケズリ。	精良、白色微粒	良好	灰色	25%
2	須恵器坏	(14.0) 4.3 8.6	底部回転ヘラケズリ、ロクロ右回転。	長石、石英、チャート	良好	灰色	
3	須恵器坏	12.7 3.1 8.6	底部回転ヘラ切り離し後雑な回転ヘラケズリ、体部下端回転方向の半周分手持ちヘラケズリ。焼き歪み。	石英、角閃石、海綿骨針	良好	灰～暗灰色	完形
4	須恵器坏	12.2 3.7 8.1	底部回転ヘラ切り離し後、一方向ヘラケズリとオサエ。ロクロ右回転。	長石、石英、海綿骨針、黒色角礫	良好	灰色	ほぼ完形
5	須恵器坏	13.2 4.2 8.5	底部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石、石英	良好	灰色	完形
6	須恵器坏	14.8 5.4 8.4	底部一方向複数回のヘラケズリ、口縁端部を小さな玉縁状に仕上げ上げる。	長石、石英、チャート、海綿骨針	不良	明灰色	ほぼ完形 燈明皿 カマド
7	須恵器坏	14.0 5.5 6.8	底部一方向ヘラケズリ、ヘラ記号「十」。体部外面火擦痕。	白色・白黄色角丸礫、海綿骨針	普通	赤紫灰色	ほぼ完形
8	須恵器坏	- - 6.2	底部ヘラ切り後オサエ。ヘラ記号「井」。	長石、石英、チャート、黒色融出粒(径4mm大)	良好	灰色	口縁部欠損
9	須恵器高台付坏	- - 9.7	底部回転ヘラケズリ、ロクロ左回転。	長石、チャート、海綿骨針	普通	灰色	

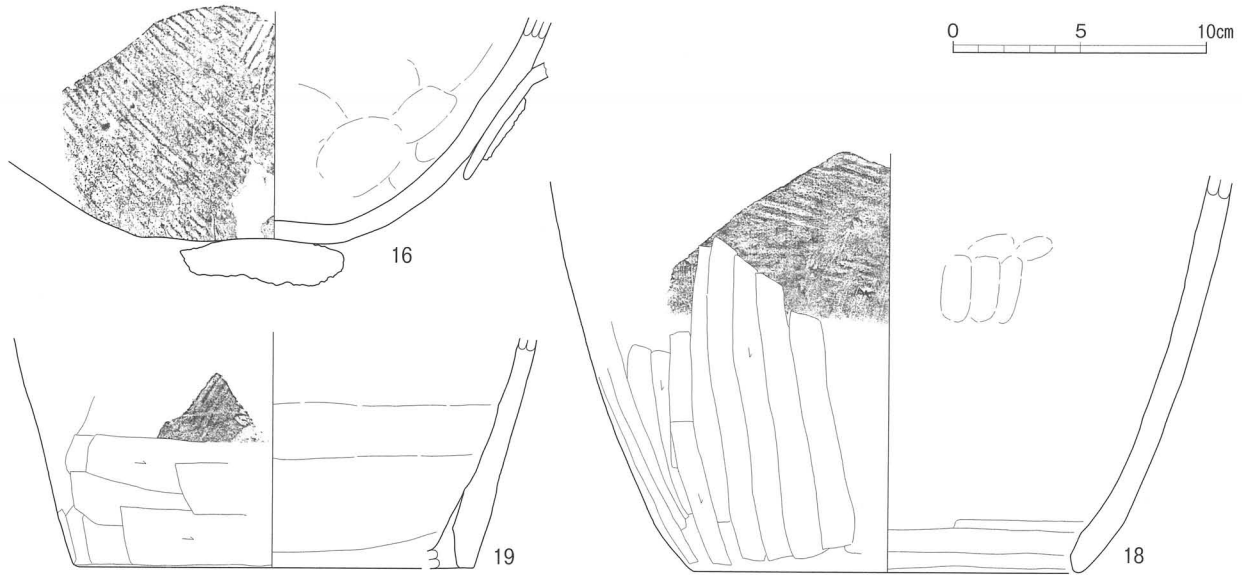


第129図 7号住居跡

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	須恵器 高台付坏	14.2 6.0 7.9	須恵器の高台付坏の器形だが、酸化焰焼成でロクロ目が弱い、特に内面に油煙痕が強く、外面にも油煙痕と見られる炭化物が付着している。	長石、石英、海绵骨針	普通	明黄褐色	燈明皿、完形 カマド
11	須恵器 盤	- - 12.1	底部外面へラ記号「*」。	長石、黒色微粒	良好	灰色	
12	須恵器 盤	- - 8.6	酸化焰焼成。	長石、石英、海绵骨針	普通	明黄褐色	
13	土師器 甕	(20.0) - -	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	細砂粒	普通	にぶい褐色	
14	土師器 甕	14.7 - -	口縁端部摘み上げ、胴部外面ナデ、下半部斜位のヘラケズリ。	長石、石英	やや不良	にぶい褐色	カマド
15	須恵器 短頸壺	(10.7) - -	口縁端部は平坦で、口縁部は短く立ち上がる。胴部は上位に最大径を持つ。	長石粒・礫	やや不良	黄白灰色	



第130図 7号住居跡出土遺物①



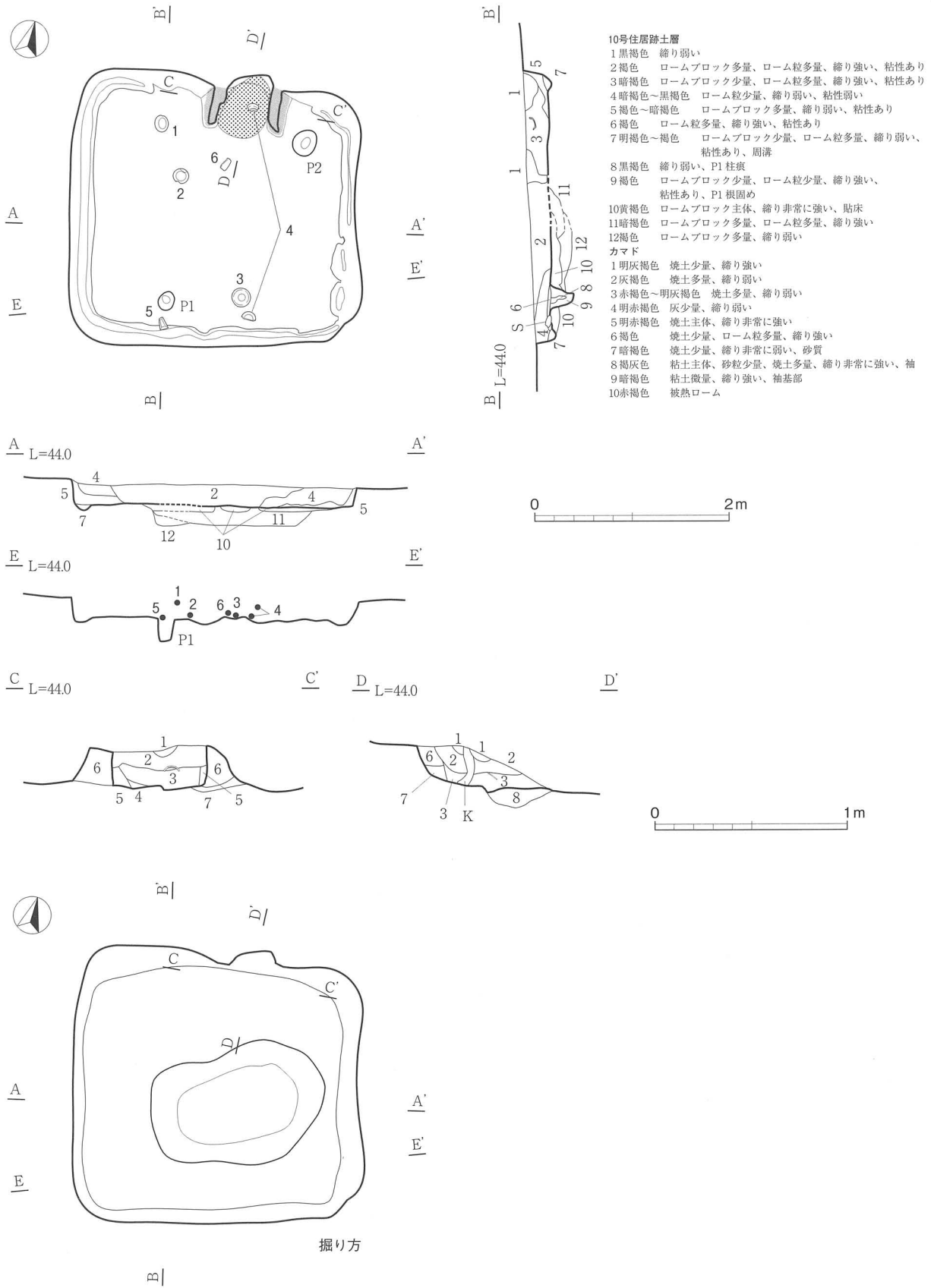
第131図 7号住居跡出土遺物②

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
16	須恵器甕	- - -	底部片。丸底で、底部に窯底砂、須恵器坏体部片が溶着。胴部外面平行叩き、内面掌の圧痕。	長石粒・礫、黒色粒	良好	灰色	
17	須恵器甕	(28.8) - -	胴部外面斜位の平行叩き、口縁部外面～内面ロクロナデ。体部に一对の把手が付く。	長石粒・礫、海綿骨針、石英	良好	灰色	
18	須恵器甕	- - (15.0)	胴下半部破片。胴部外面斜位の平行叩き、下半部縦方向のヘラケズリ。底部単孔式。	長石、石英、チャート	普通	明灰色	
19	須恵器甕	- - (15.7)	胴部外面斜位の平行叩き、下端横方向のヘラケズリ。底部二孔式。	石英	良好	にぶい褐色	

10号住居跡 (第132・133図)

位置 A区北東端、N2グリッドに位置する。 **規模と平面形** 南北の主軸方向は東側で2.62m、西側で2.89m、東西方向で2.94～3.0mを測り、隅丸正方形に近い。北壁はカマドの東西で段違い状になり西側が突出している。 **主軸方位** N-11°-W、60号住居跡と近似する。 **壁** 壁高は25cmを測り、わずかに傾斜する。 **床** 全体的に硬化し、中央部に大きな床下土坑を確認した。周溝はほぼ全周する。 **ピット** P1は、カマドを通る竪穴主軸からは外れているが、出入口ピットと推測される。カマド脇のP2は深さ約15cmで灰褐色粘土が充填されていた。 **カマド** 北壁の中央やや東寄りに付設され、煙道が非常に短い。 **覆土** 壁際に暗褐色～黒褐色土が自然堆積し、竪穴中央はロームブロックの多い褐色～明褐色土で人為的に埋め戻されたものと判断される。 **遺物** カマドの南西や竪穴南壁付近から8世紀後半頃の須恵器が出土している。3は高台部が欠損している大振りな稜椀で生焼けである。2の須恵器坏は高温焼成で焼き歪みが激しい。カマド前面の床面からわずかに浮いて、6の土製支脚が出土している。遺存率の良好な資料が出土したものの、すべて廃棄遺物で、住居跡廃絶時に遺棄されたものではない。 **所見** 本遺跡の古代住居跡の中では、最も小型の一群に含まれる。住居跡の廃絶時期は、8世紀後半頃と考えられる。

第IV章 A区の遺構と遺物



第 132 図 10号住居跡



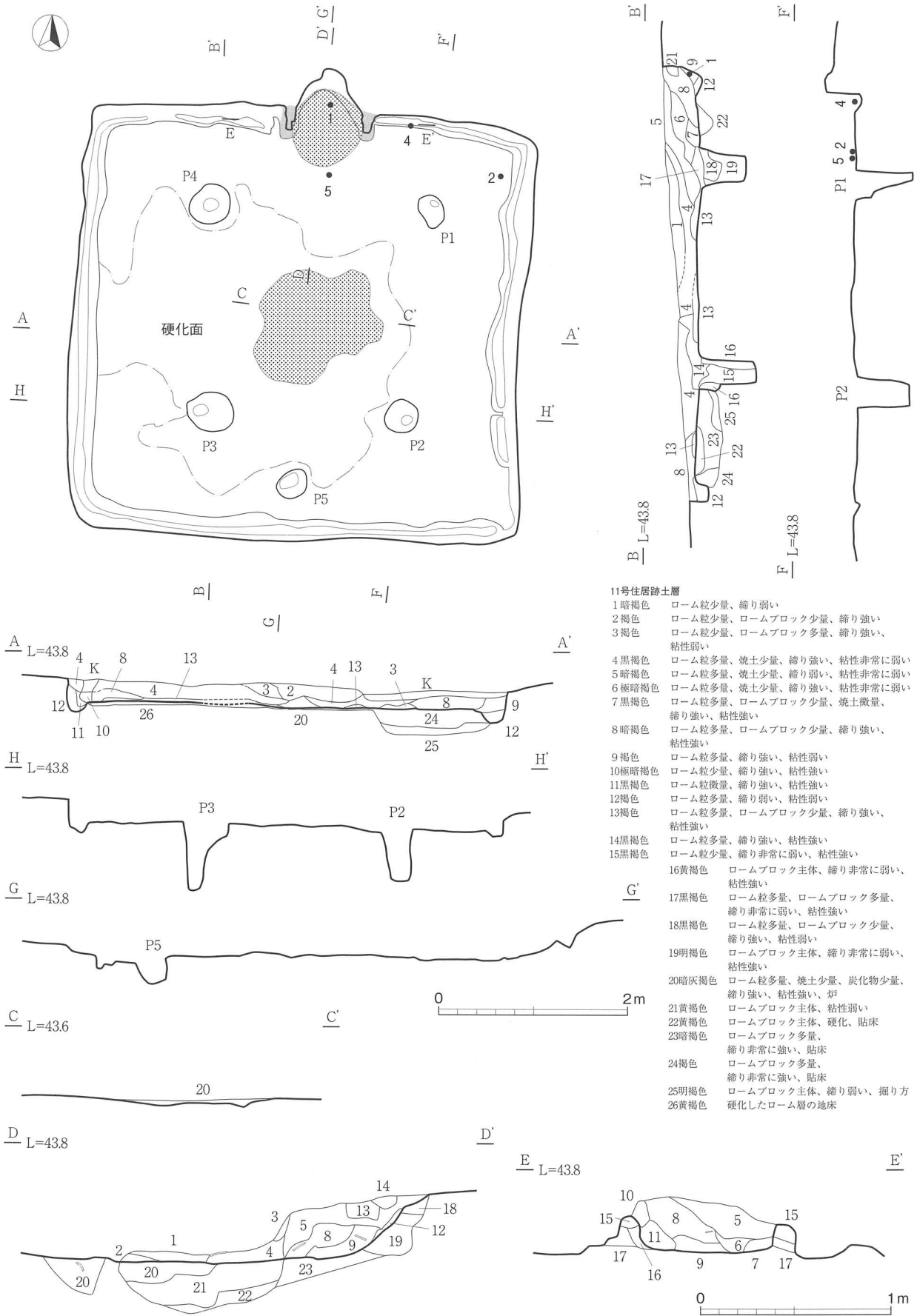
第133図 10号住居跡出土遺物

表60 10号住居跡出土遺物観察表

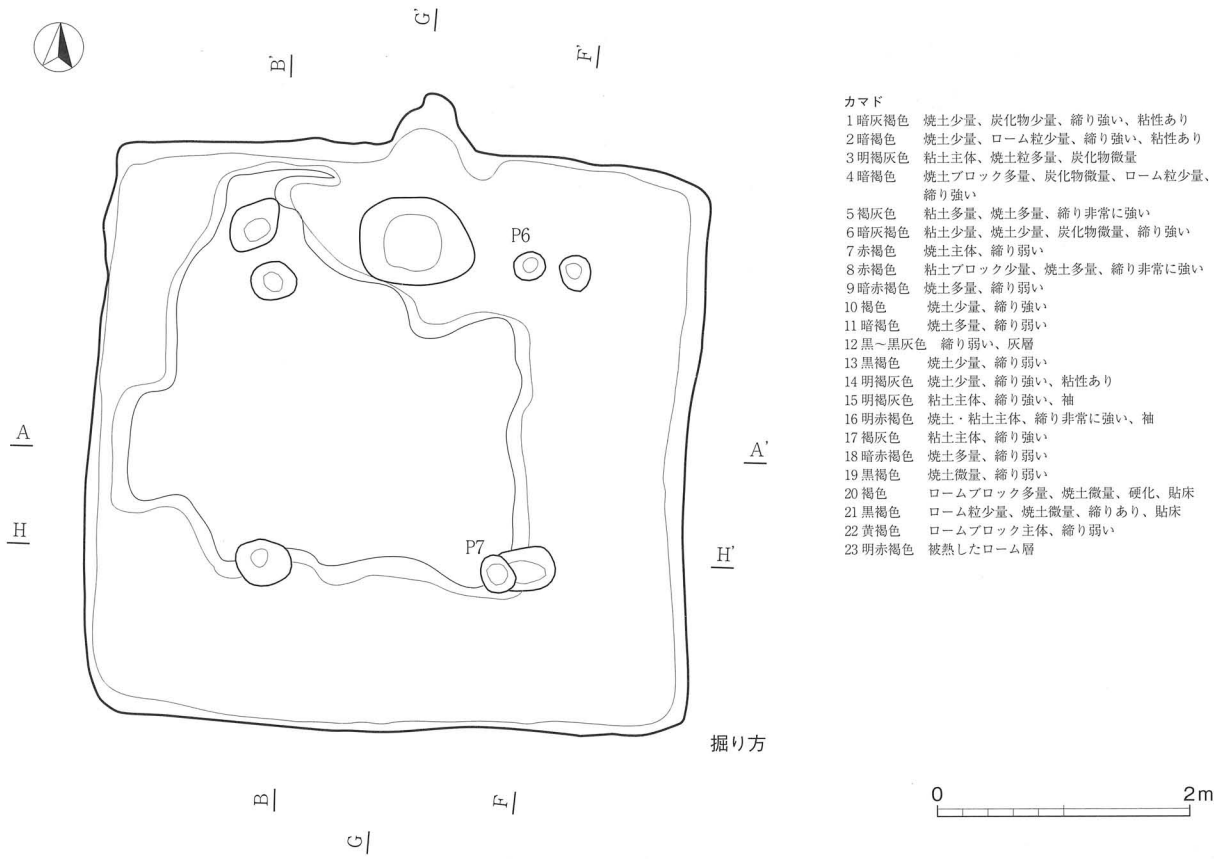
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 杯	13.5 4.0 6.3	底部一方向ヘラケズリ。ヘラ記号「一」	長石礫、石英	やや不良	灰白色	完形
2	須恵器 杯	14.1 4.0 15.5	底部回転ヘラケズリ、ロクロ右回転。焼き歪み。	石英、海綿骨針、 黒色溶融粒	良好	灰色	ほぼ完形
3	須恵器 高台付杯	18.1 — —	体部下端回転ヘラケズリ、ロクロ右回転。稜塊形状。	石英	不良	灰白色	
4	須恵器 杯	13.6 4.3 9.1	底部回転ヘラケズリ、ロクロ右回転。	長石、チャート礫	普通	灰白色	
5	石製品 砥石	長12.9cm、幅8.0cm、厚5.9cm、重611g、砂岩製。					
6	土製品 支脚	長 [14.5] cm、幅6.8cm、厚6.2cm、重660g。		長石、石英	良好	橙色	

11号住居跡 (第134～136図)

位置 A区北東端、N2グリッドに位置する。 **規模と平面形** 南北の主軸方向は4.47～4.68m、東西方向は4.78mを測り、正方形を呈している。 **主軸方位** N-1°-Wで、ほぼ真北を指向する。 **壁** 壁高は15cmを測り、垂直に近い。 **床** 周溝はほぼ全周する。主柱穴に囲まれた中央部の周囲が溝状の掘り方となる。主柱穴周囲の床面はやや軟弱である。 **ピット** P1～4は主柱穴、P6・7は古い主柱穴、P5は出入口ピットであろう。P3には柱痕状の断面を観察したが、ほかの主柱穴は抜取痕と判断した。 **カマド・炉** カマドは北壁中央に構築され、煙道部でわずかに灰層を検出した。竪穴中央部の床面は明瞭に被熱

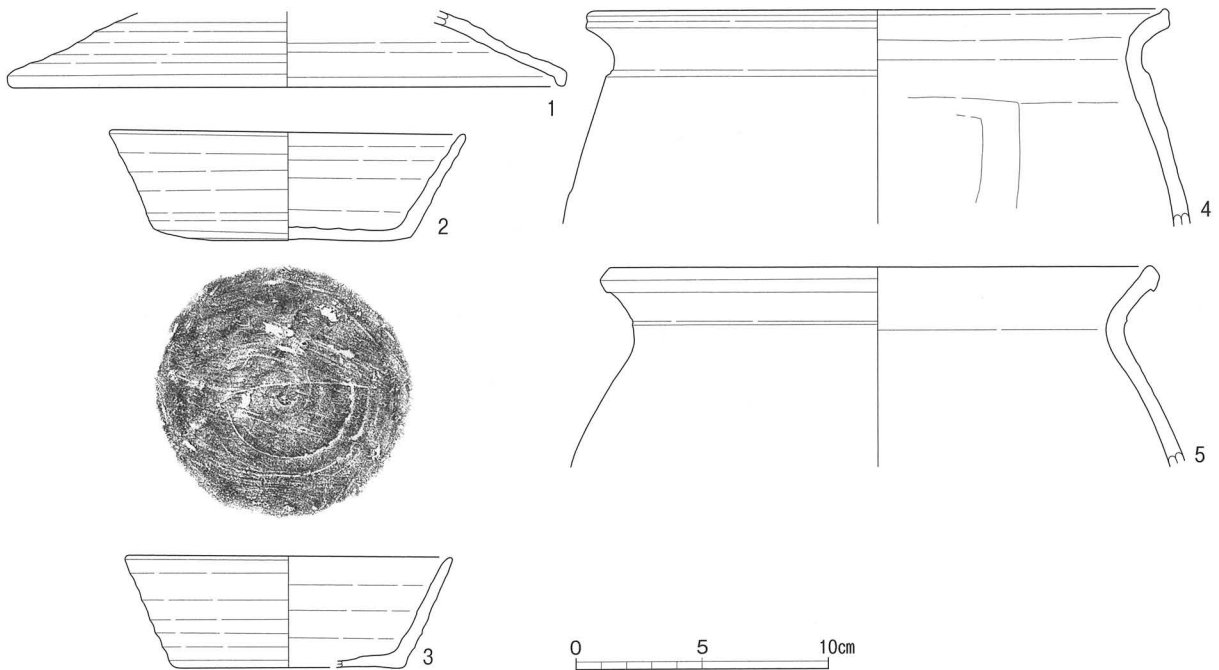


第134図 11号住居跡



- カマド
- 1 暗灰褐色 焼土少量、炭化物少量、締り強い、粘性あり
 - 2 暗褐色 焼土少量、ローム粒少量、締り強い、粘性あり
 - 3 明褐灰色 粘土主体、焼土粒多量、炭化物微量
 - 4 暗褐色 焼土ブロック多量、炭化物微量、ローム粒少量、締り強い
 - 5 褐灰色 粘土多量、焼土多量、締り非常に強い
 - 6 暗灰褐色 粘土少量、焼土少量、炭化物微量、締り強い
 - 7 赤褐色 焼土主体、締り弱い
 - 8 赤褐色 焼土ブロック少量、焼土多量、締り非常に強い
 - 9 暗赤褐色 焼土多量、締り弱い
 - 10 褐色 焼土少量、締り強い
 - 11 暗褐色 焼土多量、締り弱い
 - 12 黒～黒灰色 締り弱い、灰層
 - 13 黒褐色 焼土少量、締り弱い
 - 14 明褐灰色 焼土少量、締り強い、粘性あり
 - 15 明褐灰色 粘土主体、締り強い、袖
 - 16 明赤褐色 焼土・粘土主体、締り非常に強い、袖
 - 17 褐灰色 粘土主体、締り強い
 - 18 暗赤褐色 焼土多量、締り弱い
 - 19 黒褐色 焼土微量、締り弱い
 - 20 褐色 ロームブロック多量、焼土微量、硬化、貼床
 - 21 黒褐色 ローム粒少量、焼土微量、締りあり、貼床
 - 22 黄褐色 ロームブロック主体、締り弱い
 - 23 明赤褐色 被熱したローム層

第135図 11号住居跡掘り方



第136図 11号住居跡出土遺物

し、赤変硬化が顕著であるため、炉と判断する。 覆土 全体に自然堆積状を呈している。竪穴中央部覆土上層にはローム粒の多い褐色土が堆積し、人為埋没の可能性がある。 遺物 カマド前面の覆土下層からは8世紀後半頃の土師器甕が、北東隅の床面直上からは同じ頃の須恵器坏が出土している。 所見 P6・7はP1・2と同等の深さを持ち、支柱穴はP6・7・3・4からP1～4へと建替えしたものと判断できる。出土遺物は多くないが、住居跡の廃絶時期は、8世紀後半頃と考えられる。

表61 11号住居跡出土遺物観察表

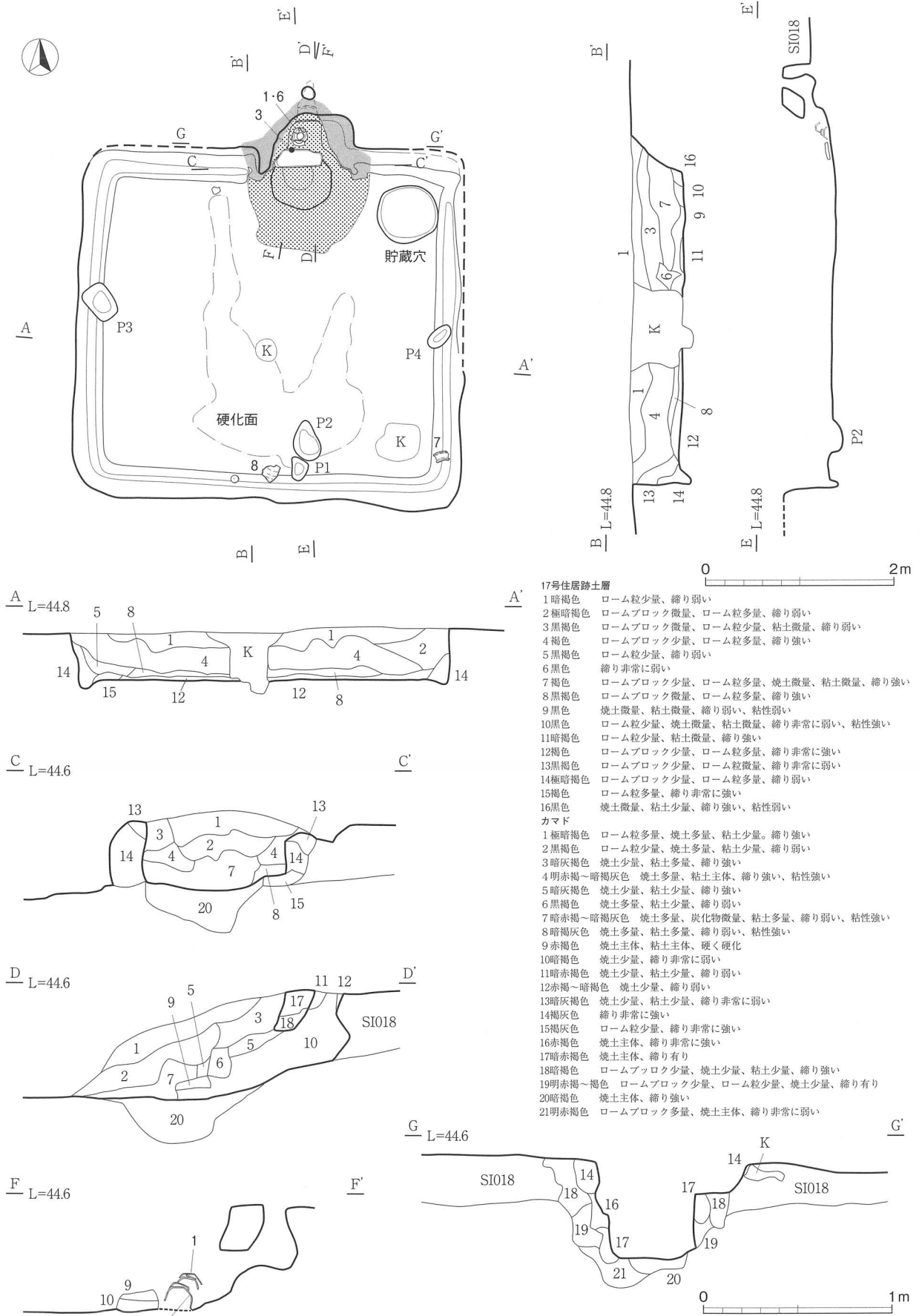
図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器蓋	(22.2) —	口縁部片。口縁端部を下方に折り返す。	長石、海綿骨針	普通	灰色	カマド
2	須恵器坏	14.2 4.2 10.1	回転ヘラ切り後一方向ヘラケズリ。ヘラ記号「一」。	長石礫、石英、海綿骨針	普通	灰色	完形
3	須恵器坏	(13.0) 4.5 (9.0)	底部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石、石英、海綿骨針	不良	灰白色	
4	土師器甕	(23.1) —	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英、海綿骨針、角閃石	良好	橙色	
5	土師器甕	12.4 —	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	にぶい橙色	

17号住居跡（第137・138図）

位置 A区北西端、K3グリッドに位置する。 規模と平面形 南北の主軸方向は3.88m、東西方向で4.12mを測る。平面は正方形。弥生時代の18号住居跡の南西側約1/3を壊して構築されている。竪穴中央と南東隅は攪乱ピットによって一部壊されている。3号掘立柱建物跡とも重複するが、調査時には柱穴を確認できず、本住居跡の方が新しいものと推測する。 主軸方位 N-3°-Eで、ほぼ真北を指向する。 壁 壁高は56cmを測り、垂直気味に立ち上がる。 床 平坦で凹凸がなく、竪穴中央部がよく硬化している。周溝はほぼ全周する。掘り方はない。 ピット P1・2（深さ15cm・13cm）は出入口ピット。P3・4（深さ31cm・23cm）は支柱穴であろうか。北東隅には略円形の浅い貯蔵穴（深さ7～10cm）が構築されている。 カマド カマドは北壁中央やや東寄りに構築され、煙道部周辺の天井が残存していた。袖は非常に短く、粘土は煙道部の側壁にも一部貼り付けられ、袖・天井・煙道の内壁や底面は著しく被熱していた。カマド中央において須恵器坏・土師器坏・土師器甕を逆位に積み重ね、それを支脚として使用している。支脚の前面では、赤変した板状の天井内壁が落下した状況が窺えた。 覆土 中層はローム粒・ブロックを斑状に含み、人為的な埋め戻しや周堤の崩壊などが想定される。 遺物 出土遺物は、須恵器の坏・甕・甌、内黒土師器の坏、小型甕等9世紀中葉～後葉頃のものである。壁際の覆土下層から、須恵器甕の破片が出土している。 所見 床面は平坦で凹凸がなく、竪穴中央部がよく硬化する。掘り方はなく、地床である。周溝はほぼ全周する。出土遺物から、住居跡の廃絶時期は、9世紀後葉頃と考えられる。

表62 17号住居跡出土遺物観察表

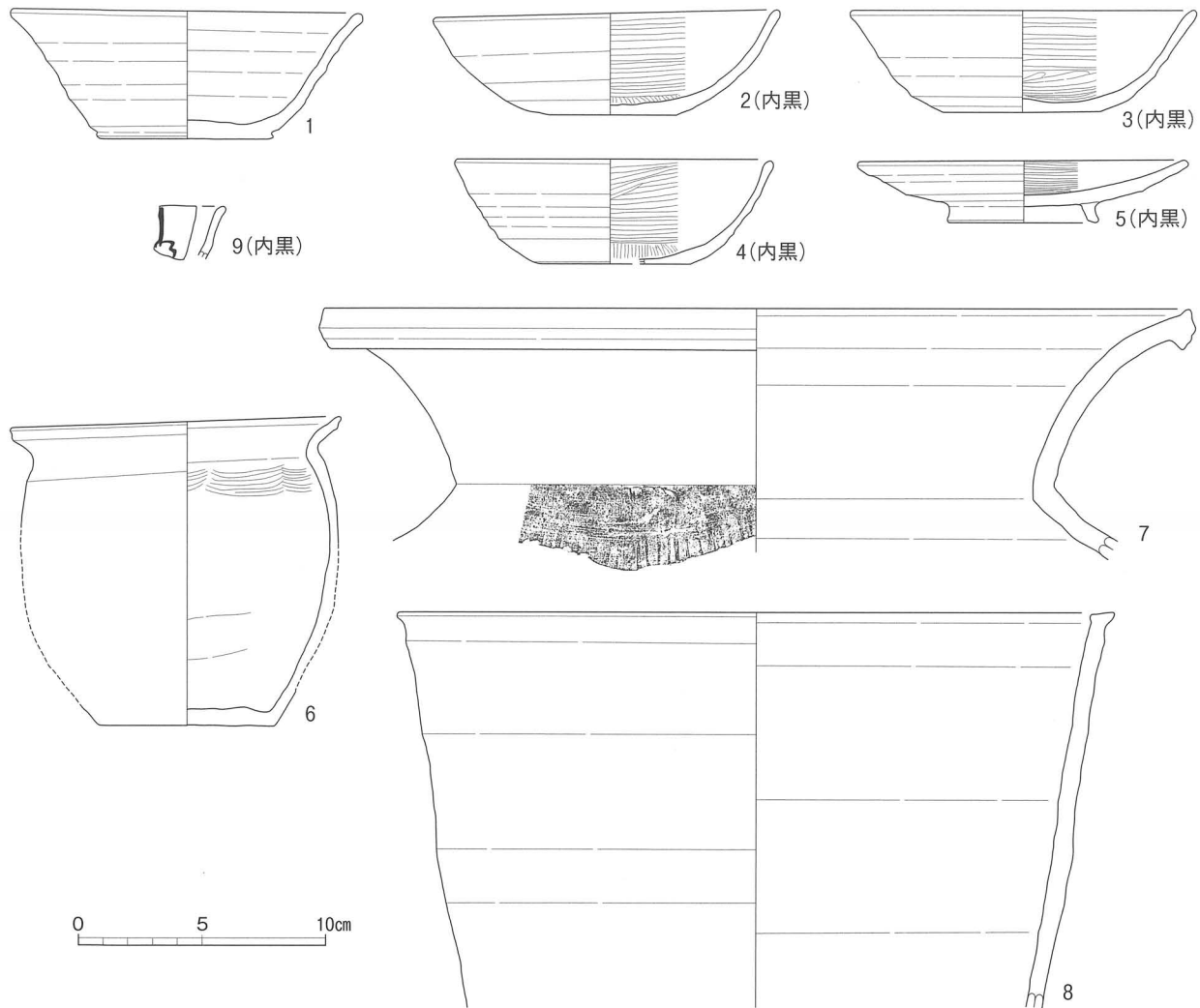
図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器坏	14.3 5.3 6.6	底部ヘラ切り離し後2方向ヘラケズリ。	チャート、長石、海綿骨針	普通	灰色	
2	土師器坏	13.0 4.4 5.2	体上半部外面ロクロナデ、下半部～底部回転ヘラケズリ。内面黒色処理・ミガキ。ロクロ右回転。	チャート	良好	橙色	



- 17号住居跡土層
- 1 暗褐色 ローム粒少量、締り弱い
 - 2 極暗褐色 ロームブロック微量、ローム粒多量、締り弱い
 - 3 黒褐色 ロームブロック微量、ローム粒少量、粘土微量、締り弱い
 - 4 褐色 ロームブロック少量、ローム粒多量、締り強い
 - 5 黒褐色 ローム粒少量、締り弱い
 - 6 黒色 締り非常に弱い
 - 7 褐色 ロームブロック少量、ローム粒多量、焼土微量、粘土微量、締り強い
 - 8 黒褐色 ロームブロック微量、ローム粒多量、締り強い
 - 9 黒色 焼土微量、粘土微量、締り弱い、粘性弱い
 - 10 黒色 ローム粒少量、焼土微量、粘土微量、締り非常に弱い、粘性強い
 - 11 暗褐色 ローム粒少量、粘土微量、締り強い
 - 12 褐色 ロームブロック少量、ローム粒多量、締り非常に強い
 - 13 黒褐色 ロームブロック少量、ローム粒微量、締り非常に弱い
 - 14 極暗褐色 ロームブロック少量、ローム粒多量、締り弱い
 - 15 褐色 ローム粒多量、締り非常に強い
 - 16 黒色 焼土微量、粘土少量、締り強い、粘性弱い
- カマド
- 1 極暗褐色 ローム粒多量、焼土多量、粘土少量、締り強い
 - 2 黒褐色 ローム粒少量、焼土多量、粘土少量、締り弱い
 - 3 暗灰褐色 焼土少量、粘土多量、締り強い
 - 4 明赤褐～暗褐灰色 焼土多量、粘土主体、締り強い、粘性強い
 - 5 暗灰褐色 焼土少量、粘土少量、締り強い
 - 6 黒褐色 焼土多量、粘土少量、締り弱い
 - 7 暗赤褐～暗褐灰色 焼土多量、炭化物微量、粘土多量、締り弱い、粘性強い
 - 8 暗褐灰色 焼土多量、粘土少量、締り強い
 - 9 赤褐色 焼土主体、粘土主体、硬く硬化
 - 10 暗褐色 焼土少量、締り非常に弱い
 - 11 暗赤褐色 焼土少量、粘土少量、締り弱い
 - 12 赤褐～暗褐色 焼土少量、締り弱い
 - 13 暗灰褐色 焼土少量、粘土少量、締り非常に弱い
 - 14 褐灰色 締り非常に強い
 - 15 褐灰色 ローム粒少量、締り非常に強い
 - 16 赤褐色 焼土主体、締り非常に強い
 - 17 暗赤褐色 焼土主体、締り有り
 - 18 暗褐色 ロームブロック少量、焼土少量、粘土少量、締り強い
 - 19 明赤褐～褐色 ロームブロック少量、ローム粒少量、焼土少量、締り有り
 - 20 暗褐色 焼土主体、締り強い
 - 21 明赤褐色 ロームブロック多量、焼土主体、締り非常に弱い

第137図 17号住居跡

第IV章 A区の遺構と遺物



第 138 図 17号住居跡出土遺物

図版 番号	種 別 器 種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
3	土師器 杯	14.0 4.2 6.2	体上半部外面ロクロナデ、下半部～底部回転ヘラケズリ。 内面黒色処理・ミガキ。	石英、長石、角閃 石	良好	橙色	
4	土師器 杯	13.8 4.3 7.0	体上半部外面ロクロナデ、下半部～底部回転ヘラケズリ。 内面黒色処理・ミガキ。ロクロ右回転。	石英、金雲母	普通	浅黄橙色	
5	土師器 皿	(13.1) 2.6 (6.1)	体部外面ロクロナデ、内面黒色処理・ミガキ。	石英	良好	にぶい橙色	25%
6	土師器 小型甕	13.2 12.5 7.2	口縁部内外面ヨコナデ、胴上半部ナデ、下半部摩耗。底 部外面粗く、敷物圧痕状のものあり。	長石、石英、海綿 骨針	普通	橙色	
7	須恵器 甕	(35.5) — —	口縁部内外面ロクロナデ、胴部外面平行叩き。ロクロ右 回転。	長石礫、石英	普通	青灰色	
8	須恵器 甕	(24.0) — —	底部破損。体部内外面ロクロナデ。	石英、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	
9	土師器 杯	— — —	体部外面墨書。内面黒色処理・ミガキ。	海綿骨針	良好	にぶい橙色	

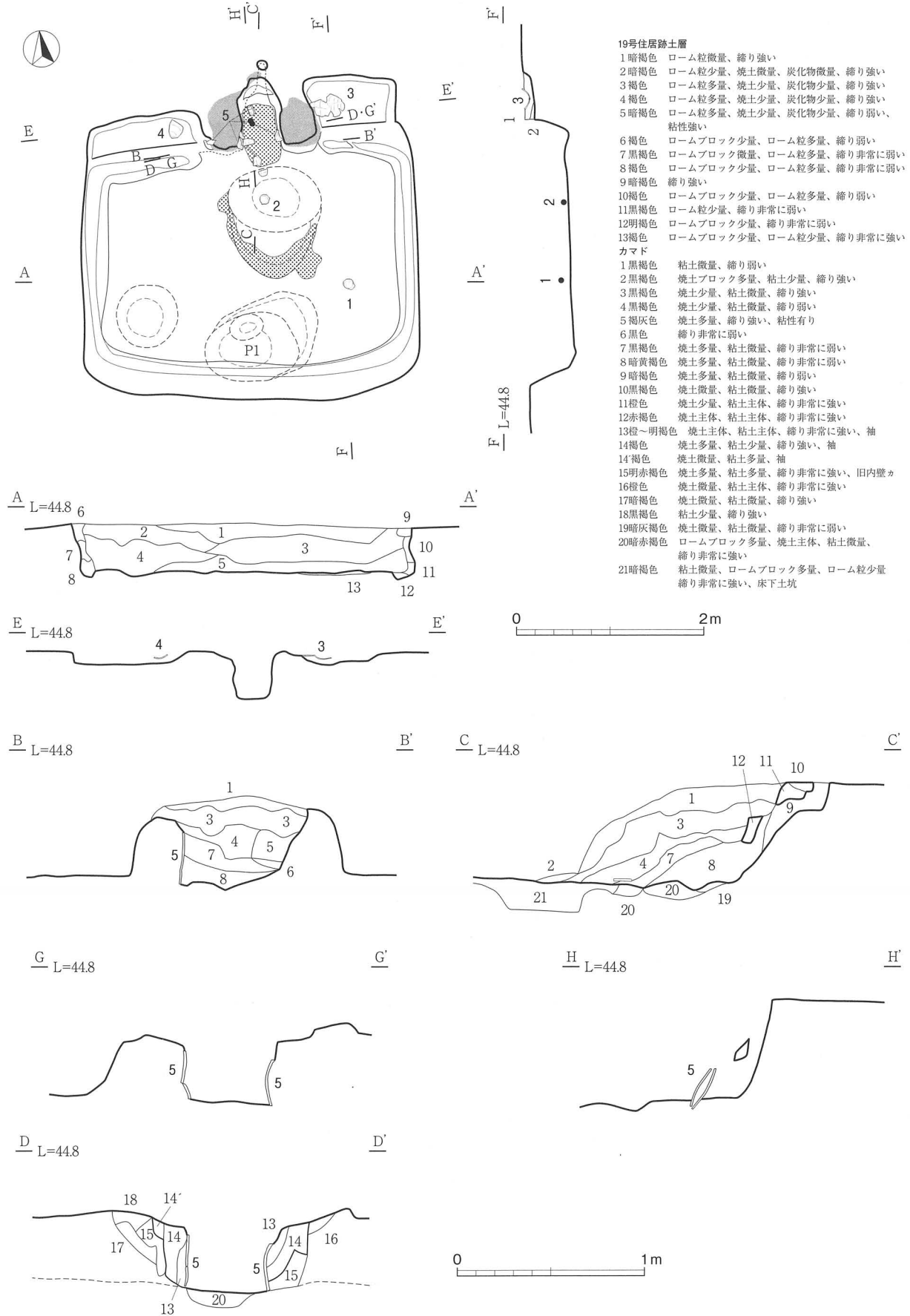
19号住居跡（第139・140図、巻頭写真図版3）

位置 A区北西端、K3～L3グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北の主軸方向は東側で2.92m、西側で2.65mを測る。北壁には、棚状施設が構築されているため、それを加えると東側3.46m、西側3.03mとなる。東西方向は3.6mを測り、平面では横向きの不整隅丸台形を呈する。**主軸方位** N-8°-Eで、真北に近い。**壁** 壁高は52cmを測り、南壁が傾斜するものの、ほかは垂直に近い。**床** 全体に硬化している。周溝は全周する。基本的には地床だが、床下土坑（破線表示）を伴う。南西隅土坑は深さ23cmである。**ピット** 掘り方調査時にP1（深さ22cm）を確認した。出入口ピットと想定されるが、堅穴壁からはやや離れている。**カマド・炉** 北壁中央やや東寄りに構築されている。袖は堅穴側にはほとんど張り出さず、幅は上面幅でも40cm前後と広い。袖切り割りでは、内壁被熱面の内側にも間層を挟んで顕著な被熱面を検出した。内壁面に粘土を貼り直した痕跡と見られる。煙道部の天井は一部残存していた。両袖の前面端部には5の須恵器甑の胴部片が補強材として埋設されており、底面中央には、同じく須恵器甑の胴部片2点を埋設して支脚に転用していた。支脚材は煙道部方向へ斜めに傾いた状態で確認したが、本来は立位埋設の状態だったものと見られる。いずれも同一個体を細長く分割して再利用したものである。カマド覆土中からも同一個体破片が出土しており、天井部の補強材にも使用されていたものと想像される。床面中央部には、平面三日月状の顕著な被熱面を検出しており、炉と考えられる。被熱面の直下には床下土坑（深さ15cm）が見られた。**覆土** 下層は褐色土、上層は暗褐色土が主体で、自然堆積状を呈するが、ローム粒・ブロックがやや目立っている。6～11層は土壌化した壁体の可能性が残る。**遺物** 東棚からは3の土師器甕が、西棚からは4の須恵器甕が破片で出土している。カマド前の覆土下層からカマド覆土中にかけて、土師器の内黒椀や甕が出土している。**所見** 住居規模は小さいながらも、比較的大きい床下土坑が3基ある。掘り方では、カマド焚口直下も含めて周溝が全周して確認できた。棚上から出土した土器は、本来置かれていたものがそのまま遺棄された可能性が考えられる。住居跡の廃絶時期は、10世紀前葉頃と考えられる。

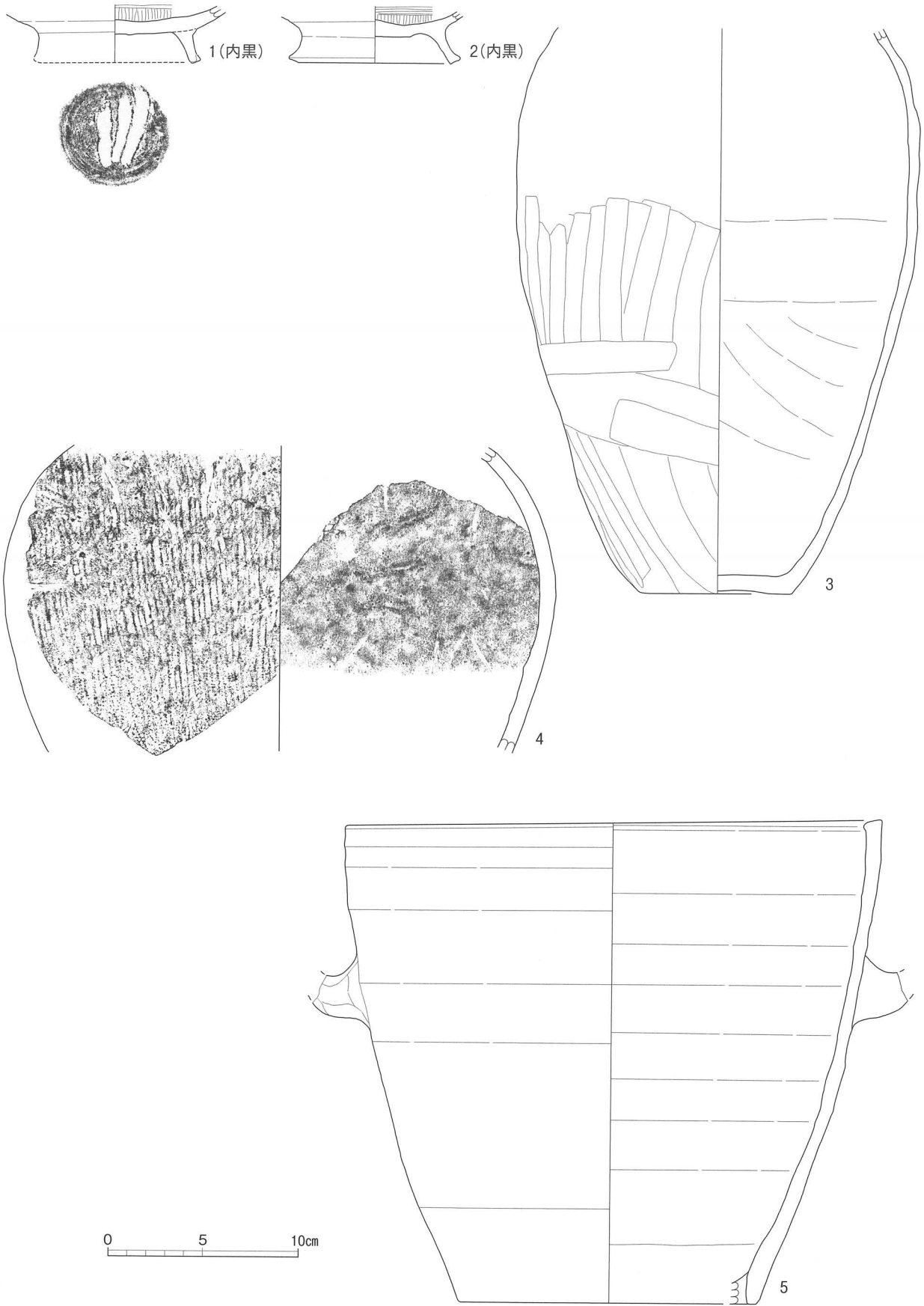
表63 19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 高台付坏	- - 8.7	内面黒色処理、ミガキ。底部外面にやや太い丸味を持った工具による「三」の線刻。	石英	良好	橙色	
2	土師器 高台付坏	- - 8.0	内面黒色処理、ミガキ。ロクロ右回転。	石英	良好	橙色	
3	土師器 甕	- - 7.9	胴外面上半部ナデ、下半部縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	にぶい橙色	
4	須恵器 甕	- - -	胴部外面斜め方向の平行叩き。	長石、石英少量、 黒色融出物	良好	オリーブ灰色	
5	須恵器 甑	28.1 25.4 15.5	底部破損。体部内外面ロクロナデ。体部側面に一對の把手が付く。	長石、石英、チャート、 海綿骨針	不良	浅黄橙色	70%

第IV章 A区の遺構と遺物



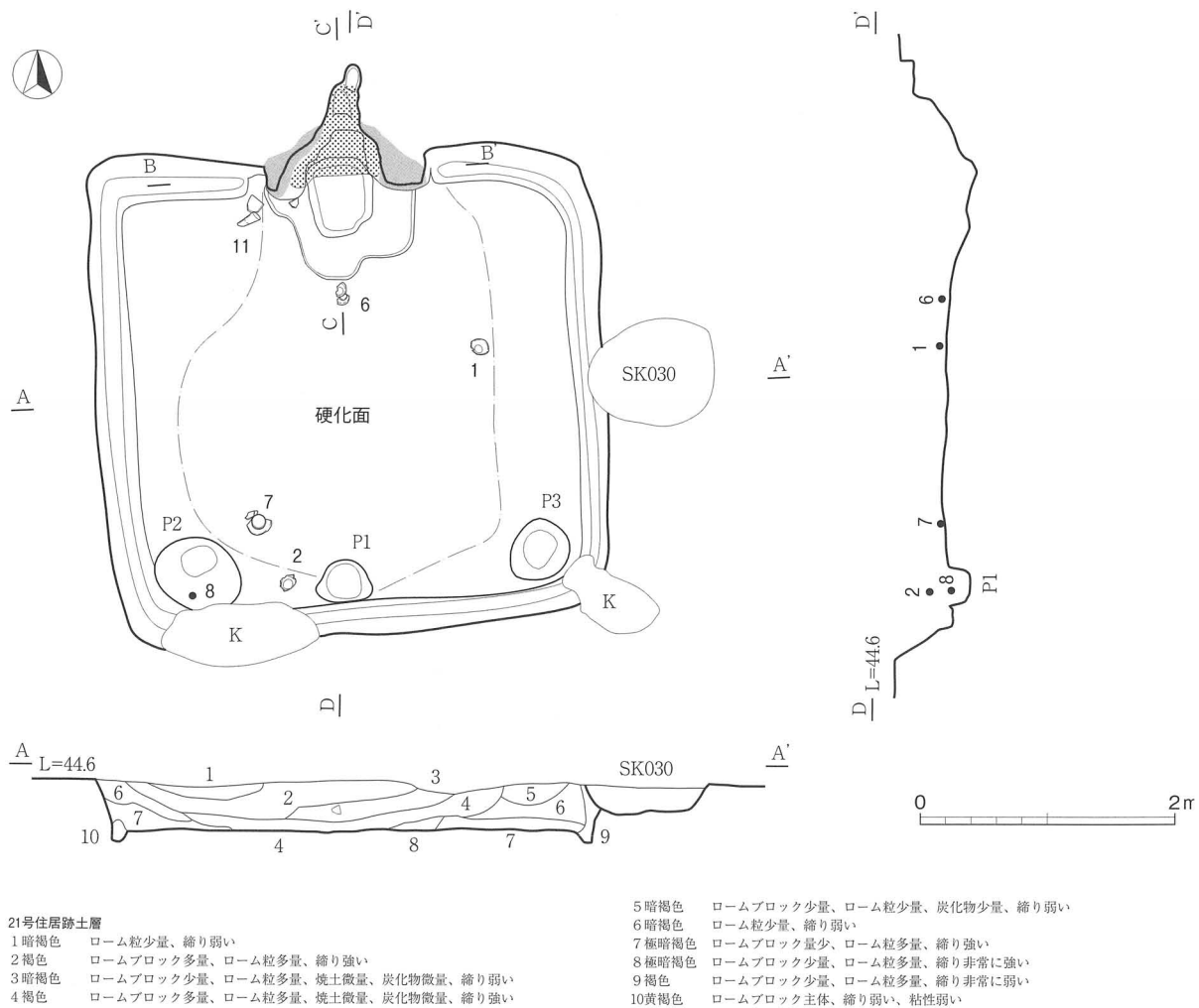
第139図 19号住居跡



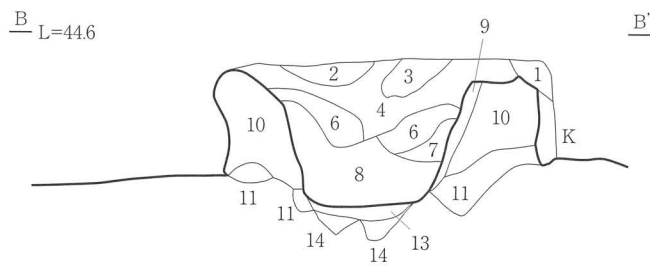
第140図 19号住居跡出土遺物

21号住居跡（第141～143図）

位置 A区北西端、K3～L3グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北方向は3.78～3.97m、東西方向は4.0mを測り、平面は正方形を呈する。**主軸方位** N-4°-W **壁** 壁高は39～43cmを測り、全体的には垂直に近く立ちあがり、北壁がやや傾斜する。**床** カマドからP1にかけての床面中央部が硬化する。周溝は全周している。床下の掘り方をもたない。**ピット** P1はいわゆる出入口ピット。直径約10cmの柱痕を検出している。P2・P3（深さ16cm・22cm）は、用途不明である。**カマド** 北壁中央に構築されている。右袖は幅広く、左袖も本来は同程度の規模と推測する。焚口部は一旦土坑状に大きく掘り込み、それをある程度埋め戻して、一部に貼床を施した状態で使用している。煙道部は先端付近までよく被熱している。**覆土** 壁際には極暗褐色土が、中層～上層には褐色～暗褐色土が堆積している。3～5層はロームブロックが多く、人為埋没の可能性がある。**遺物** ほほ床面直上から、須恵器盤1点（7）が出土している。下層からは高台付坏（6）と坏（2）が出土している。いずれも壁際から続く初期埋没土中に含まれる。また、カマド左袖脇の覆土中層から土製支脚（11）が出土している。須恵器坏類は9世紀前葉頃のもので、5の小型の仏器のようなものもある。8の内黒土師器坏はP2覆土中から出土しており、P2は住居よりも新しい遺構の可能性がある。**所見** 住居跡の廃絶時期は、9世紀前葉頃と考えられる。



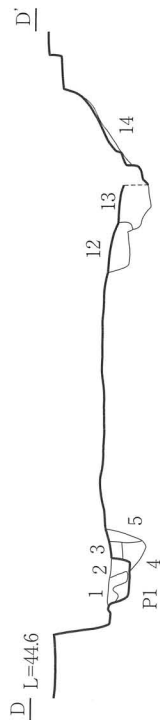
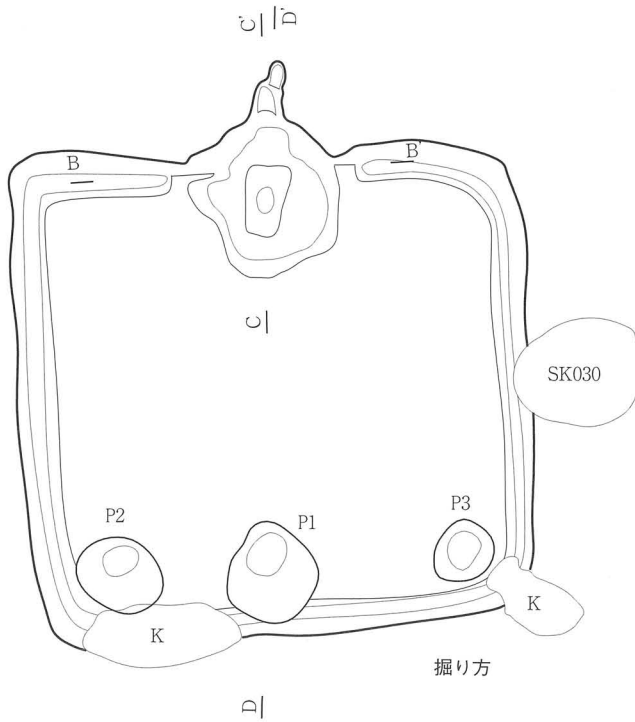
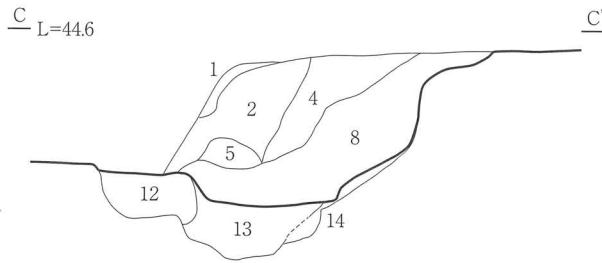
第141図 21号住居跡



21号住居跡土層

カマド

- 1 黒褐色 締り弱い
- 2 灰褐色 粘土微量、ローム粒多量、締り強い
- 3 暗灰褐色 粘土少量、ローム粒少量、焼土微量、締り強い
- 4 明灰褐色 粘土多量、ロームブロック少量、ローム粒少量、焼土微量、締り強い
- 5 明灰褐色 焼土多量、粘土少量、締り強い
- 6 明褐色 焼土少量、締り強い、天井崩落土
- 7 褐色 焼土微量、粘土微量、締り弱い
- 8 暗灰褐色 焼土少量、炭化物微量、粘土微量、締り弱い
- 9 明赤褐色 粘土主体、締り非常に強い、袖
- 10 ぶい橙色 粘土主体、締り強い、袖
- 11 褐色 焼土微量、ロームブロック多量、締り強い、粘性弱い、袖基部
- 12 暗褐色 ロームブロック少量、ローム粒多量、締り強い、粘性弱い
- 13 黒褐色 焼土微量、ローム粒少量、締り弱い
- 14 明赤褐色 焼土主体、ロームブロック多量、締り強い、掘り方



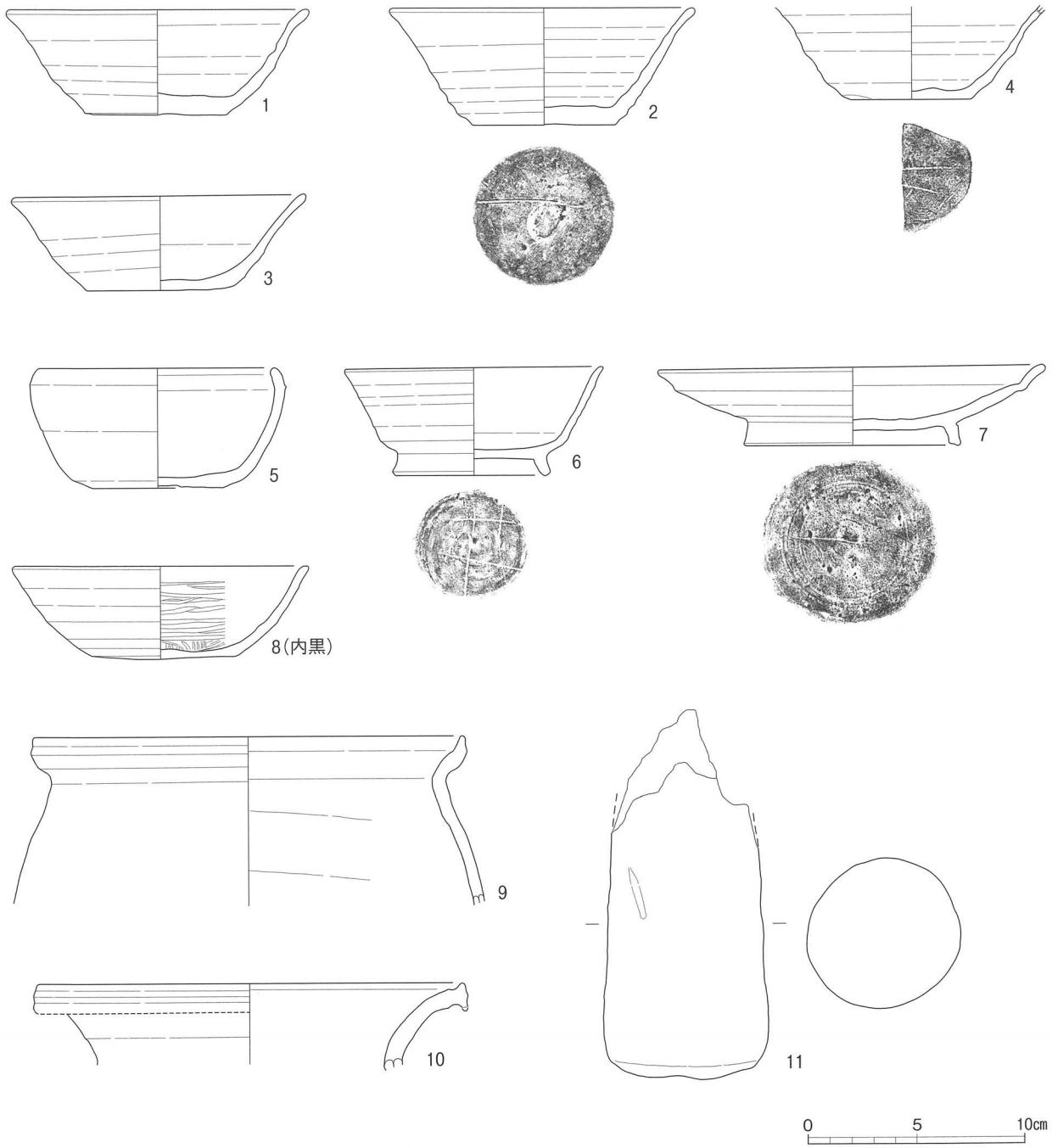
21号住居跡土層

P1

- 1 黒褐色 ローム粒子微量、締まり非常に弱い
- 2 褐色 ローム粒子微量、締まり弱い
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、締まり弱い
- 4 褐色 締り弱い、粘性弱い
- 5 明褐色 ロームブロック多量、締り有り、粘性有り



第142図 21号住居跡カマド・掘り方



第 143 図 21号住居跡出土遺物

表 64 21号住居跡出土遺物観察表

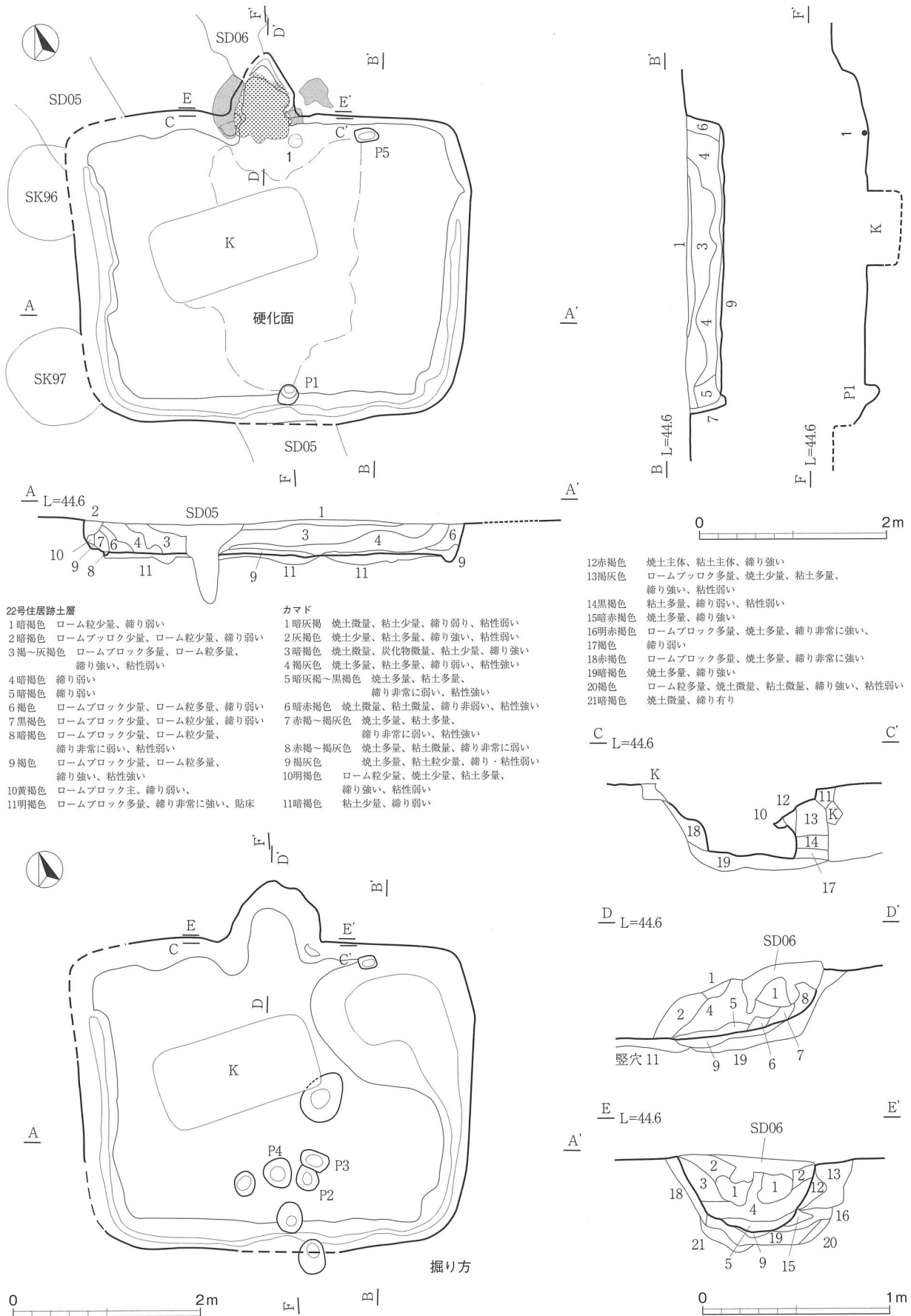
図版番号	種別	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	14.1 5.0 6.5	底部回転ヘラ切り離し後弱い方向ヘラケズリ。ロクロ右回転か。	長石、石英、チャート、海綿骨針	良好	灰色	70%
2	須恵器 坏	14.1 5.5 6.6	底部回転ヘラ切り離し後ナデ。ヘラ記号「一」。ロクロ右回転か。	長石、石英、チャート、海綿骨針	普通	灰色	50%
3	須恵器 坏	13.6 4.5 6.8	底部回転ヘラ切り離し後オサエ、簧子痕。ロクロ右回転か。	長石、石英	やや不良	青灰色	60%
4	須恵器 坏	— — (5.7)	底部ヘラケズリ後ヘラ記号。	石英、角閃石、海綿骨針	不良	にぶい橙色	30%
5	須恵器 坏	(11.0) 5.6 (6.0)	体部は内湾して立ち上がる。底部回転切り離し、無調整。	長石、石英、海綿骨針	普通	暗灰色	60%
6	須恵器 高台付坏	11.9 5.1 7.3	底部外面ヘラ記号「井」。	長石、石英、チャート	普通	灰褐色	90%
7	須恵器 盤	17.9 3.8 9.9	底部外面ヘラ記号「一」。	長石、石英、黒色粒	普通	灰色	90%
8	土師器 坏	(13.8) 4.3 6.8	体部外面下半部回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ。内面黒色処理、ミガキ。ロクロ右回転。	石英	普通	黄橙色	P 2 50%
9	土師器 甕	(20.0) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英、雲母	普通	にぶい褐色	
10	須恵器 甕	(20.0) — —	口縁部外面平行叩き後ロクロナデ。	長石、石英	良好	灰色	
11	土製品 支脚	長 [17.2] cm、径 7.6cm、重 847g。		長石、石英、微砂粒	普通	橙色	

22号住居跡（第144・145図）

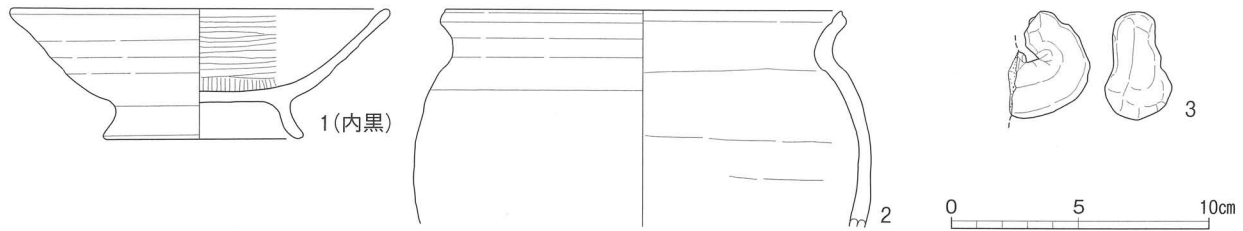
位置 A区北端部付近、L3グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北の主軸方向は3.33m、東西方向は北壁側で4.31m、南壁側で3.95mを測り、平面は横長長方形を呈する。竪穴中央部は攪乱で、竪穴西壁は96・97号土坑に壊され、中世以降の5・6号溝が本住居跡を縦断する。また、本住居跡は弥生時代の30号住居跡を壊している。7号掘立柱建物跡とも重複し、調査時には竪穴覆土中・床面ともに掘立柱穴を確認できなかったため、本住居跡の方が新しいと判断する。**主軸方位** N-19°-Eで、およそ北北東を指向する。

壁 壁高は37cmを測る。全体的には垂直に近く立ちあがり、西壁と北壁西側がやや傾斜する。**床** 全体に貼床は薄く、北東隅の掘り方がやや深い。カマドからP1の間が硬化する。周溝は北壁以外にめぐる。**ピット** P1は、斜めに穿たれており、出入口ピットと思われる。P5は深さ10cm程しかなく、用途不明である。P2～4は掘り方で確認したもので、古い出入口ピットの可能性がある。**カマド** 北壁中央に構築され、6号溝に一部壊されている。ローム層の地山を掘り残して袖の基部としており、右袖の残りは良くない。煙道部掘り方の外側にも粘土を検出しており、攪乱による流失ではなく、粘土検出範囲が煙道天井部の立ち上がり部分の痕跡と推測する。**覆土** 下層は自然堆積状を呈するが、3層はロームブロックが斑状に多く含まれ、人為堆積の可能性がある。**遺物** 右袖手前の覆土下層から、ほぼ完形の内黒土師器壺1点が出土している。カマド覆土中からは口縁端部断面が角形の土師器甕破片が出土している。**所見** P2～4を古い出入口ピットと捉えた場合、現況よりも一回り小さい竪穴を想定することができる。掘り方調査時では拡張痕跡は確認できなかった。住居跡の廃絶時期は、10世紀前葉頃と考えられる。

第IV章 A区の遺構と遺物



第 144 図 22号住居跡



第145図 22号住居跡出土遺物

表65 22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器碗	14.8 5.2 7.3	内面黒色処理、ミガキ。	長石、チャート、 海綿骨針	不良	にぶい橙色	完形
2	土師器甕	(16.0) — —	口縁部内外面ヨコナア、胴部外面ナデ、内面ヘラナア。	石英	普通	暗褐色	
3	須恵器甌	— — —	甌把手部片。	石英微粒	普通	灰色	

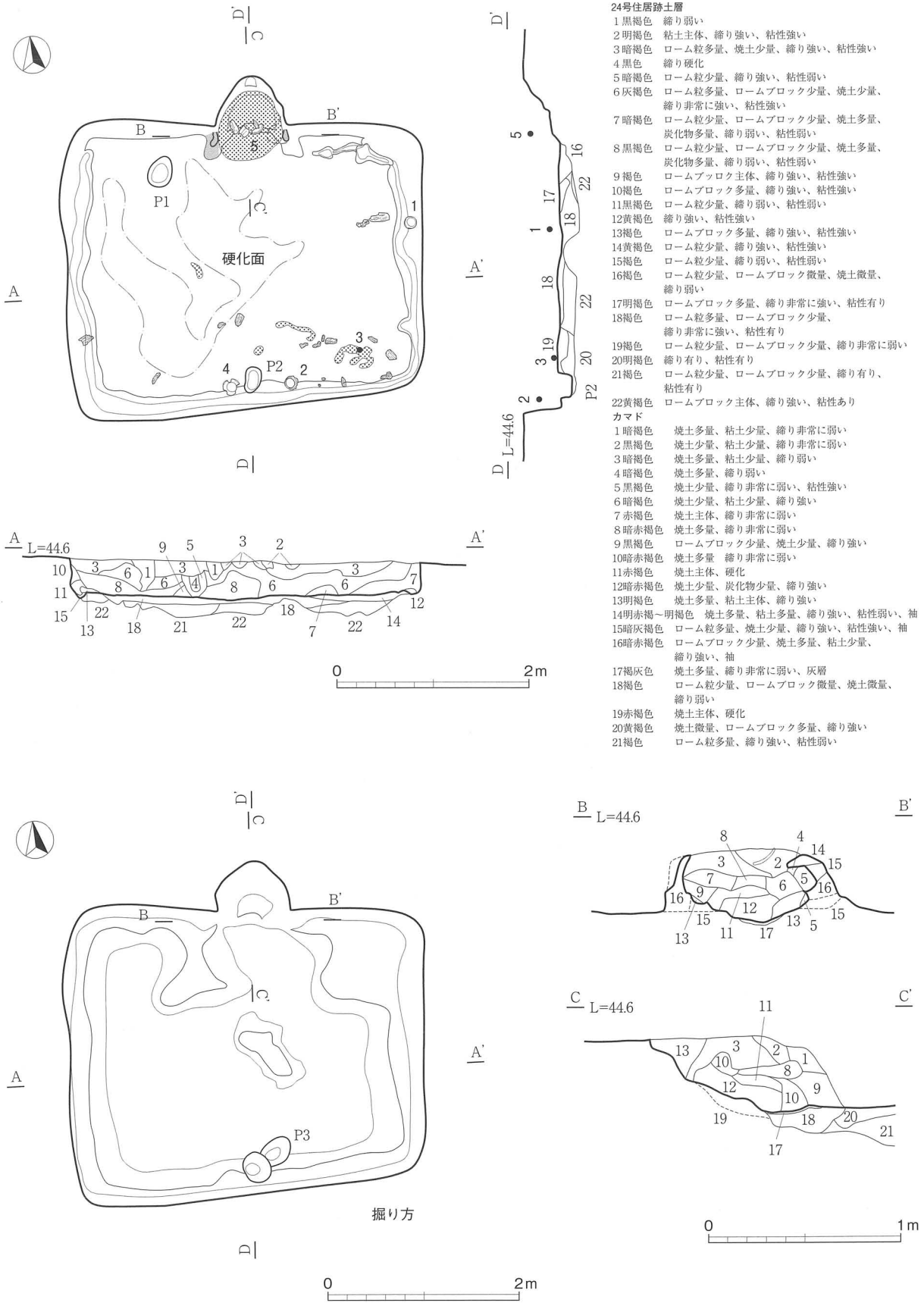
24号住居跡（第146・147図）

位置 A区北端部、L3～M3グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は東側2.85m、西側3.16m、東西方向は3.66～3.84mを測り、平面は横長の長方形でやや台形状を呈する。主軸方位 N-7°-Eで、真北に近い。壁 壁高は36cmを測り、やや傾斜して立ち上がる。床 中央部は平坦で、四隅がやや低い。主軸線よりも西側が硬化している。周溝は不整形ながら、北壁西側を除き全周する。掘り方は、周溝の内側で明瞭な段差を伴ってやや深く掘り込まれている。これは、古い堅穴の存在と堅穴の更新を示しているものと考えられる。ピット P1は深さ12cmと浅い。P2は出入口ピットであろう。P3は掘り方で確認しており、古い堅穴に伴う出入口ピットと考えられ、掘り方面からは深さ14cmを測る。

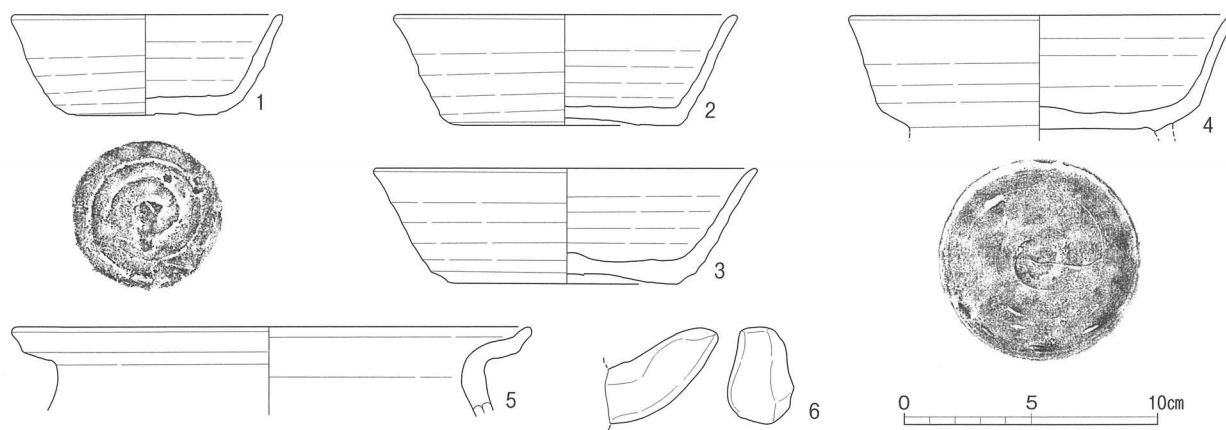
カマド 北壁中央に構築され、袖は幅狭く、遺存状態は良好ではない。覆土 焼失住居であるため、下層には炭化材と焼土を含み、6層は焼土・炭化物以外にローム粒・ブロックが目立つことから、人為的埋没の可能性が高い。4・5層などは、埋没過程で穿たれた柱穴と判断される。遺物 南・東壁際にまとまって出土し、床面からの高さはまちまちながら、1～4の須恵器はいずれも初期埋没土中に含まれる。炭化材や焼土ブロックも、堅穴南東側にまとまって検出された。カマド覆土上面からは土師器甕(5)が出土している。

所見 掘り方の構造やP3の存在は、堅穴の更新・拡張の痕跡と判断できる。おそらくは、カマドの位置もわずかに変更されているであろう。旧堅穴の平面形は新堅穴と相似形で、その下端で平面規模を推測すると、主軸方向東側で2.39m、西側で2.79m、東西方向で3.21mとなる。基本的には周溝部分のみを拡張しており、床面積の大幅な増加にはつながらない。壁体の腐食とともに壁自体の劣化も進行し、壁体構造全体の改築を行った結果として、堅穴の拡張という現象で現れているものと想像する。住居跡の廃絶時期は、8世紀後葉頃に求められる。

第IV章 A区の遺構と遺物



第146図 24号住居跡



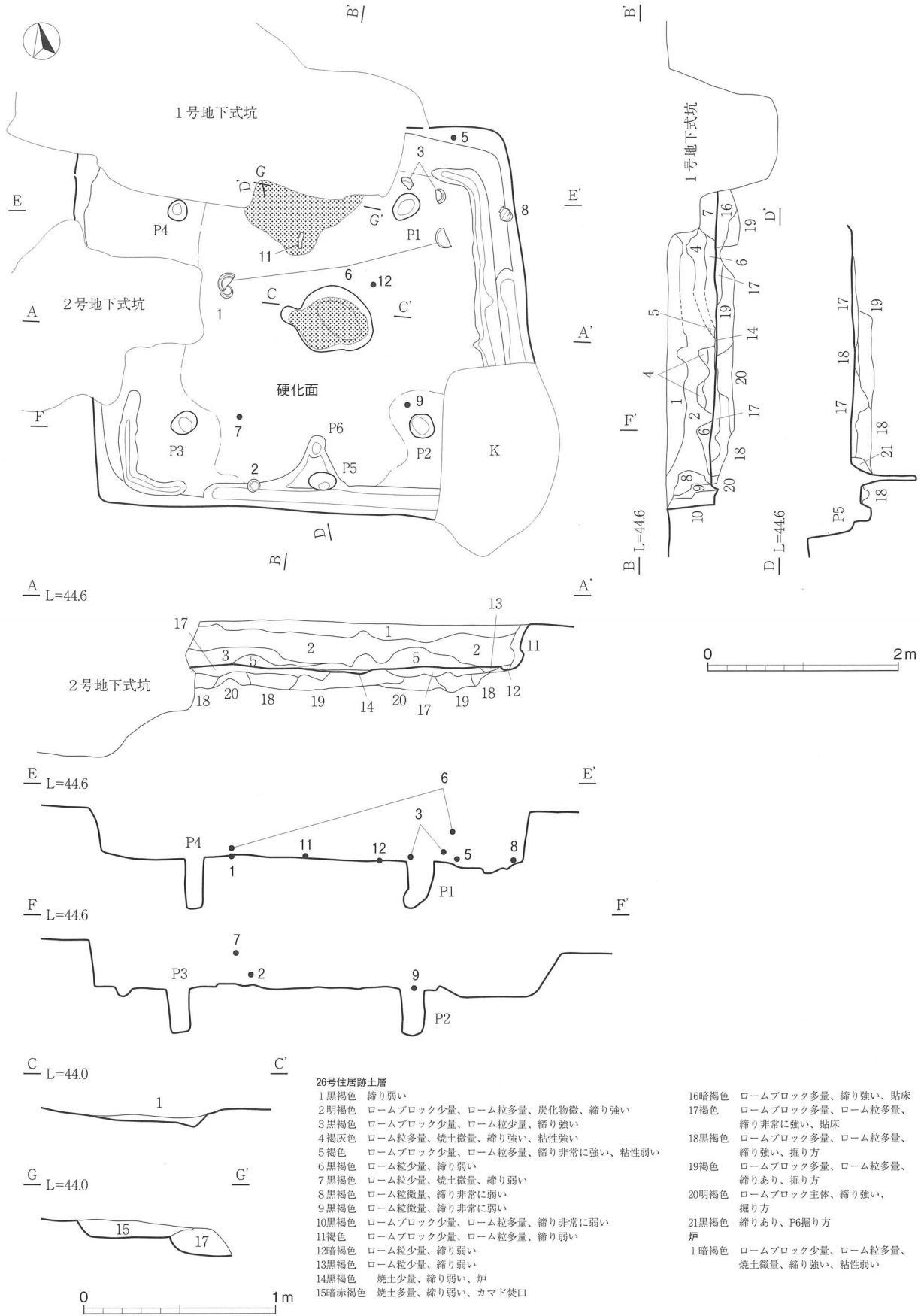
第147図 24号住居跡出土遺物

表66 24号住居跡出土遺物観察表

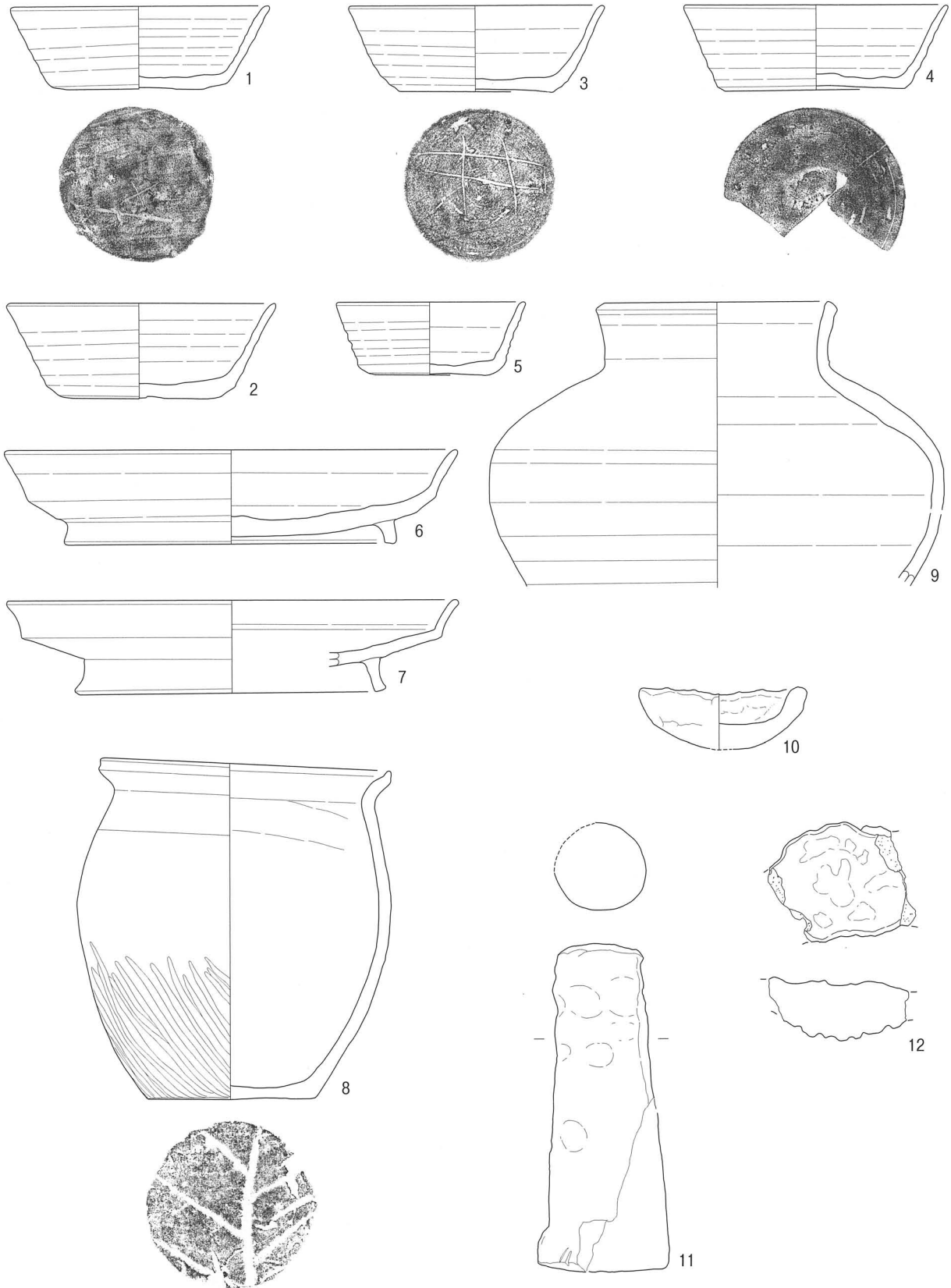
図版番号	種別器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	10.8 4.0 6.0	底部回転ヘラ切り離し、無調整。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート、海綿骨針	普通	灰褐色	完形
2	須恵器 坏	13.6 4.4 9.0	底部回転切り離し、無調整。	長石礫、酸化礫、黒色小粒（還元金属粒）	普通	灰色	70%
3	須恵器 坏	(15.0) 4.6 (8.8)	底部回転ヘラ切り離し後一方向ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石礫、石英粒	良好	暗灰色	50%
4	須恵器 高台付坏	15.3 — —	高台部欠損。底部ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石礫	普通	灰色	
5	土師器 甕	(20.5) — —	口縁部内外面ヨコナデ。	長石、石英、雲母	良好	にぶい褐色	
6	土師器 甕	— — —	甕把手。全体に器面摩耗。	長石、石英	不良	にぶい褐色	

26号住居跡（第148・149図）

位置 A区北部、M2～M3グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北（主軸）方向は東側4.12m、東西方向は4.61mを測り、平面はわずかに横長長方形を呈する。北壁と西壁を1・2号地下式坑によって、南東隅を攪乱によって壊され、大きく失う。**主軸方位** N-7°-E **壁** 壁高は44cmを測り、やや傾斜して立ち上がる。**床** 中央部は平坦で硬化し、主柱穴を含む四隅がやや低く軟弱である。周溝には新旧2条あり、内側が古い。南西隅では、新旧の周溝が接続してしまっただが、最終使用時には古い周溝は埋め戻されていたであろう。掘り方は全体に深く、カマド前面部は地山のローム層が大きく掘り残されていた。また、古い周溝と合致するような一回り小さい堅穴の痕跡を確認することができた。**ピット** P1～4を主柱穴、P5を新出入口ピット、P6を旧出入口ピットと考える。主柱穴底面には、硬化した圧痕を明瞭に検出している。**カマド・炉** 1号地下式坑によって消滅しているが、北壁中央辺りに付設されていたものと推測する。焼土・灰混じりの黒褐色土は、堅穴中央付近まで広く分布する。掘り方調査時に明瞭な焚口範囲を検出した



第 148 図 26号住居跡



第 149 図 26号住居跡出土遺物

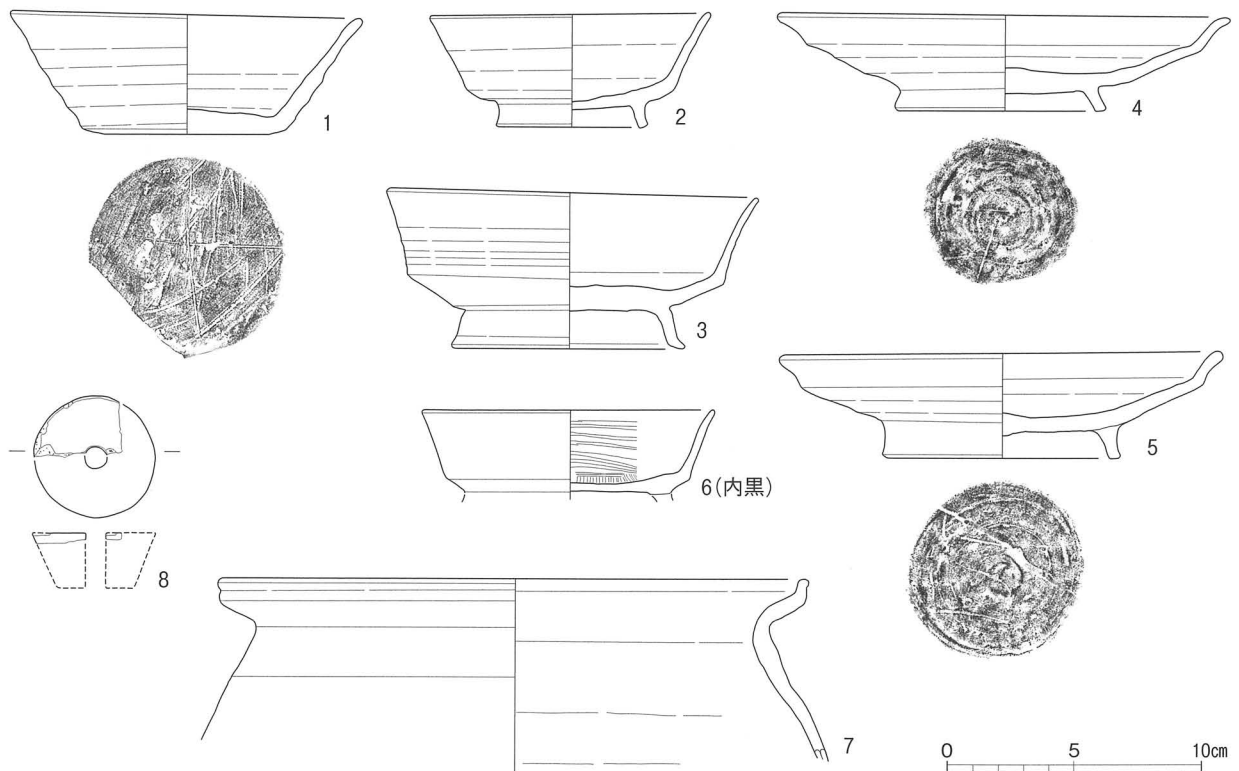
が、これは旧カマドに伴うものと推定する。また、床面中央部には明瞭な被熱部分がある。平面不整楕円形で、規模は98cm×73cmを測り、炉と判断した。覆土 覆土中層には、竪穴南壁付近までカマド崩落後の粘土ブロックが点在し、人為的埋没の可能性がある。9・10層については、土壌化した壁体が想定される。遺物 北東隅付近と、竪穴中央部西側の覆土上層～下層から、まとめて出土している。床面に遺棄されたような遺物は見られない。須恵器坏、盤類、土師器の小形甕は8世紀前半代頃のもの、9の須恵器短頸壺は湖西産の製品かと思われる。所見 本住居跡は、支柱穴配置を全く変更せずに竪穴を拡張し、カマド・出入口ピットを更新している事例である。旧竪穴の下端平面規模は、主軸方向3.3m、東西方向3.9mと推測され、平面は新竪穴と相似形であろう。住居跡の廃絶時期は、8世紀前半代頃に求められる。

表 67 26号住居跡出土遺物観察表

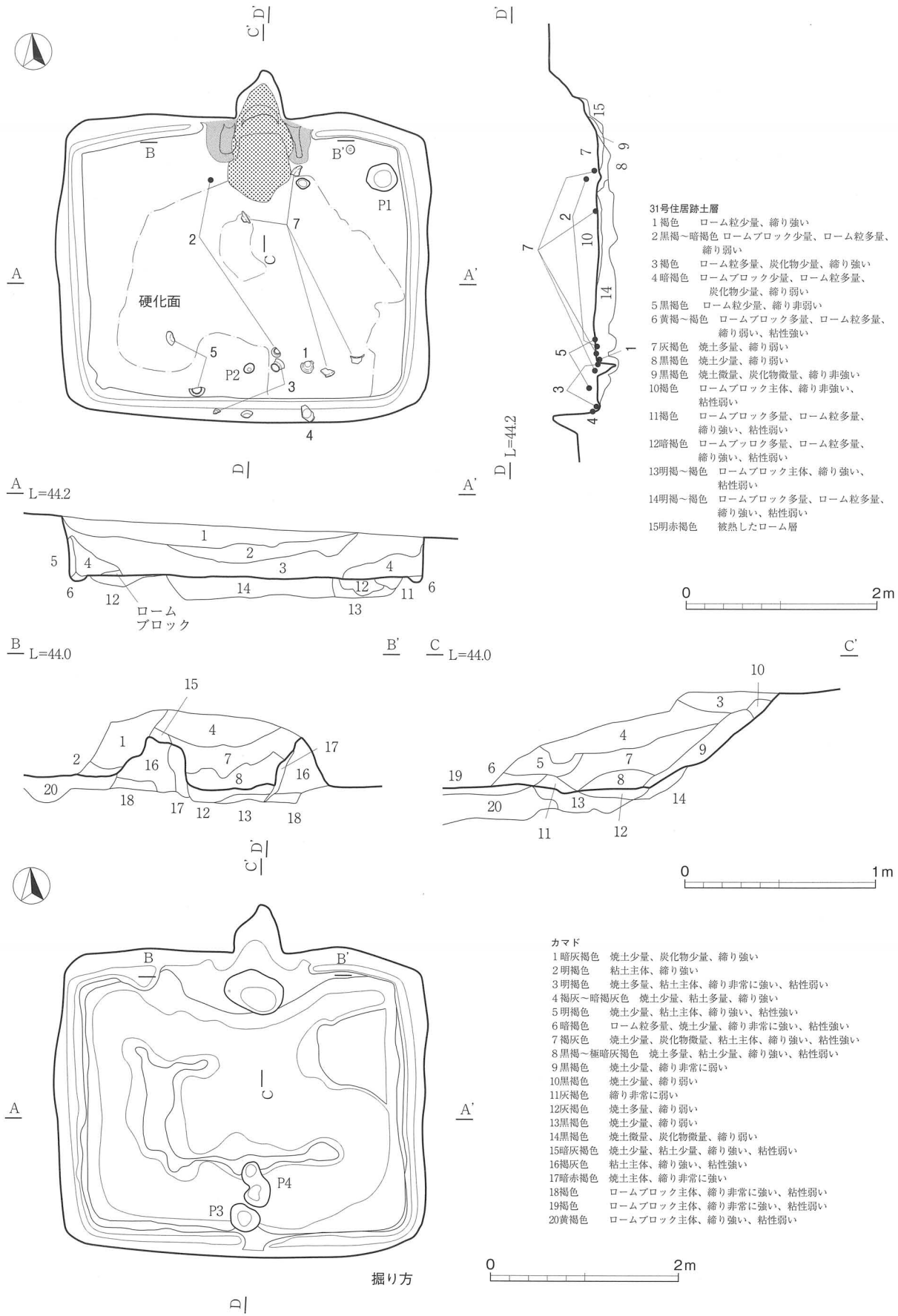
図版 番号	種 別 器 種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	13.3 4.2 8.8	底部一方向ヘラケズリ、ヘラ記号「+」「一」。	長石、石英	普通	灰色	完形
2	須恵器 坏	13.7 4.9 8.2	底部回転ヘラ切り離し、無調整。	長石、チャート礫	普通	明褐色	90%
3	須恵器 坏	13.0 4.6 8.9	底部回転ヘラケズリ、ヘラ記号「井」、ロクロ右回転。内面使用痕、内底面黒色付着物あり。	長石、チャート礫	普通	灰色	80%
4	須恵器 坏	(13.4) 4.3 9.5	底部回転ヘラケズリ、ヘラ記号「一」、ロクロ右回転。	長石礫、石英粒	良好	黒褐色	
5	須恵器 坏	(9.6) 3.7 6.2	底部ヘラ切り後一方向ヘラケズリ、ロクロ右回転。	長石、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	60%
6	須恵器 盤	23.0 4.8 16.9	底部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石礫、海綿骨針	普通	明褐色	80%
7	須恵器 盤	(23.0) 4.7 (15.6)	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石礫	良好	灰色	
8	土師器 小型甕	14.5 17.1 8.5	口縁部摘み上げ、胴下半部ミガキ、底部木葉痕。	長石、石英	普通	暗褐色	80%
9	須恵器 短頸壺	(11.3) — —	口縁部は僅かに外傾し、肩部には淡緑色の自然が掛かる。	灰色・白色角丸礫 極少量、鉄分粒少 量、精良	良好	灰白色	湖西産カ
10	手握土器	8.5 3.1 —	外面輝、内面指頭痕。	石英	良好	にぶい褐色	
11	土製品 支脚	長 16.6cm、幅 4.7cm、厚 4.5cm、重 298.8g。		長石、石英	普通	明赤褐色	
12	鉄滓	長 7.5cm、幅 6.0cm、厚 3.0cm、重 176.0g。					

31号住居跡（第150・151図）

位置 A区北端部、M3グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北(主軸)方向は東側3.15m～3.31m、東西方向は3.88m～3.94mを測り、平面はわずかに横長の長方形を呈する。本住居跡が33号住居跡の北壁を壊している。**主軸方位** N-3°-E **壁** 壁高は45～65cmを測り、やや傾斜して立ち上がる。**床** 全体に平坦で、北東隅・北西隅・P2周辺を除き、よく硬化している。中央部には軟弱な部分があり、焼土や被熱痕跡は検出できなかった。周溝は全周する。掘り方はやや深く、周溝の内側で明瞭な段差をもっており、周溝部分のみを拡張しているものと思われる。掘り方中央部はL字状に地山ロームが掘り残されて土手状になる。**ピット** P1(深さ16cm)は貯蔵穴に、P2は新しい出入口ピット(P3は掘り方)に、掘り方で確認したP4は古い段階の出入口ピットに該当する。P2で截ち割り調査を実施したところ、直径5～13cmの先細り状柱痕を検出した。**カマド** 北壁中央やや東寄りに構築され、燃焼部の被熱が著しい。西袖は遺存状態が比較的良好である。掘り方では、ローム層を掘り残して両袖の基部としていた。**覆土** 褐色土～黒褐色土による自然堆積状を呈する。西壁周溝上の5層は黒褐色に土壌化した壁体の痕跡の可能性はある。**遺物** 南壁直下および周辺の4層中から、8世紀後葉～9世紀前葉頃の須恵器坏・盤や土師器甕、土師器内黒高台付坏などがまとも出土している。竪穴埋没初期に一括投棄されたような出土状態と見られる。2の高台付坏と7の土師器の甕の接合関係が類似する点も注意される。**所見** 竪穴と出入口ピットの造り替えは明瞭であったが、カマドの位置はほとんど変更していないようである。古い段階の竪穴の下端平面規模は、主軸方向2.51～2.72m、東西方向3.9mで、平面形は新しい段階の竪穴と相似形である。24号住居跡と同様、ほぼ周溝部分のみを拡張している。住居跡の廃絶時期は、9世紀前葉頃と考えられる。



第150図 31号住居跡出土遺物



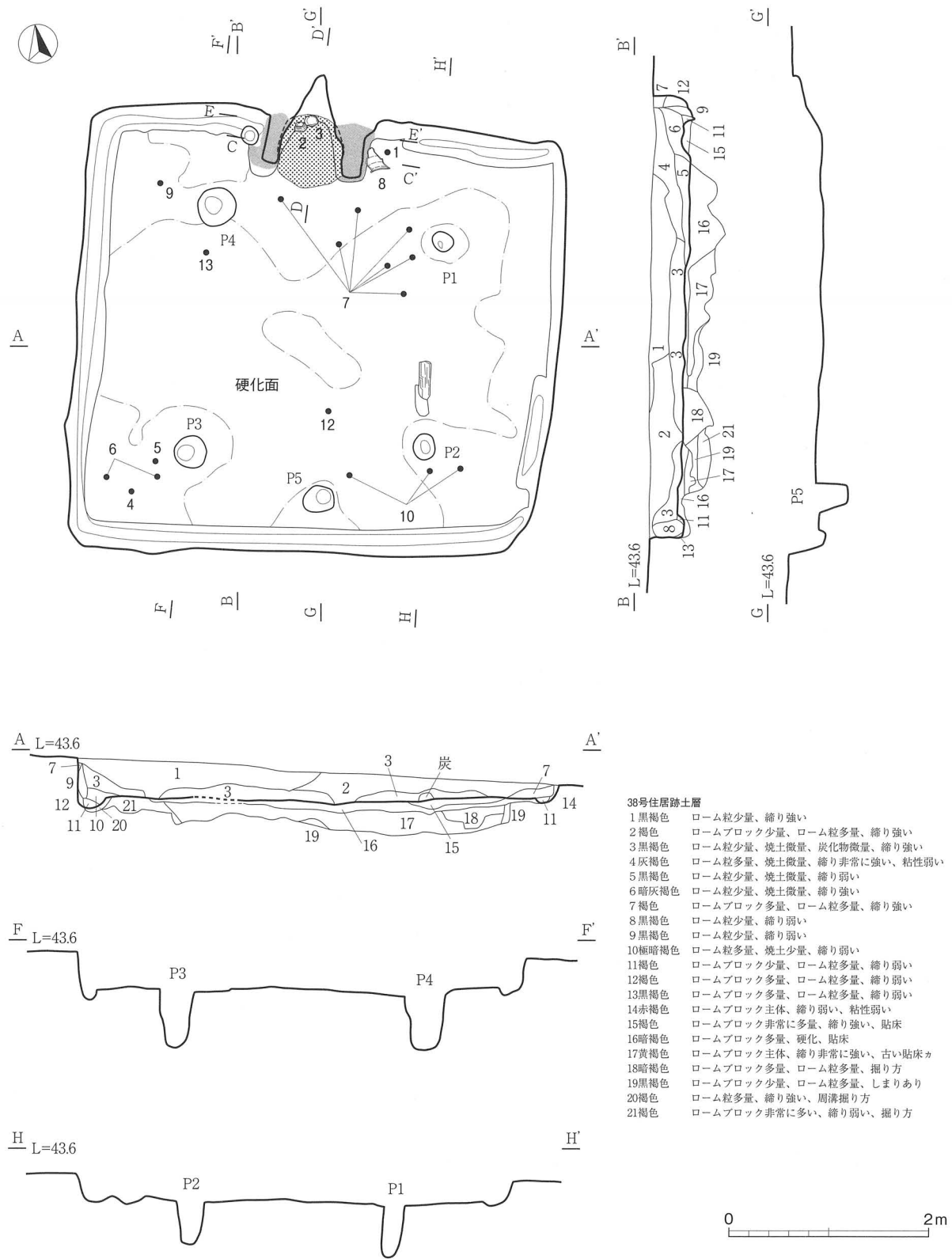
第151図 31号住居跡

表 68 31号住居跡出土遺物観察表

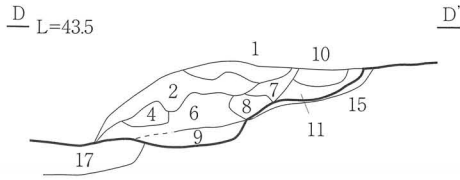
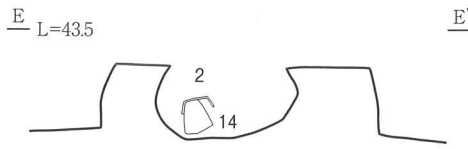
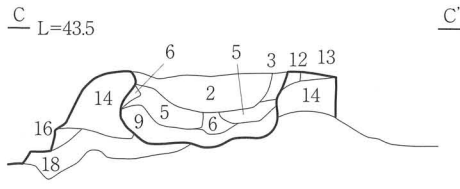
図版 番号	種 別 種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	13.9 4.9 8.0	底部一方向ヘラケズリ、ヘラ記号「+」。ロクロ右回転。	長石礫、黒色粒、 灰色岩片礫	良好	暗灰色	60%
2	須恵器 高台付坏	11.1 4.6 9.0	底部回転ヘラケズリ、高台貼り付け。	長石礫、石英、海 綿骨針	良好	灰色	80%
3	須恵器 高台付坏	14.6 6.4 9.3	底部回転ヘラケズリ、高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石礫、海綿骨針	普通	暗灰色	60%
4	須恵器 小型盤	17.8 4.9 8.3	底部回転ヘラケズリ、高台貼り付け。ヘラ記号。	長石礫、海綿骨針	やや不 良	灰色	
5	須恵器 小型盤	17.4 4.2 9.2	底部回転ヘラケズリ、高台貼り付け。ヘラ記号「三」。	長石礫、海綿骨針	不良	灰褐色	ほぼ完形
6	土師器 高台付坏	(11.5) — —	内面黒色処理、ミガキ。	長石、石英微粒	良好	橙色、黒色（内面）	
7	土師器 甕	23.3 — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
8	石製品 紡錘車	径 (4.8) cm、厚—cm、重 3.87g、粘板岩製。					

38号住居跡（第152～155図）

位置 A区北部調査区際、M4～N4グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北(主軸)方向は4.34m～4.51m、東西方向は4.67m～4.86mを測り、平面形は隅丸正方形に近い。**主軸方位** N-12°-E **壁** 壁高は14～38cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。**床** やや凹凸があり、壁際やカマド前面、柱穴の周りを除いて硬化している。中央部に床面が軟弱な部分がある。中央部の床面は貼り直されており、5～10cm程度の嵩上げを行っているようである。掘り方は全体にやや深く、一回り小さい古い竪穴を確認した。**ピット** P1～4が最新支柱穴、P6～9・15(深さ30～50cm)が新支柱穴、P10～13(深さ25～40cm)が旧支柱穴、P5・14が新・旧出入口ピットと考えられる。柱穴配置は、(1期)P10～13とP14 → (2期)P6～9・15とP5 → (3期)P1～4とP5 という変遷を想定した。2期から3期へは連続的な拡張・更新であろう。P1・2は軟弱な柱痕部分のみを掘り上げた。P3・4は直径24～25cmの柱痕を断面で観察した。古い支柱穴はロームブロックを多量に含む土で埋め戻されている。**カマド** 北壁中央やや西寄りに構築されている。両袖はアーチ状に湾曲し、残存状態は比較的良好である。火床面の北西奥側で土製支脚が立位状態のまま出土し、支脚の上には2の須恵器坏が逆位で被せられていた。坏と支脚は粘土を貼り付けて固定されていたようで、支脚の周りは赤化した粘土が覆っていた。ローム層の地山を掘り残してカマド両袖の基部としている。旧竪穴に伴うカマド自体は残存しないが、掘り残しの両袖基部を確認している。**覆土** 1層と2層は調査前の覆土上面において明瞭に分離できた。3～5層は焼土・炭化物および炭化材が含まれ、上屋焼失後の人為埋没の可能性がある。**遺物** 8世紀前葉から中葉頃の須恵器の蓋・坏・盤類と土師器甕等が多数出土している。大半は覆土1～3層に含まれ、カマドを除き、住居廃絶時に遺棄された遺物は認められない。**所見** 住居跡の廃絶時期は、8世紀中葉頃に求められる。本住居跡は、竪穴と柱穴配置の拡張・更新が明瞭である。新・旧竪穴は、3期と2期の柱穴配置に対応する。旧竪穴の下端平面規模は南北3.9m×東西4.2mである。主軸方位と平面形は新竪穴と同様であろう。1期の竪穴は不明ながら、一辺3.5m程度で主軸はほぼ南北方向と想定する。



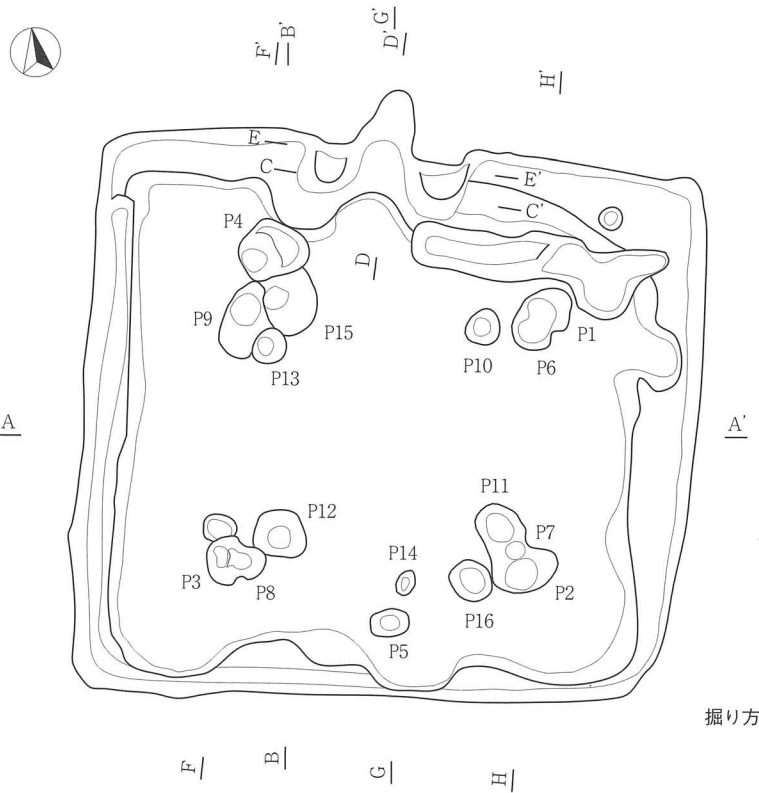
第 152 図 38号住居跡



38号住居跡土層

カマド

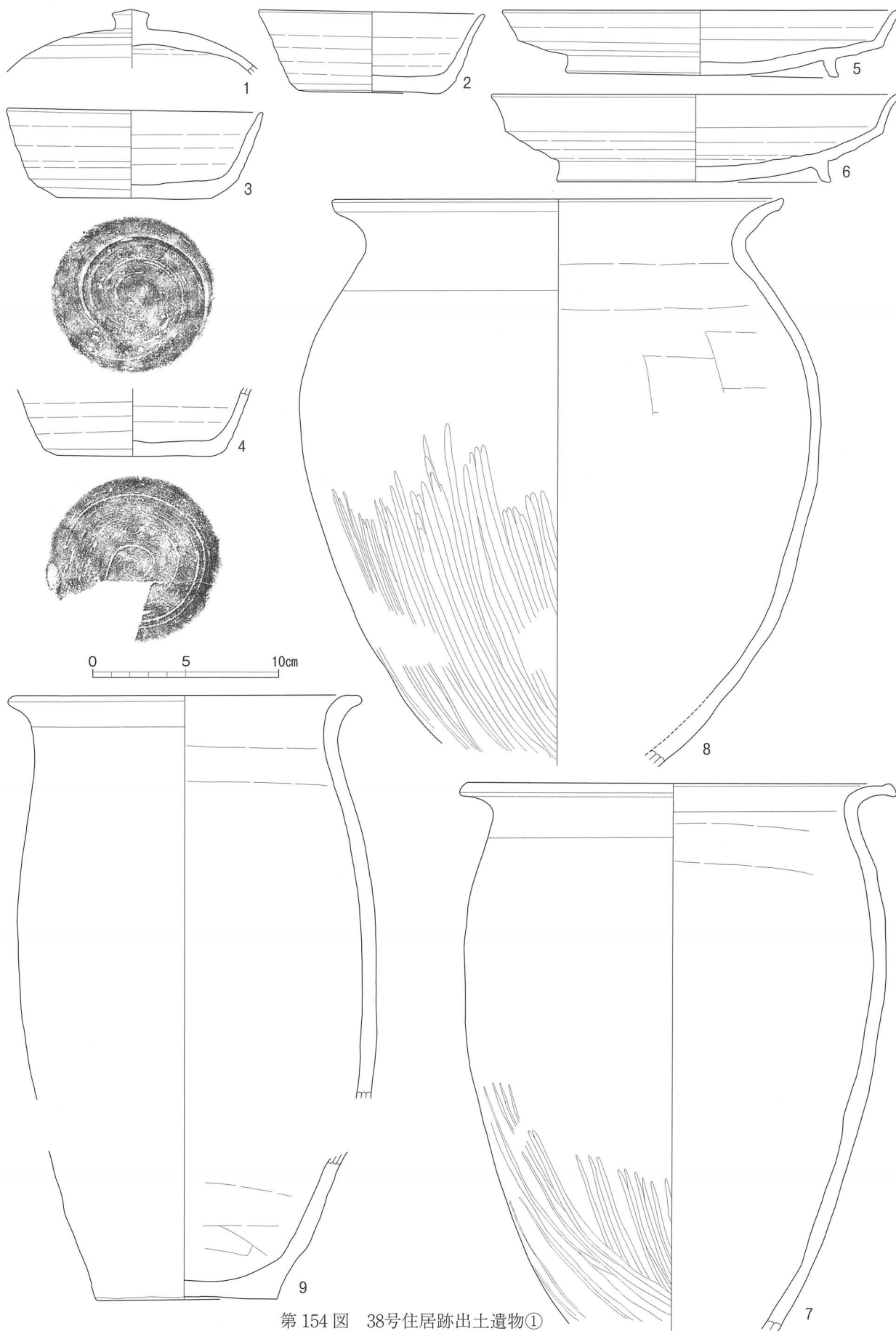
- 1 褐色 焼土少量、締り弱い
- 2 暗灰褐～黒褐色 焼土多量、締り強い、粘性弱い
- 3 明褐色 焼土多量、締り強い、粘性強い
- 4 赤褐色 焼土主体、締り非常に弱い、粘性弱い
- 5 暗褐色 焼土多量、締り強い
- 6 暗褐色 焼土多量、締り弱い
- 7 黒褐色 締り弱い
- 8 暗灰褐色 焼土少量、締り弱い
- 9 暗褐色 焼土多量、締り弱い
- 10 褐色 ローム粒少量、締り強い
- 11 暗褐色 ローム粒少量、締り強い
- 12 黒褐色 焼土微量、締り強い、袖
- 13 明灰褐色 粘土主体、締り非常に強い、袖
- 14 褐色 粘土・焼土主体、袖
- 15 黒褐色 焼土微量、締り非常に弱い
- 16 暗灰褐色 粘土微量、締り強い
- 17 暗赤褐色 焼土少量、締り弱い
- 18 黄褐色 ロームブロック主体、締りあり、袖基部



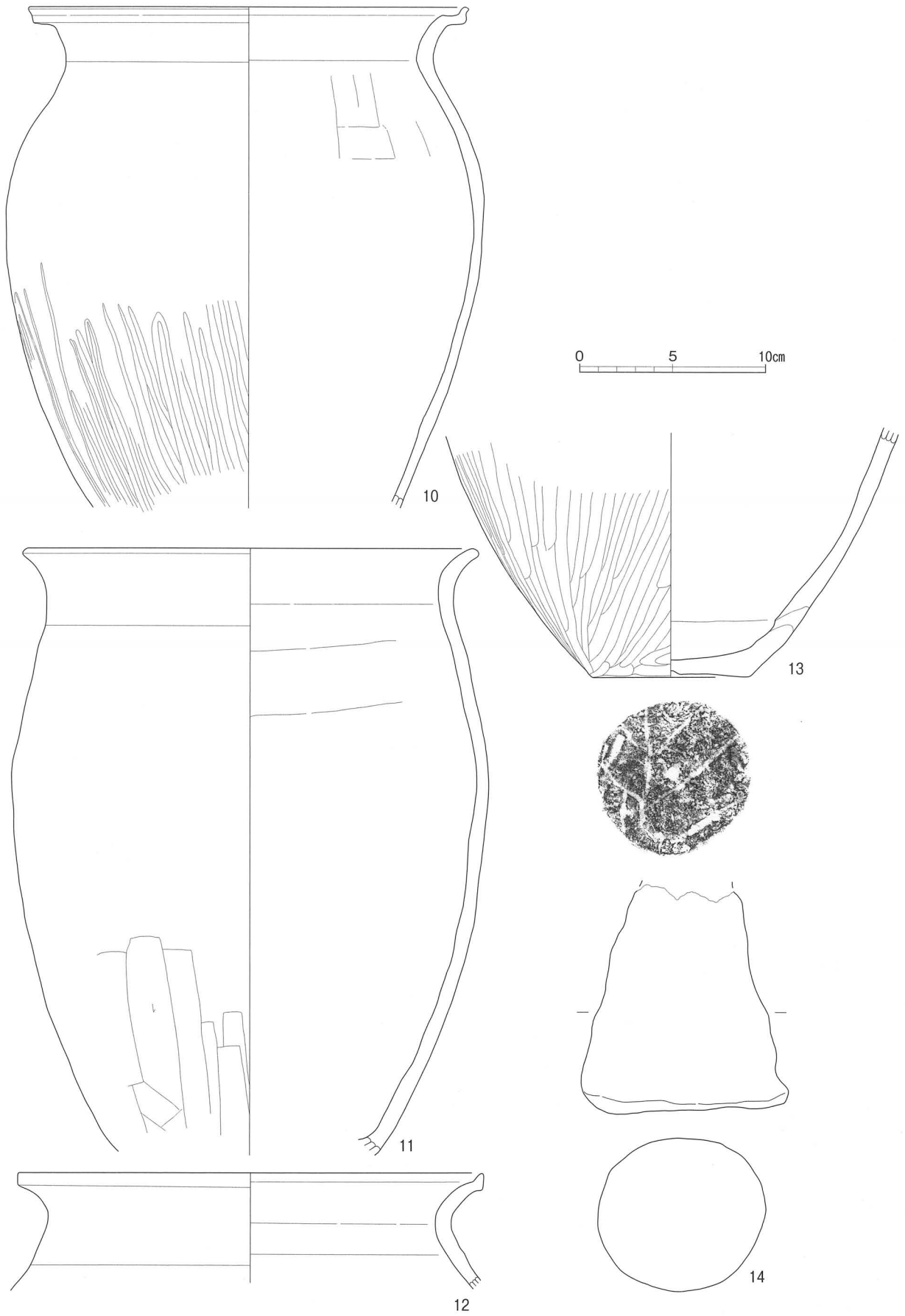
掘り方



第153図 38号住居跡カマド・掘り方



第154図 38号住居跡出土遺物①



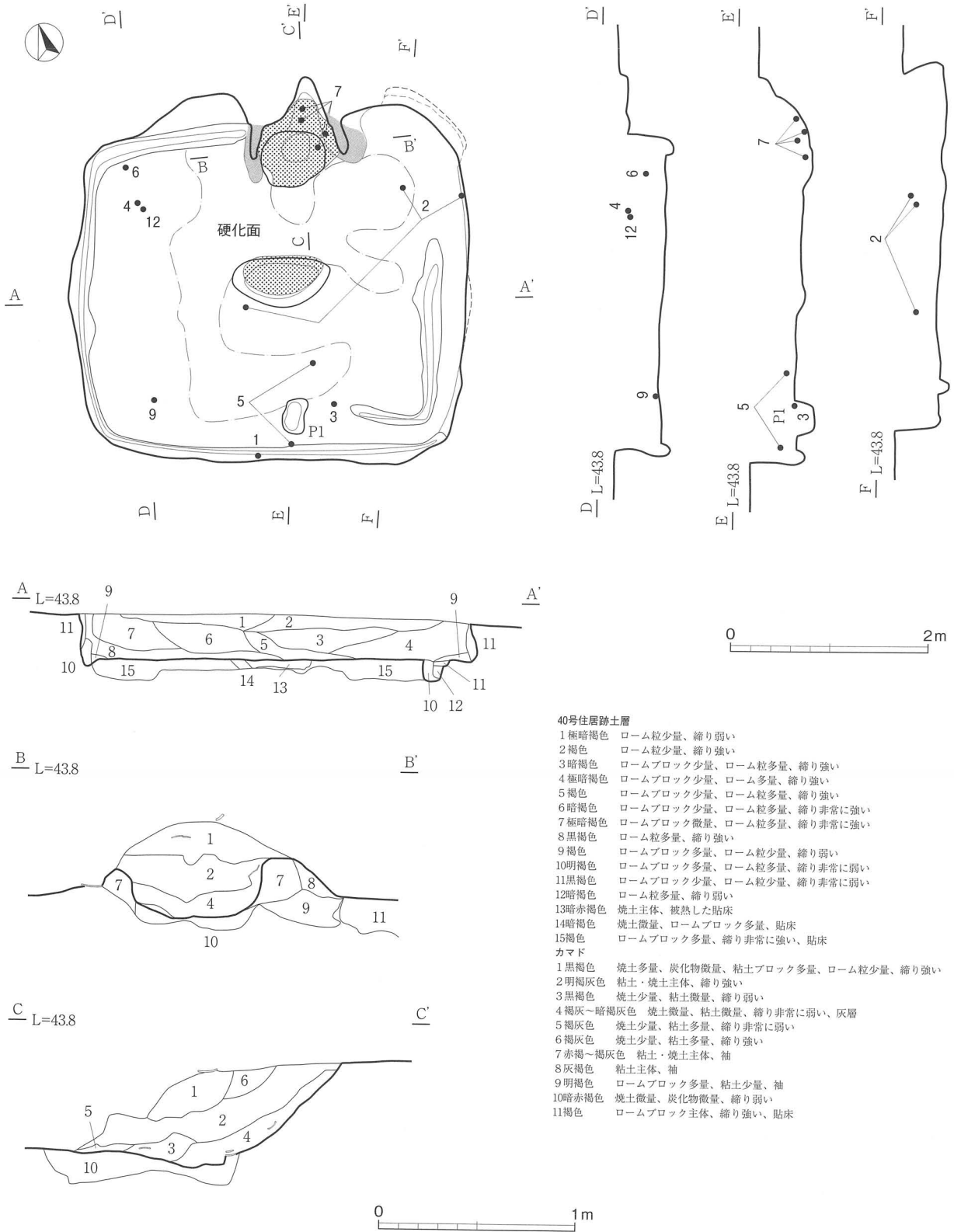
第 155 図 38号住居跡出土遺物②

表 69 38号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種 器 種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	— — —	天井部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート、海綿骨針	不良	にぶい褐色	
2	須恵器 坏	12.3 4.6 7.6	体部下端回転ヘラケズリ、底部丁寧な回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石 礫少量、チャート、海綿骨針	やや不良	灰白色	完形
3	須恵器 坏	(13.9) 4.9 8.2	体部下端回転ヘラケズリ、底部ヘラ切り後回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	チャート礫(角丸)、長石、石英、海綿骨針	不良	灰白色	60%
4	須恵器 坏	— — 8.4	底部やや雑な回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石、チャート、海綿骨針	普通	明灰色	
5	須恵器 盤	(21.4) 3.6 15.2	内低面に径9cmの自然釉の掛からない重ね焼き痕。	長石、石英、黒色粒	良好	暗灰色	50%
6	須恵器 盤	(21.9) 4.8 14.9	酸化焰の生焼け製品で、窯場からの廃棄品の利用か。	長石、チャート	不良	黄橙色	40%
7	土師器 甕	23.4 — —	口縁部僅かに摘み上げ、胴下半部ミガキ。	長石、石英	普通	浅黄橙色	
8	土師器 甕	(24.3) — —	口縁部僅かに摘み上げ、胴下半部ミガキ。	長石、石英	普通	にぶい橙色	
9	土師器 甕	(18.6) (33.0) 9.8	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ・ナデ。	長石、石英	普通	明赤褐色	
10	土師器 甕	(23.5) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部外面ナデ、下半部ミガキ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
11	土師器 甕	(24.5) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部外面ナデ、下半部ヘラケズリ、内面上半部ヘラナデ、下半部ナデ。	長石、石英	不良	にぶい黄橙色	
12	土師器 甕	(24.9) — —	口縁部内外面ヨコナデ。	石英	良好	にぶい橙色	
13	土師器 甕	— — 8.5	胴下半部ミガキ、底部木葉痕。	長石、石英、雲母	普通	灰褐色	
14	土製品 支脚	長 [12.5] cm、幅 9.0cm、厚 8.3cm、重 906g。		長石、石英	普通	橙色	

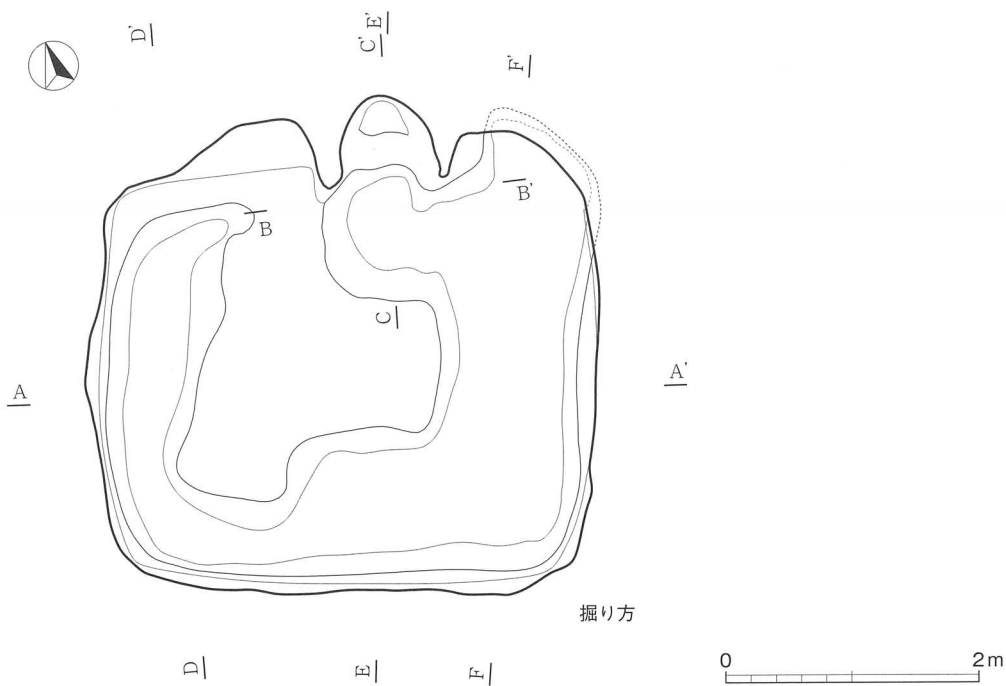
40号住居跡 (第156~158図)

位置 A区北端部付近、M4グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は東側3.66m、西側3.43m(3.72m)、東西方向は4.00mを測る。北壁ラインは整わないが、基本形状は横向きの隅丸台形あるいは隅丸長方形であろう。主軸方位 N-28°-E 壁 壁高は40~46cmを測り、全体的にはほぼ垂直に立ち上がる。北壁東側は大きく抉れている。床 やや凹凸があり、炉の周りを除いた竪穴中央部が硬化する。北壁西側から南壁にかけて周溝がめぐる。また、東壁側には古い周溝を確認した。掘り方では、現状の竪穴よりも一回り小さい竪穴が認められた。古い周溝と合致するため、竪穴の拡張・更新と判断できる。ピット P1(深さ21cm)を出入口ピットと推測する。カマド・炉 北壁中央やや東寄りに構築され、被熱は著しい。両袖にはオーバーハングする部分がある。右袖中央部には、補強材の土師器甕が逆位の状態で埋め込まれ、一部は内壁に露出している。掘り方面では、ローム層を掘り残した両袖の基部を確認している。床面中央部には強く被熱した炉があり、15cm程度掘りこまれる。覆土 全体にローム粒は多いが、褐色



第 156 図 40号住居跡

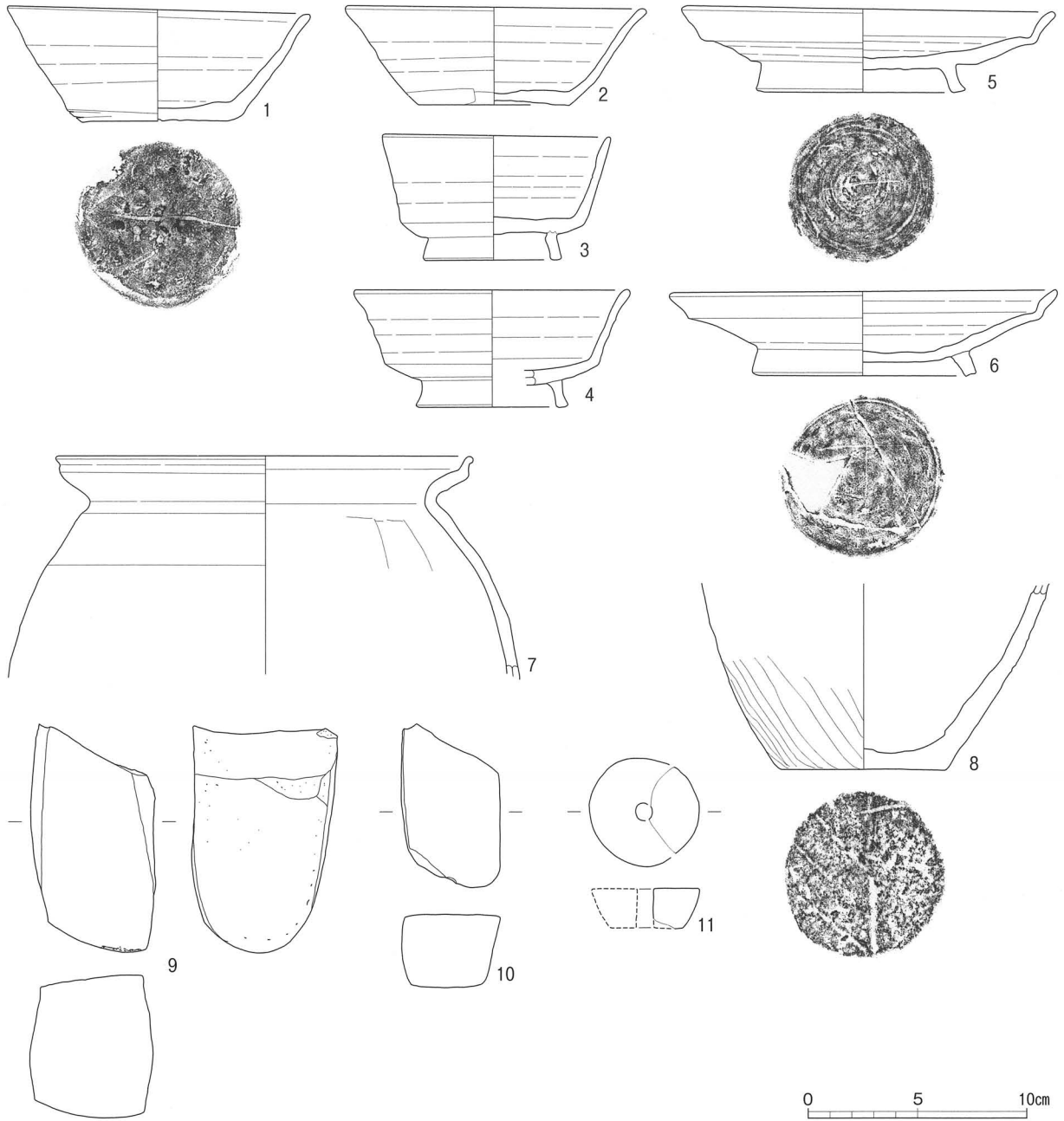
土～黒褐色土による自然堆積状を呈する。10・11層は土壌化した壁体の痕跡と思われる。西側の北壁直下では、竪穴壁が崩落して堆積したローム層と土壌化した壁体の痕跡（層厚7cmの11層が周溝際で垂直に堆積）を検出している。遺物 南壁上端際と南壁付近の床面直上から、ともにほぼ完形の須恵器坏・盤（1・5）が出土している。カマド覆土中からも土師器甕の大型破片（7）が出土している。須恵器の坏、高台付坏、盤、土師器の甕は9世紀前葉～中葉頃の遺物である。所見 竪穴と周溝を拡張・更新した事例である。24・31号住居跡等と同様、ほぼ周溝部分のみを拡張している。カマドや炉は、わずかに北側へ移設されたものと推察する。旧竪穴の下端平面規模は、主軸方向2.95m、東西方向3.6mと推測され、平面は現況の新竪穴と相似形であろう。住居跡の廃絶時期は、9世紀中葉頃に求められる。



第157図 40号住居跡掘り方

表70 40号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	13.9 5.3 7.3	底部周縁弱いナデ、中央オサエ。体部下端にヘラ切りのヘラ先痕。ロクロ右回転。底部外面ヘラ記号「一」。	長石 礫多量、 チャート角丸礫少 量	普通	灰褐色	90%
2	須恵器 坏	13.8 4.6 6.9	体部下端手持ちヘラケズリ。底部回転ヘラ切り後一方向ヘラケズリ。	長石、石英、海綿 骨針	やや不 良	灰色	70%
3	須恵器 高台付坏	(10.6) 5.8 (6.1)	高台部欠損。底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。	長石、海綿骨針	普通	暗灰色	床面直上



第158図 40号住居跡出土遺物

図版番号	種別種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
4	須恵器 高台付坏	(12.5) 5.4 (7.0)	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ロク右回転。	長石礫、黒色粒	良好	灰褐色	
5	須恵器 盤	17.1 4.0 9.4	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ヘラ記号「一」。焼き歪み大。	長石礫、黒色粒	良好	灰褐色	内面重ね焼き痕 径 9.5cm
6	須恵器 盤	17.8 3.8 10.3	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ヘラ記号「エ」。	長石礫	不良	にぶい橙色	60%

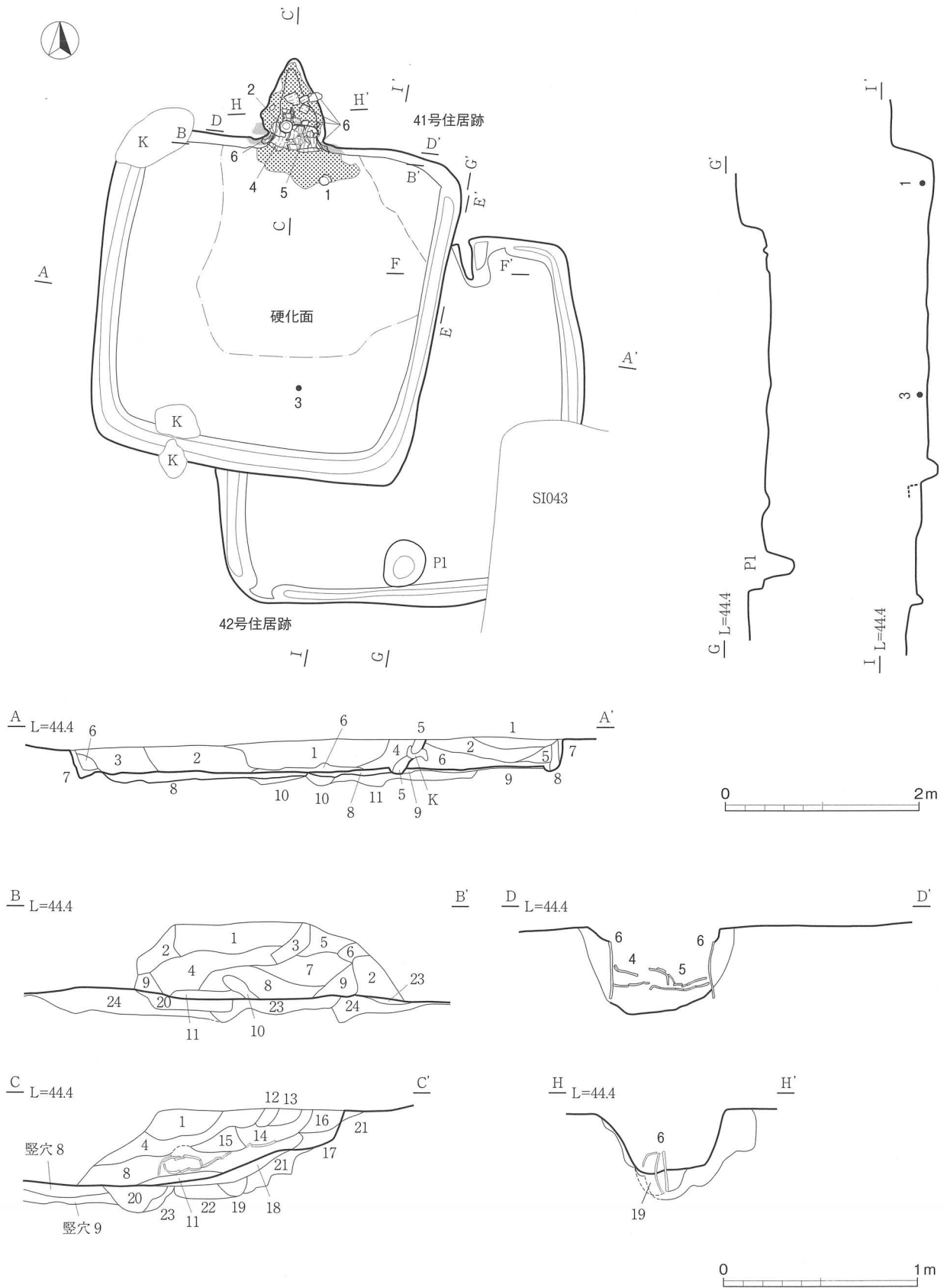
図版番号	種別	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	土師器甕	19.1 — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	にぶい橙色	
8	土師器甕	— — 7.7	胴下半部外面ミガキ。底部木葉痕。	石英、雲母	普通	橙色	
9	石製品 砥石	長10.2cm、幅5.6cm、厚6.4cm、重610g、安山岩製。					
10	石製品 砥石	長 [6.1] cm、幅4.3cm、厚3.3cm、重142.44g、凝灰岩製。					
11	土製品 紡錘車	径 (4.0) cm、厚1.8cm、孔径 (0.8) cm、重14.53g。					

41号住居跡（第159～161図）

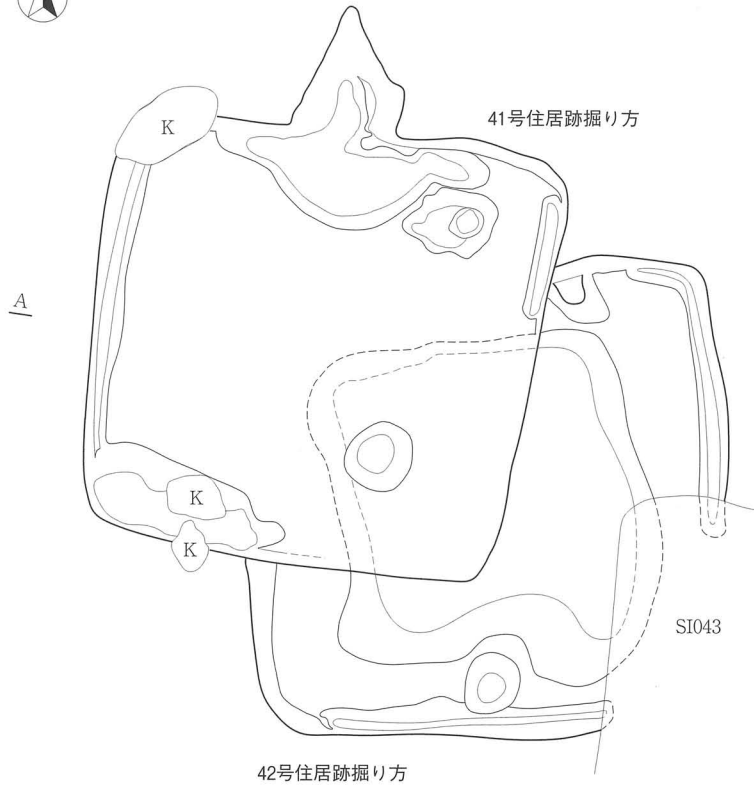
位置 A区北西端部、K3グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北（主軸）方向は3.39m～3.53m、東西方向は3.36m～3.57mを測り、平面は正方形を呈する。42号住居跡の北西部を壊している。**主軸方位** N-9°-E **壁** 壁高は25～40cmを測り、やや傾斜する。**床** 全体に平坦だが、中央部がわずかに窪む。カマドから床面中央部にかけてよく硬化している。北壁以外は周溝がめぐる。掘り方は、カマド前面が土坑状に掘り込まれており、その他は全体に浅い。**ピット** - **カマド** 北壁中央に構築され、袖は極めて短い。須恵器甕（6）を縦長破片に分割し、両袖前面に補強材として1枚ずつ貼り付け、燃焼部中央には2枚を立位埋設して支脚にしている。支脚上面には土師器甕の底部を被せている。また焚口部からは、天井補強材として両袖上に架かっていた土師器甕2個体（4・5）が、入れ子状に合わされた状態のまま落下していた。**覆土** 全体にローム粒は多いが、褐色土～黒褐色土による自然堆積状を呈している。**遺物** 懸架材となっていた土師器甕の上には完形の須恵器坏（2）が置かれていた。天井部の落下・崩壊直後に遺棄されたものと考えられる。煙道部からは、袖補強材など同一個体の須恵器破片が出土している。カマド前面の堅穴覆土下層からは1の須恵器坏が出土している。**所見** カマド袖の補強材や支脚に、分割した須恵器甕を再利用している状況は、19号住居跡（10世紀前葉）の構造と非常に似ている。棚状施設は確認できなかったが、支脚の位置や粘土分布範囲から類推すれば、堅穴北壁の外側にも屋内空間が存在したと思われる。住居跡の廃絶時期は、出土遺物から見て9世紀後葉頃と考えられる。

42号住居跡（第159・160図）

位置 A区北西端、K3～K4グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北（主軸）方向は3.82m、東西方向は3.86mを測り、平面は不整隅丸正方形と推測する。41・43号住居跡によって、大部分を壊されている。**主軸方位** N-3°-W **壁** 壁高は7～27cmを測り、わずかに傾斜する。**床** 全体に平坦で、南西隅以外はよく硬化する。残存範囲内は周溝が全周する。掘り方は、堅穴中央部が方形状に深く掘り込まれている。**ピット** 1箇所。P1は出入口ピットであろう。**カマド** 右袖しか残存していない。北壁中央やや東寄りに構築され、カマド内面の被熱は弱い。**覆土** 3・6層はしまりが強く、ロームブロック・ローム粒も目立ち、人為埋没の可能性がある。8層は土壌化した壁体と推測する。**遺物** 覆土中から須恵器坏など少量の遺物が出土している。**所見** 住居跡の廃絶時期は、出土遺物から見て、8世紀後葉頃と考えられる。



第 159 図 41・42号住居跡



41号住居跡土層

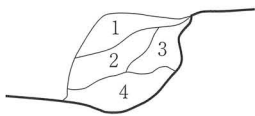
- 1 暗褐色 ロームブロック少量、ローム粒多量、焼土微量、炭化物微量、締り強い
- 2 暗褐色 ロームブロック多量、ローム粒多量、締り強い、粘性弱い
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、ローム粒多量、締り強い
- 4 褐色 ロームブロック少量、ローム粒多量、締り強い、
- 5 暗褐色 ローム粒少量、締り弱い
- 6 黒褐色 ローム粒少量、締り弱い
- 7 暗褐色 ロームブロック多量、ローム粒少量、締り弱い
- 8 褐～明褐色 ロームブロック多量、締り非常に強い、粘性弱い

カマド

- 1 暗褐色 ローム粒少量、焼土微量、炭化物少量、締り強い
- 2 褐灰色 焼土微量、締り強い、粘性弱い
- 3 褐色 ローム粒少量、締り弱い
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、ローム粒少量、焼土微量、締り弱い
- 5 褐色 ロームブロック少量、ローム粒多量、締り弱い
- 6 暗褐色 ローム粒少量、締り弱い
- 7 褐色 ローム粒多量、焼土微量、締り強い
- 8 極暗褐色 ロームブロック少量、ローム粒少量、焼土微量、炭化物微量、締り弱い
- 9 黒褐色 締り弱い、粘性強い
- 10 褐灰色 粘土主体、締り非常に弱い、粘性強い
- 11 褐灰色 ローム粒少量、焼土少量、炭化物微量、締り弱い、粘性強い
- 12 明褐灰色 焼土少量、締り非常に弱い、粘性強い
- 13 灰褐色 焼土多量、締り弱い、粘性強い
- 14 暗褐色 ローム粒少量、焼土多量、締り弱い、粘性弱い
- 15 黒褐色 締り非常に弱い
- 16 灰褐色 焼土少量、締り弱い、粘性弱い
- 17 褐灰色 ロームブロック少量、締り非弱い、粘性強い
- 18 黒褐色 締り非弱い、粘性弱い
- 19 黒褐色 焼土少量、締り弱い
- 20 黒褐色 ロームブロック少量、ローム粒少量、焼土少量、炭化物微量、締り弱い
- 21 褐色 ロームブロック少量、焼土少量、灰微量、締り弱い
- 22 赤褐色 ロームブロック多量、焼土多量、締り強い
- 23 暗褐色 ロームブロック少量、ローム粒多量、締り有り
- 24 黄褐色 ロームブロック多量、締り強い粘性弱い

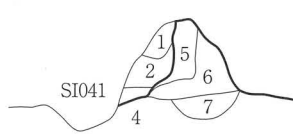


E L=44.4



E'

F L=44.4



F'

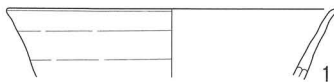


42号住居跡土層

- 1 暗褐色 ローム粒少量、炭化物微量、締り弱い、粘性なし
- 2 黒褐色 ローム粒多量、焼土微量、炭化物微量、締り強い
- 3 褐色 ロームブロック少量、ローム粒少量、締り強い
- 4 黒褐色 締り弱い
- 5 暗褐色 ローム粒少量、締り弱い
- 6 褐色 ロームブロック少量、ローム粒多量、焼土少量、炭化物微量、締り強い
- 7 明褐色 ローム粒主体、締り弱い
- 8 黒褐色 締り非弱い
- 9 明褐色 ロームブロック多量、締り非強い、粘性弱い
- 10 暗～黒褐色 ロームブロック少量、ローム粒多量、締り強い、粘性弱い
- 11 褐色 ロームブロック多量、締り強い、粘性弱い

カマド

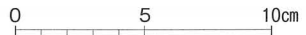
- 1 暗褐色 ローム粒多量、焼土少量、締り有り、粘性なし
- 2 黒褐色 ローム粒多量、焼土多量、締り有り、粘性なし
- 3 褐色 ロームブロック多量、粘土多量、締り有り、粘性なし
- 4 黒褐色 ローム粒多量、焼土多量、締り非常に弱い、粘性なし
- 5 暗赤褐色 焼土多量、粘土少量、締り強い、粘性なし
- 6 褐灰色 粘土主体、締り強い、粘性弱い
- 7 暗褐色 ロームブロック多量、締り弱い、粘性なし



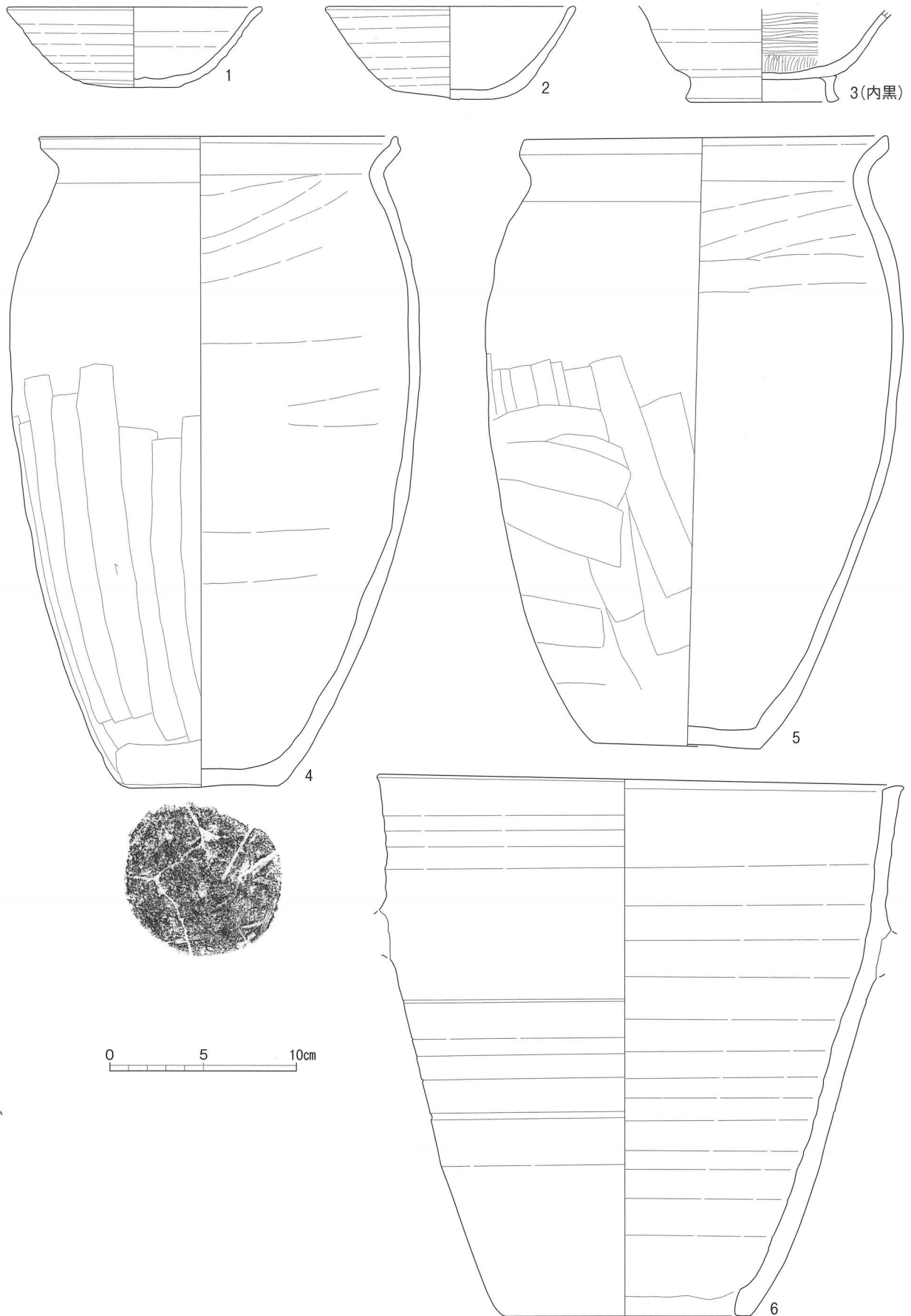
1



2



第 160 図 41・42号住居跡、42号住居跡出土遺物



第161図 41号住居跡出土遺物

表 71 41号住居跡出土遺物観察表

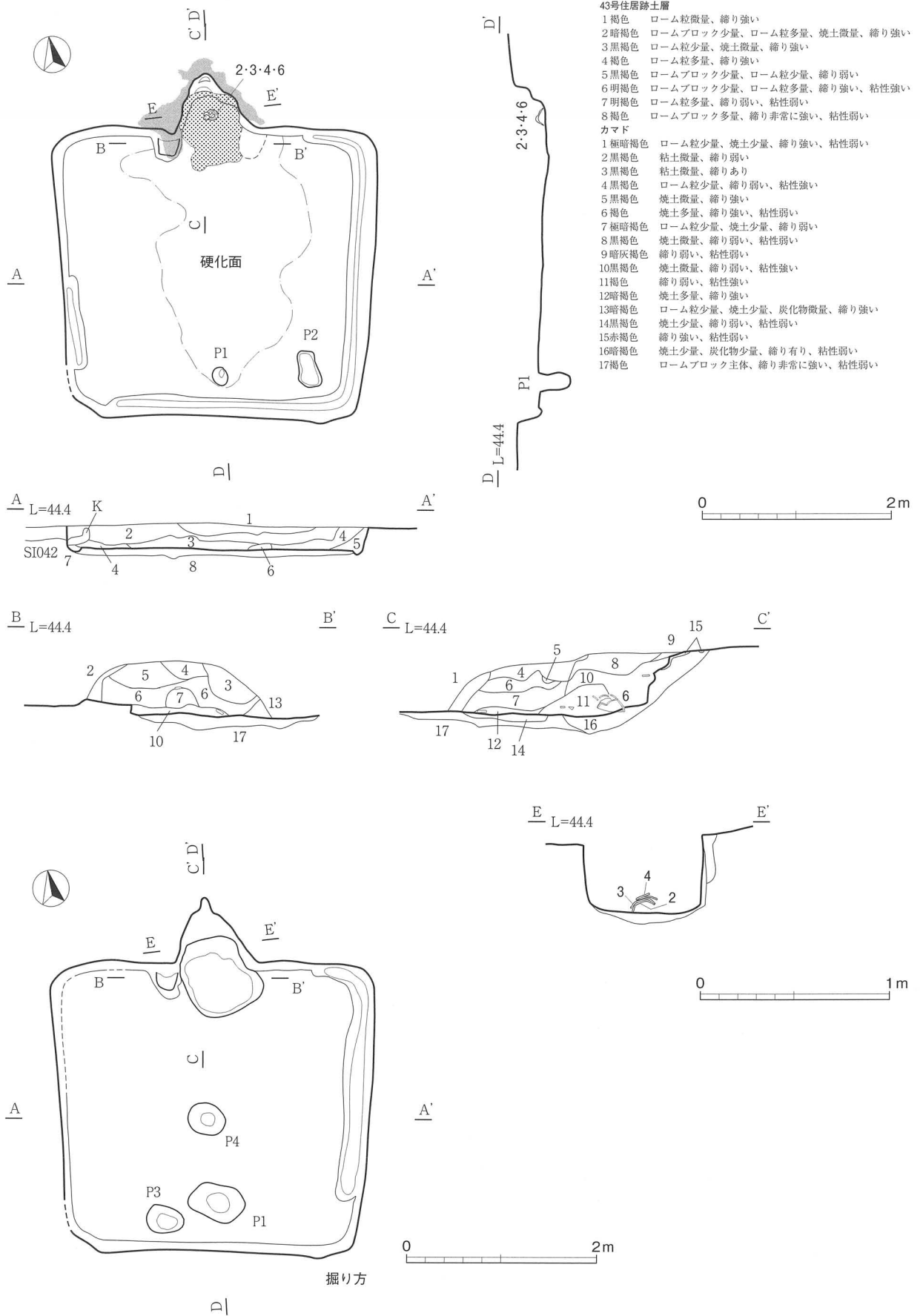
図版番号	種別	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(13.5) 4.4 5.3	底部回転ヘラ切り後一方向ヘラケズリ・オサエ。ロクロ右回転。	石英、海綿骨針	不良	浅黄橙色	60%
2	須恵器 坏	13.4 5.0 6.0	底部回転ヘラ切り離し後弱いヘラナデ。	石英、海綿骨針	不良	にぶい褐色	完形 カマド
3	土師器 高台付坏	— — 8.2	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。内面黒色処理、ミガキ。ロクロ右回転。	長石、石英	普通	灰褐色	
4	土師器 甕	19.0 35.0 8.7	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部外面ナデ、下半部縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ。	バミス粒・礫多量	普通	にぶい褐色	90% カマド
5	土師器 甕	19.2 32.8 8.8	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部外面ナデ、下半部縦後横方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ。底部オサエ。	バミス粒・礫多量	普通	にぶい褐色	90% カマド
6	須恵器 甕	28.1 28.7 13.1	体部内外面ロクロナデ、底部2孔式。	長石、海綿骨針	不良	灰白色	カマド

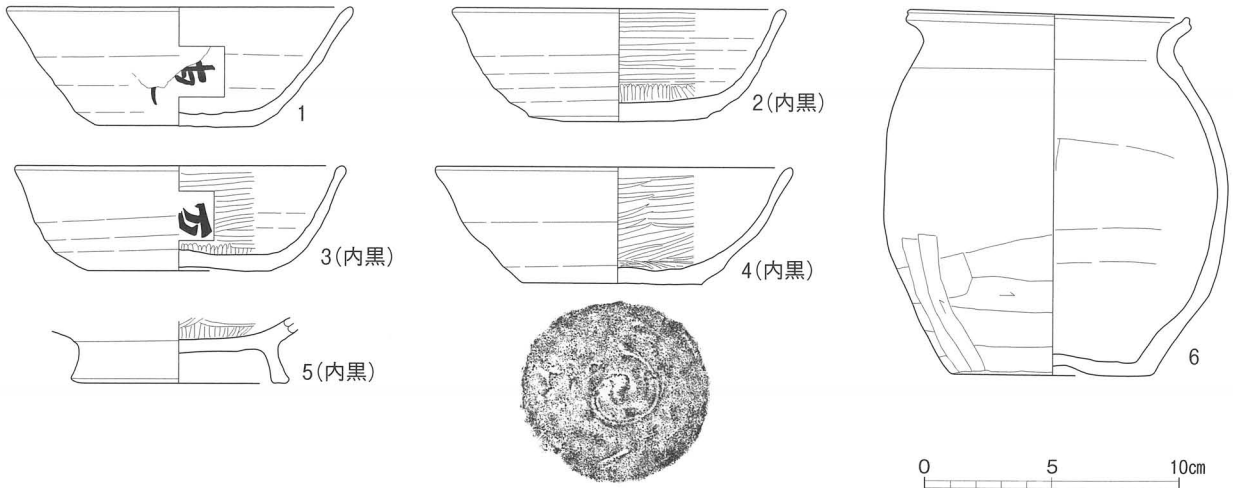
表 72 42号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(13.0) — —	口縁部片。ロクロ目弱い。断面内面酸化焰、表面還元焰。ロクロ右回転。	白色微粒、海綿骨針微量	普通	灰色	
2	須恵器 坏	13.6 4.2 9.0	底部回転ヘラ切り離し後一方向ヘラケズリ。体部外面メリハリのあるロクロ目、内面のロクロ目は弱い。	石英、微砂粒、海綿骨針	普通	橙色	酸化焰焼成 50%

43号住居跡（第162・163図）

位置 A区北端部付近、K3～K4グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は3.14m、東西方向は北側3.44m、南側3.10mを測り、平面は逆台形に近い方形を呈する。42号住居跡の南東部を壊している。主軸方位 N-10°-E 壁 壁高は25cmを測り、わずかに傾斜する。床 全体に平坦で、カマドからP1にかけて帯状に硬化する。周溝は、北西隅を除いて廻っている。掘り方は全体に浅い。ピット P1が出入口ピット。P2は深さ5cmと浅い。P3・4（深さ28cm・15cm）は掘り方で確認したが、用途不明である。カマド 北壁中央に構築され、左袖の基部のみ残存する。燃焼部中央では、土師器坏・須恵器坏や土師器甕底部など計5点を逆位に積み重ねることで支脚としており、17号住居跡のカマド支脚と似ている。順序は下から2→3→4→6の底部、となる。カマドの掘り方の外側にも薄い粘土の貼りつきを検出している。覆土 全体に自然堆積であるが、4層はローム粒が多く、人為的埋没や周堤の崩れた土が堆積した可能性がある。遺物 P2からは土師器甕の破片が出土している。カマド覆土中から焚口部周辺の床面直上にかけて、6の土師器甕の破片が散乱して出土した。本来は、この甕自体が支脚や補強材として使用されていたのであろう。カマド支脚に使われている土師器内黒坏や土師器小型甕は9世紀後葉頃のものである。所見 住居跡の廃絶時期は、9世紀後葉頃と考えられる。支脚の位置と粘土分布の広がり、堅穴北壁外側にも屋内空間が存在していたことを示唆している。





第 163 図 43号住居跡出土遺物

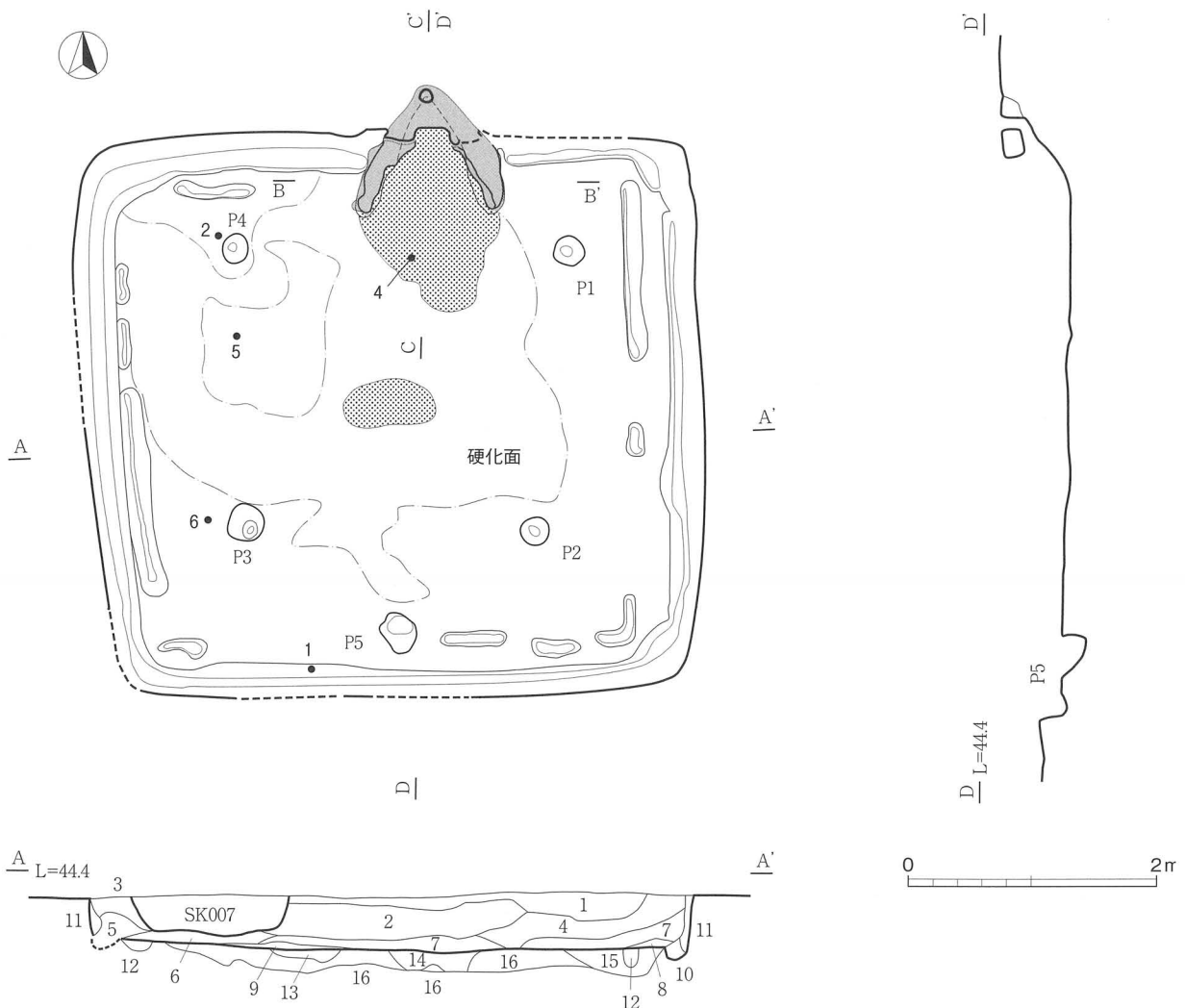
表 73 43号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(13.5) 4.7 5.7	底部回転ヘラ切り離し、無調整、ロクロ右回転。体部側面墨書文字「□」。	長石、石英	不良	灰白色	50%
2	土師器 坏	12.8 4.6 7.1	底部回転ヘラ切り離し、後ヘラナデ。体部外面ロクロナデ、内底面一方向、体部内面ヨコ方向ミガキ。内面黒色処理。	石英、微砂粒	良好	にぶい橙色	完形 カマド
3	土師器 坏	13.0 4.2 7.1	底部回転ヘラ切り離し、無調整。体部外面ロクロナデ、内底面一方向、体部内面ヨコ方向ミガキ。内面黒色処理。体部側面墨書「□万?」。	石英、長石、角閃石	良好	にぶい橙色	完形 カマド
4	土師器 坏	(13.9) 4.6 7.0	底部回転ヘラ切り離し、無調整。内底面螺旋・放射状ミガキ。内面黒色処理。	長石、石英	良好	にぶい橙色	50% カマド
5	土師器 高台付坏	- - 8.4	底部回転ヘラケズリ、ロクロ右回転。底部2方向ヘラケズリ。内面黒色処理・ミガキ。	長石、石英、角閃石	良好	にぶい褐色	
6	土師器 小型甕	(11.0) (14.2) 7.9	口縁部上方に摘まみ上げる。胴上半部ナデ、下半部ヨコ方向ヘラケズリ後、縦方向ヘラケズリ。底部外面ナデ調整で中央部が窪む。	微砂粒、チャート礫	普通	にぶい褐色	30% カマド

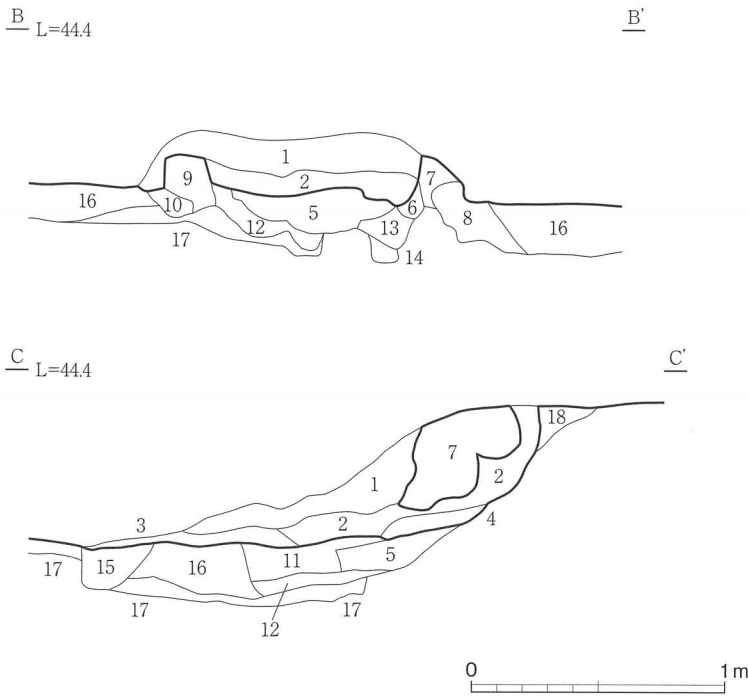
46号住居跡（第164～166図）

位置 A区北部、K4～L4グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北（主軸）方向は4.5m、東西方向は4.88mを測り、平面形はわずかに横長の長方形である。時期不明の6～8・10・38・40号土坑に切られる。**主軸方位** 真北を指す。**壁** 35～43cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。**床** やや凹凸があり、床面中央部と北西側が硬化する。周溝は内外2条めぐり、内側が古い。壁際の新周溝は全周し、旧周溝は断続的である。掘り方は全体的にやや深く、旧周溝と合致するように、一回り小さい旧竪穴を確認している。中央部にはL字状の中島が掘り残されている。**ピット** P1・2・3・4（各深度61cm・63cm・30cm・75cm）は新支柱穴、P6・7・8（掘り方面からの各深度54cm・34cm・14cm）は古い支柱穴と考えられる。P1・2・4は軟弱な柱痕部分のみを掘削し、P3は直径24cmの柱痕を断面で確認した。古い支柱穴はロームブロックを多量に含む土で埋め戻されていた。P5（深さ33cm）は新旧共通の出入口ピットであろう。P9・10・11（各深度18cm・19cm・16cm）の性格は判断が難しいが、支柱穴の可能性が残る。カ

マド・炉 北壁中央やや東寄りに構築されている。両袖はアーチ状に湾曲し、煙道部の天井が遺存しており、残存状態は比較的良好である。焼土と灰を含む薄い層がカマド前面に広く散布していた。ローム層の地山を掘り残してカマド両袖の基部としている。また、床面中央にはわずかに窪んだ被熱面がある。焼け込みが著しく、炉と判断する。 覆土 1層と2層は調査前の覆土上面において明瞭に分離できた。2・4層はローム粒が多く含まれ、人為埋没の可能性がある。 遺物 1・2の須恵器坏は床面から、4～6の土師器甕は覆土中～下層から出土した。手捏土器も出土している。 所見 住居跡の廃絶時期は、8世紀前葉頃である。本住居跡は、柱穴配置や周溝、掘り方の状況から見て、竪穴の拡張・更新が明瞭である。主柱穴配置は（1期）P8・6・7・4 →（2期）P1～4 という変遷と考えた。ただし、竪穴の拡張に対して、主柱穴配置はわずかに縮小しているようである。古い竪穴の下端平面規模は南北3.65m × 東西4.0mである。主軸方位と平面形は新しい竪穴と同様である。また、P9～11の配置は9世紀前葉の47・75号住居跡と類似している。掘り方平面図に入れたが、本来は床面で検出できていた可能性が高いため、3期目の主柱穴と捉えることも可能である。

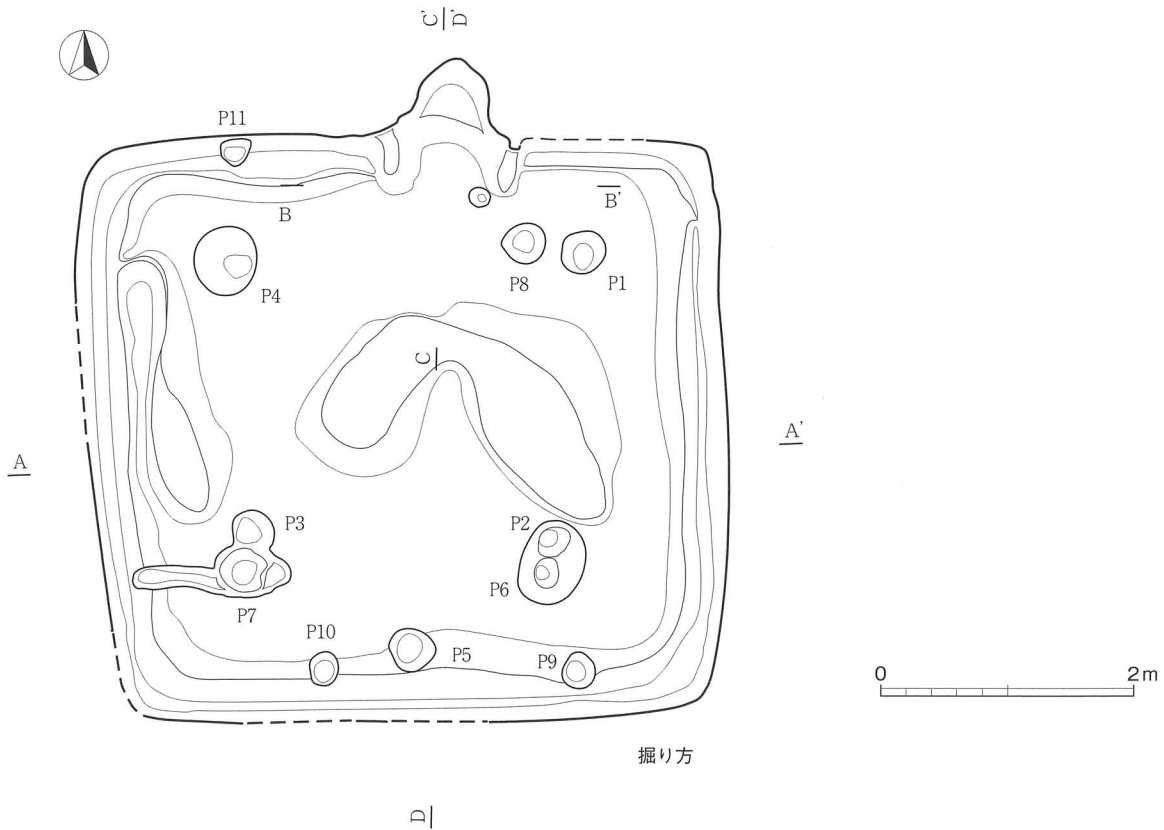


第164図 46号住居跡

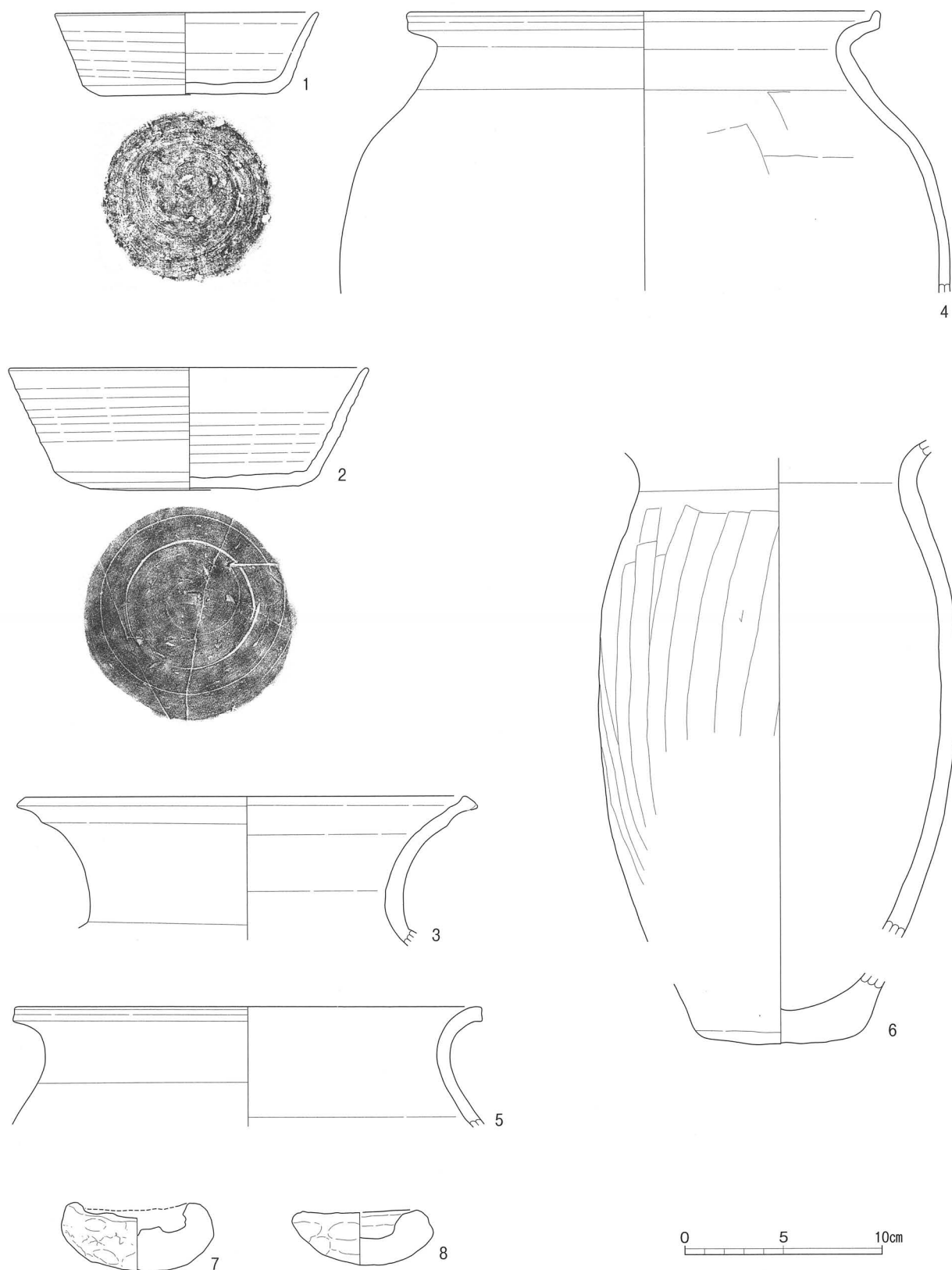


46号住居跡土層

- | | |
|---------|----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒少量、締り弱い |
| 2 明褐色 | ローム粒微量、ロームブロック少量、締り有り |
| 3 極暗褐色 | ローム粒少量、締り弱い |
| 4 褐色 | ローム粒多量、ロームブロック少量、締り有り |
| 5 黒褐色 | ローム粒微量、ロームブロック少量、締り弱い |
| 6 極暗褐色 | ローム粒多量、締り有り |
| 7 褐灰色 | ローム粒多量、ロームブロック少量、締り有り |
| 8 褐色 | ローム粒少量、ロームブロック少量、締り弱い |
| 9 明褐色 | ローム粒少量、締り有り、粘性弱い |
| 10 暗褐色 | ローム粒多量、ロームブロック少量、締り弱い |
| 11 明褐色 | ローム粒多量、ロームブロック少量、締り弱い |
| 12 黒褐色 | ローム粒少量、ロームブロック少量、締り弱い |
| 13 暗褐色 | ローム粒多量、ロームブロック少量、締り有り、粘性弱い |
| 14 暗褐色 | ローム粒多量、ロームブロック多量、締り有り |
| 15 暗褐色 | ローム粒多量、ロームブロック多量、締り有り |
| 16 明褐色 | ロームブロック主体、締り有り、粘性弱い |
| カマド | |
| 1 明褐色 | 締り弱い |
| 2 褐色 | ローム粒微量、締り有り |
| 3 暗褐色 | ローム粒少量、ロームブロック微量、締り有り |
| 4 赤褐色 | ローム粒少量、ロームブロック微量、締り有り |
| 5 明赤褐色 | ローム粒多量、ロームブロック少量、粘土微量、締り有り |
| 6 明褐灰色 | ローム粒多量、ロームブロック少量、粘土微量、締り有り |
| 7 灰白色 | ローム粒少量、ロームブロック微量、締り弱い、粘性弱い |
| 8 暗褐色 | ローム粒少量、締り弱い、粘性弱い |
| 9 褐灰色 | ローム粒微量、締り弱い、粘性弱い |
| 10 灰褐色 | ローム粒多量、ロームブロック多量、締り弱い |
| 11 灰褐色 | ローム粒多量、ロームブロック少量、締り有り |
| 12 黒褐色 | ローム粒少量、ロームブロック微量、締り弱い |
| 13 灰黄褐色 | ローム粒多量、焼土少量、粘土少量、締り有り |
| 14 明褐色 | ロームブロック多量、締り弱い、粘性弱い |
| 15 黒褐色 | ロームブロック多量、ローム粒多量、締り有り、貼り床層 |
| 16 暗褐色 | ロームブロック多量、ローム粒多量、締り有り |
| 17 明褐色 | ロームブロック主体、締り有り、粘性弱い |
| 18 暗褐色 | 粘土主体、焼土多量、締り有り、煙道掘り方 |



第 165 図 46号住居跡カマド・掘り方



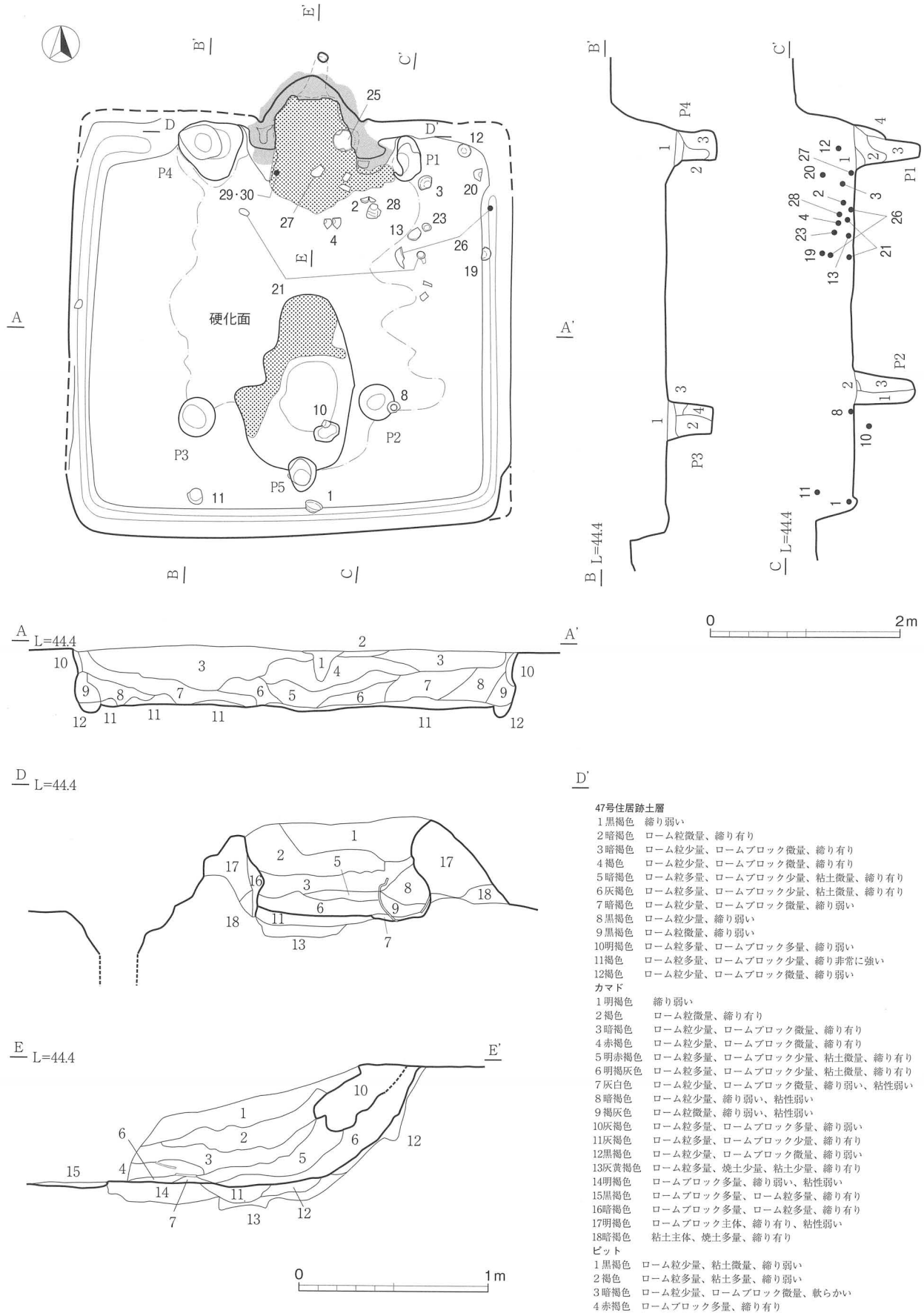
第166図 46号住居跡出土遺物

表 74 46号住居跡出土遺物観察表

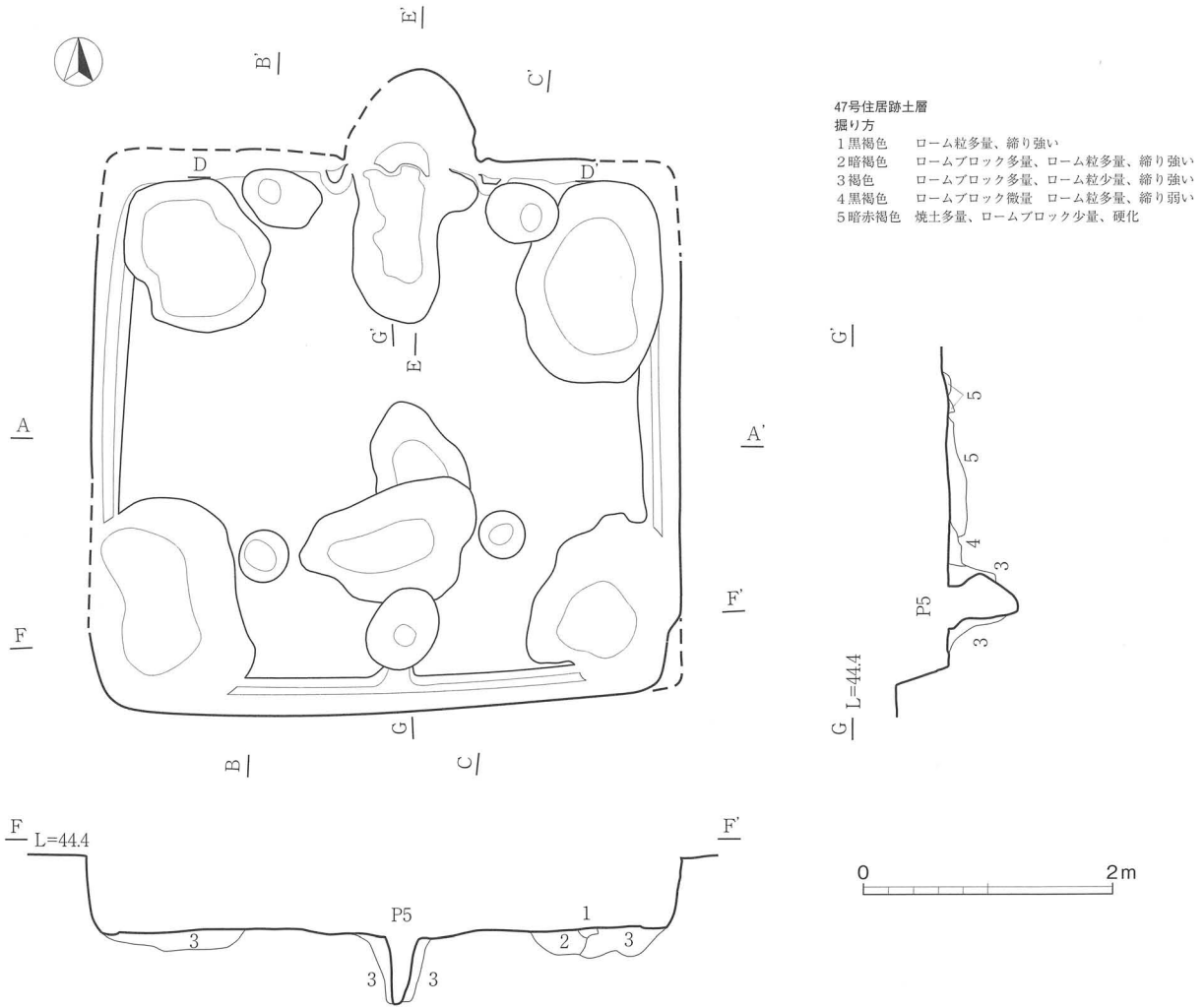
図版 番号	種 器 種	口 径 器 高 底 径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	13.8 4.1 9.0	底部回転ヘラケズリ、幅の狭い2次底部面を持つ。内面全体に擦り減りによる平滑化した使用痕あり。ロクロ左回転。	最大8mm大の白色礫、白色粒、黒色粒、海綿骨針微量	良好	暗灰色	90%
2	須恵器 坏	18.0 6.1 10.2	底部2段の同心円状の回転ヘラケズリ、2次底部面も回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	白色微粒、長さの短い海綿骨針微量	普通	灰白色	70%
3	須恵器 甕	(22.1) — —	口縁部破片。内外面摩耗。口縁部は平坦で、外面端部直下に弱い稜を持つ。	石英、雲母	普通	暗灰色	
4	土師器 甕	(23.5) — —	口縁部片。口縁部を上方に摘み上げる。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英、雲母	普通	にぶい橙色	
5	土師器 甕	(23.6) — —	口縁部片。口縁部に平坦面をつくる。口縁部内外面ヨコナデ。	長石、石英、雲母	良好	にぶい褐色	
6	土師器 甕	— — 8.0	胴部外面縦方向の丁寧なヘラケズリ。内面ナデ。底部外面摩耗、内底面ナデ。	長石、石英主体の細砂粒多量	普通	暗褐色	
7	手捏土器	6.7 3.4 —	口縁部片。口縁部を短く上方に摘み上げる。	長石礫、海綿骨針微量	普通	にぶい橙色	
8	手捏土器	(6.0) 2.7 —	厚手で、器高が低い坩堝状の器形。	微砂粒	普通	にぶい橙色	50%

47号住居跡（第167～171図）

位置 A区北部、L3～L4グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北（主軸）方向は4.36m～4.67m、東西方向は4.67mを測り、平面形は正方形である。13・14・21・23・29号土坑によって部分的に壊されている。48号住居跡北壁と103号土坑西端を、本住居跡が壊している。**主軸方位** 真北を指す。**壁** 壁高は40～60cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。**床** 中央部から壁際に向かってわずかに傾斜し、やや凹凸がある。支柱穴に囲まれた竪穴中央部とカマドから出入口部にかけての範囲がよく硬化している。周溝はほぼ全周する。掘り方は、竪穴四隅と出入口部に不整形な床下土坑がある。**ピット** P1～4が支柱穴、P5が出入口ピットであろう。P1・2はカマド脇の北壁直下に掘り込まれているため、カマド両袖は柱穴の掘り方上に構築されている。各柱穴では、直径20cm前後の軟弱な柱痕と、ロームブロックを多量に含んだ根固め土を検出している。**カマド・炉** 北壁中央に構築され、煙道部の天井が良好に残存する。右袖の内側からは、底部～胴下部を欠損した土師器甕（25）が逆位で出土した。覆土中には同一個体の破片が散見され、本来は懸け甕であったと推測する。床面中央部からP2・3・5の間にかけては、不整長楕円形の炉がある。浅い皿状に掘り込まれ、被熱面は北西に偏る。炉の覆土は埋め戻しの可能性が高い。炉の下部は床下土坑となっていた。**覆土** 5・6層は粘土のブロックが斑状に含まれ、4～6層の堆積がやや乱れることから、人為的埋没と推測する。炭化材等は検出されなかったため、焼失住居とは断定できない。床上の11層は非常に強くしまり、堆積後に踏み固められた可能性がある。**遺物** 竪穴北東隅の覆土上層～下層から集中して出土している。また、南周溝際の9層からは完形の須恵器坏（1）が、北東隅周溝際の9層からは完形の須恵器盤（12）と内黒土師器坏（19）が、P2脇の床面からは須恵器坏（9）が逆位で、それぞれ出土している。カマド覆土中からは、鉄製品が2点出土しており（29・30）、同一個体の可能性が高い。**所見** 支柱穴の配置形式が特徴的である。住居跡の廃絶時期は、9世紀前葉頃に求められる。



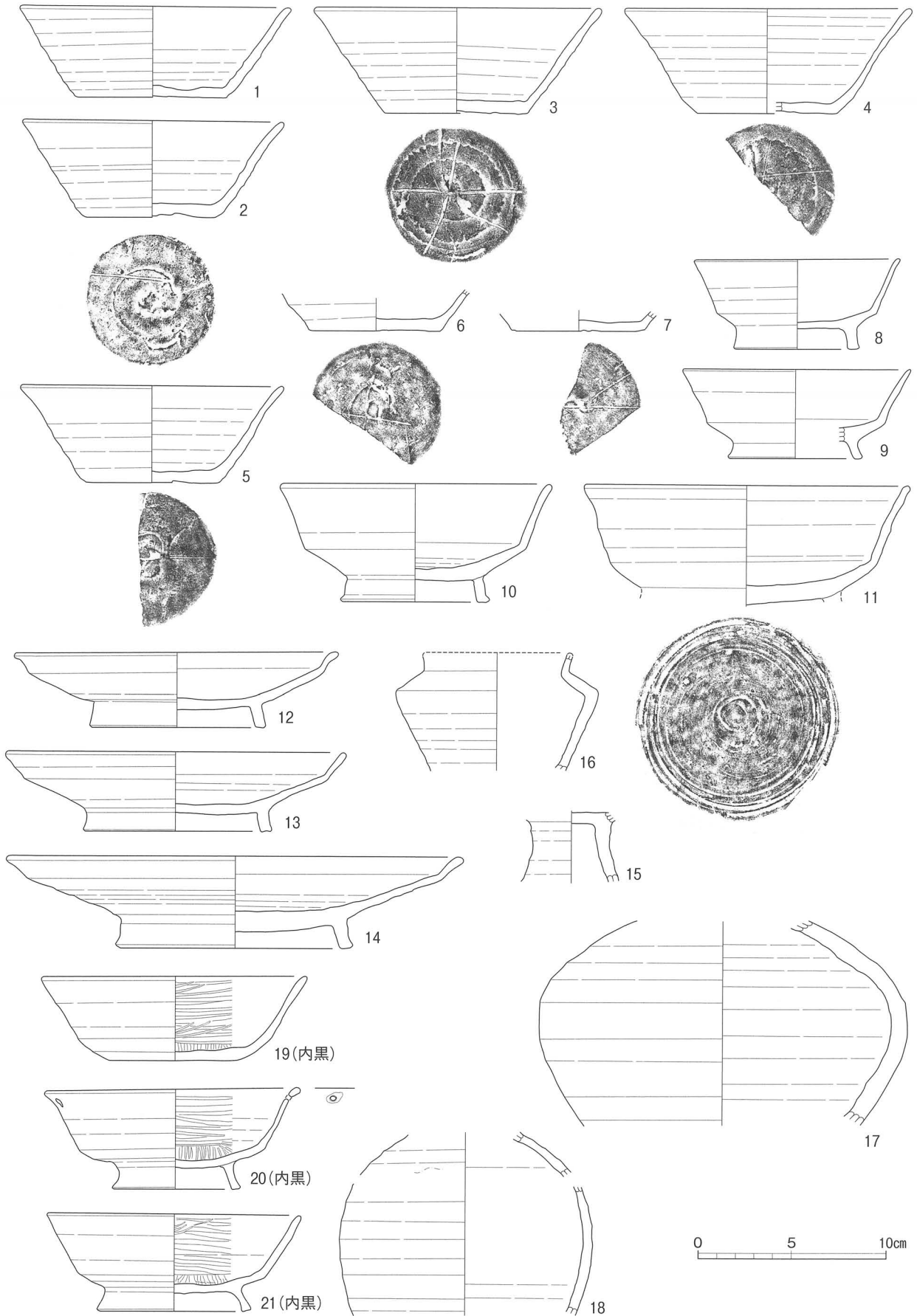
第167図 47号住居跡



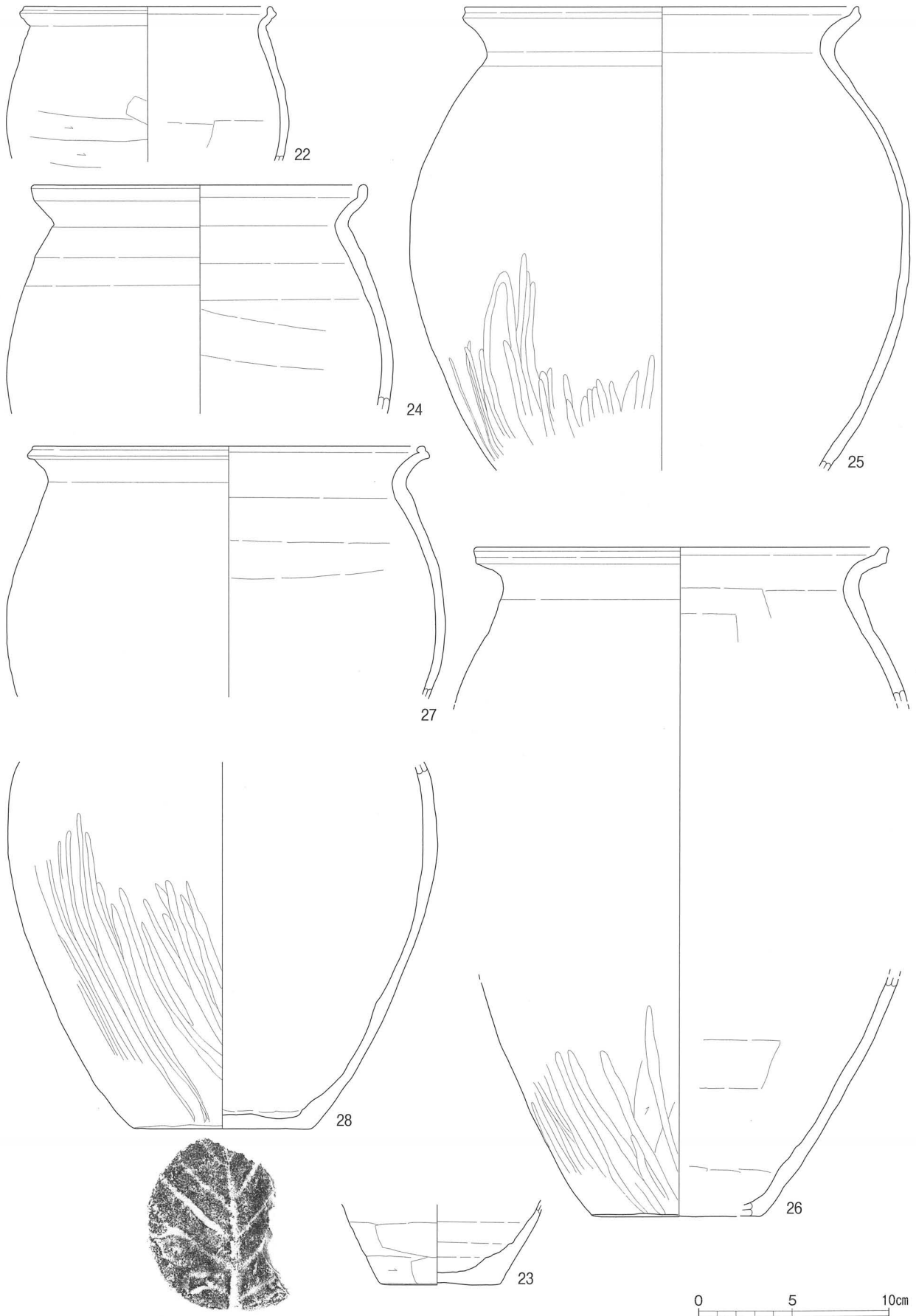
第 168 図 47号住居跡掘り方

表 75 47号住居跡出土遺物観察表

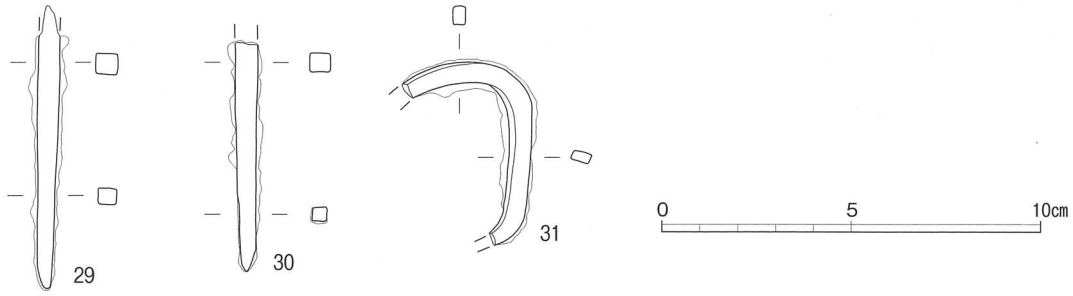
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	14.2 4.9 7.9	底部回転切り離し無調整。ロクロ右回転。	長石礫、黒色粒、 チャート小礫	普通	灰色	完形
2	須恵器 坏	13.6 5.3 7.0	底部回転切り離し無調整。ロクロ右回転。ヘラ記号「一」。	長石、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	70%
3	須恵器 坏	15.2 5.7 7.6	底部回転切り離し無調整。ロクロ右回転。ヘラ記号「大」。	長石、チャート礫	不良	褐灰色	60%
4	須恵器 坏	15.2 5.6 7.4	底部回転切り離し無調整。ロクロ右回転。ヘラ記号。	長石、石英、海綿 骨針	不良	灰白色	
5	須恵器 坏	14.0 5.3 7.0	底部回転切り離し後オサエ。ロクロ右回転。ヘラ記号「一」。	長石礫、黒色鉄分 粒、海綿骨針	普通	灰色	
6	須恵器 坏	- - 7.2	底部ヘラ切り離し後オサエ。ヘラ記号。	長石礫、黒色鉄分 粒	普通	灰色	



第169図 47号住居跡出土遺物①



第170図 47号住居跡出土遺物②



第171図 47号住居跡出土遺物③

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	須恵器 坏	— — 7.0	底部ヘラ切り離し後一方向ヘラケズリ。ヘラ記号。	長石、黑色鉄分粒	普通	灰色	
8	須恵器 高台付坏	10.9 4.9 6.7	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、チャート、 海綿骨針	良好	褐灰色	80%
9	須恵器 高台付坏	12.1 4.8 7.2	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、黑色鉄分粒	良好	褐灰色	
10	須恵器 高台付坏	14.4 6.4 8.0	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	60%
11	須恵器 高台付坏	17.2 — —	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。	長石礫、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	
12	須恵器 盤	17.3 4.1 9.3	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石礫、海綿骨針	普通	褐灰色	完形
13	須恵器 盤	18.2 4.3 10.0	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	50%
14	須恵器 盤	24.4 5.0 12.6	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート、 海綿骨針	良好	暗灰色	30%
15	須恵器 高坏	— — —	高坏脚基部片。	長石、石英、海綿 骨針	良好	灰色	
16	須恵器 小型壺	(7.8) — —	肩の張った、小型の短頸壺。	長石、黑色鉄分粒	良好	灰褐色	
17	須恵器 長頸瓶	— — —	肩～胴部片。	長石、海綿骨針	普通	灰色	
18	灰釉陶器 長頸瓶	— — —	体部はやや小振で肩が張らない形状。	精良	良好	灰オリーブ色	
19	土師器 坏	14.1 4.6 6.8	外面体部下端～底部回転ヘラケズリ、内面黒色処理・ミ ガキ。ロクロ右回転。	石英、チャート、 海綿骨針	良好	にぶい橙色	60%
20	土師器 高台付坏	13.6 5.5 6.8	体部下端～底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。内面黒 色処理・ミガキ。ロクロ右回転。口唇部に焼成後穿孔径 2mm強、3か所。	石英、海綿骨針	良好	にぶい橙色	60%
21	土師器 高台付坏	13.6 5.2 8.2	体部下端～底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。内面黒 色処理・ミガキ。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート、 海綿骨針	良好	にぶい橙色	60%
22	土師器 甕	13.0 — —	胴上半部摩耗。下半部横方向のヘラケズリ。内面ヘラナデ。	石英	普通	にぶい褐色	
23	土師器 甕	— — 6.4	胴部下端横方向ヘラケズリ、底部オサエ。	石英、長石	良好	にぶい褐色	

第IV章 A区の遺構と遺物

図版番号	種別 器種	口径器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考	
24	土師器 甕	14.0 — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英、金雲母	良好	にぶい褐色		
25	土師器 甕	21.1 — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部外面ナデ、下半部ミガキ。	長石、石英	普通	にぶい橙色	カマド	
26	土師器 甕	(22.0) — (8.9)	口縁部内外面ヨコナデ。胴下半部ミガキ。	長石、石英	良好	にぶい橙色		
27	土師器 甕	21.4 — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	にぶい橙色		
28	土師器 甕	— — 9.6	胴下半部ミガキ。底部木葉痕。	長石、石英	普通	にぶい橙色		
29	鉄製品 釘?	長 [7.5] cm、幅 0.5cm、厚 0.53cm、重 7.73g。						30と同一個体カ
30	鉄製品 釘?	長 [6.0] cm、幅 0.53cm、厚 0.5cm、重 5.4g。						29と同一個体カ
31	鉄製品 不明	長 [5.0] cm、幅 0.5cm、厚 0.3cm、重 8.49g。						

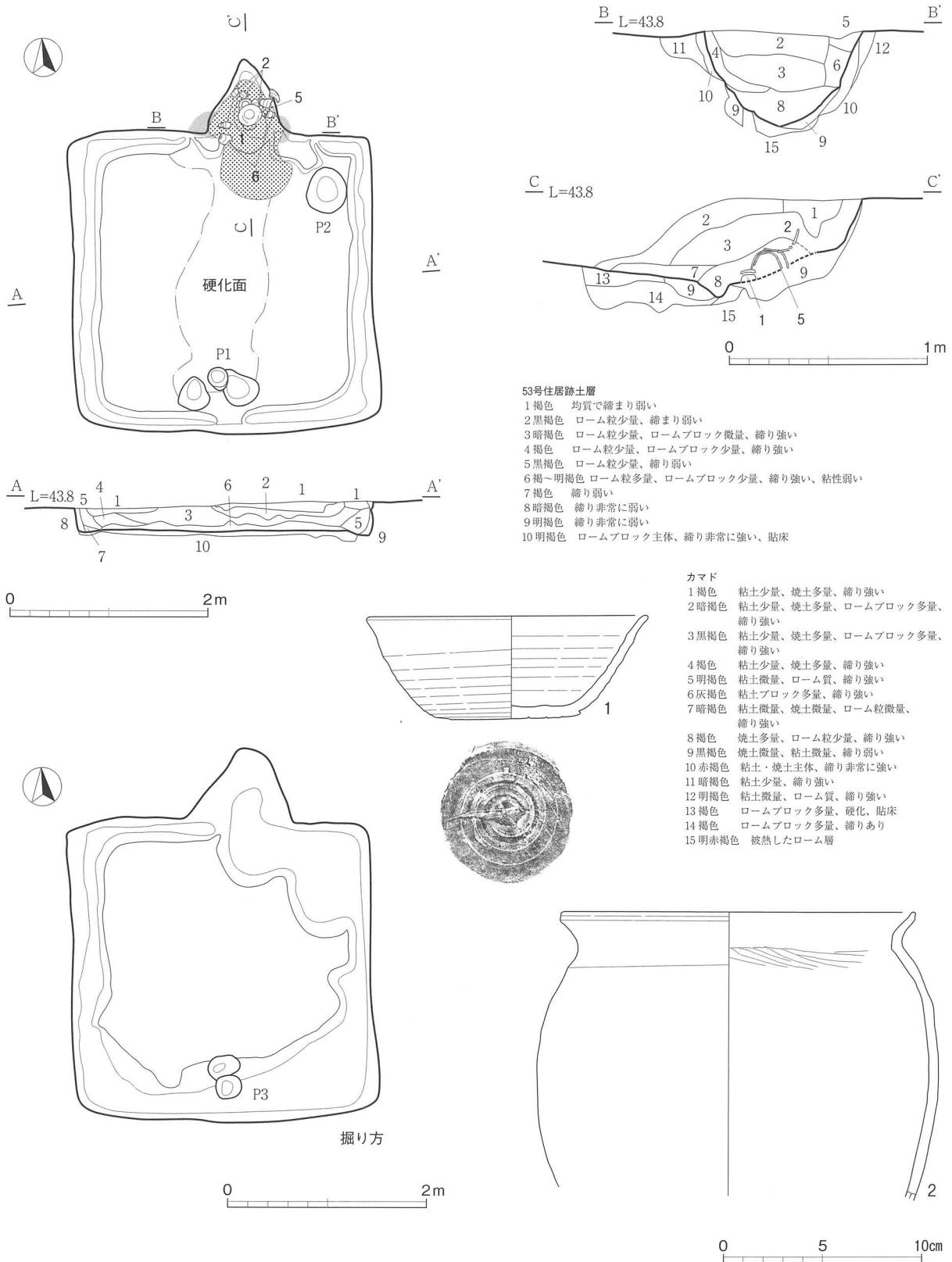
53号住居跡（第172・173図）

位置 A区北部、L5グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は3.12m、東西方向は3.11mを測り、平面形は不整隅丸正方形である。主軸方位 N-3°-E 壁 壁高は22～31cmを測り、わずかに傾斜する。床 ほぼ平坦で、カマドからP1にかけて帯状に硬化し、周溝は全周する。P1の両脇は浅く窪む。掘り方は全体に浅いが、周溝に合わせて壁際が溝状に掘り込まれる。ピット P1は出入口ピットであろう。P3は掘り方で確認し、これも出入口ピットの可能性がある。P2はいわゆる貯蔵穴であろう。カマド 北壁中央やや東寄りに構築される。右袖はわずかに張り出すが、左袖は残っていない。両袖ともに基部の高まりを確認した。焚口部はやや広い。カマド中央には、完形の須恵器坏（1）の上に土師器甕底部（5）を入れ子状に逆位に積み重ねた支脚が設置されていた。これらの上部からは、2と6の土師器甕が破碎して出土した。覆土 上層は自然堆積状を呈するが、4～6層はローム粒・ブロックを斑状にやや多く

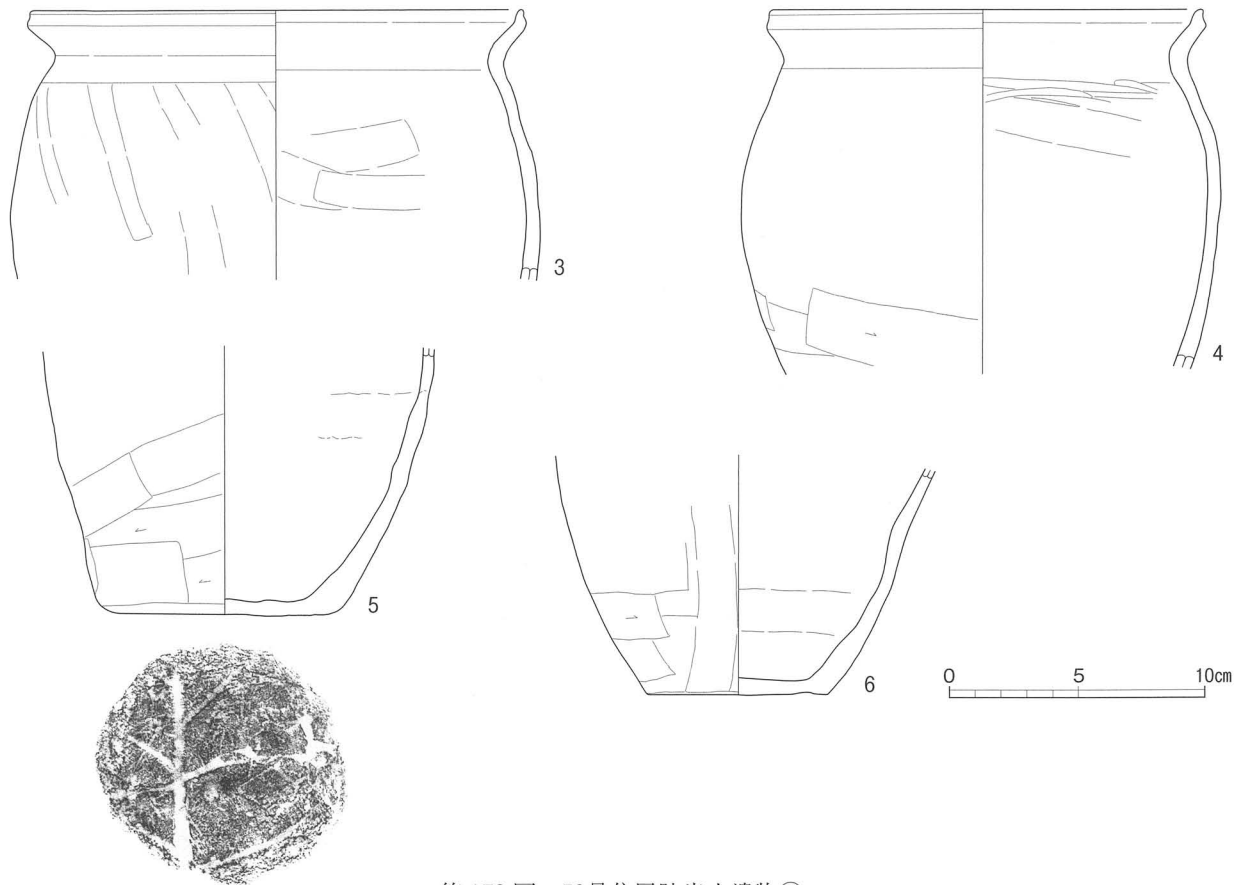
表 76 53号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	12.8 5.3 7.4	底部回転ヘラ切り離し無調整。底部ヘラ記号「一」。底部と体部の接合面で輝が入り、段差を生じている。	長石礫、海綿骨針	やや不良	明灰色	90% カマド
2	土師器 甕	17.7 — —	口縁～肩部片。口縁部は全体に低く短い、端部は上方に積み上げる。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	微砂粒	良好	にぶい橙色	胴外面に金雲母混じりの粘土付着、カマド
3	土師器 甕	(19.2) — —	口縁～肩部片。口縁部は全体に低く短い、端部は積み上げる。体部外面ナデ。	長石、石英、チャート、海綿骨針	普通	にぶい褐色	
4	土師器 甕	(16.7) — —	口縁～肩部片。口縁部は全体に低く短い、端部は積み上げる。体部外面ナデ。	長石、石英、チャート、海綿骨針	良好	にぶい褐色	
5	土師器 甕	— — 8.6	底部～胴下半部。胴下半部外面斜方向ヘラケズリ。底部木葉痕	白色粒多量、石英微粒、	普通	にぶい褐色	カマド
6	土師器 甕	— — 7.6	底部～胴下半部。底部木葉痕後、ナデ。胴下半部横方向のヘラケズリ後縦方向のヘラケズリ。	長石・石英微粒、チャート礫	普通	にぶい褐色	カマド

含み、人為的埋没の可能性はある。また、8層は土壌化した壁体と推測する。遺物 カマド覆土中や支脚の直上から、土師器甕の個体が破碎した状態で出土した。本来は懸け甕であったと推測する。須恵器の坏や土師器の甕は9世紀中～後葉頃の遺物である。所見 住居跡の廃絶時期は、9世紀後葉頃と考えられる。



第172図 53号住居跡・出土遺物①



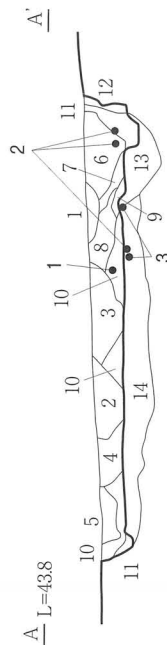
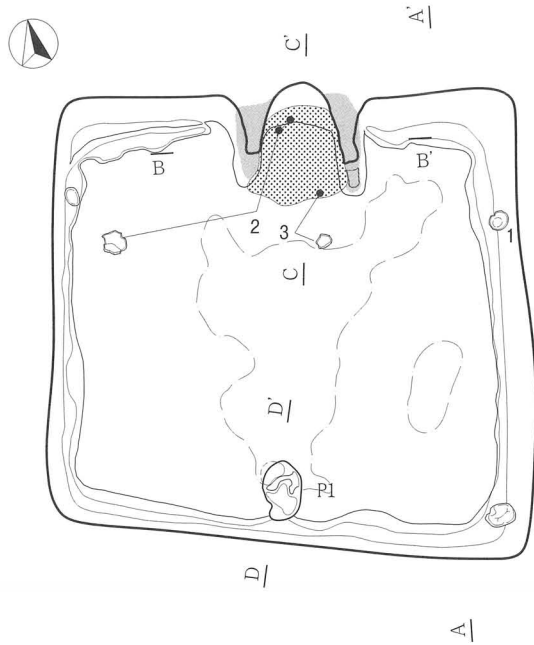
第 173 図 53号住居跡出土遺物②

55号住居跡（第174図）

位置 A区北部、K5～L5グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北方向は西側3.37m・東側3.74m、東西方向は北側3.61m・南側3.84mを測り、平面形は横向きの不整台形を呈する。**主軸方位** N-14°-W **壁** 壁高は18～33cmを測り、傾斜する。**床** やや凹凸がある。カマドからP1にかけて帯状に硬化し、わずかに高い。掘り方は紙面の都合で平面図化できなかったが、西・南壁側は周溝に合わせて幅広く溝状（幅55～92cm）に掘り込まれる。カマド前は北東隅の周溝と接続した土坑状の掘り方になる。**ピット** P1は出入口ピットである。**カマド** 北壁中央に構築される。両袖は残りが良い。煙道部が非常に短い。覆土中から出土した2の土師器甕の大部分は、竪穴北東部の覆土下層から出土している。本来は懸け甕であった可能性がある。**覆土** やや複雑な堆積状況を示す。カマドの粘土を含む土が広く埋没し、2の土師器甕は

表 77 55号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	12.8 5.3 7.4	底部回転ヘラ切り離し無調整。底部ヘラ記号「一」。底部と体部の接合面で腫が入り、段差を生じている。	長石礫、海綿骨針	やや不良	明灰色	90%
2	土師器 甕	17.7 — —	口縁～肩部片。口縁部は全体に低く短い、端部は上方に摘み上げる。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	微砂粒	良好	にぶい橙色	胴外面に金雲母混じりの粘土付着
3	土師器 甕	(19.2) — —	口縁～肩部片。口縁部は全体に低く短い、端部は摘み上げる。体部外面ナデ。	長石、石英、チャート、海綿骨針	普通	にぶい褐色	

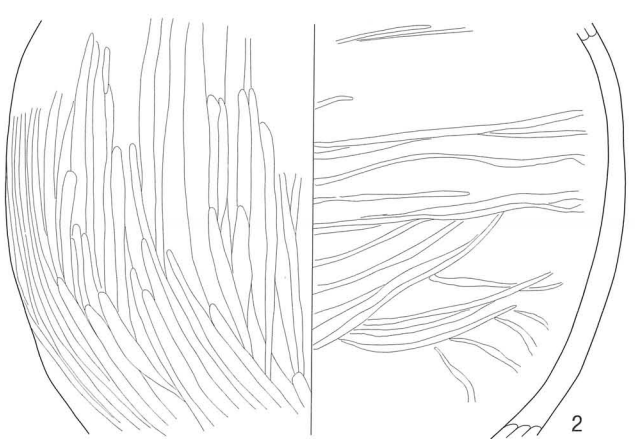
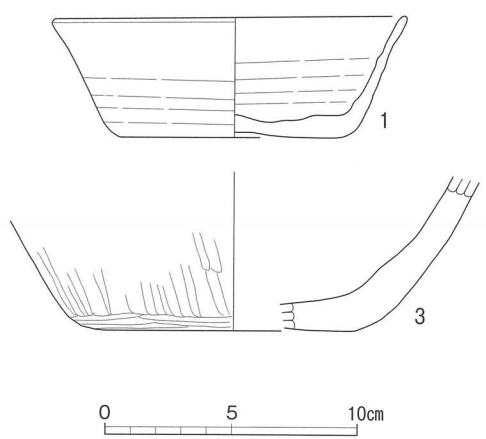
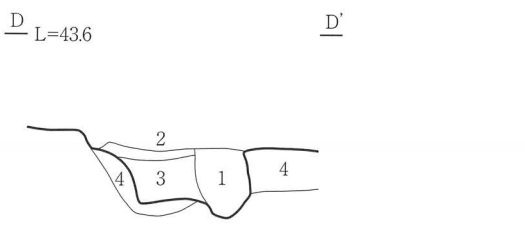
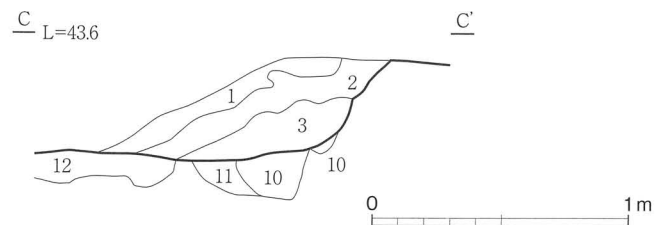
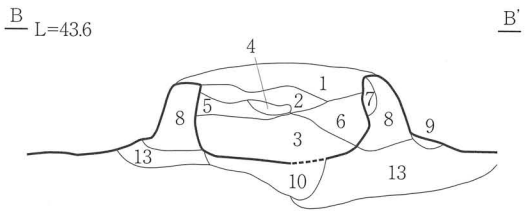


55号住居跡土層

- 1 褐色 ローム粒多量、ロームブロック少量、締り強い、粘性弱い
- 2 黒褐色 ローム粒多量、ロームブロック少量、締り強い
- 3 暗褐色 ローム粒多量、ロームブロック微量、締り強い
- 4 褐色 ローム粒多量、ロームブロック少量、締り強い、粘性弱い
- 5 褐色 ローム粒少量、ロームブロック微量、締り弱い、粘性弱い
- 6 黒褐色 ローム粒少量、ロームブロック微量、締り弱い、粘性弱い
- 7 灰褐色 ローム粒少量、粘土微量、締り非常に弱い
- 8 暗褐色 ローム粒少量、粘土微量、締り強い
- 9 明褐色 粘土少量、締り強い
- 10 明褐色 ローム粒少量、粘土微量、締り強い
- 11 暗褐色 締り非常に弱い、周溝
- 12 褐色 ローム粒多量、ロームブロック少量、締り非常に弱い
- 13 褐色 ロームブロック多量、ローム粒多量、締りあり、貼床
- 14 明褐色 ロームブロック多量、ローム粒多量、締り非常に強い、貼床

カマド

- 1 暗褐色 焼土少量、粘土微量、締り強い
- 2 褐灰色 焼土多量、粘土主体、締り強い
- 3 灰褐色 焼土少量、粘土少量、締り強い
- 4 黒褐色 焼土微量、粘土微量、締り弱い
- 5 褐灰色 焼土少量、粘土多量、締り強い
- 6 黒褐色 焼土少量、粘土少量、締り弱い
- 7 赤褐色 焼土・粘土主体、硬化、袖
- 8 褐灰色 粘土主体、締り非常に強い、袖
- 9 暗褐色 粘土主体、締りあり、袖
- 10 暗褐色 焼土微量、締り非常に弱い
- 11 暗褐色 焼土微量、ロームブロック少量
- 12 褐色 ロームブロック少量、ローム粒多量、締り強い、貼床
- 13 明褐色 ロームブロック多量、締り非常に強い、貼床
- P1
- 1 暗褐色 ローム粒少量、締り弱い
- 2 灰褐色 ローム粒少量、締りあり、根固め
- 3 黄褐色 ロームブロック主体、締りあり、根固め
- 4 明褐色 ロームブロック多量、締り強い、貼床

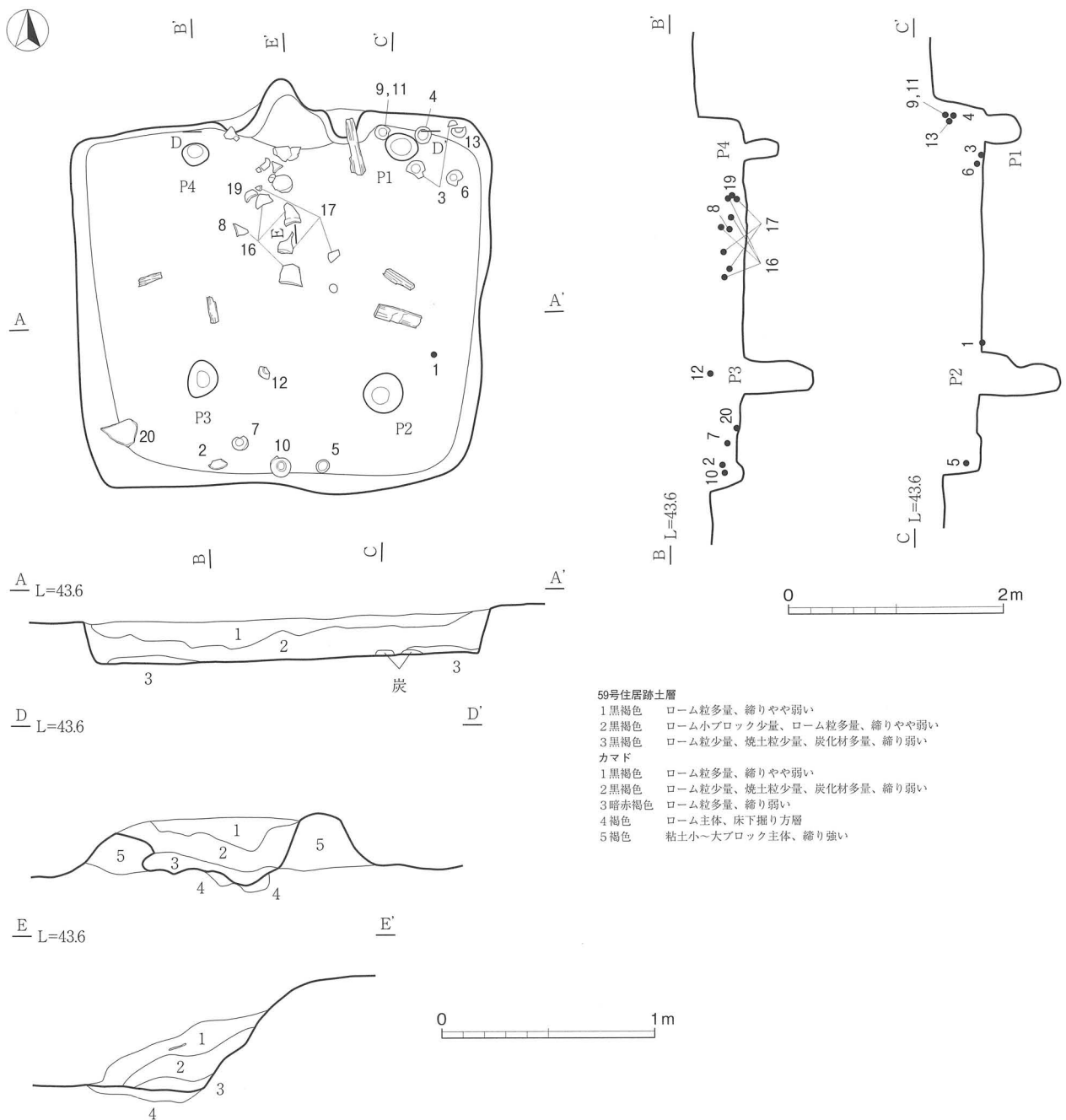


第174図 55号住居跡・出土遺物

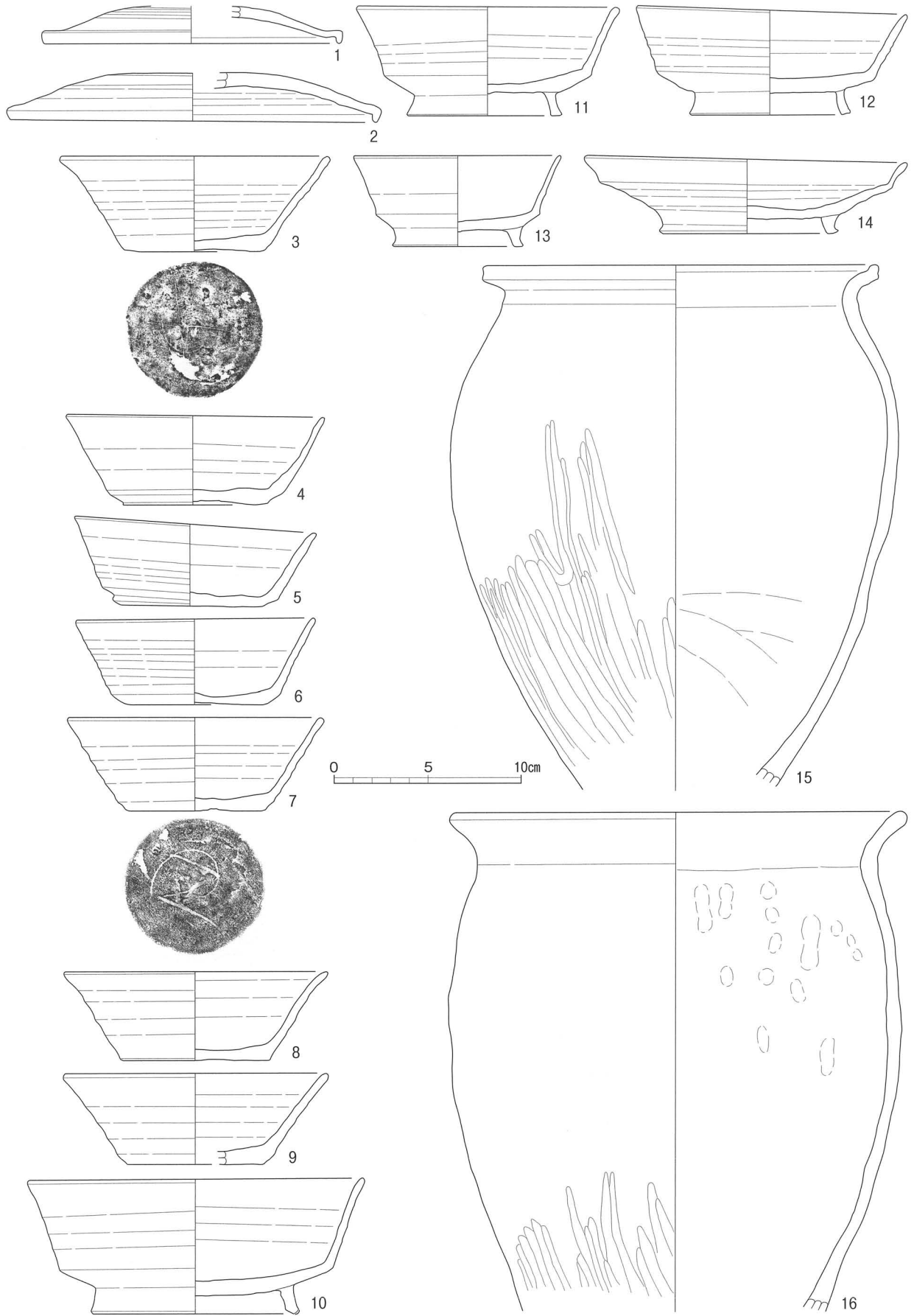
8・10層堆積時に廃棄された可能性がある。遺物 1の須恵器坏は西壁際10・11層から出土した。カマド前面の下層からは3の土師器甕底部が出土した。これらの所産時期は8世紀中葉頃のものである。北西隅と南東隅の周溝上からは自然円礫が出土した。所見 住居跡の廃絶時期は8世紀中葉頃と考えられる。

59号住居跡 (第175~177図)

位置 A区中央部、L6グリッドにある。規模と平面形 3.70 × 3.40 mのやや横に長い方形で、61号住居跡と重複し、それよりも新しい。主軸方向 N-5°-W 壁 壁高33cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居全体が硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P1とP4は北壁の直下に位置している。カマド 北カマドで全体の幅は130cmで、燃烧室幅は60cm、奥行きは54cmある。袖部は粘土

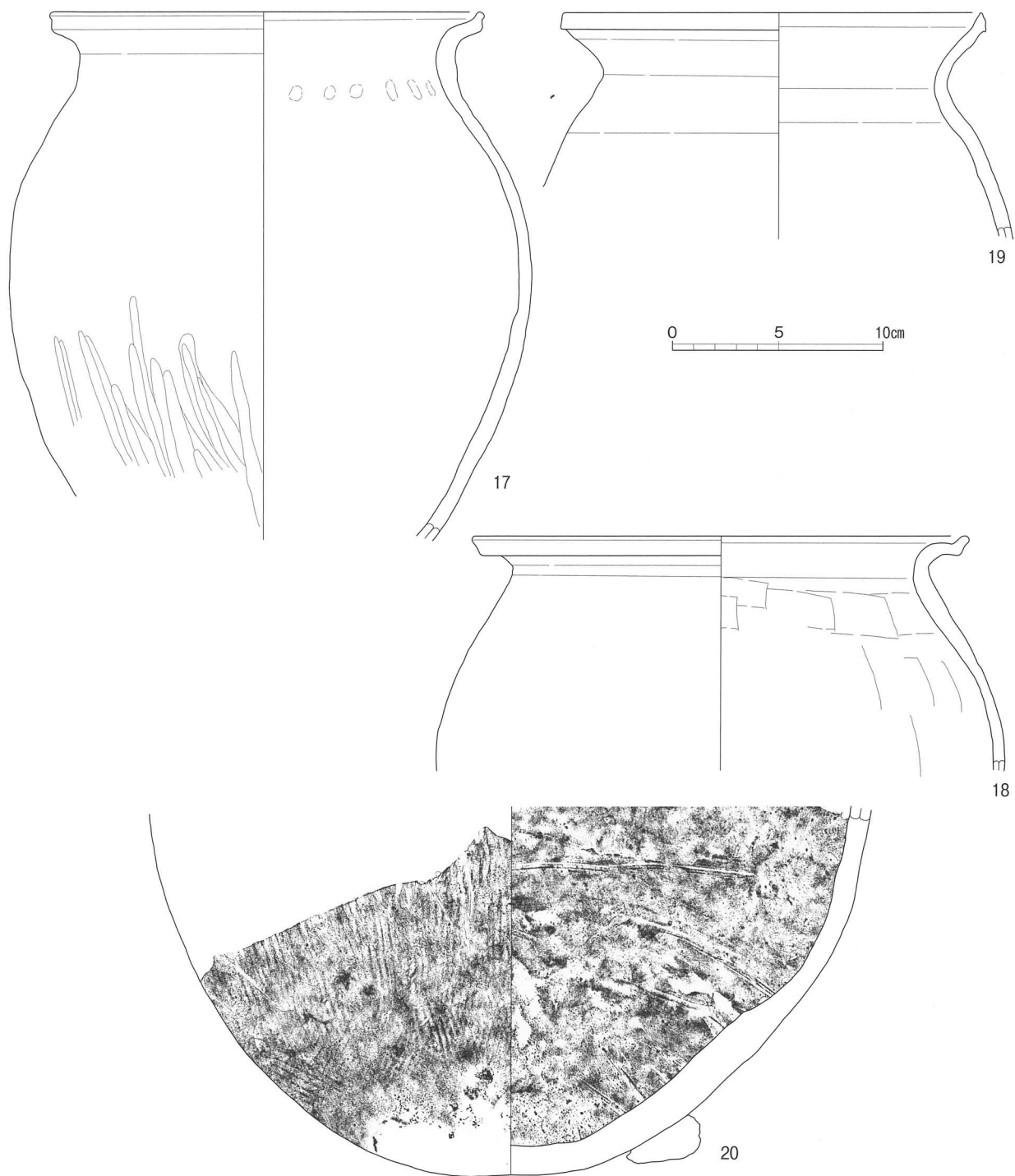


第175図 59号住居跡



第176図 59号住居跡出土遺物①

を使用して構築している。覆土 ローム粒を多量に含んだ黒褐色土を主体にしている。遺物 覆土中～下層にかけて須恵器の蓋、坏、高台付坏、盤、甕、土師器の甕が出土している。所見 出土遺物から見て8世紀後葉頃～9世紀前葉頃の住居跡と考えられる。住居跡の柱穴の配置は、8世紀後葉頃の住居跡に見られる壁際に寄った位置にあり、住居の構築は8世紀後葉と考えられる。



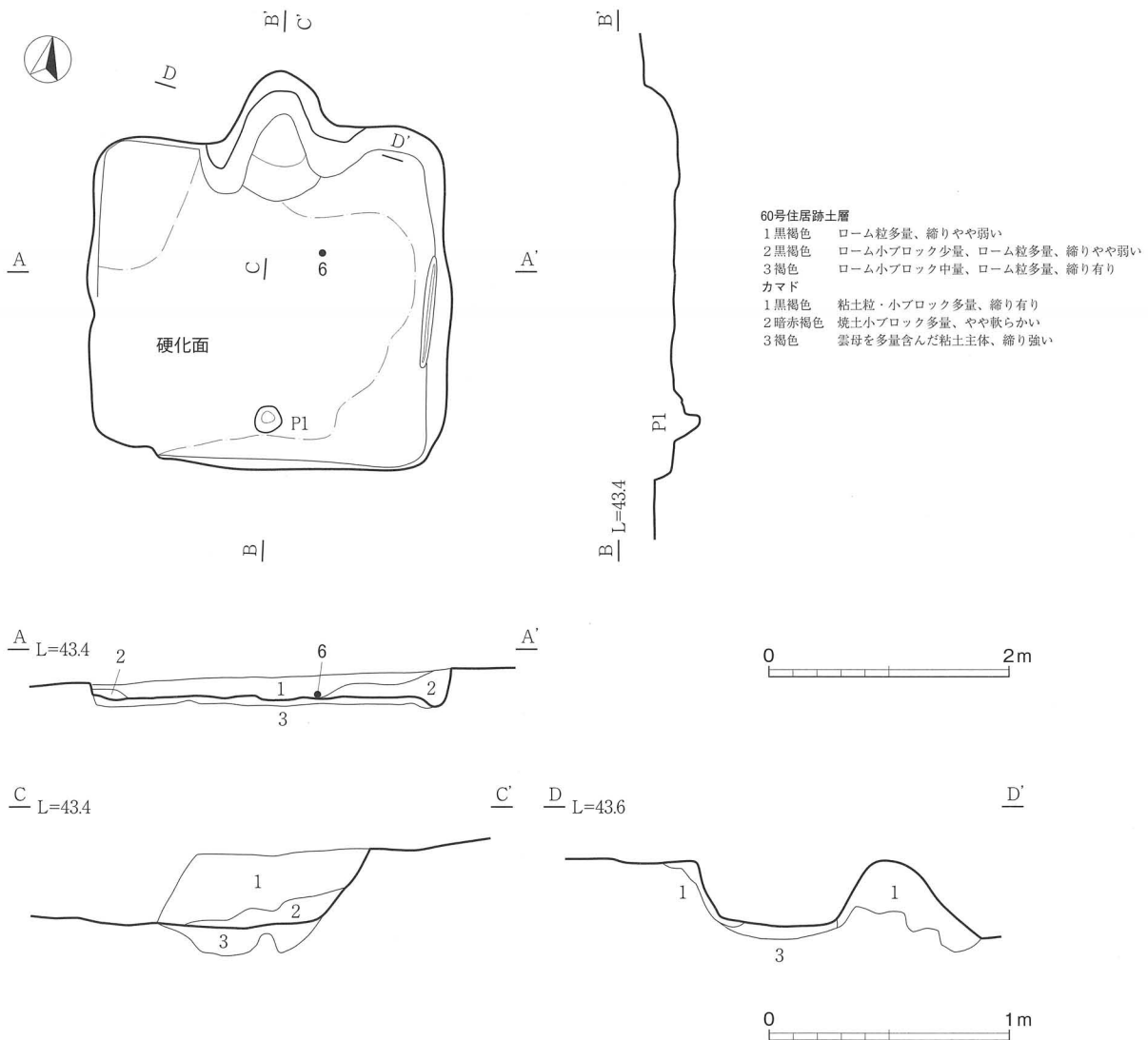
第177図 59号住居跡出土遺物②

表78 59号住居跡出土遺物観察表

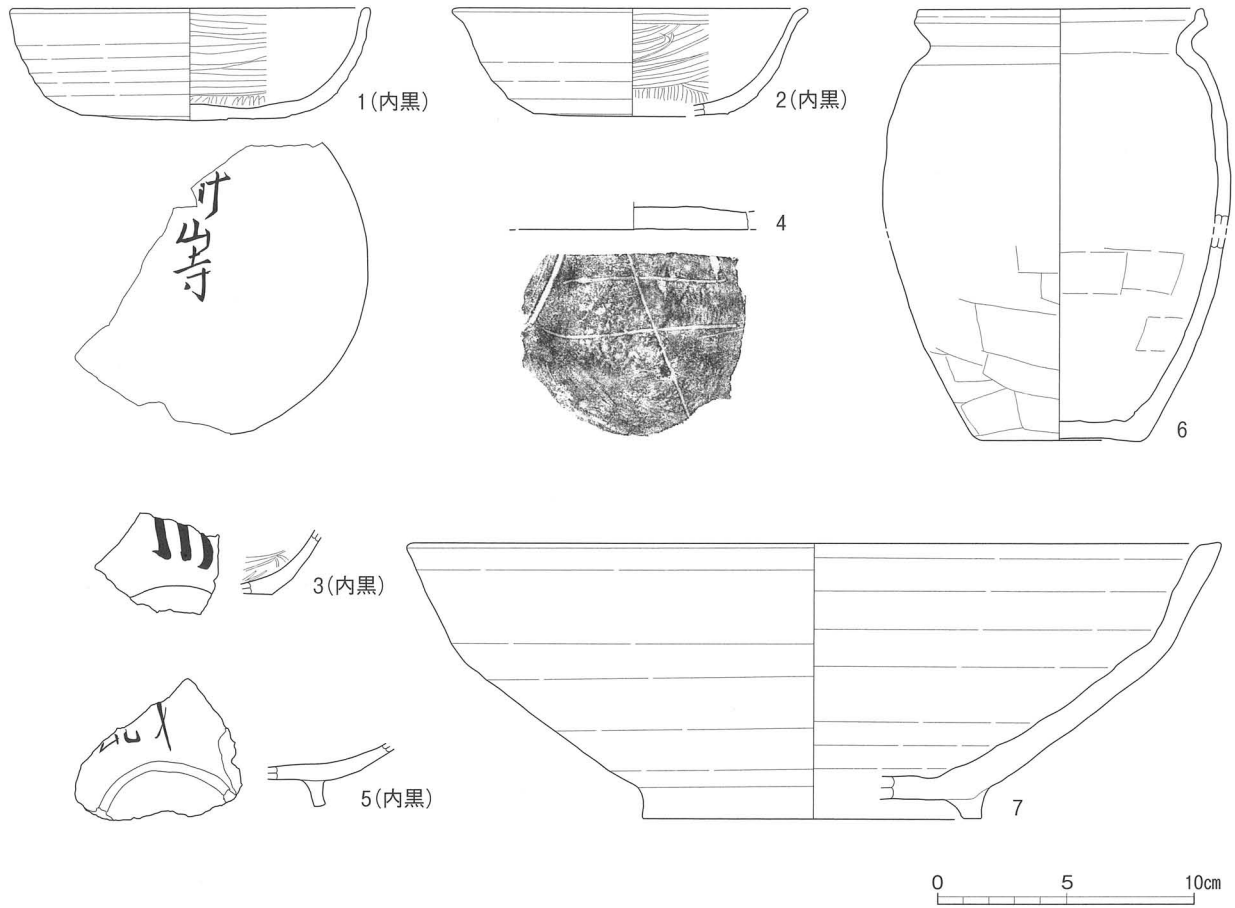
図版 番号	種 別 種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	16.0 — —	天井部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石、海綿骨針	普通	灰色	
2	須恵器 蓋	19.4 — —	天井部回転ヘラケズリ。	長石、精良	良好	灰色	
3	須恵器 坏	14.4 5.2 7.6	底部回転ヘラ切り後オサエ。ヘラ記号。	長石、黒色鉄分粒、 海綿骨針	普通	灰色	95%
4	須恵器 坏	13.8 4.9 7.7	底部回転ヘラ切り、無調整。ロクロ右回転。	長石礫、石英、海綿骨針、チャート	普通	灰褐色	完形
5	須恵器 坏	13.9 4.9 7.7	底部回転ヘラ切り後一方向ヘラケズリ。	石英、バミス、黒色鉄分粒	普通	灰色	ほぼ完形
6	須恵器 坏	12.8 4.6 7.6	底部回転ヘラ切り後一方向ヘラケズリ。	石英、バミス、黒色鉄分粒	不良	灰褐色	90%
7	須恵器 坏	13.8 5.1 7.3	底部ヘラ切り無調整。ヘラ記号。	長石、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	70%
8	須恵器 坏	14.2 4.8 8.0	底部回転ヘラ切り無調整。ロクロ右回転。	長石、海綿骨針、 黒色鉄分粒	普通	灰色	50%
9	須恵器 坏	14.2 4.8 7.4	底部回転ヘラ切り無調整。ロクロ右回転。	長石、石英、海綿骨針、 黒色鉄分粒、 チャート	普通	暗灰色	
10	須恵器 高台付坏	18.0 7.3 11.1	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。高台端部摩耗。	長石礫、石英、海綿骨針	普通	灰色	70%
11	須恵器 高台付坏	14.1 5.9 8.3	底部回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石礫、チャート	普通	灰褐色	70%
12	須恵器 高台付坏	14.5 5.9 8.6	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石礫、黒色鉄分粒	普通	灰色	60%
13	須恵器 高台付坏	11.1 4.9 7.0	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、石英、海綿骨針、 黒色鉄分粒	良好	灰褐色	50%
14	須恵器 盤	17.2 4.3 9.5	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石礫	良好	灰色	90%
15	土師器 甕	21.1 — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半部ナデ、下半部ミガキ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
16	土師器 甕	24.4 — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半部ナデ、下半部ミガキ、内面指頭痕。	石英	良好	にぶい褐色	
17	土師器 甕	20.7 — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半部ナデ、下半部ミガキ、内面指頭痕。	長石、石英	普通	橙色	
18	土師器 甕	(23.8) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半部ナデ、下半部ミガキ、内面ヘラナデ。	長石、石英、雲母	良好	橙色	
19	須恵器? 甕	20.1 — —	ロクロ目は不明瞭だが、内外面ともロクロナデと思われる調整。	微砂粒	やや良好	暗褐色	
20	須恵器 甕	— — —	丸底。外面平行叩き、内面掌当て具痕。	長石、石英	良好	暗灰色	

60号住居跡（第178・179図）

位置 A区中央部、L7グリッドにある。規模と平面形 2.96 × 2.77 mのほぼ方形で、北壁に15cm程度の奥行き差がある。61・64号住居跡と重複し、それらよりも新しい。主軸方向 N-8°-W 壁 壁高19cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居中央部から南西側にかけて硬化している。住居東壁に壁溝が一部確認された。ピット 1箇所。P1は深さ22cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 北カマドで全体の幅は135cmで、煙道部の壁外への突出は40cm以上ある。覆土 黒褐色土を主体にした自然堆積層である。遺物 6の土師器甕は床面出土の底部とカマド内出土破片があり接合していないが同一個体と判断した。他に内黒土師器坏が4点出土し、その中で1の坏の底部には「□山寺」の墨書文字が書かれている。7の須恵器鉢は、高台の付いた珍しい形態の鉢で、胎土に海綿骨針を含んでいる。所見 出土遺物から見て9世紀後葉頃の住居跡と考えられる。住居は、平面形から見て本来カマド左側に棚を持つ形の住居跡と考えられる。



第178図 60号住居跡



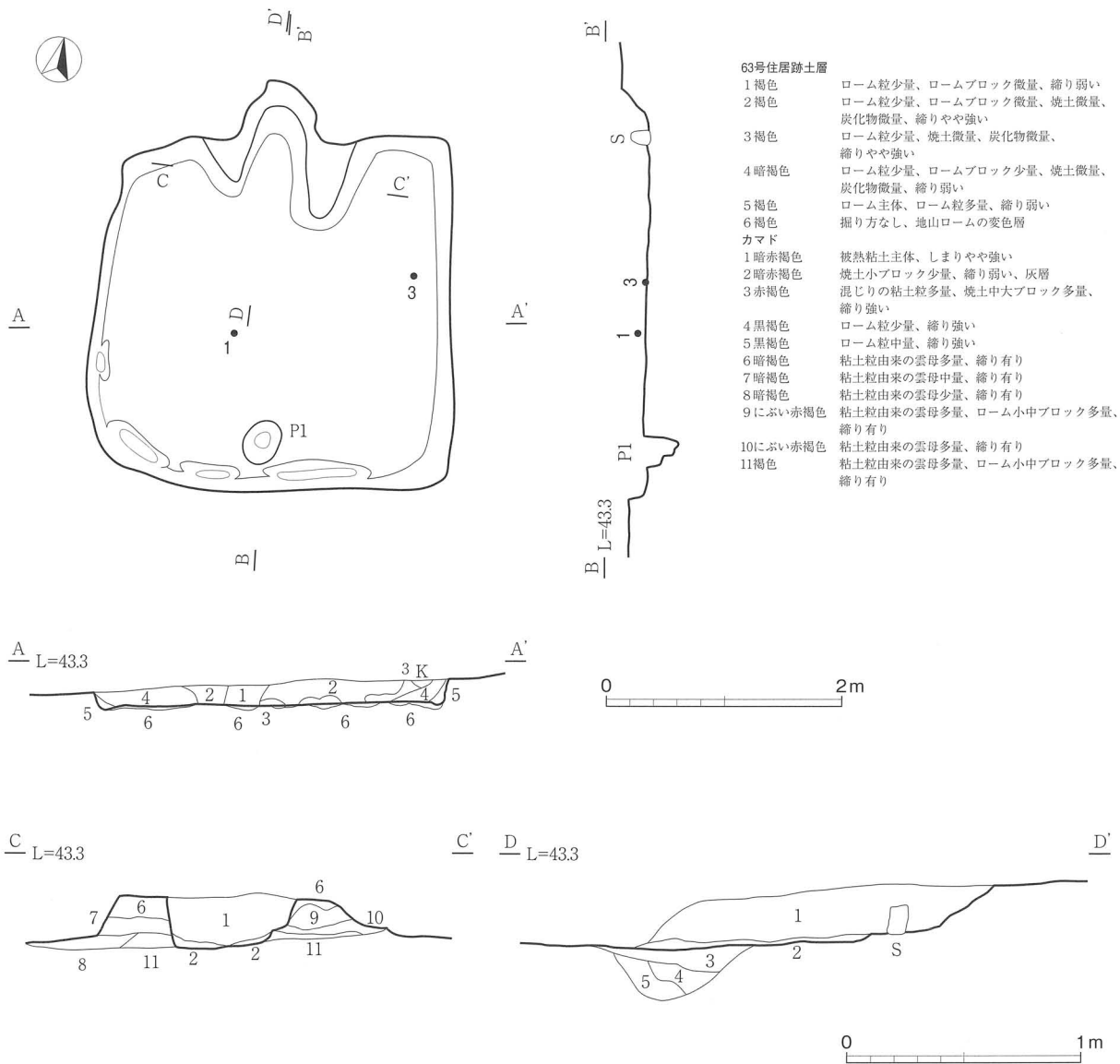
第179図 60号住居跡出土遺物

表79 60号住居跡出土遺物観察表

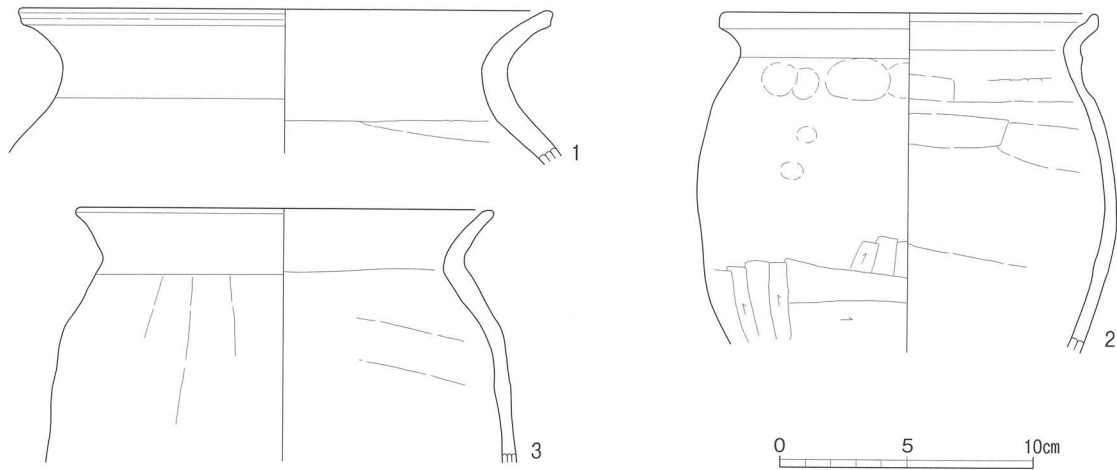
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(14.2) 4.4 7.5	底部回転ヘラ切り無調整。内面黒色処理・ミガキ。ロクロ右回転。底部外面墨書「□山寺」。	長石、石英、海綿骨針	良好	浅黄橙色	
2	土師器 坏	(13.9) 4.3 7.6	体部下端～底部回転ヘラケズリ。内面黒色処理・ミガキ。ロクロ右回転。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色	
3	土師器 坏	— — —	内面黒色処理・ミガキ。体部側面墨書「川」?	長石、石英、海綿骨針	良好	暗褐色	
4	須恵器 坏	— — —	底部ヘラケズリ。ヘラ記号。	長石、石英、海綿骨針	普通	灰色	
5	土師器 高台付坏	— — —	内面黒色処理・ミガキ。体部側面墨書。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい橙色	
6	土師器 甕	(11.0) (19.2) 6.4	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部外面ナデ、下半部横方向ヘラケズリ、内面ヘラナデ。底部周縁ヘラケズリ、中央ナデ・オサエ。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい暗褐色	
7	須恵器 鉢	(32.0) 13.4 (11.0)	底部、口縁部片。体部内外面ロクロナデ。	長石、石英、海綿骨針	良好	灰色	

63号住居跡 (第180・181図)

位置 A区中央部、L7グリッドにある。規模と平面形 3.10 × 2.90 m 主軸方向 N - 8° - W 壁
 壁高は約 20cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 全体に硬化している。ピット 1箇所。P1は深さ 25cm、
 出入り口ピットと考えられる。カマド 幅140cm、焚口部から煙道部までの長さは110cm、燃焼部幅約38cm、
 壁外への掘り込みは45cmある。右袖部の残りがよく長さ65cm、焼成部の中央に自然石を立てて支脚とし
 たものが出土している。覆土 褐色土を主体にした自然堆積層。遺物 1・3の土師器甕は覆土から、
 2の甕はカマドから出土している。いずれも9世紀代の遺物である。所見 出土遺物から9世紀代の住居
 跡と考えられる。



第180図 63号住居跡



第 181 図 63号住居跡出土遺物

表 80 63号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器甕	(20.9) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
2	土師器甕	(14.7) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部外面ナデ、下半部ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	長石、石英、パミス	良好	にぶい橙色	
3	土師器甕	(16.0) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	暗褐色	

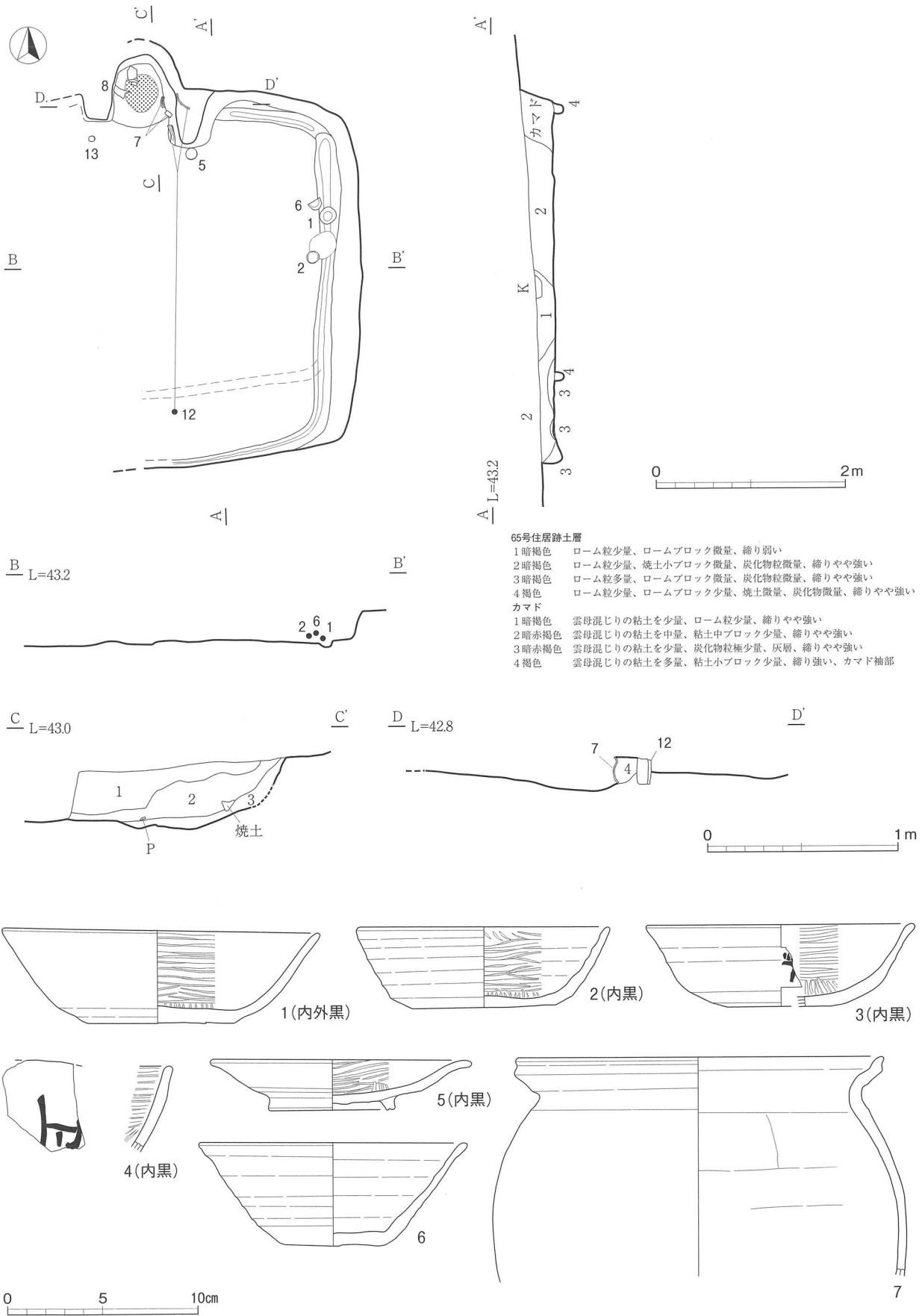
65号住居跡（第182・183図）

位置 A区中央部、L7グリッドにある。 **規模と平面形** 3.80 × (2.8) mで、64号住居の床面を壊している。 **主軸方向** N-5°-E **壁** 壁高は約28cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 **床** 全体に硬化している。住居床面に古い時期の南壁の壁溝状の痕跡が見られる。 **ピット** - **カマド** 幅135cm、焚口部から煙道部までは90cm、燃焼部幅約50cm壁外への掘り込みは約40cmある。右袖部には7の土師器甕、12の須恵器甕を構築材として使用している。 **覆土** 暗褐色土を主体にした自然堆積層。 **遺物** 東壁際の覆土下層から6の須恵器杯、1・2の土師器杯が、カマド前面の床面付近から5の土師器の皿、13の軽石製の砥石が出土している。いずれも9世紀後葉頃の遺物である。 **所見** 出土遺物から9世紀後葉頃の住居跡と考えられる。

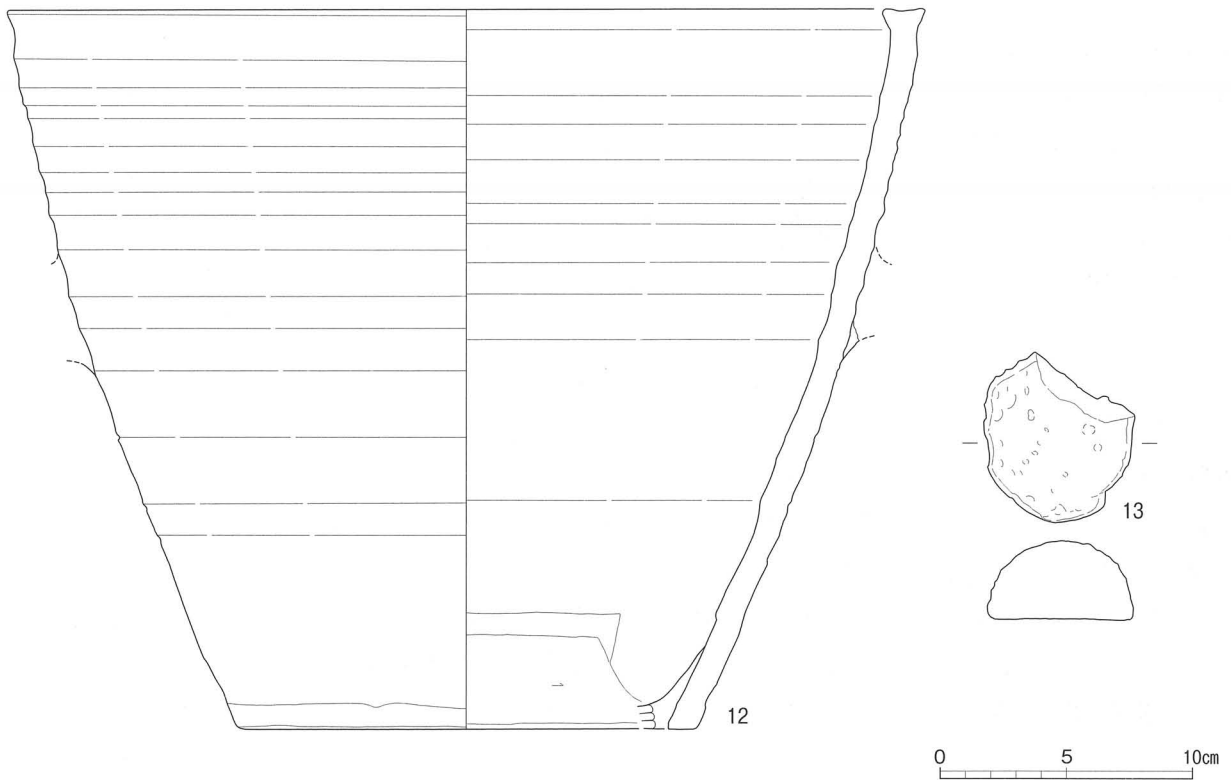
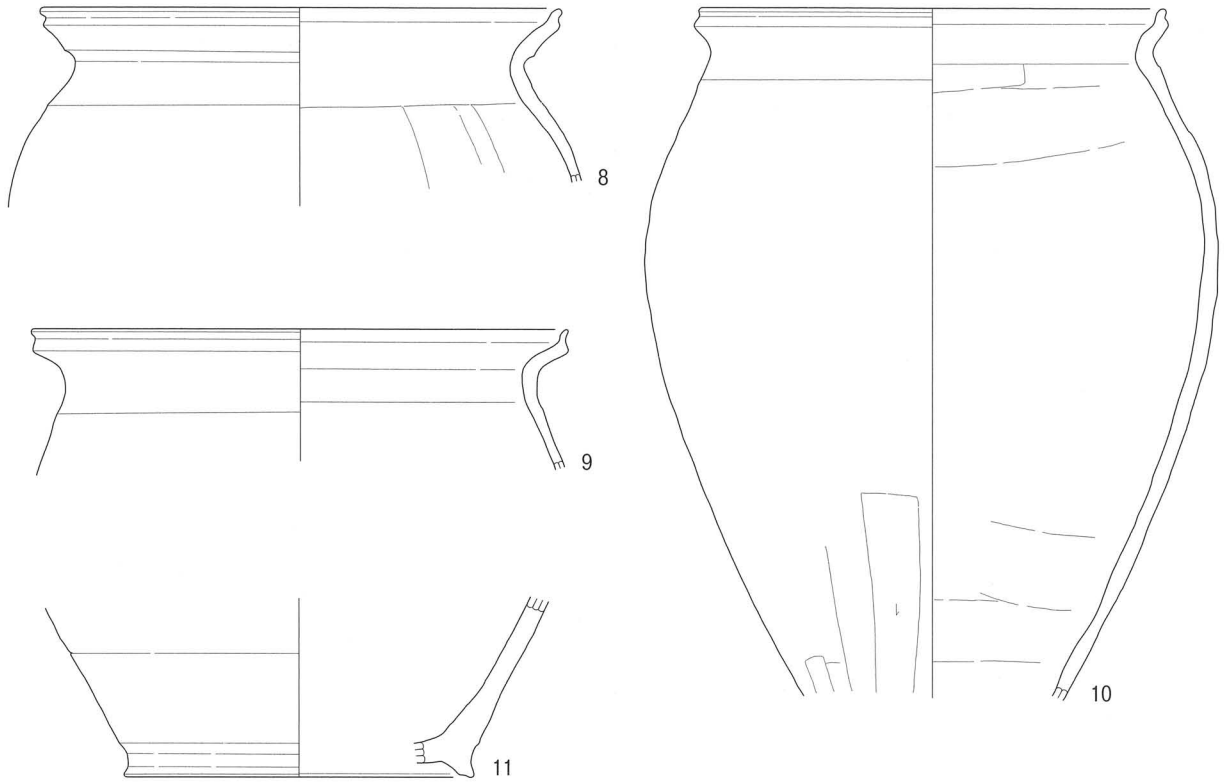
表 81 65号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器杯	16.2 5.0 7.6	体部内外面黒色処理、内面ミガキ。底部回転ヘラ切り無調整。	長石、石英	普通	黒褐色	完形
2	土師器杯	13.2 4.3 7.5	体部内面黒色処理・ミガキ。底部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石、石英	良好	にぶい褐色	80%
3	土師器杯	(14.0) 4.4 5.3	体部下端回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ。内面黒色処理・ミガキ。体部側面墨書文字「□」。	石英、チャート、海綿骨針	良好	にぶい橙色	

第IV章 A区の遺構と遺物



第 182 図 65号住居跡・出土遺物①



第183図 65号住居跡出土遺物②

第IV章 A区の遺構と遺物

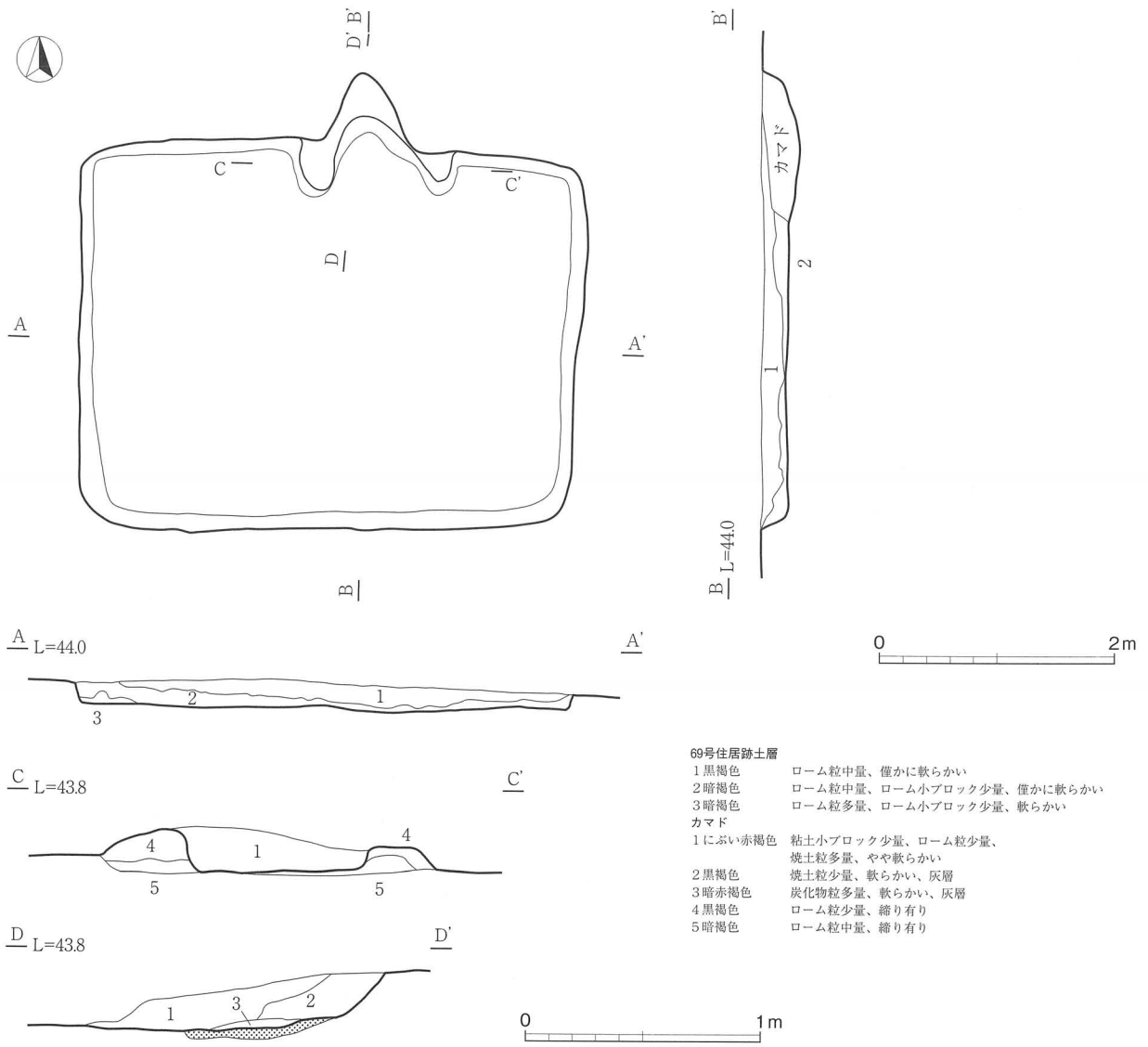
図版番号	種別	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考	
4	土師器 坏	- - -	口縁部片。内面黒色処理・ミガキ。体部側面墨書文字「□上」。	石英	良好	にぶい褐色		
5	土師器 皿	13.8 2.7 6.7	体部下端回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。内面黒色処理・ミガキ。	長石、石英、チャート	良好	にぶい橙色	完形	
6	須恵器 坏	14.1 5.5 5.5	体部下端弱い回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り難し無調整。	石英、チャート、海綿骨針	普通	橙色	90%	
7	土師器 甕	19.2 - -	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	にぶい橙色		
8	土師器 甕	20.4 - -	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英を含む微砂粒	良好	にぶい褐色		
9	土師器 甕	(21.0) - -	口縁部内外面ヨコナデ。	長石、石英	良好	明褐色		
10	土師器 甕	(18.2) - -	口縁部内外面ヨコナデ。胴外面上半部ナデ、中部斜め方向ヘラケズリ後ナデ、下半部縦方向ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	橙色		
11	須恵器 短頸壺	- - (13.8)		長石、チャート	良好	青灰色		
12	須恵器 甗	(36.4) (28.5) (18.0)	体部内外面ロクロナデ、一對の把手剥離痕。底部2孔式。	長石、石英、チャート	普通	灰色		
13	石製品 砥石?	長 [6.8] cm、幅 6.0cm、厚 3.1cm、重 22.25g、軽石製。						

69号住居跡（第184図）

位置 A区中央部、M5グリッドにある。規模と平面形 4.21 × 3.85 mの横長長方形 主軸方向 N - 2° - W 壁 壁高は約24cm、やや外傾して立ち上がる。床 全体にやや硬化が弱い。ピット - カマド 幅142cmで、焚口部から煙道部までは102cm、壁外への掘り込みは58cmである。覆土 黒褐色土から暗褐色土の自然堆積で、細かな攪乱が多く入り込んでいる。遺物 - 所見 隣接する住居跡との位置関係や主軸方向から見て、9世紀前葉前後頃の住居跡と思われる。

70号住居跡（第185図）

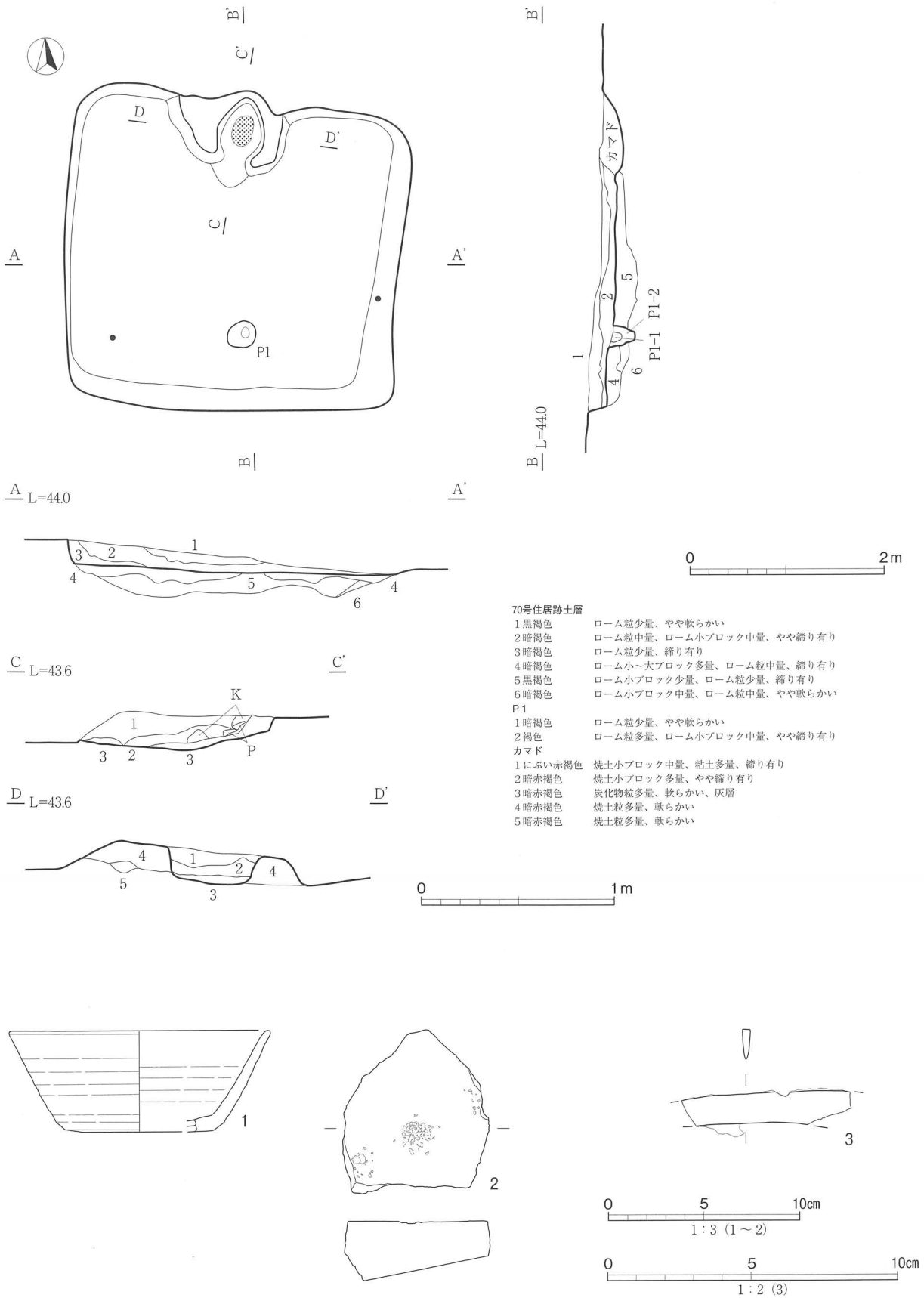
位置 A区中央部、M5グリッドにある。規模と平面形 3.35 × 3.42 mの方形。主軸方向 N - 14° - E 壁 壁高は約20cm、外傾して立ち上がる。床 全体にやや硬化が弱い。ピット 1箇所。P1は深さ24cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 幅132cmで、焚口部から煙道部までは102cm、壁外への掘り込みは20cmである。覆土 黒褐色土から暗褐色土の自然堆積で、最近の植物の根の細かな攪乱が多く入り込み床下にまで及んでいる。遺物 9世紀前葉頃の須恵器坏、刀子が覆土中から出土している。所見 出土遺物から9世紀前半頃の住居跡と考えられる。



第184図 69号住居跡

表82 70号住居跡出土遺物観察表

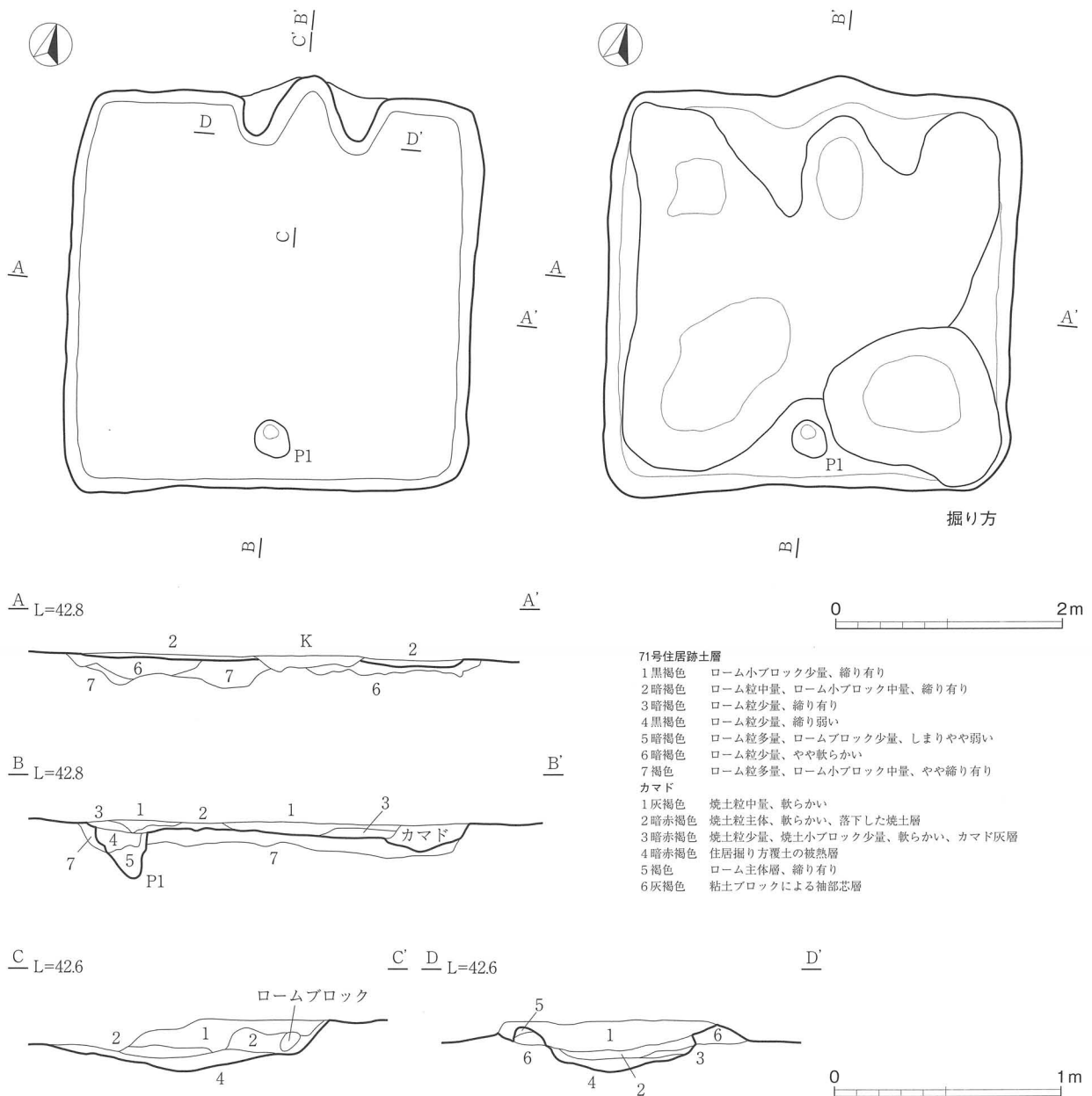
図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(13.4) 5.3 (7.7)	底部ヘラ切り離し、無調整。全体にロクロ目弱い。	石英、チャート	不良	灰白色	
2	石製品 台石	長8.3cm、幅5.5cm、厚3.1cm、重237.11g、安山岩製。					
3	鉄製品 刀子	長[5.8]cm、幅1.2cm、厚0.3cm、重5.22g					



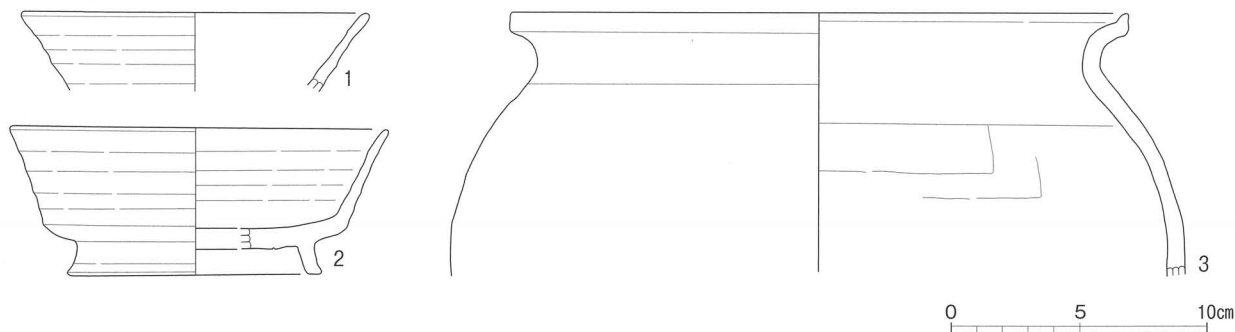
第185図 70号住居跡・出土遺物

71号住居跡 (第186・187図)

位置 A区中央部、N7グリッドにある。 規模と平面形 3.50 × 3.44 mの方形。 主軸方向 N - 12° - W 壁 壁高は約8cm、外傾して立ち上がる。 床 全体に硬化している。 ピット 1箇所。P1は深さ42cm、出入り口ピットと考えられる。 カマド 幅170cmで、焚口部から煙道部までは130cm、壁外への掘り込みは18cmである。 覆土 黒褐色土から暗褐色土の薄い堆積が見られた。 遺物 覆土から須恵器坏、高台付坏、土師器甕が出土している。いずれも9世紀前葉頃の遺物である。 所見 出土遺物から9世紀前葉頃の住居跡と考えられる。



第186図 71号住居跡



第187図 71号住居跡出土遺物

表83 71号住居跡出土遺物観察表

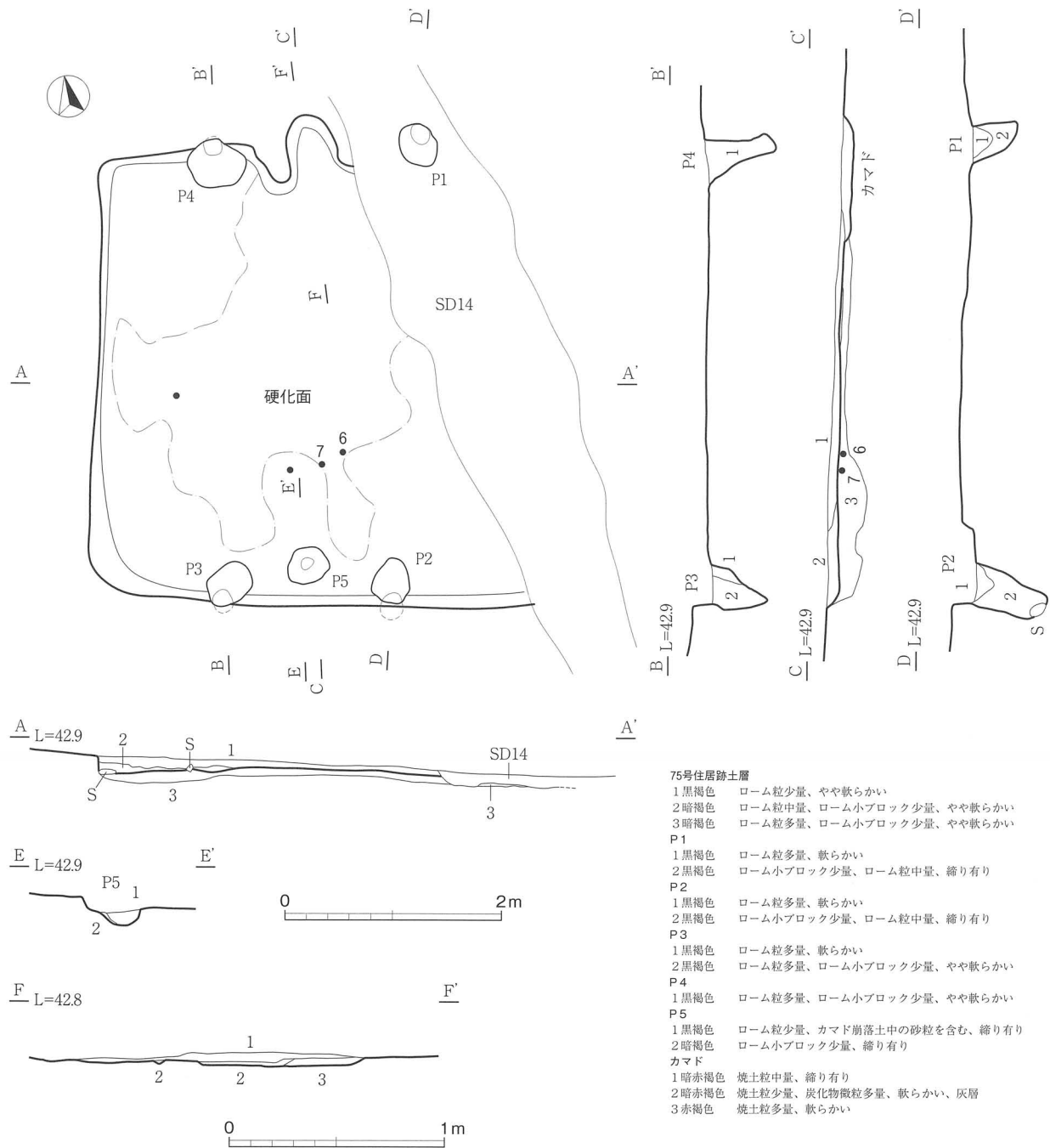
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 杯	(13.6) — —	口縁部片。	長石	普通	暗灰色	
2	須恵器 高台付杯	(14.8) 5.9 (9.9)	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。	長石、黒色鉄分粒、 海綿骨針	普通	明灰色	
3	土師器 甕	(24.0) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	褐色	

75号住居跡（第188・189図）

位置 A区中央部、M7・N7グリッドにある。 **規模と平面形** 4.56 × 4.12 m。 **主軸方向** N-9°-E **壁** 壁高は約12cm。 **床** 出入り口ピットからカマド前面にかけてと西壁寄りが特に硬化している。 **ピット** 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。P2の底部に自然石が入っている。 **カマド** 左袖部の基底部が残存しており、やや住居内に袖部が伸びる。燃焼部の壁外への掘り込みは28cmである。 **覆土** 黒褐色～暗褐色土が薄く堆積している。 **遺物** 須恵器の甑片、土錘は床下から出土している。 **所見** 壁際に斜立する主柱穴のある住居は8世紀後葉から9世紀前葉に見られる。遺物は全体に9世紀前半から中頃のものとと思われる。

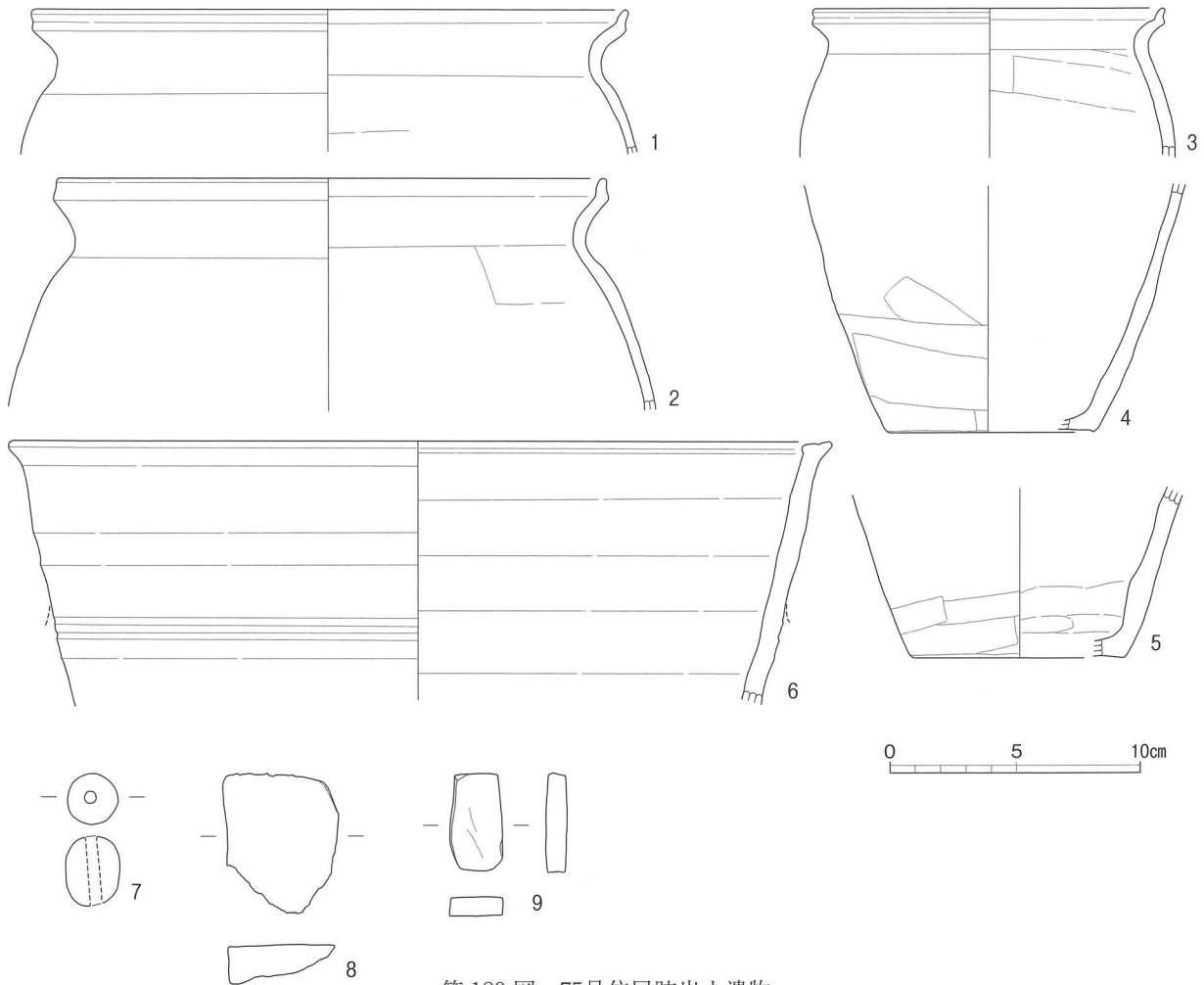
表84 75号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 甕	(23.8) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	にぶい橙色	
2	土師器 甕	(22.0) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
3	土師器 甕	(14.0) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英、チャート、 海綿骨針	良好	にぶい橙色	
4	土師器 甕	— — (8.6)	胴下半部横方向のヘラケズリ、内面摩耗。	石英	普通	橙色	



第188図 75号住居跡

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
5	土師器甕	— — (8.4)	胴下半部横方向のヘラケズリ、内面ヘラナア。底部無調整。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
6	須恵器甕	(33.3) — —	破断面は灰色還元色だが、器表面はにぶい褐色の酸化焙を受けている。二次的な被熱痕か。	長石、石英、チャート、海綿骨針	不良	にぶい褐色	

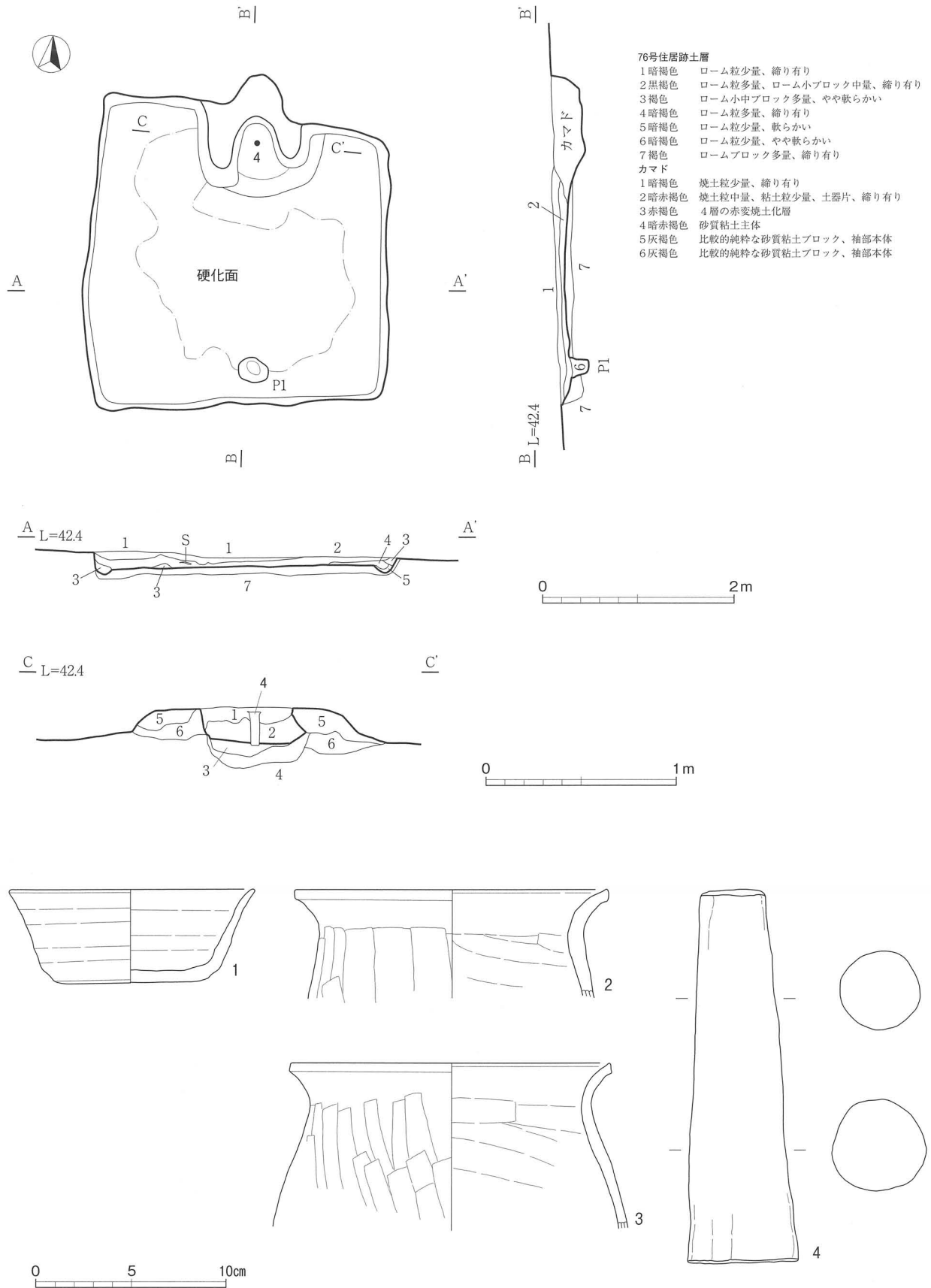


第189図 75号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
7	土製品 土玉	径 2.2cm、長 2.9cm、孔径 0.45cm、重 10.42g					
8	石製品 砥石	長 [5.6] cm、幅 [4.6] cm、厚 [1.5] cm、重 44.37g、凝灰岩製。					
9	石製品 砥石	長 4.0cm、幅 2.0cm、厚 0.8cm、重 12.36g、凝灰岩製。					

76号住居跡（第190図）

位置 A区中央部、N8グリッドにある。規模と平面形 3.50 × 3.12 m 主軸方向 N-6°-W 壁 壁高は約 20cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居跡中央部からカマド左側にかけて硬化している。ピット 1箇所。P1は深さ18cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 幅120cmで、焚口部から煙道部までは130cm、袖部壁外への掘り込みは38cmである。覆土 下層の黒褐色土はロームブロックを比較的多く含む。遺物 カマド燃焼室中央部から円柱状の土製支脚が正立状態で出土している。所見 住居の形態から9世紀頃の竪穴住居跡と考えられる。ロームブロックを含んだ下層覆土は人為堆積の可能性が考えられる。



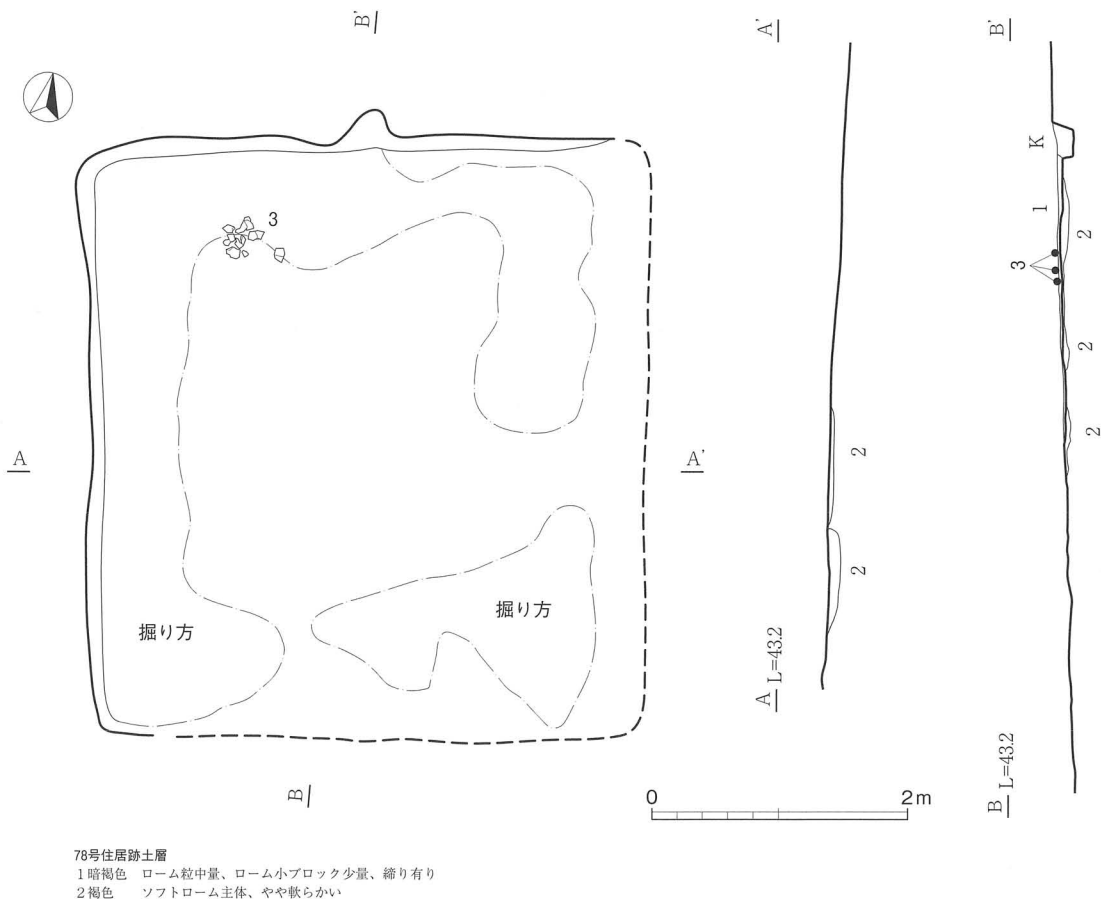
第190図 76号住居跡・出土遺物

表 85 76号住居跡出土遺物観察表

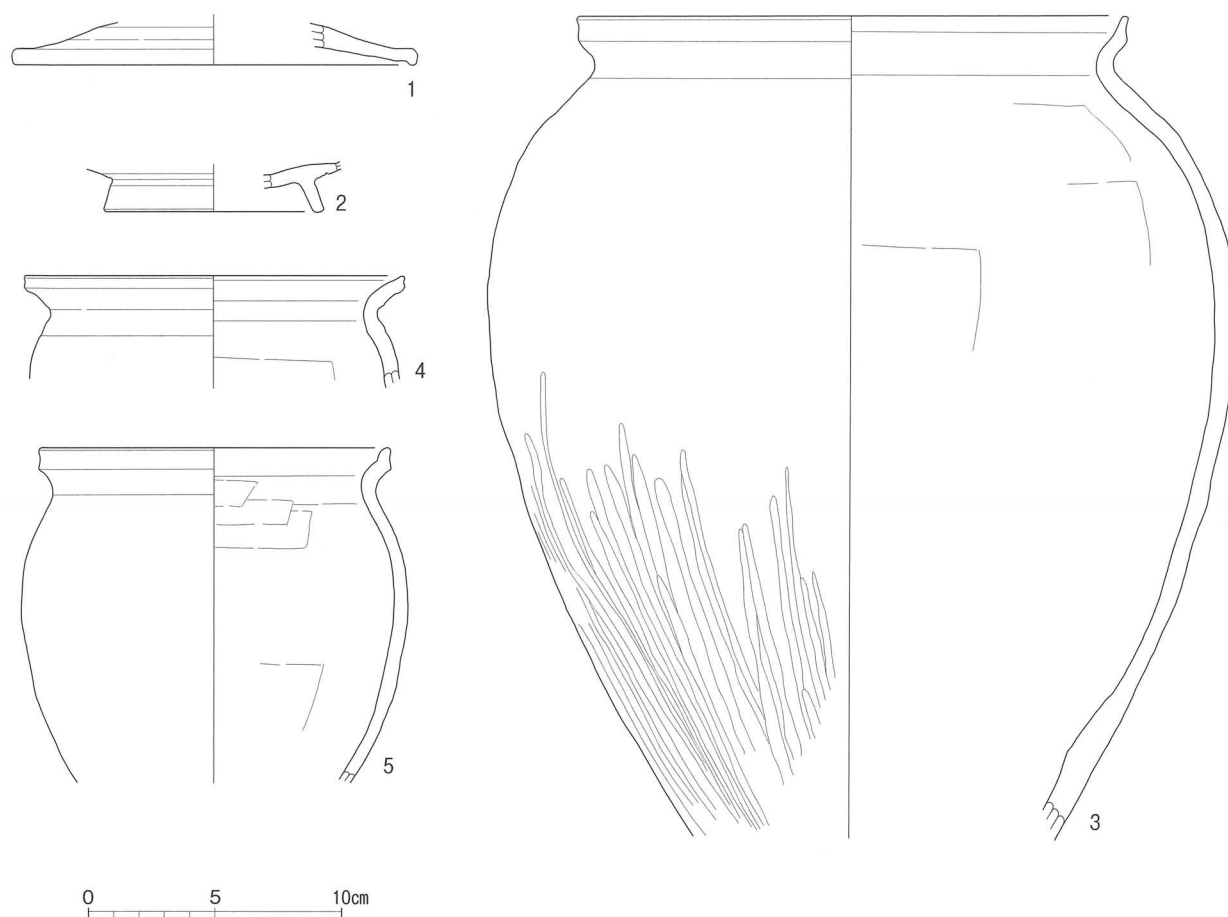
図版番号	種別種	口径器高底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 環	(13.2) 5.0 8.0	底部回転ヘラ切り後一方向ヘラケズリ。底部黒色付着物。	長石礫、黒色鉄分粒	普通	灰色	60%
2	土師器 甕	(16.4) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	暗褐色	
3	土師器 甕	(16.8) — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	暗褐色	
4	土製品 支脚	径 3.2 ~ 5.8cm、長 19.8cm、重 574g		長石、石英	良好	にぶい橙色	

78号住居跡（第191・192図）

位置 A区中央部、M7・N7グリッドにある。**規模と平面形** 4.78 × 4.34 mの方形。**主軸方向** N - 13° - W **壁** 北壁から西壁にかけて僅かに残存している。**床** 住居跡床面はほとんど残存せず、床下の掘り方の範囲と地山ロームが露出している。**ピット - カマド** 北壁中央部に、僅かに壁外への掘り込みが見られる。**覆土** 覆土はほとんどなく、掘り方の覆土も浅く褐色のソフトロームが主体となっている。**遺物** カマド左側前面の床上から土師器の甕が出土している。**所見** 支柱穴をもたないやや大型の住居跡で、出土遺物から8世紀後葉から9世紀前半頃の住居跡と考えられる。



第191図 78号住居跡



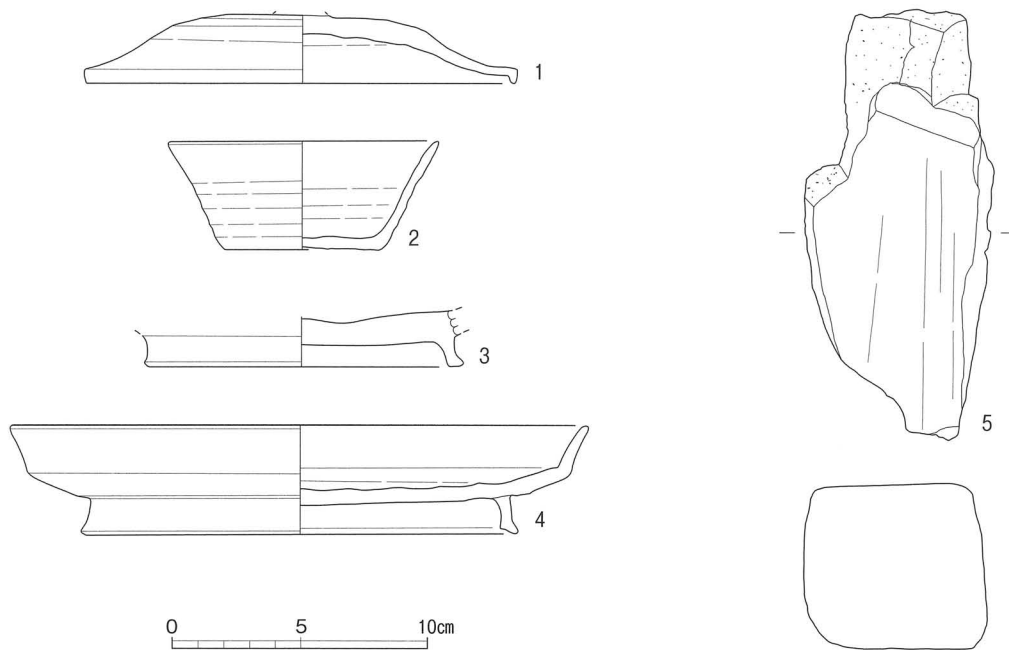
第192図 78号住居跡出土遺物

表86 78号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	15.8 — —	口縁部片。口縁端部を下方に短く折り返す。内外面ともロクロ目が弱い。	長石、石英	不良	灰白色	
2	須恵器 高台付坏	— — (8.6)	高台部片。	長石、石英	普通	灰色	
3	土師器 甕	(21.5) — —	口縁部内外面ヨコナデ、胴上半部ナデ、下半部ミガキ、内面ヘラナデ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	25%
4	土師器 甕	(15.0) — —	口縁部片。口縁端部を上方に摘み上げる。	長石、石英	良好	黒褐色	
5	土師器 甕	(13.8) — —	口縁部片。口縁端部を上方に摘み上げる。	石英、チャート	良好	橙色	外面摩耗

82号住居跡（第193・194図）

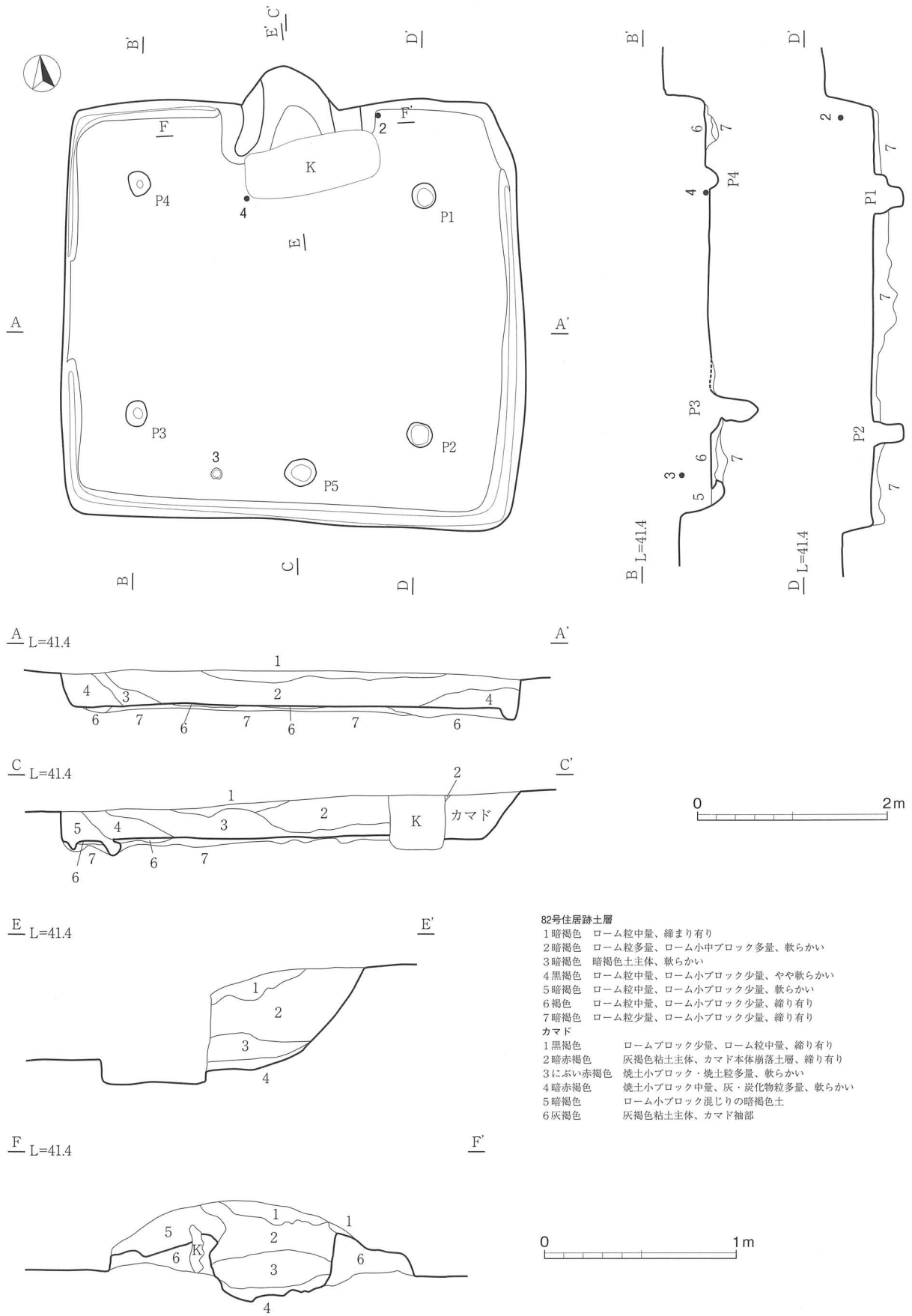
位置 A区の南東部N10グリッドにある。規模と平面形 4.88×4.84mの方形。主軸方向 N-5°-E 壁 壁高は約38cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 明瞭な硬化面が見られず、全体に残りが悪い。ピット 5箇所。P1からP4は支柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。カマド 幅126cmで、煙道部の壁外への掘り込みは42cmである。覆土 南側からは、黒褐色土や褐色土の流入堆積層が見られ、その上層からは北側の床面を覆う主体層となる人為的な埋め戻し堆積が見られる。遺物 須恵器坏、蓋、盤と砥石があり、須恵器坏は9世紀前葉頃のもの、須恵器の蓋は8世紀後葉頃のものである。所見 住居は四本柱穴を持った8世紀後半頃のものと思われる。出土遺物は8世紀後葉～9世紀前葉頃のもので廃絶時期を示すものと思われる。



第193図 82号住居跡出土遺物

表87 82号住居跡出土遺物観察表

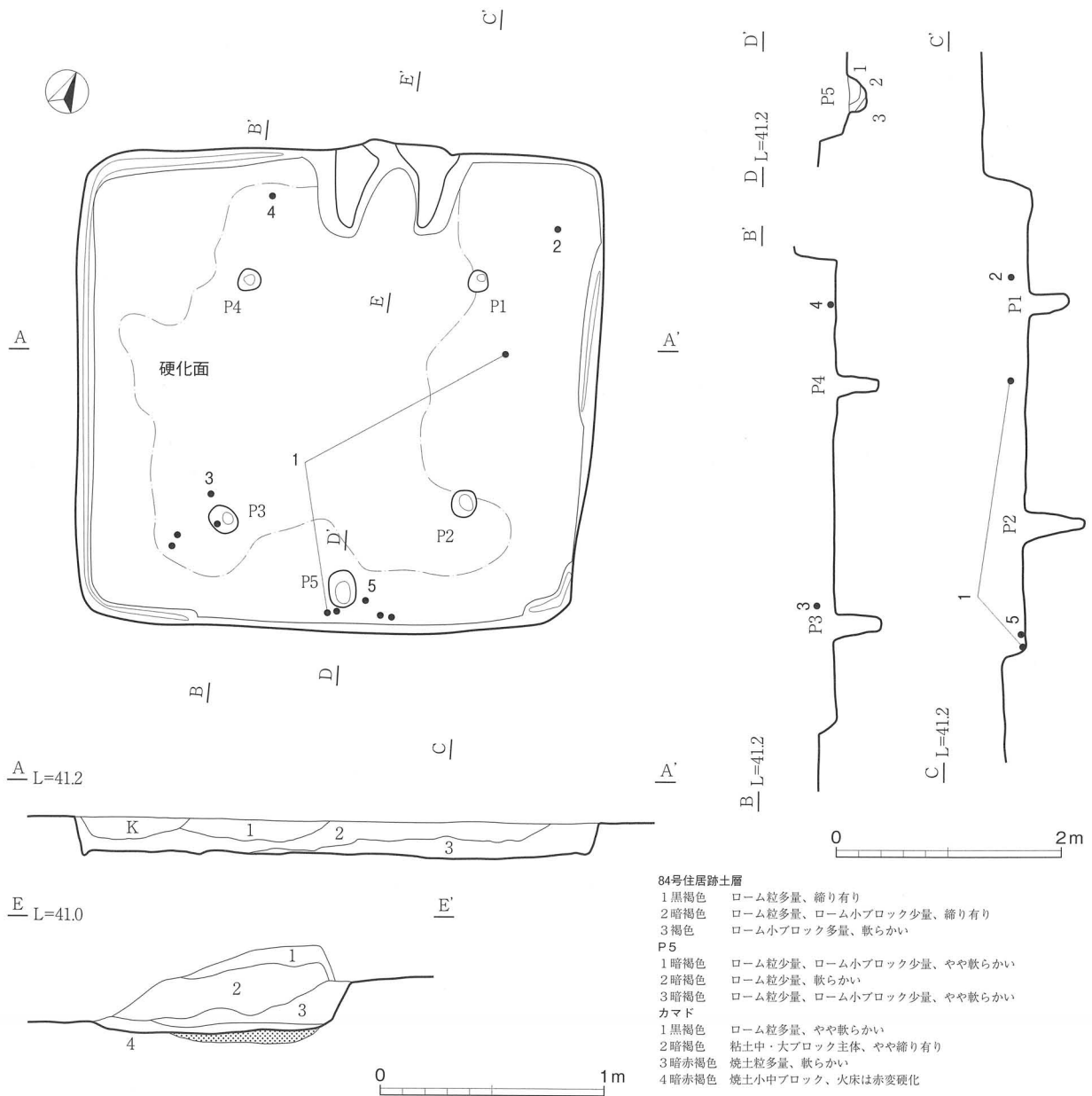
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	17.0 — —	天井部回転ヘラケズリ、口縁端部を下方に折り返す。	長石	良好	灰色	
2	須恵器 坏	10.6 4.3 6.0	体部～底部外面降灰付着、底部調整不明。窯内の焼き台として使用か？。	長石礫、黒色粒	良好	灰褐色	50%
3	須恵器 盤	— — 12.4	底部回転ヘラケズリ、後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石礫、海綿骨針	普通	灰色	
4	須恵器 盤	22.8 4.3 17.2	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。	長石礫、石英	不良	灰白色	50%
5	石製品 砥石	長16.9cm、幅7.3cm、厚7.2cm、重1360g、雲母片岩製。					



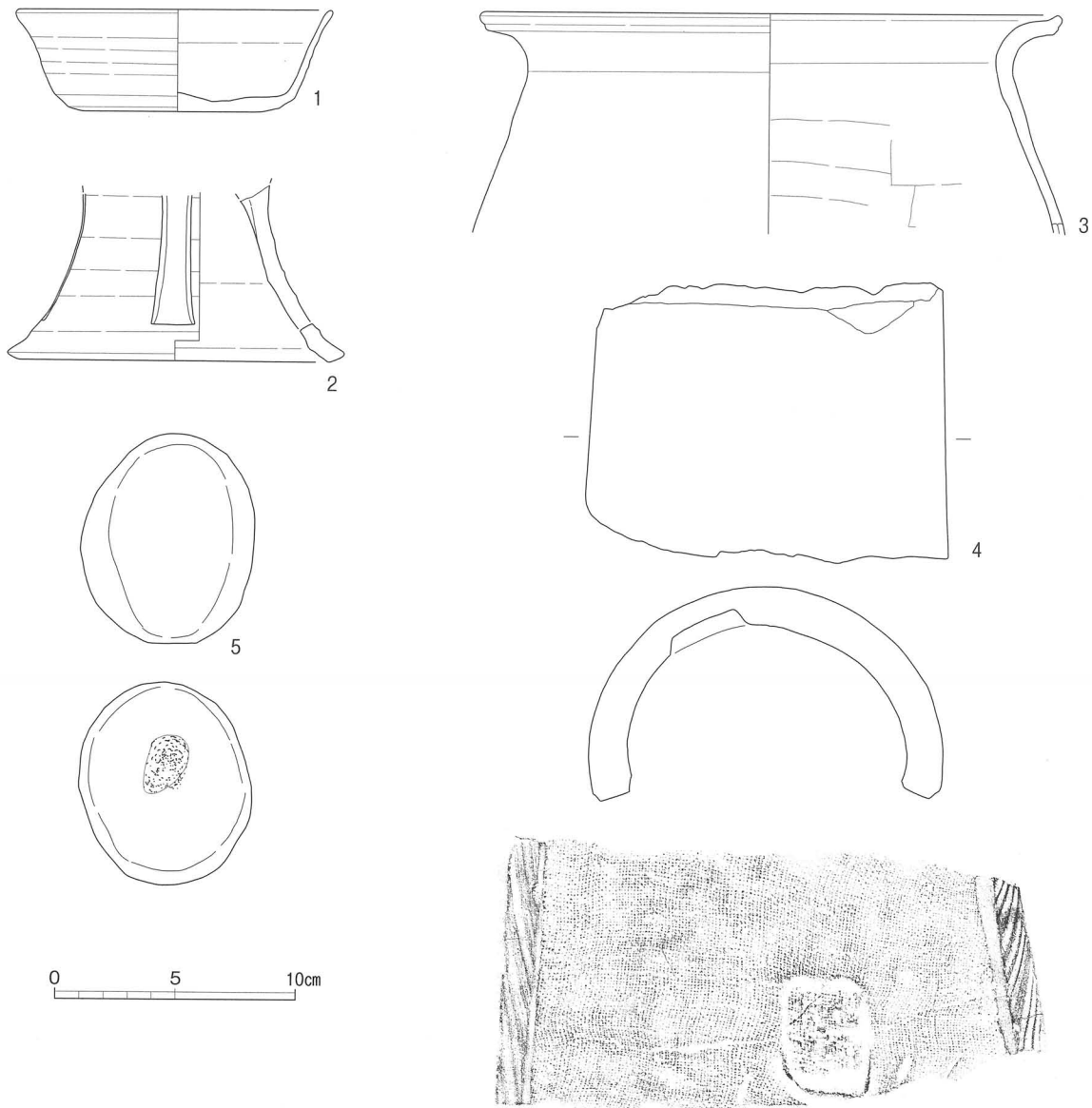
第194図 82号住居跡

84号住居跡（第195・196図）

位置 A区南東部、O10グリッドにある。規模と平面形 4.68 × 4.40 m 主軸方向 N - 25° - W 壁壁高は約30cm、外傾して立ち上がる。床 カマドの前面から4本柱穴の間と西側からP3の周囲にかけて特に硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。カマド 全体の幅は125cm、袖部の長さは70cm、燃烧室の幅は40cm、奥行き約50cm、煙道部の壁外への掘り込みがほとんど見られない。覆土 上層は黒褐色土、下層は褐色土主体の覆土。遺物 土器類は覆土下層から破片で出土しており、4の丸瓦片はカマド左袖近くの床面から出土している。所見 出土遺物は土器類が8世紀代のもので、丸瓦は内面に布目痕の付く円柱に巻いて制作したものと思われ、内面に圧痕があるが、円柱原体の角状の突出物によるものと思われる。住居跡はカマド袖部の住居内への突出が長く、4本主柱穴を持つことから8世紀代の竪穴住居跡と考えられる。



第195図 84号住居跡



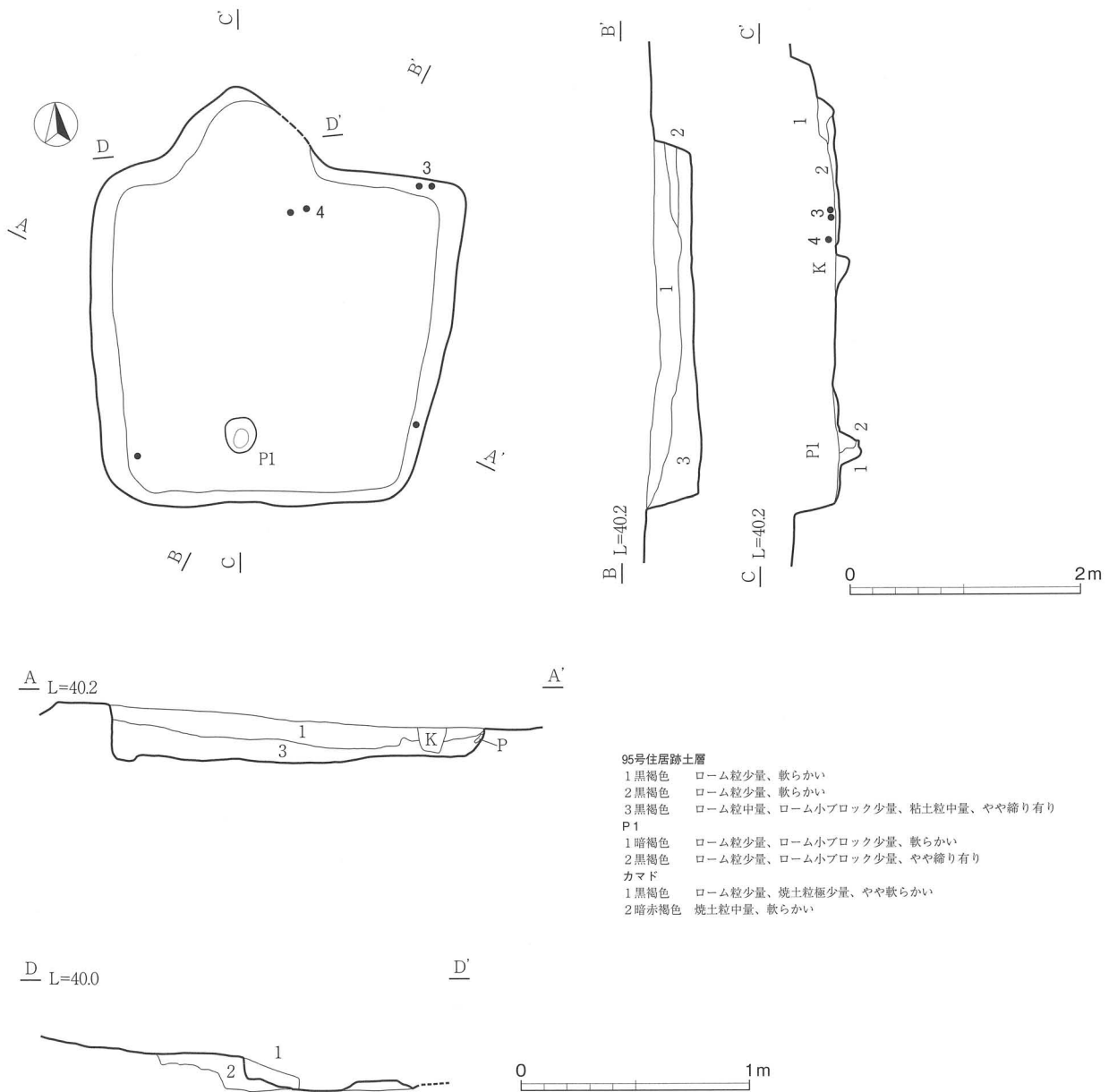
第196図 84号住居跡出土遺物

表88 84号住居跡出土遺物観察表

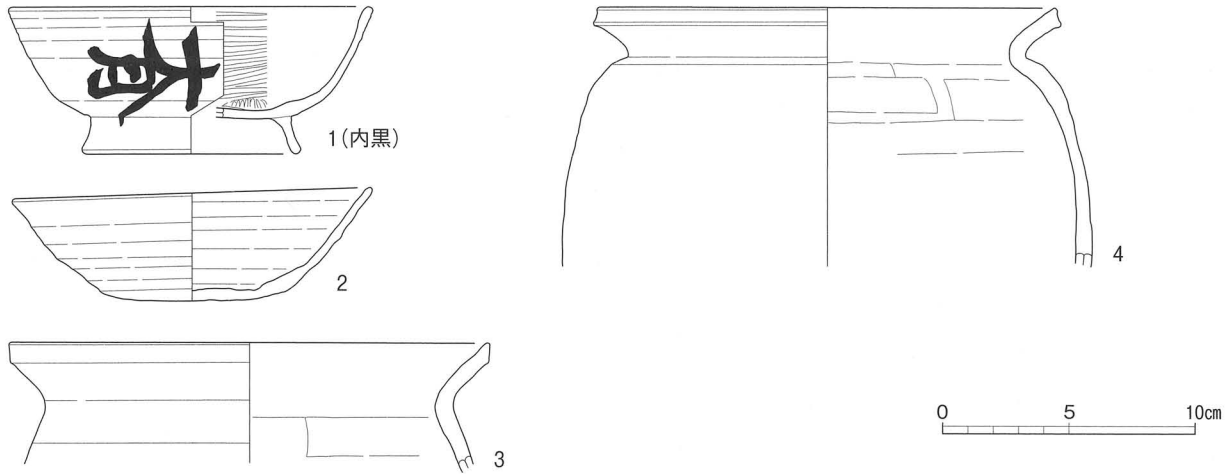
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考	
1	須恵器 坏	13.1 4.3 7.5	底部回転ヘラケズリ。ロクロ左回転。	長石、石英、海綿 骨針	良好	灰色	80%	
2	須恵器 高盤	— — (14.0)	脚部片。四方透かし。	長石礫、石英	不良	灰白色		
3	土師器 甕	24.0 — —	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	暗褐色		
4	土製品 瓦	幅14.5cm、高さ8.7cm、厚1.7cm、重675g、外面ナデ、内面布目と押圧痕、端面面取り2回。						
5	石製品 叩き石?	長8.8cm、幅7.0cm、重697g、凝灰質安山岩製。						

95号住居跡（第197・198図）

位置 A区の南東部O8・P8グリッドにある。規模と平面形 3.68 × 3.28 mの台形状。主軸方向 N-4°-E 壁 壁高は約44cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居跡全体が硬化している。ピット 1箇所。P1は深さ20cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 煙道部の壁外への掘り込みの範囲はとらえられたが、火床や袖部などは残存していなかった。覆土 黒褐色土主体で軟らかい。遺物 1・2の坏類は覆土から、3・4の土師器甕は床上から破片で出土している。所見 出土遺物や遺構の形態から、9世紀後葉頃の住居跡と考えられる。



第197図 95号住居跡



第198図 95号住居跡出土遺物

表89 95号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 碗	14.4 5.9 8.6	底部回転ヘラ切り離し後ロクロナデ。体部外面ロクロナデ、下端回転ヘラケズリ、内面黒色処理、ミガキ。	長石礫、石英粒	良好	にぶい橙色	体部側面墨書「大月」
2	須恵器 坏	14.2 4.5 7.6	底部回転ヘラ切り離し後オサエ。体部内外面ロクロナデ。酸化焰焼成。	石英、長石、チャート、微砂粒	普通	にぶい褐色	90%
3	土師器 甕	19.0 — —	口縁部片。口縁端部は上方に積み上げられ、外面が直立した平坦面となる。胴部外面斜位のヘラナデ。内面横方向のヘラナデ。	石英、長石、チャート、微砂粒	良好	にぶい褐色	
4	土師器 甕	18.2 — —	口縁部片。口縁部は端部に向かって肥厚し端部は平坦面となる。胴部外面ナデ。内面横方向のヘラナデ。	長石、石英、チャート	良好	にぶい橙色	

2 掘立柱建物跡

A区では、7棟の掘立柱建物跡を確認した。2・5・8～10号建物跡は欠番である。

1号掘立柱建物跡（第199図）

位置 A区北部、L2グリッドに位置する。 **平面形・規模・柱間距離** 古墳時代前期の5号住居跡と重複する。2間×2間の東西棟と推定する。桁行3.91m×梁行2.57mを測り、長方形を呈する。 **主軸方位** N-7°-W **柱穴・覆土** 推定8本構造のうち、5箇所確認した。覆土の状況は、いずれも抜取であろう。P1底面には、柱材端部の硬化圧痕（直径15cm）を検出した。 **遺物** 土師器・須恵器の細片がわずかに出土した。 **所見** 5号住居跡覆土中に本建物跡の柱穴を明瞭に確認できなかった。構築および廃絶時期は不明ながら、主軸方位は21・42号住居跡に比較的近い。

3号掘立柱建物跡（第199図）

位置 A区北部、K3グリッドに位置する。**平面形・規模・柱間距離** 18号住居跡と26号土坑を破壊し、17号住居跡と重複する。2間×2間の南北棟である。桁行3.69m×梁行3.41mを測り、正方形に近い。**主軸方位** N-3°-E **柱穴・覆土** 6箇所確認した。本来は8本構造と推定する。全て抜取と判断した。**遺物** P2抜取部分から2の須恵器甕口縁部が、P3抜取部分から1の須恵器坏が出土した。**所見** 17号住居跡の覆土を精査したが柱穴は確認できず、本建物跡の方が新しいと判断する。出土遺物から、廃絶時期は9世紀前葉頃と考えられる。

4号掘立柱建物跡（第200図）

位置 A区北部、L3グリッドに位置する。**平面形・規模・柱間距離** 東西は北辺2間・南辺3間×南北2間で、中央に東柱状の小ピットを伴い、総柱構造である。桁行北辺3.72m・南辺4.2m×梁行東辺3.38m・西辺3.74mを測り、不整形形状を呈する。**主軸方位** N-3°-W **柱穴・覆土** 10箇所ある。P2~4・8では柱痕と根固めを検出したが、他は明瞭な抜取であった。**遺物** 土師器・須恵器の細片がわずかに出土した。**所見** 主軸方位は21・42号住居跡に近似している（梁方向N-3°-W）。

6号掘立柱建物跡（第200図）

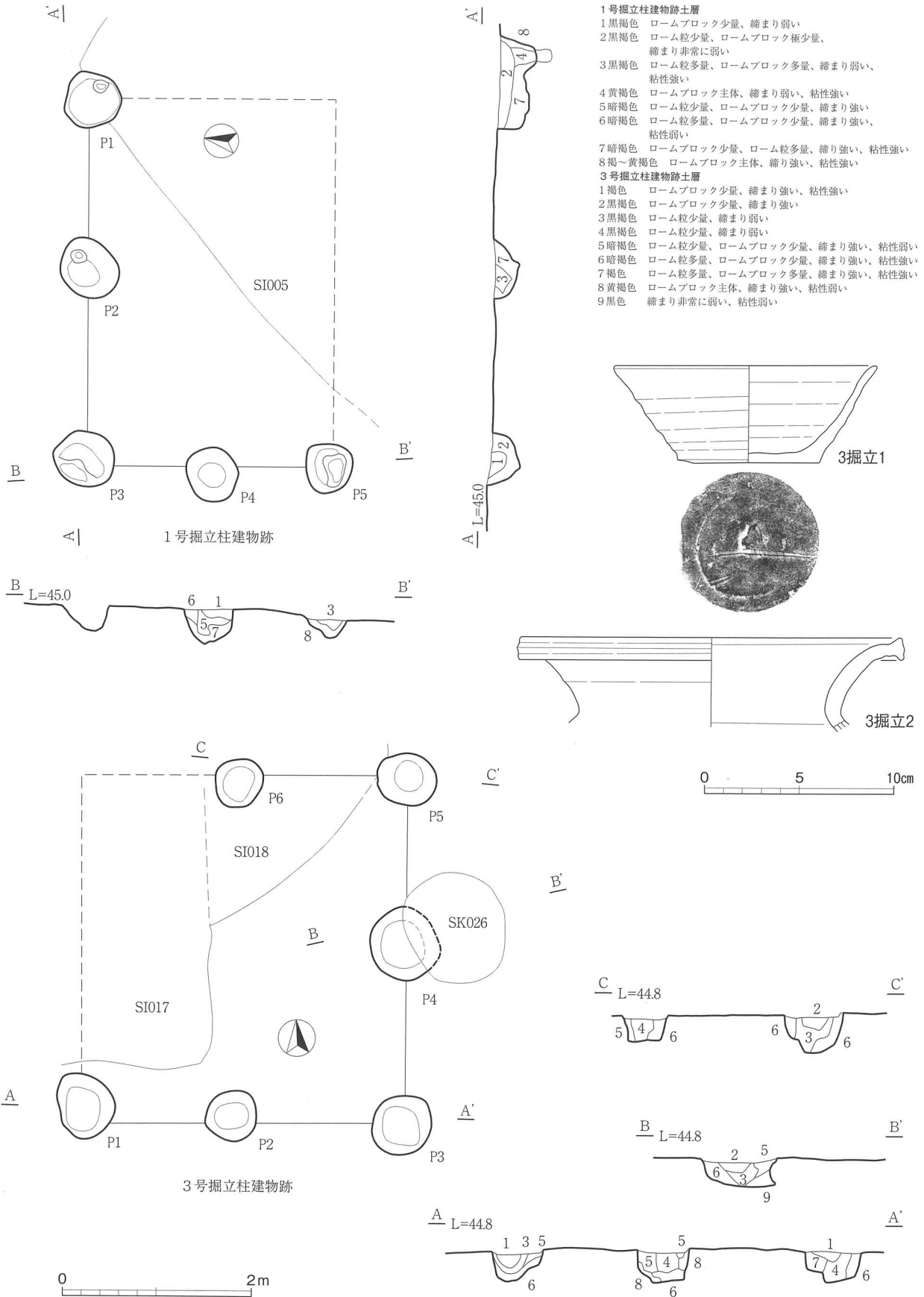
位置 A区北部、L4グリッドに位置する。**平面形・規模・柱間距離** 桁行東辺3間・西辺2間×梁行2間で、南北棟の側柱構造である。桁行東辺3.78m・西辺3.57m×梁行東北辺3.27m・南辺3.0mを測り、逆台形状を呈する。**主軸方位** N-17°-W **柱穴・覆土** 9箇所ある。抜取痕は明瞭であった。P8・9は浅く小さい。**遺物** 土師器・須恵器の小片が出土した。**所見** 主軸方位が7号掘立柱建物跡に近似することから、9世紀代に帰属する可能性がある。

7号掘立柱建物跡（第201・202図）

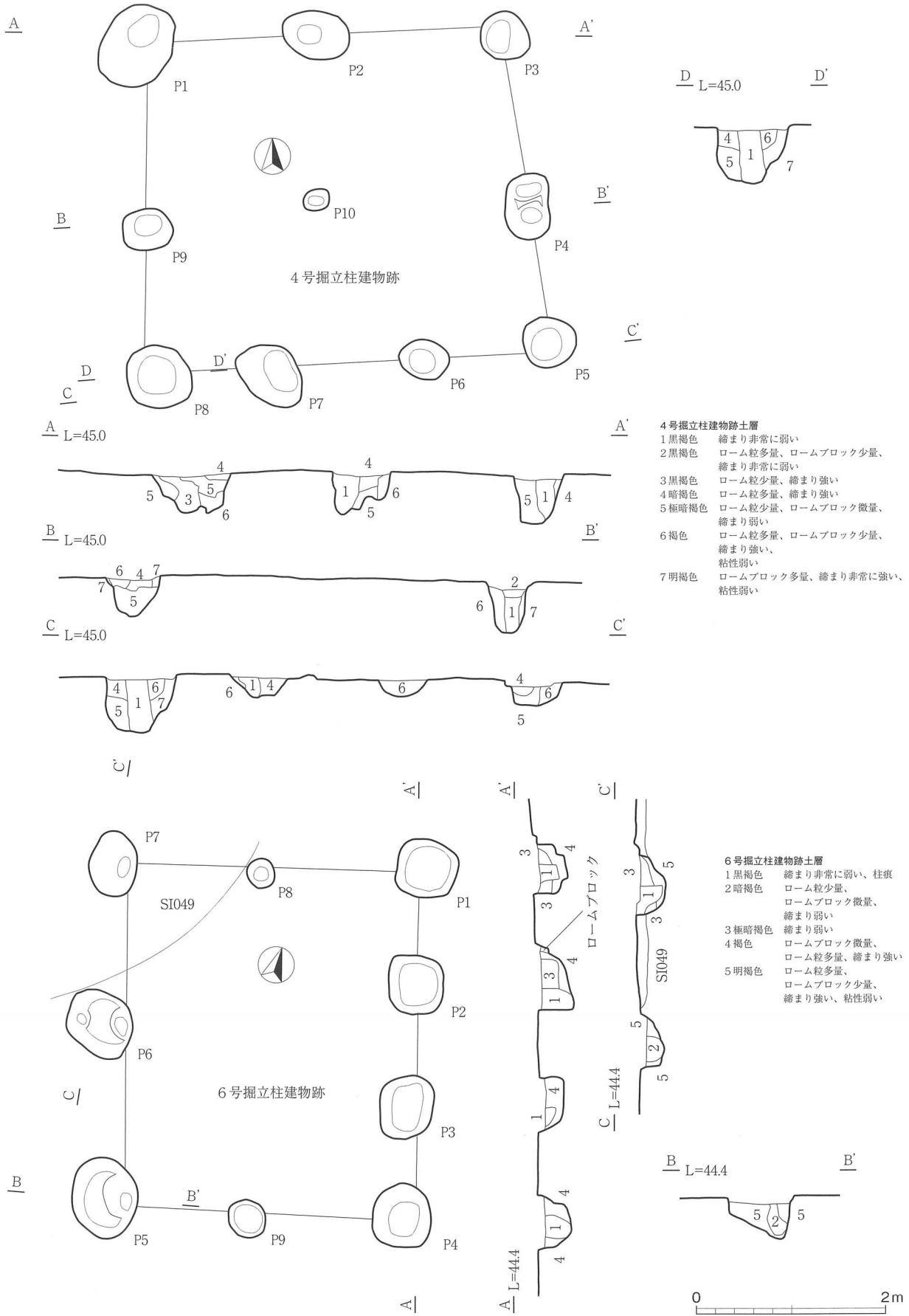
位置 A区北部、L3グリッドに位置する。**平面形・規模・柱間距離** 桁行3間×梁行北辺2間・南辺3間の身舎に、桁行3間×梁行1間の東庇が付く。身舎には東柱状柱穴が1箇所ある。桁行東辺と庇の柱穴群は連結する。桁行5.03m×梁行3.65m、庇梁行0.81mを測り、平行四辺形を呈する。**主軸方位** N-18°-W **柱穴・覆土** 身舎と庇で15箇所あり、他に小柱穴が5箇所ある。全て抜取で、ロームブロック主体土で完全に閉塞された柱穴もある。**遺物** 須恵器の蓋・盤・甕や土製支脚等が出土した。**所見** 主軸方位は6号建物跡に近似する。出土遺物から、廃絶時期は9世紀前葉頃であろう。小柱穴が点在し、建替えや補強の可能性がある。北西隅の柱穴は10世紀の22号住居跡によって消滅している。

表90 3号掘立柱建物跡出土遺物観察表

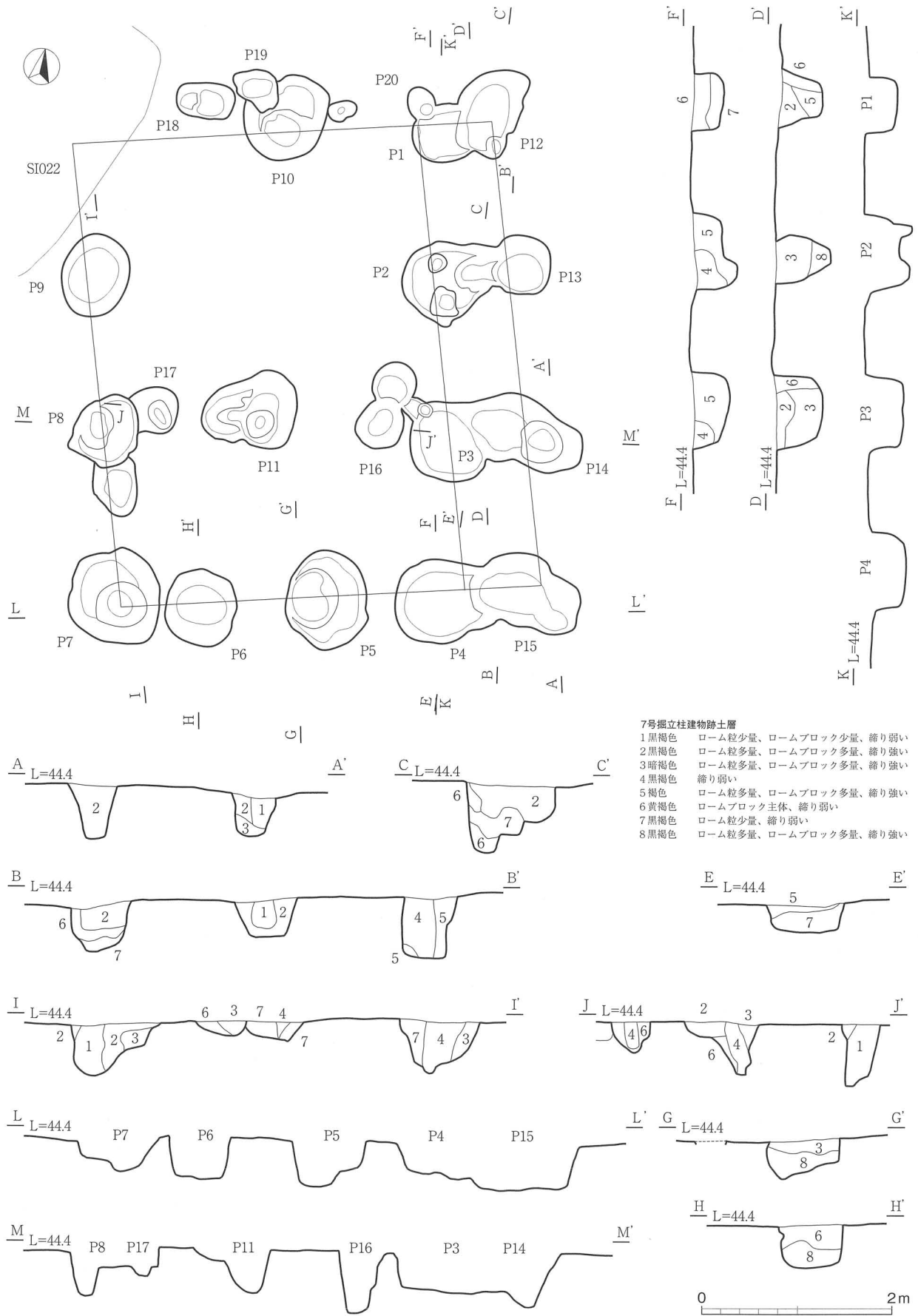
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(13.6) 5.2 7.5	底部回転ヘラ切り離し、ロクロ右回転。ヘラ記号「一」。	長石礫、海綿骨針、 黒色融出粒	普通	灰色	60%
2	須恵器 甕	(10.3) - -	口縁部片。	長石	良好	灰褐色	



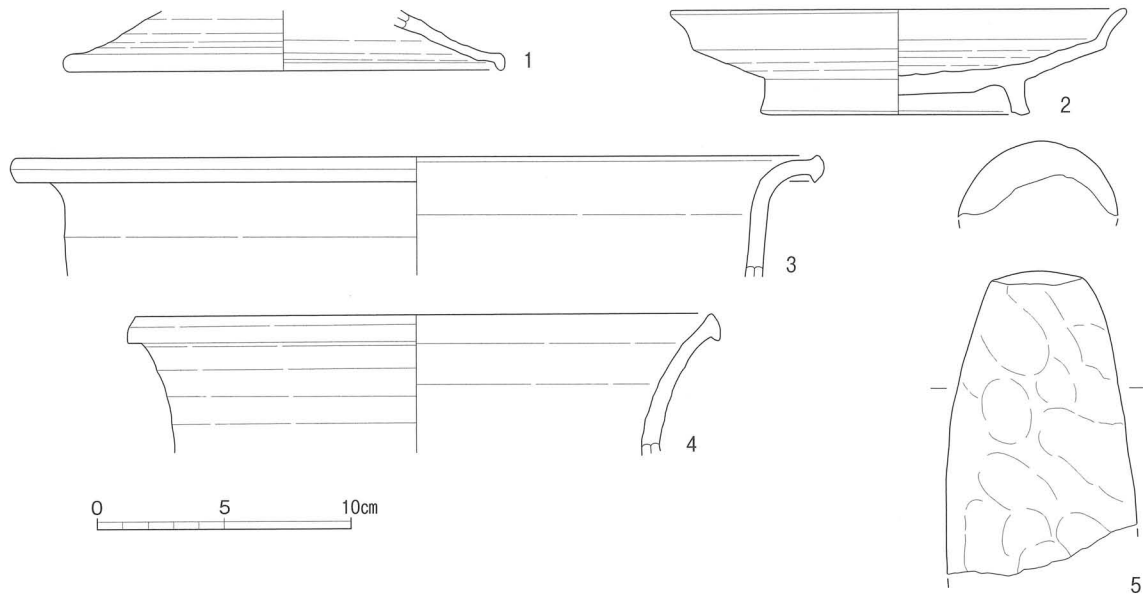
第199図 1・3号掘立柱建物跡・出土遺物



第200図 4・6号掘立柱建物跡



第201図 7号掘立柱建物跡



第202図 7号掘立柱建物跡出土遺物

表91 7号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器蓋	(17.2) — —	口縁部片。口縁端部を下方に折り返す。	長石、石英、チャート、海綿骨針	普通	灰色	
2	須恵器盤	(17.8) 4.2 10.5	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。	長石礫、海綿骨針微量	普通	灰色	40%
3	須恵器甕	(32.0) — —	口縁部片。鉢（バケツ）形の甕。	長石	良好	灰色	
4	須恵器甕	(23.0) — —	口縁部片。	石英、長石	良好	暗灰色	P7出土
5	土製品支脚	長 [12.0] cm、幅 7.4cm、厚—cm、重 [131.7] g。		長石、石英、金雲母	普通	褐色	

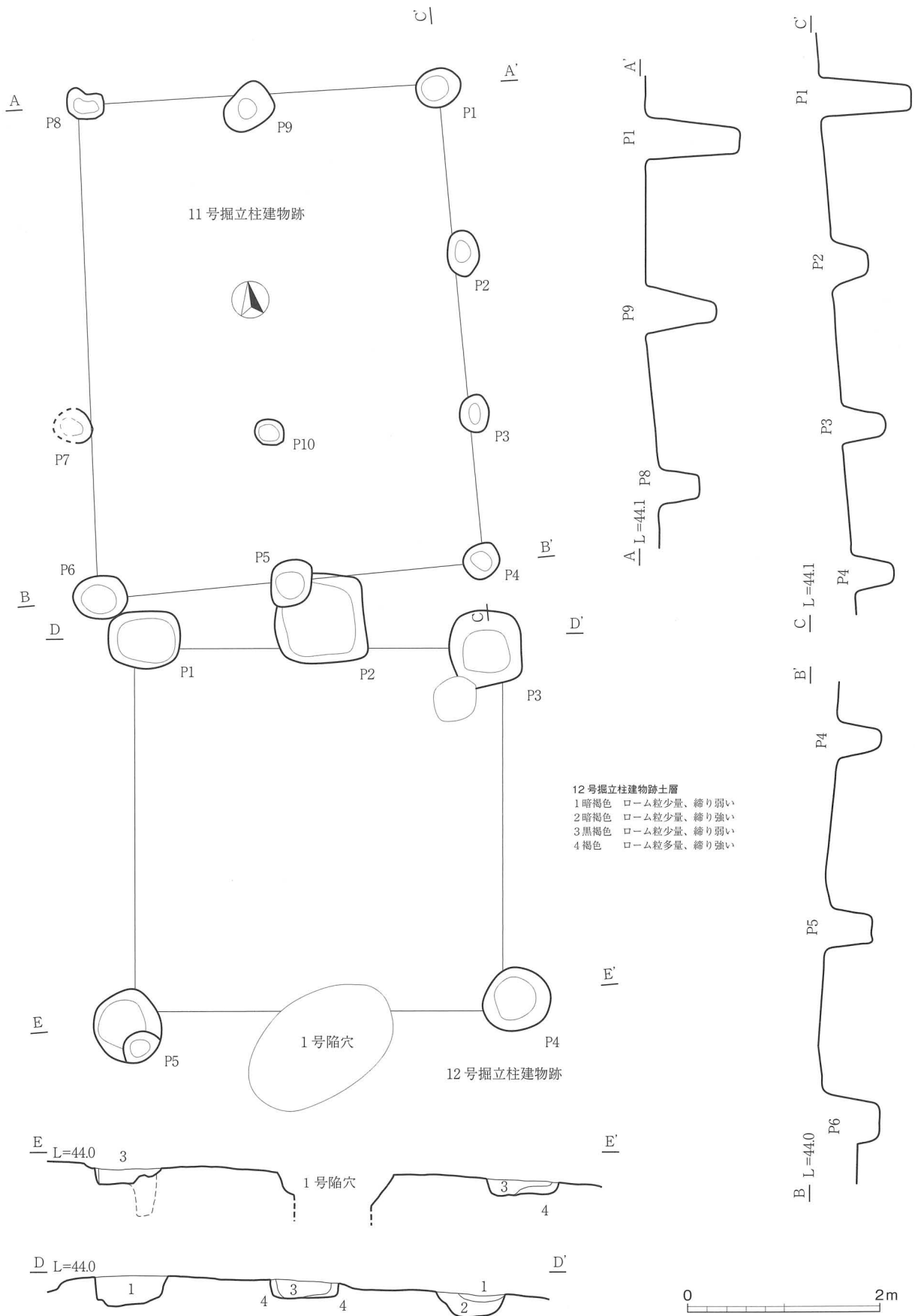
11号掘立柱建物跡（第203図）

位置 A区北部、M3グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 桁行3間×梁行2間で束柱状柱穴が1箇所ある。桁行東辺5.09m・西辺5.23m×梁行北辺3.76m・南辺4.06mを測り、台形状を呈する。

主軸方位 N-4°-E 柱穴・覆土 10箇所あり、桁行西辺の柱穴は攪乱によって破壊を受ける。P1・4・6・7で直径20cm前後の抜取痕を検出した。遺物 土師器・須恵器の細片がわずかに出土した。所見主軸方位は21・31号住居跡と近似している。

12号掘立柱建物跡（第203図）

位置 A区北部、M4グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 桁行2間×梁行1間の東西棟であろう。桁行北辺3.54m・南辺4.12m×梁行3.96mを測り、台形状を呈する。主軸方位 N-7°-E 柱穴・覆土 6箇所ある。概して浅く、深さ20cm前後である。南辺中央の柱穴は縄文時代の1号陥穴と重複し、確認できなかった。遺物 土師器・須恵器の細片がわずかに出土した。所見 梁間が4m近くあり、中間に浅い柱穴が存在した可能性がある。本建物跡のP2は、11号掘立柱建物跡のP5によって切られている。

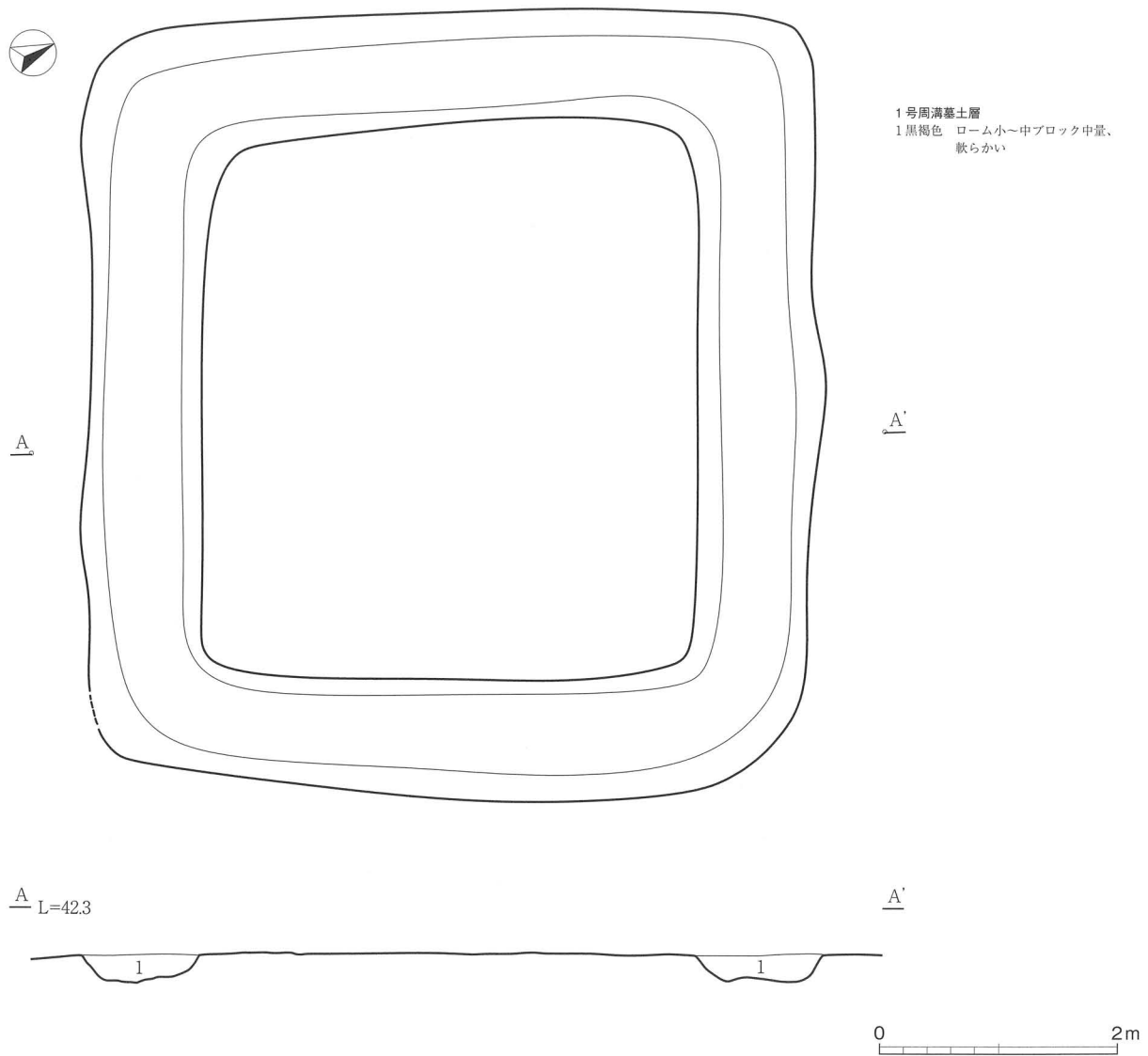


第203図 11・12号掘立柱建物跡

3 方形周溝状遺構

1号方形周溝状遺構 (第204図)

調査区南部のN8～N9グリッドには、方形周溝墓に形の似た、方形に廻る溝遺構がある。全体の規模は、南北方向6.10m×東西方向6.60m、溝幅は0.90～1.05mで、深さ約25cmを測る。出土遺物がなく時期は不明であるが、溝覆土は黒褐色土で軟らかく、奈良・平安期の遺構覆土と共通しているように思われる。



第204図 1号方形周溝状遺構

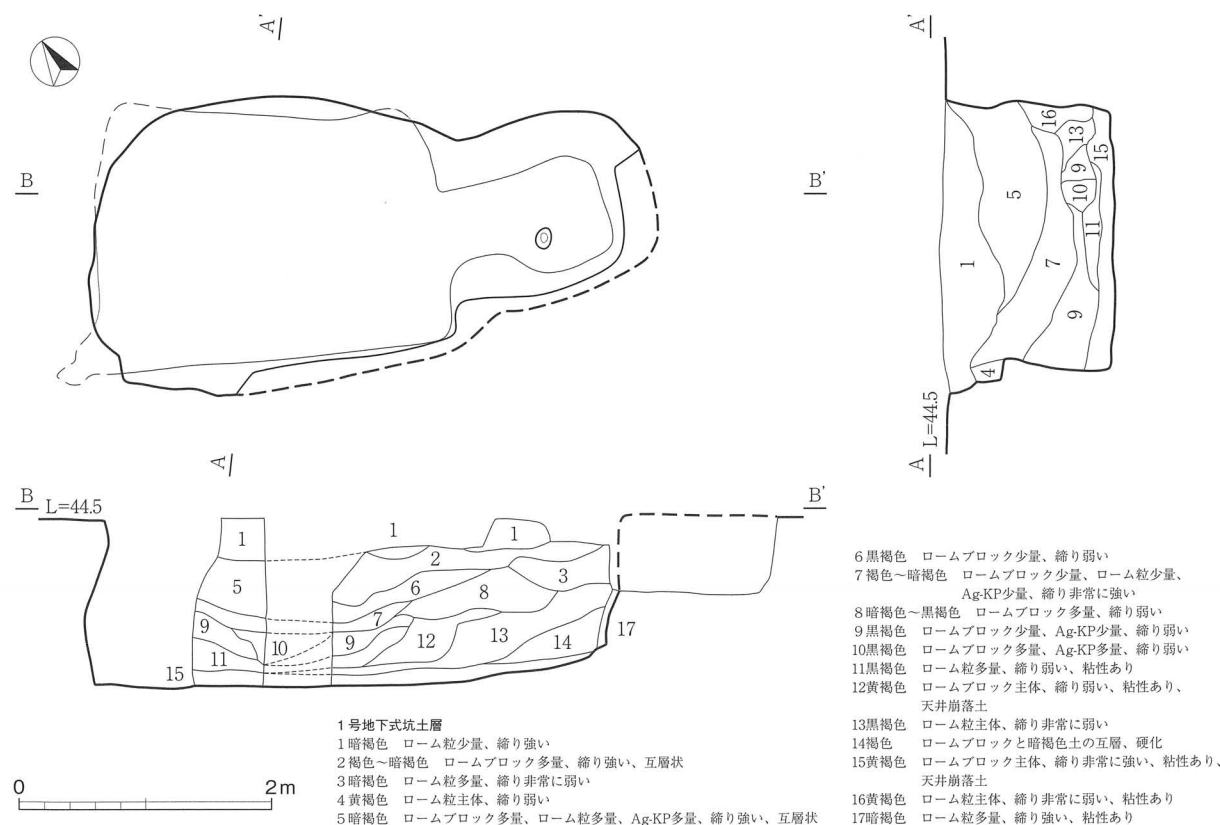
第5節 中世以降

1 地下式坑（第205～209図）

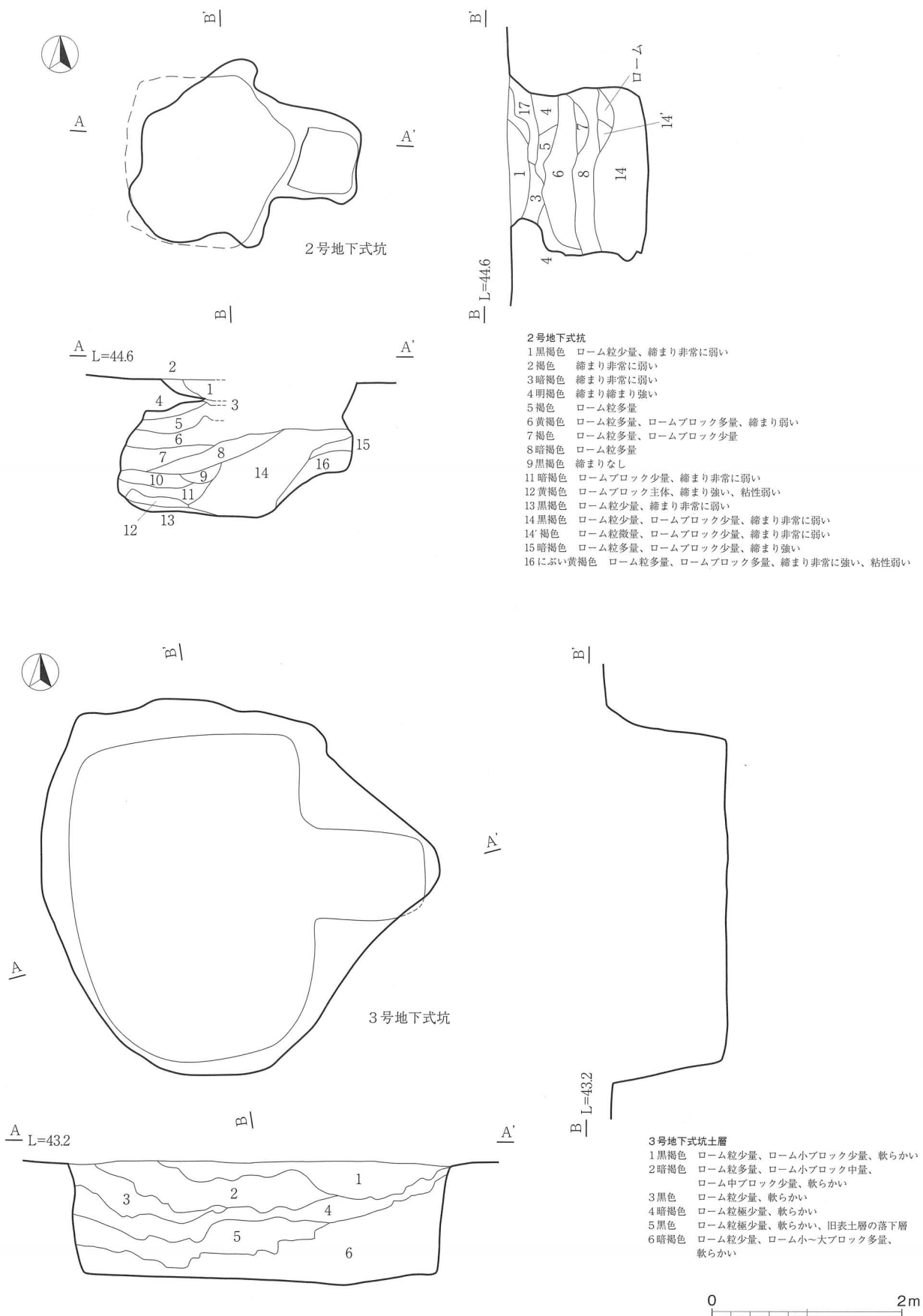
地下式坑は、調査区北部で1・2号地下式坑の2基（ともに26号住居跡と重複）、中央部で3～6号地下式坑の4基、中央部東端で浅く小規模だが地下式坑と似た平面形の大型土坑があり、7号地下式坑としている。1～6号の地下式坑は竪坑入口部を東に向け、7号地下式坑は、西向きに開口している。竪坑から居室を見たときの居室の平面形は、1と6号が縦長で、3～5、7が横長平面形である。2号地下式坑は、居室の規模が他とくらべて特に小型で、天井が一部残り、居室と竪坑の間に段差が伴う。縦長平面の居室を持つ6号地下式坑は、竪坑の底面から居室の底面まで、緩やかな傾斜を持っている。その他の地下式坑は竪坑底面と居室底面は傾斜や段差をもたず平坦な状態である。6号地下式坑の出土遺物は古瀬戸の平埴など、15世紀代のもの、5号地下式坑出土の播鉢も低高台を持ち同じ頃のものかと思われる。規模等は一覧表に示している。

表 92 地下式坑一覧表

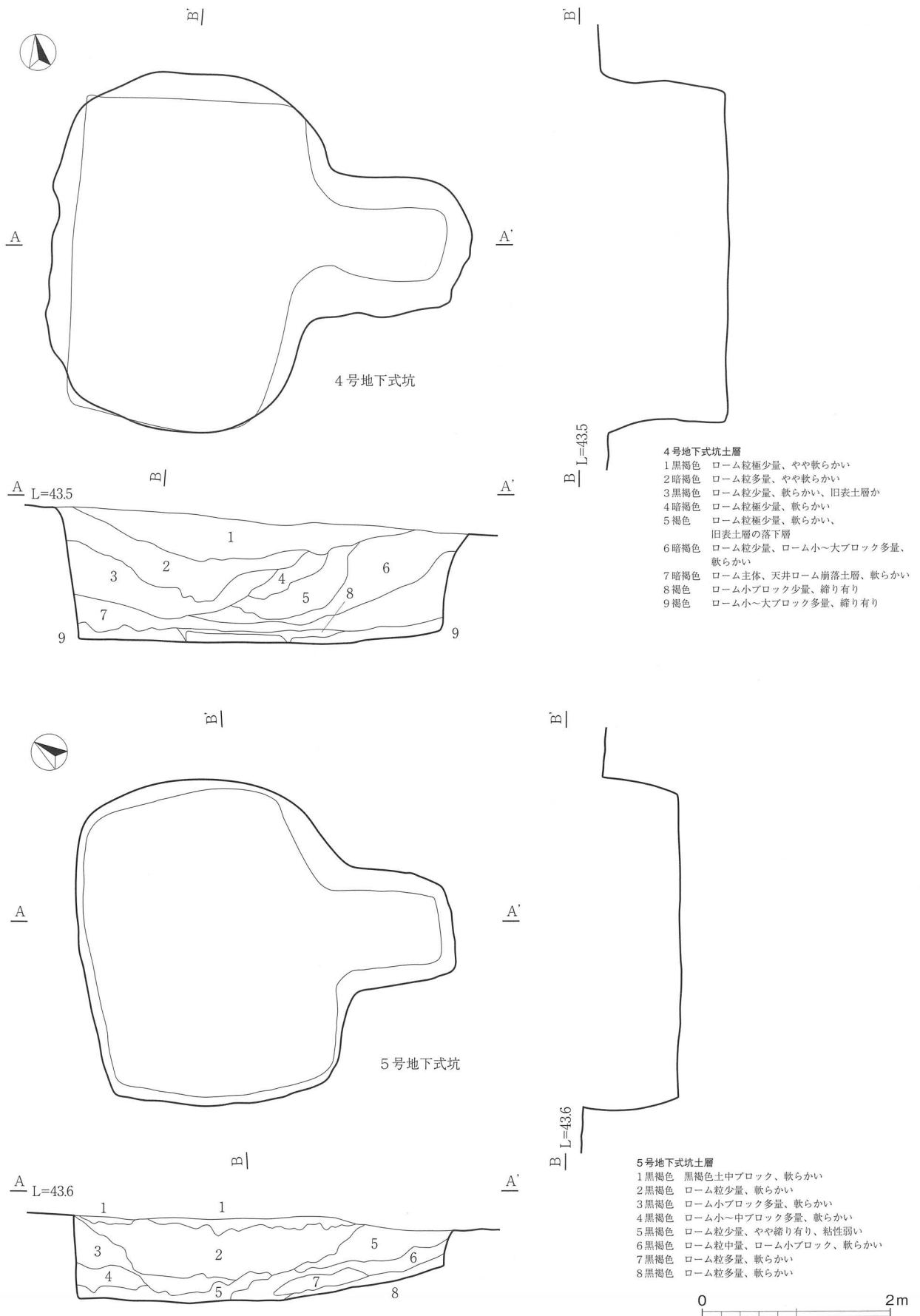
遺構名	位置	居室平面形態	規模（長辺×短辺×深さ、cm）			備考
1号地下式坑	M2	縦長長方形	410	210	132	
2号地下式坑	M3	横長長方形	233	176	138	
3号地下式坑	M7	横長長方形	400	385	130	
4号地下式坑	M6	横長長方形	410	380	140	常滑広口壺
5号地下式坑	M5	横長長方形	403	353	80	常滑播鉢、内耳壺
6号地下式坑	M6	縦長長方形	554	250	130	古瀬戸平埴・深皿、内耳壺
7号地下式坑	D7	横長長方形	340	310	40	



第 205 図 1号地下式坑

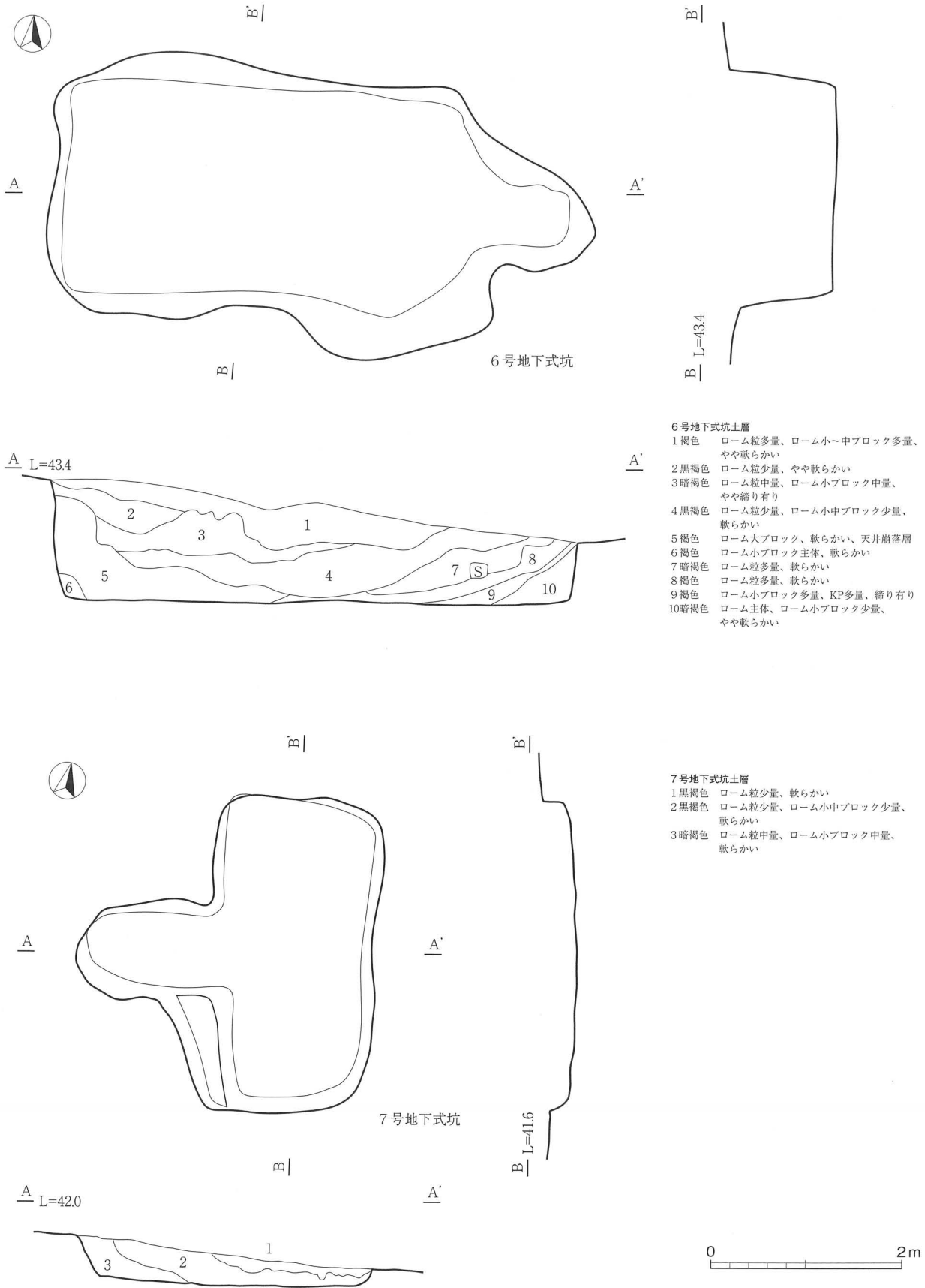


第206図 2号・3号地下式坑

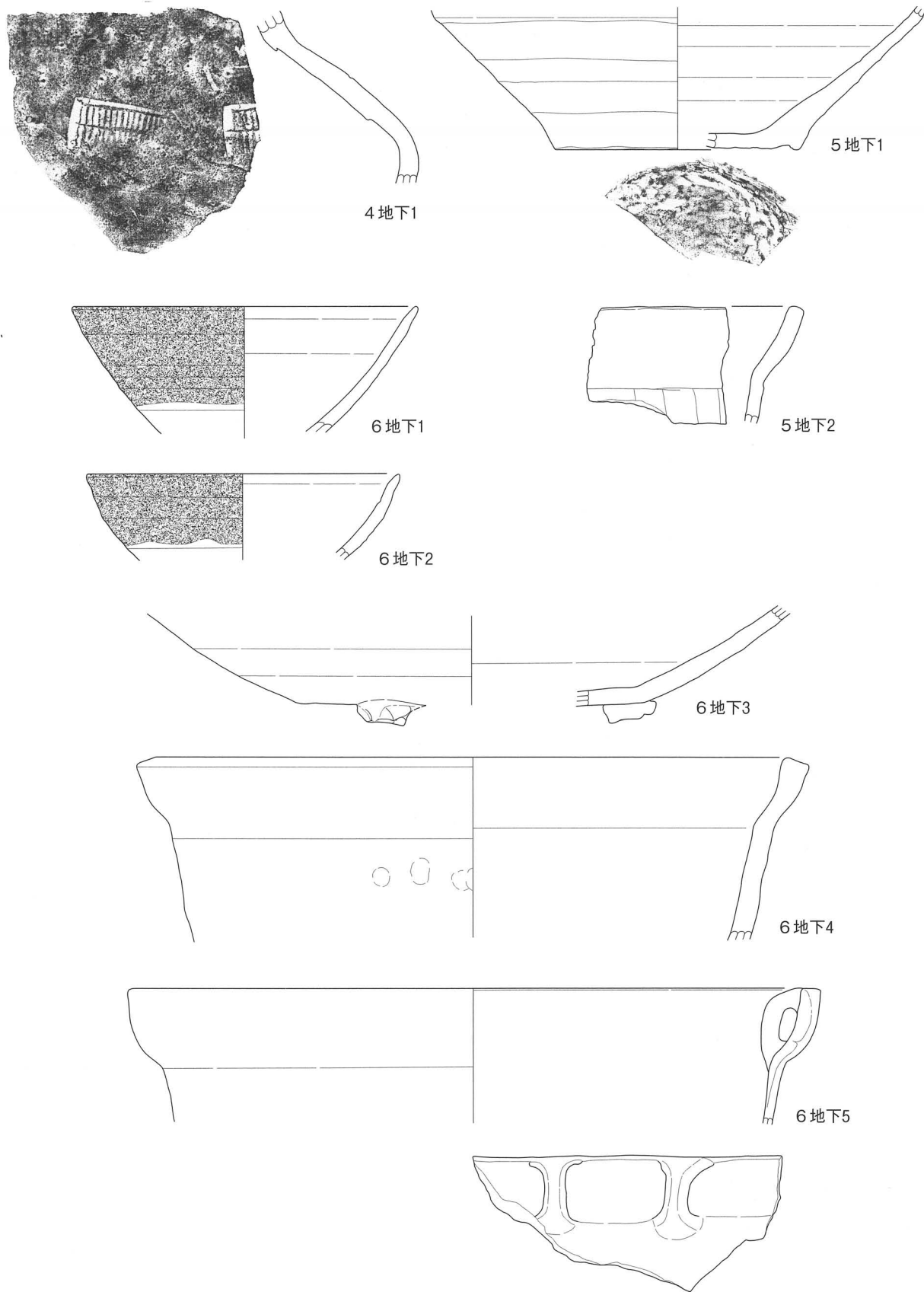


第 207 図 4号・5号地下式坑

第IV章 A区の遺構と遺物



第208図 6号・7号地下式坑



0 5 10cm

第209図 地下式坑出土遺物

表 93 地下式坑出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
4地下1	常滑 広口壺	— — —	肩部片。頸部ナデ、肩部ヘラナデ、スタンプ文を印刻する。	長石	良好	灰黄褐色	
5地下1	常滑 播鉢	— — (12.6)	体部外面上半部ロクロナデ、下半部回転方向のヘラケズリ。高台は低い三角高台。	長石	良好	灰黄褐色	
5地下2	内耳埴	— — —	体部と口縁部の境で屈曲する。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面縦方向のヘラケズリ。	石英を含む微砂粒	良好	にぶい橙色（内）	
6地下1	古瀬戸 平碗	(18.0) — —	口縁部片。体部は直線的に開く。	緻密	不良	灰白色	
6地下2	古瀬戸 平碗	(16.2) — —	口縁部片。体部はやや内湾して立ち上がる。	緻密	良好	灰白色	
6地下3	古瀬戸 深皿	— — (18.0)	体下半～底部片。底部に低い足が付く。	緻密	良好	灰黄色	
6地下4	内耳埴	(35.0) — —	口縁部片。体部と口縁部の境で屈曲する。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面指頭痕。	石英、海綿骨針	普通	にぶい橙色	
6地下5	内耳埴	(36.0) — —	体部と口縁部の境で屈曲する。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面指頭痕。	微砂粒少量	不良	浅黄褐色	

2 井戸（第5・210・211図）

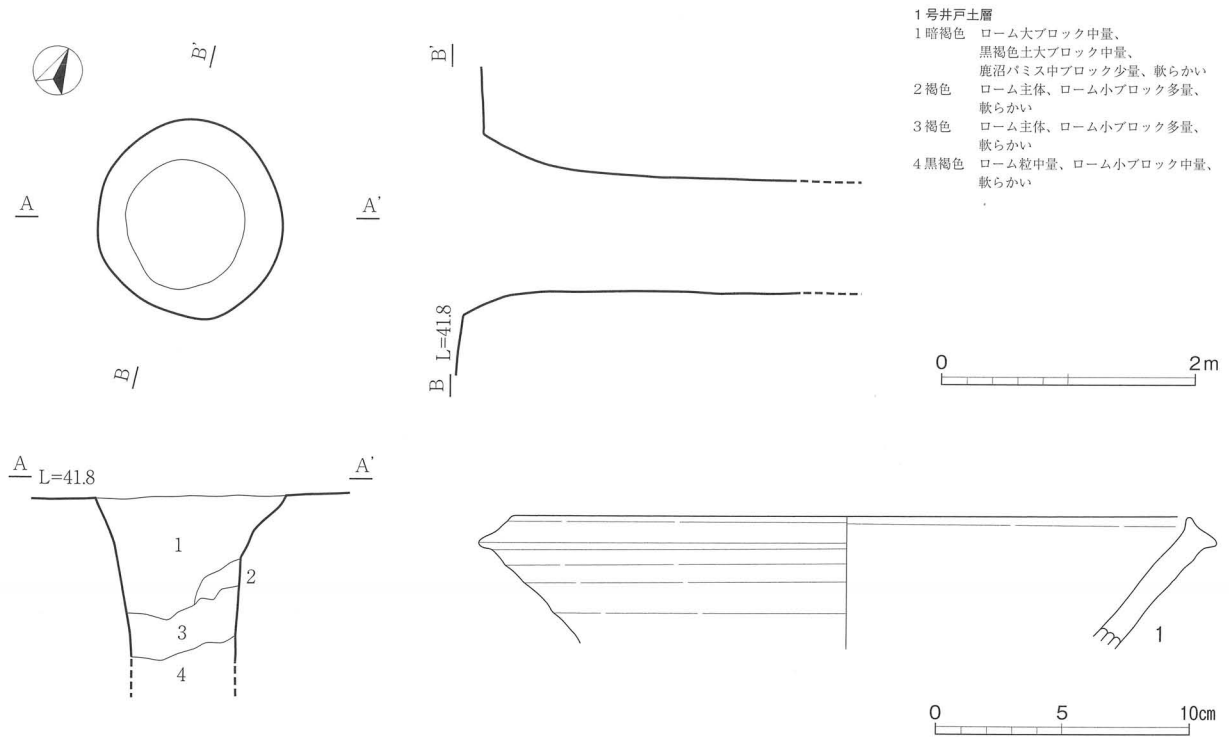
A地区中央部東端に1号・2号井戸の2基、南部に3号井戸1基の合計3基の井戸がある。1号井戸からは常滑播鉢片が、3号井戸中層からは、大きさ5～20cmの花崗岩・安山岩・砂岩等の被熱礫が38個と内耳埴片が出土している。出土遺物から見て中世以降の時期の井戸と見られる。その他規模等は遺構一覧表を参照していただきたい。

表 94 井戸一覧表

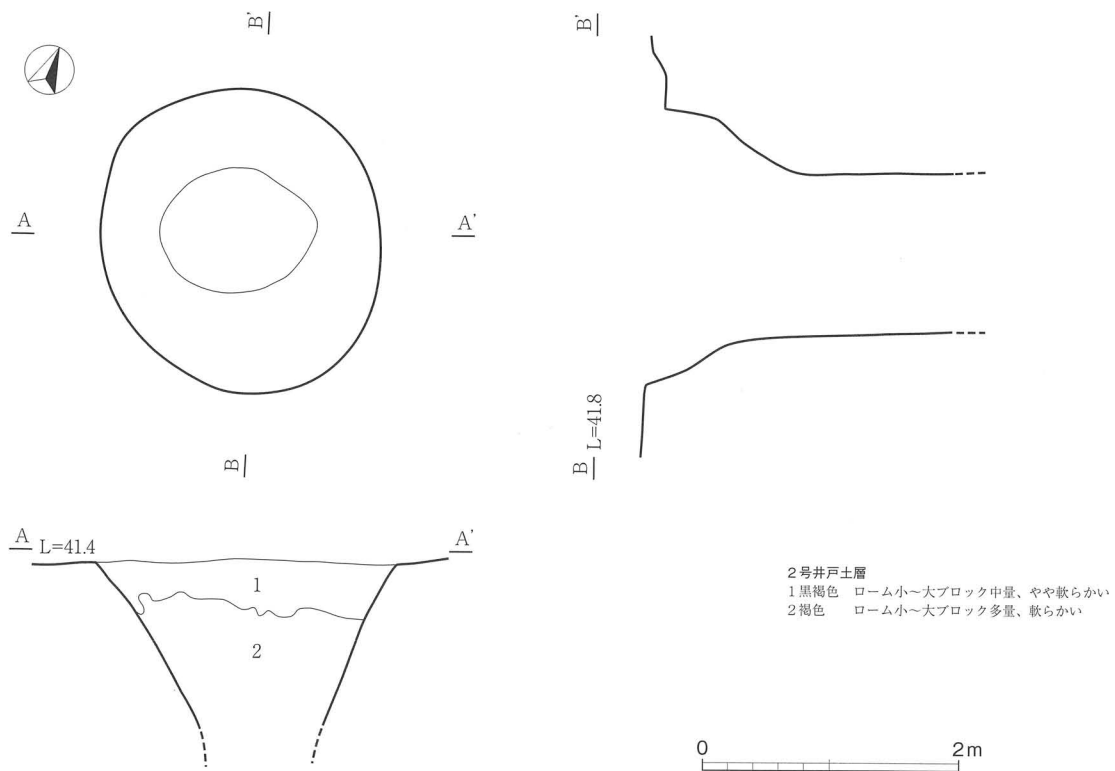
遺構名	位置	平面形態	規模（長径×短径×深さ、cm）			備考
			長径	短径	深さ	
1号井戸	D7	円形	80	74	260	常滑播鉢
2号井戸	D7	円形	284	226	240	
3号井戸	O9	円形	96	84	200	

表 95 井戸出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1井戸1	常滑 播鉢	(29.0) — —	口縁部片。体部内外面ロクロナデ。	長石、石英	良好	褐色（外）	
3井戸1	内耳埴	— — —	体部と口縁部の境の屈曲が弱く、体部から内湾気味に口縁部に至る。	長石、海綿骨針微量	普通	黒褐色	旧SK 79



第210図 1号井戸・出土遺物

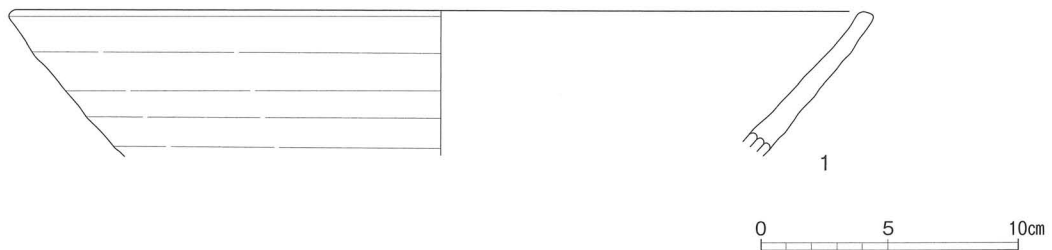


第211図 2号井戸

3 土坑（第5・212図）

A区全体で116基の土坑があり、A区北部では、略円形あるいは楕円形の土坑が計83基確認された。大きく分けると、直径0.9m前後の略円形、直径1.2m前後の略円形、長径1.4～1.6m前後楕円形の3種類がある。深さは12～47cmの間に収まり、30cm前後が主体である。その分布は集中し、土坑同士の重複事例が多い。覆土は暗褐色系で、多量のロームブロックを斑状に混入する場合もみられ、基本的にはほとんどが埋め戻されていると考えられる。出土遺物はほぼ皆無で、わずかに奈良・平安時代の須恵器や土師器の小片が認められたが、いずれも混入であろう。これらの土坑は弥生時代や奈良・平安時代の住居跡を破壊しているが、ただし、26号土坑は3号掘立柱建物跡P4によって切られていた。これら土坑群の構築時期が古代以降であることはほぼ間違いないが、個別遺構の詳細時期は不明とせざるをえない。近現代の円形の里芋穴が多く含まれる可能性も高い。

A地区南部では、地下式坑ほど大型ではないが、一辺2mを超えるやや大型の土坑がある。72号土坑は方形で、古瀬戸深皿片が出土している。出土遺物はないが中世の遺構の可能性のあるものは69号土坑で、底面にピットを2箇所持ち方形堅穴のような形状である。その他の土坑は長辺2m、短辺1m以下の長方形の土坑で、出土遺物がないが覆土は近世以降の時期に見られるような堆積土で芋穴的なものの可能性が考えられる。一覧表として掲載している。



第212図 72号土坑出土遺物

表96 72号土坑出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	古瀬戸深皿	(34.0) — —	口縁部片。内外面淡オリーブ色の灰釉掛け。	精良。灰色岩片	良好	浅黄色	

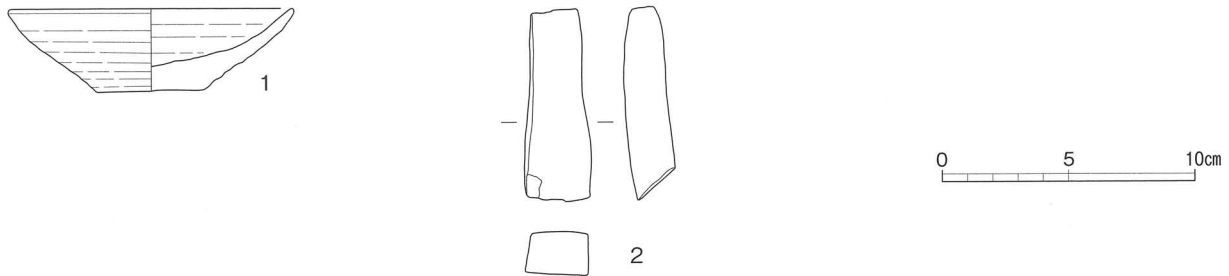
表 97 A区土坑一覽表

遺構名	位置	平面形態	規模 (cm)			備考
			長径	短径	深さ	
1号土坑	L2	楕円形	145	110	30	23住より新しい
2号土坑	M2	円形	130	124	33	23住より新しい
3号土坑	K4	円形	125	120	34	
4号土坑	K4	円形	130	115	38	
5号土坑	K3	方形	96	79	32	15住より新しい
6号土坑	L4	楕円形	140	120	25	
7号土坑	K4	円形	—	—	—	46住より新しい
8号土坑	K4・L4	楕円形	75	—	25	
9号土坑	K4・L4	楕円形	155	123	30	
10号土坑	K4	楕円形	115	104	19	
11号土坑	L3・L4	楕円形	140	126	24	
12号土坑	L4	円形	135	125	21	
13号土坑	L4	楕円形	174	122	25	
14号土坑	L4	円形	110	109	38	
15号土坑	K4・L4	円形	130	125	32	
16号土坑	K4・L4	円形	140	128	26	
17号土坑	L4	楕円形	150	129	32	
18号土坑	L4	円形	130	—	21	
19号土坑	L4	楕円形	139	—	12	
20号土坑	N2	円形カ	123	—	16	
21号土坑	L3	楕円形	112	98	44	
22号土坑	N2	円形カ	82	—	20	
23号土坑	L3	楕円形	149	112	—	
24号土坑	L3	円形	116	—	46	
25号土坑	K3	楕円形	108	114	25	
26号土坑	K3	楕円形	118	105	43	3号掘立より古い
27号土坑	K3	楕円形	135	123	34	
28号土坑	K3	楕円形	103	89	—	
29号土坑	L3	円形	121	116	47	
30号土坑	L3	楕円形	100	84	37	
31号土坑	L3	楕円形	88	75	15	
32号土坑	L3	円形	85	82	26	
33号土坑	L3	円形	97	—	18	
34号土坑	L3	円形	105	101	20	
35号土坑	L3	楕円形	100	75	13	
36号土坑	L3	楕円形	156	140	30	
37号土坑	K3	楕円形	70	66	—	
38号土坑	K4	円形	93	—	14	
39号土坑	K4	円形	120	110	22	
40号土坑	L4	楕円形	115	—	23	
41号土坑	L4	楕円形	104	90	25	
42号土坑	L4	楕円形	106	94	16	
43号土坑	L4	円形	120	115	22	
44号土坑	N7	長方形	72	—	37	
45号土坑	N7	長方形	—	95	20	
46号土坑	M5	長方形	163	52	97	
47号土坑	—	—	—	—	—	欠番
48号土坑	L6	長方形	100	—	40	59住より古い
49号土坑	N5	長方形	200	80	36	
50号土坑	—	—	—	—	—	欠番
51号土坑	D7	長方形	154	—	8	
52号土坑	D7	長方形	185	78	66	
53号土坑	D7	長方形	130	66	38	
54号土坑	N7	長方形	143	117	—	
55号土坑	N7	長方形	200	—	55	
56号土坑	N6	長方形	242	95	12	
57号土坑	N6	長方形	246	107	—	
58号土坑	N6	長方形	—	73	17	
59号土坑	N6	長方形	157	72	34	
60号土坑	N6	長方形	216	185	30	
61号土坑	N6	長方形	134	73	34	
62号土坑	N6	長方形	200	108	57	
63号土坑	N6	長方形	255	90	32	
64号土坑	N7	長方形	190	95	33	
65号土坑	N7	長方形	185	80	23	
66号土坑	N7	長方形	186	110	44	
67号土坑	D8	長方形	130	60	15	
68号土坑	D8	長方形	132	95	32	

遺構名	位置	平面形態	規模 (cm)			備考
			長径	短径	深さ	
69号土坑	D8	長方形	255	150	75	方形竪穴カ
70号土坑	D8	長方形	410	155	20	
71号土坑	N7	長方形	260	175	18	
72号土坑	N7	長方形	230	200	61	古瀬戸深皿
73号土坑	—	—	—	—	—	欠番
74号土坑	N6	長方形	230	230	30	
75号土坑	—	—	—	—	—	7号地下式坑に変更
76号土坑	—	—	—	—	—	欠番
77号土坑	—	—	—	—	—	欠番
78号土坑	—	—	—	—	—	欠番
79号土坑	—	—	—	—	—	3号井戸に変更
80号土坑	L4	円形	135	105	15	
81号土坑	L4	楕円形	—	110	24	
82号土坑	L4	楕円形	150	125	21	
83号土坑	L4	楕円形	—	94	16	
84号土坑	L4	楕円形	135	120	38	
85号土坑	L4	楕円形	134	112	20	
86号土坑	L4	楕円形	—	50	21	
87号土坑	L4	楕円形	109	85	39	
88号土坑	L4	楕円形	130	—	38	
89号土坑	L4	楕円形	—	94	37	
90号土坑	L4	楕円形	88	—	18	
91号土坑	L4	楕円形	123	110	32	
92号土坑	M4	楕円形	133	130	29	
93号土坑	L4	円形	130	115	25	
94号土坑	L4	円形	120	—	21	
95号土坑	L4	円形	119	105	14	
96号土坑	L3	楕円形	118	110	23	
97号土坑	L3	円形	105	—	20	
98号土坑	L3	楕円形	80	70	14	
99号土坑	L3	楕円形	148	119	30	
100号土坑	L3	楕円形	130	85	27	
101号土坑	L3	円形	120	115	40	
102号土坑	L3	円形	88	85	37	
103号土坑	L3	長楕円形	—	50	55	2号陥穴に変更
104号土坑	K4	楕円形	172	—	8	
105号土坑	—	—	—	—	—	欠番
106号土坑	K4	楕円形	156	130	18	
107号土坑	K4	円形	100	92	13	
108号土坑	K4	円形	95	90	10	
109号土坑	K4	楕円形	105	93	9	
110号土坑	K4	楕円形	118	100	36	
111号土坑	K4	楕円形	102	83	14	
112~	—	—	—	—	—	欠番
114号土坑	—	—	—	—	—	
115号土坑	K3	円形	122	102	21	
116号土坑	K3	円形	111	107	20	
117~	—	—	—	—	—	欠番
120号土坑	—	—	—	—	—	
121号土坑	L2	—	—	75	21	
122号土坑	L2	楕円形	132	75	17	
123~	—	—	—	—	—	欠番
125号土坑	—	—	—	—	—	
126号土坑	L3	楕円形	134	110	36	
127号土坑	L3	長方形	122	80	42	
128号土坑	K4	楕円形	73	42	12	
129号土坑	K4	楕円形	116	105	42	
130号土坑	K4	楕円形	87	75	23	
131号土坑	—	—	—	—	—	欠番
132号土坑	M4	楕円形	89	70	31	
133号土坑	—	—	—	—	—	欠番
134号土坑	N4	楕円形	155	70	21	
135号土坑	—	—	—	—	—	欠番
136号土坑	—	—	—	—	—	欠番
137号土坑	N11	円形	112	110	18	

4 溜井状遺構（第5・213図）

南部の東端には、奥行き6m以上のくぼ地遺構がある。下層から中世のかわらけが完形で一点出土しており、中世の遺構の可能性はあるが、近代まで機能していた溝の落とし口にもなっており、かわらけを混入とすれば新しい時期のもの可能性もある。



第 213 図 溜井状遺構出土遺物

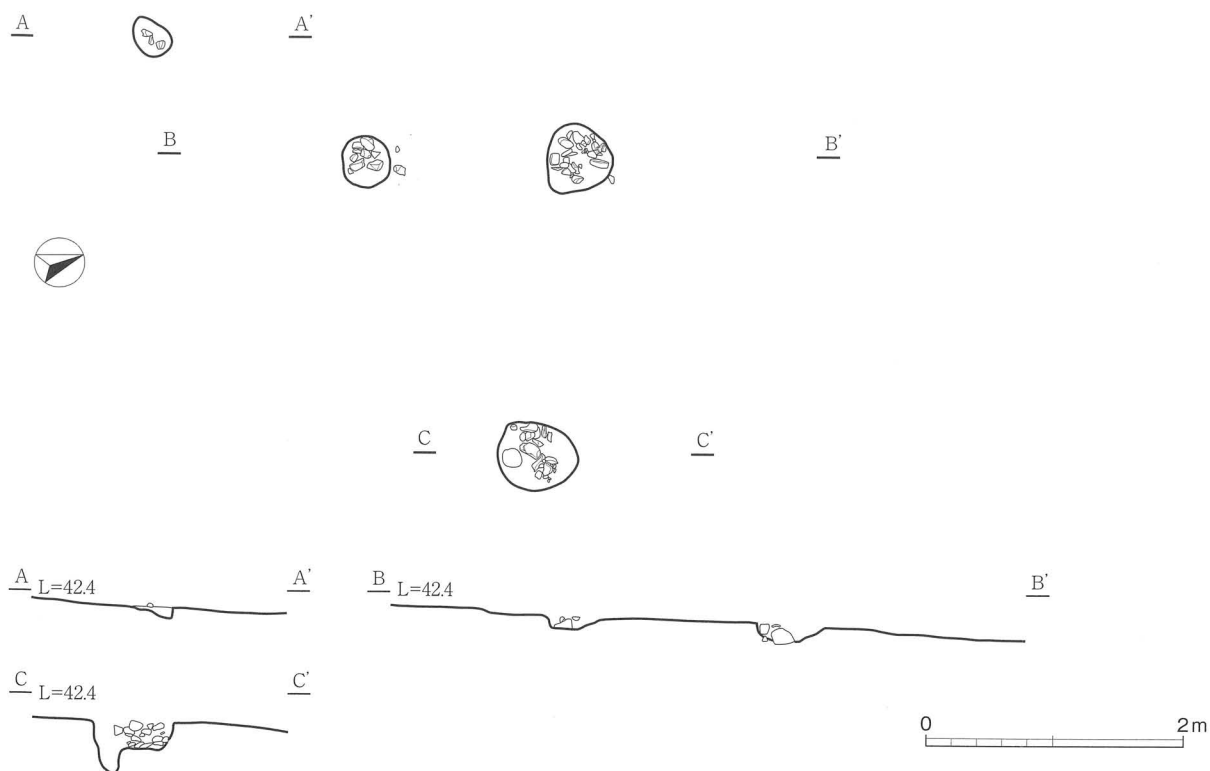
表 98 溜井状遺構出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考	
1	土師質土器 小皿	11.3 3.3 4.1	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。	長石礫、海綿骨針 微量	普通	灰色	80%	
2	石製品 砥石	長 7.6cm、幅 2.5cm、厚 1.8cm、重 51.26g、凝灰岩製。						

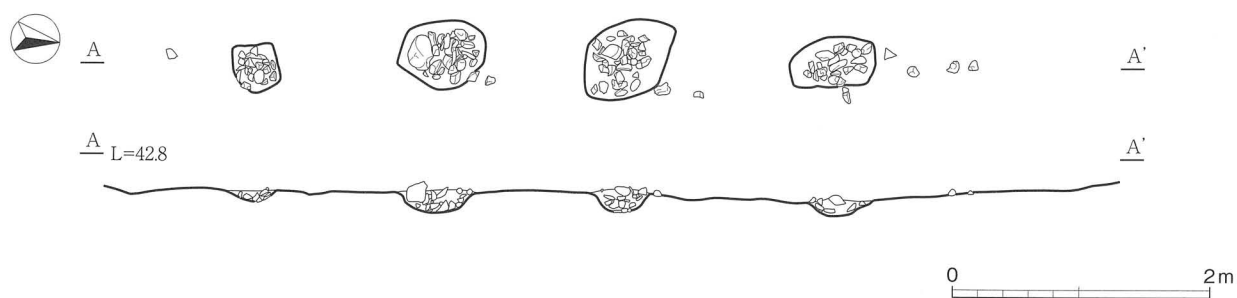
5 ピット群・ピット列（第214～216図）

直線的に並ぶピット列が、調査区の中央部で3列確認されている。1号ピット列は、径40～70cmの楕円形の浅いピットが1.4m間隔で並んでおり、2号ピット列と平行して並んでいる。各ピットの中には礫を主体に、常滑の播鉢片、鉄滓、不明鉄片が少量含まれている。自然礫は、大きさ4～20cmで、各ピットP1からP4まで、礫の個数は20、51、55、86個を数え、岩石の種別は安山岩が主体で、花崗岩も見られる。出土した陶器播鉢には卸目があり、近世期のものと思われる。2号ピット列は14号溝と重なっており、重なったピットは14号溝の底面で確認されている。深さが浅く底面形状は一定しておらず、覆土にしまりが無い。表土に近い堆積土のため、樹木の根穴痕跡のように見られる。一定の間隔をあけて並んでいるので、植栽列になるものかと思われる。3号ピット列も2号ピット列と同様な性格のものかと思われる。3号ピット列は、深さ5～26cm、径28～42cmの楕円形で間隔が1.1m前後で並んでいる。P5は攪乱土坑と重なって深くなっているものと思われる。

1号ピット群は1号ピット列と同様に、自然礫を詰めた小ピットで、不整なL字形に並んでいる。礫は3～20cm大の花崗岩と安山岩を主体とし、片岩、石臼片、土器・陶器片を含んでいる。陶器の中に近世の陶器片を含み、近世以降のものと思われる。



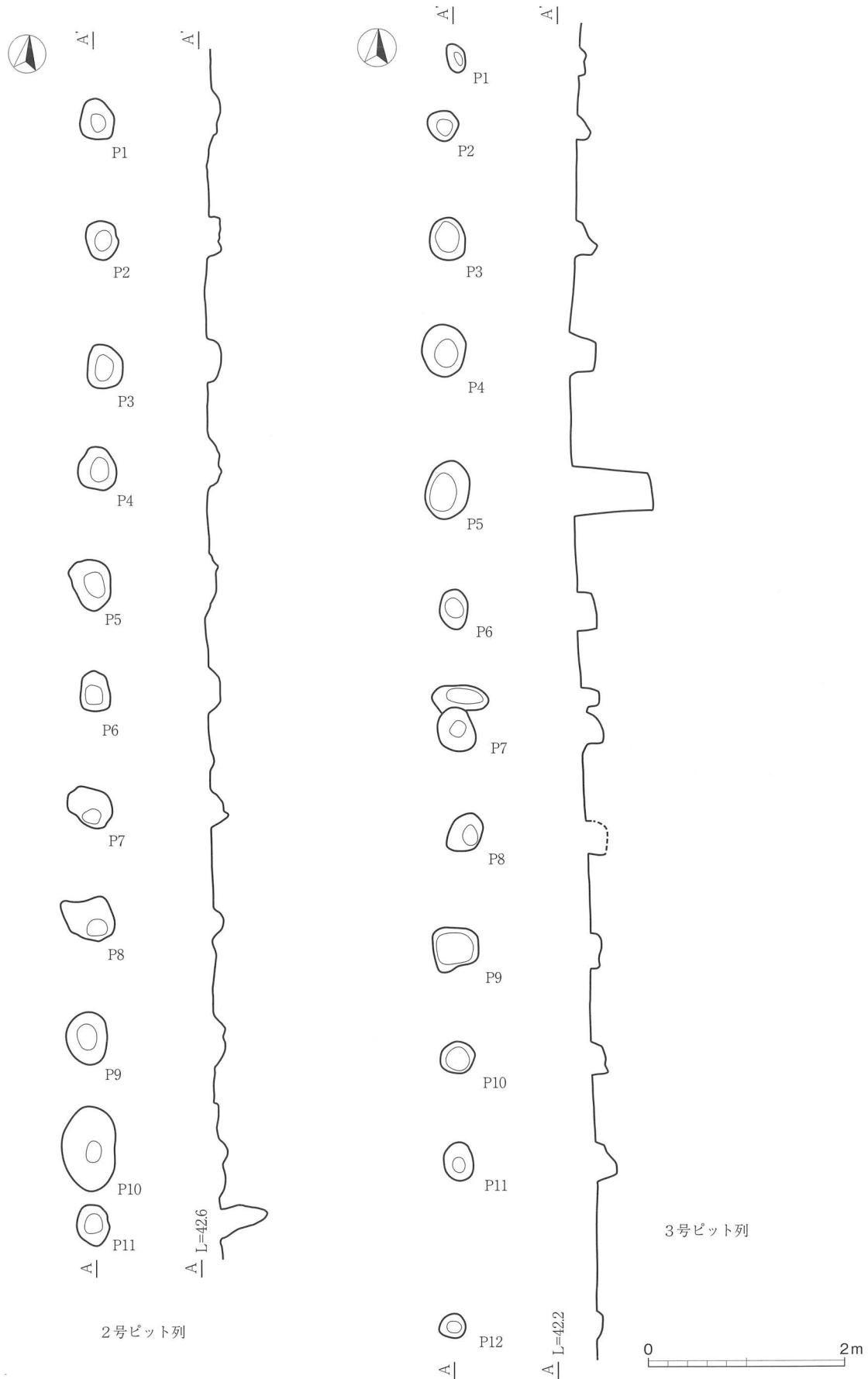
第214図 1号ピット群



第215図 1号ピット列

表99 溝・道路跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
9溝 1	古瀬戸 深皿	- - (22.2)	内底面に3本1単位圏線が廻る。	緻密、黒色小粒	良好	にぶい黄褐色	
1道路 1	常滑 広口壺	(34.8) - -	口縁部片。縁帯上半部が上方に低く立ち上がる。	長石	良好	灰黄褐色	
1道路 2	常滑 甕	(37.6) - -	口縁部片。縁帯上半部が上方に立ち上がる。	長石微粒	良好	にぶい黄褐色	



第216図 2号・3号ピット列

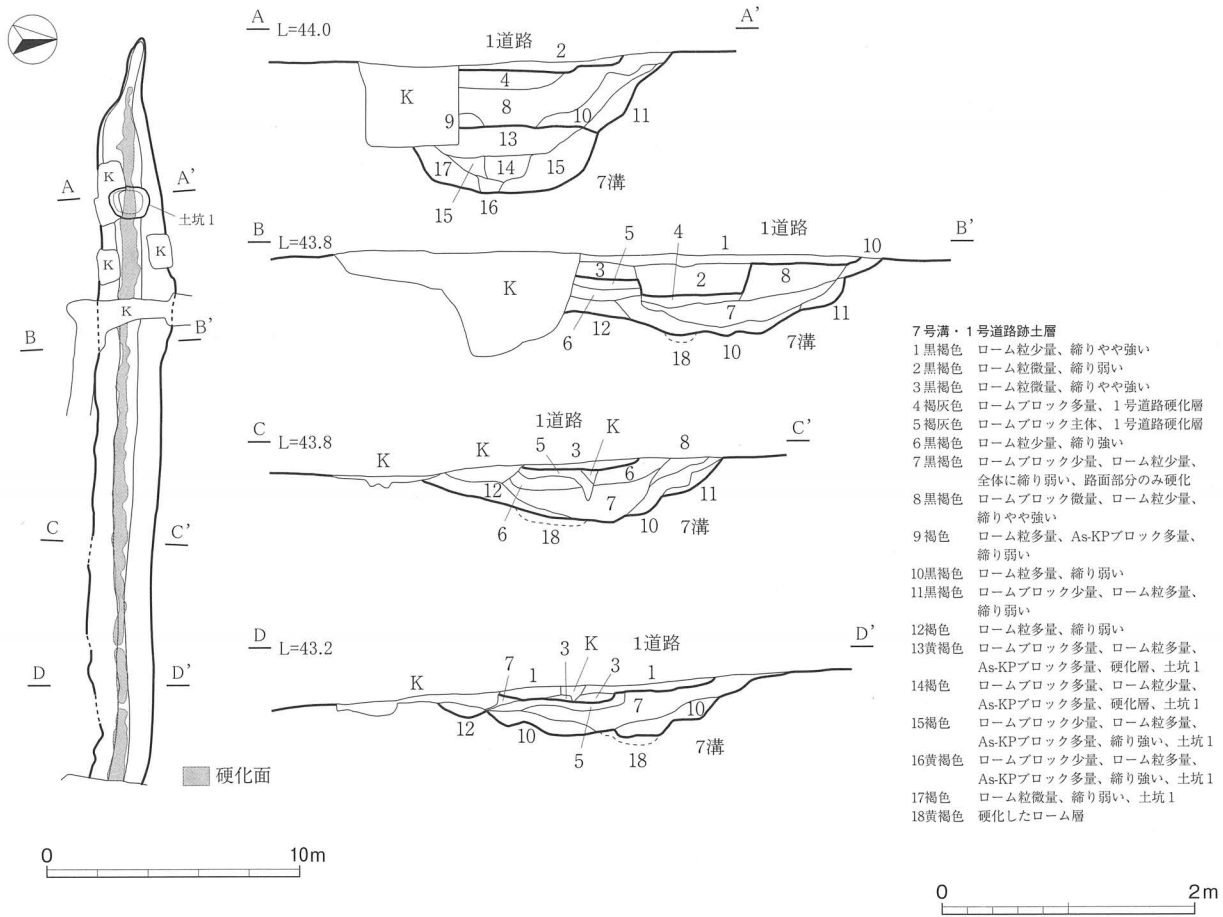
6 溝・道路跡（第5・217・218図）

A区北部では、古代～中世に構築されたと考えられる溝が6条確認された（4号溝は欠番）。1号溝はA区北端部を東西方向に12.8m走行し、上面幅42～98cm、下面幅23～74cm、深さ20cm前後を測る。東端は攪乱で消滅し、調査区外へと延びる可能性がある。西端は1号住居跡の一部を破壊するが、さらに西側へは伸びないようである。底面には小ピットを伴う。3号溝は短く、2号溝および1号段切り状遺構に破壊され、上面幅74～101cm、下面幅50～70cmを測り、深さは15cm程度である。1・3号溝の覆土の状況は奈良平安時代の遺構覆土にも近似しており、構築時期は古代～中世と推定する。2号溝は平面クランク状を呈し、1号段切り状遺構と併せて同一遺構を形成する。南・北端は調査区外へと延びており、19.6m確認した。上面幅70～96cm、下面幅14～42cm、深さはクランク部分を境にして北側で45～57cm、南側の段切り部で20cm前後である。北側西壁にはテラスが伴い、クランク箇所の底面には間仕切り状あるいは障壁状の高まりや段差がある。規模は大きくないが、構造から見れば、構築時期は中世以降と推察する。幅の狭い5号溝は直線的に約60mにわたって南北方向（N-11°-W）に走行し、上面幅37～128cm、下面幅28～106cmを測り、深さは20cm以下である。底面には多数のピットが不規則に穿たれている。北端は自然消滅するが、南端は1号道路跡と8・9号溝の直前で止まる。平面位置や走行方向を考えれば、規模こそ大きく違うものの、5号溝と8・9号溝は同一の目的・機能を推測でき、7号溝・1号道路跡とも密接な関係を想定できる。6号溝は5号溝と並行する浅い溝で、形状・覆土等は5号溝と同様である。

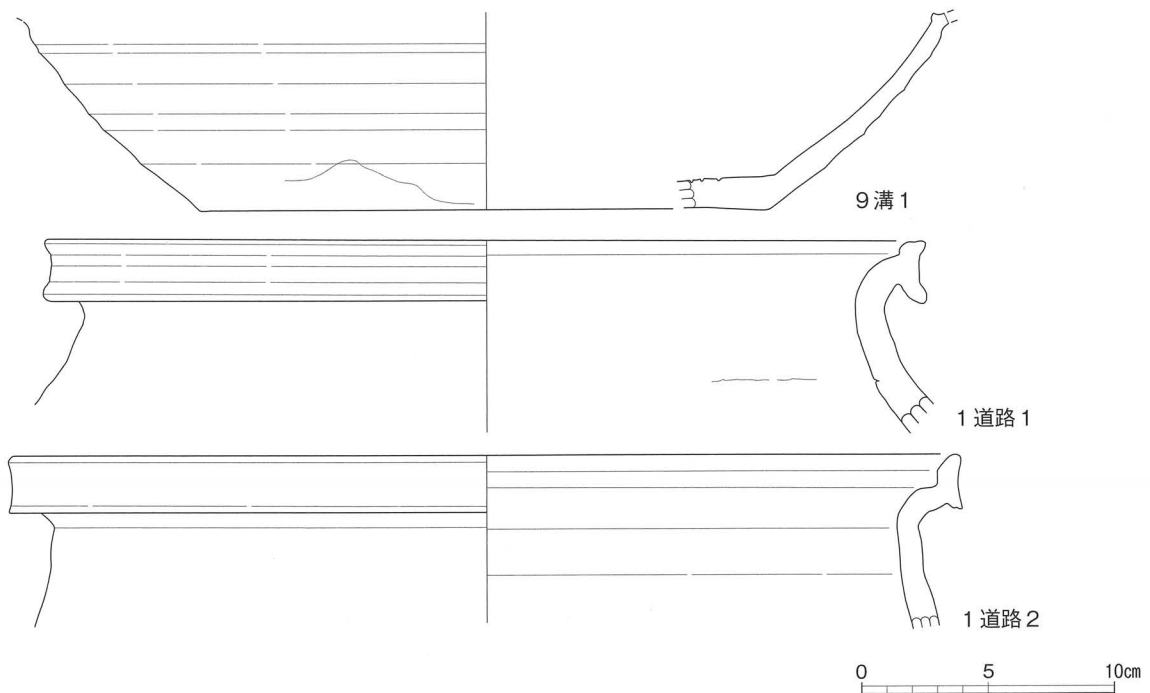
7号溝と1号道路跡は基本的に同一遺構である。上面幅2.08～2.83m、下面幅0.29～1.47m、深さ10～65cmを測り、総延長29.4mを確認した。断面形は逆台形～緩やかなU字状を呈する。全体に西端から東端へと緩やかに下り傾斜する。7号溝底面は踏みしめられて、幅15～74cmの硬化面が形成されている。ある程度まで7号溝が自然埋没した後に、1号道路の硬化面が形成される。よって7号溝の用途も本来は道路であろう。西端にはロームブロック・Ag-KPブロックで硬く埋め戻された土坑1がある。1号道路跡の硬化範囲・路面は平面図示していないが、7号溝を全く踏襲して構築されていた。B断面周辺は硬化面に明らかな段差を伴っていた。覆土からは13世紀後半～14世紀前半頃の常滑の甕口縁部片が2点出土している。8・9号溝は断面逆台形状の大溝で、ほぼ直線的に並走する。8号溝覆土上層は、9号溝掘削時の排土であるロームブロックで埋め戻されており、新旧関係は明瞭であった。底面には不規則にピットが穿たれる。規模は、8号溝が上面幅1.05～2.27m、下面幅0.32～0.79m、深さ46～62cm、9号溝が上面幅（1.02）～（1.57）m、下面幅0.39～1.02m、深さ36～91cmを測る。

A区南部では、近世以降近代までの時期の区画溝と考えられる溝が10条見られる。東西方向に短く延びる16・17号溝、南北方向では、15号溝のように短いものもあれば、10・11・14号溝は南北方向に連なるように長く延びるものもある。いずれも切り合い関係や覆土、出土遺物から見て新しい近世以降の時期のものと見られる。10・11・14号溝は北部で2・3号ピット列と重なり、北端で東へ折れ、18号溝として東の調査区外へ延びている。幅は0.5～1.3mで、深さ約20cm、全体では130m程の長さで直線的に延びており、区画とともに道の側溝的な役割があったかもしれない。東西方向に延びる12号溝と13号溝は、隣接して平行に走っており、13号溝は同じところで2回以上の掘り直しを行っている。出土遺物に近代の遺物があり、最近まで機能していた区画溝と思われる。13号溝底面は東へ向かって緩やかに傾斜し、水が流れるならば東端部でくぼ地に向かって流れ込むようになっているものと思われる。

このほか、調査区北部と中央部の東端部斜面には、段切り状に斜面を平坦にする造成を行っている箇所がある。出土遺物がなく時期は不明である。



第217図 7号溝・1号道路跡



第218図 溝・道路跡出土遺物

第V章 B1区の遺構と遺物

第1節 弥生時代

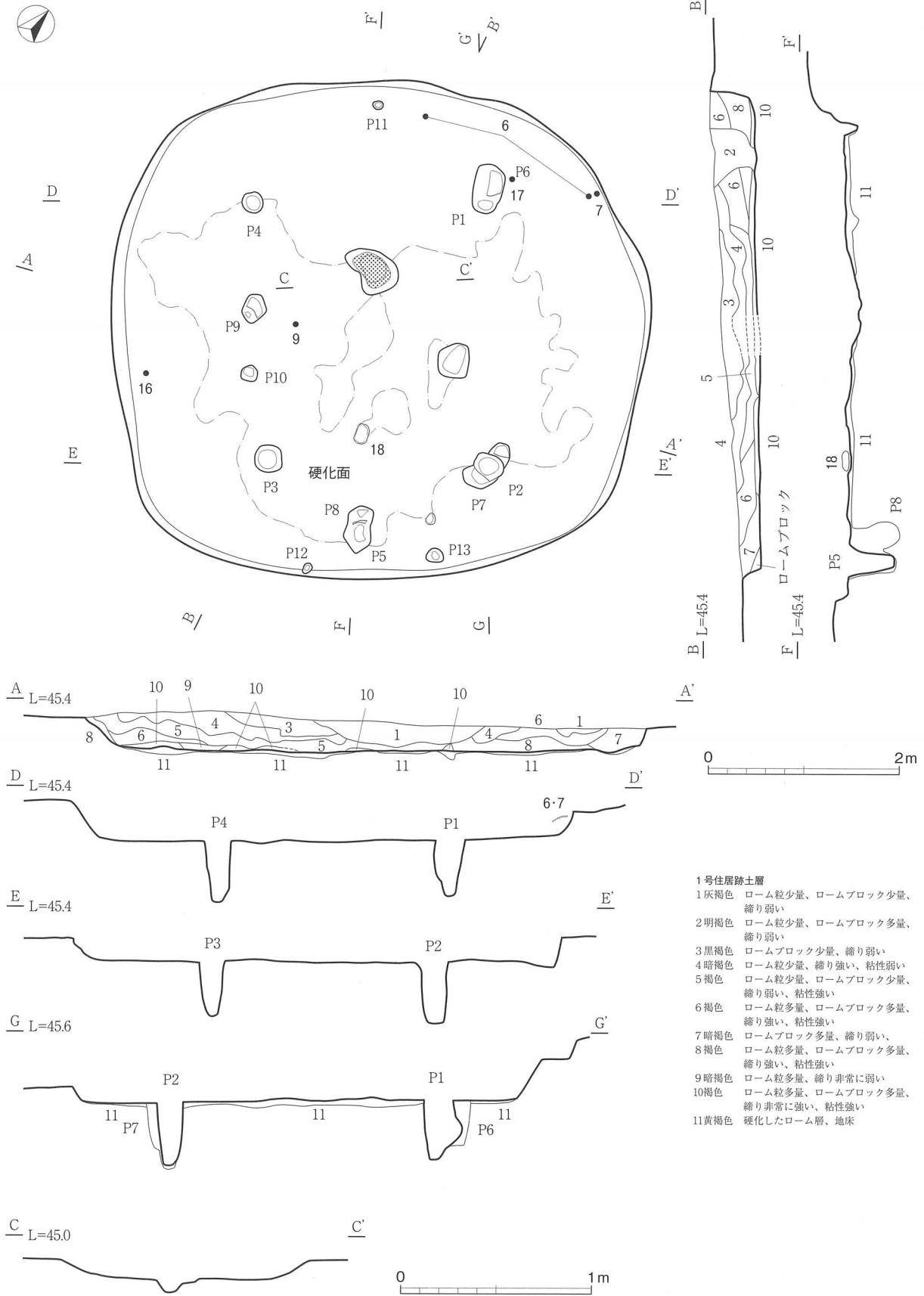
1 竪穴住居跡

1号住居跡（第219・220図）

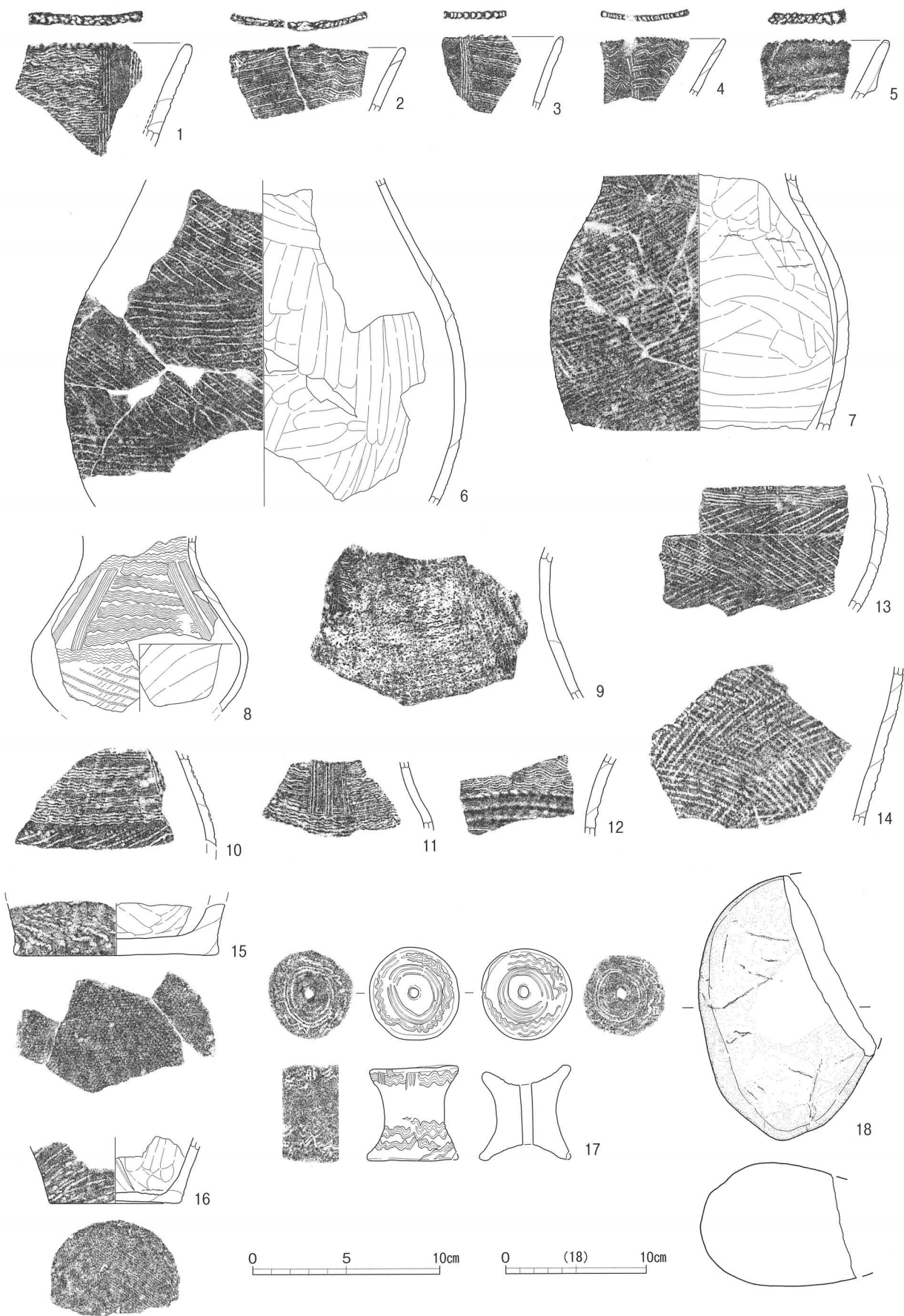
位置 B1区、G3～H3グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向5.24m、東西方向5.65mを測り、丸みを帯びた不整隅丸正方形を呈する。北東側の覆土上層は攪乱に切られる。主軸方位 N-40°-W 壁 壁高は20～43cmを測る。床 ほぼ平坦で、炉の北側と壁際以外は硬化する。ピット 10箇所ある。P1～4が新支柱穴、P6・7が旧支柱穴、P5・P8が新・旧の出入口ピットと考えられる。柱穴配置の変遷はP3・P4・P6～P8→P1～5と考えられる。P9（深さ45cm）・P10（同40cm）は貼床で閉塞されていたが、補助的支柱であろうか。P11～13は壁柱穴であろう。炉 60cm×43cmの不整形で、浅皿状を呈する。被熱は強い。覆土 竪穴中央部上層は黒褐色土、床面上～壁際は褐色土が堆積する。遺物 覆土上層には弥生土器の大型破片や個体（6・7）が目立つ。床面中央からは18の台石が出土している。遺物量は多く、小～中破片の割合が高い。ほぼ十王台式後半期の土器で占められている。下層出土の17は土製の紡錘車である。所見 住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代後期後半に求められる。

表100 1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— — —	口唇部縄文原体によるキザミ。口縁部4本歯の縦直線文→横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。	石英、長石、骨針	良好	浅黄色	十王台式
2	弥生土器 壺	— — —	口唇部縄文原体カによるキザミ。口縁部5本歯カの横位波状文。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石	良好	にぶい橙色	十王台式
3	弥生土器 壺	— — —	口唇部ヘラキザミ。口縁部5本歯の縦直線文→横位の波状文。内面は横・斜位のナデ。外面全面にスス付着。	石英	普通	外：褐灰色 内：にぶい褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	— — —	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本歯の縦直線文→横位波状文。内面は横・斜位のナデ。	石英	普通	にぶい黄橙色	十王台式
5	弥生土器 壺	— — —	口唇部縄文原体によるキザミ。口縁部無文(横位のナデ)。頸部無文の隆帯。内面は縦・横位のナデ。外面スス付着。	石英、金雲母、多量の白色粒	普通	にぶい黄橙色	十王台式
6	弥生土器 壺	— — —	頸～胴部附加条2種縄文(R+R、L+L:下→上)。内面は胴部縦・横位のナデ→頸部横・斜位のナデ。外面胴部上位に帯状のスス、内面胴部下位に帯状のヨゴレ付着。	石英、多量の長石、金雲母、骨針	良好	外：にぶい橙色 内：橙色	上層出土 十王台式
7	弥生土器 壺	— — —	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S、L-Z:下→上)を不規則な羽状構成で施文。頸部は一部横・斜位のナデでナデ消し。内面は胴部横位のナデ→頸部横位のケズリ→斜位のナデ。外面頸部にスス集中、被熱による赤色化。	石英、角閃石、金雲母、多量の白色粒	普通	にぶい黄橙色	上層出土 十王台式
8	弥生土器 壺	— — —	胴部附加条2種縄文(L+L)→頸部5本歯の横位区画波状文1条→頸部横位の区画波状文2条以上→3条一単位の縦直線文→横位波状文(下→上)。内面は頸部下位～胴部斜位のナデ→頸部上位横位のナデ。外面頸部下位～胴部にスス付着。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	淡黄色	十王台式
9	弥生土器 壺	— — —	頸部5本歯の縦直線文→横位波状文。内面は斜位のナデ。内外面とも器面荒れ著しい。	多量の石英・長石、金雲母	不良	にぶい黄橙色	上層出土 十王台式
10	弥生土器 壺	— — —	頸部4本歯の縦直線文→横位波状文。胴部附加条2種縄文(RL+2Rカ)。内面は斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	多量の石英・長石・白色粒	不良	にぶい黄橙色	十王台式



第219図 1号住居跡



第220图 1号住居跡出土遺物

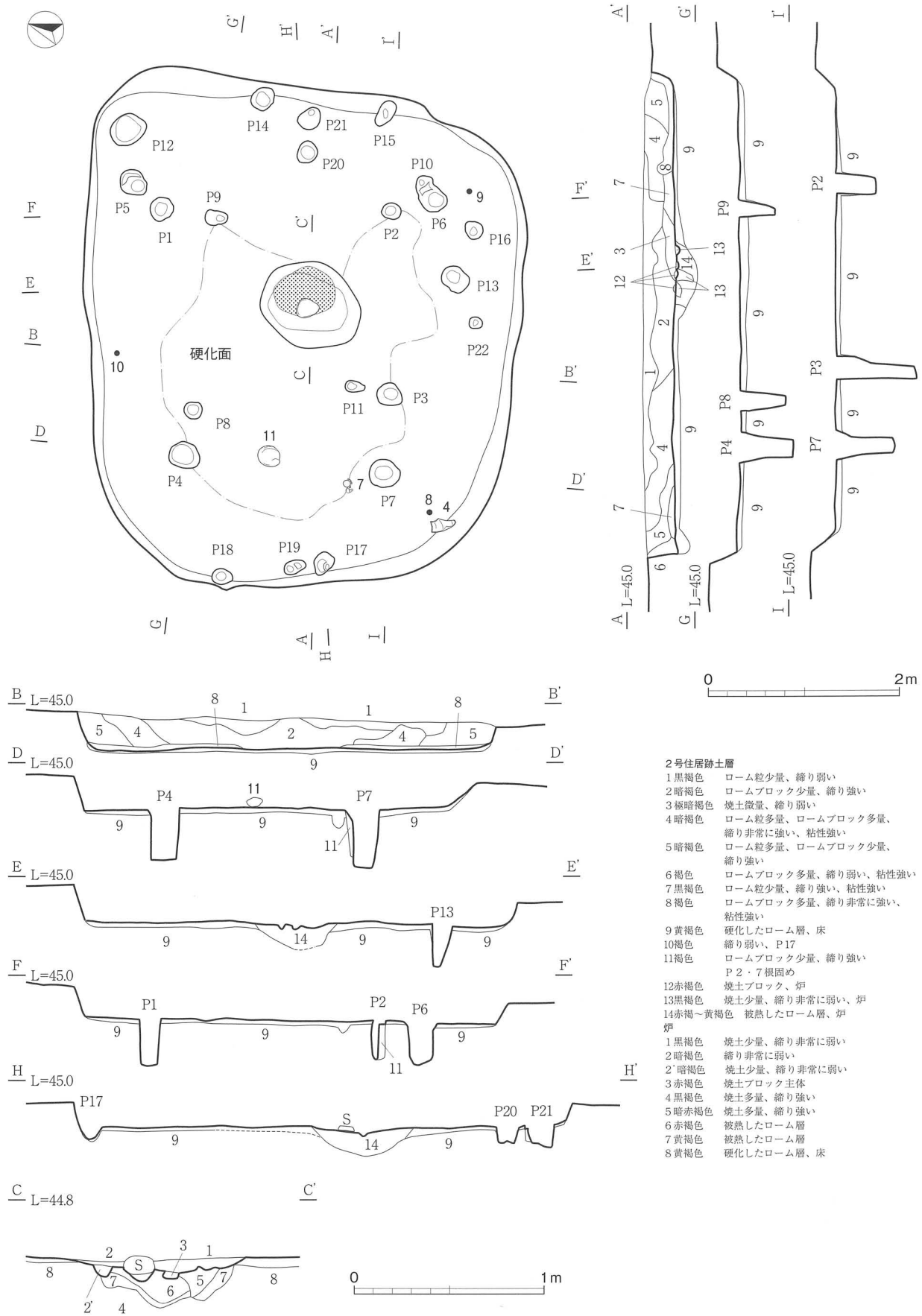
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
11	弥生土器 壺	— — —	頸胴界4本歯の横位区画直線文→頸部3条一単位の縦位直線文→横位波状文(上→下)。内面は斜位のナデ。	石英、角閃石	普通	淡黄色	十王台式
12	弥生土器 壺	— — —	頸部造り出し隆帯カ3条→7本歯の縦位直線文・横位波状文、口縁部横位波状文(下→上)。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	良好	にぶい橙色	十王台式
13	弥生土器 壺	— — —	胴部附加条2種縄文(R+R、L+R:下→上)→頸胴界4本歯の横位区画直線文(時計回り)。内面は斜位のヘラナデカ。外面まばらにスス付着、被熱による赤色化、内面まばらにヨゴレ付着。	石英、角閃石	普通	外:にぶい褐色 内:にぶい黄橙色	十王台式
14	弥生土器 壺	— — —	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S、L-Z:下→上)。内面は縦・斜位のナデ。内面全面に濃いヨゴレ付着。	石英、長石、角閃石、骨針、赤色粒	良好	外:にぶい褐色 内:黒褐色	十王台式
15	弥生土器 壺	— — (108)	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-Z、L-S:下→上)。底部布目痕(周縁部ナデ消し)。内面は斜位のナデ。外面胴～底部にスス付着。	石英、角閃石、骨針、多量の白色粒	普通	にぶい黄橙色	十王台式
16	弥生土器 壺	— — (68)	胴部附加条2種縄文(R+R)。底部布目痕。内面は縦・斜位のナデ。内面胴部下位にヘラ状工具の工具痕。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	外:明黄褐色 内:にぶい黄橙色	下層出土 十王台式
17	土製品 紡錘車	— — —	径(475~495)、高5.1、孔径(0.6)、重[92.9]g。X字形。表裏面とも外縁部に3本歯の波状文→直線文。側面は上下の端部に3本歯の縦位直線文→横位波状文。全体的に器面荒れ。	多量の石英・白色粒、角閃石、金雲母、骨針	普通	にぶい黄褐色	下層出土
18	石器 台石		欠損品。自然礫の表面中央に磨耗痕。 石材:砂岩。残存長18.9cm・残存幅12.5cm・厚さ8.8cm・重さ2502.2g。				床面出土

2号住居跡(第221・222図)

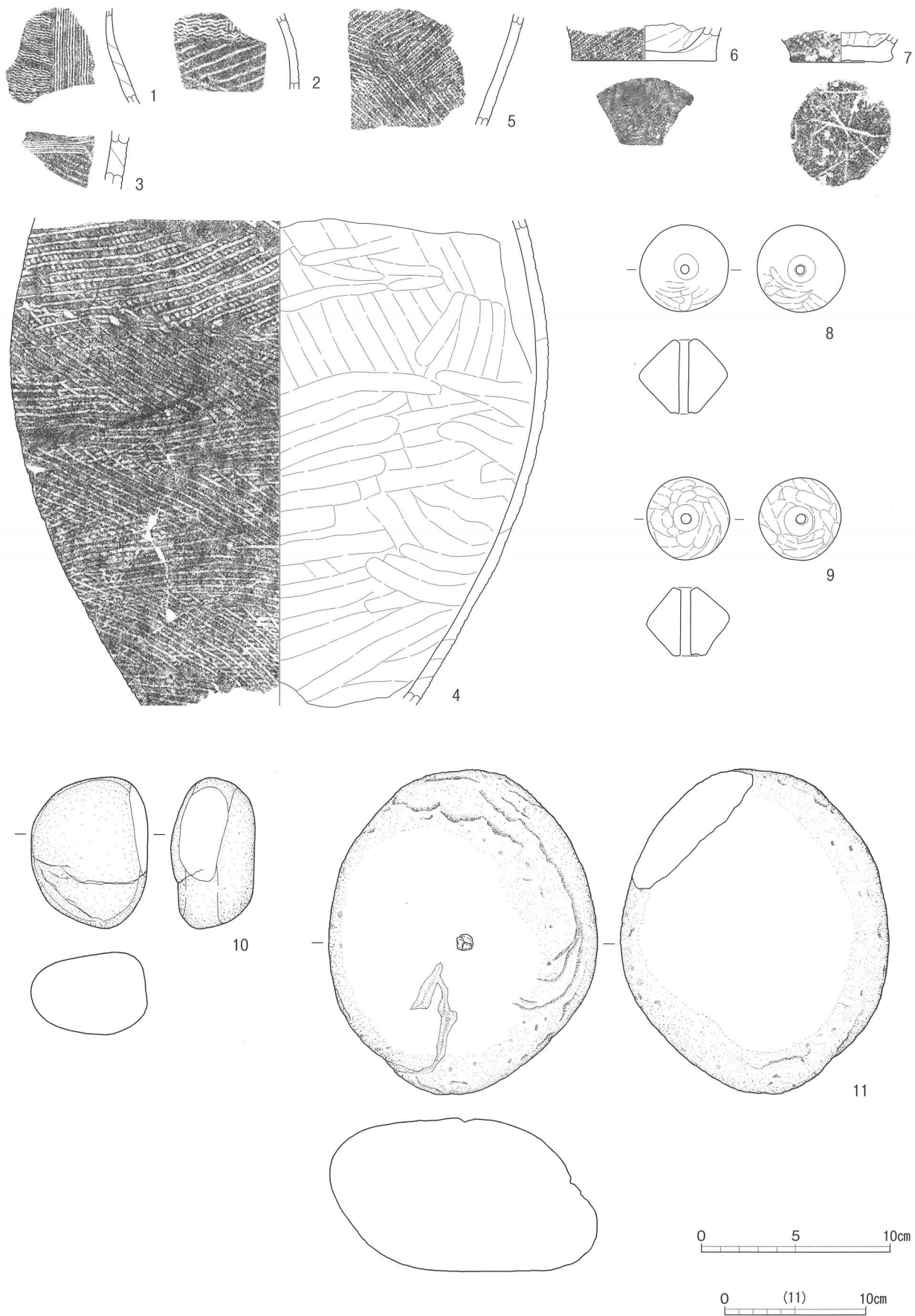
位置 B1区、H3～H4グリッドに位置する。規模と平面形 東西(主軸)方向5.28m、南北方向4.64mを測り、不整隅丸逆台形状を呈する。主軸方位(新)N-69°-E、(旧)N-21°-W 壁 壁高は24～40cmを測る。床 ほぼ平坦で、炉の東側と壁際以外は硬化する。ピット 22箇所ある。P1・4・6・7が新支柱穴、P2・3・8・9が旧支柱穴、P17・P13が新・旧の出入口ピットと考えられる。P10(深さ32cm)はP6の、P11(深さ51cm)はP3の補助柱穴と推測する。P12・14・15・18～21は新壁柱穴と推測され、深さは13～36cmを測り、平均22cmである。P5・16・22は旧壁柱穴と考えられ、深さは17～28cmを測る。炉 106cm×91cmの不整円形で、浅皿状を呈する。被熱は強い。中央の炉石は被熱が弱い。覆土 竪穴中央部は暗～黒褐色土、床面上～壁際は褐色土が主体で、自然堆積状を呈する。遺物 南東隅とP6脇の下層から紡錘車(8・9)が出土した。P4-7の中間地点の床面には台石(11)が遺棄されていた。竪穴南西隅からは胴部大型片(4)が出土している。全体の遺物量は少なく、小～中破片の割合が高い。十王台式後半期の土器が主体で、5は二軒屋式と考えられる。所見 柱穴配置から、建替え並びに拡張が明瞭である。炉を起点にして主軸を90°、北から東へ変更している。旧竪穴の痕跡は不明である。住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代後期後半に求められる。

表101 2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— — —	頸部4本歯・3条一単位の縦位直線文→横位波状文(上→下)。内面は斜位のナデ。外面全面濃いスス、内面ヨゴレ付着。	石英	普通	外:黒褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	— — —	胴部軸縄不明の附加条縄文(r-S、l-Z)→頸胴界4本歯カの横位区画波状文→縦位直線文。内面はナデカ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英	普通	にぶい黄褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	— — —	胴部軸縄不明の附加条縄文(L-Z)→頸胴界6本歯の横位区画直線文。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	にぶい黄褐色	十王台式



第221図 2号住居跡



第222図 2号住居跡出土遺物

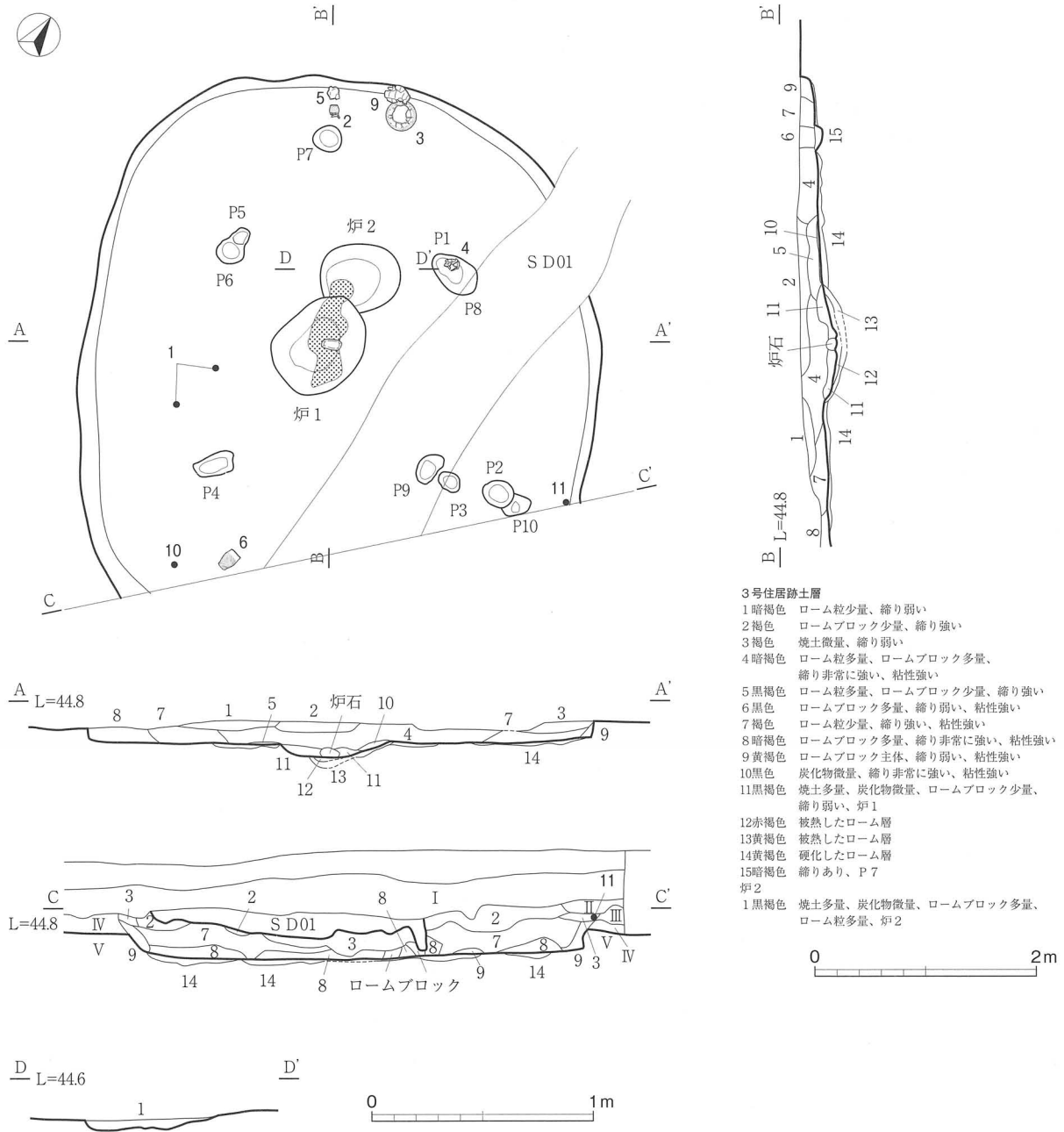
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条2種縄文(R+R、L+L:下→上)。内面は胴部中～下位横・斜位のナデ、胴部上位斜位のナデ。	石英、長石、金雲母	良好	にぶい黄褐色	下層出土 十王台式
5	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条1種縄文(RL+2L、LR+2R:下→上、反時計回り)。内面は縦・斜位のナデ、胴部下位は横位のナデ。	石英、赤色粒	良好	外:灰黄褐色 内:にぶい黄褐色	
6	弥生土器 壺	- - (7.6)	胴部附加条1種縄文(LR+2R)。底部布目痕。内面は縦・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	良好	外:にぶい黄褐色 内:暗灰黄色	
7	弥生土器 壺	- - 5.3	胴部軸縄不明の附加条縄文(L-Z)。底部木葉痕。内面は縦・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、骨針	不良	灰黄褐色	下層出土
8	土製品 紡錘車		径4.6、高4.0、孔径0.45、重量65.26g。片側穿孔。表裏面ナデ調整、2/3剥落。	石英、長石、角閃石、骨針	良好	にぶい黄褐色	下層出土
9	土製品 紡錘車		径4.0、高3.7、孔径0.5、重量59.32g。片側穿孔。表裏面ナデ調整。	石英、多量の白色粒	良好	にぶい黄色	下層出土
10	石器 磨石		自然礫の右側面に顕著な磨耗痕。石材:砂岩。長さ8.05cm・幅6.2cm・厚さ4.45cm・重さ317.4g。				下層出土
11	石器 台石		欠損品。大型礫の表・裏面中央に磨耗痕。裏面は平滑。表面中央に敲打痕。石材:石英安山岩。長さ23.1cm・幅18.85cm・厚さ10.9cm・重さ6400.0g。				床面出土

3号住居跡(第223～225図)

位置 B1区G4グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北(主軸)方向4.77m以上、東西方向4.68mを測り、楕円形に近い形状を呈する。1号溝によって覆土上層が破壊される。**主軸方位** N-36°-W
壁 壁高は14～34cmを測る。**床** ほぼ平坦な地床で、全体に硬化する。**ピット** 10箇所ある。P1・3・4・6が新主柱穴、P8・9・4・5が旧主柱穴と考えられる。P3・P6が49cm・52cmと深く、他は20～40cmの間に収まる。P2は主柱穴の可能性が残る。**炉** 規模は91cm×72cmで、平面不整楕円形の浅皿状を呈する。被熱は著しい。中央に自然円礫の炉石を置く。**覆土** 褐色土主体で、上面が黒褐色土で覆われる。自然堆積状を呈する。**遺物** 全体の遺物量は非常に多く、十王台式後半期の土器を主体とする。北壁際床面からは胴部個体(3・9)が出土しており、その周囲の覆土中にも略完形個体(2・5)が認められる。P1上面からも大型破片(4)が出土した。3は十王台式の頸部文様と円形浮文が施文され、胴部縄文は羽状構成をとらない。ほぼ床直の6は頸部に無文帯と刺突文を有し、附加条1種縄文が施文される。10の紡錘車は下層出土である。**所見** 主柱穴配置を更新しており、建替えと考えられる。住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。

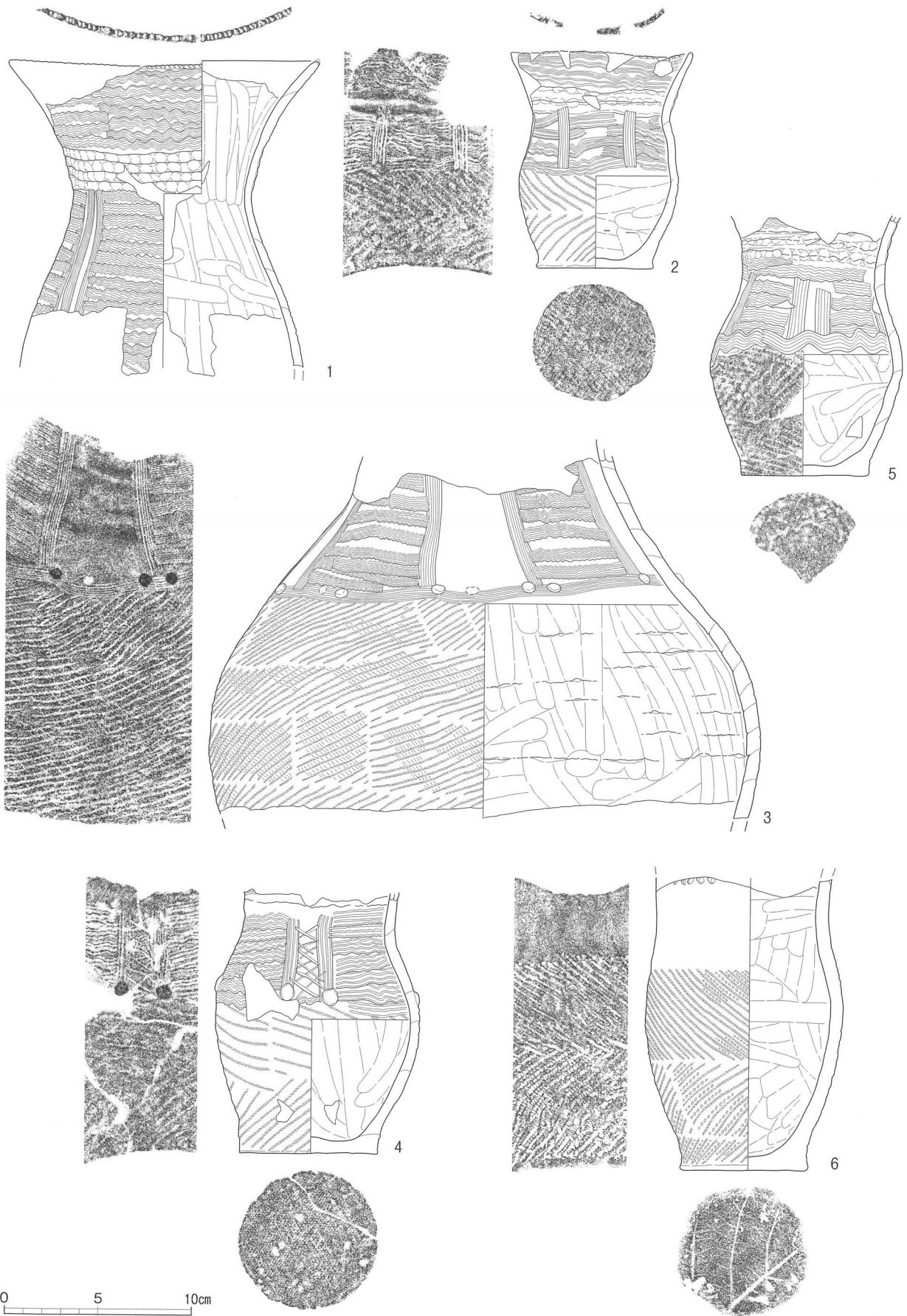
表102 3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(16.2) - -	口唇部ヘラキザミ、小突起。口縁部5本歯の横位波状文(上→下)。頸部薄い押捺隆帯。胴部軸縄不明の附加条縄文(L-Z)→頸部横位区画波状文→頸部3条一単位の縦位直線文→横位波状文(上→下)。内面は口縁部・頸部中位に横位のナデ、他は縦位のナデ。外面全体にスス、内面全体にヨグレ付着。	石英、角閃石	良好	外:にぶい黄褐色 内:灰黄褐色	中～下層出土 十王台式
2	弥生土器 壺	(9.6) 11.7 6.1	口唇部ヘラキザミ。頸部薄い押捺隆帯。胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z:下→上)→頸部5本歯の横位波状文(下→上)→縦位直線文8条(スリットなし)。内面は口縁・頸部横位のナデ、他は斜位のナデ。外面全面にスス、胴部上半～頸部下位に濃いスス付着。内面は胴部上半より上にヨグレ付着。	石英、多量の白色粒	普通	外:黒褐色 内:灰黄色	下層出土
3	弥生土器 壺	- - -	胴部非羽状構成の附加条2種縄文(R+R:下→上)→頸部7本歯の横位区画直線文→2条一単位の縦位直線文5単位→頸部横位波状文(下→上)→2個一対の円形貼付文18個。内面は縦・斜位のナデ。頸部中位と胴部中位に対向する黒斑。	石英、角閃石、多量の白色粒	良好	外:浅黄色 内:にぶい黄褐色	床面出土

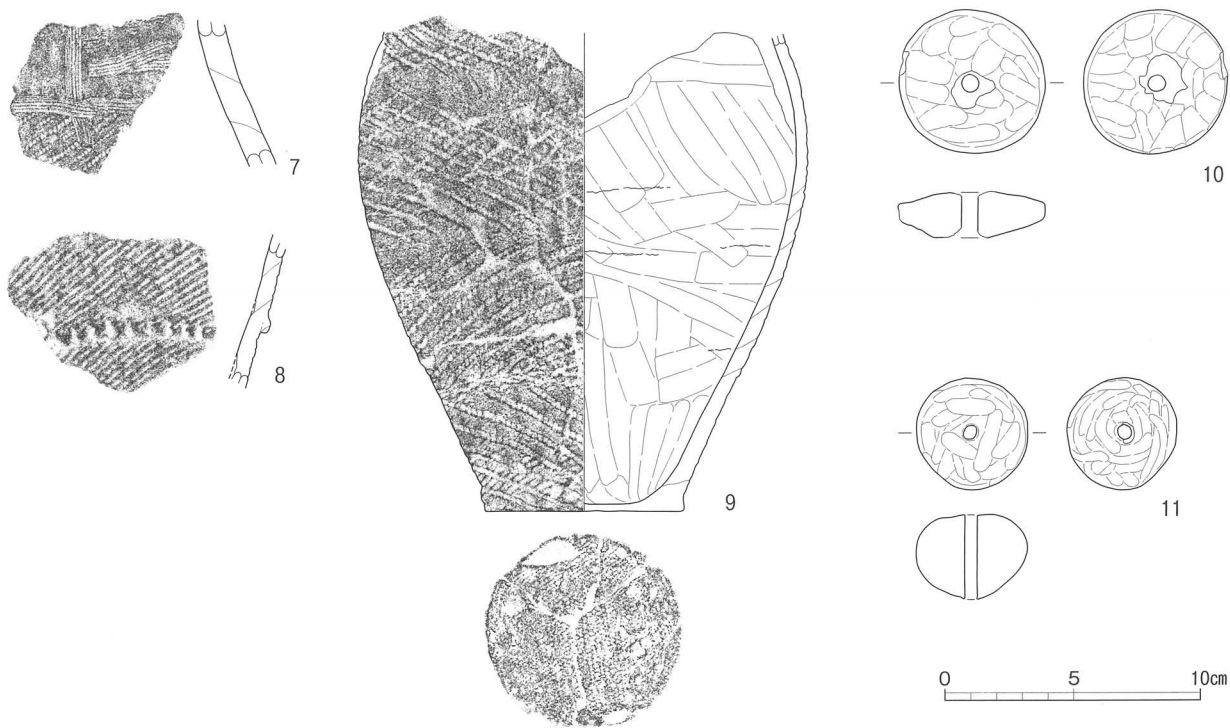


第 223 図 3号住居跡

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器壺	— — 7.4	頸部薄い押捺隆帯、胴部軸縄不明の附加条縄文 (R・S、L・Z:下→上) → 頸部4本歯の横位区画波状文 → 頸部2条一単位の直線文 → 横位の波状文 (下→上)、縦位直線文間にヘラ描き斜格子文 (右上がり→左上がり) → 2個一対の円形貼付文。底部布目痕。内面は頸部下位が横位のナデ、他は斜位のナデ。外面頸部より上にスス、他は薄いスス付着。内面はヨゴレ付着。	多量の石英・長石・白色粒	普通	外: ぶい褐色 内: ぶい黄褐色	P1上面出土 十王台式
5	弥生土器壺	— — (6.5)	頸部薄い押捺隆帯、胴部附加条1種縄文 (RL+2L) と軸縄不明の附加条縄文 (R・S)。頸部5本歯で2条一単位の縦位直線文5単位 → 横位波状文 (下→上) → 頸部横位区画波状文 (時計回り)。底部布目痕。内面は頸部縦・斜位のナデ、胴部は斜位のナデ。外面全体にスス付着。内面は胴部中位より上にヨゴレ付着。	石英、長石、多量の白色粒	普通	外: 黒褐色 内: ぶい黄褐色	上層出土 十王台式



第 224 図 3号住居跡出土遺物①



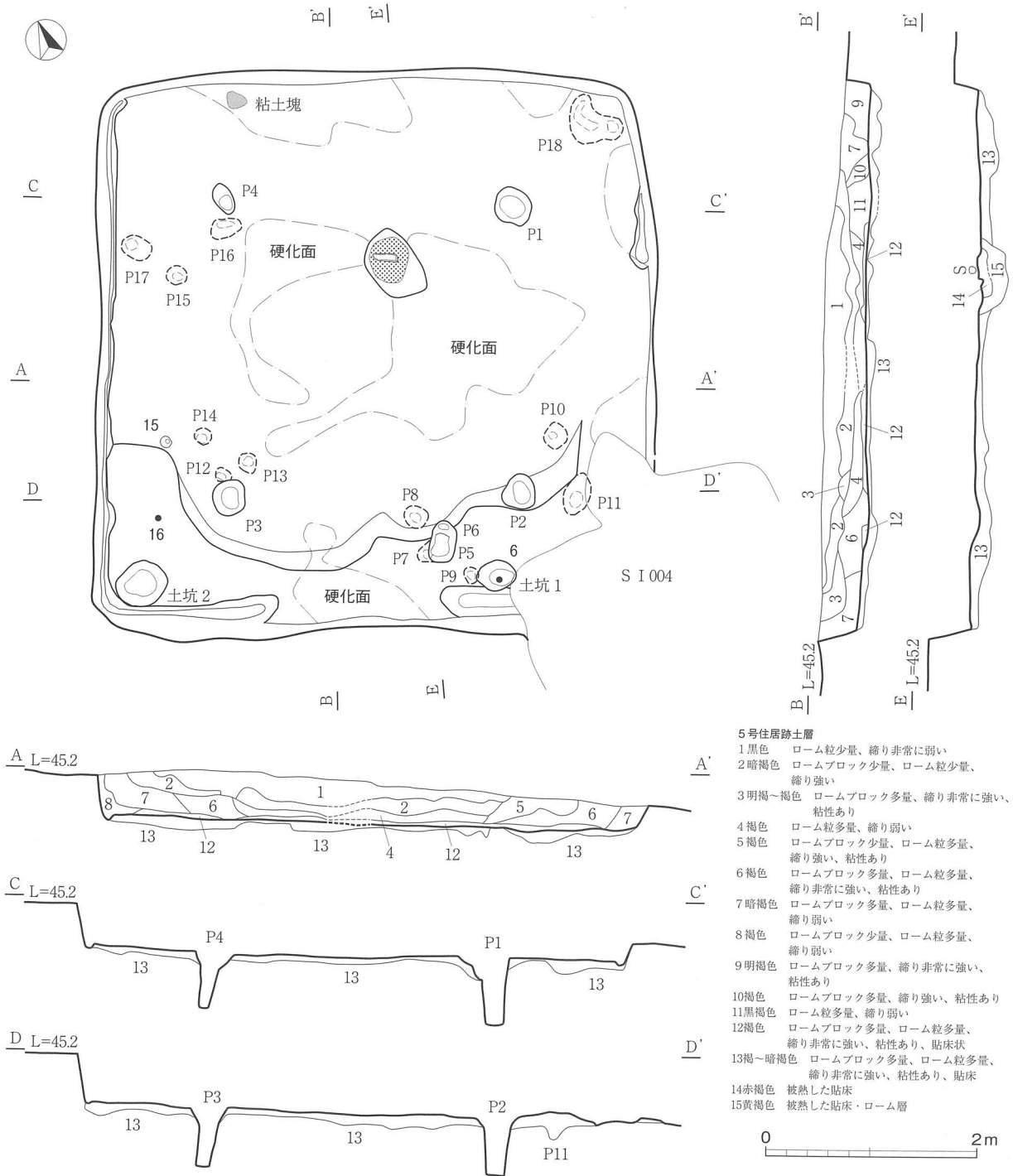
第 225 図 3号住居跡出土遺物②

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
6	弥生土器壺	— — 6.6	頸部上位に丸棒状工具による横位刺突文、刺突文以下は無文帯（横位のナデ）。胴部附加条1種縄文（RL+2L、LR+2R：下→上）。底部木葉痕。内面は縦・横位のナデ。外面まばらなスス、被熱による赤色化。	多量の石英・白色粒、角閃石	良好	にぶい褐色	床面出土
7	弥生土器壺	— — —	胴部軸縄不明の附加条縄文（R・S）→頸部6本歯の縦位直線文→横位波状文→頸胴界横位直線文。内面は横位のナデ。外面スス附着。	多量の石英・白色粒、角閃石、金雲母	良好	にぶい黄橙色	十王台式
8	弥生土器壺	— — —	口縁部附加条1種縄文（LR+2R）→口縁部下端同様の原体によるキザミ。内面は横位のナデ、剥落。	多量の石英・長石	良好	にぶい褐色	二軒屋式
9	弥生土器壺	— — 7.7	胴部附加条2種縄文（L+L、R+R：下→上）。底部布目痕（周縁部ナデ消し）。内面は胴部中位が横・斜位のナデ、他は縦・斜位のナデ。外面胴部はまばらなスス、底部は周縁にスス、胴部上半は濃いスス附着。内面全体ヨグレ附着。	多量の石英・白色粒、角閃石	普通	外：にぶい黄橙色 内：黒褐色	上層出土 十王台式
10	土製品紡錘車		径5.7、高1.8、孔径0.65、重量 [65.14] g。片側穿孔。表裏面ナデ調整。	石英、角閃石、多量の白色粒	良好	黄灰色	下層出土
11	土製品紡錘車		径4.4、高3.4、孔径0.5、重量64.55g。片側穿孔。表裏面ナデ調整。	石英、骨針	良好	にぶい黄橙色	上層出土

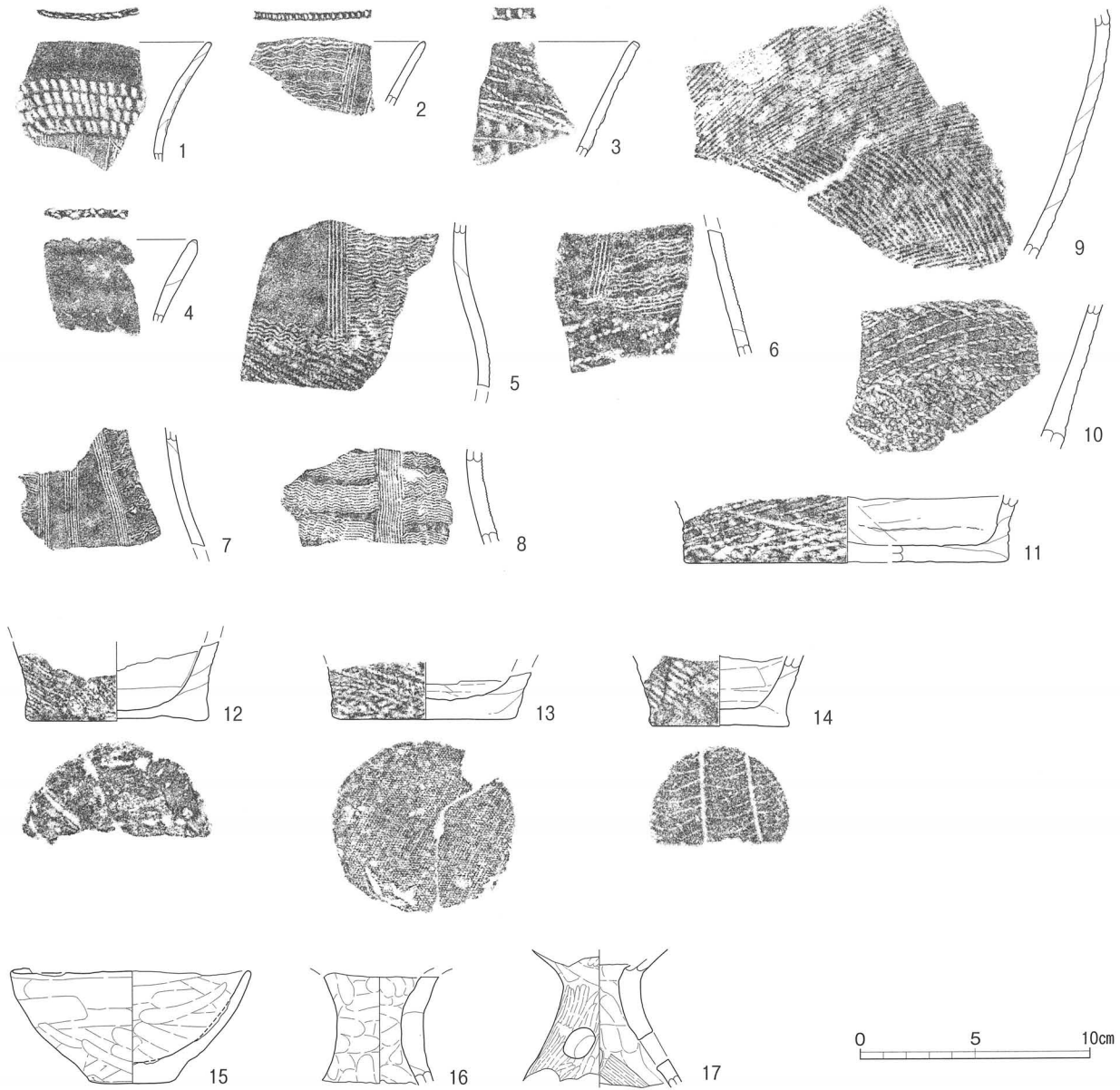
5号住居跡（第226・227図）

位置 B1区、G4グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向5.3m、南北方向5.42mを測り、不整隅丸正方形を呈する。4号住居跡によって南東隅が破壊される。主軸方位 N-22°-E 壁 壁高は38cmを測る。床 炉の周りと壁際が部分的に硬化する。南側はベッド状に高い。壁際の掘り方は溝状に掘り込まれるが紙幅制約のため平面図は割愛した。ピット 18箇所ある。P1~4が新支柱穴、P5・6が新出入口ピットである。旧支柱穴はP1・10・16、P12・13・14のグループであろう。掘り方で確認したピットは破線で表現した。P5の東脇に深さ11cmの土坑1が、南西隅に深さ8cmの土坑2がある。

非常に浅いが、貯蔵穴の可能性はある。 炉 規模は63cm × 43cm で、平面不整楕円形、浅皿状を呈する。被熱は強い。中央に自然棒状礫の炉石を置く。 覆土 褐色土主体で、上層は黒褐色土で覆われ、自然堆積状を呈する。北壁際の下層で粘土塊を検出した。 遺物 出土量はやや多く、小～中破片の割合が高い。十王台式後半期の土器を主体とする。1は頸部に櫛歯状工具による帯状刺突文が施文される。9・12・14は二軒屋式系と考えられる。15・16は弥生系の鉢・高坏で、17は土師器の器台である。 所見 支柱穴配置から、建替えが判明している。出土遺物の主体は弥生土器であるが、住居構造や土師器の出土を考慮すると、住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代終末～古墳時代前期初頭に求められる。



第226図 5号住居跡



第 227 図 5号住居跡出土遺物

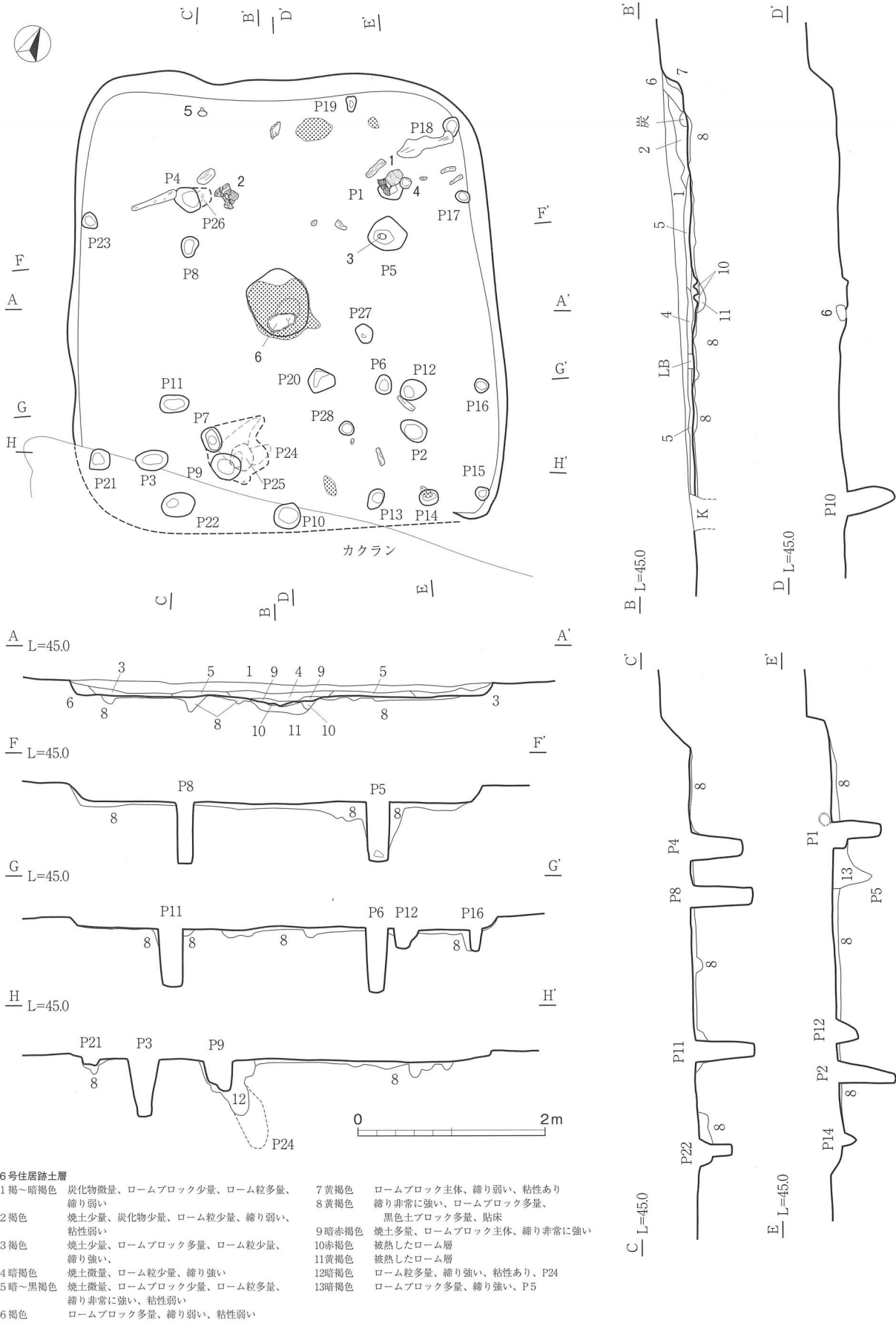
表 103 5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	- - -	口唇部無節縄文(L)を回転施文。口縁部無文(横位のナデ)。頸部櫛歯状工具カによる带状刺突文4条→5本歯の縦位直線文→ヘラ描き斜格子文カ。内面は斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ附着。	石英・角閃石多量の白色粒	普通	外：暗灰黄色 内：黄褐色	十王台式
2	弥生土器壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は縦・横位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ附着。	石英	良好	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十王台式
3	弥生土器壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。頸部横位のヘラ描き細沈線、薄い押捺隆帯→口縁部軸繩不明の附加条縄文(L・Z)。外面スス附着。断面黒色。	石英	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
4	弥生土器壺	- - -	口唇部縄文キザミカ。口縁部無文(斜位のナデ)。内面は横位のナデ。外面スス附着、口唇部付近に带状の濃いスス附着。	多量の石英、金雲母、骨針	普通	にぶい褐色	十王台式

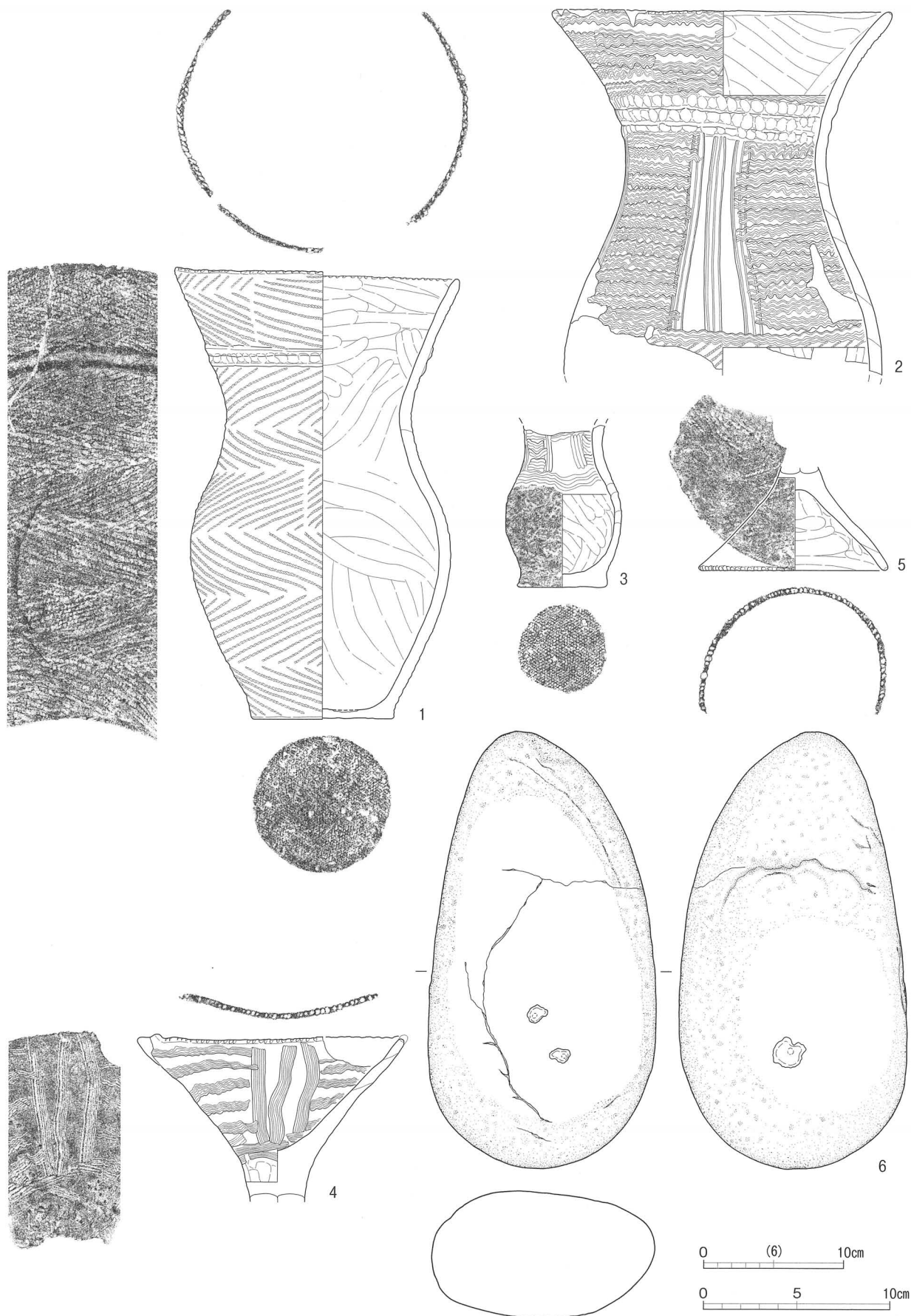
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
5	弥生土器壺	- - -	胴部軸繩不明の附加条縄文(L・Z)→頸胴界5本歯の縦位直線文→横位波状文(上→下)。内面は縦・斜位のナデ。外面頸胴界にスス、内面ヨゴレ付着。	石英	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
6	弥生土器壺	- - -	胴部軸繩不明の附加条縄文(R・S)→頸部5本歯の縦位直線文→頸胴界横位区画波状文、頸部横位波状文。内面は縦・斜位のナデ。	多量の石英・白色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：明黄褐色	土坑1出土 十王台式
7	弥生土器壺	- - -	頸部6本歯・3条一単位の縦位直線文→横位波状文(上→下カ)。内面は横・斜位のナデ。外面濃いスス付着。	石英	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
8	弥生土器壺	- - -	頸部10本歯の縦位直線文→横位波状文(上→下)。内面は横・斜位のナデ、剥落。	多量の石英・長石	普通	にぶい褐色	
9	弥生土器壺	- - -	胴部附加条1種縄文(RL+2L)、密接する軸繩不明の附加条縄文(R・S)。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	二軒屋式
10	弥生土器壺	- - -	胴部附加条2種縄文(LR+R)、軸繩不明の附加条縄文(L・S：下→上)。内面は斜位のナデ。	石英、角閃石	良好	外：にぶい黄褐色 内：褐灰色	十王台式
11	弥生土器壺	- - (13.8)	胴部軸繩不明の附加条縄文(L・S)。底部砂痕。内面は横・斜位のナデ。	石英、長石、多量の金雲母	良好	外：にぶい黄褐色 内：暗灰黄色	十王台式
12	弥生土器壺	- - (7.8)	胴部附加条1種縄文(RL+2L)。底部木葉痕。内面は器面荒れ。外面まばらにスス、被熱による赤色化。内面コゲ付着。	多量の石英・長石	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい褐色	二軒屋式
13	弥生土器壺	- - 7.9	胴部附加条2種縄文(L+L)。底部布目痕。内面は横位のナデ。	石英、長石、角閃石、金雲母、骨針	良好	浅黄色	十王台式
14	弥生土器壺	- - 6.0	胴部軸繩不明の附加条縄文(L・Z)。底部木葉痕。内面は横位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい褐色	二軒屋式
15	弥生土器鉢	10.4 5.0 3.7	外面は横位のヘラケズリ→横・斜位のナデ。内面は横・斜位のヘラケズリ→横・斜位のナデ。内面あばた状の剥落。	石英、多量の長石・白色粒、角閃石	良好	明赤褐色	床面出土
16	弥生土器高坏	- - -	外面は縦・横位のナデ。内面は縦・斜位のナデ。	多量の石英・白色粒、骨針	普通	外：浅黄色 内：暗灰黄色	中層出土
17	土師器器台	- - -	外面は体部斜位のナデ→斜位のミガキ、脚部ナデ→縦・斜位のミガキ。内面は体部横位のナデ、脚部縦・斜位のナデ→斜位のハケメ。脚部3方向に透孔。	多量の石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	

6号住居跡(第228・229図)

位置 B1区、G5グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向推定4.84m、東西方向4.63mを測り、不整隅丸長方形を呈する。南壁は攪乱で消滅する。主軸方位 N-28°-W 壁 壁高は12~30cmを測る。床 ほぼ平坦で、全体に硬化する。貼床が認められる。ピット 28箇所ある。P1~4・26が新支柱穴、P5・6・8・11・12が旧支柱穴と考えられる。P8・11はローム質土で閉塞されていた。P26はP4よりも古い。P12はP6の補助柱穴と想定する。P10は出入口ピットであろう。P13~19・21・22は壁柱穴で、深さは11~37cmを測り、平均20cmである。P7・9・20・24・25・27・28は用途不明である。特にP7・24・25がそれぞれ深さ70cm・90cm・53cmと概して深く、P24は斜めに掘り込まれる。炉 規模は76cm×54cmで、平面不整円形の浅皿状を呈する。被熱は強く、南寄りに6の台石を炉石として置く。覆土 暗~黒褐色土による自然堆積と想定する。堅穴北側の下層には少量の炭化材が含まれ、焼失住居と判断する。遺物 遺物の出土量は多く、略完形個体が多い。P1直上からは1・4が、P26の東側下層からは2が、北壁直下からは5が出土した。また、P5底面には3のミニチュア土器が横位で遺棄されていた。十王台式後半期の土器を主体とし、4の高坏には壺の頸部文様が施文される。所見 支柱穴配置は大きく拡大しているが、壁柱穴配置は新・旧の支柱穴配置ともに整合することから、堅穴の規模・形状に大きな変更はないものと推測する。住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代後期後半に求められる。



第228図 6号住居跡



第 229 図 6 号住居跡出土遺物

表104 6号住居跡出土遺物観察表

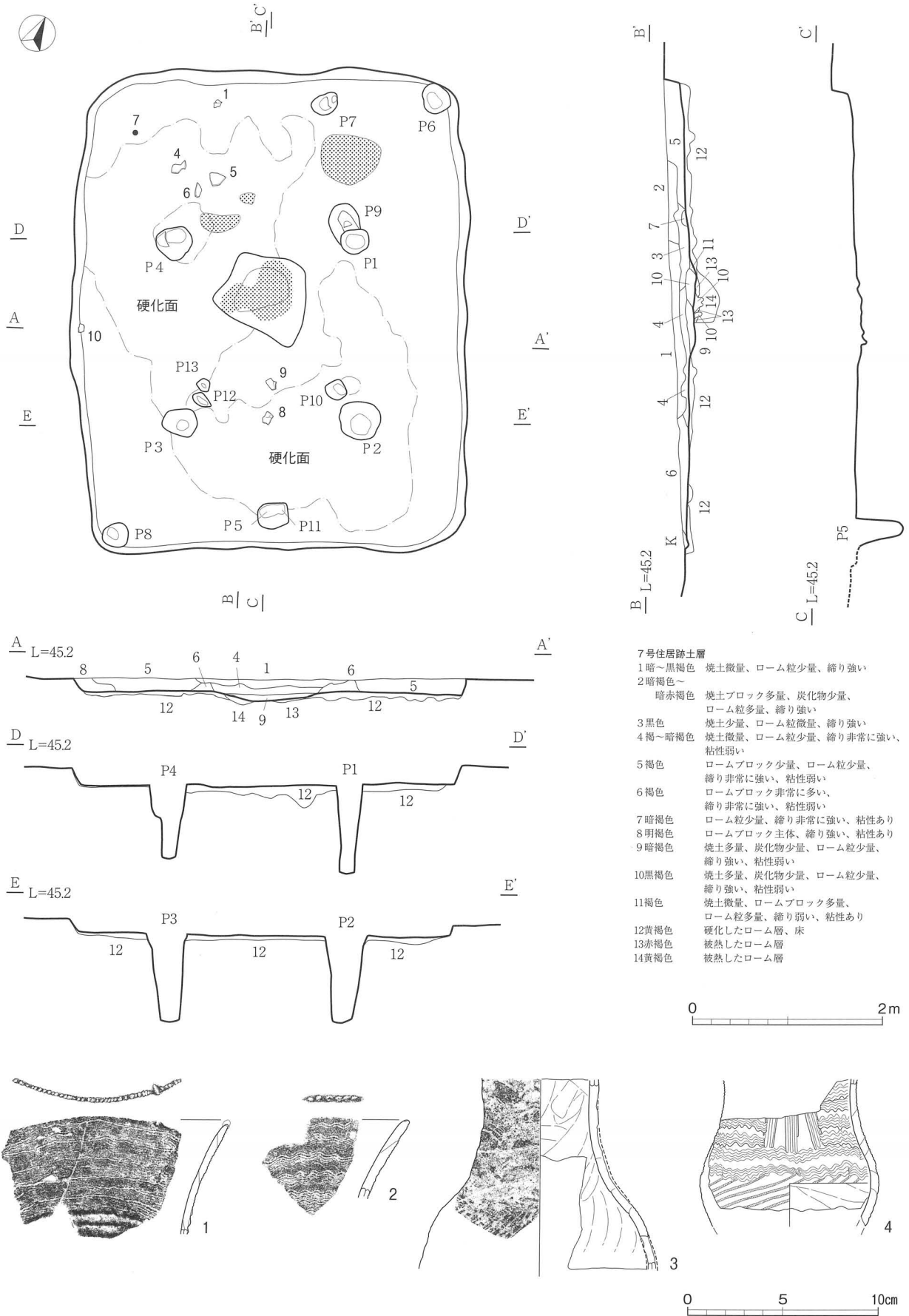
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	15.2 24.2 7.5	口唇部縄文キザミ。頸部押捺隆帯2条。胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z:胴部中位より上は下→上、反時計回り。胴部中位より下は上→下、反時計回り)。底部布目痕。内面は頸~胴部斜位のナデ→口縁部横位のナデ。実測面全体に縦長のスス(頸~口縁部が濃い)。外面の2/3にスス附着、底部右側周辺部にスス附着。他はスス酸化消失。内面は実測面右半分にヨゴレ附着、あばた状の剥離。	多量の石英・長石、角閃石、骨針	良好	外: 浅黄色 内: にぶい黄褐色	P1上面出土 十王台式
2	弥生土器 壺	18.3 — —	口唇部ヘラキザミ。頸部薄い押捺隆帯、胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S)→口縁部4本歯の横位波状文(下→上)。頸部3条一単位の縦位直線文4単位→頸胴界横位区画波状文→横位波状文(上→下)。内面は口縁部横・斜位のナデ、下から上へ調整。外面頸部に濃いスス、内面ヨゴレ附着。	石英、多量の白色粒	良好	灰黄褐色	下層出土 十王台式
3	弥生土器 壺	— — 4.7	ミニチュア壺。胴部軸縄不明の附加条縄文(L・S、L・Z:附加条3種カ)→頸胴界3~4本歯の横位区画波状文→2条一単位の縦位直線文4単位→頸部横位波状文(上→下)。外面スス酸化消失、内面全体にヨゴレ附着。	多量の石英・長石・骨針、チャート	普通	外: にぶい黄褐色 内: 灰黄褐色	P5底面出土 十王台式
4	弥生土器 高坏	(14.1) — —	口唇部ヘラキザミ、小突起。坏部7本歯の直線文カ→3条一単位の縦位直線文4単位→横位波状文(下→上)。脚部縦・横位のナデ。脚端部丸棒状工具によるキザミ。内面は坏部横・斜位のナデ。坏部内外面に黒斑。	石英、多量の骨針	普通	外: 浅黄色 内: にぶい黄褐色	P1上面出土 十王台式
5	弥生土器 高坏	— — 9.9	脚部軸縄不明の附加条縄文(R・S:反時計回りカ)を横・斜位施文、非羽状構成。脚端部丸棒状工具によるキザミ。内面は横・斜位のナデ。マーブル状の胎土。	石英、チャート、多量の骨針	良好	明赤褐色	下層出土
6	石器 台石		磨→敲。大型礫の表・裏面中央に磨耗痕。磨耗範囲の一部に敲打痕とみられる凹穴。表面は被熱により赤褐色に変色。石材: 安山岩。長さ30.7cm・幅16.3cm・厚さ9.0cm・重さ6850.0g。				炉石

7号住居跡(第230・231図)

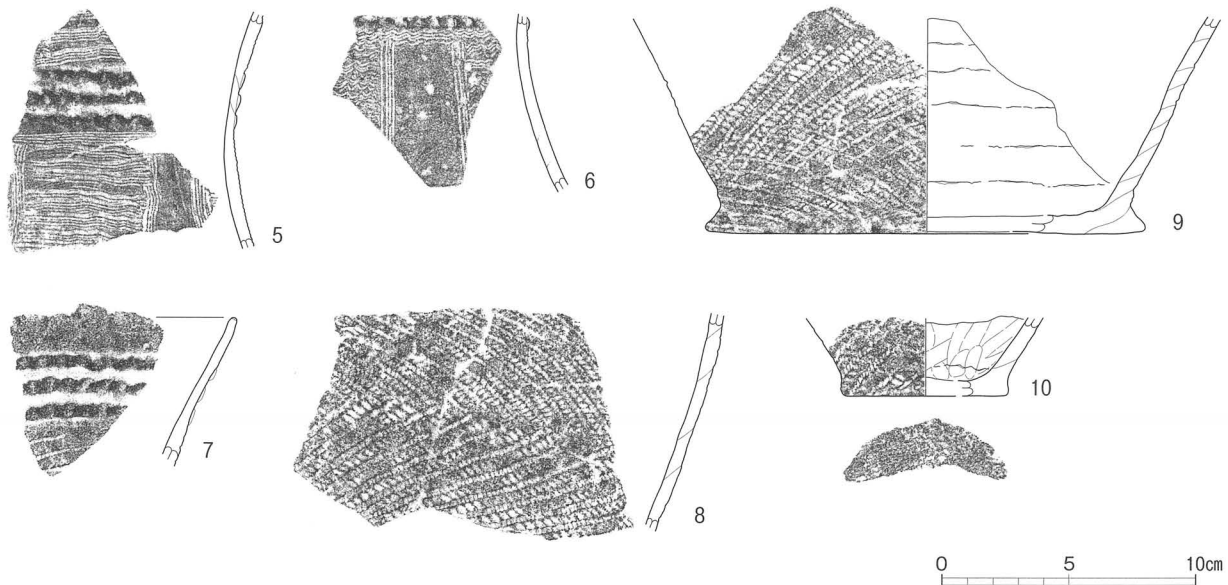
位置 B1区、F4~F5グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向5.12m、東西方向4.18mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位 N-28°-W 壁 壁高は10~20cmを測る。床 ほぼ平坦で、中央部が硬化する。ピット 13箇所ある。P1~4が新支柱穴、P4・9・10・12・13が旧支柱穴と考えられる。P5・11は新・旧出入口ピットであろう。P9~13は硬化した地床を剥がして検出した。旧支柱穴は25~44cmと深くないが、新支柱穴は深さ90cmを超え、床面は硬化する。炉 規模は95cm×98cmの不整形で、浅皿状を呈する。被熱は強い。覆土 炉の上は覆土上層まで焼土混じりの黒褐色土が堆積し、埋没途中にも被熱していた可能性がある。また、竪穴北側の覆土上面にも焼土が散布する。遺物 遺物量はやや多く、大半は覆土下層からの出土である。小~中破片の割合が高く、十王台式後半期の土器を主体とする。3は二軒屋式の細頸壺である。所見 新旧の支柱穴配置はほぼ同地点を選択しており、建替えに伴う竪穴の変更・拡張はなかったと判断する。住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代後期後半に求められる。

表105 7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— — —	口唇部ヘラキザミ、小突起。頸部薄い押捺隆帯→口縁部5本歯の横位波状文。内面は横位のナデ。外面スス附着。内面ヨゴレ、あばた状の剥離。	石英、多量の白色粒	普通	外: 黒褐色 内: 灰黄褐色	覆土下層 十王台式
2	弥生土器 壺	— — —	口唇部縄文キザミカ。口縁部6本歯の横位波状文。内面は横位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ附着。	石英、多量の白色粒	良好	外: にぶい黄褐色 内: にぶい黄褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	— — —	頸部6本歯の下開き連弧文(時計回りカ)。胴部附加条1種縄文(RL+2L)→軸縄不明の附加条縄文(R・S:上→下)。内面は縦・斜位のナデ。外面肩部にスス集中、内外面とも剥落著しい。	多量の石英・長石、角閃石	普通	にぶい黄褐色	二軒屋式



第230図 7号住居跡・出土遺物①

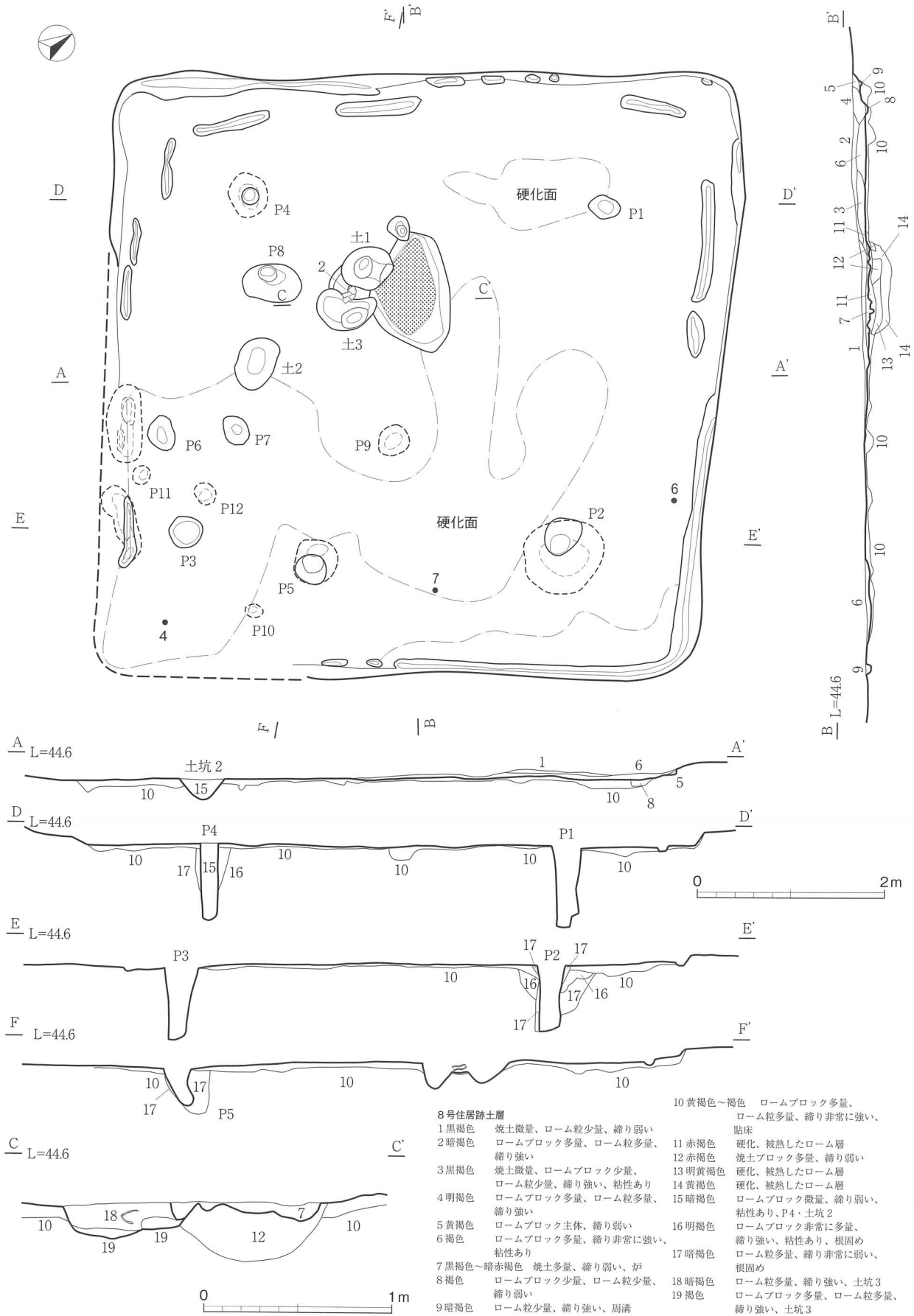


第 231 図 7号住居跡出土遺物②

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 壺	- - -	胴部附軸縄不明の附加条縄文 (r - S、L - Z : 下→上) →頸胴界4本歯の横位区画波状文2条→頸部3条一単位の縦位直線文3単位カ。内面は横・斜位のナデ。外面全体にスス、被熱による赤色化。内面胴部に帯状のヨゴレ。	石英、多量の白色粒	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	下層出土 十王台式
5	弥生土器 壺	- - -	頸部薄い押捺隆帯3条→口縁部5本歯の横位波状文、頸部隆帯直下に横位直線文→頸部2条一単位の縦位直線文→横位波状文(上→下)。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英、金雲母、骨針	良好	外：黒褐色 内：褐灰色	下層出土 十王台式
6	弥生土器 壺	- - -	頸部爪痕のある押捺隆帯→隆帯直下に4本歯の横位区画波状文→頸部2条一単位の縦位直線文→横位波状文(上→下)。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英	良好	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	下層出土 十王台式
7	弥生土器 壺	- - -	口唇部無節縄文(Lカ)を回転施文カ。口縁部押捺隆帯3条。頸部軸縄不明の附加条縄文(R - S)。内面は縦位のナデ、剥落。	石英、多量の長石・金雲母	普通	にぶい黄褐色	下層出土 十王台式
8	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条2種縄文(R + R、L + L : 下→上)。内面は横・斜位のナデ。9と同一個体カ。	石英、金雲母、多量の白色粒	不良	外：にぶい黄褐色 内：灰黄色	下層出土 十王台式
9	弥生土器 壺	- - (17.2)	胴部附加条2種縄文(R + R、L + L : 下→上)。底部砂痕。内面は器面荒れ。8と同一個体カ。	石英、金雲母、多量の白色粒	不良	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	上層出土 十王台式
10	弥生土器 壺	- - (6.4)	胴部附加条2種縄文(R + R)。底部布目痕。内面は縦・斜位のナデ。内面ヨゴレ付着。	石英、角閃石、金雲母、骨針	良好	外：灰黄色 内：にぶい橙色	下層出土 十王台式

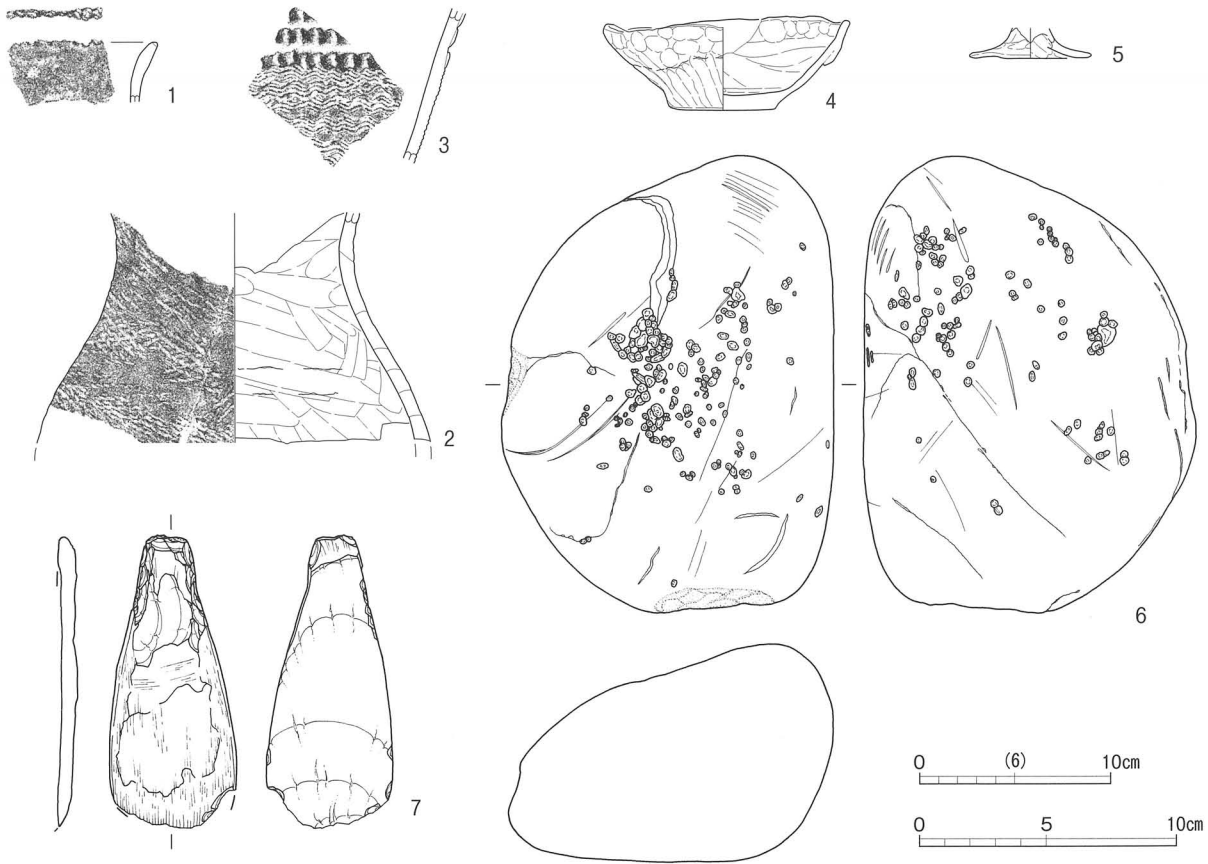
8号住居跡 (第 232・233 図)

位置 B1区、F5～G5グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向6.47 m、東西方向6.3～6.72 mを測り、不整隅丸正形状を呈する。主軸方位 N - 59° - W 壁 壁高は10cmを測る。南隅の壁は残存しない。床 やや凹凸があり、中央部がわずかに高い。硬化面は炉の南側と南壁際に広がる。周溝は断続的・部分的で、内側にも確認できたため堅穴を掘り直した可能性がある。掘り方は壁際が溝状に浅く掘り込まれるが紙幅制約のため平面図化していない。ピット 12箇所ある。P1～4が支柱穴、P5が出入口ピットであろう。P1～4は底面の硬化圧痕(あたり)が顕著であった。P6～12は用途不明で、P10～12は掘り方で確認した(破線で表現)。炉の周りにはP8(深さ40cm)も含めて小土坑(深さ29



第232図 8号住居跡

～36cm) が4基点在する。新旧関係は、土坑3 → 炉 → 土坑1 となる。 炉 規模は126cm × 86cmの不整形で、浅皿状を呈する。被熱は強い。 覆土 自然堆積であろう。 遺物 出土量は少なく、小～中破片の割合が高い。十王台式主体と考えられる。2は土坑3から出土した。4は南関東系と考えられる鉢である。5はミニチュア高坏の脚部とした。下層から6の台石、床面から7の磨製石斧が出土している。 所見 住居構造は古墳時代前期的様相と考えられるが、弥生土器しか出土していない。住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代後期後半あるいは終末期～古墳時代前期初頭の過渡期と推測される。



第233図 8号住居跡出土遺物

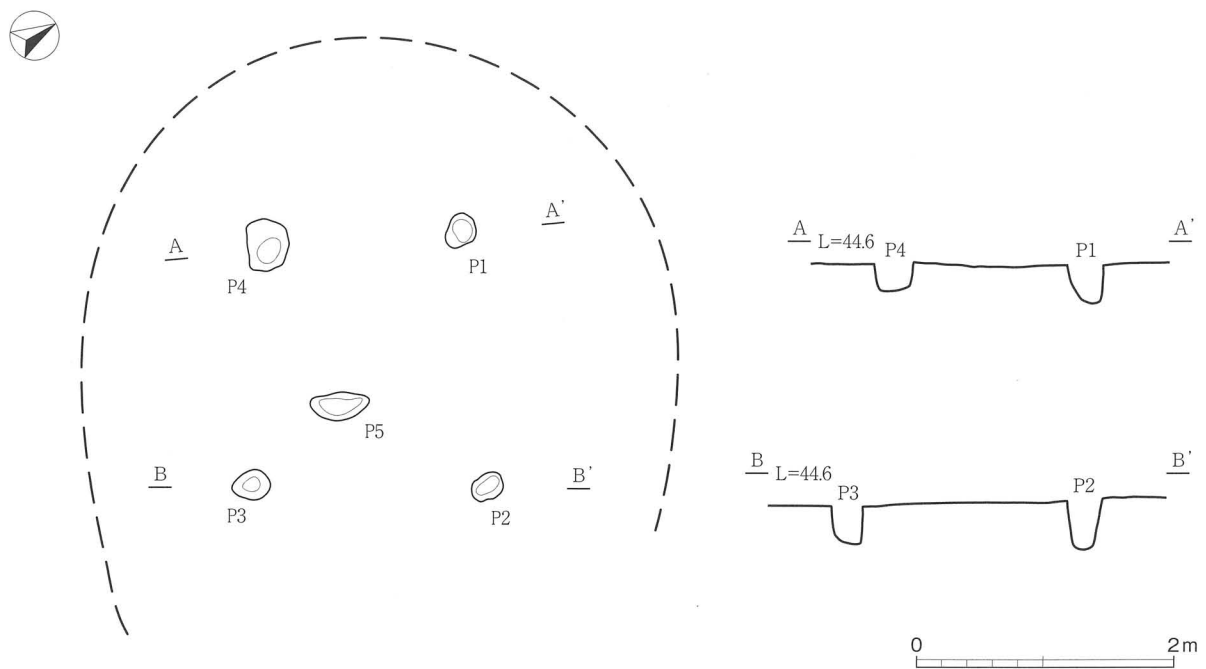
表106 8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	— — —	口唇部縄文キザミ。口縁部無文(横位のナデ)。内面は横・斜位のナデ。外面スス附着。	石英、角閃石	普通	外：灰黄褐色 内：灰黄色	P9出土 十王台式
2	弥生土器壺	— — —	胴部軸線不明の附加条縄文(L-Z、L-S：下→上)。内面は斜位のヘラナデ、ナデ。外面まばらにスス附着。	石英、長石、金雲母、赤色粒	普通	外：淡黄色 内：にぶい黄橙色	土坑3出土 十王台式
3	弥生土器壺	— — —	頸部押捺隆帯→5本歯の横位波状文(下→上)。内面は斜位のナデ・ヘラナデカ。	石英、多量の金雲母	良好	外：浅黄色 内：灰黄色	掘り方出土 十王台式
4	弥生土器鉢	9.6 3.7 4.1	折り返し口縁。体部下半縦・斜位のナデ→口縁部ユビオサエ、ナデ。内面は体部横・斜位のナデ、口縁部ユビオサエ。	石英、多量の白色粒	良好	にぶい黄橙色	下層出土

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
5	弥生土器 高环カ	— — (48)	ミニチュア高环。脚部横位のナデ、脚端部ユビオサエ。内面は縦・斜位のナデ。	石英、多量の白色粒	普通	黒褐色	
6	石器 台石		磨→敲。大型礫の表面全体に磨耗痕。磨耗範囲の一部に擦痕や線刻。表・裏面中央に敲打痕。石材：砂岩。長さ24.4cm・幅17.3cm・厚さ11.5cm・重さ6700.0g。				
7	石器 磨製石斧		欠損品。礫皮をもつ板状剥片を素材とし研磨による調整加工。刃部周辺は顕著な磨耗痕。表・裏面の上部には欠損後の小さな剝離痕。石材：粘板岩。残存長11.45cm・残存幅4.9cm・残存厚0.9cm・重さ51.7g。				下層出土

9号住居跡 (第234図)

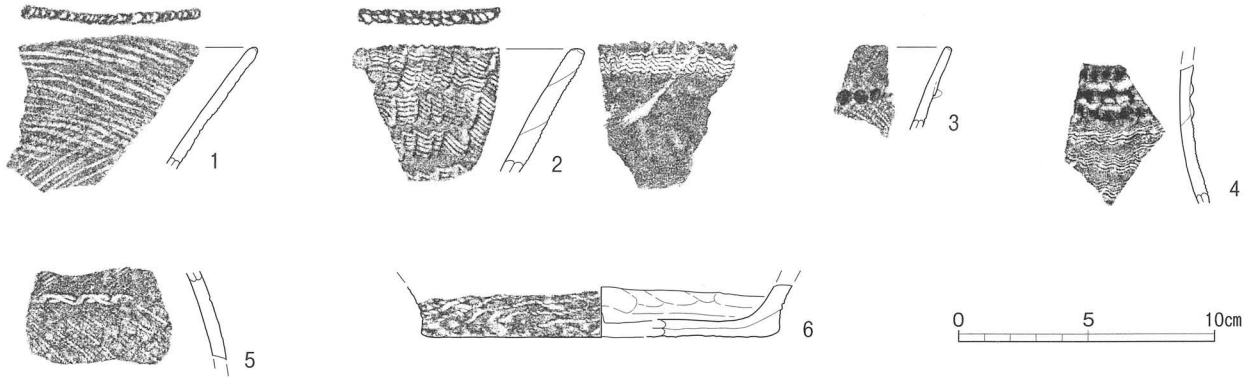
位置 B1区、G5グリッドに位置する。規模と平面形 竪穴が残存しないため不明。主軸方位 N-61°-W 壁・床・覆土 不明。ピット 5箇所ある。P1～4が支柱穴と判断する。P5は深さ10cm程度で、用途不明である。遺物 なし。所見 支柱穴配置は3号住居跡に近い。遺物はないが、周辺の遺構分布状況から、住居跡の帰属時期は弥生時代後期後半と推測される。



第234図 9号住居跡

2 遺構外出土遺物 (第235図)

1～6は遺構外出土の弥生土器である。1・4・6は十王台式の範疇で捉えられる。2は樽式土器に類似する振り幅の広い波状文が施文され、内面にも波状文が施文される。また、口唇部は縄文原体によるキザミを有する。5は回転結節文が施文されることから、南関東系の土器と考えられる。



第235図 遺構外出土遺物

表107 遺構外出土遺物観察表

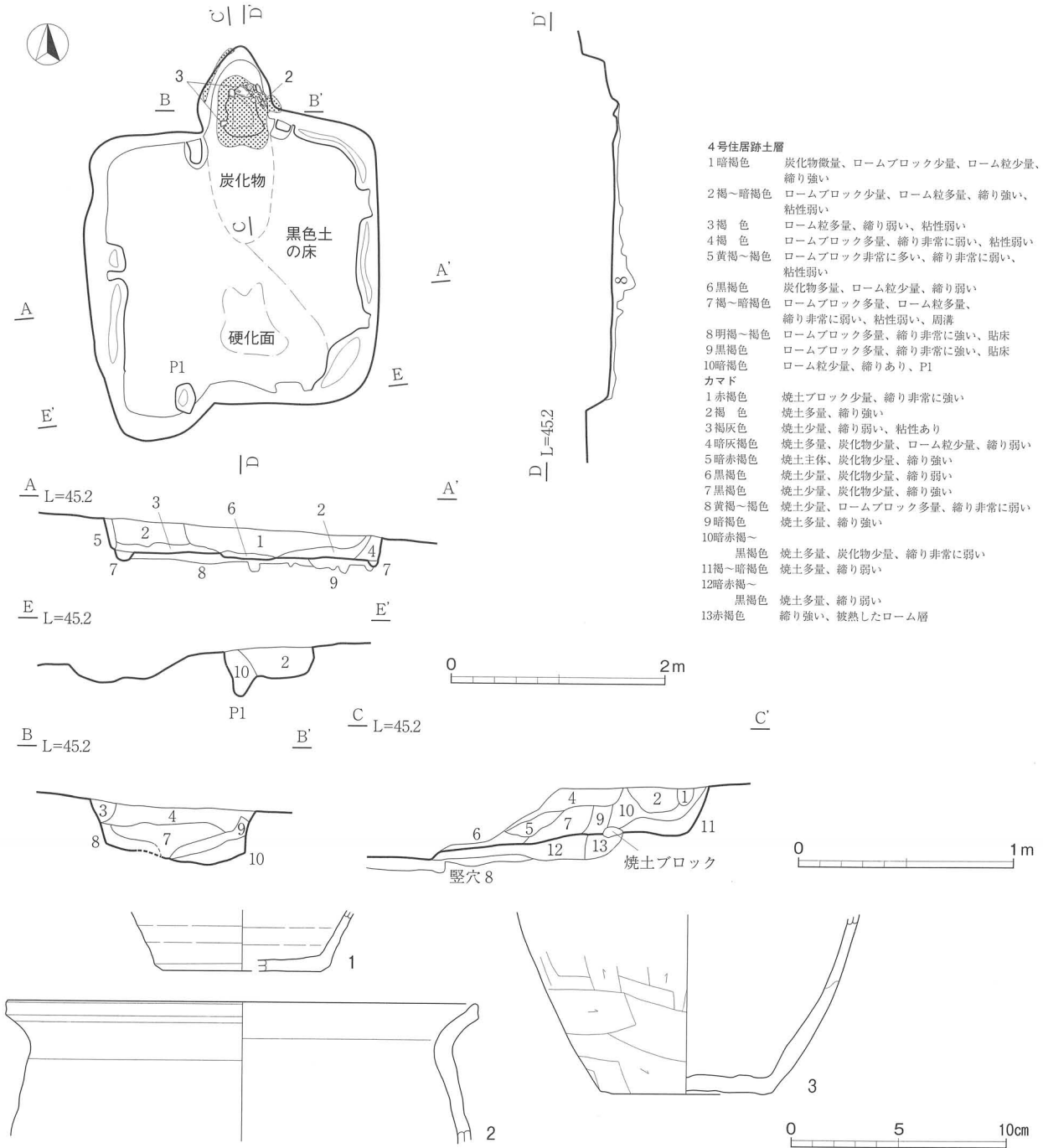
図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部軸縄不明の附加条縄文(R-S、L-Z:下→上)。内面は横・斜位のナデ。	石英	良好	外:淡黄色 内:にぶい橙色	B1区一括 十王台式
2	弥生土器壺	- - -	口唇部縄文原体によるキザミ。口縁部先端管状の櫛歯状工具(6本歯)による横位波状文(下→上、時計回り)。内面は横位のナデ→口唇部直下に外面と同様の櫛歯状工具(接地は5本)による横位波状文1条。外面の波状文は廉状文のように止めながら施文。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	B1区一括
3	弥生土器壺	- - -	折り返し口縁。口唇部軸縄不明の附加条縄文(R-S)によるキザミ。口縁部無文(横位のナデ)。軸縄不明の附加条縄文(L-Z)→口縁下端に小突起3個。内面は横位のナデ。外面スス、内面ヨグレ付着。	石英、多量の白色粒	普通	外:にぶい褐色内: 内:黒褐色	B1区一括
4	弥生土器壺	- - -	頸部押捺隆帯→頸部6本歯の横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。外面濃いスス付着。	石英、角閃石、多量の白色粒	良好	外:黒褐色 内:灰黄褐色	B1区一括 十王台式
5	弥生土器壺	- - -	胴部附加条1種縄文(RL+2L:端部結節)、軸縄不明の附加条縄文(L-Sカ)。内面は縦・斜位のナデ。外面スス、内面ヨグレ付着。	多量の石英	不良	外:にぶい橙色 内:黒褐色	B1区一括
6	弥生土器壺	- - (14.0)	胴部軸縄不明の附加条縄文(L-S)。底部砂痕。内面は横位のナデ。内面ヨグレ付着。	多量の石英・長石、角閃石、金雲母	良好	外:灰黄色 内:黒褐色	B1区一括

第2節 奈良・平安時代

1 竪穴住居跡

4号住居跡(第236図)

位置 B1区、G4グリッドに位置する。**規模と平面形** 南北(主軸)方向2.56~2.74m、東西方向2.75mを測り、不整隅丸正方形形状を呈する。南西隅の上端がやや張り出す。5号住居跡の一部を破壊する。**主軸方位** N-4°-W **壁** 壁高は14cmを測る。**床** わずかに凹凸があり、出入口部が硬化し、北東半分は黒褐色土の軟弱な床である。**ピット** P1は深さ20cmで、出入口ピットであろう。**カマド** 燃烧部はやや窪み、煙道部にかけて赤化・硬化著しい。袖は残存しないが、両袖の基部にあたるわずかな高まりが残存する。中央部からは大きな焼土塊が出土し、支脚の可能性もある。**覆土** 暗~黒褐色土主体の自然堆積状である。**遺物** カマド覆土中から土師器甕の個体が出土した。懸け甕と推測する。**所見** 住居跡の廃絶時期は、8世紀中葉頃と考えられる。



第236図 4号住居跡・出土遺物

表108 4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	— — (7.4)	底部片。底部回転ヘラケズリ、ロクロ右回転。	長石、石英	良好	灰白色	
2	土師器 甕	(22.2) —	口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	石英、金雲母	良好	橙色	カマド出土
3	土師器 甕	— — 8.1	底部片。底部弱いナデ、胴部外面ヘラケズリ。	石英、金雲母	良好	橙色	カマド出土

2 溝

1号溝 (第6図)

位置 B1区、G3・G4グリッドに位置する。規模と形状 上面幅0.46～1.64m、下面幅0.18～0.76m、深さ5～20cmを測る。総延長22.5mを確認した。断面形は浅皿状～緩やかなU字状(第223図C-C')である。走行方向 わずかに湾曲するが、ほぼ南北方向に走向する。N-15°-W 覆土 均質な黒色土が堆積する。遺物 須恵器甕の破片が出土しているが、小片のため図化に至らなかった。所見 覆土の状況や出土遺物などから、構築時期は古代と推測する。4号住居跡と主軸方向が近似することも示唆的である。

第3節 時期不明の遺構と遺構外出土遺物

1 時期不明の遺構

掘立柱建物跡と土坑・ピットが確認されている。1号掘立柱建物跡はG4～G5グリッドに位置する。調査区外にかかるため、桁行西辺しか調査できなかった。さらに調査区外では竪穴住居跡と重複するようである。桁行西辺2間、3.61m。桁行柱間1.7m・1.9m。主軸(桁方向)方位はN-7.5°-Eである。柱穴は3基確認し、全て抜取であった。

土坑は小規模で時期不明なものが5基点在する。1・2号土坑は隣り合って位置し、どちらも略円形で浅い。3号土坑もピット状で浅い。4・5号土坑は連結し、覆土は1号溝に類似する。いずれも壁面が硬化するが、土坑の性格は不明である。5基ともに時期判断すべき遺物に欠ける。計測値等は一覧表に記載した。

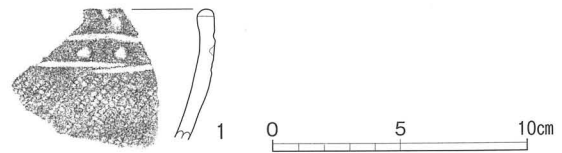
ピットは1号溝内やその周辺から、25基確認された。1・18号は欠番である。深さは16～68cmを測り、平均33cmである。覆土は褐色土主体と黒褐色土主体に分かれる。全て詳細時期不明ながら、1号溝とは何らかの関連が想定される。

表109 B1区土坑一覧表

遺構名	位置	平面形態	規模 (cm)			備考
			長径	短径	深さ	
1号土坑	G4	不整形	62	60	14	
2号土坑	G4	不整形	90	88	16	
3号土坑	G4	不整形	72	37	9	
4号土坑	F4	楕円形	156	103	47	5号土坑と重複
5号土坑	F4	楕円形	108	94	32	4号土坑と重複

2 遺構外出土遺物

縄文土器片が弥生後期の遺構や表土層から4点出土した。細別は中期中葉阿玉台Ⅱ式と晩期中葉(1)に比定され、他は縄文のみ施される胴部片である。



第237図 遺構外出土遺物

表110 遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	縄文土器鉢	- - -	口縁部～体部片。体部に単節縄文(LR)を横位施文→口縁部に多載竹管状工具の縁(口唇部キザミより類推)による横位の併行沈線→沈線間に同様の工具による刺突列。口唇部に多載竹管状工具による刺突。内面は横・縦位のミガキ。	多量の白色粒	良好	外:褐色 内:明黄褐色	B1区6号住居跡出土 晩期中葉

第Ⅵ章 B2区の遺構と遺物

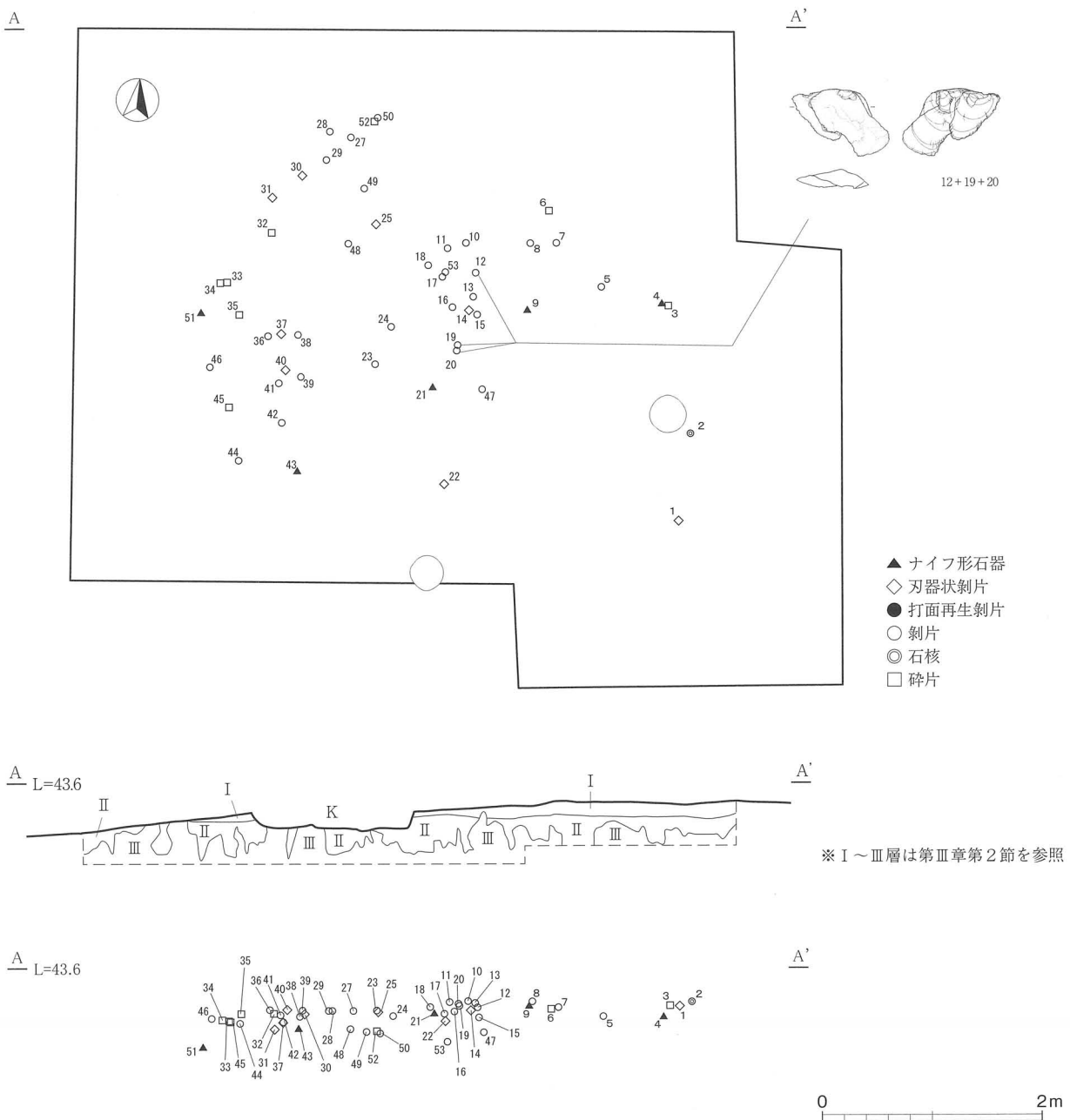
第1節 旧石器時代

1 石器集中地点

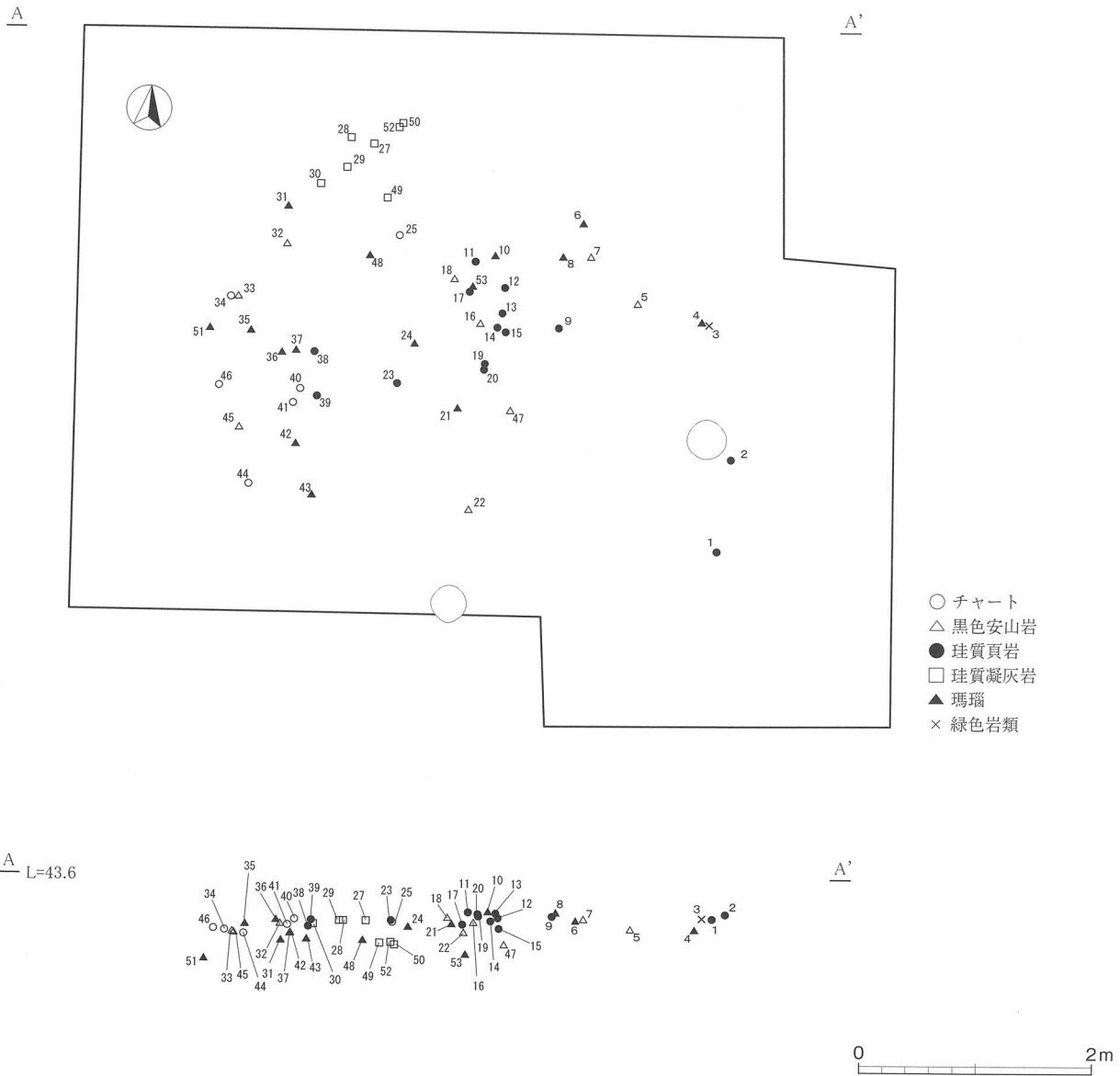
1号石器集中地点（第238～241図）

位置 調査区の西側中央、G9グリッドに所在する。 **規模** 東西4.56 m×南北3.35 m。標高42.88 m～43.31 m。 **層位** II層のソフトロームおよびIII層のハードローム中から出土し、その多くはII層中で検出された。III層中からも少量確認されているが、II・III層間が一定しないことに起因するもので、II層中の出土石器と同一のブロックに伴うものと見做される。 **遺物** 石器は59点出土した。ナイフ形石器5点、刃器状剥片8点、打面再生剥片1点、剥片34点、石核2点、碎片9点が認められており、総出土量における剥片や碎片の占める割合が高い(88%)。 **石器概要** 2次加工が施された石器ではナイフ形石器5点(No.4・9・21・43・51)が検出された。しかし、完形品は少なくNo.43以外は、先端部や基部が欠損している。各石器の製作工程を外観すると、素材剥片には単設打面石核および両設打面石核から剥片剥離された比較的小型の刃器状剥片が利用されており、単設打面石核から剥離されたものが多用されている。2次加工の部位は、剥片の末端部に施すNo.21・51、打面周辺に施すNo.4・9・43の2種類に分けられ、一側縁加工が施されるNo.4・9・43・51や二側縁加工が施されるNo.21に細分される。各石器の2次加工技術は、No.4を除き主要剥離面側から背面側へ刃潰し加工が連続的に施されており、いずれも急角度(60°～71°)な剥離角をもつ。形態的な特徴については、基部が尖基状(V字状)に加工されるNo.4・21・43や基部が方形状(打面が残存)のNo.9・51の2種類が認められる。なお、尖基状の基部をもつNo.4・43については、片側の打面周辺が大きく加工されていることから、刃潰しによる調整が施される前に切断している可能性が考えられる。また、No.43の基部には剥片剥離後の細長い剥離痕(槓状剥離)が認められることから、彫器としての機能を有している可能性も考えられる。刃器状剥片8点が検出されており、いずれも人為的な細部加工の痕跡は認められなかった。素材となる石核には、刃器状剥片の背面の剥離面構成により2点が単設打面石核、6点が両設打面石核が使用されている。これらの打面を観察すると、調整打面をもつNo.1・22・37、平坦打面をもつNo.30が認められる。しかし、No.14・25・31・40は剥片剥離後に打面が除去(斜位・平坦)されていることから、打面の状態が不明瞭である。石核は2点検出された。No.55はチャート製で切断面とみられる剥離面を除き、小型な剥離面が1箇所認められたのみである。No.2は珪質頁岩製の小型石核であり、形状などから残核と考えられる。剥離面の構成から両設打面石核と判断され、刃器状剥片を連続的に作出していたと推測される。また、作業面や打面周辺には小型剥離痕が多く、打面再生や頭部調整などが頻繁であったことが窺える。剥片類43点は、打面・末端部が遺存していない小型剥片や小型不整形なものが主体であるが、珪質頁岩製の剥片No.19・20および碎片No.12による接合資料が1点確認されている。No.20は礫打面をもち、背面全体が原礫面に覆われていることから、剥片剥離工程における初期段階の剥片と判断される。No.19は、No.20に連続する剥片剥離作業により作出された剥片である。上記の石核No.2や接合資料No.12・19・20などは、本遺跡における素材剥片作出を目的とする剥片剥離工程の一端を示す良好な資料と言える。 **石材** チャート・黒色安山岩・珪質頁岩・珪質凝灰岩・瑪瑙・緑色岩類などが使用されており、珪質頁岩・瑪瑙が半数以上を占める(54.2%)。それらの石材の多くは、ナイフ形石器や刃器状剥片に利用される傾向が認められる。

また、珪質頁岩製の石器 17 点では、礫皮・色調・混入物などの特徴などから、石核No.2 を除き接合資料No. 12・19・20 と同一母岩と推測される。さらに、黒色安山岩・珪質凝灰岩・瑪瑙製の石器についても色調・混入物などの観察から、同一母岩である可能性が考えられる。なお、母岩別資料については、肉眼観察による識別である。 分布状況 器種別の分布状況を見ると、ナイフ形石器・刃器状剥片・碎片などは集中地点内に散在しているのに対して、剥片は小規模な集中範囲が3箇所認められた。そのうち、北西寄りと中央の集中範囲2箇所では、石材別分布の珪質頁岩・珪質凝灰岩と同様の分布状況を示している。石材別の分布状況を見ると、黒色安山岩・瑪瑙は集中地点内に散在しているが、チャート・珪質頁岩・珪質凝灰岩は小範囲にまとまって分布している。 所見 1号石器集中地点は出土層位や遺物から砂川期に推定され、器種別および石材別の分布状況などから、石器製作に関連する可能性が考えられる。



第 238 図 1号石器集中地点（器種別）

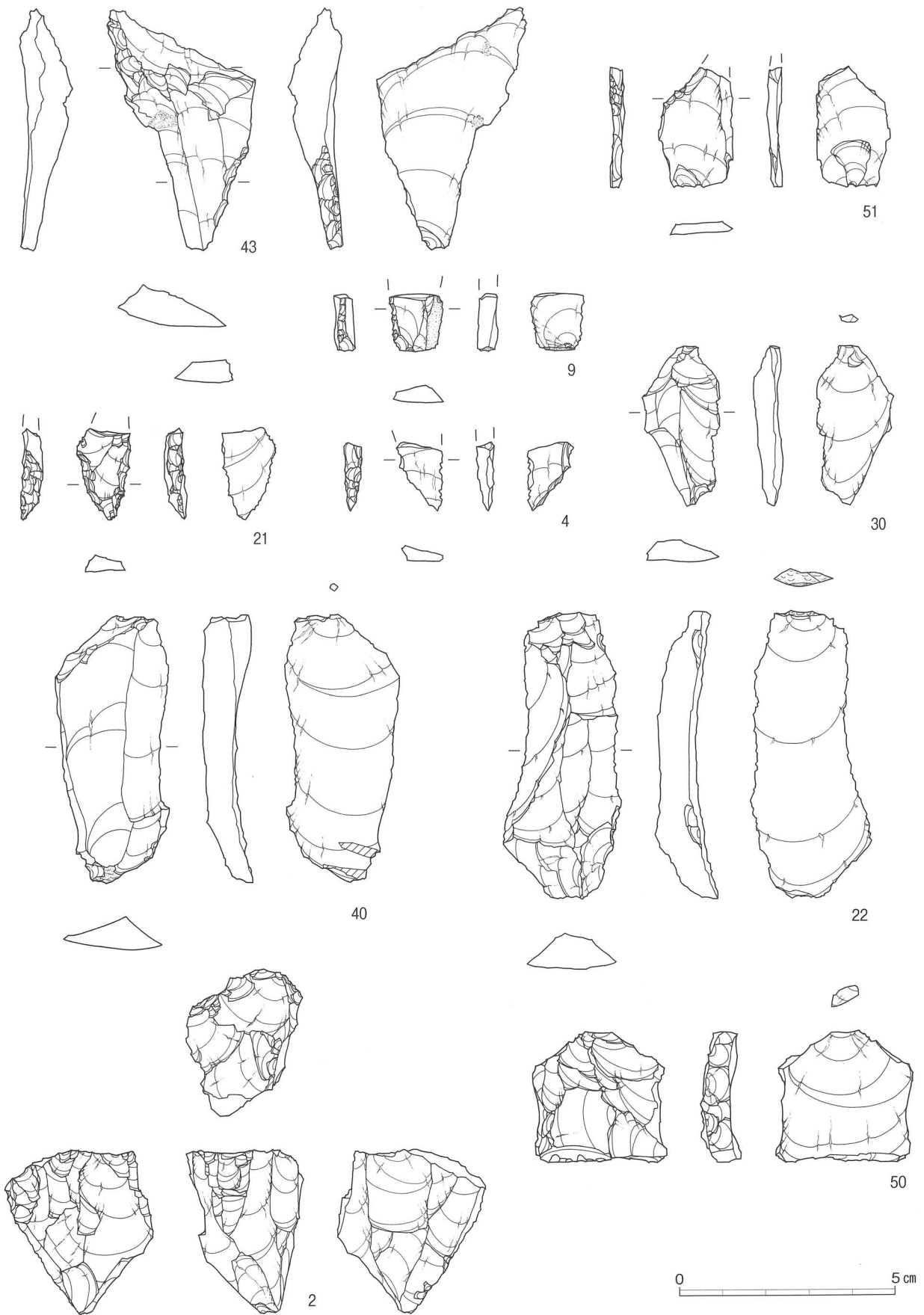


第239図 1号石器集中地点(石材別)

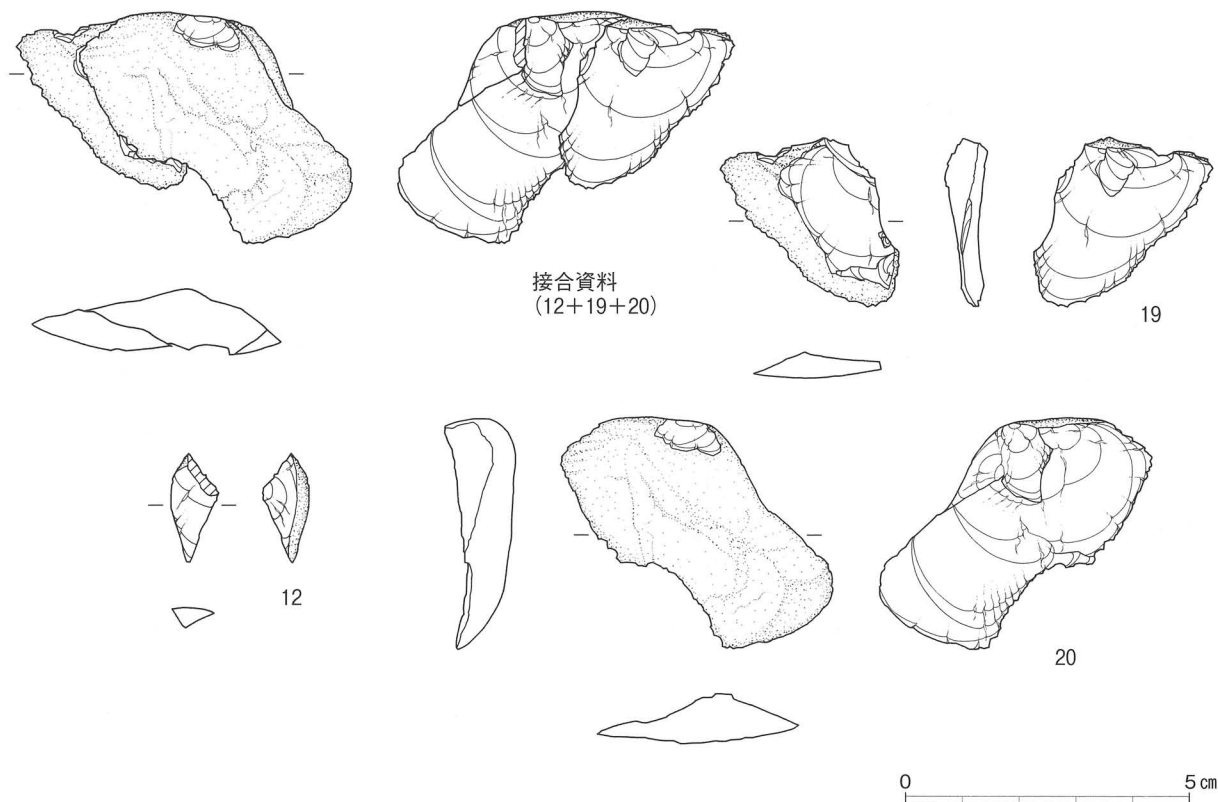
表111 1号石器集中地点出土石器組成表

	チャート	黒色安山岩	珪質頁岩	珪質凝灰岩	瑪瑙	綠色岩類	合計
ナイフ形石器	0	0	1	0	4	0	5
	0	0	0.89	0	13.82	0	14.71
刃器状剥片	2	1	2	1	2	0	8
	14.66	18.07	7.52	2.88	3.29	0	46.42
打面再生剥片	0	0	0	1	0	0	1
	0	0	0	6.71	0	0	6.71
剥片	4	7	12	4	7	0	34
	10.23	10.91	39.84	7.33	36.04	0	104.35
石核	1	0	1	0	0	0	2
	16.28	0	0.37	0	0	0	46.77
碎片	1	3	1	1	2	1	9
	0.04	1.55	0.37	0.16	1.01	0.14	3.27
合計	8	11	17	7	15	1	59
	41.21	30.53	79.11	17.08	54.16	0.14	222.23

上段：点数
下段：重量 (g)



第240図 1号石器集中地点出土遺物①



第241図 1号石器集中地点出土遺物②

表112 1号石器集中地点出土石器一覧表

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	欠損部位	背面の打撃方向	出土層位	報告書掲載	備考
1	刃器状剥片	珩質頁岩	5.44	2.81	0.64	5.36		2方向	II層		右側縁部に礫皮が残存。調整打面。
2	石核	珩質頁岩	3.88	2.75	3.45	30.49			II層	○	両設打面石核。頭部調整が顕著。
3	碎片	緑色岩類	<0.73>	<0.56>	<0.33>	0.14	端部		II層		極少碎片。
4	ナイフ形石器	瑪瑙	<1.62>	<1.05>	<0.40>	0.47	先端部	1方向	II層	○	基部に一側縁加工。打面除去カ。
5	剥片	黒色安山岩	1.96	1.55	0.45	1.25			III層		末端部は切断カ。
6	碎片	瑪瑙	1.80	0.60	0.45	0.39			II層		一側縁に不連続な剝離痕。
7	剥片	黒色安山岩	1.98	1.79	0.18	0.62		1方向	II層		縁辺にガジリ有り。末端部は切断カ。
8	剥片	瑪瑙	0.98	0.72	0.24	0.17		1方向	II層		末端部は切断カ。
9	ナイフ形石器	珩質頁岩	<1.35>	<1.25>	<0.49>	0.89	先端部	1方向	II層	○	基部に一側縁加工。
10	剥片	瑪瑙	2.16	2.07	0.42	1.56		1方向	II層		節理面が残存。末端部は切断カ。
11	剥片	珩質頁岩	0.93	1.36	0.33	0.38			II層		調整剥片。
12	碎片	珩質頁岩	1.90	0.84	0.35	0.37			II層	○	No.20の剥片剝離に伴う碎片。
13	剥片	珩質頁岩	3.55	2.46	1.25	3.35		1方向	II層		末端部に不連続な剝離痕。
14	刃器状剥片	珩質頁岩	3.35	1.96	0.42	2.16		2方向	II層		打面・末端部は切断カ。
15	剥片	珩質頁岩	3.54	2.79	0.99	9.98		1方向	III層		礫皮が残存。
16	剥片	黒色安山岩	<1.85>	1.96	0.66	2.00	末端部	2方向	II層		礫皮が残存。打面は切断カ。
17	剥片	珩質頁岩	2.51	1.63	0.49	1.08		1方向	II層		礫皮が残存。
18	剥片	黒色安山岩	3.29	2.09	0.75	3.50		2方向	II層		

第VI章 B2区の遺構と遺物

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	欠損部位	背面の打撃方向	出土層位	報告書掲載	備考
19	剥片	珪質頁岩	3.00	3.25	0.76	3.35		1方向	II層	○	No.20との接合資料。礫打面。
20	剥片	珪質頁岩	4.10	4.80	1.25	12.97		礫面	II層	○	No.12・19との接合資料。礫打面。
21	ナイフ形石器	瑪瑙	〈2.15〉	1.25	0.50	1.15	先端部	1方向	II層	○	基部に二側縁加工。
22	刃器状剥片	黒色安山岩	6.80	2.75	1.45	18.07		1方向	II層	○	やや大型。平坦打面。
23	剥片	珪質頁岩	1.82	1.62	0.42	1.09		1方向	II層		礫皮が残存。末端部は切断カ。
24	剥片	瑪瑙	2.77	2.55	1.31	7.10		2方向	II層		節理面が残存。末端部は切断カ。
25	刃器状剥片	チャート	1.90	1.19	0.26	0.49		1方向	II層		打面・末端部は切断カ。
26	欠番										
27	剥片	珪質凝灰岩	1.78	1.48	0.33	0.66			II層		調整剥片。背面に礫皮が残存。
28	剥片	珪質凝灰岩	3.60	2.95	1.42	5.67			II層		打面再生剥片カ。背面に頭部調整痕。
29	剥片	珪質凝灰岩	〈1.58〉	〈1.46〉	0.44	0.72	右半部	1方向	II層		末端部は切断カ。
30	刃器状剥片	珪質凝灰岩	3.30	1.80	0.65	2.88		2方向	III層	○	末端部に小さな剥離痕。ナイフ形石器カ。平坦打面。
31	刃器状剥片	瑪瑙	2.55	1.50	0.79	2.30		2方向	III層		打面・末端部は切断カ。
32	破片	黒色安山岩	1.68	1.31	0.50	0.94			III層		小型。
33	破片	黒色安山岩	0.84	0.42	0.20	0.09			II層		極少破片。
34	破片	チャート	0.76	0.53	0.14	0.04			II層		極少破片。
35	破片	瑪瑙	0.96	1.54	0.63	0.62			II層		小型。風化が顕著。
36	剥片	瑪瑙	3.59	3.45	1.38	12.94		2方向	II層		礫皮が残存。
37	刃器状剥片	瑪瑙	2.39	1.38	0.31	0.99		2方向	III層		調整打面。打面・末端部は切断カ。
38	剥片	珪質頁岩	0.91	1.23	0.18	0.21		1方向	III層		打面・末端部は切断カ。
39	剥片	珪質頁岩	2.31	2.98	1.43	6.35		礫面	III層		縁辺にガジリ有り。
40	刃器状剥片	チャート	6.30	2.65	1.15	14.17		2方向	II層	○	二側縁の一部に微細剥離痕。打面除去。
41	剥片	チャート	2.74	3.88	0.90	7.85		1方向	III層		節理面が残存。末端部は切断カ。
42	剥片	珪質頁岩	1.27	1.02	0.25	0.30		2方向	III層		末端部は切断カ。
43	ナイフ形石器	瑪瑙	5.70	3.45	1.27	10.72		2方向	III層	○	基部に一側縁加工。彫器の可能性有り。
44	剥片	チャート	2.58	1.41	0.35	0.80		2方向	III層		末端部は切断カ。
45	破片	黒色安山岩	1.42	1.04	0.49	0.52			II層		小型。
46	剥片	チャート	0.88	0.72	0.23	0.08		1方向	II層		打面は切断カ。
47	剥片	黒色安山岩	1.48	1.27	5.55	0.93		1方向	III層		打面は切断カ。
48	剥片	瑪瑙	1.89	1.22	0.57	0.86		1方向	II層		礫皮が残存。
49	剥片	珪質凝灰岩	1.69	0.52	0.36	0.28			III層		小型。背面に不連続な剥離痕。
50	打面再生剥片	珪質凝灰岩	3.10	3.15	0.95	6.71			III層	○	単設打面石核の打面再生剥片。末端部は切断カ。
51	ナイフ形石器	瑪瑙	〈2.85〉	1.73	0.35	1.48	先端部	1方向	III層	○	末端部に一側縁加工。
52	破片	珪質凝灰岩	〈1.56〉	〈0.59〉	〈0.17〉	0.16	左半部	1方向	III層		極少破片。
53	剥片	瑪瑙	1.60	0.96	0.47	0.61		1方向	III層		打面・末端部は切断カ。
54	剥片	瑪瑙	3.79	2.58	1.61	12.80		2方向	一括		風化が顕著。
55	石核	チャート	3.64	3.00	1.72	16.28	端部		一括		礫皮が残存。小型剥離面が一箇所。
56	剥片	チャート	1.68	2.05	0.50	1.50			一括		調整剥片。
57	剥片	珪質頁岩	1.74	1.39	0.26	0.65		1方向	一括		打面は切断カ。
58	剥片	珪質頁岩	1.01	1.16	0.10	0.13			一括		小型。打面は切断カ。
59	剥片	黒色安山岩	2.65	1.84	0.40	1.95			一括		風化が顕著。右半部は切断カ。
60	剥片	黒色安山岩	1.93	1.06	0.30	0.66			一括		小型。風化が顕著。打面・末端部は切断カ。

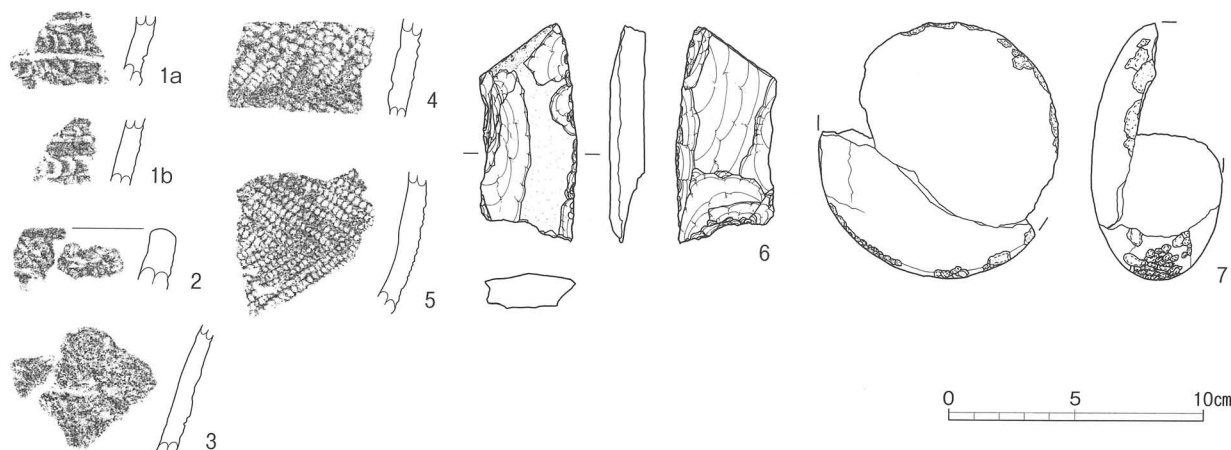
※単位：cm, g 〈 〉内は残存値

第2節 縄文時代

1 竪穴住居跡

1号住居跡（第242・243図）

位置 調査区の南東部、H9グリッドに所在する。規模と平面形 調査範囲や耕作痕による攪拌のため住居跡南端が不明瞭となる。[5.78以上]×3.86m。長方形。主軸方向 N-38°-W 壁 壁高は約12cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床 硬化等は認められない。ピット 45基。P1～P6およびP7は主柱穴に想定される（深さ34～65cm）。そのうち、P1の掘り込みが非常に大きい。また、竪穴の壁際などに多数のピット（深さ10～40cm、平均21cm）が穿たれ、列状を呈するものも見出された。床下では北側に浅い掘り込みが散在する。B2区1号土坑が竪穴内に位置するが、その関係は不明である。炉 長径108cm、短径66cm、深さ8cmの長楕円形。さらに、P1脇でも被熱痕が見受けられた。覆土 黒褐色土や褐灰色土の1・

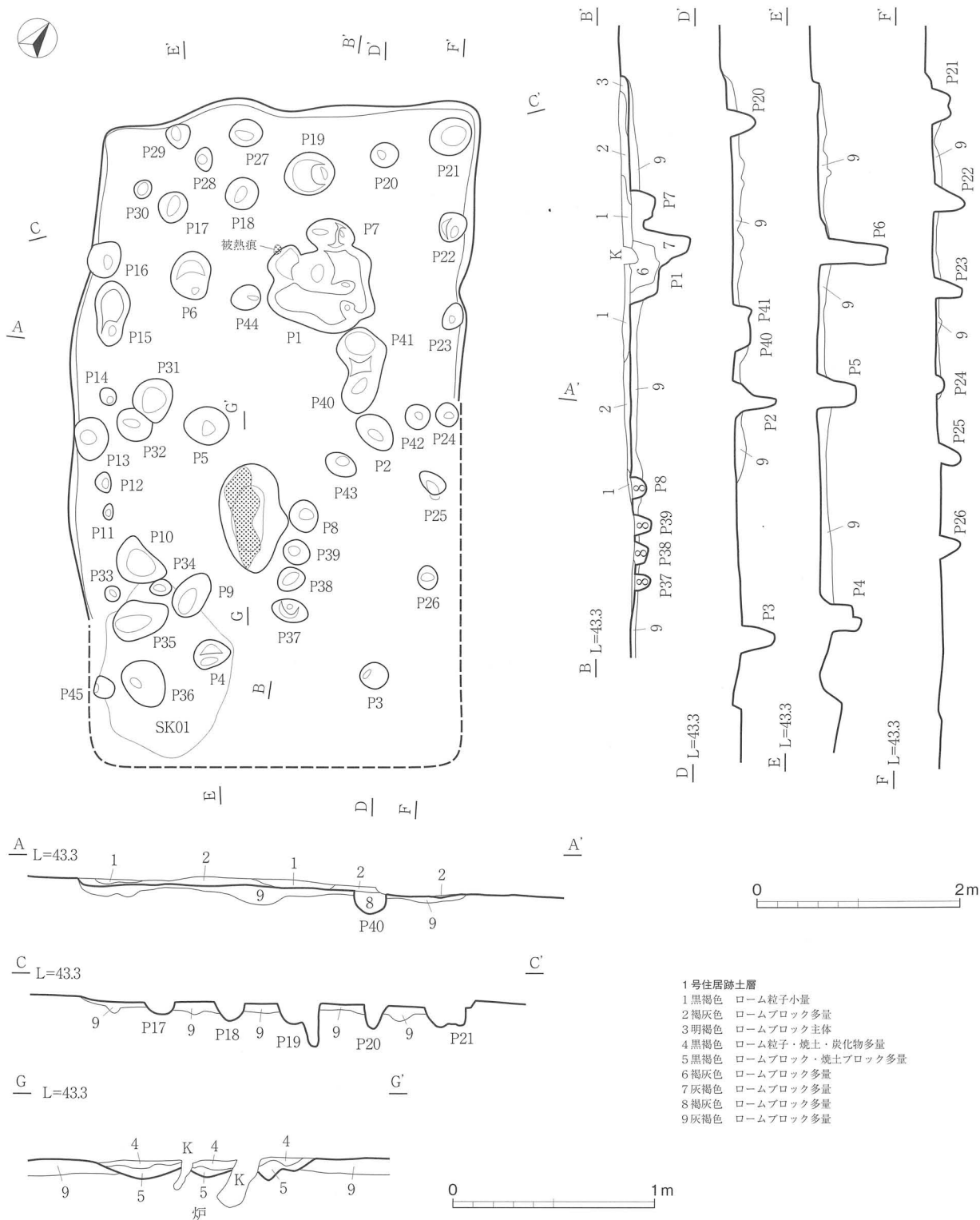


第242図 1号住居跡出土遺物

表113 1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	縄文土器 深鉢	— — —	口縁部片。半截竹管状工具の内面による横位の結節沈線。内面はミガキ。	繊維	不良	外：暗褐色・褐色 内：明褐色	黒浜式
2	縄文土器 深鉢	— — —	口縁部片。単節縄文(RL)を横位施文。内面はナデ。	片岩・繊維	不良	外：暗褐色 内：暗褐色	床面出土 黒浜式
3	縄文土器 深鉢	— — —	胴部片。縄文施文カ。内外面共に器面荒れが著しい。	多量の石英、 繊維	不良	外：褐色 内：黒褐色	床面出土 黒浜式
4	縄文土器 深鉢	— — —	胴部片。単節縄文(RL・LR)を横位羽状施文。内面はミガキで、器面荒れが著しい。	繊維	不良	外：暗褐色 内：にぶい黄橙色	黒浜式
5	縄文土器 深鉢	— — —	胴部片。単節縄文(RL・LR)を横位羽状施文。内面はミガキ。	繊維	不良	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	黒浜式
6	石器 スクレイパー		礫皮を持つ剥片の縁部(二辺)に剥離・微細剥離痕。石材：片岩。長さ8.6cm・幅3.9cm・厚さ1.5cm・重さ56.6g。				床面出土 折損
7	石器 磨石・敲石		円形の自然礫を使用。表裏面に擦痕、縁辺に敲打痕。被熱により破砕。1/2欠損。石材：砂岩。残存長10.2cm・残存幅9.5cm・残存厚5.1cm・重さ360.2g。				床面出土 接合

2層で覆われ、壁際にロームブロックを主体とする3層が堆積している。遺物 縄文時代前期中葉の土器片、石器が少量出土している。所見 住居の形態や他時期の混入が認められない遺物の検出状況から、縄文時代前期中葉黒浜式期の住居跡に比定される。



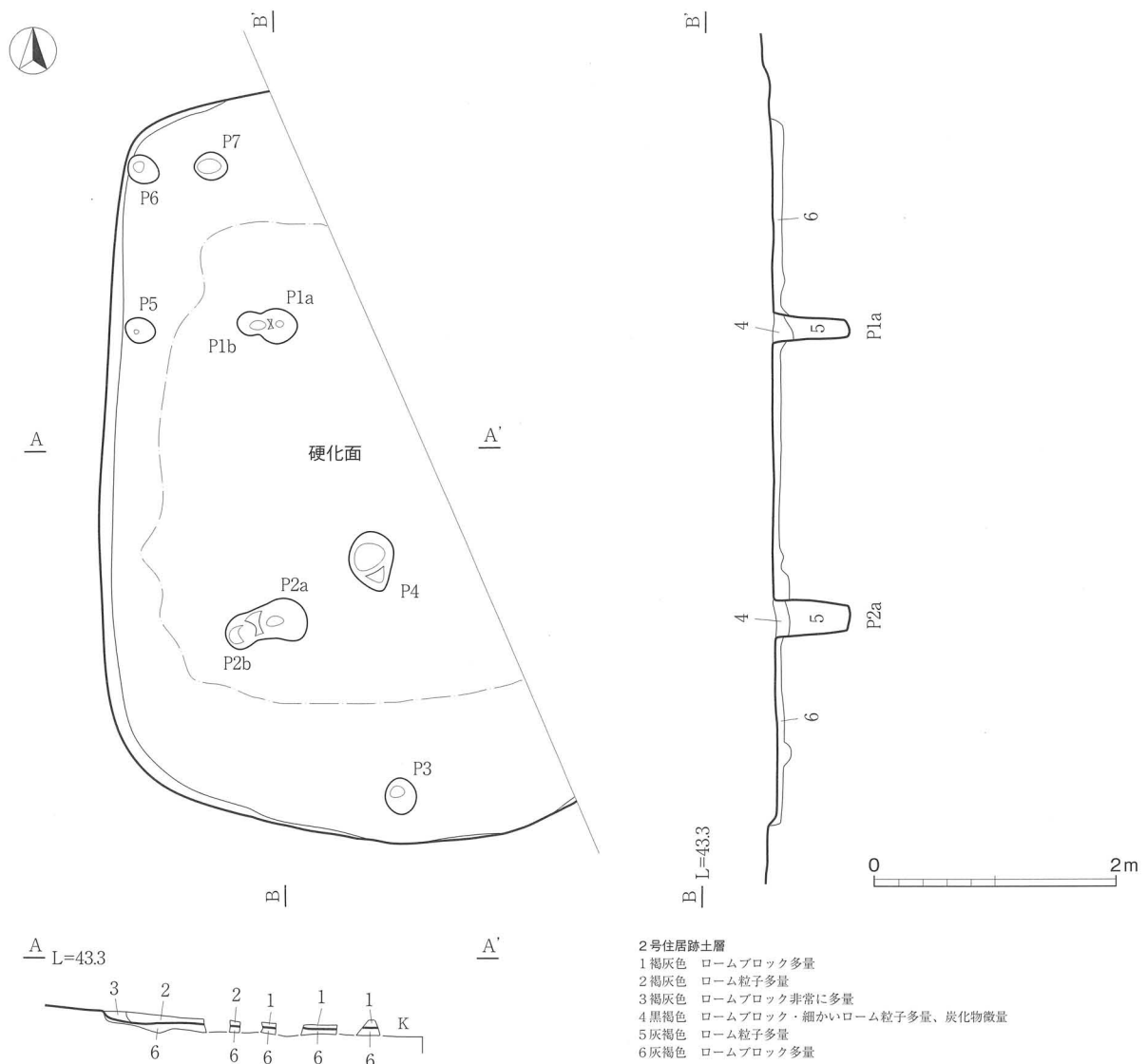
第243図 1号住居跡

第3節 弥生時代

1 竪穴住居跡

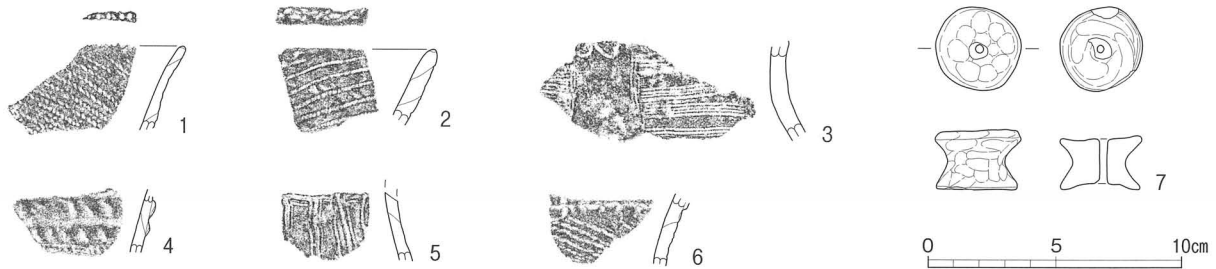
2号住居跡（第244・245図）

位置 調査区の南東部、H9グリッドに所在する。**規模と平面形** 調査範囲や耕作痕による攪拌のため住居跡東側が不明瞭となる。[6.06以上]×[3.54以上]m。隅丸長方形。**主軸方向** N-0° **壁** 壁高は約9cmで、傾斜して立ち上がる。**床** 主柱穴を囲む竪穴の中央が硬化する。**ピット** 9基。P1a・P1b・P2a・P2bは主柱穴に想定される（深さ60～67cm）。柱の付け替えが見受けられ、内側のP1a・P2a、外側のP1b・P2bが対応する。P1a・P1b、P2a・P2bはそれぞれ重複するが、耕作痕による攪拌のため新旧関係は観察できなかった。P3は出入り口ピットである（深さ36cm）。また、竪穴の中央やや南側にP4（深さ27cm）、北西壁に沿ってP5・P6・P7（深さ20～47cm）が認められる。**炉** 検出



第244図 2号住居跡

されなかった。耕作痕により削平されたものと考えられる。 **覆土** ロームブロックやローム粒子を含む褐灰色土の1・2層で覆われ、壁際にロームブロックを主体とする3層が堆積している。また、床面下の掘り方にはロームブロックを含む灰褐色土が認められた。 **遺物** 弥生時代後期の土器片が少量出土した。また、紡錘車(7)が検出されている。 **所見** 住居の形態や出土遺物から、弥生時代後期の住居跡に比定される。



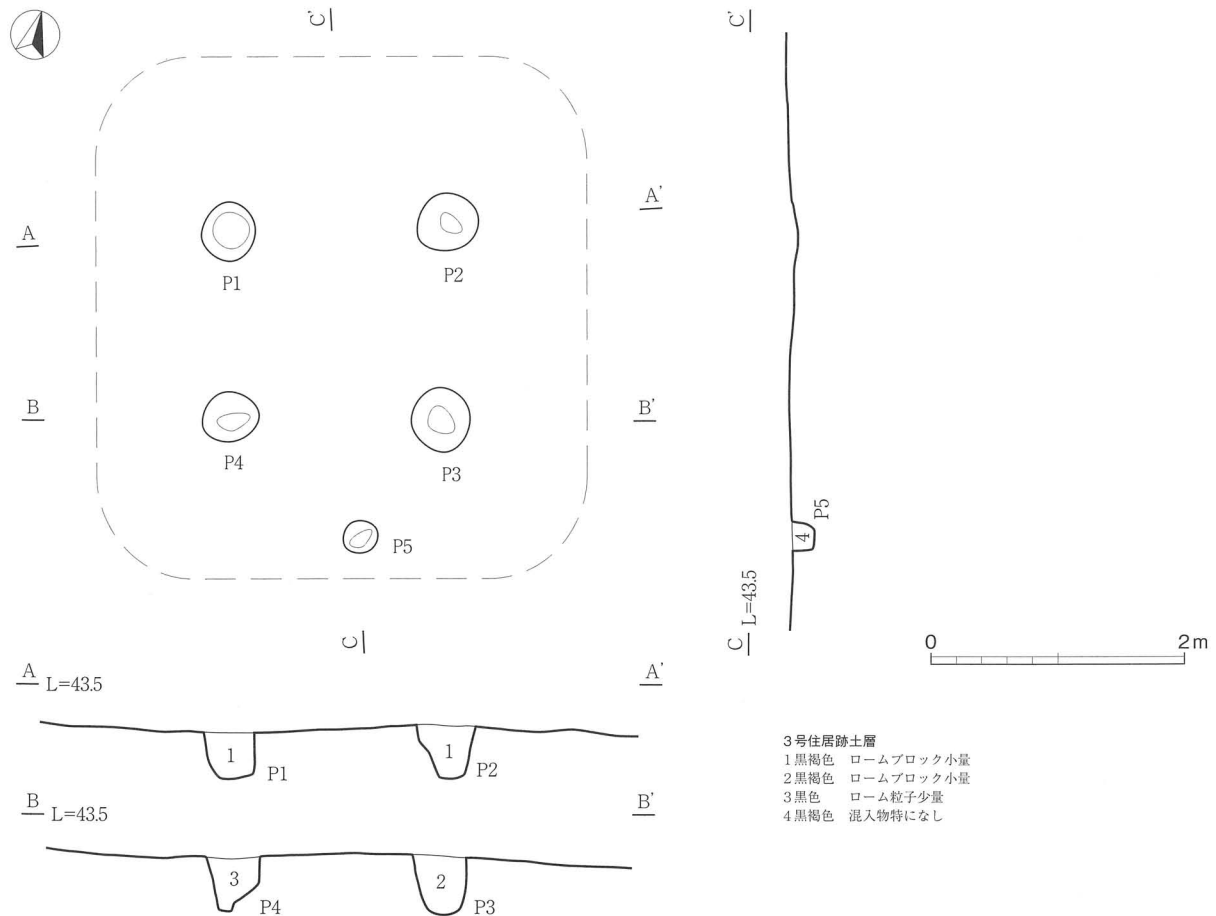
第245図 2号住居跡出土遺物

表114 2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部軸繩不明の附加条縄文(L-Z)。内面は横・斜位のナデ。外面濃いスス、内面ヨグレ付着。	石英、角閃石	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部附加条2種縄文(RL+2R)を回転施文。口縁部同様の原体を横位施文。内面はナデ。	石英	普通	外：明褐色 内：にぶい褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	頸部4本歯の縦位直線文→横位直線文ないし廉状文、スリット内に横位波状文。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・白色粒、角閃石、赤色粒	不良	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	- - -	頸部押捺隆帯。4本歯の横位直線文→縦位直線文。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。5と同一個体カ。外面スス付着。	石英、角閃石	良好	外：にぶい黄褐色 内：橙色	十王台式
5	弥生土器 壺	- - -	頸部4本歯の横位直線文→縦位直線文。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。4と同一個体カ。外面スス付着。	石英、角閃石、骨針	良好	外：にぶい黄褐色 内：橙色	十王台式
6	弥生土器 壺	- - -	頸部丸棒状工具カによるキザミ隆帯(隆帯直下にも圧痕)。軸繩不明の附加条縄文(R-Z)。内面は縦位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・白色粒	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	
7	土製品 紡錘車		径3.3、高2.4、孔径0.3、重量[23.50]g。X字形。片側穿孔。表裏面ナデ・ユビオサエ調整。	石英、角閃石、骨針、多量の白色粒	普通	にぶい黄褐色	

3号住居跡(第246図)

位置 調査区の中央やや南東側、G8・G9グリッドに所在する。 **規模と平面形** 柱穴のみの確認で、不明である。 **主軸方向** N-16°-W。 **壁** 削平されている。 **床** ほぼ削平されている。 **ピット** 5基。P1~P4は主柱穴(深さ37~46cm)、P5は出入り口ピット(深さ19cm)に想定される。 **炉** 検出されなかった。削平されたものと考えられる。 **覆土** 柱穴の周りに褐灰色土が散在する。 **遺物** P2から弥生時代後期の土器片が1点出土した。 **所見** 柱穴配置や出土遺物から、弥生時代後期の住居跡に比定される。



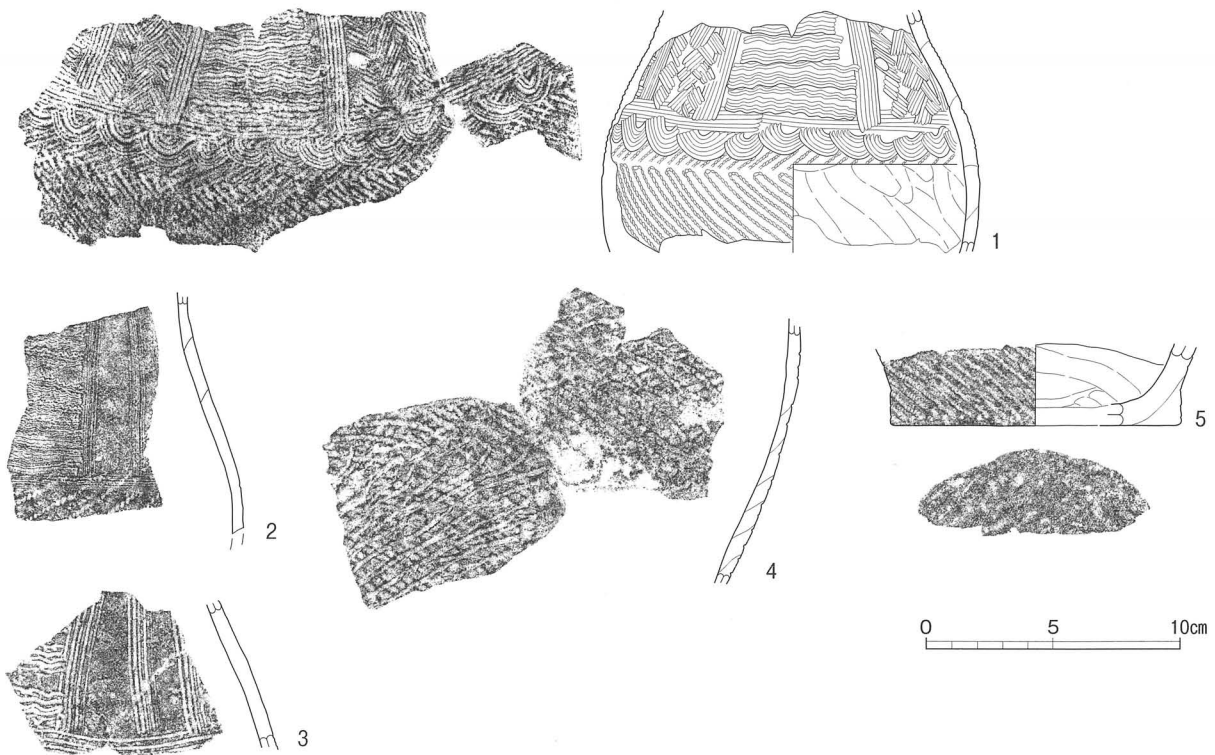
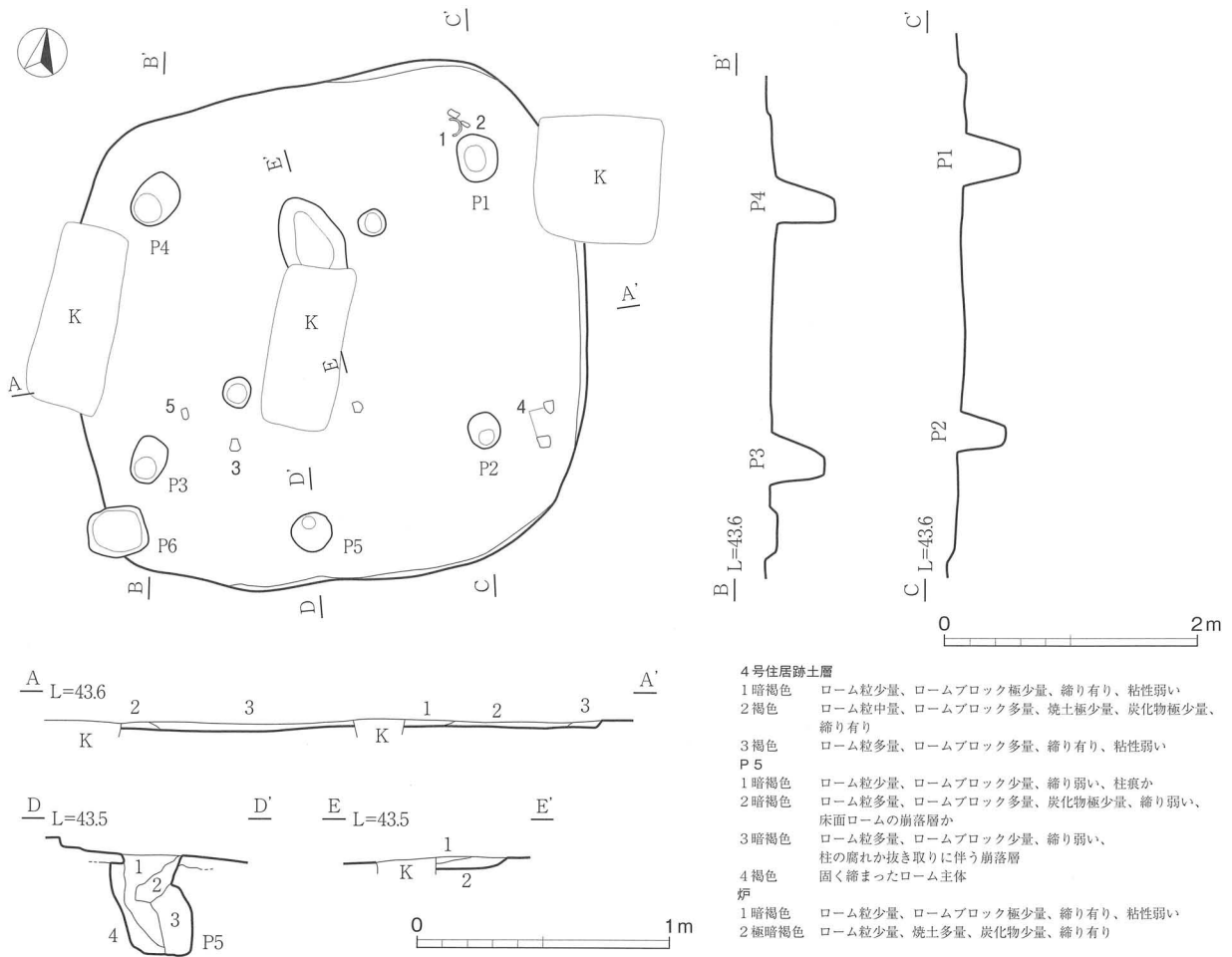
第246図 3号住居跡

4号住居跡 (第247図)

位置 B2区北部、F8・G8グリッドにある。規模と平面形 4.08 × 4.00 mの隅丸方形。主軸方向 N-11°-W 壁 壁高は約10cm、外傾気味に立ち上がる。床 床面全体に硬化している。ピット 6箇所。P1～P4は支柱穴と考えられる。P5は出入り口ピット、P6は深さ6cmの浅いピットである。炉 住居中央北寄りに位置し、縦長の楕円形になるものと思われる。攪乱穴によって南側を壊されている。覆土 暗褐色土を主体にした自然堆積層である。遺物 覆土下層から弥生時代後期の壺体部・底部片が出土している。所見 弥生時代後期の住居と考えられる。

表115 4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	胴部軸繩不明の附加条繩文 (R・S・L・Z: 撚り戻し気味) → 頸胴界6本歯の横位区画直線文 (時計回り) → 上開きの連弧文 (反時計回り)。頸部2条一単位の縦位直線文 → 横位波状文 (下→上)、縦位羽状文 (下→上、左→右)。一部縦位直線文 → 頸胴界横位直線文 (横位波状文の部分あり)。内面は胴部斜位のナデ → 頸部横位のナデ。外面に黒斑2カ所、内面にも外面に対応する位置に薄い黒斑2カ所。	石英、角閃石、多量の金雲母・白色粒	良好	にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	胴部軸繩不明の附加条繩文 (R・S) → 頸胴界7本歯の横位区画直線文 → 頸部縦位直線文 → 横位波状文 (上→下)。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	多量の石英・白色粒、角閃石、骨針	普通	にぶい黄褐色	十王台式



第247図 4号住居跡・出土遺物

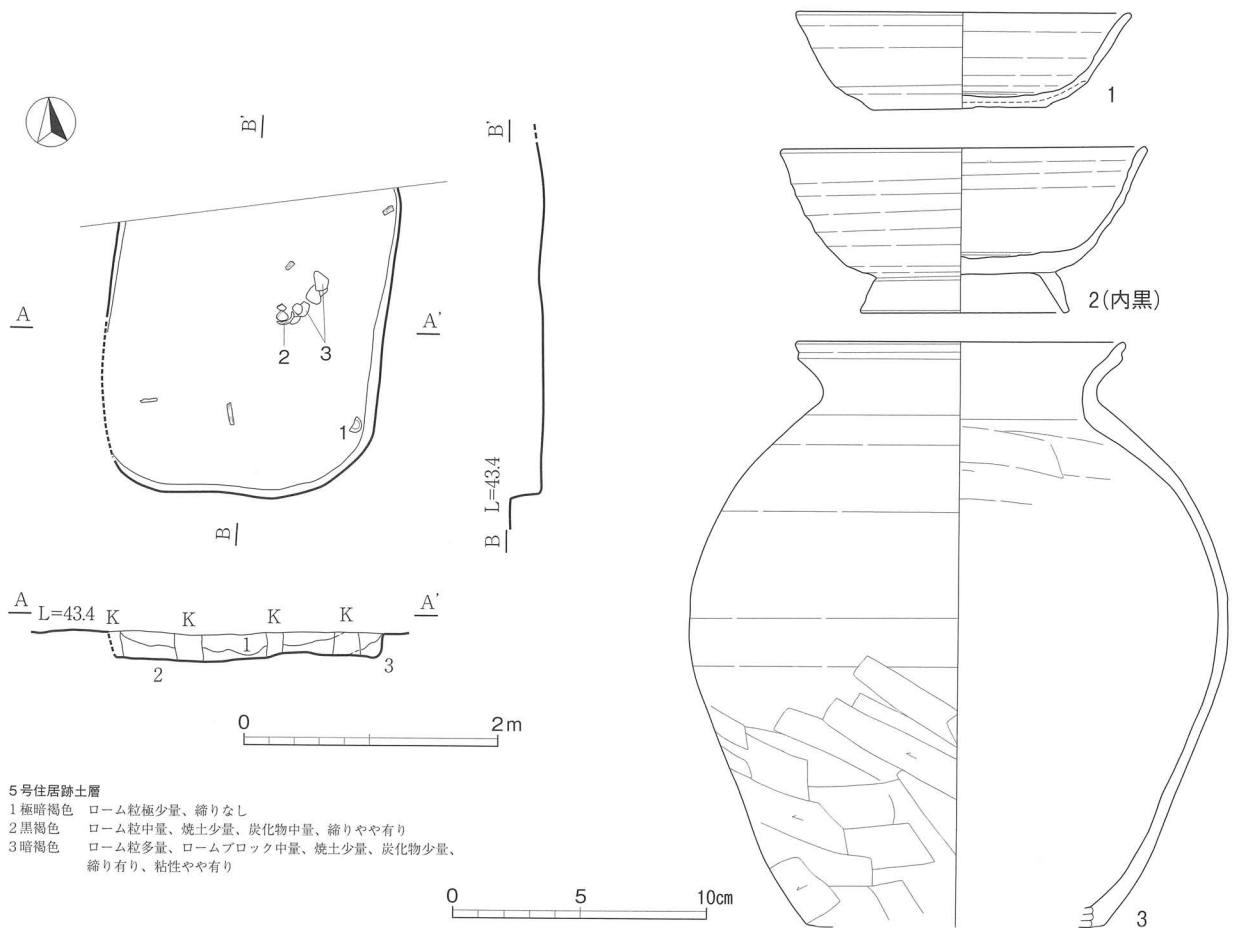
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	弥生土器壺	- - -	頸胴界5本歯の横位区画直線文→頸部3条一単位の縦位直線文→横位波状文。内面は斜位のナデ。外面スス、内面全体コゲ付着。	多量の石英・長石	普通	外：にぶい黄色 内：黒褐色	十王台式
4	弥生土器壺	- - -	胴部附加条2種縄文（RL+2R、L+L：下→上）カ。内面は縦・斜位のナデ。	石英、金雲母、骨針、赤色粒	普通	にぶい黄橙色	十王台式
5	弥生土器壺	- - (11.4)	胴部附加条1種縄文（RL+2L）。底部布目痕（周縁ナデ消し）。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英、角閃石、骨針、赤色粒、多量の白色粒	良好	外：にぶい橙色 内：にぶい黄橙色	

第4節 奈良・平安時代

1 竪穴住居跡

5号住居跡（第248図）

位置 B2区北部、G7・G8グリッドにある。**規模と平面形** 2.18 × 2.30m以上の縦に長い隅丸長方形。**主軸方向** N-16°-E **壁** 壁高は約24cm、ほぼ垂直に立ち上がる。**床** 全体にやや硬化している。**ピット** - **カマド** - **覆土** 床上を全体に暗褐色土を主体とした2枚の層が被覆している。**遺物** 住居中央部やや東寄りの床面から土師器の壺と酸化焰焼成の須恵器甕が、南東部の床面から土師器坏が出土している。**所見** 出土遺物から平安時代10世紀以降の住居跡と考えられる。



第248図 5号住居跡・出土遺物

表 116 5号住居跡出土遺物観察表

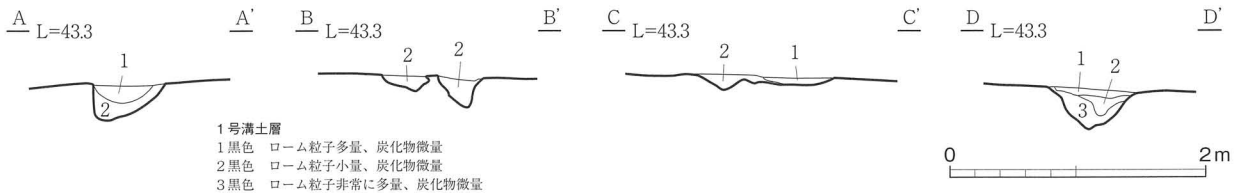
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	13.2 3.8 6.6	底部回転ヘラ切り離し、ロクロ右回転。体部内外面ロクロナデ。酸化部と黒化部があり、二次被熱を受けているか。	石英、海綿骨針	良好	にぶい橙色（酸化部分）	70%
2	土師器 壺	14.4 6.6 8.1	体部内外面ロクロナデ。外面にぶい橙色内面黒化。	石英、角閃石	普通	にぶい橙色	80%
3	須恵器 甕	(12.9) (23.2) (11.7)	口縁部外面斜め方向摘み上げ、胴部外面ロクロナデ。胴部下半部ヘラケズリ。	長石、石英	良好	暗褐色	80%

第5節 時期不明の遺構と遺構外出土遺物

1 溝

1号溝（第7・249図）

位置 調査区の南東部、H8・H9グリッドに所在する。**規模と形態** 調査範囲や耕作痕による攪拌のため部分的に不明瞭となる。南北に走向し、南側が屈曲する。幅36～160cm、深さ2～27cm。**主軸方向** N-3～58°-W **ピット** 19基。性格は不明で、溝と同様の覆土が埋没する。（深さ5～50cm、平均25cm）。**覆土** ローム粒子や炭化物を含む黒色土が堆積している。**遺物** 縄文時代前期前半や弥生時代後期の土器片が僅少出土した。**所見** 所産時期は不明である。流水の痕跡が認められないことから、区画等を目的とした溝と考えられよう。



第 249 図 1号溝

2 土坑・ピット（第7・250図）

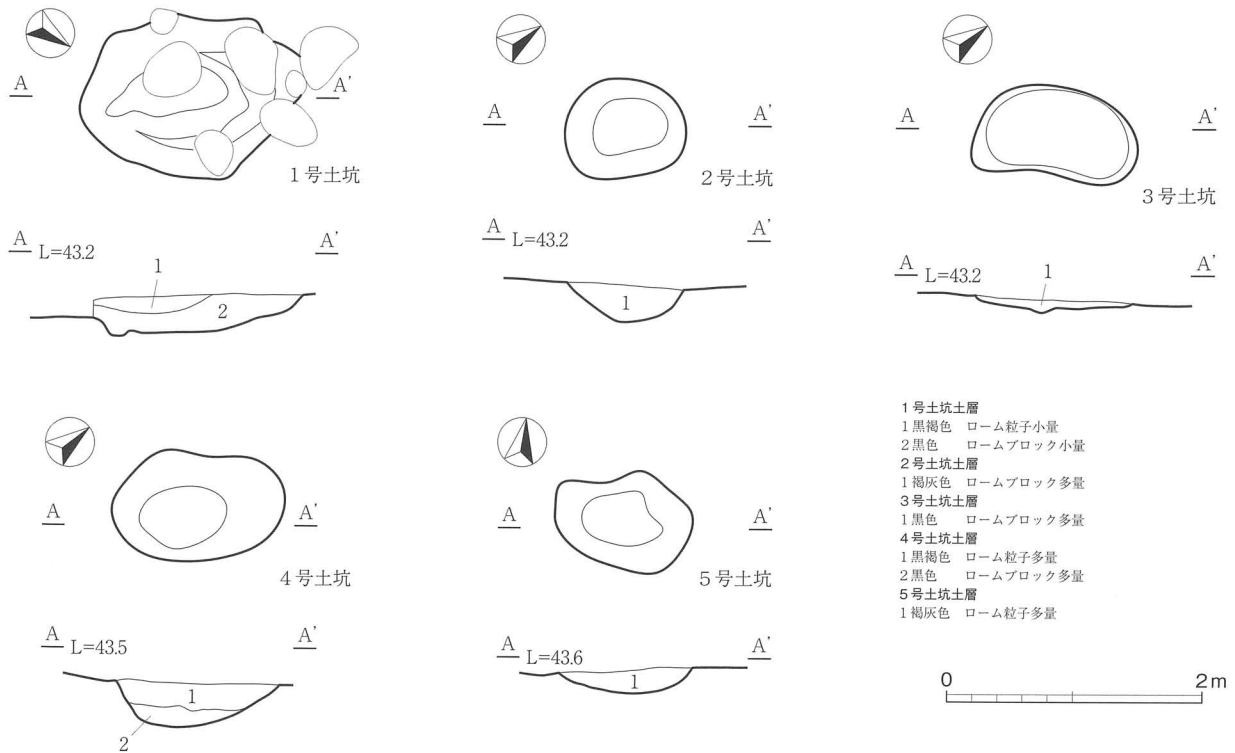
調査区内から5基の土坑が確認された(表 117 参照)。平面は楕円形ないし不整楕円形、断面形は逆台形状・弧状等で一定しない。覆土は黒・黒褐色土（1・3・4号土坑）や褐灰色土（2・5号土坑）で、ロームブロックやローム粒子を含む。遺物はほとんど出土せず、時期判断が難しい。1号土坑は1号住居跡と重複するが、攪拌のため新旧関係は観察できなかった。5号土坑には根跡が多く、植栽の可能性がある。

ピットは64基確認された（P1～66、P9・10は欠番）。調査区北東部および南西部に集中するが、有意な配列等は認められなかった。平面は円形ないし楕円形を呈し、深さは一定しない（深さ14～85cm、平均35cm）。覆土はロームブロッ

表 117 B2区土坑一覧表

遺構名	位置	平面形態	規模 (cm)			備考
			長径	短径	深さ	
1号土坑	H9	不整楕円形	[163]	130	30	1住と重複
2号土坑	H9	楕円形	94	80	30	
3号土坑	H9	不整楕円形	130	70	10	
4号土坑	G9	不整楕円形	134	87	34	
5号土坑	G8	不整楕円形	110	78	19	

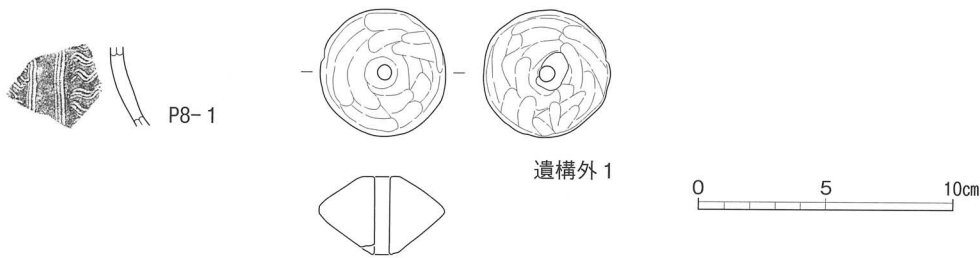
クを少量含む黒褐色土、ロームブロックを多量含む灰褐色土、ローム粒子を少量含む灰褐色土等である。遺物はほとんど出土せず、時期判断が難しい。P 8で弥生時代後期の土器片が出土した（第 251 図）。



第 250 図 1号～5号土坑

3 遺構外出土遺物（第 251 図）

1は無文の土製紡錘車で、ナデによって表裏面が調整されている。



第 251 図 ピット・遺構外出土遺物

表 118 ピット・遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
P 8 1	弥生土器 壺	— — —	頸部2条一単位・3本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英	普通	外：暗灰黄色 内：にぶい黄橙色	十王台式
遺構外 1	土製品 紡錘車	— — —	径5.0、高3.1、孔径0.6、重量 [59.52] g。片側穿孔。表裏面ナデ調整。裏面被熱よる赤色化。	多量の石英	普通	黒褐色	表土出土

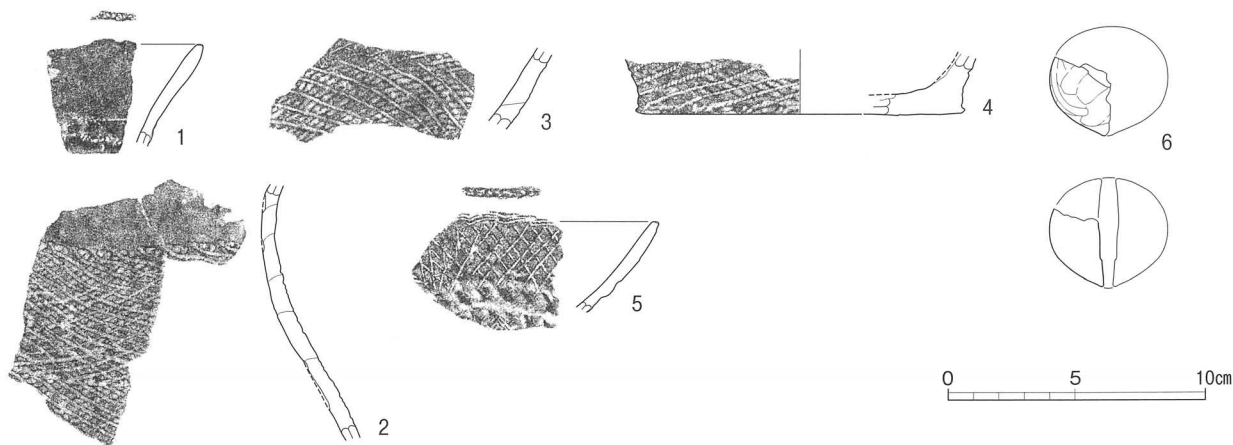
第八章 B3区の遺構と遺物

第1節 弥生時代

1 竪穴住居跡

1号住居跡（第252・253図）

位置 調査区の北西部、H11・H12グリッドに所在する。**規模と平面形** 削平のため住居跡西側が不明瞭となる。[5.94以上]×[3.74以上]m。隅丸長方形。**主軸方向** N-29°-W **壁** 壁高は約7.5cmで、やや傾斜して立ち上がる。**床** 硬化等は認められない。**ピット** 11基。P1～P8は支柱穴に想定される。柱の付け替えが見受けられ、内側のP1～P4（深さ55～67cm）、外側のP5～P8（深さ27～52cm）が対応する。P1に伴う浅い掘り込みは柱の抜き取り痕に推察されよう。P9・P10は出入り口ピットで、支柱穴の付け替えに対応する（深さ31・26cm）。P11は貯蔵穴の可能性もあるが、本遺構に伴うものか不

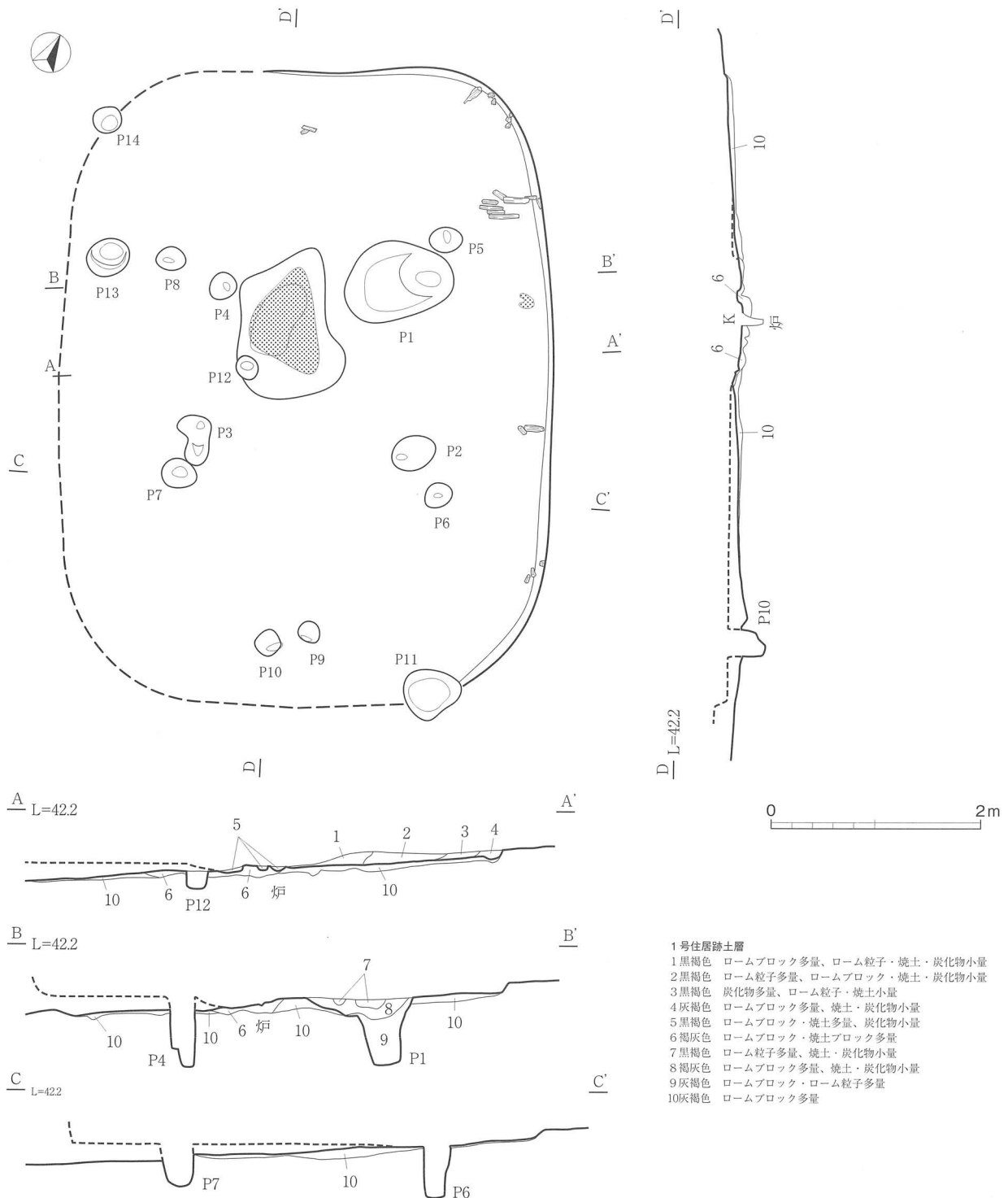


第252図 1号住居跡出土遺物

表119 1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部縄文原体によるキザミ。口縁部無文(横位のナデ)。頸部爪痕カのある薄い押捺隆帯。内面は横位のナデ。外面全体に濃いス附着。	多量の石英・白色粒、角閃石	普通	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	頸部無文帯(縦・斜位のナデ)。胴部附加条1種縄文(R+L+2L、LR+2R：下→上)。内面は頸部が横・斜位のナデ、胴部が縦・斜位のナデ。	石英	良好	橙色	
3	弥生土器 壺	- - -	胴部附加条2種縄文(L+L、R+R：下→上)。内面は縦位のナデ。外面スス附着・被熱による赤色化、内面ヨグレ附着。	多量の石英、角閃石、金雲母	良好	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	掘り方 十王台式
4	弥生土器 壺	- - (130)	胴部附加条2種縄文(R+R)。底部砂痕。内面は剥落。	石英、長石、角閃石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
5	弥生土器 高坏	- - -	口唇部丸棒状工具によるキザミカ。口縁部薄い押捺隆帯→4本歯の山形文(右→左)・へら描き斜格子文(左上がり→右上がり)→横位波状文。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石、赤色粒	普通	淡黄色	十王台式
6	土製品 紡錘車		径(4.5)、高(4.3)、孔径(0.6)、重[21.72]g。両側穿孔カ。ナデ調整。	石英、長石、多量の白色粒	普通	にぶい黄色	

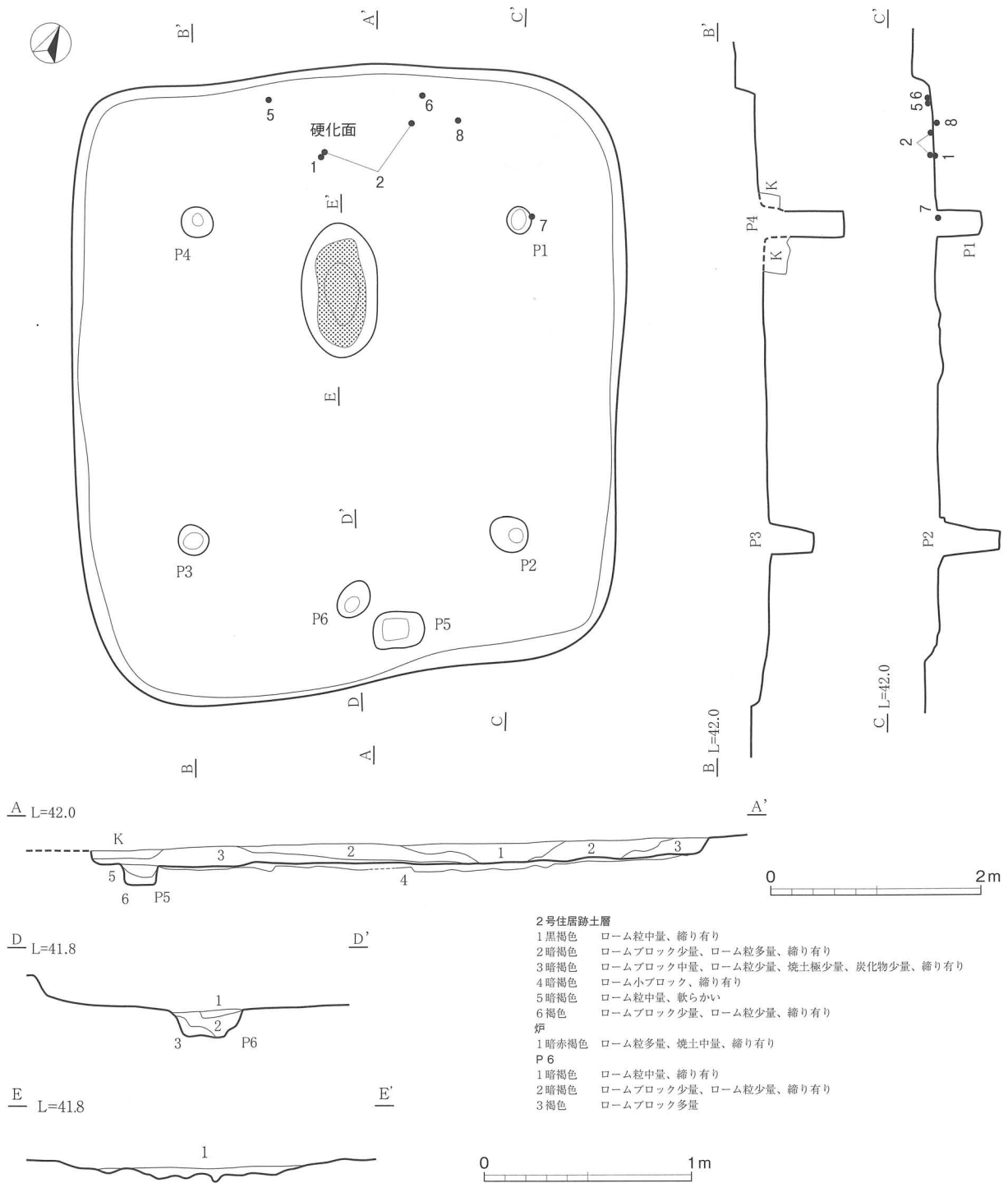
明である（深さ10cm）。 炉 長径141cm、短径96cm、深さ5cmの不整形。掘り方を有する。 覆土 ロームブロック・ローム粒子・焼土・炭化物を含む黒褐色土の1～3層で覆われ、壁際にロームブロックを主体とする4層が堆積している。また、床面下の掘り方にはロームブロックを含む灰褐色土が認められた。 遺物 弥生時代後期の土器片が少量出土した。また、球状の紡錘車（6）が検出されている。東壁際には炭化材や焼土塊が放射状に並ぶ。 所見 住居の形態や出土遺物から、弥生時代後期の住居跡に比定される。



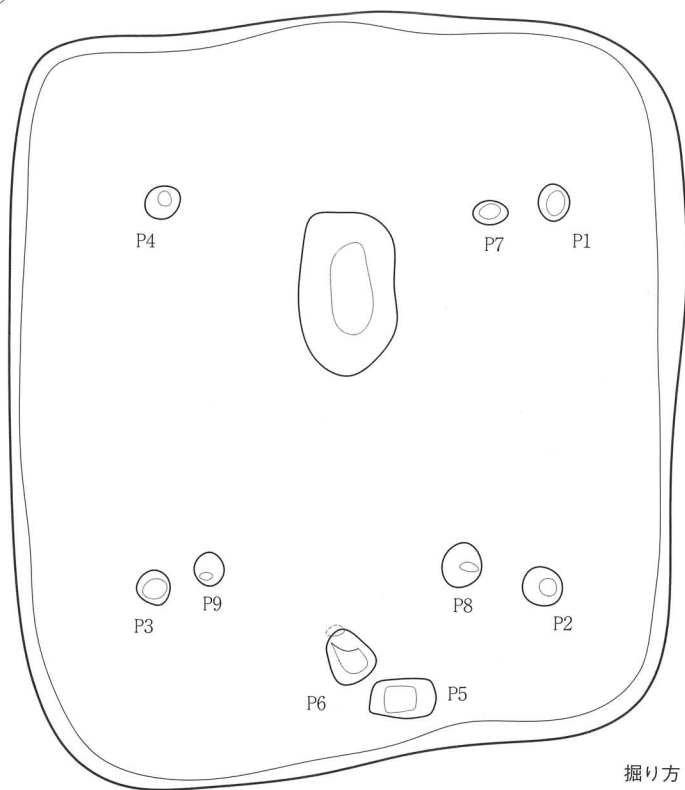
第 253 図 1 号住居跡

2号住居跡 (第254~256図)

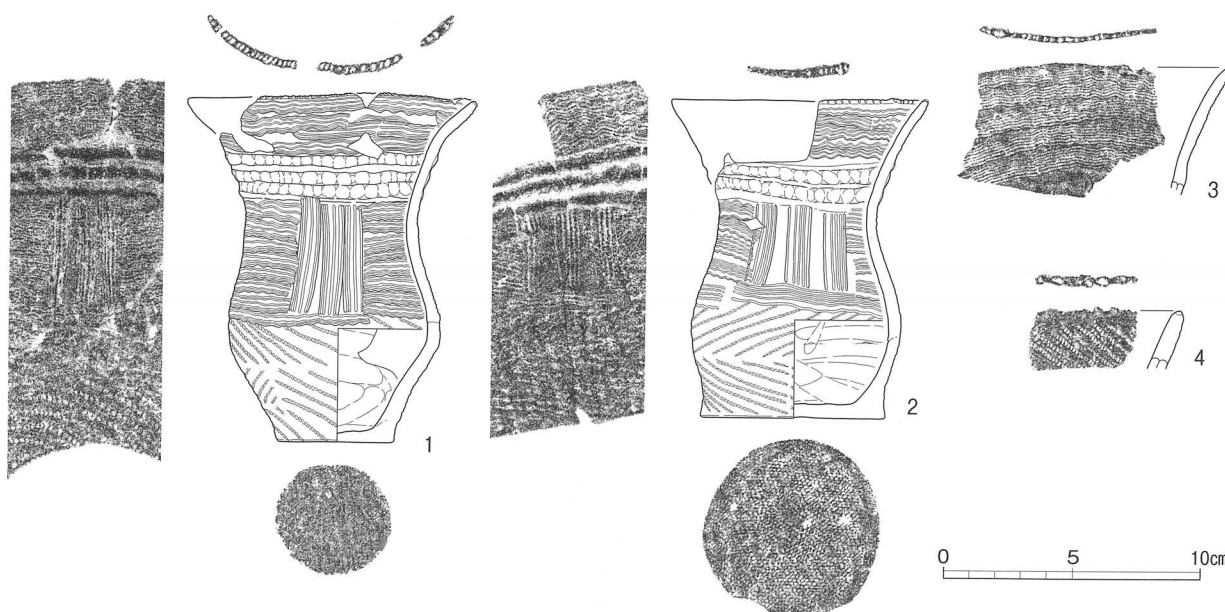
位置 B3区北部、I12グリッドにある。規模と平面形 5.88 × 5.27 mの縦長長方形。主軸方向 N - 25° - W 壁 壁高20cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居中央部を中心に全体によく硬化している。ピット 6箇所。P1~4は支柱穴。P6は炉の対面の壁寄りにあり、出入り口ピットと考えられる。P5は方形基調で深さ13cm、出入り口ピットと関連のある位置にある。床下掘り方で、P7~9が確認され



第254図 2号住居跡

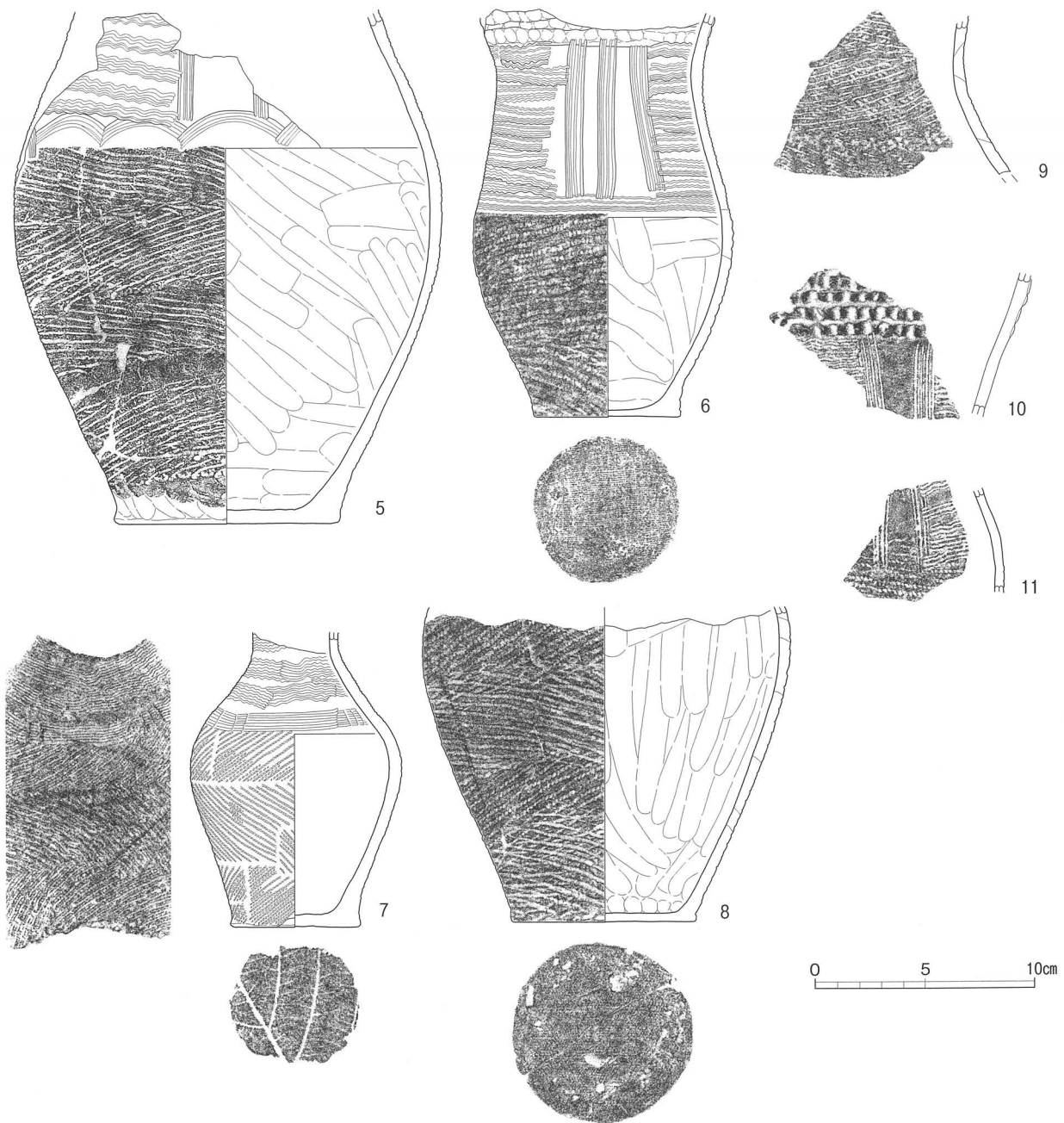


掘り方



第255図 2号住居跡掘り方・出土遺物①

た。深さは48～64cmあり、古い段階の柱穴と考えられる。 炉 長径120cm、短径72cmの楕円形で深さ4cm。 覆土 最上層は黒褐色の自然堆積層、下層の暗褐色土はロームブロックや遺物が多く混じっている。 遺物 6や8の壺は底部下端が床に接地し転倒した状態で、7の壺はP1の覆土上層中から出土している。出土遺物は多く、大破片の割合が高い。十王台式後半期の土器を主体とし、那珂川流域（1・2・6）および久慈川流域（5・10）の特徴を有する土器がそれぞれ確認できる。7は二軒屋式の細頸壺である。 所見出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第256図 2号住居跡出土遺物②

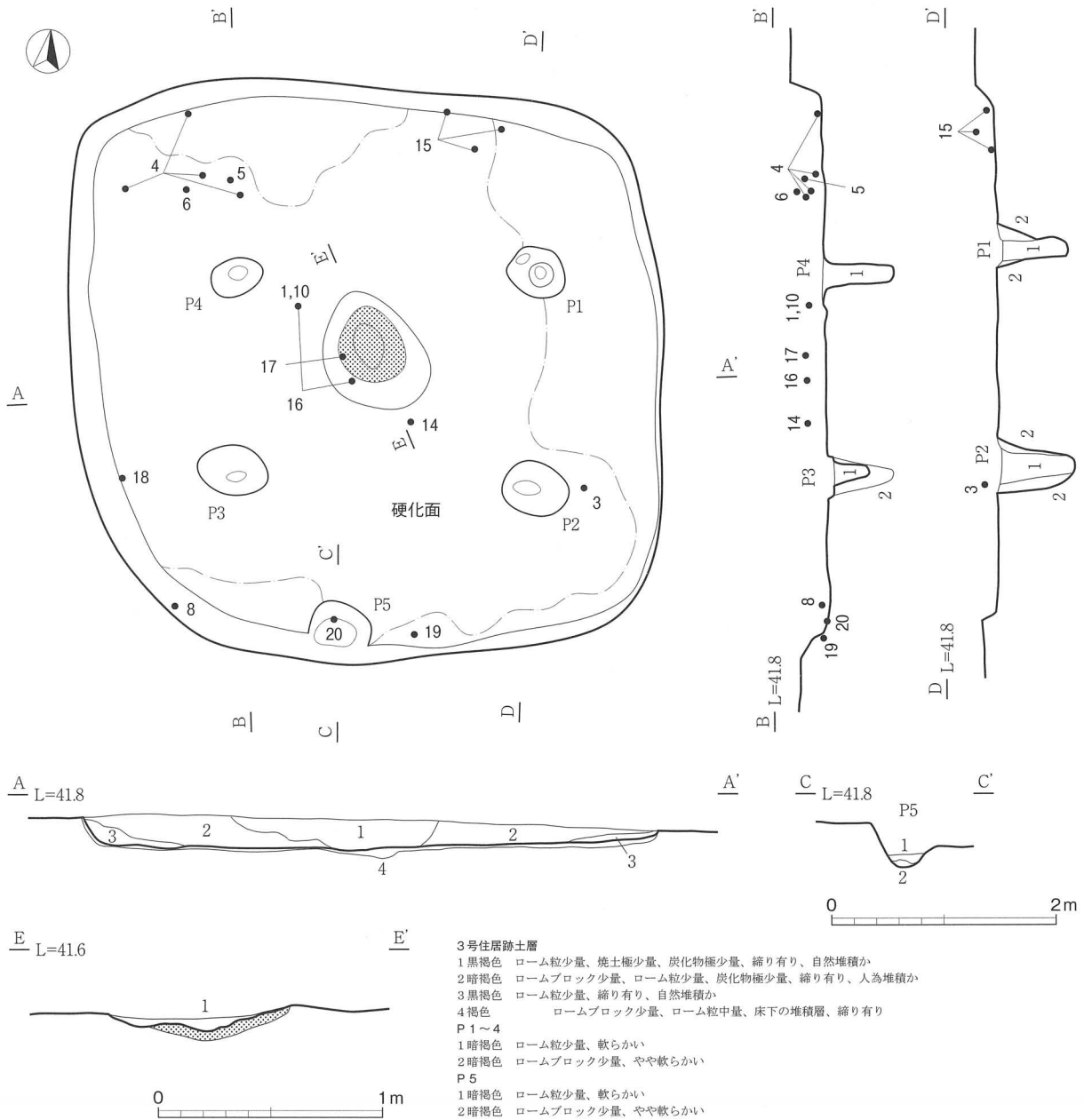
表120 2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	(11.4) 13.9 4.6	頸部押捺隆帯3条→口縁部6本歯の横位波状文(下→上、時計回りカ)、胴部軸縄不明の附加条縄文(L-S、L-Z:下→上、反時計回りカ)→頸部横位区画波状文→頸部3条一単位の縦位直線文3単位→横位波状文(下→上)。底部布目痕(周縁部ナデ消し)。内面は口縁～頸部縦・斜位のナデ、胴部中位横位のナデ、胴部下位斜位のナデ。外面口縁～頸部まばらにスス、内面胴部中位より上にヨゴレ付着。口縁部付近は濃いヨゴレ。	多量の石英、角閃石、赤色粒	普通	外: 灰黄褐色 内: 灰黄色	十王台式
2	弥生土器壺	(10.1) 12.7 7.3	口唇部ヘラキザミ、小突起。胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S、L-Z:下→上)→頸部押捺隆帯、頸部5本歯の横位区画波状文→口縁部横位波状文(下→上)、頸部3条一単位の縦位直線文3単位→横位波状文(下→上)。内面は横・斜位のナデ。底部布目痕(周縁部ナデ消し)外面口縁～胴部にスス、内面頸部隆帯以下にまばらなヨゴレ付着。	石英、角閃石	普通	灰黄色	十王台式
3	弥生土器壺	- - -	口唇部ヘラキザミ、小突起。口縁部7本歯の横位波状文(下→上)。頸部造り出し隆帯カ。内面は口唇部付近横位のナデ、口縁部縦・横位のナデ。外面全体にスス付着。	石英	良好	外: 黒褐色 内: 灰黄褐色	十王台式
4	弥生土器壺	- - -	口唇部縄文原体カによるキザミ、横位のナデ。口縁部軸縄不明の附加条縄文(L-Z)。内面は横位のナデ。	多量の石英、長石	良好	外: にぶい黄褐色 内: にぶい褐色	
5	弥生土器壺	- - 10.4	胴部附加条2種縄文(RL+2Rカ)、軸縄不明の附加条縄文(L-Z)を下→上へ施文。胴部下端斜位のナデ→頸部4本歯の下開き連弧文(反時計回り)→頸部2条一単位の縦位直線文→横位波状文。底部砂痕。内面は頸～胴部斜位のナデ、底部付近横位のナデ。外面胴部上位より上に濃いスス付着。内面胴部上位より下位に帯状の薄いヨゴレ、その上下に濃いヨゴレ付着。	多量の石英・金雲母・白色粒、角閃石	良好	にぶい黄褐色	十王台式
6	弥生土器壺	- - 6.6	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S、L-Z:下→上)→頸部薄い押捺隆帯、頸部5本歯の横位区画波状文→頸部3条一単位の縦位直線文3単位→横位波状文8～9条(下→上)。底部布目痕。内面は横・斜位のナデ。外面全体にまばらなススとスス酸化消失、底部周縁にもスス、内面頸部より上にヨゴレ付着。	石英、チャート、角閃石、多量の白色粒、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	十王台式
7	弥生土器壺	- - 6.0	胴部附加条1種縄文(RL+2L、LR+2R:下→上、反時計回り)→頸部7本歯の2～3連止め廉状文(時計回り、止め4カ所)→頸部横位波状文(反時計回り)。柳箆文の工具先端は管状。底部木葉痕。内面は頸部縦・横位のナデ、以下は剥落。外面まばらにスス付着。	多量の石英・長石	良好	外: にぶい黄褐色 内: 灰黄褐色	二軒屋式
8	弥生土器壺	- - 18.4	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S)→附加条2種縄文(LR+2Lカ:反時計回り)→頸部6本歯の横位区画波状文。底部布目痕(粘土付着)。内面は縦・斜位のナデ。外面まばらにスス付着、被熱による赤色化。内面全体に濃いヨゴレ付着。	石英、多量の白色粒	良好	灰黄褐色	十王台式
9	弥生土器壺	- - -	頸～胴部附加条1種縄文(LR+2R、RL+2L:下→上)。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英、長石	良好	外: にぶい黄褐色 内: 灰黄褐色	
10	弥生土器壺	- - -	口縁部押捺隆帯→頸部4本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は横位のナデ。	石英、金雲母	良好	外: にぶい黄褐色 内: 浅黄色	十王台式
11	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(L-Z)。頸部4本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は縦位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英	普通	灰黄褐色	十王台式

3号住居跡(第257～260図)

位置 B3区北部、I11・I12グリッドにある。規模と平面形 5.23×5.20mの方形。主軸方向 N-28°-W 壁 壁高24cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 西壁側に寄った住居の3分の1の範囲を除いて硬化している。ピット 5箇所。P1～4は主柱穴。P5は南壁際に位置し、壁に向かって外傾しており出入り口ピットと考えられる。炉 長径75cm、短径62cmの楕円形で深さ10cm。覆土 床を被覆する2層はロームブロックを均質に含んでいる。遺物 住居北東隅から中央部にかけての覆土から壺の破片が出土している。確認された住居跡の中では出土遺物が最も多く、略完形個体・大破片の割合が高い。十王台式前半期を主体とするが、施文方法等が一般的なものと異なる個体が多い。4は十王台式の頸部文様の一

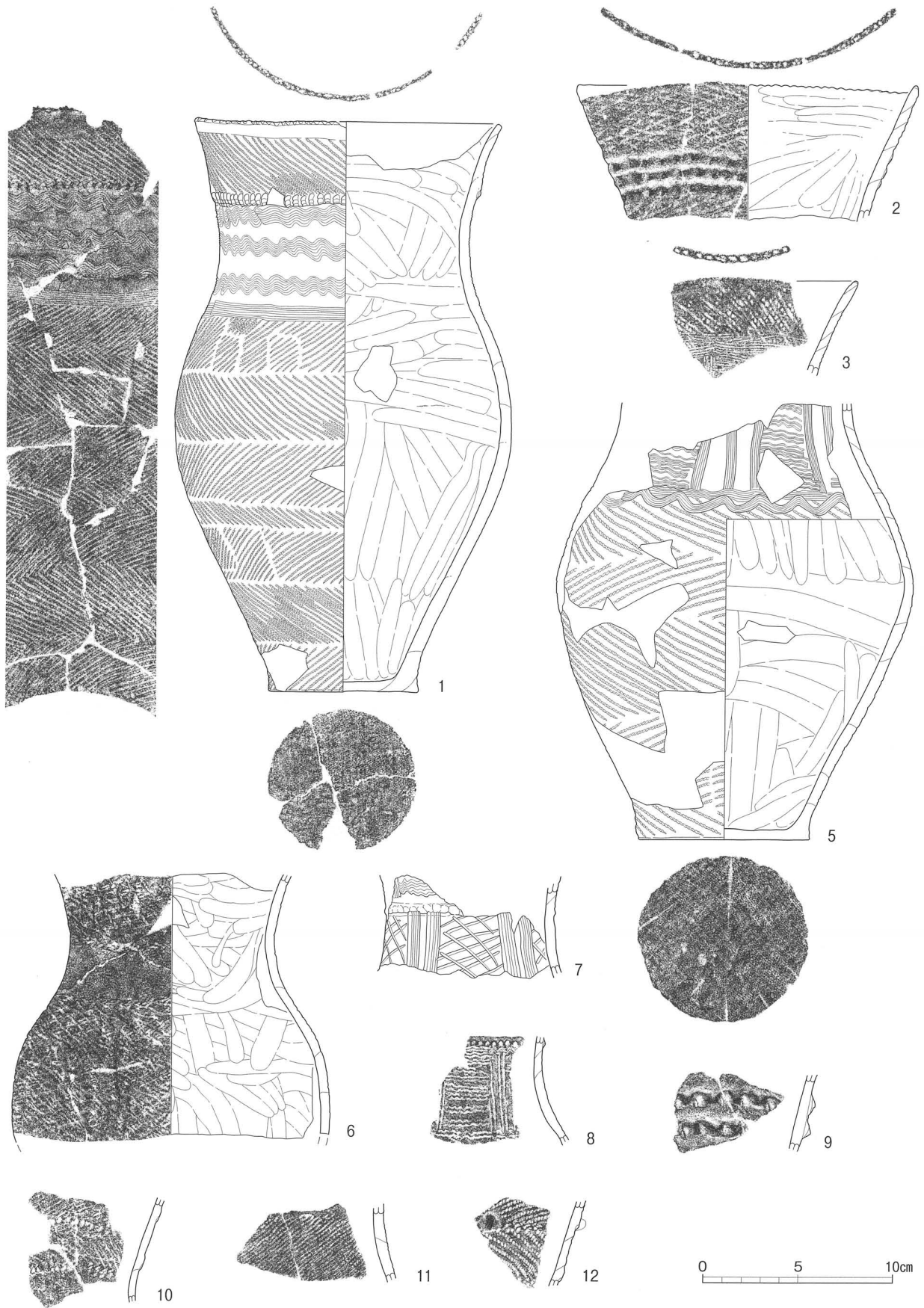
部に廉状文が用いられている。二軒屋式土器の出土量も多く、1・10～12・14が該当する。 所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



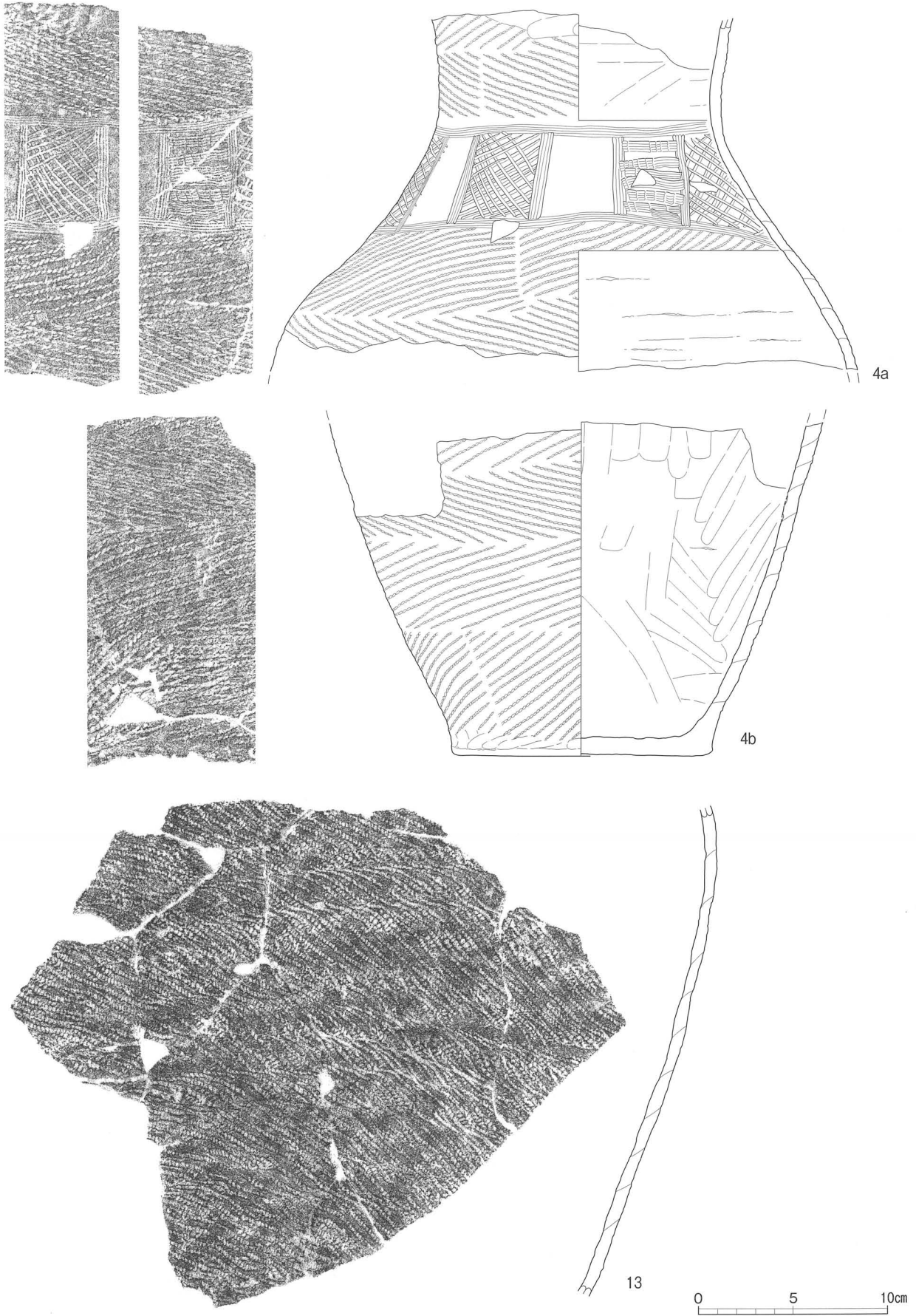
第 257 図 3号住居跡

表 121 3号住居跡出土遺物観察表

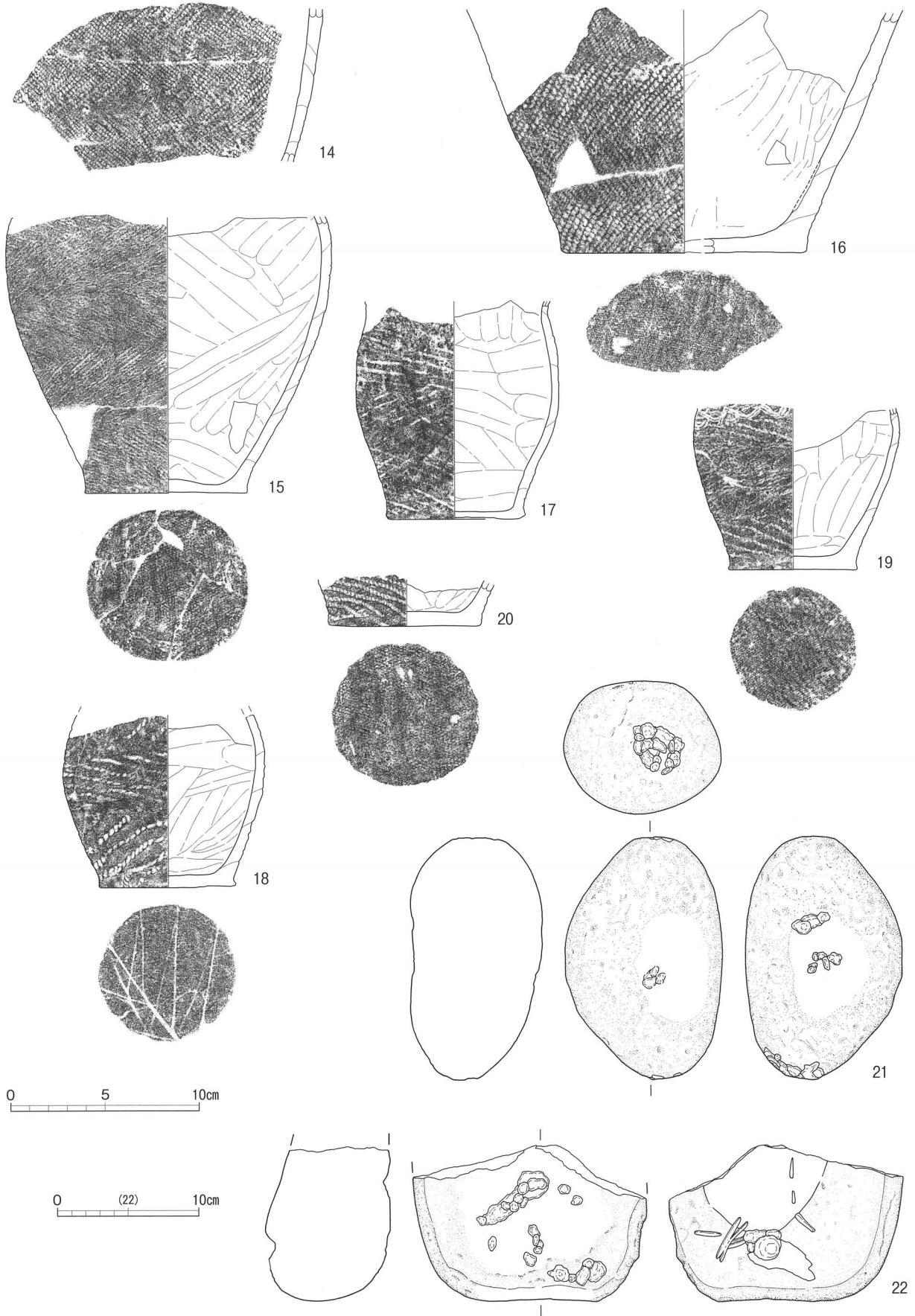
図版番号	種別 器種	口径器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	16.0 30.5 7.8	口唇部縄文原体によるキザミカ。口縁部附加条1種縄文(RL+2L)→口唇部付近横位のナデ、口縁部下端縄文原体(無節Lカ)によるキザミ、胴部附加条1種縄文(RL+2L、LR+2R:下→上、反時計回り)→頸胴界7本歯の横位区画直線文→頸部横位波状文。底部布目痕(粘土附着)。内面は胴部中～下位縦・斜位のナデ→口縁～頸胴部上位横・斜位のナデ。外面実測面左半分にスス、内面は外面ススと対応する位置に濃いヨゴレ、他は全面ヨゴレ附着。	多量の石英・長石、赤色粒	良好	外：にぶい黄橙色 内：黒色(ヨゴレ)	二軒屋式



第258图 3号住居跡出土遺物①



第259図 3号住居跡出土遺物②



第260図 3号住居跡出土遺物③

第七章 B3区の遺構と遺物

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
2	弥生土器壺	(18.0) — —	口唇部縄文原体カによるキザミ。口縁部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z:上→下)。頸部薄い押捺隆帯3条→軸縄不明の附加条縄文(R・S)。内面は横・斜位のナデ、器面荒れ・剥落。	石英、長石、チャート、角閃石、骨針	普通	淡黄色	
3	弥生土器壺	— — —	口唇部縄文原体(無節シカ)によるキザミ。口縁部附加条1種縄文(RL+2L)→頸部5本歯の横位直線文ないし波状文→縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は斜位のナデ。外面全体スス付着。	石英、角閃石、金雲母、赤色粒	良好	外:灰黄褐色 内:橙色	十王台式
4	弥生土器壺	— — 13.9	口縁部・胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、R・Z:下→上)→頸部上位横位のナデ、口頸界・頸胴界4本歯の横位区画直線文→頸部2条一単位の縦位直線文(無文部5単位、文様部7単位)→ヘラ描き斜格子文(右上がり→左上がり)、等間隔止め塵状文(上→下、右→左)。一部縦位直線文(左側)→斜格子文→縦位直線文(右側)の部分あり。胴部下端横・斜位のナデ。底部砂痕カ。内面は頸部横・斜位のナデ、胴部下半縦・斜位のナデ、他は剥落。外面まばらにスス、胴部2カ所に対向する黒斑。土器破断面黒色化。	多量の石英・長石、角閃石	良好	外:にぶい黄橙色 内:明赤褐色	
5	弥生土器壺	— — 9.0	胴部附加条1種縄文(RL+2L)、軸縄不明の附加条縄文(R・S:下→上)→5本歯・3条一単位の縦位直線文→頸部横位区画波状文(一部縦位と横位の文様施文順序が逆)→波状文に近い上開きの連弧文。底部布目痕+木葉痕カ。内面は頸・胴部下半が縦・斜位のナデ、胴部上半は横位のナデ。外面胴部上位に帯状のスス、底部付近・底面周縁は被熱による赤色化。内面は胴部中～下位にコゲ付着。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄色	十王台式
6	弥生土器壺	— — —	頸部無文帯(丁寧な縦・斜位のナデ)。頸・胴部附加条3種縄文(L+L+L)カ。内面は胴部縦・斜位のナデ→頸部横・斜位のナデ。外面頸部に集中してスス付着、内面全体にヨゴレ付着。	石英、骨針	普通	外:灰黄色 内:黒褐色	
7	弥生土器壺	— — —	頸部造り出しの押捺隆帯1条(有段)。口縁部5本歯の縦位直線文→横位波状文。頸部2条一単位の縦位直線文→ヘラ状工具と棒状工具による斜格子文(右上がり→左上がり)。内面は縦位のナデ。外面全体スス付着。	石英、多量の白色粒	良好	外:灰黄褐色 内:褐色	十王台式
8	弥生土器壺	— — —	頸部竹管状工具による刺突隆帯、頸胴界4本歯の横位区画波状文→縦位直線文→横位波状文。胴部附加条縄文カ。内面は縦・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、多量の白色粒	普通	外:灰黄褐色 内:黄灰色	十王台式
9	弥生土器壺	— — —	頸部厚い押捺隆帯2条。内面は横位のナデ。	石英、多量の白色粒	普通	にぶい黄橙色	
10	弥生土器壺	— — —	頸部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z)。口縁部下端縄文原体の側面によるキザミ(無節R)。頸部4本歯以上の下開き連弧文ないし横位波状文。内面は縦・斜位のナデ。	多量の石英・長石	不良	外:橙色 内:明黄褐色	二軒屋式
11	弥生土器壺	— — —	頸部無文(横位のナデ)。胴部附加条1種縄文(LR+2R)。内面は頸部横位のナデ、胴部縦位のナデ。外面スス付着。	石英、白色粒	普通	にぶい黄褐色	P3
12	弥生土器壺	— — —	頸部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z)→口縁部下端縄文原体端部(無節R)を押捺、断面山形の突起。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、長石	良好	にぶい褐色	二軒屋式
13	弥生土器壺	— — —	胴部附加条2種縄文(L+L:上→下)で非羽状構成。内面は斜位のナデ、器面荒れ・剥落。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	にぶい黄褐色	
14	弥生土器壺	— — —	胴部附加条1種縄文(RL+2R、LR+2L:下→上)。内面は横位のナデ。外面スス、黒斑。	多量の石英・白色粒	良好	外:にぶい黄褐色 内:橙色	二軒屋式カ
15	弥生土器壺	— — 8.7	胴部附加条1種縄文(R+R、L+L)。底部布目痕、粘土付着。内面は斜位のナデ。外面胴部上半に濃いスス、内面全体にヨゴレ付着。	石英、長石、骨針	普通	外:にぶい褐色 内:にぶい赤褐色	
16	弥生土器壺	— — (13.0)	胴部単節縄文(RL、LR:上→下)を横位施文。底部布目痕。内面は斜位のナデ、剥落。	石英、角閃石、赤色粒、多量の白色粒	良好	外:にぶい黄褐色 内:にぶい橙色	
17	弥生土器壺	— — 7.4	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z:上→下)。底部砂痕。内面は横・斜位のナデ。外面全面スス、被熱による斑点状の赤色化。	石英、長石、金雲母、多量の白色粒	普通	外:黒褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式
18	弥生土器壺	— — 7.4	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、R・Z)。底部木葉痕。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着、胴部下半被熱による赤色化。	石英、多量の骨針	普通	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式
19	弥生土器壺	— — 6.8	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z:下→上)→頸部3本歯の横位区画波状文(上→下)。底部布目痕。内面は横・斜位のナデ。外面まばらに被熱による赤色化、スス付着(底部付近、底面周縁)、内面胴部上半にヨゴレ付着。	石英	良好	外:灰黄褐色 内:にぶい黄褐色	

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
20	弥生土器 壺	- - 8.0	胴部軸繩不明の附加条縄文(L-Z)。底部布目痕。内面は斜位のナデ。	石英、角閃石	良好	にぶい黄橙色	
21	石器 磨石類		表面(敲→磨)裏面(磨→敲)。自然礫の表・裏面に磨耗痕や敲打痕。上・下端部に敲打痕。石材・石英安山岩。長さ12.8cm・幅8.3cm・厚さ7.0cm・重さ1042.1g。				
22	石器 台石		欠損品。大型礫の表・裏面や下端部に顕著な磨耗痕。磨耗範囲は播鉢状に浅く窪む。表・裏面の一部に敲打痕とみられる凹穴。裏面に浅い溝状の擦痕。石材：砂岩。残存長11.0cm・残存幅16.6cm・厚さ8.85cm・重さ2386.9g。				

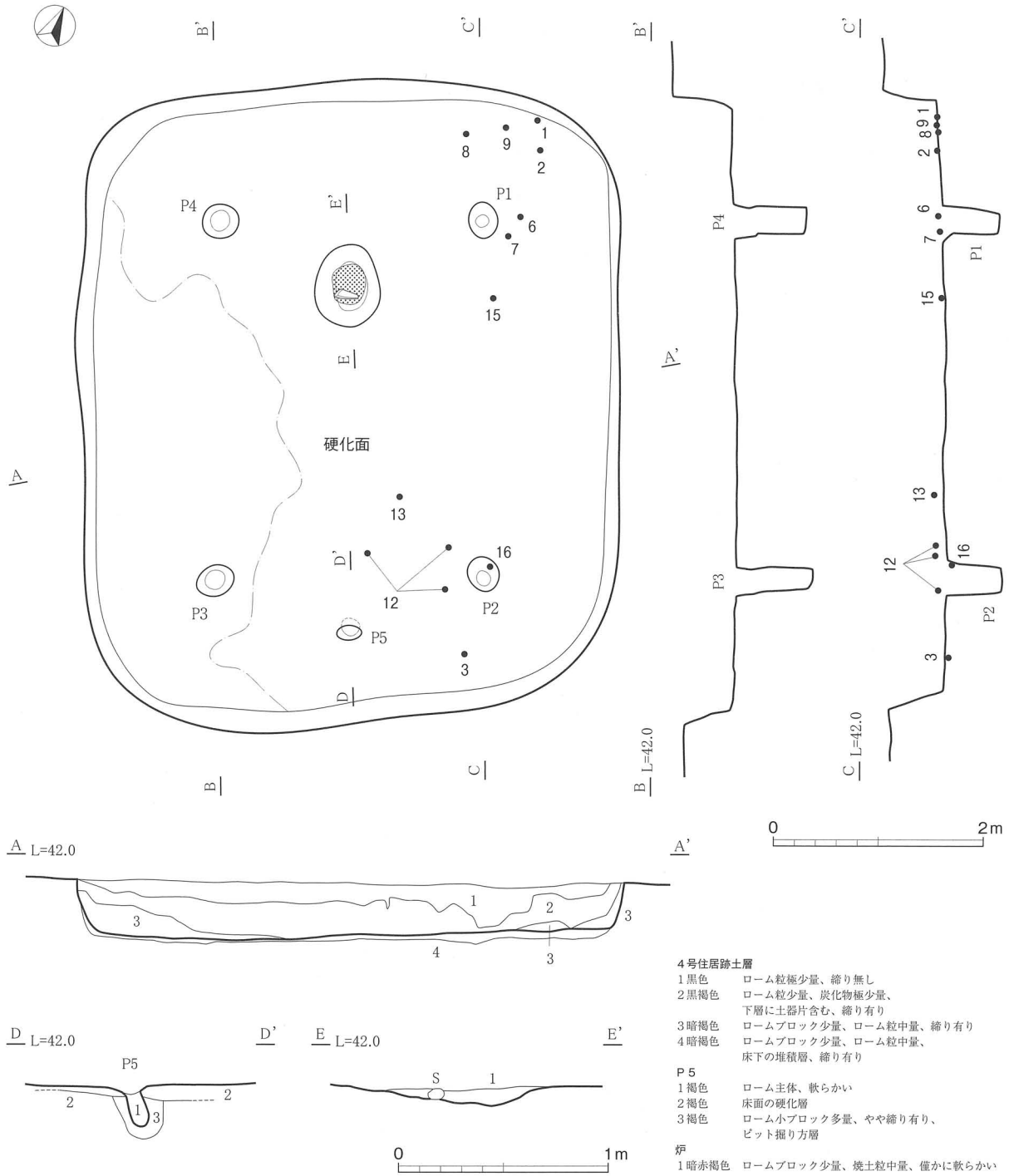
4号住居跡(第261~264図)

位置 B3区中央部、I12グリッドにある。**規模と平面形** 5.10×6.00mの縦長長方形。**主軸方向** N-27°-W **壁** 壁高42cm、ほぼ垂直に立ち上がる。**床** 全体に硬化しているが、東壁のやや北寄りの範囲と北壁の西寄りの範囲がやや軟質である。**ピット** 5箇所。P1~4は支柱穴。P5は南壁寄りにあり、外傾しており出入り口ピットと考えられる。**炉** 長径75cm、短径62cmの楕円形で深さ10cm。炉石を持つ。**覆土** 床面を覆う黒褐色土の2層は下層に土器を含んでいる。**遺物** 壺を主体とする土器類は住居跡北東隅とP2付近の床から出土している。北東隅の壺は完形品が多い。16の管玉はP2覆土上層から出土している。出土遺物は非常に多く、ほぼ完形個体・大破片の割合が高い。十王台式後半期を主体とし、二軒屋式(9・11)も少量出土している。15は土製の紡錘車、16は片側に段を有する緑色凝灰岩製の管玉である。

所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

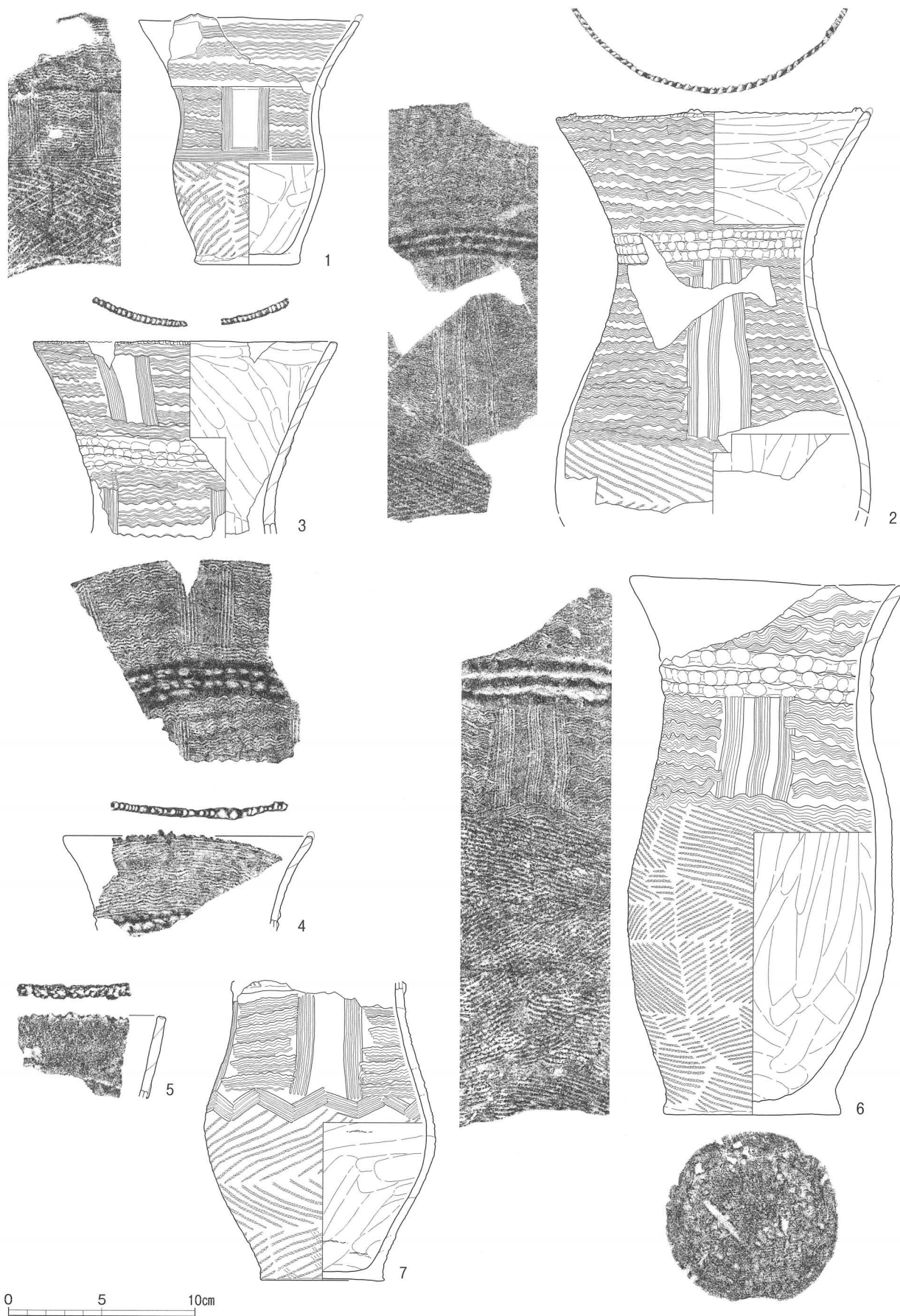
表122 4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(12.0) 13.5 (5.6)	口唇部小突起。口頸界有段。胴部軸繩不明の附加条縄文(R-L+2r, L-R+2lカ:上→下)→口縁部5本歯の横位波状文(時計回り)3条、頸胴界横位区画直線文→頸部2条一単位の縦位直線文4単位→横位波状文(下→上)3~4条。底部砂痕。内面は縦・斜位のナデ。外面スス、内面まばらにヨゴレ付着。	石英、長石、金雲母	普通	外：橙色 内：にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	(16.7) - -	口唇部ヘラキザミ、小突起推定4単位。頸部造り出しの押捺隆帯3条、胴部軸繩不明の附加条縄文(R-S, L-Z:下→上)→頸部5本歯・3条一単位の縦位直線文3単位→口縁部横位波状文(上→下、反時計回り)、頸胴界横位区画波状文→頸部横位波状文(上→下、左→右カ)。内面は胴部上位縦位のナデ→頸部斜位のナデ→口縁部横・斜位のナデ(全体的に丁寧に仕上げる)。外面はほぼ全体に濃いスス、内面はほぼ全体に薄いヨゴレ、胴部中位は濃いヨゴレ。	石英	良好	にぶい褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	(15.6) - -	口唇部丸棒状工具によるキザミ。頸部薄い押捺隆帯3条→口縁・頸部5本歯・2条一単位の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は頸部斜位のナデ→口唇部付近横位のナデ。外面スス、内面口~頸部上位に薄いヨゴレ付着。	石英、長石、角閃石、多量の白色粒	良好	にぶい黄褐色	1層出土 十王台式
4	弥生土器 壺	(13.3) - -	口唇部ヘラキザミ、小突起。口縁部4本歯の横位波状文(下→上)。内面は縦・斜位のナデ。外面全体にスス付着。	石英、長石、角閃石	良好	外：褐灰色 内：にぶい橙色	1層出土
5	弥生土器 壺	- -	口唇部軸繩不明の附加条縄文(R-S)を回転施文。口縁部無文(縦・斜位のナデ)。内面は横位のナデ。	石英、長石、金雲母	普通	浅黄色	十王台式
6	弥生土器 壺	(14.6) 28.5 9.5	頸部押捺隆帯3条、胴部軸繩不明の附加条縄文ないし捺糸文(R-S, L-Z)を横・斜位施文(下→上、反時計回り)→口縁部6本歯の横位波状文(下→上)、頸部3条一単位の縦位直線文4単位→頸胴界横位区画波状文→頸部横位波状文(上→下)。底部布目痕(周縁部ナデ消し)。内面は口~頸部横・斜位のナデ。頸~胴部縦・斜位のナデ、ヘラナデカ(下→上)。実測面の反対側にスス集中、内面頸~底部までまばらにヨゴレ付着。外面の1/3を縦長に覆う黒斑。頸部に赤彩カ。	石英、長石、チャート、骨針	良好	にぶい黄褐色	十王台式

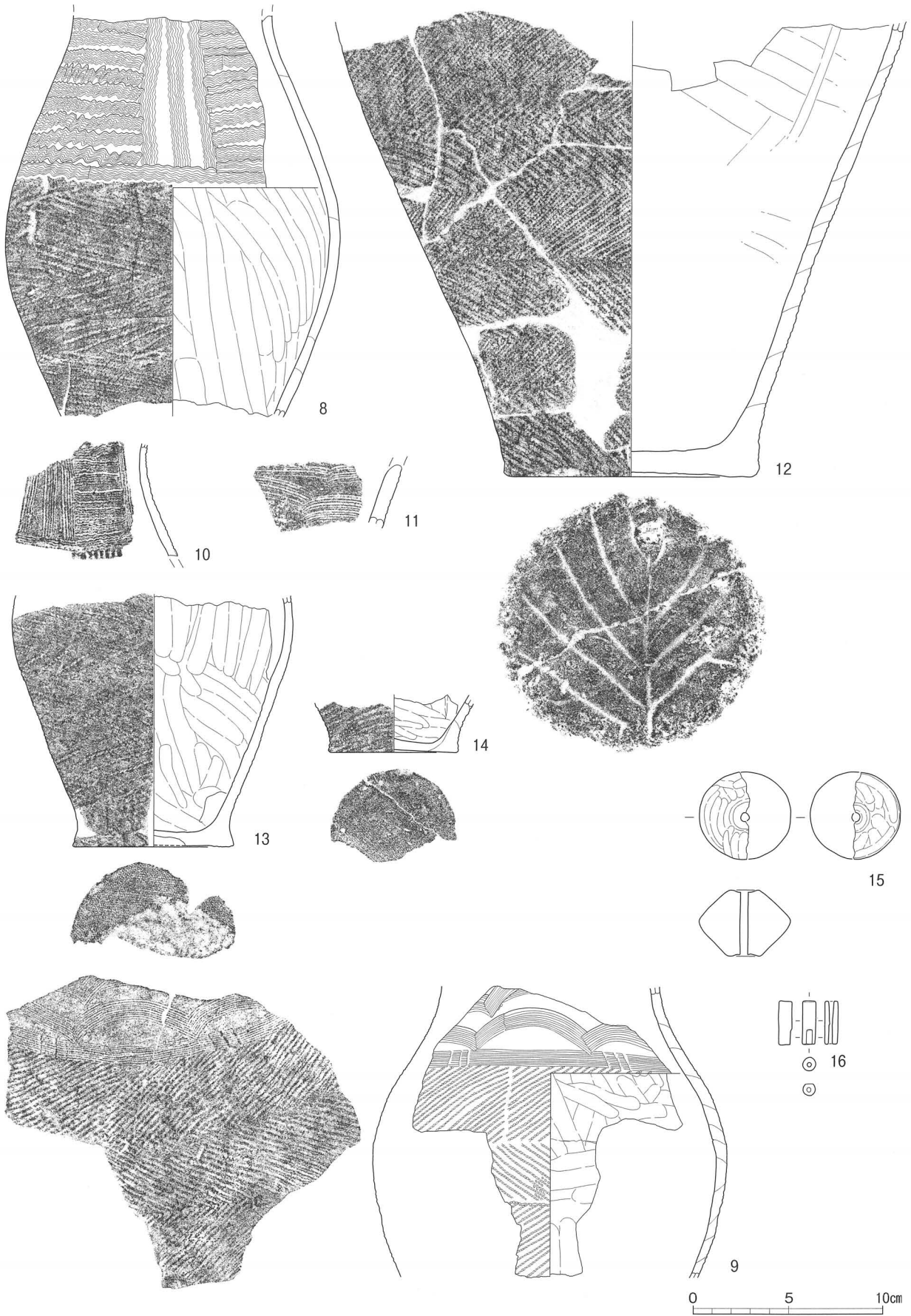


第261図 4号住居跡

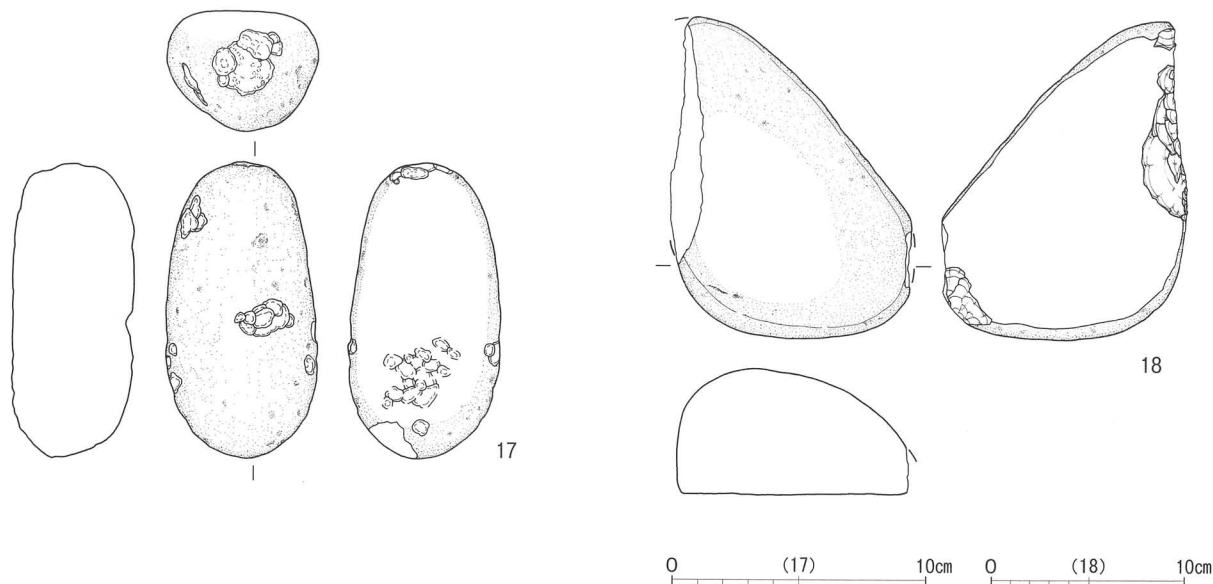
図版番号	種別 器種	口径器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	弥生土器 壺	— 6.6	頸部爪痕のある押捺隆帯、胴部附加条2種縄文(R+R)、 軸縄不明の附加条縄文(L-Z)を下→上へ施文→頸胴 界5本歯の山形文(時計回り)→頸部2条一単位の縦位 直線文→横位波状文(上→下)。底部布目痕。内面は胴部 斜位のナデ→頸部横位のナデ、あばた状の剥離。外面全 体にスス、底部付近はまばらにスス、内面にヨゴレ附着。	石英	良好	外: にぶい黄褐色 内: 橙色	十王台式



第262图 4号住居跡出土遺物①



第 263 図 4号住居跡出土遺物②

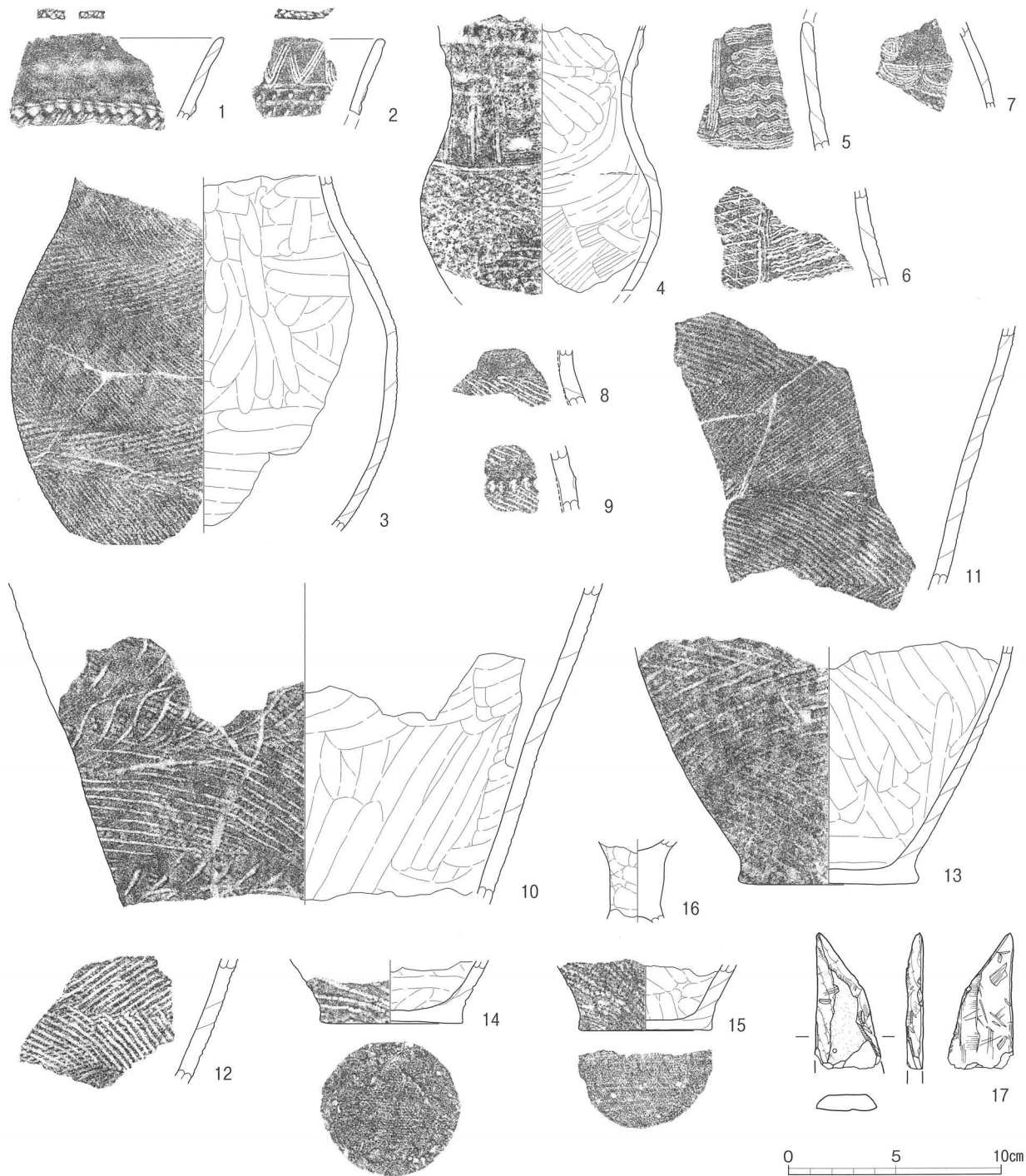


第 264 図 4 号住居跡出土遺物③

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
8	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文 (R・S、L・Z:下→上) →頸部7本歯・3条一単位の縦位波状文→頸胴界横位区画波状文→頸部横位波状文 (上→下)。内面は斜位のナデ (下→上)。外面胴部上半に濃いスス、胴部下半は薄いスス、内面は胴部下半にヨゴレ付着。	石英	良好	外: にぶい黄褐色 内: 橙色	十王台式
9	弥生土器壺	- - -	胴部附加条1種縄文 (RL+2L)、軸縄不明の附加条縄文 (R・S) を胴部中位→上、下へ施文→頸胴界9本歯の3連止め麻状文 (時計回り) →頸部下開き連弧文 (反時計回り)。無文部は横位のナデ。内面は頸部斜位のナデ、胴部上位~中位縦・横位のナデ、胴部下位縦位のナデ。全体的に丁寧に仕上げる。外面全体に濃いスス、内面胴部下位に濃いヨゴレ、以上は薄いヨゴレ付着。	石英、長石、多量の白色粒	良好	外: 灰褐色 内: 灰褐色	二軒屋式
10	弥生土器壺	- - -	頸部下端ヘラキザミ隆帯。頸胴界5本歯の横位区画波状文→頸部縦位直線文→横位波状文。内面は斜位のナデ。外面全体に濃いスス付着、内面に黒斑。	石英、多量の白色粒	良好	外: 褐灰色 内: 明赤褐色	1層出土 十王台式
11	弥生土器壺	- -	頸部7本歯の下開き連弧文 (上→下、反時計回り)。内面は斜位のナデ。外面全体にスス付着。擬口縁 (再加工)。	多量の石英・長石	良好	外: 褐灰色 内: 明赤褐色	1層出土 二軒屋式
12	弥生土器壺	- - 13.1	胴部附加条1種縄文 (RL+2L、LR+2R:下→上)。底部木葉痕。内面は斜位のナデ、器面荒れ。外面まばらにスス付着、胴部中位に斑点状の黒斑。内面に帯状のヨゴレ付着。	多量の石英・長石	普通	外: 淡黄色 内: にぶい橙色	1層出土
13	弥生土器壺	- - (8.5)	胴部附加条2種縄文 (L+L)、軸縄不明の附加条縄文 (R・S) →頸胴界3本歯以上の横位区画波状文。底部布目痕。外面胴部上半にスス、内面ヨゴレ付着。	石英	普通	にぶい黄褐色	1層出土 十王台式
14	弥生土器壺	- - (6.7)	胴部軸縄不明の附加条縄文 (R・S)。底部布目痕。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英	普通	にぶい黄褐色	1層出土 十王台式
15	土製品 紡錘車		径 (4.7)、高 3.55、孔径 (0.45)、重 [32.09] g。表裏面ナデ調整。片側穿孔。	石英、多量の白色粒	普通	浅黄色	
16	石製品 管玉		長 2.3、径 0.7、孔径 0.25、重 1.82 g。全面研磨し、片側は段差をつけて加工。両側穿孔。緑色凝灰岩製。		普通	外: 浅黄色 内: 暗灰褐色	P2上層出土
17	石器 磨石類		欠損品。敲→磨。自然礫の裏面に顕著な磨耗痕。表・裏面や両側面に敲打痕。上端部に敲・磨痕。石材: 石英安山岩。長さ 11.6cm・幅 5.95cm・厚さ 4.75cm・重さ 490.0 g。				
18	石器 台石		欠損品。割礫の表・裏面に磨耗痕。裏面の縁辺に磨耗後の剥離痕。石材: 安山岩。長さ 16.95cm・残存幅 12.6cm・厚さ 6.7cm・重さ 1938.2 g。				

5号住居跡 (第265・266図)

位置 B3区中央部、I12グリッドにある。規模と平面形 5.30 × 4.98 mのほぼ方形。主軸方向 N - 19° - W 壁 壁高10cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 床面全体に硬化している。ピット 5箇所。P1~4は支柱穴。P5は西壁寄りにあり、出入り口ピットと考えられる。炉 長径112cm、短径107cmの楕円形で深さ5cm。炉石を持つ。覆土 上層は黒褐色土、下層は暗褐色土の自然堆積層。遺物 ほとんどの遺物は床面か最下層中から出土している。出土遺物は多く、中~大破片の割合が高い。十王台式前



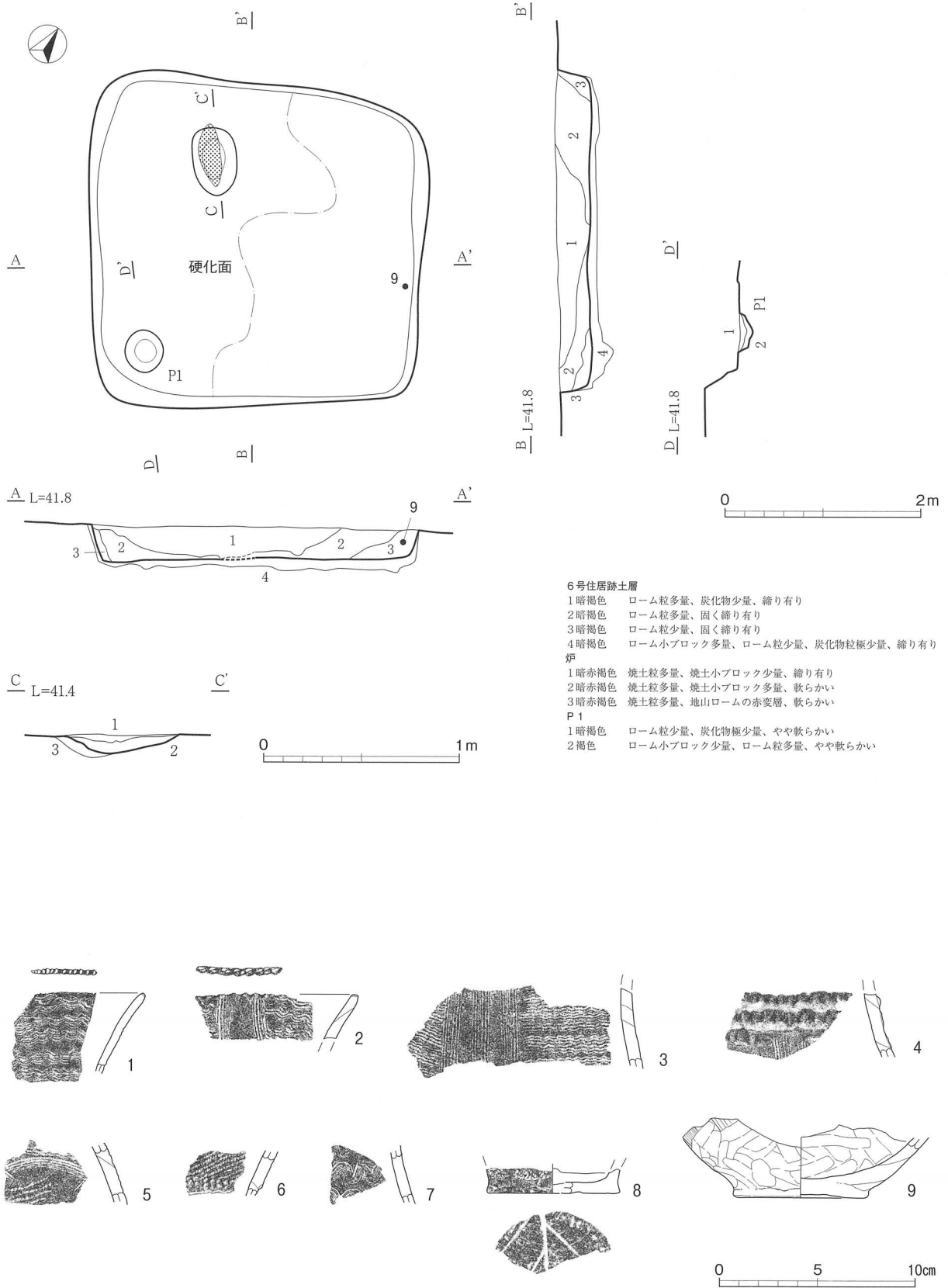
第265図 5号住居跡出土遺物

表 123 5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	- - -	口唇部縄文原体によるキザミ。口縁部無文(横位のナデ)。頸部爪痕カのある押捺隆帯→2本歯以上の横位波状文。内面は横位のナデ。	多量の石英・白色粒	良好	にぶい褐色	十王台式
2	弥生土器壺	- - -	口唇部縄文原体によるキザミ。頸部丸棒状工具による刺突とユビオサエ(爪痕あり)による押捺隆帯→口縁部3本歯の山形文(時計回り)。内面は斜位のナデ。外面全体にスス附着。	石英、骨針	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
3	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-Z, L-S)。内面は横位のナデ→縦・斜位のナデ。外面胴部・肩部にスス集中、胴部下位は被熱による赤色化。内面下部はヨゴレ附着。外面3カ所、内面1カ所に黒斑。	石英、角閃石、金雲母、骨針、多量の白色粒	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	
4	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S, L-Z)→頸部4本歯の横位区画直線文→頸部3条一単位の縦位直線文→横位波状文。内面は胴部縦条痕のある斜位のヘラナデ→頸部斜位のナデ。外面スス附着、被熱による赤色化。内面胴部にまばらなヨゴレ附着。	多量の石英・白色粒	普通	外：明赤褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
5	弥生土器壺	- -	頸部5本歯の横位区画波状文→頸部縦位直線文→横位波状文。内面は縦位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ附着。	石英、骨針	普通	灰黄褐色	十王台式
6	弥生土器壺	- - -	頸部3本歯の縦位直線文→ヘラ描き斜格子文(左上がり→右上がり)→横位波状文。内面は斜位のナデ。外面スス附着。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十王台式
7	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(L-Z)→頸部4本歯の横位区画直線文→上開き連弧文、縦位直線文→横位波状文。内面は斜位のナデ。外面濃いスス附着。	石英、金雲母	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	十王台式
8	弥生土器壺	- -	胴部附加条1種縄文(RL+2L)→頸部無文帯(横位のナデ)。内面は剥落。	多量の石英・長石	普通	にぶい黄褐色	二軒屋式カ
9	弥生土器壺	- -	胴部附加条1種縄文(RL+2L)→頸部同様の原体によるキザミ隆帯。内面は剥落。	多量の石英・長石	普通	にぶい黄褐色	二軒屋式カ
10	弥生土器壺	- - -	胴部附加条2種縄文(R+R, L+L;下→上)。内面は斜位のナデ→横位のヘラナデカ。外面まばらにスス附着。	石英、角閃石	普通	明黄褐色	十王台式
11	弥生土器壺	- - -	胴部附加条1種縄文(LR+2R)、軸縄不明の附加条縄文(L-Z)を下→上へ施文。内面は縦位のナデ→横位のナデ。	石英、角閃石、骨針、多量の白色粒、赤色粒	普通	外：浅黄色 内：にぶい黄褐色	
12	弥生土器壺	- -	胴部附加条1種縄文(RL+2L, LR+2R;下→上)。内面は縦・斜位のナデ。	多量の石英・長石	良好	外：にぶい橙色 内：にぶい黄褐色	二軒屋式
13	弥生土器壺	- - 8.4	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S, L-Z;下→上)。底部砂痕。内面は横位のナデ→斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ附着。	石英、金雲母、骨針、多量の白色粒	普通	外：にぶい褐色 内：灰褐色	
14	弥生土器壺	- - 6.7	胴部附加条2種縄文(L+Lカ)。底部布目痕(周縁部ナデ消し)。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ附着。	石英、角閃石、骨針、赤色粒	普通	外：浅黄色 内：明黄褐色	十王台式
15	弥生土器壺	- - 6.4	胴部軸縄不明の附加条縄文(L-Z)。底部布目痕。内面は斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ附着。外面底部周縁～胴部にスス附着。	石英、角閃石、金雲母、骨針	普通	外： 内：	十王台式
16	弥生土器高坏	- -	脚部中実。外面は横・斜位のナデ。内面はナデ。	石英	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい橙色	
17	石器 磨製石器		欠損品。礫皮をもつ板状剝片を素材とし剝離や研磨による調整加工。研磨範囲には擦痕や線刻が顕著。表面下部に漏斗状の小穴。石材：粘板岩。残存長6.4cm・残存幅3.05cm・残存厚0.8cm・重さ18.55g。				

6号住居跡(第267図)

位置 B3区中央部、I12グリッドにある。規模と平面形 3.86×3.42mのほぼ方形で、5号住居の南東隅を壊している。主軸方向 N-27°-W 壁 壁高38cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 西側半分が硬化している。ピット 1箇所。P1は南西隅にあり、一般的に「貯蔵穴」と呼称されるピットと考えられる。炉 長径68cm、短径45cmの楕円形で深さ3cm。覆土 暗褐色土主体の自然堆積層。遺物 覆土中から弥生土器が少量出土している。小破片が中心である。十王台式後半期を主体とする。6は二軒屋式と考えられる。7は波状文がコンパス文風に描かれる。9は外面にハケメのある土師器壺である。所見 覆土中の遺物は弥生時代後期のものだが、遺構の形態からは古墳時代前期の小形住居跡の可能性も考えられる。



第267図 6号住居跡・出土遺物

表 124 6号住居跡出土遺物観察表

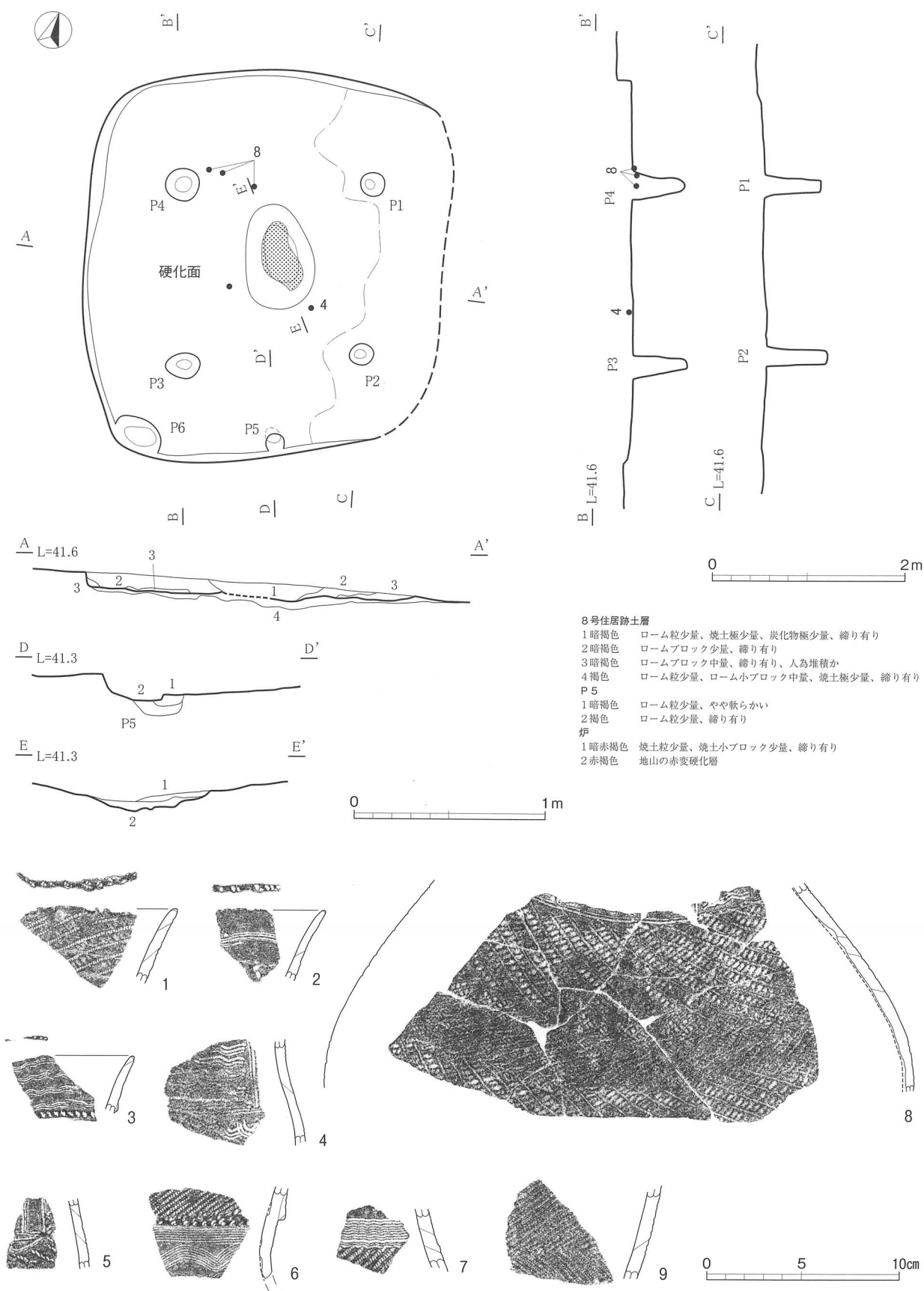
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	- - -	口唇部ヘラキザミ。口縁部6本歯の横位波状文(下→上)。内面は口縁部縦位のナデ→口唇部付近横位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	多量の石英・白色粒	普通	黄灰色	十王台式
2	弥生土器壺	- - -	口唇部縄文キザミ(無節Lカ)。口縁部5本歯・2条一単位の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英、長石、金雲母、多量の白色粒	普通	黄灰色	十王台式
3	弥生土器壺	- -	頸部6本歯・3条一単位の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は斜位のナデ→横位のナデ。外面スス付着。	石英、骨針、多量の白色粒	良好	外：にぶい黄褐色 内：橙色	十王台式
4	弥生土器壺	- -	頸部薄い押捺隆帯→6本歯の縦位直線文。内面は斜位のケズリ(下→上)→斜位のナデ。外面スス付着。	石英、金雲母、多量の白色粒	普通	外：暗灰黄色 内：にぶい黄褐色	十王台式
5	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S)。頸胴界4本歯の下開き連弧文(時計回り)、横位波状文。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	石英、金雲母、多量の白色粒	良好	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
6	弥生土器壺	- - -	口縁部附加条1種縄文(LR+2R)→口縁部下端同様の原体によるキザミ。頸部歯数不明の横位波状文。内面は横位のナデ。	石英	良好	外：にぶい橙色 内：橙色	二軒屋式
7	弥生土器壺	- -	頸部6~7本歯・コンパス文風の横位波状文(時計回りカ)。内面は横位のケズリ→横位のナデ。	多量の石英、角閃石	良好	橙色	
8	弥生土器壺	- - (6.8)	胴部単節縄文(RLカ)を横位施文。底部木葉痕。内面は器面荒れ。外面胴部に黒斑。	石英	普通	浅黄色	
9	土師器壺	- - 6.8	胴部斜位のハケメ→斜位のナデ。内面は斜位のナデ。	石英、金雲母、多量の白色粒	不良	外：明赤褐色 内：にぶい黄褐色	

8号住居跡(第268図)

位置 B3区中央部東寄り、J12グリッドにある。規模と平面形 (3.85) × 4.08 m。主軸方向 N-15°-W 壁 壁高17cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 東壁寄りの部分を除いて全体に硬化している。ピット 6箇所。P1~4は支柱穴。P5は南壁際にあり、出入り口ピットと考えられる。P6は南西隅にあり、比較的浅いピットである。炉 長径112cm、短径72cmの楕円形で深さ4cm。覆土 上層は暗褐色土主体の自然堆積層で、最下層はロームブロックを多く含む人為堆積層。遺物 炉の周辺部の床面から壺破片(4・8)が出土している。出土遺物は少なく、小~中破片が中心である。十王台式前半期の土器が主体で6・7は二軒屋式である。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

表 125 8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	- - -	口唇部縄文キザミ。頸部造り出しの隆帯カ→口縁部と隆帯上に附加条2種縄文(R+R)。内面は横位のナデ。外面スス付着。	多量の石英、骨針	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器壺	- -	口唇部丸棒状工具によるキザミ。頸部押捺隆帯、4本歯の横位波状文。内面は斜位のナデ。	石英、角閃石	普通	外：にぶい橙色 内：にぶい黄褐色	
3	弥生土器壺	- -	口唇部ヘラキザミ。頸部縄文原体によるキザミ隆帯→3本歯の横位波状文。内面は横位のナデ。	石英、角閃石	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
4	弥生土器壺	- - -	頸胴界3本歯の横位区画直線文、上開き連弧文(反時計回り)→頸部縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	石英、骨針	普通	にぶい黄褐色	十王台式
5	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(L・Z)→頸胴界4~5本歯の横位区画直線文→波状文に近い上開き連弧文。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十王台式
6	弥生土器壺	- - -	口縁部軸縄不明の附加条縄文(R・S)→口縁部下端同様の原体によるキザミ、口縁部直下7本歯の横位直線文→波状文に近い下開き連弧文。内面は横位のナデ、剥落。	多量の石英・長石	普通	にぶい黄褐色	二軒屋式
7	弥生土器壺	- -	胴部附加条1種縄文(LR+2R)→頸胴界10~11本歯の横位区画カ波状文。内面は横位のナデ。	多量の石英・長石	良好	橙色	二軒屋式

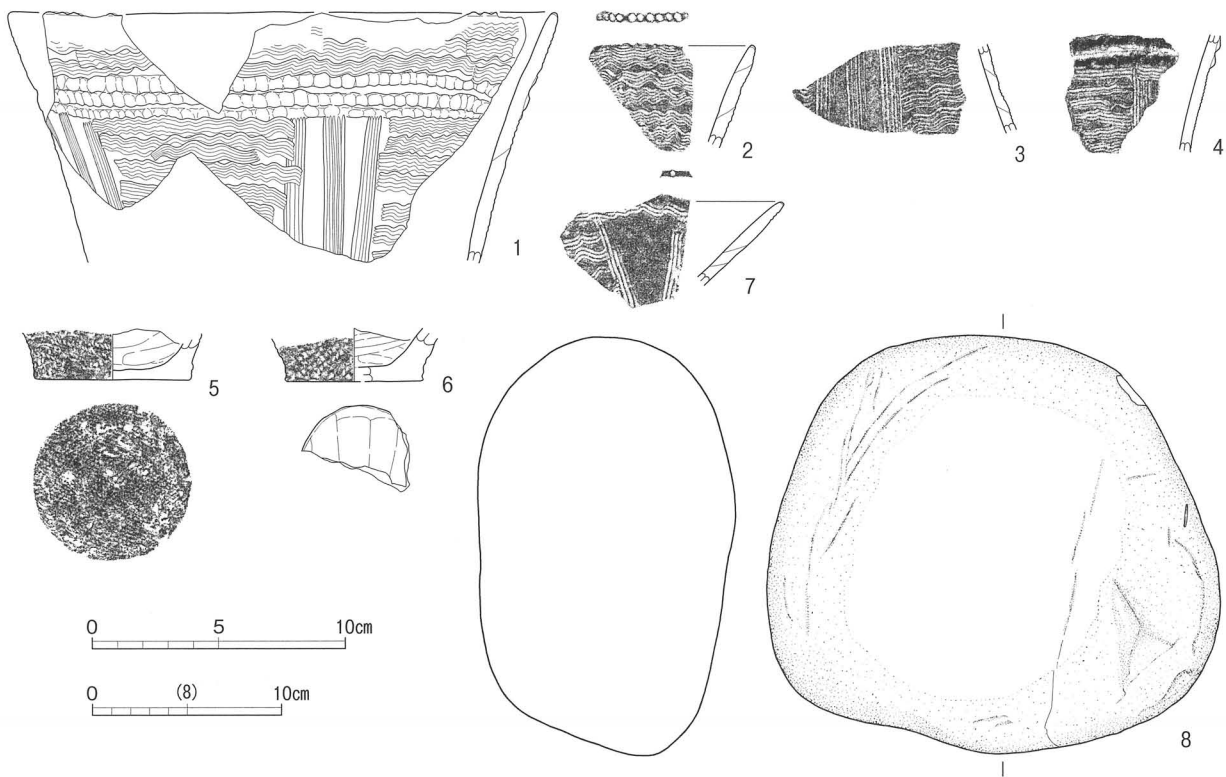


第268図 8号住居跡・出土遺物

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
8	弥生土器壺	- - -	胴部附加条2種縄文(R+R, L+L:下→上)→頸胴界2本同時施文具カによる横位区画直線文、縦位直線文、横位波状文。内面は斜位のナデ、剥落。	石英、金雲母、多量の白色粒	普通	にぶい黄橙色	十王台式
9	弥生土器壺	- -	胴部附加条1種縄文(LR+2R, RL+2L:下→上)。内面縦・斜位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	良好	外:黒褐色 内:にぶい褐色	二軒屋式

9号住居跡(第269・270図)

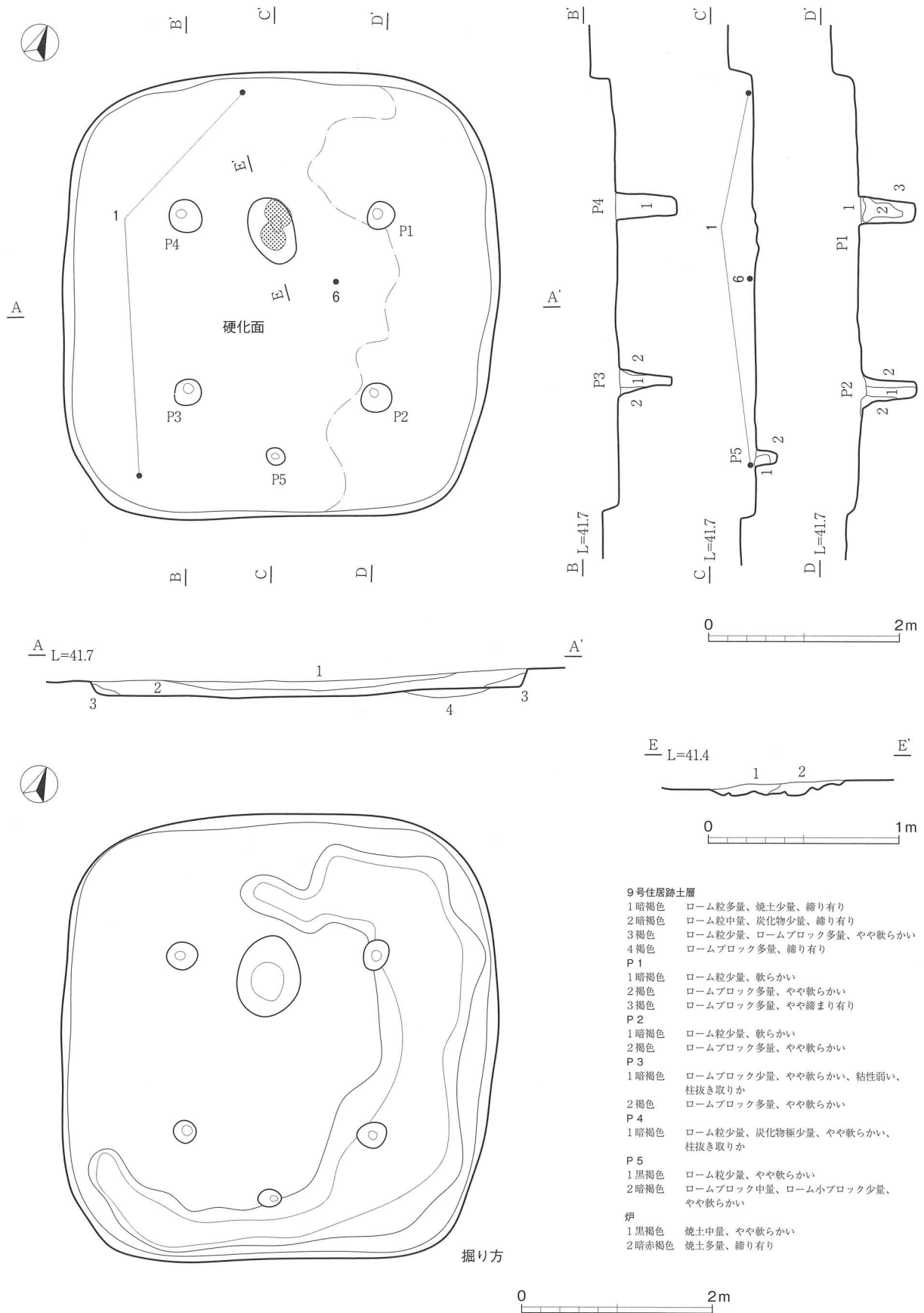
位置 B3区中央部南寄り、I13グリッドにある。**規模と平面形** 4.55×4.73mのほぼ方形。**主軸方向** N-22°-W **壁** 壁高22cm、ほぼ垂直に立ち上がる。**床** 東壁寄りの部分を除いて全体に硬化している。**ピット** 5箇所。P1~4は支柱穴。P5は南壁寄りにあり、出入り口ピットと考えられる。**炉** 長径72cm、短径77cmの楕円形で深さ6cm。**覆土** 暗褐色土主体の自然堆積層。**遺物** 少量の遺物が床面から出土している。小~中破片が中心である。十王台式後半期を主体とし、明確な二軒屋式土器は出土していない。また、図示できなかったが、土師器甕の胴部片が多数出土している。6は底面をヘラケズリ→ナデ調整する。**所見** 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第269図 9号住居跡出土遺物

表126 9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	(21.4) - -	口唇部丸棒状工具によるキザミカ。口縁部押捺隆帯3条→口縁部5本歯の横位波状文(上→下)、頸部3条一単位の縦位直線文→横位波状文(上→下)。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石	普通	にぶい黄橙色	十王台式



第270図 9号住居跡

第七章 B3区の遺構と遺物

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
2	弥生土器壺	- - -	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部5本歯の横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英	良好	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
3	弥生土器壺	- -	頸部5本歯・3条一単位の縦位直線文→横位波状文。内面は斜位のナデ。	石英、金雲母	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
4	弥生土器壺	- -	頸部押捺隆帯→4本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は斜位のナデ。	石英、骨針	普通	外：浅黄色 内：にぶい黄褐色	十王台式
5	弥生土器壺	- - 6.2	胴部附加条2種縄文(L+L)。底部布目痕。内面は斜位のナデ。	多量の石英・長石、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十王台式
6	弥生土器壺	- - (5.4)	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S)。底部ヘラケズリ→ナデ調整。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	
7	弥生土器高坏	- -	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部4本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は横・斜位のナデ。	石英	良好	外：橙色 内：にぶい黄褐色	
8	石器台石		大型礫の表面中央に磨耗痕。表面右上の一部は被熱による破砕。石材：砂岩。長さ22.2cm・幅23.7cm・厚さ13.6cm・重さ9800.0g。				

10号住居跡(第271図)

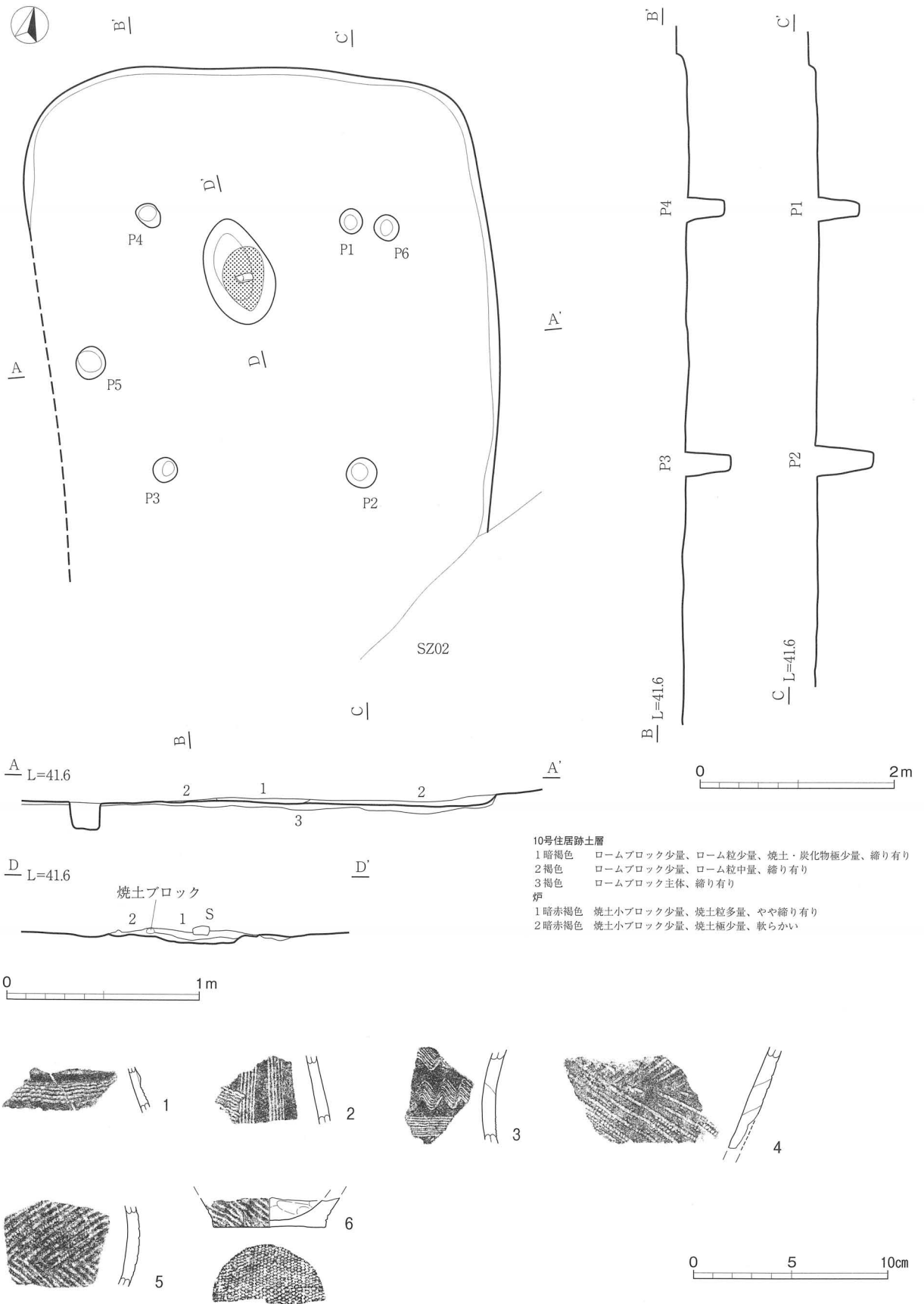
位置 B3区中央部、I13グリッドにある。規模と平面形 4.46 × (5.00) mで、7号住居跡に南東部を壊されている。主軸方向 N-22°-W 壁 壁高8cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 全体に硬化は弱い。ピット 6箇所。P1~4は主柱穴、P6は古い段階の主柱穴か。炉 長径90cm、短径70cmの楕円形で深さ4cm。覆土 上層は暗褐色、下層は褐色土の自然堆積。遺物 出土遺物は少なく、小破片が中心である。十王台式を主体とする。3は二軒屋式、4は附加条1種縄文(附加1条)の胴部片である。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

表127 10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	- -	頸部無文の隆帯(断面三角形)→5本歯の横位波状文。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	石英、骨針	普通	灰黄褐色	P2出土 十王台式
2	弥生土器壺	- -	頸部5本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は縦位のナデ。外面スス付着。	石英、多量の白色粒	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	十王台式
3	弥生土器壺	- -	頸部5本歯・3条一単位の縦位直線文、横位波状文(反時計回り)。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	多量の石英・長石	普通	外：にぶい黄褐色 内：褐灰色	二軒屋式
4	弥生土器壺	- -	胴部附加条1種縄文(LR+R、RL+2Lカ:下→上)。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	多量の石英・白色粒、角閃石	普通	外：灰黄褐色 内：褐灰色	二軒屋式カ
5	弥生土器壺	- -	胴部附加条1種縄文(LR+2R、RL+2L:下→上)。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、多量の白色粒	普通	外：黒褐色 内：灰黄褐色	二軒屋式カ
6	弥生土器壺	- - (5.8)	胴部軸縄不明の附加条縄文(L・Z)。底部布目痕。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英、長石、骨針	良好	にぶい黄褐色	十王台式

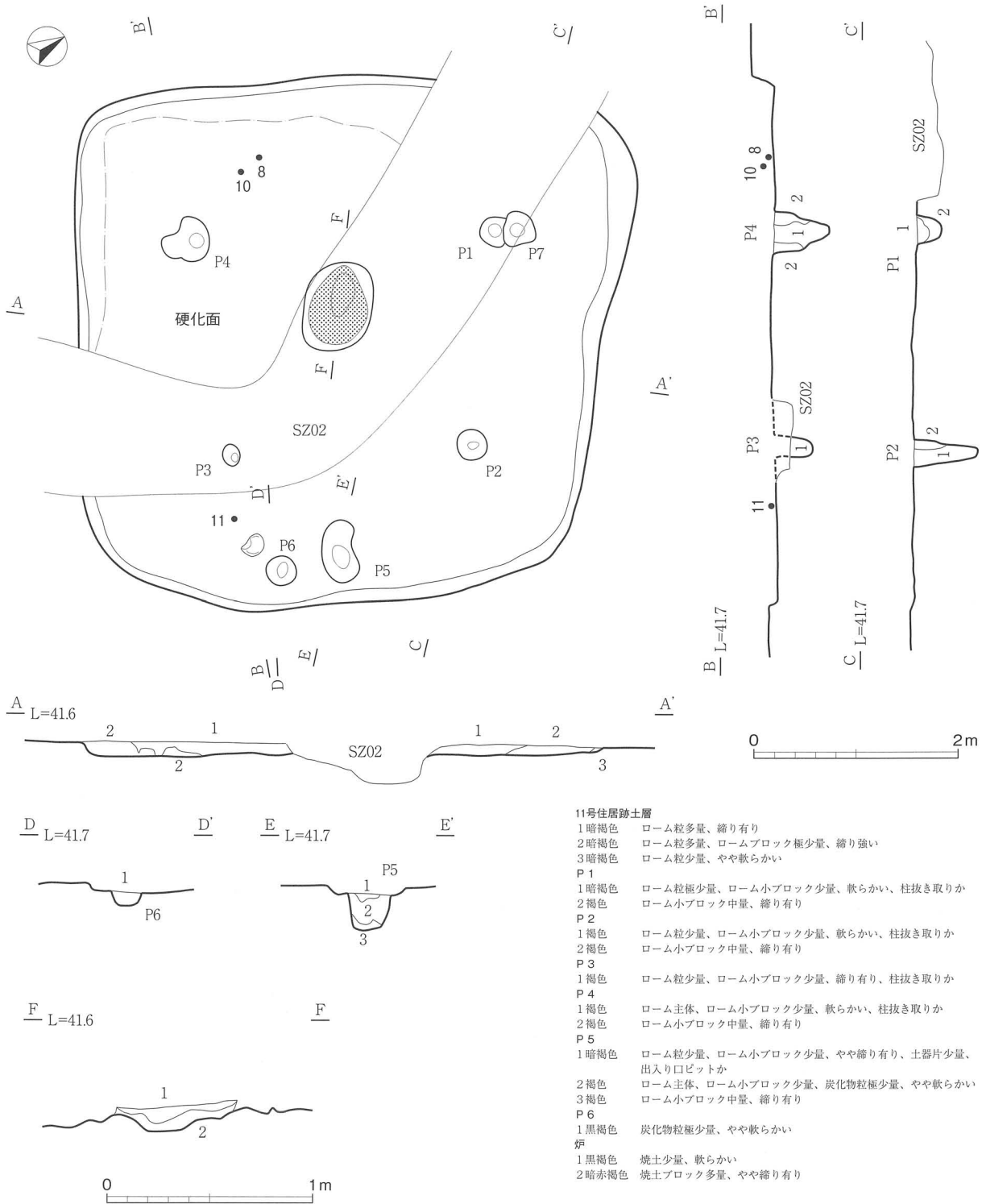
11号住居跡(第272・273図)

位置 B3区南部、I13・J13グリッドにある。規模と平面形 5.13 × 5.20 mで、2号方形周溝墓に中央部を壊されている。主軸方向 N-25°-W 壁 壁高18cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 P4周辺が硬化している。ピット 7箇所。P1~4は主柱穴、P5は出入り口ピット。P6・7は不明である。炉 2号方形周溝墓の溝に上層部を削られ、溝の内側斜面に、長径85cm、短径68cmの楕円形の範囲が被熱を受けた状態で確認されている。覆土 1~2層はローム粒を均質に含む暗褐色土である。遺物 遺

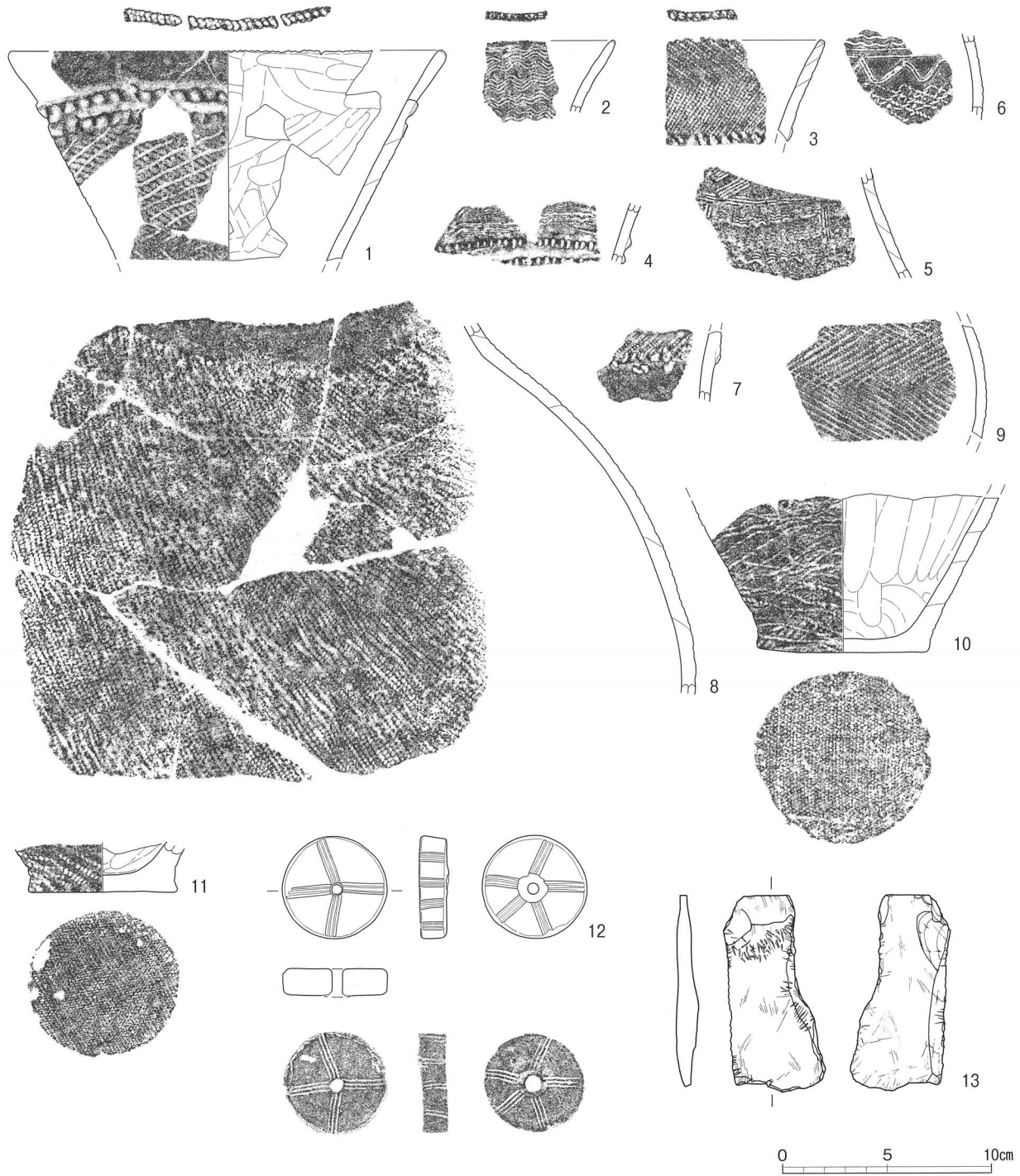


第271図 10号住居跡・出土遺物

物は床に近いレベルから破片で出土している。出土遺物はやや多く、中～大破片もある。十王台式前半期を主体とするが、二軒屋式(3・7)も目立つ。8は頸部に無文帯を有し、胴部には単節R L縄文が施文される。12は表裏面に櫛歯状工具による放射状の直線文、側面に直線文が施文される。13は使用痕が顕著に見られる砥石である。 所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第 272 図 11号住居跡



第 273 図 11号住居跡出土遺物

表 128 11号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種 別 器 種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	縄文土器 深鉢	(20.6) — —	口唇部縄文原体によるキザミ。口縁部無文(横位のケズリ・ナデ)。頸部押捺隆帯2条→附加条2種縄文(R+R、L+L)。内面は縦・斜位のナデ→横位のナデ。	石英、長石、金雲母	普通	にぶい黄褐色	P5出土 十王台式
2	弥生土器 壺	— —	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本歯の横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。外面スス附着。	石英	良好	外: 黒褐色 内: 灰黄褐色	十王台式

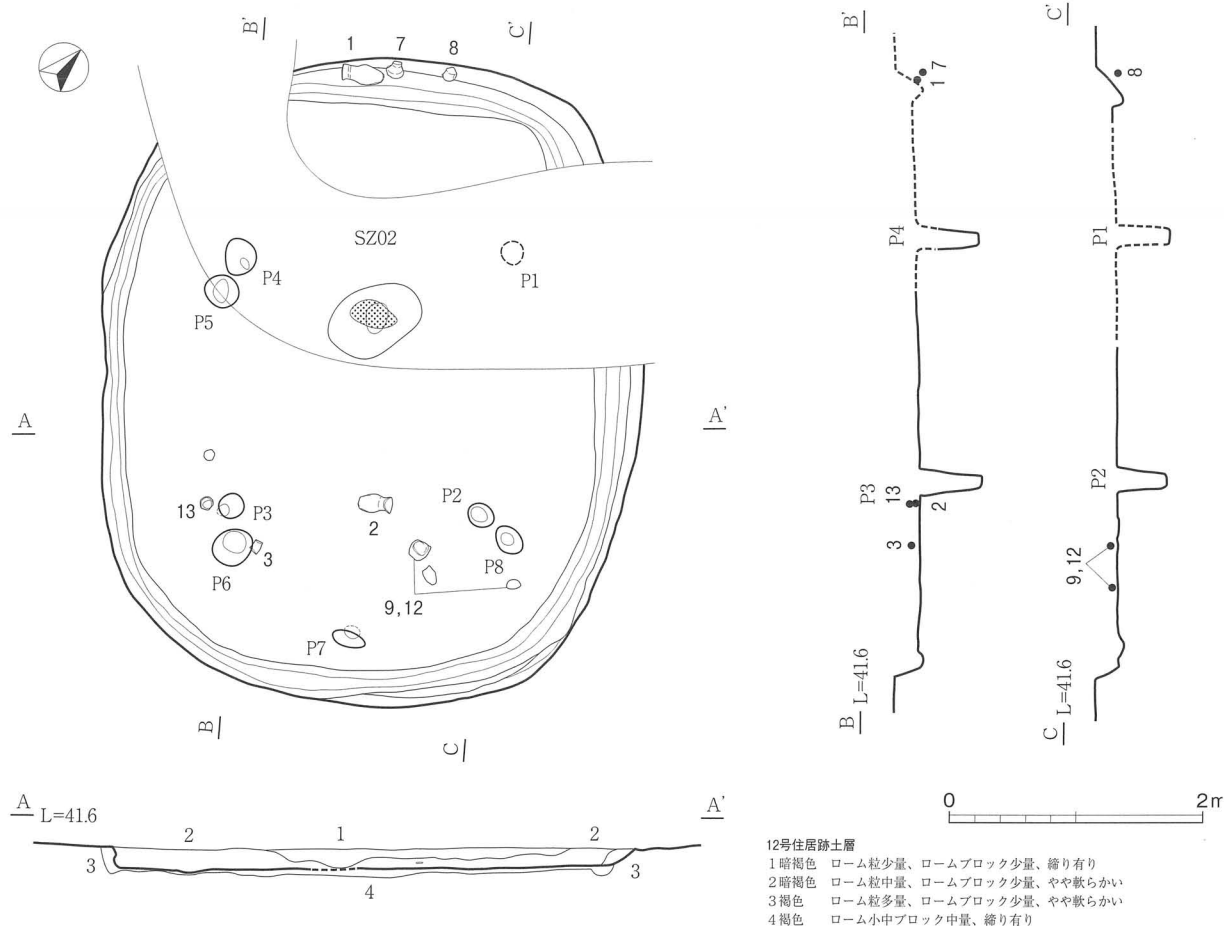
図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	弥生土器壺	- - -	口唇部・口縁部下端縄文原体によるキザミ。口縁部附加条1種縄文(RL+2L、LR+2R:下→上)。内面は横位のナデ。外面スス付着。	石英	良好	外: 灰黄褐色 内: におい黄褐色	二軒屋式カ
4	弥生土器壺	- -	口縁部丸棒状工具によるキザミ隆帯→3本歯の横位波状文。内面は横位の横ナデ。外面スス付着。	石英、金雲母、骨針	普通	外: 灰黄褐色 内: におい黄褐色	十王台式
5	弥生土器壺	- -	頸部4本歯の縦位羽状文カ、横位波状文。内面は器面荒れ。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	におい黄褐色	十王台式
6	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(L・Z、L・S)ないし附加条3種縄文カ→頸部3本歯の横位区画直線文→横位区画波状文→横位波状文。内面は斜位のナデ。外面濃いスス、内面ヨゴレ付着。	石英	普通	外: 黒褐色 内: におい黄褐色	十王台式
7	弥生土器壺	- - -	口縁部附加条1種縄文(LR+2R)→口縁部下端同様の原体によるキザミ。頸部無文(横・斜位のナデ)。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	多量の石英・白色粒	普通	外: 黒褐色 内: 灰黄褐色	二軒屋式カ
8	弥生土器壺	- - -	頸部無文帯(横位のナデ)。胴部単節RL縄文を横位施文(非羽状構成:下→上)。内面は頸部横位のナデ、胴部縦・斜位のナデ。外面まばらな被熱による赤色化。	多量の石英・長石	普通	外: 浅黄色 内: 橙色	
9	弥生土器壺	- -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R・S、L・Z:下→上)。内面は縦・斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英、角閃石、骨針	普通	外: 暗灰黄色 内: におい黄褐色	
10	弥生土器壺	- - 8.1	胴部附加条2種縄文(L+L)、軸縄不明の附加条縄文(R・S)を下→上へ施文。底部布目痕。外面まばらにスス、内面ヨゴレ付着。	石英、角閃石、骨針、赤色粒	良好	外: 浅黄色 内: におい黄褐色	十王台式
11	弥生土器壺	- - 7.1	胴部附加条2種縄文(LR+2L)。底部布目痕(粘土付着)。内面は縦・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	普通	外: 灰黄褐色 内: におい黄色	十王台式
12	土製品紡錘車		径(5.0)、高1.4、孔径(0.45)、重[44.69]g。表裏面3本歯の放射状文。側面は直線文11条。ナデ調整。片側穿孔。	石英、角閃石、骨針	良好	淡黄色、におい黄褐色	
13	石器砥石		板状割片の表・裏面や両側面に擦痕や線刻が顕著。上端部は研磨により平滑。縁辺の一部に微細刻離痕。石材: 流紋岩。長さ9.3cm・幅4.75cm・厚さ1.1cm・重さ38.9g。				

12号住居跡(第274~276図)

位置 B3区南部、I13・I14グリッドにある。規模と平面形 (5.50)×(5.20)mのやや縦長長方形で、2号方形周溝墓に中央部北側を壊されている。主軸方向 N-38°-W 壁 壁高11cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 床面全体が硬化している。住居の古い段階で周溝を持っている。ピット 7箇所。P1~4は支柱穴、P5・6・8は古い段階の柱穴、P7は出入り口ピット。炉 2号方形周溝墓の溝に覆土を削られ、火床面以下が残存している。長径112cm、短径73cm。覆土 ロームブロックを少量含む暗褐色土が主体である。遺物 北壁際中央の床面から1の弥生土器が横倒し、7が斜位、8が立位の状態出土している。また、P6-P8間でも弥生土器がまとまって出土しており、2は覆土下層から横倒しの状態、3・9・12は覆土上層から出土している。出土遺物は非常に多く、ほぼ完形個体・大破片の割合が高い。弥生土器は十王台式後半期を主体とし、明確な二軒屋式系土器は出土していない。十王台式は久慈川流域(1)、那珂川流域(2)の特徴を有する良好な個体がそれぞれ確認できる。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

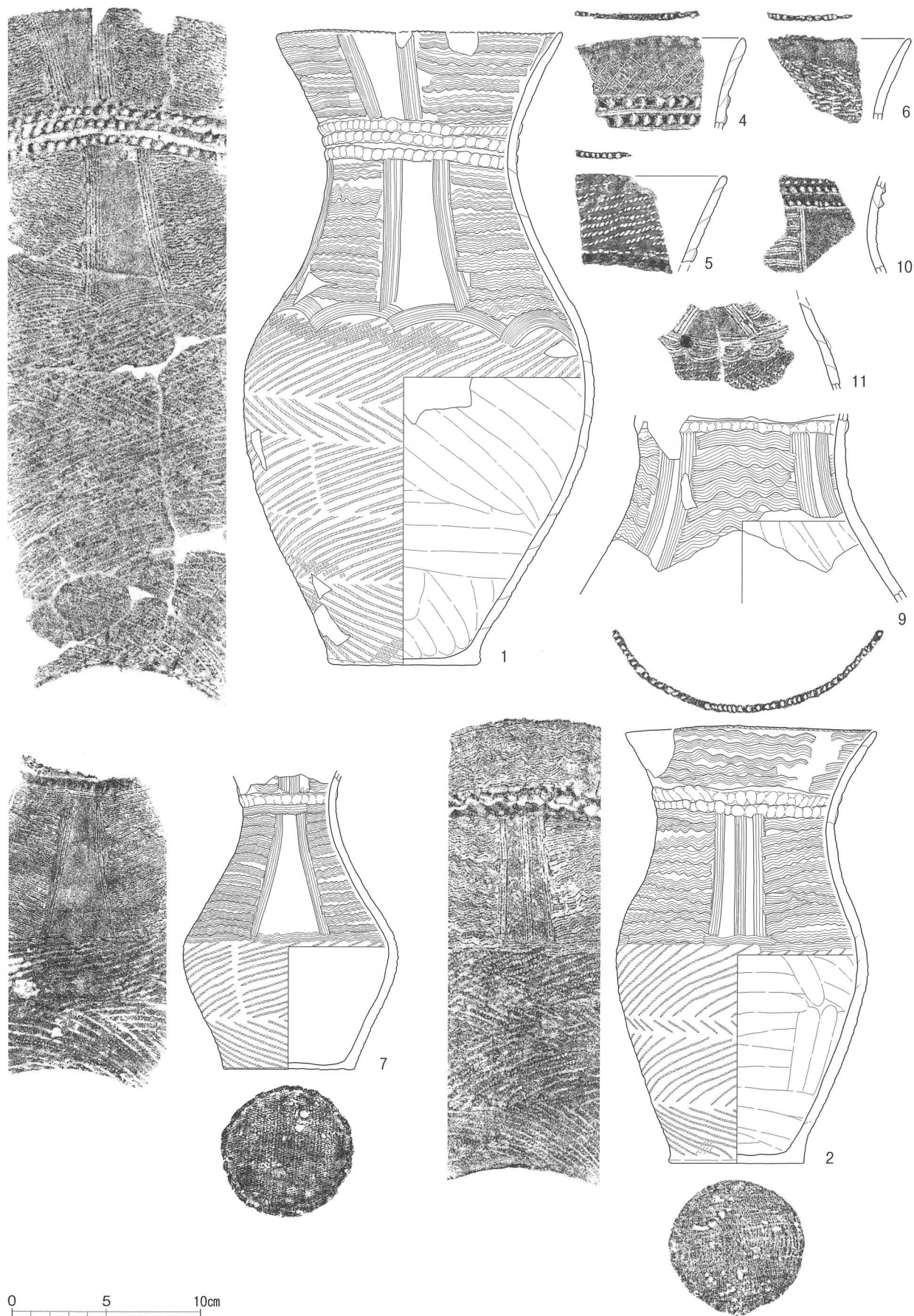
表129 12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	15.3 34.2 8.0	口唇部ヘラキザミ。頸部押捺隆帯3条→口縁部6本歯・2条一単位の縦位直線文5単位→横位波状文5~6条(下→上)、胴部附加条2種縄文(RL+2r、LR+2l:下→上、時計回りカ、胴部中位非羽状構成)→頸部3本歯下開き連弧文(半時計回り)→2条一単位の縦位直線文4単位→横位波状文8条(下→上)。底部砂痕。内面は口縁~口頸部横・斜位のナデ、頸部縦位のナデ、肩~胴部横・斜位のナデ。外面胴部上位より上にスス、内面胴部中位より下に薄いコゲ付着。	多量の石英・長石、チャート、金雲母	普通	外: 灰黄褐色 内: におい黄褐色	十王台式

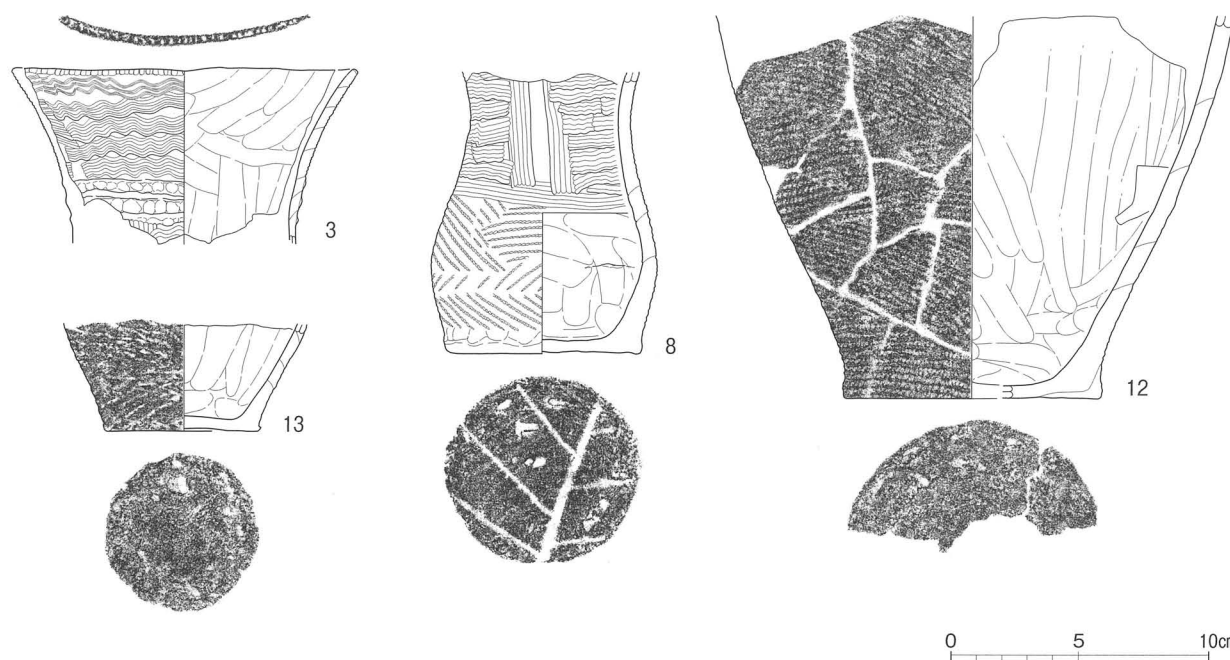


第274図 12号住居跡

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
2	弥生土器壺	(13.3) 23.5 7.2	口唇部ヘラキザミ。頸部薄い押捺隆帯2条、胴部軸繩不明の附加条繩文(R・S)、附加条2種繩文(L+L)を下→上へ施文→口縁部4本歯の横位波状文(上→下)5条、頸部3条→単位の縦位直線文3単位→頸胴界横位区画波状文→頸部横位波状文(下→上)13条。底部布目痕。内面は口縁～胴部上位横・斜位のナデ、胴部下位縦・横位のナデ。外面口縁～胴部上位縦長にスス着、以下はスス酸化消失。内面は液ダレ状のヨゴレ付着。	石英、長石、チャート、多量の白色粒	普通	にぶい黄褐色	十王台式
3	弥生土器壺	(13.5) — —	口唇部ヘラキザミ。頸部薄い押捺隆帯3条→口縁部6本歯の横位波状文(下→上)、頸部縦位直線文→横位波状文。内面は頸部縦位のナデ→口縁部斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	多量の石英・白色粒	良好	外：黒褐色 内：灰黄褐色	十王台式
4	弥生土器壺	— — —	口唇部ヘラキザミ、横位のナデ。頸部棒状工具によるキザミ隆帯→ヘラ描き斜格子文(左上がり→右上がり)。内面は器面荒れ。	石英、多量の角閃石、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	十王台式
5	弥生土器壺	— — —	口唇部丸棒状工具によるキザミ。頸部押捺隆帯→口縁部軸繩不明の附加条繩文(R・S)。内面は横位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英、多量の白色粒、骨針	良好	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
6	弥生土器壺	— — —	口唇部丸棒状工具によるキザミ。口縁部軸繩不明の附加条繩文(R・Z)を斜位施文。内面横・斜位のナデ、ケズリ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英	普通	黒褐色	十王台式
7	弥生土器壺	— — 7.0	頸部薄い押捺隆帯1条、胴部軸繩不明の附加条繩文(R・S、L・Z：下→上)→頸胴界5本歯の横位区画波状文→口縁部と頸部5本歯・2条→単位の縦位直線文3単位(頸部)→横位波状文12～13条(上→下)→頸部隆帯直下の横位区画波状文。底部布目痕(周縁一部ナデ消し)。内面は頸部剥落、胴～底部横・斜位のナデ。	石英、長石、骨針	良好	橙色	十王台式



第 275 図 12号住居跡出土遺物①

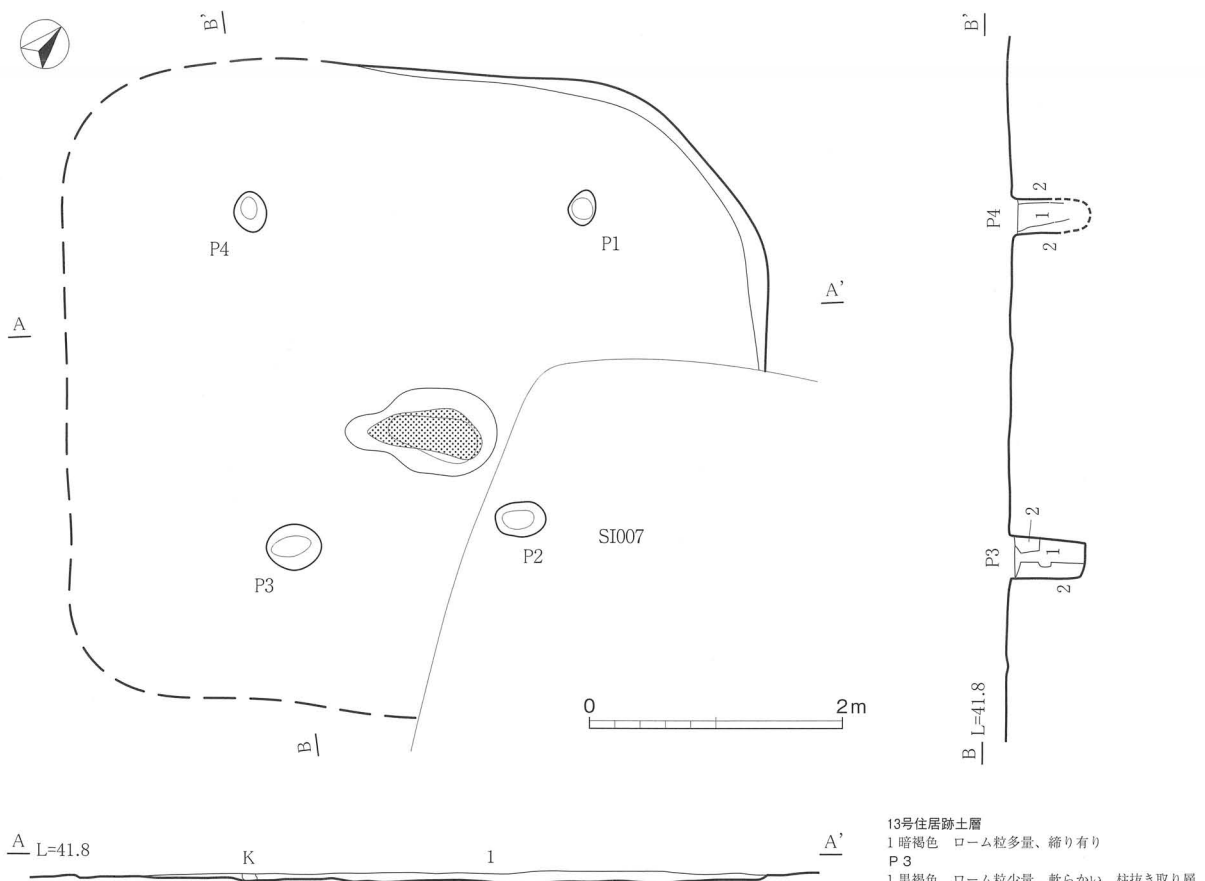


第276図 12号住居跡出土遺物②

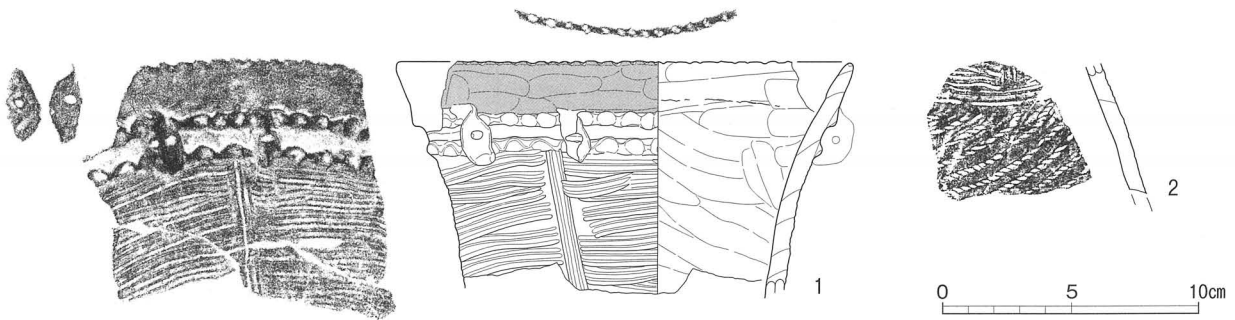
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
8	弥生土器 壺	- - 7.5	胴部軸繩不明の附加条縄文(R-S、L-Z:下→上、反時計回り)を横・斜位施文→頸胴界6本歯の横位区画直線文→2条一単位の縦位直線文3単位→頸部横位波状文(下→上)。底部木葉痕。内面は頸部上位・胴部斜位のナデ、胴部下位横位のナデ。外面ほぼ全体にスス、一部スス酸化消失、内面胴部下位より上にコゲ付着。	石英、角閃石、多量の白色粒	良好	外:にぶい黄橙色 内:にぶい褐色	十王台式
9	弥生土器 壺	- - -	頸部押捺隆帯→6本歯・2条一単位の縦位直線文4単位→横位波状文(下→上)。内面は縦位のナデ→斜位のナデ(下→上)。内面に黒斑。	石英、骨針、赤色粒	良好	にぶい橙色	十王台式
10	弥生土器 壺	- - -	頸部丸棒状工具によるキザミ隆帯→3本歯の縦位直線文→横位波状文。内面は斜位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	外:黒褐色 内:褐色	十王台式
11	弥生土器 壺	- - -	胴部軸繩不明の附加条縄文(R-S、L-Z:上→下)。頸胴界5本歯の横位区画直線文→上開き連弧文、頸部縦位直線文→横位波状文→円形貼付文。内面は縦・斜位のナデ。	石英	普通	外:にぶい黄橙色 内:灰白色	十王台式
12	弥生土器 壺	- - (10.1)	胴部軸繩不明の附加条縄文(R-S、L-Z:下→上、反時計回り)ないし燃糸文。底部布目痕(周縁部接地不良)。内面は縦・斜位のナデ。外面スス、内面底部に薄いヨゴレ付着。	石英、角閃石、骨針	良好	にぶい黄橙色	十王台式
13	弥生土器 壺	- - 6.0	胴部軸繩不明の附加条縄文(R-S、L-Z:下→上)。底部布目痕(周縁部は砂痕)。内面は縦・斜位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英、多量の白色粒	普通	外:黒褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式

13号住居跡 (第277図)

位置 B3区南部、I12・I13グリッドにある。規模と平面形 (5.35) × (5.02) mの隅丸縦長長方形で、7号住居跡に東部を壊されている。 **主軸方向** N-47°-E **壁** 壁高4cm、やや外傾して立ち上がる。 **床** 残存する床面は全体が弱く硬化している。南西部の床面は削平されている。 **ピット** 4箇所。P1~4は支柱穴、P2は7号住居の床下から確認されている。P3の柱抜き取り穴径は、約7.5cmである。 **炉** 住居中央南寄りに位置し、火床面は長楕円形を呈している。 **覆土** ローム粒を多量含む暗褐色土が主体である。 **遺物** 遺物の出土量は非常に少なく、1以外は小破片が中心である。十王台式前半期が主体と考えられる。1は穿孔された半月形の貼付文を有し、無文の口縁部が赤彩される特殊な壺である。2は1と同一個体の可能性がある。 **所見** 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



13号住居跡土層
 1 暗褐色 ローム粒多量、締り有り
 P3
 1 黒褐色 ローム粒少量、軟らかい、柱抜き取り層
 2 褐色 ローム中ブロック多量、締り有り、埋め土の残存層
 P4
 1 黒褐色 ローム粒少量、軟らかい
 2 褐色 ローム中ブロック中量、締り有り



第 277 図 13号住居跡・出土遺物

表 130 13号住居跡出土遺物観察表

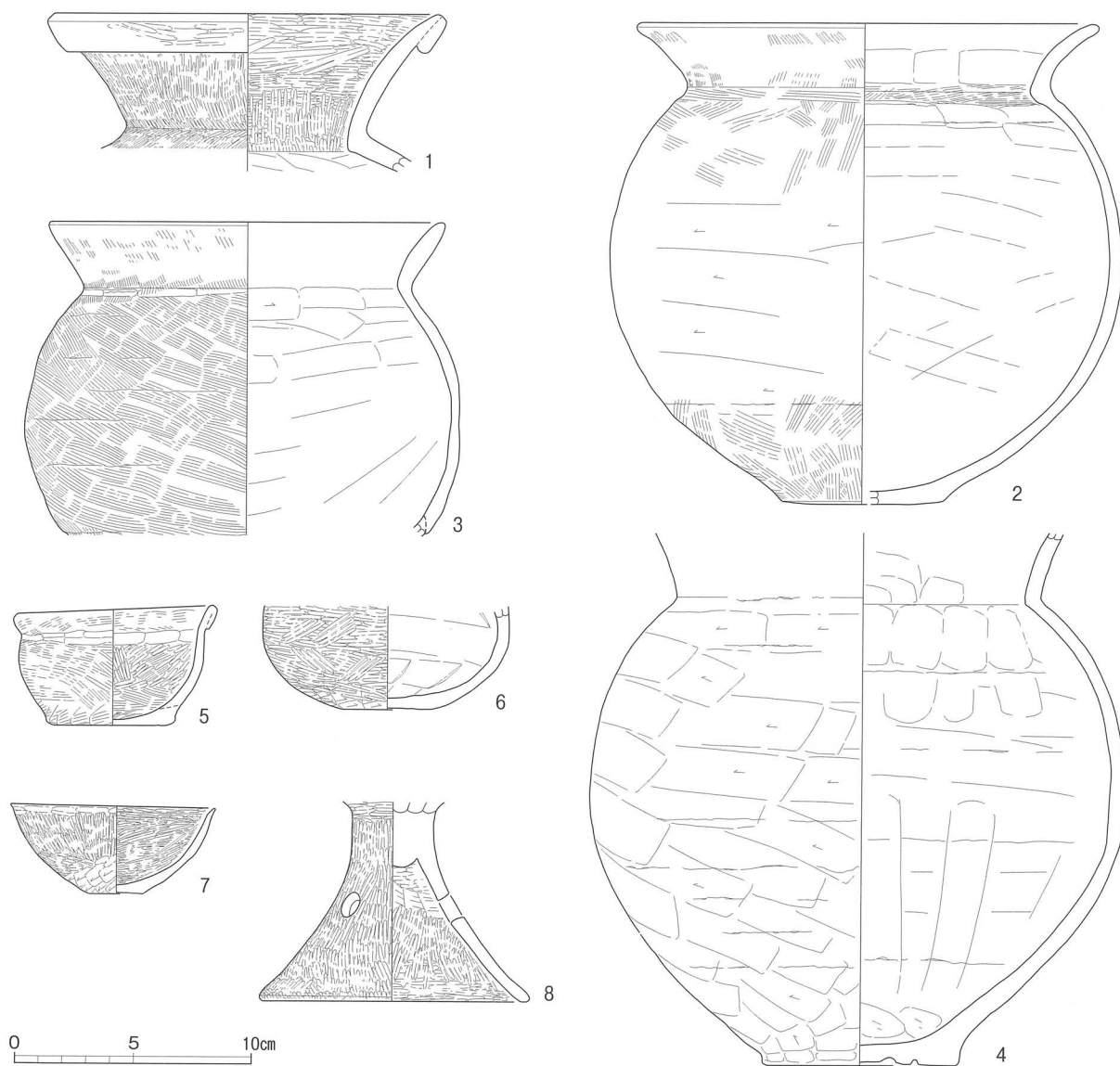
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(18.0) — —	口唇部縄文原体によるキザミ(無節Rカ)。口縁部無文、赤彩。頸部厚い押捺隆帯2条→3本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)→隆帯部に穿孔を有する半月形の貼付文。内面は口縁部横位のナデ、頸部斜位のナデ。2と同一個体カ。	多量の石英・長石	良好	外：にぶい黄橙色 内：明赤褐色	
2	弥生土器 壺	— — —	胴部附加条1種縄文(L+L)→頸胴界3本歯の横位区画直線文→縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は縦・斜位のナデ。外面スス附着。1と同一個体カ。	多量の石英・長石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	

第2節 古墳時代

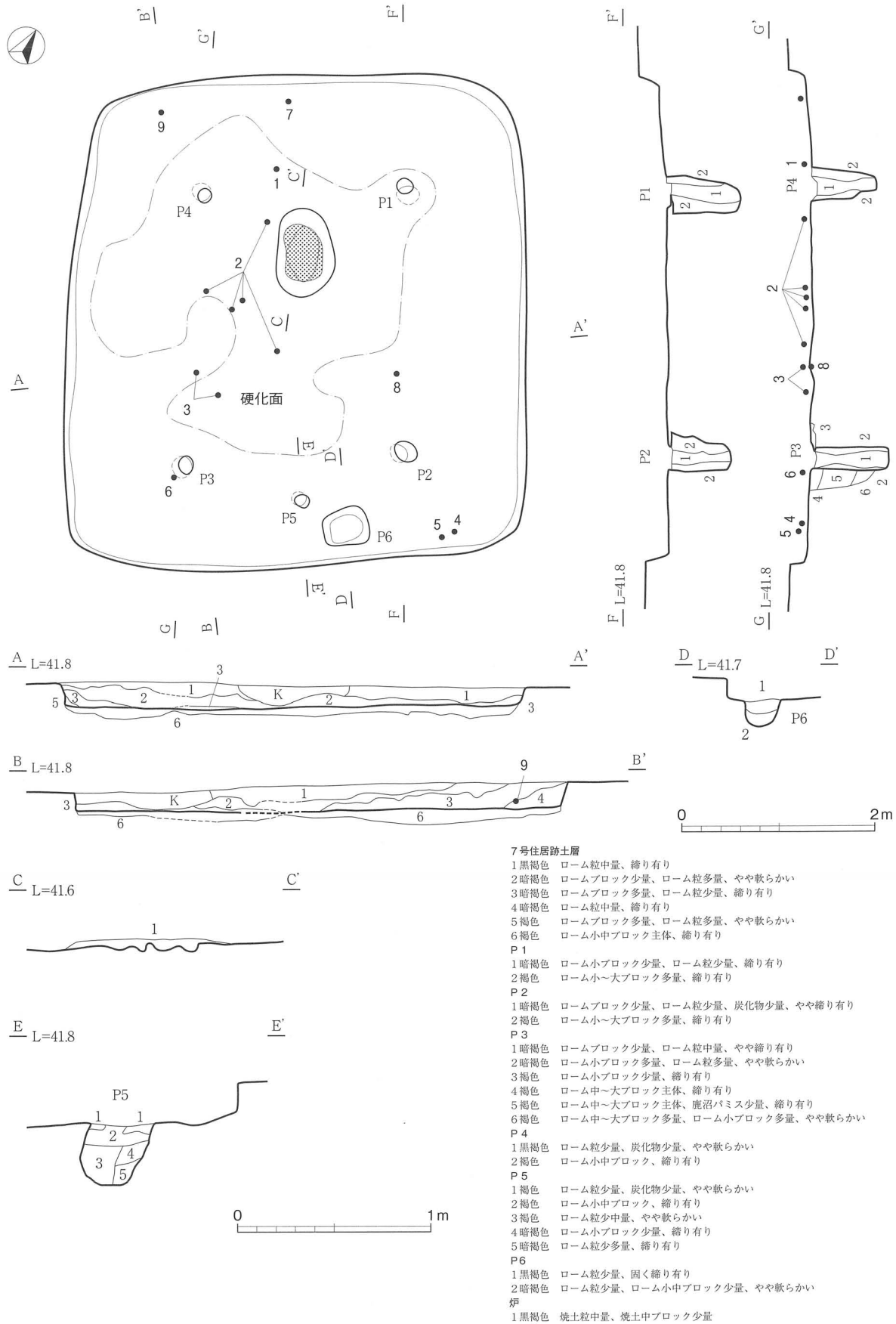
1 竪穴住居跡

7号住居跡（第278～280図）

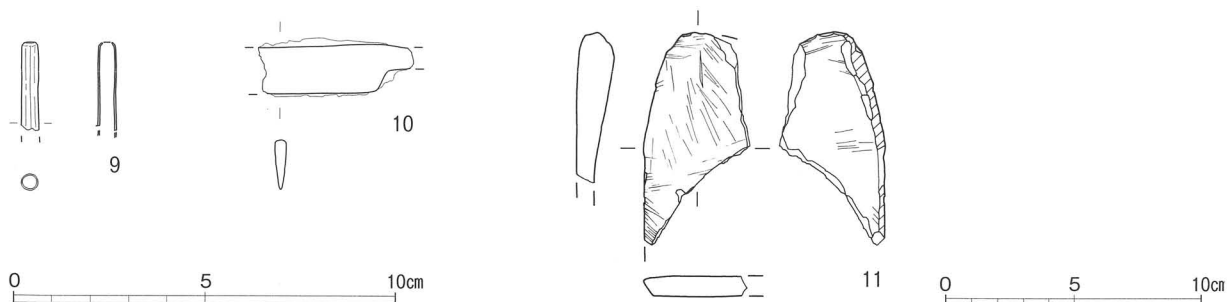
位置 B3区中央部、I12・I13グリッドにある。規模と平面形 4.82×5.15mのほぼ方形で、13号住居の南東部を壊している。主軸方向 N-30°-W 壁 壁高27cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居の中央部から西壁側の一部にかけて硬化している。ピット 6箇所。P1～4は支柱穴。P5は南壁寄りの中央部にあり、出入り口ピットと考えられる。P6はP5と南東壁の間にあり、通常「貯蔵穴」と呼称されるピットと考えられる。炉 長径94cm、短径57cmの楕円形で深さ6cm。覆土 暗褐色土主体の自然堆積層。遺物 弥生時代後期の土器を含みながら、古墳時代前期の遺物を主体として覆土下層から出土している。所見 出土遺物と遺構の形態から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第278図 7号住居跡出土遺物①



第 279 図 7号住居跡



第280図 7号住居跡出土遺物②

表131 7号住居跡出土遺物観察表

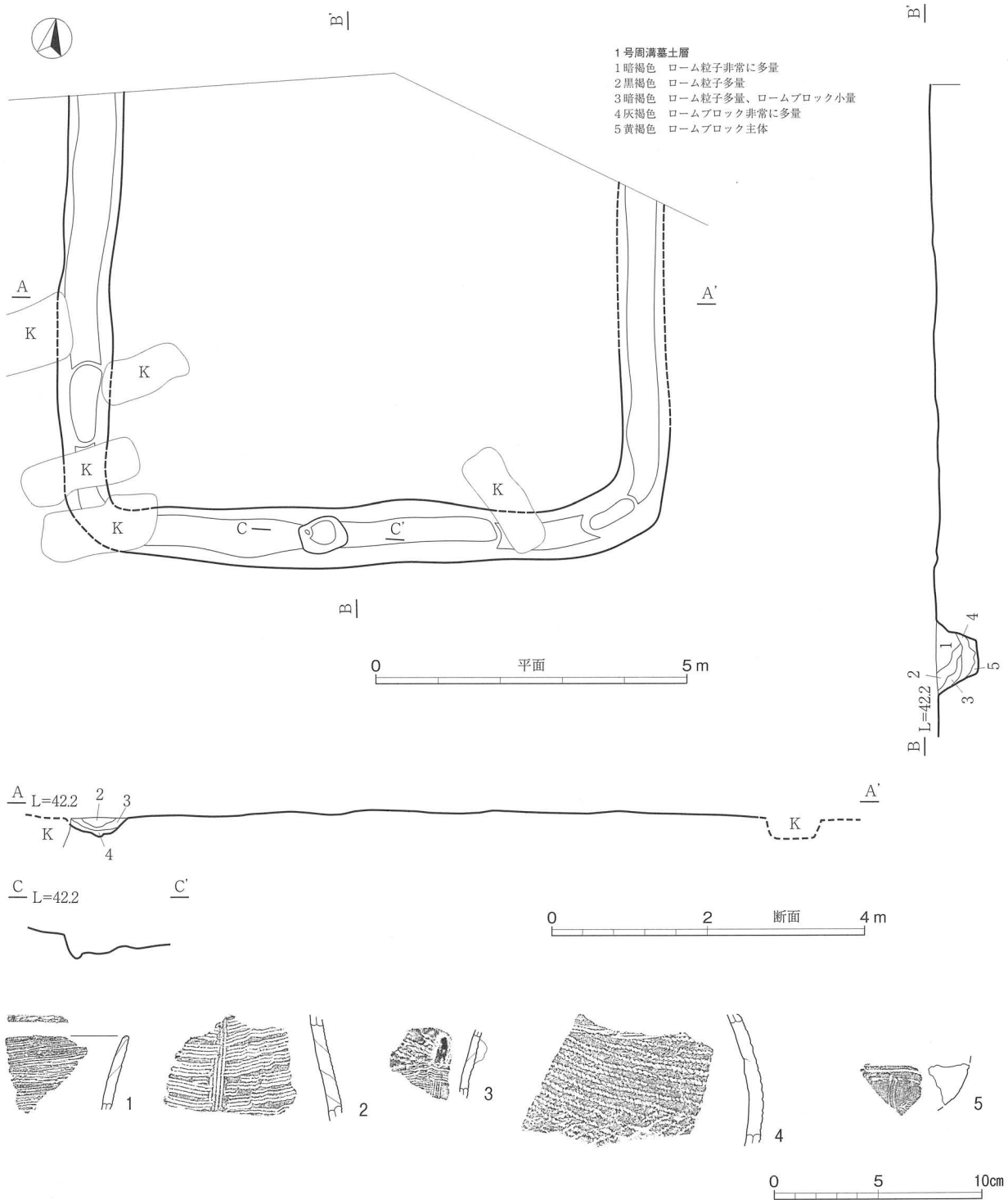
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器壺	16.9 — —	口頸部外面ハケメ後にヘラミガキ、口頸部内面ヘラミガキ。	石英、雲母、骨針	普通	橙色	口縁部内外面赤彩、土器台転用か
2	土師器甕	19.6 20.5 6.8	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ後にハケメ、底部外面ナデ、頸部内面ハケメ、胴部～底部内面ヘラナデ。	石英、チャート	普通	橙色	胴部上半外面にスス附着
3	土師器甕	16.8 — —	口縁部ヨコナデ、頸部～胴部外面ハケメ、頸部～胴部内面ヘラナデ。	石英、チャート、褐色粒	普通	にぶい黄橙色	胴部上半外面にスス附着
4	土師器甕	— — 8.4	胴部外面ヘラケズリ後にハケメだが磨滅、底部外面ナデ、胴部～底部内面ヘラナデ。	石英、チャート	普通	橙色	胴部上半外面にスス附着
5	土師器鉢	8.6 5.1 5.5	口縁部ヨコナデと指頭痕、頸部～底部外面ハケメ後にナデ、体部～底部内面ハケメ後にヘラミガキ。	石英、骨針	普通	橙色	
6	土師器鉢	— — 3.6	体部～底部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、体部～底部内面ヘラナデ。	石英、骨針	普通	にぶい黄橙色	体部外面赤彩
7	土師器鉢	8.6 3.8 2.2	口縁部ヨコナデ、体部～底部外面ヘラケズリ後に体部ヘラミガキ、体部～底部内面ヘラミガキ。	石英、チャート、褐色粒	普通	明黄褐色	
8	土師器高坏	— — 11.5	脚部3方向に透孔。脚部外面ハケメ後にヘラミガキ、脚部内面ヘラミガキ。	石英、雲母、骨針	普通	にぶい黄橙色	脚部外面赤彩
9	銅製品不明		残存長2.3cm、幅0.5cm、厚さ1mmの管状を呈する。				
10	鉄製品刀子		残存長4.1cm、幅1.5cm、厚さ2.5mm。				
11	石製品砥石		欠損品。3面使用。砥面には擦痕や線刻が顕著。石材：流紋岩。残存長8.4cm・残存幅4.1cm・残存厚1.45cm・重さ45.3g。				

2 周溝墓

1号周溝墓（第281図）

位置 調査区の北部、H 11 グリッドに所在する。**規模と平面形** 調査範囲や耕作痕による攪拌のため遺構の北・東側が不明瞭となる。9.80×[7.40以上]m。矩形。**主軸方向** N-10°-W **周溝** 溝の幅は72～100cmで、ほぼ一定する。深さは15～38cmで、北側が浅い。また、南溝中央・東隅、西溝南側は段状に窪み、接続する溝より10cmほど深くなる。**土坑** 1基。南溝中央に穿たれる。下層（4層）上面でも掘り込みが区別できており、土坑構築の時機が窺われる。長径72cm・短径56cm・溝からの深さ20cmで、一部ピツ

ト状を呈する（深さ4cm）。 覆土 上～中層に黒褐・暗褐色土、下層に多量のロームブロックを含む灰褐・黄褐色土が堆積する。土坑の掘り込み面を考慮すると、下層の4・5層は掘り方の可能性が導出されよう。 遺物 弥生時代後期の土器片が少量出土した。また、紡錘車が検出されている。 所見 所産時期は、根拠となる遺物がいずれも小片であることから、不明である。



第281図 1号周溝墓・出土遺物

表 132 1号周溝墓出土遺物観察表

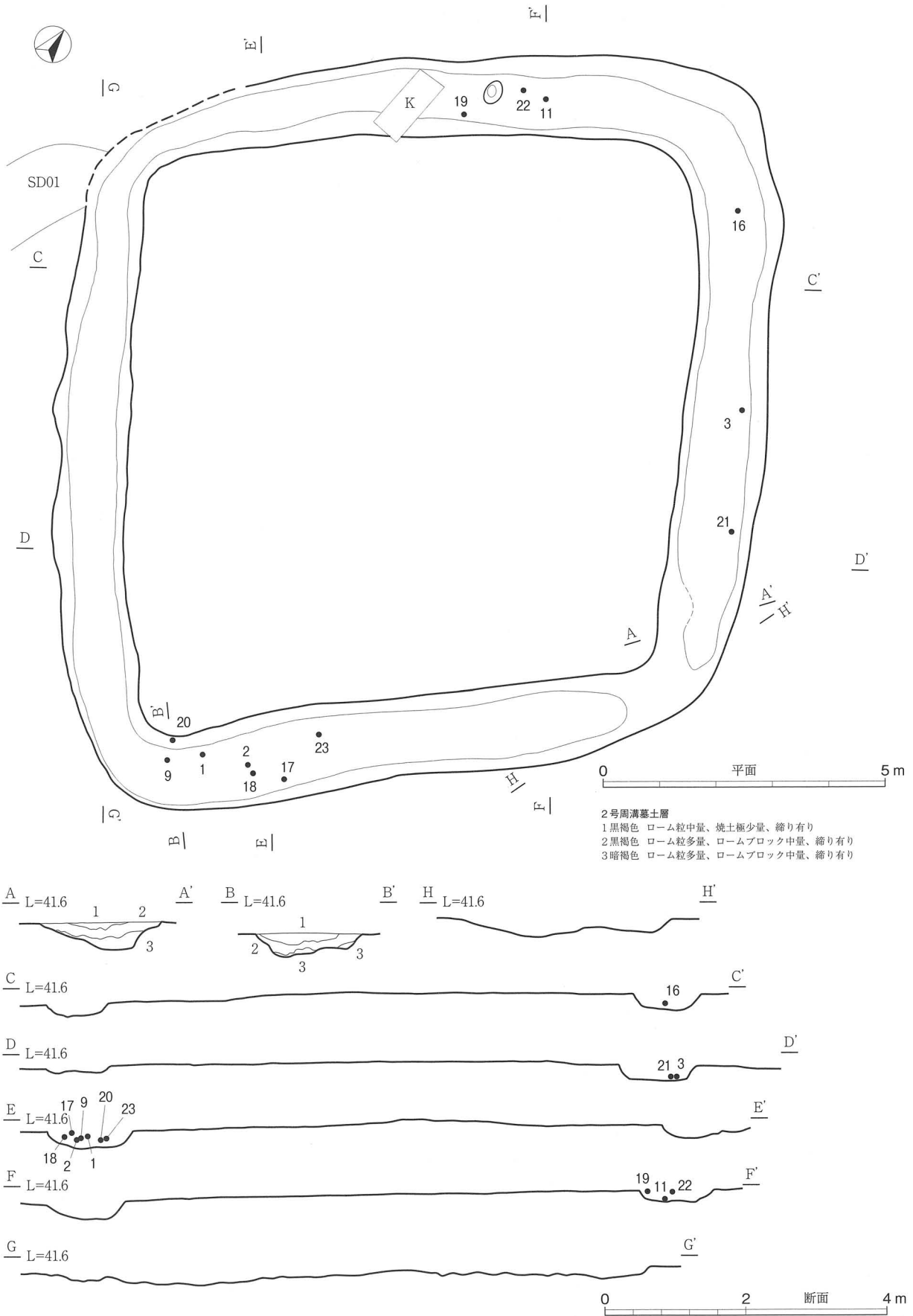
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	- - -	口唇部無節縄文(R)カを回転施文。口縁部4本歯の横位直線文ないし波状文(下→上、反時計回り)。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石	良好	明黄褐色	
2	弥生土器壺	- - -	頸部4本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は縦位のナデ。外面スス、内面まばらなヨゴレ付着。	石英、赤色粒	良好	外：灰黄色 内：明黄褐色	十王台式
3	弥生土器壺	- - -	口縁部附加条2種縄文(L+L)→断面半月形の貼付文。頸部5本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英	普通	浅黄色	
4	弥生土器壺	- - -	胴部軸縄不明の附加条縄文(R-S、L-Z:上→下)→頸部4～5本歯の横位直線文。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、多量の骨針・白色粒	普通	にぶい黄色	十王台式
5	土製品紡錘車		径-、高-、孔径-、重[7.13]g。外面ナデ調整、二本同時施文具による縦・横位の直線文。	石英、チャート、多量の白色粒	普通	にぶい黄色	

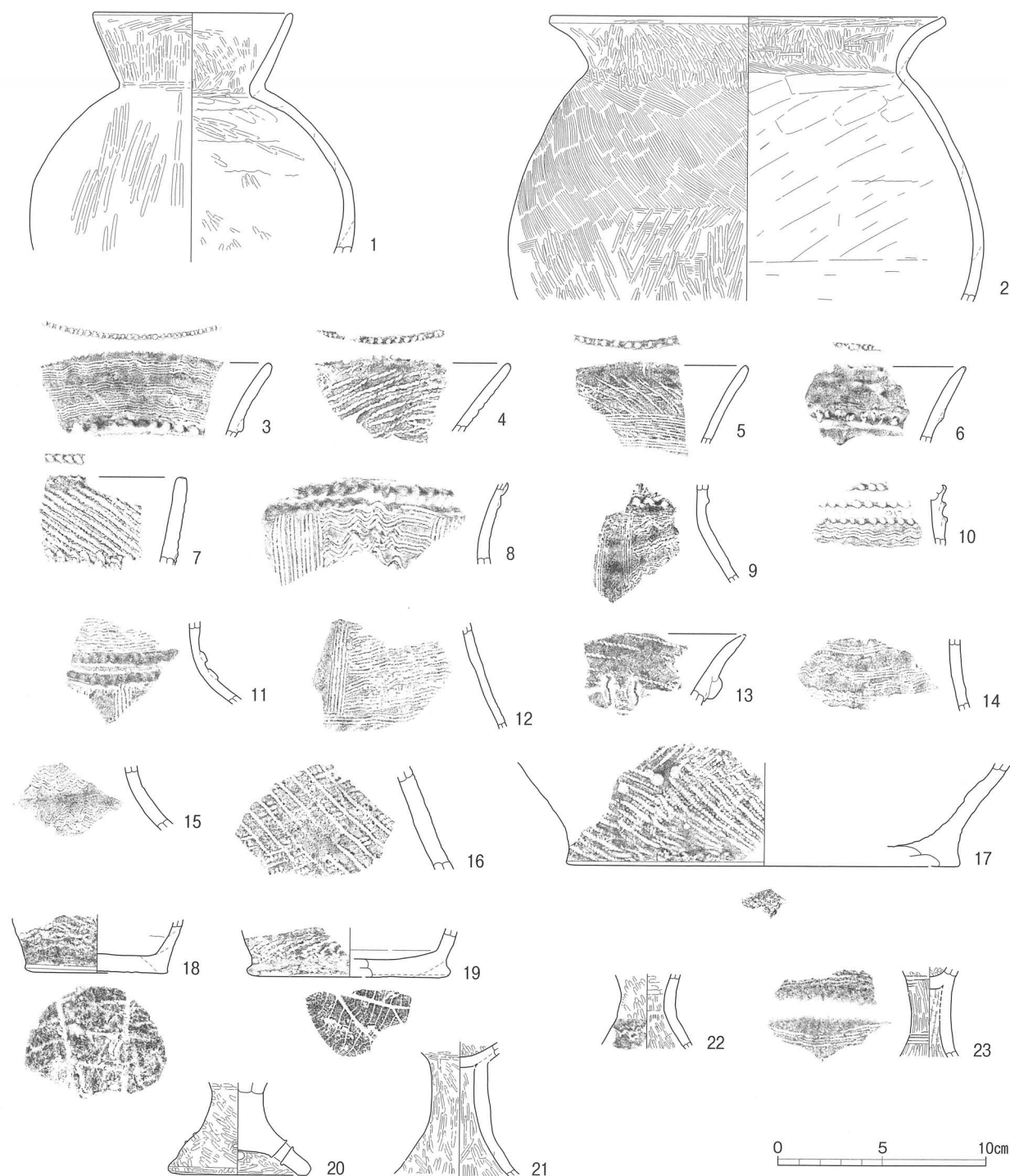
2号周溝墓(第282・283図)

位置 B区南部、E3～E4・D4グリッドにある。規模と平面形 方台部長南北方向10.4m、東西方向10.1mの僅かに菱形に歪んだ方形。周溝が11号住居と12号住居跡を壊して掘り込んでいる。主軸方向南北の周溝方向でN-7～11°-E 周溝 周溝幅は1.04～1.54m、深さは20～40cmで、南東コーナー部と西辺の中央部がやや浅くブリッジ状になっている。覆土 上層が暗褐色土下層が褐色土の自然堆積層である。遺物 周溝南西部の覆土中から土師器の壺と甕が、弥生の住居と重複する箇所覆土中層から下層にかけて弥生土器が出土している。所見 弥生時代後期の住居跡との切り合い関係と出土遺物から古墳時代の方形周溝墓と考えられる。

表 133 2号周溝墓出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器壺	(9.5) - -	口縁部～胴部外面ハケメ後にミガキ及び赤彩、口縁部内面ハケメ後にミガキ及び赤彩、胴部内面ナデ後に雑なミガキ。	石英、骨針	良好	赤褐色	
2	土師器甕	(18.6) - -	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面ミガキ、胴部外面ハケメ、頸部内面ハケメ、胴部内面ヘラケズリ後にヘラナデ。	石英、骨針	普通	橙色	胴部外面にスス付着
3	弥生土器壺	- -	口唇部ヘラキザミ。口縁部押捺隆帯、6本歯の横位波状文3条。	石英、雲母	普通	橙色	十王台式
4	弥生土器壺	- -	口唇部縄文原体によるキザミ。口縁部軸縄不明の附加条縄文(R-S、L-Z:上→下)。	石英、チャート	普通	にぶい黄褐色	十王台式
5	弥生土器壺	- -	口唇部ヘラキザミ。口縁部軸縄不明の附加条縄文(L-Z)→7～8本歯の横位直線文。	石英、骨針	普通	にぶい黄褐色	
6	弥生土器壺	- -	口唇部縄文原体によるキザミ。口縁部無文(横位のナデ)、縄文原体によるキザミ隆帯1条。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	
7	弥生土器壺	- -	口唇部縄文原体カによるキザミ。口縁部附加条1種縄文(RL+2Lカ)、縄文原体によるキザミ隆帯。	石英多量	普通	明赤褐色	二軒屋式カ
8	弥生土器壺	- -	頸部押捺隆帯→5本歯の縦位波状文→横位波状文。	石英、雲母、骨針	普通	にぶい褐色	十王台式
9	弥生土器壺	- -	頸部竹管状工具によるキザミ隆帯、隆帯下に5本歯の横位直線文→縦位直線文→横位波状文。	石英、チャート	普通	橙色	十王台式
10	弥生土器壺	- -	頸部丸棒状工具によるキザミ隆帯→3本歯の横位波状文(下→上)。	石英、角閃石	普通	黒褐色	十王台式
11	弥生土器壺	- -	頸部押捺隆帯2条→口縁部6本歯の横位波状文(下→上)、頸部縦位直線文→横位波状文。	雲母	普通	にぶい黄褐色	十王台式
12	弥生土器壺	- -	胴部附加条縄文カ→頸部横位区画波状文→頸部5本歯の縦位直線文→横位波状文(下→上)。	石英、雲母	普通	にぶい赤褐色	十王台式
13	弥生土器壺	- -	折り返し口縁。口縁部軸縄不明の附加条縄文(L-Z)→断面半月形の貼付文2個。	雲母、チャート	普通	にぶい黄褐色	





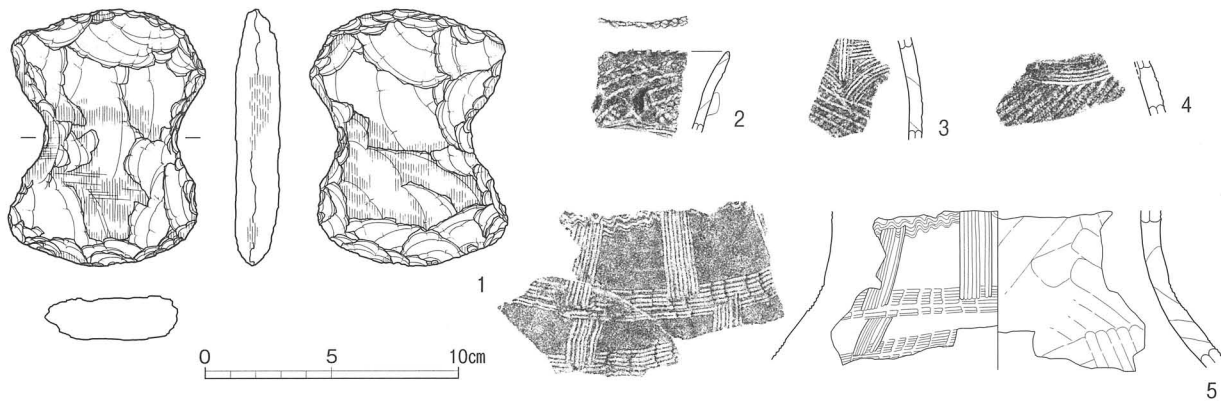
第 283 図 2号周溝墓出土遺物

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
14	弥生土器 壺	- -	頸部3本歯の横位波状文、簾状文（反時計回り）。	雲母、チャート	普通	にぶい黄褐色	
15	弥生土器 壺	- -	頸部振り幅の広い6本歯の横位波状文。	石英	普通	にぶい黄褐色	
16	弥生土器 壺	- -	胴部附加条2種縄文（L+L）。	石英、雲母	普通	明赤褐色	十王台式
17	弥生土器 壺	- (18.6)	胴部附加条1種縄文（RL+2Lカ）。底部布目痕。	石英、チャート、 骨針	普通	にぶい黄褐色	内面剥離

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
18	弥生土器壺	— (6.8)	胴部軸繩不明の附加条縄文(R・S)。底部木葉痕。	石英、雲母	普通	にぶい褐色	
19	弥生土器壺	— (9.6)	胴部軸繩不明の附加条縄文(R・Sカ)。底部木葉痕。	石英、骨針	普通	にぶい黄橙色	
20	弥生土器高坏	— — 6.7	脚部焼成前穿孔4ヶ所。内外面ナデ、雑なヘラミガキ。	石英、角閃石	普通	橙色	
21	弥生土器高坏	— —	脚部内外面ナデ、雑なヘラミガキ。	雲母、チャート	普通	にぶい黄褐色	
22	弥生土器高坏	— —	脚部3～4本歯の横位波状文、内外面ナデ、雑なヘラミガキ。	雲母、骨針	普通	明黄褐色	
23	弥生土器高坏	— —	脚部4本歯の横位波状文、ないし直線文、内外面ナデ、雑なヘラミガキ。	石英	普通	橙色	

第3節 遺構外出土遺物

弥生時代後期の遺構から打製石斧が出土した(1)。やや小型の分銅形で、縄文後・晩期に多い形態を呈する。当該期の痕跡はA区で後期初頭・前葉、B1区で晩期中葉の土器片が採取されているものの、本調査区では認められない。遺構や土器を伴わない活動痕跡を反映している可能性等が考えられよう。2～5は弥生土器である。2・3・5は十王台式、4は二軒屋式土器の壺と考えられる。5も二軒屋式系とみなせるが、縦位の短い櫛描直線文を単位をずらしながら施文するなど異質な特徴を有する。



第284図 遺構外出土遺物

表134 遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	石器 打製石斧		分銅形。基部周辺に磨耗痕が顕著。石材:ホルンフェルス。長さ10.05cm・幅7.68cm・厚さ1.75cm・重さ186.16g。				SI-11
2	弥生土器壺	— — —	口唇部縄文原体によるキザミ。口縁部附加条2種縄文(R+R)→4本歯以上の横位直線文、半月形の貼付文。内面は横位のナデ。外面スス附着。	石英、角閃石	普通	黄灰色	表土
3	弥生土器壺	— — —	胴部附加条2種縄文(L+Lカ)→頸胴界4～7本歯の下開き連弧文→頸部縦位直線文→横位波状文カ。内面は斜位のナデ。外面スス附着。	石英、金雲母	普通	黄灰色	表土
4	弥生土器壺	— — —	胴部附加条1種縄文(LR+2R)→頸胴界6～7本歯カの横位直線文ないし上開き連弧文。内面はナデ。	多量の石英・白色粒	普通	明赤褐色	表土 二軒屋式
5	弥生土器壺	— — —	頸部7本歯の等間隔止め廉状文(反時計回り)、波状文→縦位直線文。先端部管状の施文具を使用。内面は縦・斜位のナデ。外面被熱による赤色化。	多量の石英・白色粒	普通	外:にぶい黄褐色 内:明赤褐色	表土

第Ⅷ章 総括

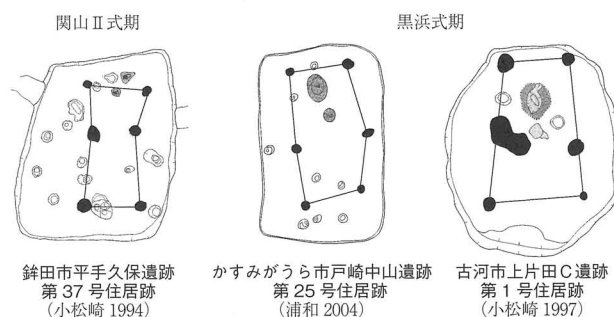
第1節 縄文時代

縄文時代の遺構として、前期中葉の竪穴住居跡1軒（B2区1号住居跡）、陥穴2基（A区1号陥穴・A区2号陥穴）が検出された。また、早期中葉から晩期中葉の縄文土器や石器が確認されている。ここでは本調査（埜谷遺跡A区・B1～3区）で得られた成果について、涸沼前川から分岐する同じ支谷沿いの埜谷遺跡C区（高野 2008）・長峰東遺跡（土生 2010）・長峰西遺跡（大賀 2010）と合わせて概観したい。なお、当該遺跡群は友部丘陵南東端に位置し、小支谷がA区、B・C区、長峰東遺跡、長峰西遺跡を分断する（第1図）。C区はB区と同じ丘陵の先端に位置し、1基の陥穴が報告されている（C区3号土坑）。長峰東遺跡では重複する陥穴（1a・1b号陥穴）の他に、調査区北側の埋没谷上層（基本層序4層）で関山Ⅱ式および黒浜式期の遺物包含層が調査された。長峰西遺跡は少量の縄文土器や石器が散見された程度である。

これらの遺跡から確認された縄文土器は、早期前・中葉、前期中・後・末葉、中期前・後葉、後期初頭・前葉、晩期中葉に相当する。検出点数が少ないので有意な傾向を読み取ることは難しいものの、本地域が用益活動に繰り返し供されてきたことを窺わせる。とくに、前期中葉の資料が多くを占め、各調査地点に分布している。この状況はB2区1号住居跡など近在の集落¹⁾から派生する活動域を反映したものと推察されよう。

B2区1号住居跡の所産時期は出土遺物から黒浜式古段階に比定された。住居跡の形態に着目すると、長方形の平面・長軸方向に偏る地床炉・6本の支柱穴・圍繞する壁柱穴など当該期の定型的な要素を備えており、土器型式と符号する²⁾。ただし、関東地方東部では住居の平面形や柱穴配置が弛緩する傾向にあり、平面が楕円形を呈する住居跡も多い（小松崎 1997）。本事例は前期初頭から認められる系統だが、茨城県域では前期中葉関山Ⅱ式期ないし黒浜式期古段階から遅れて散見されるようになる（第285図）。壁周溝の非受容など異なる遷移を有するものの、関東地方西部からの影響を検証する必要がある³⁾。

陥穴はA区北側、C区、長峰東遺跡の5基が検出され、いずれも単体で設営されている。形態は、Ⅰ：平面が楕円形・短軸の断面がU字状（A区1号陥穴、C区3号土坑、長峰東遺跡1a・1b号陥穴）、Ⅱ：平面が長楕円形・短軸の断面がV字状（A区2号陥穴）の2種が認められ、長峰東遺跡1b号陥穴の底面には小穴が見受けられた。A区1号陥穴は遺物の出土状況から前期中葉関山Ⅱ式期に近い所産時期が予想される。茨城県下の陥穴を集成した武田石高遺跡の報告書（鈴木 1998）では、形態Ⅰ・Ⅱ共に縄文前期以前に想定しており⁴⁾、本事例と整合する。当該期に比定されるB2区1号住居跡との関係は明瞭でない。



第285図 茨城県における縄文前期前半の6本支柱穴住居跡

注 1) B2区1号住居跡は竪穴の深度が浅く、残存状況が良くない。加えて、同じB2区に集中するピット（第7図）などを考慮すると、削平されてしまった住居跡の存在が予想される。

2) 笹森健一氏（笹森 1981～1982）は関東地方西部における関山Ⅰ式～黒浜式の住居跡について、平面長楕円形・6本支柱穴の系統を示した。

3) 関山Ⅱ式期における定形的な6本支柱穴住居跡の事例は少数に止まる。また、前期中葉の事例が南小割遺跡第79号住居跡（中村ほか 1998）等で散見されるものの、関山Ⅰ～Ⅱ式期の様相を鑑みると本事例に直接系統するものではないようである。

4) 武田石高遺跡における分類では、ⅠがC類および底面に柱穴を有するC-p類に相当する。Ⅱは遺構上半の削平を鑑みA2類ないしB2類に比定されるが、陥穴の配置状況から縄文前期以前のA2類に帰属するものと見做した。

第2節 弥生時代

今回の調査で弥生時代の住居跡は69軒が確認された。平成19年度に調査されたC区(高野2008)でも10軒が確認されており、それらを含めると79軒になる。いずれも後期後半の十王台式期に比定され、笠間市域では最も住居軒数が多い集落となった。また、谷地を挟んだ西側の丘陵上には同時期の住居跡11軒が確認された長峰東遺跡(土生2010)が所在する。本節では、長峰東遺跡を含めた既往の調査成果を踏まえ、埴谷遺跡における弥生土器の編年と集落の変遷について検討していきたい。

(1) 埴谷遺跡出土土器の変遷

十王台式土器は現在、鈴木素行氏により那珂川流域を中心に分布する型式群(薬王院式~武田式石高段階)と久慈川流域を中心に分布する型式群(富士山式~小祝式梶巾段階新期)に大別されている(鈴木素2010)。本遺跡の位置する涸沼川流域の十王台式土器は茨城町大畑遺跡(長谷川1998)、矢倉遺跡(飯島1998)、大戸下郷遺跡(近藤2004、綿引・松本2006)などからなる大戸遺跡群の出土例から基本的には那珂川・久慈川流域系統の土器によって構成されていることが明らかになっている。本遺跡は涸沼川の支流である涸沼前川の左岸に位置しており、大戸遺跡群よりも約9km西に位置するものの、十王台式土器については、概ね同様な様相を呈している。ただし、典型的な那珂川・久慈川流域の十王台式土器から逸脱する資料も多いことから、本遺跡における十王台式土器の特徴を抽出してみたい。編年は鈴木素行氏の研究(鈴木素1998・2001・2010)を参考にしながら、その特徴を確認する。第286図では那珂川系の十王台式土器(1・3・4・11~13)、久慈川系の十王台式土器(2・5・6・14)を中心に掲載した。

1期 今回の調査区では確認されていないが、C区1・9号住居跡で該期の土器が出土している。薬王院式に並行する。

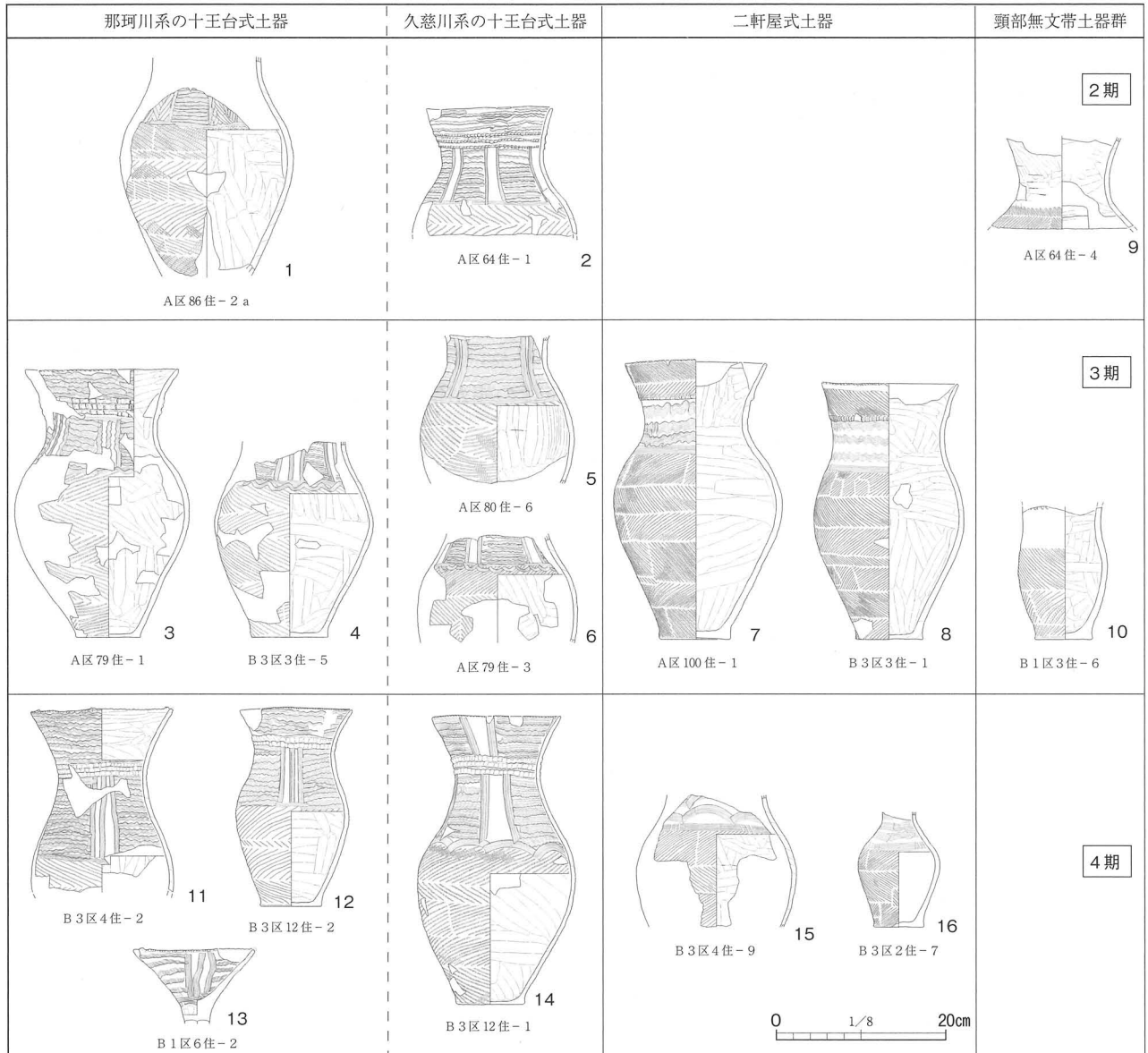
2期(1・2) A区37・64・74・85・86・98号住居跡、B2区4号住居跡、B3区11号住居跡、C区4号住居跡、1号竪穴が該当する。口縁部は幅が狭く、無文ないし縄文が施文されることが多い。隆帯は厚く、櫛歯の本数は3~4本と少ない傾向にある。頸胴界の区画文は直線文である。大畑式、富士山式に並行する。文様等から那珂川系・久慈川系を区分したが、区分は明瞭でない個体も多い。

3期(3~9) A区16・18・27・29・39・44・49・52・58・66・77・79・80・100号住居跡、B1区1~3・6・7号住居跡、B3区3・5・8号住居跡、C区3号住居跡・1号竪穴状遺構、長峰東遺跡2・9号住居跡が該当する。口縁部は幅が拡張され、櫛描文が施文される。また、頸胴界の区画には直線文と波状文ないし、上開きの連弧文が組み合わせられたものが目立つ。武田式西埴段階古期、小祝式糠塚段階に並行する。4期との区分は明瞭でなく、一部は4期に含まれる可能性もある。

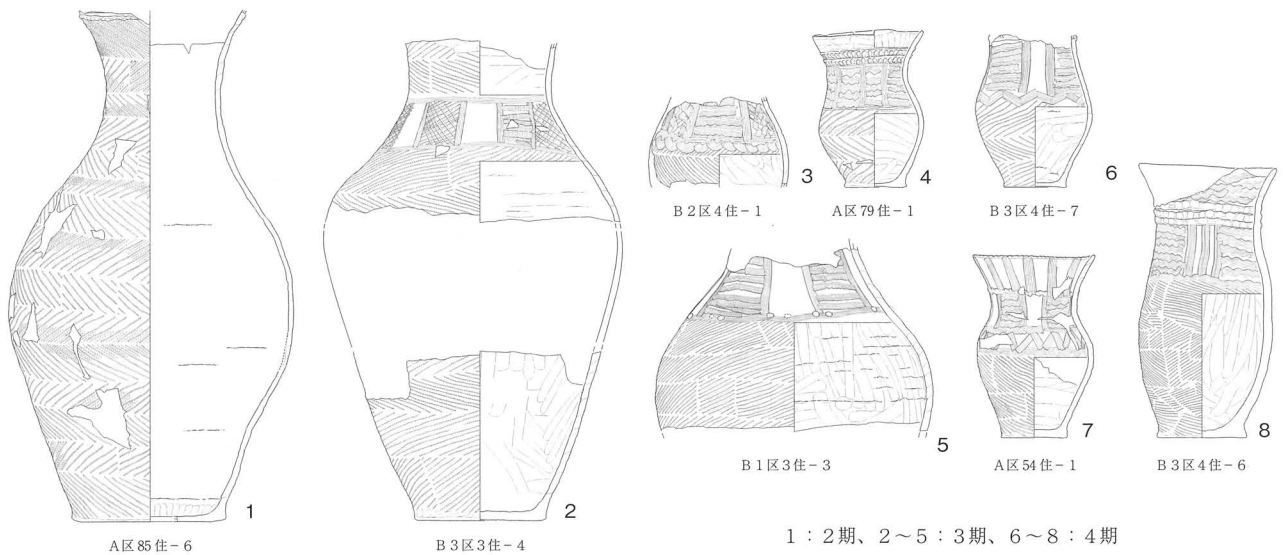
4期(10~16) A区48・54号住居跡、B3区2・4・6・12号住居跡、C区2・10号住居跡、長峰東遺跡1・4・6・7号住居跡などが主な住居跡である。小祝式において頸胴界の区画文が下開きの連弧文となることを指標とする。武田式西埴段階新期、小祝式梶巾段階古期に並行する。

5期 本遺跡では非常に少なく、小片でしか確認できない。A区57号住居跡、B1区5号住居跡、長峰東遺跡12号住居跡などが該当する。武田式において頸部の隆帯が帯状刺突文に置き換わることを指標とする。長峰東遺跡12号住居跡ではS字甕B類と十王台式土器の共伴が確認されており、本時期には確実に土師器との共伴が確認できる。武田式石高段階、小祝式梶巾段階新期に並行する。

6期 古墳時代前期の土師器が主体的に出土する遺構を対象とした。古墳時代の土師器編年では前期後半の様相を呈する。A区1・4・5・8・23号住居跡、B3区7号住居跡、2号周溝墓が該当する。長峰東遺



第 286 図 弥生土器の変遷図（2～4期を抜粋）



第 287 図 典型的な十王台式土器から外れる個体

跡では3・5・10・11・13・14・15号住居跡が本時期に該当するが、このうち、3・5号住居跡は前期前半に帰属する。弥生土器も小片が伴うが多くは混入と考えられる。

(2) 埴谷遺跡出土の十王台式土器

第287図では典型的な那珂川・久慈川流域の十王台式から外れる個体を抽出した。これらを概観すると製作技法において附加1条を典型とする附加条1種縄文の使用(1・4・7)、多量の石英・長石を含む胎土、底部の木葉痕、粘土を多量に使い、底部付近を厚く仕上げるなどの諸特徴がみられる。これらはいずれも二軒屋式土器の特徴であり、本遺跡の十王台式土器は那珂川・久慈川流域の土器をベースとしながらも二軒屋式土器の製作技法を取り入れて造られていることが確認できる。文様要素では口縁部や頸胴界に櫛描山形文を施文することが目立つことがあげられる(7など)。これらは潤沼川中流域の遺跡群でも数点しか出土していない個体である。また、頸胴界の区画文に直線と一単位の幅が狭い上開きの連弧文を採用する個体(4)も目立つ。これらは在地の十王台式土器の指標となる¹⁾可能性があり、今後、類例の増加とともに型式学的検討が望まれる。

なお、胎土に金雲母を含むものは久慈川流域の製品であることが指摘されている(鈴木素1998)。A区27号住居跡4(第28図)は胎土に金雲母とともに多量の石英・長石を含み、頸部の縦位直線文は3条一単位で那珂川流域の特徴を有する。A区64号住居跡1(第286図2)は頸部文様は久慈川系統ながら、胎土に金雲母を含まない。このように本遺跡では金雲母を含む胎土と久慈川流域における十王台式土器の型式学的特徴が対応しない事例が多い。したがって、金雲母を含む個体をもって久慈川流域産の十王台式土器と判断することはできず、金雲母の供給地を本遺跡周辺に求めることも視野に入れて考える必要がある。

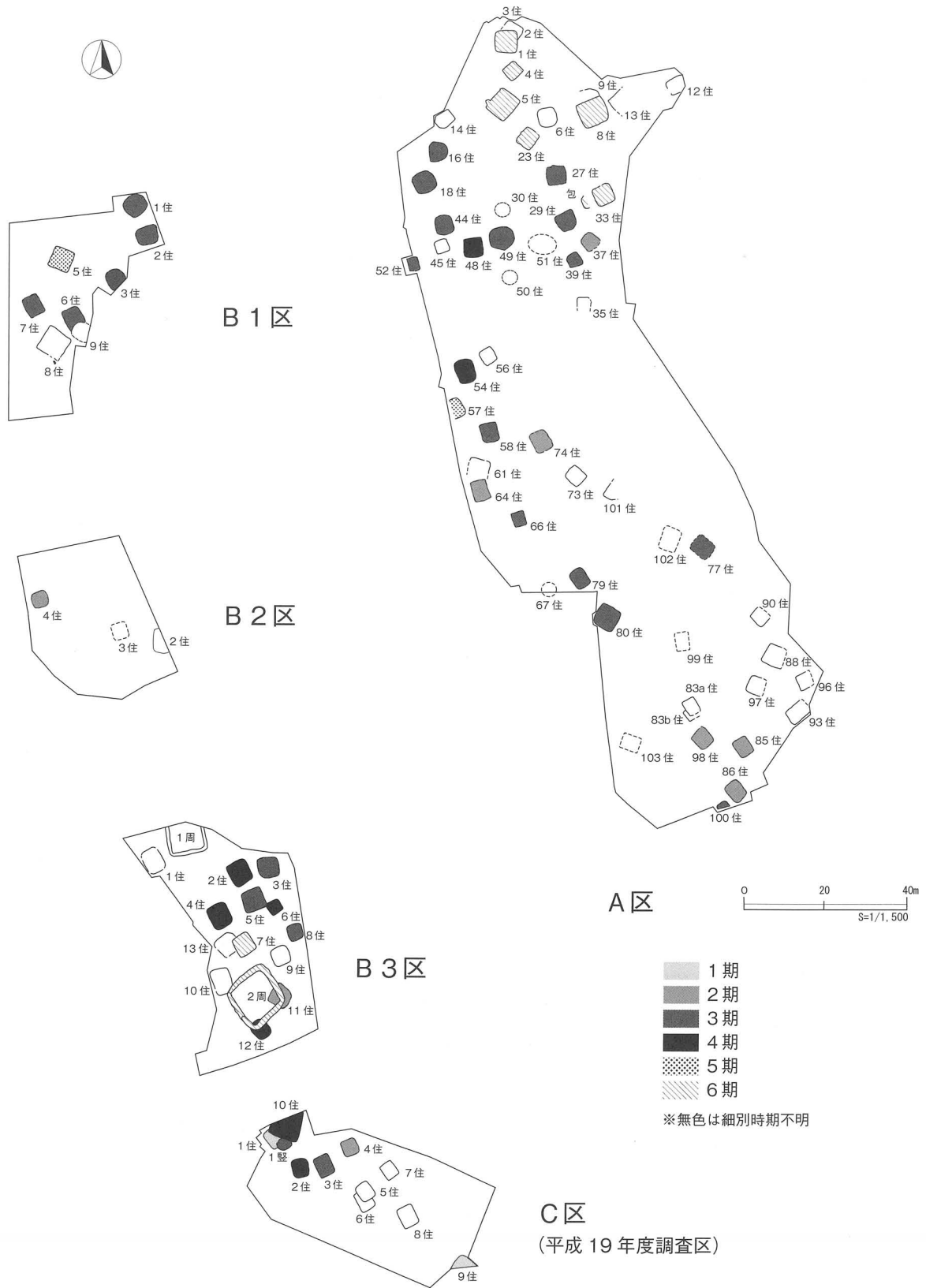
(3) いわゆる二軒屋式土器について

「二軒屋式土器」は近年、鈴木正博氏による再検討(鈴木正1999・2008)の途上にあり、型式名として使用することは適切でないかもしれないが、前項で触れた諸特徴に加え、8～10本歯の櫛描波状文・連弧文が施文されることなどから十王台式土器とは明確に区別されるため、それらを指標として抽出した。

本遺跡出土の二軒屋式土器はA区100号住居跡(第286図7)、B3区3号住居跡(8)・4号住居跡(15)などで良好な個体が出土している。二軒屋式土器が確実に伴うのは3期からであるが、小片を含むと2～4期に伴出することが確認できた。十王台式土器の編年に対応する形で変遷を見てみると、文様は3期までは頸部波状文、頸胴界の区画文が直線文であることが多いのに対し、4期では頸部文様は下開きの連弧文、頸胴界の区画は廉状文であることが多い。埴谷遺跡出土の二軒屋式土器は出土弥生土器全体の約12%を占め、大戸遺跡群と比較すると、二軒屋式土器の組成比率が高い傾向にある。さらに、本遺跡の南方約600mに位置する友部町三本松遺跡(板野ほか2003)および、それ以西の遺跡では二軒屋式土器が主体となることから、本遺跡周辺が十王台式土器の主体的な分布圏の西限と想定される。

(4) その他の外来系土器・特殊な遺物

十王台式・二軒屋式以外の土器で最も目立つのは頸部に無文帯を持つ土器群である。これらの土器群は現在数種類の型式名が与えられており、二軒屋式土器の中にも無文帯をもつものが存在するため、小片から型式を特定することは困難である。したがって頸部に無文帯を持つ土器群として一括した。出土弥生土器全体に占める比率は約1%である。第286図9は原体の異なる2種類の単節縄文を横位施文し、羽状構成をなしている。10は頸部に刺突文をめぐらし、9と同様羽状構成をなす。原体は附加2条の附加条1種縄文である。いずれも潤沼川以南に系譜が求められる土器群である。その他、小片ながら回転結節縄文を施文する南関東系の土器がA区85号住居跡から1点(第72図16)、B1区の遺構外から1点(第235図5)、樽式土器の



第288図 弥生集落の変遷

模倣と考えられる土器が同じくB1区遺構外から1点(第235図2)出土している。土器以外の遺物では管玉2点(A区66住、B3区4住)鉄斧1点(A区83a住)が出土している。

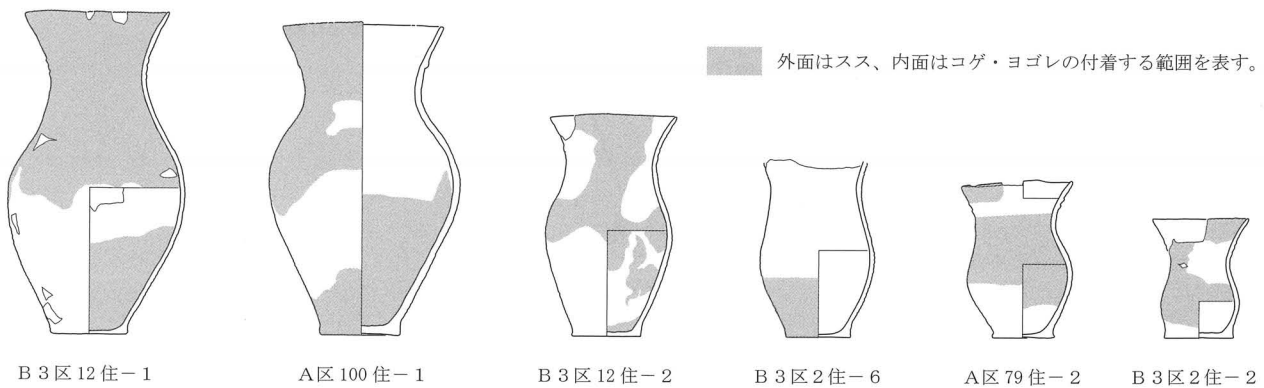
(5) 集落の変遷

本遺跡では弥生時代後期以前の土器が確認できないことから、集落の継続期間は弥生後期後半から古墳時代前期後半までと推測する。以下では時期別に集落の変遷を概観する(第289図)。なお、B1~C区とA区の間は谷地となっており、谷地を「n」字状にとりまく舌状台地上に集落が立地する。

- 1期 住居はC区でのみ確認され、集落の開始期は舌状台地の先端部に住居が造られる。また、住居軒数も2~3軒の小規模な集落であったと考えられる。
- 2期 居住域の中心はA区南端部へと移行し、A区の中央部などにも住居が散在する。1期に比べやや住居軒数が増えるものの、10軒を超えることはない想定される。
- 3期 住居跡が急増する時期である。A区北端部からB1区にかけてこの時期の住居が集中する。B3区でもややまとまる。谷地を挟んだ西側の丘陵上でも集落(長峰東遺跡)の造営が開始される。
- 4期 分布はB3区~C区とA区北半~B1区、長峰東遺跡にまとまりが見られる。集落の中心が西ないし、北西方向へと移行していく様相が捉えられる。
- 5期 この時期の住居は極端に少なくなるが、5期に相当する土器が本遺跡でほとんど確認できないことから、4期とした土器がこの時期まで残る可能性もある。A・B1区、長峰東遺跡に住居が散在する。
- 6期 住居軒数は再び増加傾向にあり、A区の北端部や長峰東遺跡でまとまって住居が造られる。B3区では弥生時代の13号住居跡を壊して7号住居跡が造られ、4期の12号住居跡を壊して2号周溝墓が造成される。土器とともに住居構造・墓制を含めた古墳時代への移行が完了する時期と考えられる。

以上、埴谷遺跡における弥生時代後期の土器と集落の変遷を中心に概観してきたが、4期において確実な古墳時代の土師器と弥生土器の共伴が確認できなかったものの、この時期に一部住居の形態が正方形を呈し、明確な貼床をもつ住居跡(B1区8号住居跡など)が出現する。このことから、4期は古墳時代への移行を示す一つの画期と言えよう。埴谷遺跡の所在する小原地区では近年、三本松遺跡、小原遺跡(吉田ほか2005)、長峰東遺跡、長峰西遺跡(大賀ほか2010)などで十王台式期の集落が相次いで報告されており、従来不明であった該期の集落・土器様相が急速に判明しつつある。本遺跡では調査範囲外にも住居の分布が濃密であることが予想され、推定住居軒数は100軒を超すとみられる。当該期の集落としては大洗町髭釜遺跡や土浦市原田遺跡群に次いで茨城県内でも屈指の規模を有する。今後検討すべき課題は多いが、埴谷遺跡の調査成果は涸沼川流域における弥生・古墳時代研究に大きく寄与するものと評価できよう。

注 1) 鈴木正博氏のご教授による。



第289図 付図・弥生土器のスス・コゲ

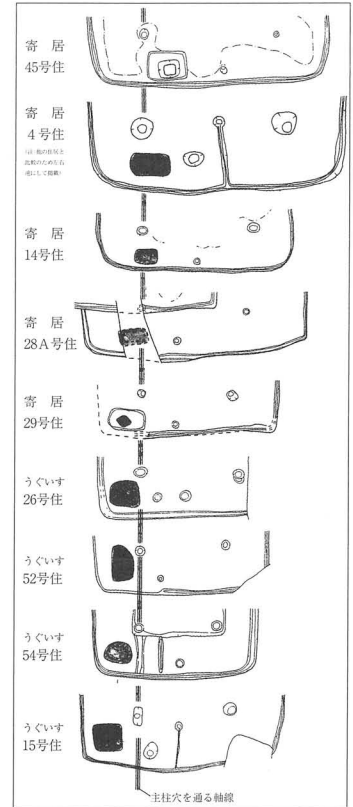
第3節 古墳時代

埜谷遺跡の古墳時代の住居跡は、前期が11軒、後期が4軒である。前期の住居跡は、A区に9軒、B区に2軒で、A区北部には7軒が集中しており、遺構の残存状態がよく遺物の量も多い。

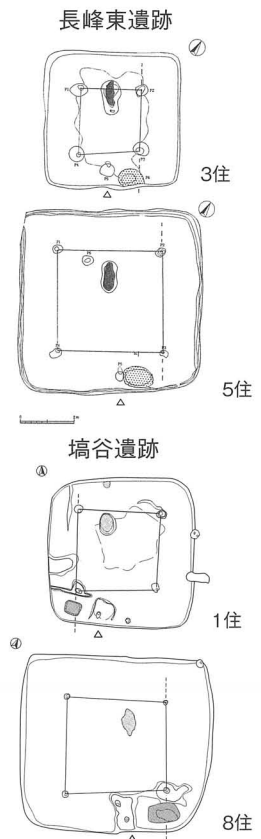
A区北部の住居は、大形で4本支柱穴を持つものが3軒、やや小形で支柱穴をもたないものが4軒ある。内部の施設は大形・小形とも炉、出入り口ピット、貯蔵穴を共通して持っており、小形の堅穴も独立した生活の単位と考えられる。大形の5号住居と小形の4号住居は出土遺物から見ると壺や器台に共通した形態的特徴があり、建物の配置や主軸方向も関連性が見られ、同時期に併存していたものと思われる。大形住居の1・5・8号住居の出土遺物には、有段の鉢形や直口縁の壺があり、壺・甕は胴部中に最大径があり丸く膨らむ形状で、柑の底部は小さく窪むといった特徴がある。1号住居には口縁端部を面取りする小形の甕や器台があり、8号住居には半球形の大形の鉢があるなど違う面もあるが、共通する器種構成から大きく捉えると、各住居は前期の後半代の遺物を主体としていると考えられる。

古墳時代前期の住居の新旧を住居の形態的な特徴から捉える方法として、貯蔵穴の位置についての視点がある（第290図）。県南部の土浦市にある寄居・うぐいす平遺跡の古墳時代前期の住居群には、前期の古い時期の住居（寄45号住）から新しい時期（う15住）までの28軒の住居がある。古い時期の住居の場合、支柱穴を縦に結ぶ方向の線を基準として貯蔵穴の位置を見ると貯蔵穴は線の内側に位置している。新しい時期の住居の貯蔵穴は住居コーナー寄りであり、寄居14住や寄居28A住などその中間の位置にあるものもある。時期を追って並べた図が第290図で、貯蔵穴は住居の内側からコーナーに向かって移動しているように見える。埜谷遺跡周辺で同じ状況が見られるかを見てみると、埜谷遺跡に隣接する長峰東遺跡の3号・5号住居跡は、元屋敷系の大形の高坏、裾広がりの小形開脚高坏を持ち、古墳時代前期前半代のものと考えられる。これらの住居の貯蔵穴の位置は住居の柱穴の縦方向を結ぶ線の内側に位置する。これに対し、埜谷遺跡の8号住居跡の貯蔵穴は住居の柱穴を結ぶ線上かやや内側、1号住居は柱穴線上かそのやや外側の位置にある。出土遺物が示す年代は、住居が機能していた期間の後半～終末頃に使われていた土器群であろうから出土遺物から見ると前期の後半に廃絶していると考えられるが、貯蔵穴の位置から見た集落の始まりの時期は、出土遺物から見る時期よりも古い時期となるものと思われる。

古墳時代後期の住居跡は4軒あり、A区北部に1軒、南部に3軒ある。出土遺物は、土師器では坏、鉢、甕、壺があり、石製品では不定形の大形



第290図 「貯蔵穴の移動」より



第291図 長峰東・埜谷遺跡住居の比較

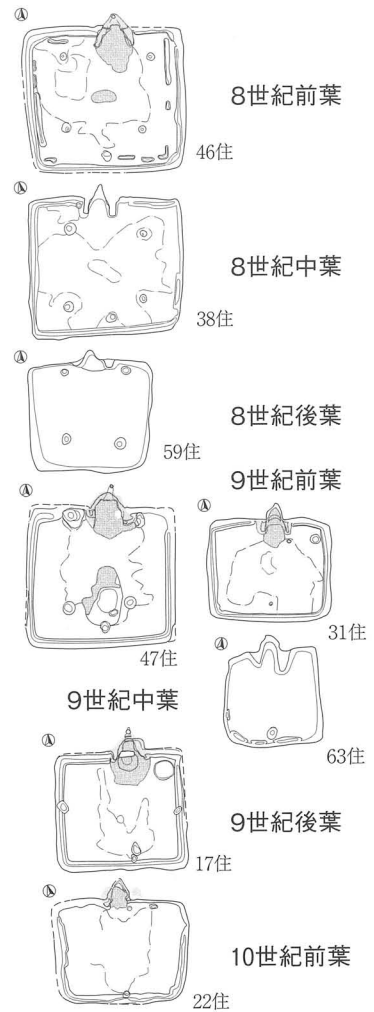
砥石や板状砥石、軽石がある。土師器坏は、15号住居のように無赤彩のものを主体に赤彩品が少量ある組み合わせや92・94号住居のように体部内外面にミガキを入れたものが主体のものもある。丸底で口縁部が内湾形態の土師器坏に黒色処理のものはないので、6世紀中頃から後半を主体とした時期のものと思われる。

第4節 奈良・平安時代

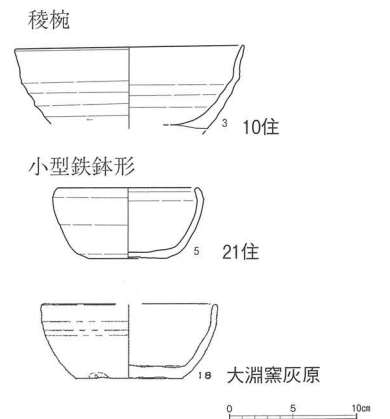
埴谷遺跡A区からは、奈良・平安時代の竪穴住居跡が33軒、B区からは2軒、掘立柱建物跡はA区から7棟、B区からは1棟確認されている。A区の竪穴住居跡を出土遺物から見ると、8世紀の前葉頃に廃絶しているものが1軒(46住)、8世紀中葉頃の廃絶が5軒(26・38・55・76・84住)、8世紀後半～後葉頃のものが6軒(10・11・24・42・59・82住)、9世紀前葉頃のものが8軒(7・21・31・47・69・70・71・78住)、9世紀中葉頃のものが4軒(40・63・65・75住)、9世紀後葉頃のものが6軒(17・41・43・53・60・95住)、10世紀前葉頃のものが3軒(19・22・95住)である。掘立柱建物は、7号掘立出土遺物が9世紀前葉頃のもので、3号掘立は、9世紀後葉頃の住居に壊されており、7号掘立は10世紀前葉頃の住居に壊されていることなどから、掘立柱建物は少なくとも8世紀後葉～9世紀代の中では竪穴住居とともに存在していたものと見られる。集落の変遷をまとめると、8世紀の前半に最大5軒程度から始まった集落は、8世紀中葉～後葉と次第に数を増し、掘立柱建物が建てられ、9世紀代には竪穴住居跡10軒を超える集落に成長したものと見られる。集落は9世紀をピークに10世紀前葉ころまで継続し、その後集落は断絶したと思われる。

集落を構成する竪穴住居跡の平面形状は、8世紀前半代は1辺5m前後のやや大型で4本主柱穴を持つものが主体で、8世紀後半代はやや小形化傾向が見られるとともに、4本主柱穴の柱穴の位置に変化が見られる。カマド側2本が北壁際に寄った位置に開くもの(59・47住)、さらに入出口側の主柱2本も壁直下に開くもの(75住)が見られる。その後、9世紀代には床上に主柱穴を持たない小形化した住居が主体になる。出入り口ピットは弥生時代後期・古墳時代から奈良時代、9世紀になっても傾斜する一本柱を設置した形式のものが続くが、9世紀後半代に床上には出入り口ピットの痕跡がなくなり、出入り口の位置が不明になるものもある。掘立柱建物については、集落の中心域に3群に分かれて建てられているが、それらの先後関係や竪穴住居の集落との関係は不明な点がある。

出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品、石製品、金属製品がある。土器類は、須恵器の供膳具が多く、つぎに土師器の甕



第292図 竪穴住居の変化



第293図 特殊な器形の須恵器

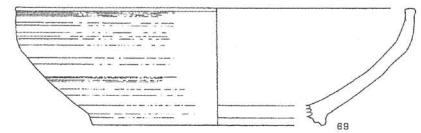
や須恵器の甑・甕が多い。土師器の供膳具は8世紀後半から9世紀前半段階で少量見られ、9世紀後半以降須恵器の供膳具と数量が逆転する。灰釉陶器は1点長頸瓶が出土しているのみで、非常に少ない。土製品は円柱状のカマド支脚が8世紀代の住居から5点出土している。土器祭祀に使われたと思われる手捏土器は、8世紀前葉の46号住居から2点出土している。石製品は、砥石が6点あり、小形定形品は凝灰岩製で、大形定形のものや大形で不定形ものは砂岩、安山岩、雲母片岩製と多様な種類がある。鉄製品も少なく、70号住居から刀子が1点出土している。

最も数多く出土している須恵器の中には、8世紀中葉頃の38号住居の酸化焰焼成の盤、9世紀前葉頃の7号住居の焼き歪みの激しい坏、9世紀中葉頃の40号住居の焼き歪んだ盤といった、窯場近くで得られる不良品の継続的利用が見られる。また、8世紀中葉頃の26号住居の須恵器坏底部の「一」「井」のヘラ記号、9世紀前葉頃の7号住居の「*」のヘラ記号、9世紀中葉頃の40号住居の須恵器坏・盤底部の「一」「大」のヘラ記号というように、ヘラ記号を多用した窯場製品の使用も、8世紀後半から9世紀中葉にかけて継続的に行っている点に特徴が見られる。ほとんどの須恵器は在地の製品であるが、8世紀中葉頃の26号住居からは湖西産と見られる壺形の須恵器が出土している。

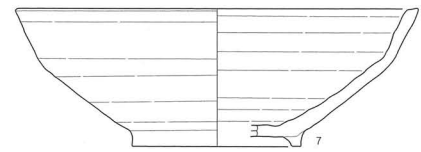
特殊な器形の須恵器では、10号住居跡出土の大型の稜塊や、21号住居出土の小形鉄鉢形坏、60号住居出土の大形高台付鉢がある。21号住居の坏は、笠間市大淵窯のA地点1号窯の灰原出土品にやや似た器形のものがある。60号住居の大形高台付鉢は、須恵器生産窯で類似例は今のところ見られないが、同じ笠間市内の平安時代の寺崎台地遺跡から、似た器形のものが出土している。現在調査中の小原地区の遺跡からも類似品が少数確認されており、分布の地域的な偏りは、笠間市域がこの鉢型須恵器の生産地であることを推測させる。

土師器の供膳具では、8世紀後半の31号住居の6の高台付坏や8世紀後葉頃の47号住居の20・21の高台付坏が非常に特徴のある土器である。これらは土器制作の前半段階に、須恵器と同じ器形イメージのもとロクロを使用して成形され、後半段階に土師器生産技術である内面黒色処理とミガキを施し、酸化焰焼成で仕上げられている。この須恵器の器形に近いロクロ使用内黒土師器は、他に図示できない細片が他の住居でも見られ、多くはないが一定量流通しているようである。

墨書土器は、9世紀後葉頃に見られ、大形高台付鉢須恵器を出土した60号住居から、土師器坏底部に「□



寺崎台地遺跡1号住



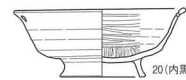
60住 0 5 10cm

第294図 須恵器大形高台付鉢

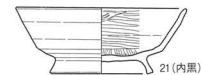
土師器



6(内黒) 31住



20(内黒) 47住



21(内黒)

0 5 10cm

第295図 8世紀の土師器供膳具



第296図 「□山寺」墨書 (60住)

山寺」と書かれた寺院名を示すと思われるものが出土している。

第5節 中世

埜谷遺跡の中世の遺構は、A区の中央を南北に走る溝、溝と直交して東西方向に延びる道路状遺構、A区の中央部に分布する地下式坑である。溝は、南北で規模が違い、北側の溝は幅・深さとも区画の役割程度の溝で、南側の溝は底部が平坦で幅も広く堀のような防御の溝と見られる。南側の規模の大きい溝は同じ形状の溝を少しずらして2回掘削している。道路状遺構は、南北方向に延びる台地東斜面を切り通しの溝状に掘削し、道路として使用している。南北方向の溝と交差する部分で、溝が止まっており、道路面はさらに西に向かって延びていたものと思われ、道路と溝は一連の時期のものとして推測される。道路状遺構や溝からは古瀬戸の深皿や常滑広口壺破片が出土しており、中世後半代でも15世紀前後頃の遺構と考えられる。

地下式坑は、全部で7基あり、分布は中央部道路状遺構の北側に2基、道路状遺構の南側に5基ある。北側の1基は、主室が竪坑から見て、縦長の平面形状で、竪坑底面から緩やかなスロープを持っている。南側にも縦長平面の地下式坑があり、この覆土中から古瀬戸平坑が出土している。15世紀頃の遺構になるものと思われる。

参考文献

- 飯島一生 1998「矢倉遺跡」『北関東自動車道（友部～水戸）建設地内埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ 財団法人茨城県教育財団
 板野晋鏡ほか 2003『三本松遺跡』友部町三本松遺跡調査会
 茨城県考古学協会・十王町教育委員会 1999『茨城県における弥生時代研究の到達点～弥生時代後期の集落構成から～』
 浦和敏郎 2004『戸崎中山遺跡』財団法人茨城県教育財団
 海老澤稔 2000『茨城県における弥生後期の土器編年』『東日本弥生時代後期の土器編年』第2分冊 東日本埋蔵文化財研究会
 大賀健ほか 2010『長峰西遺跡』笠間市教育委員会・有限会社勾玉工房 Mogi
 小松崎猛彦 1994『主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
 小松崎猛彦 1997『一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書3』財団法人茨城県教育財団
 近藤恒重 2004『大戸下郷遺跡』財団法人茨城県教育財団
 笹森健一 1981～1982「縄文時代前期の住居と集落（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）」『土曜考古』土曜考古学研究会
 縄文時代研究班 1993「茨城県における縄文時代前期前半の住居跡の形態について」『研究ノート2号』財団法人茨城県教育財団
 鈴木正博 1995「茨城弥生式の終焉」『古代』100号 早稲田大学考古学会
 鈴木正博 1999「北関東後期弥生式「二軒屋式」の研究」『日本考古学協会第65回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
 鈴木正博 2008「井頭遺蹟から見た「二軒屋-須和田二極構造」への展望」『栃木県考古学協会誌』29号 栃木県考古学会
 鈴木素行 1998『武田石高遺跡-旧石器・縄文・弥生時代編-』財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
 鈴木素行 2001『武田西埜遺跡-旧石器・縄文・弥生時代編-』財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
 鈴木素行 2005『船窪遺跡』財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
 鈴木素行 2010「弥生時代後期「十王台式」の集落構造」『武田遺跡群 総括・補遺編』ひたちなか市教育委員会
 高野浩之 2008『埜谷遺跡』笠間市教育委員会・(株)地域文化財コンサルタント
 千草重樹 1995『寺崎台地遺跡』笠間市寺崎台地遺跡発掘調査会
 中村敬治ほか 1998『茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
 中山仁美 1987『笠間市大淵窯跡』笠間市史編纂委員会
 能島清光ほか 2007『小原遺跡発掘調査報告書』笠間市小原遺跡発掘調査会
 長谷川聡 1998「大畑遺跡」『北関東自動車道（友部～水戸）建設地内埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ 財団法人茨城県教育財団
 土生朗治 1994「貯蔵穴の移動について」『研究ノート』3号 財団法人茨城県教育財団
 土生朗治 2010『長峰東遺跡』笠間市教育委員会・(有)毛野考古学研究所
 藤田典夫 2000「栃木県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』第2分冊 東日本埋蔵文化財研究会
 吉田寿ほか 2005『小原遺跡』友部町小原遺跡調査会・大成エンジニアリング株式会社
 綿引英樹・松本直人 2006『大戸下郷遺跡2』財団法人茨城県教育財団

写真図版

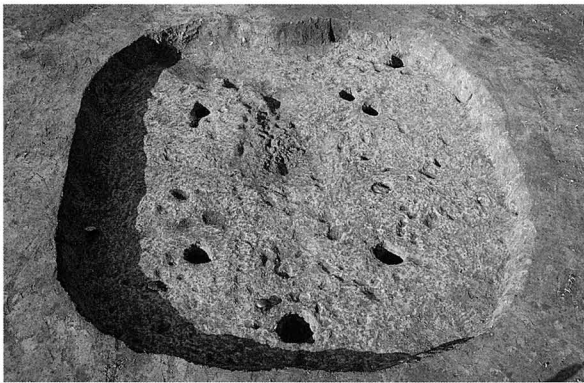




1号陥穴完掘状況(北東から)



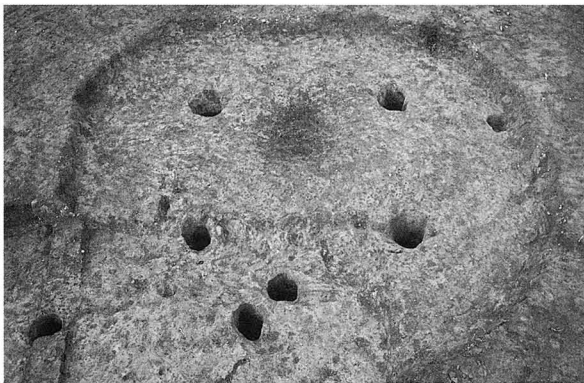
2号陥穴完掘状況(東から)



6号住居跡完掘状況(南から)



14号住居跡完掘状況(南東から)



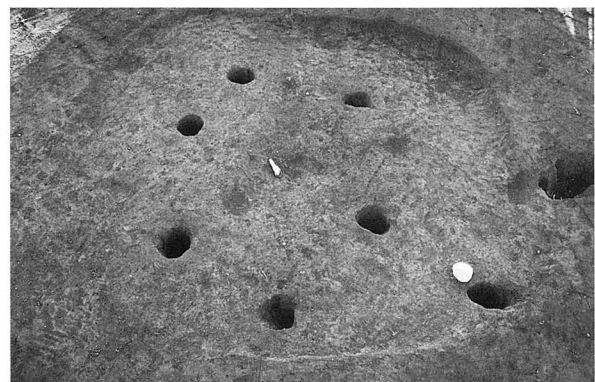
16号住居跡完掘状況(南から)



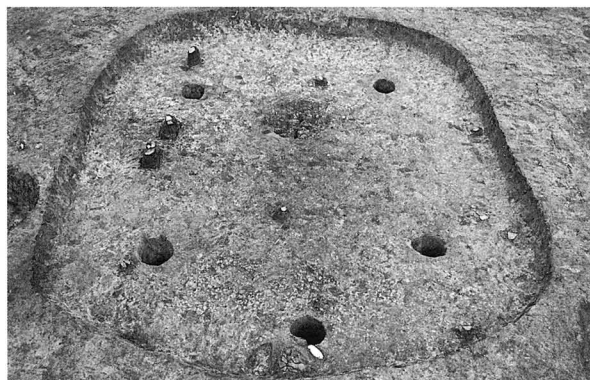
27号住居跡完掘状況(南から)



29号住居跡完掘状況(南東から)



37号住居跡完掘状況(北東から)



44号住居跡完掘状況(南から)



45号住居跡完掘状況(南から)



48号住居跡完掘状況(南から)



49号住居跡完掘状況(南から)



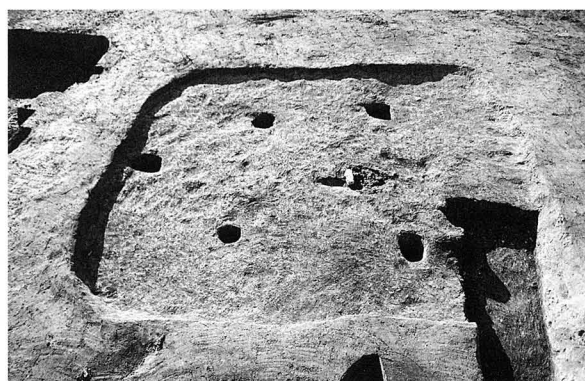
54号住居跡完掘状況(南東から)



56号住居跡完掘状況(南東から)



57号住居跡完掘状況(南東から)



58号住居跡完掘状況(東から)



67号住居跡完掘状況(北西から)



73号住居跡完掘状況(南東から)



77号住居跡完掘状況(南東から)



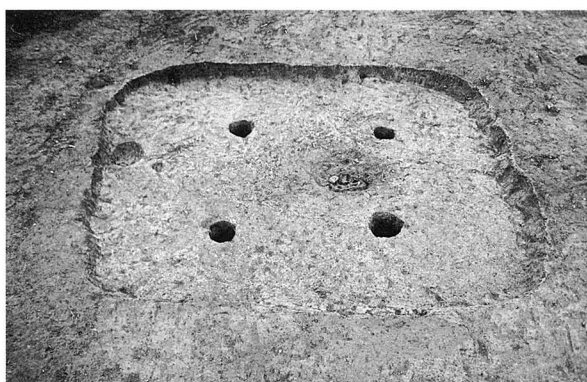
79号住居跡完掘状況(南東から)



85号住居跡完掘状況(南東から)



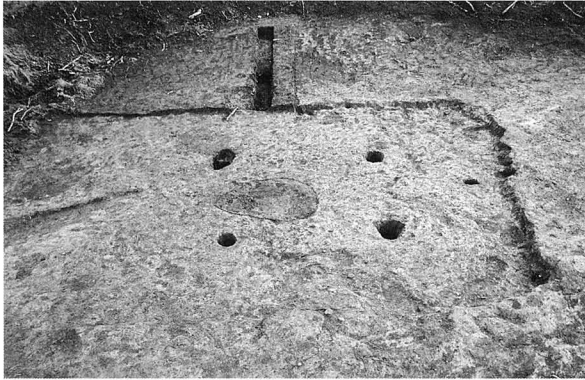
85号住居跡遺物出土状況(南から)



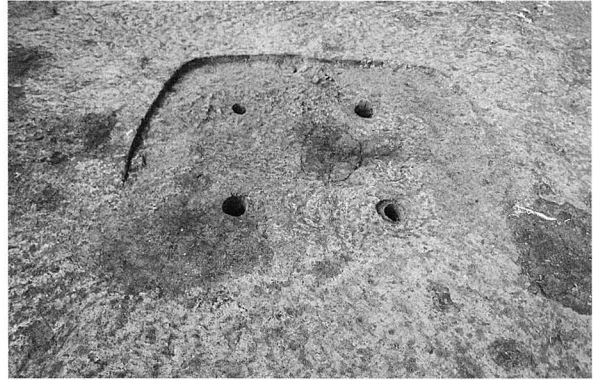
86号住居跡完掘状況(北東から)



88号住居跡完掘状況(北西から)



93号住居跡完掘状況(北西から)



97号住居跡完掘状況(北東から)



102号住居跡完掘状況(南西から)



1号住居跡遺物出土状況(南から)



1号住居跡遺物出土状況(南西から)



1号住居跡掘り方完掘状況(南から)



4号住居跡完掘状況(南東から)



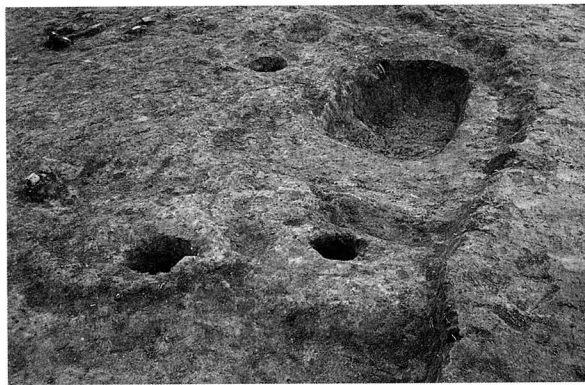
4号住居跡遺物出土状況(南東から)



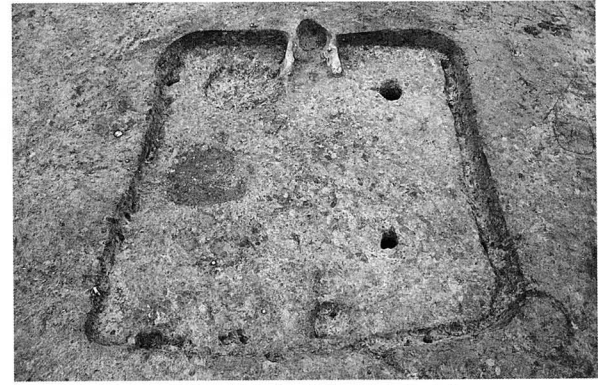
5号住居跡遺物出土状況(南東から)



8号住居跡完掘状況(南から)



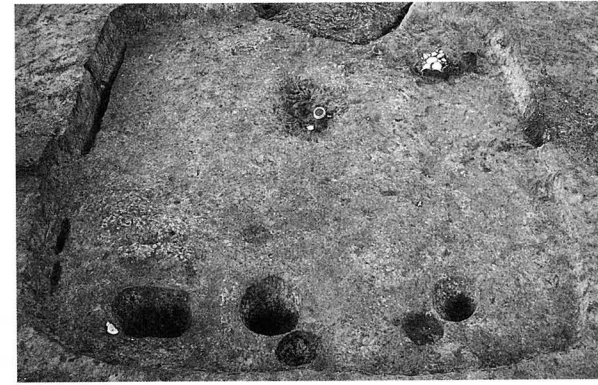
8号住居跡出入口ピット(西から)



15号住居跡完掘状況(南から)



15号住居跡カマド遺物出土状況(南から)



33号住居跡完掘状況(南東から)



87号住居跡掘り方完掘状況(南から)



92号住居跡完掘状況(南から)



7号住居跡遺物出土状況(西から)



7号住居跡カマド遺物出土状況(西から)



10号住居跡完掘状況(南東から)



11号住居跡完掘状況(南から)



17号住居跡完掘状況(南から)



17号住居跡カマド支脚出土状況(南東から)



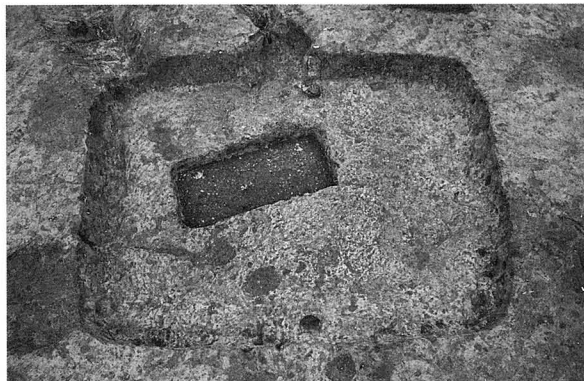
19号住居跡完掘状況(南から)



19号住居跡カマド完掘状況(南から)



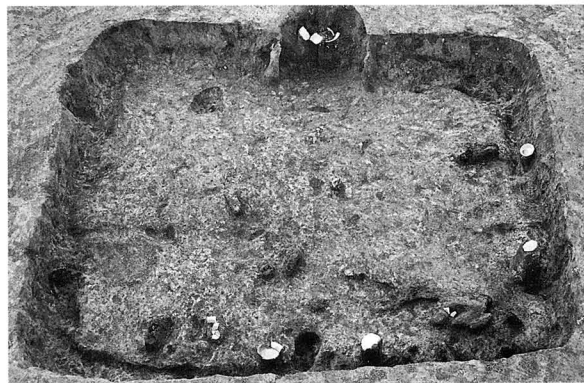
21号住居跡完掘状況(南から)



22号住居跡完掘状況(南西から)



24号住居跡完掘状況(南から)



24号住居跡遺物出土状況(南から)



26号住居跡完掘状況(南から)



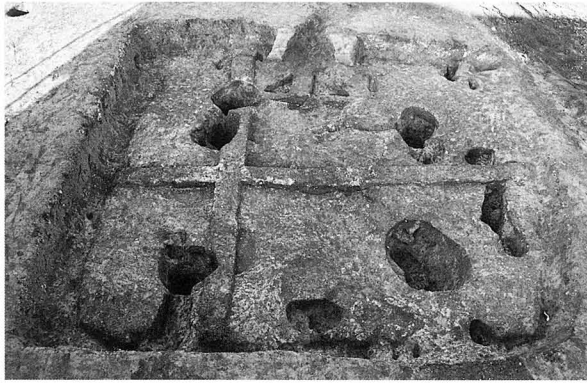
31号住居跡完掘状況(南から)



38号住居跡完掘状況(南から)



38号住居跡カマド遺物出土状況(南から)



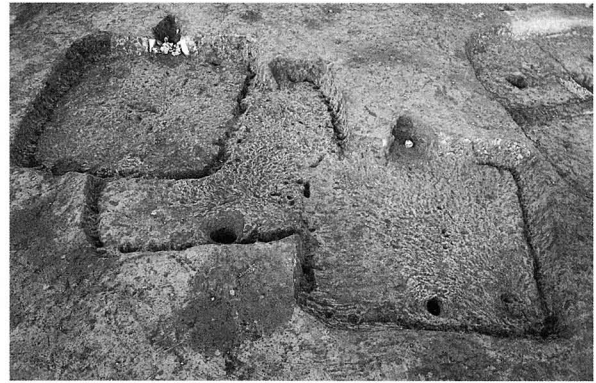
38号住居跡旧床面検出状況(南から)



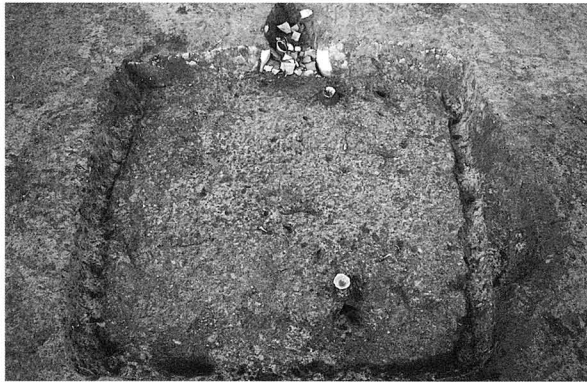
40号住居跡完掘状況(南西から)



40号住居跡カマド遺物出土状況(南西から)



41～43号住居跡完掘状況(南から)



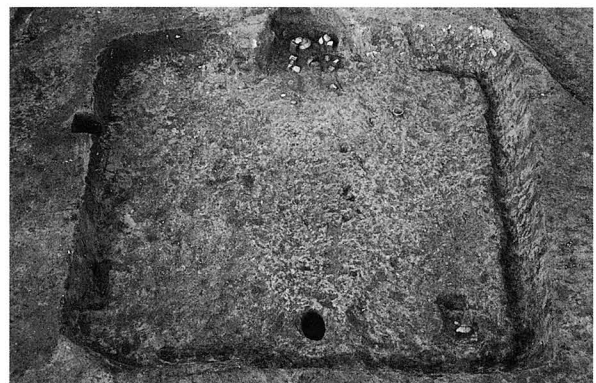
41号住居跡完掘状況(南から)



41号住居跡カマド遺物出土状況(南から)



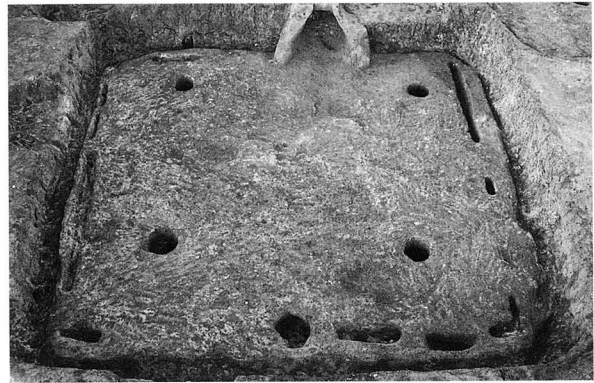
41号住居跡カマド完掘状況(南から)



43号住居跡(南から)



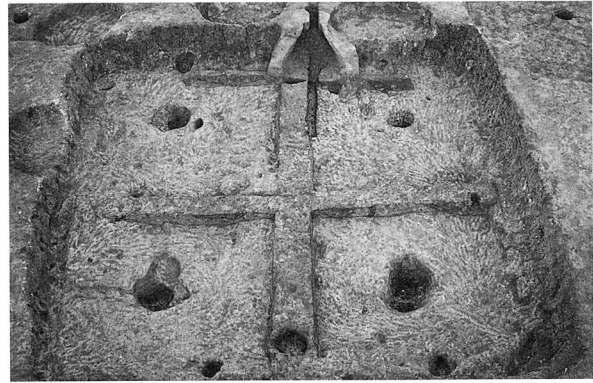
43号住居跡カマド支脚出土状況(南から)



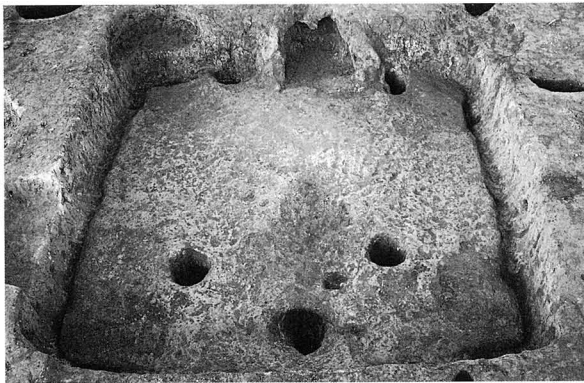
46号住居跡完掘状況(南から)



46号住居跡カマド完掘状況(南から)



46号住居跡掘り方完掘状況(南から)



47号住居跡完掘状況(南から)



47号住居跡カマド遺物出土状況(南から)



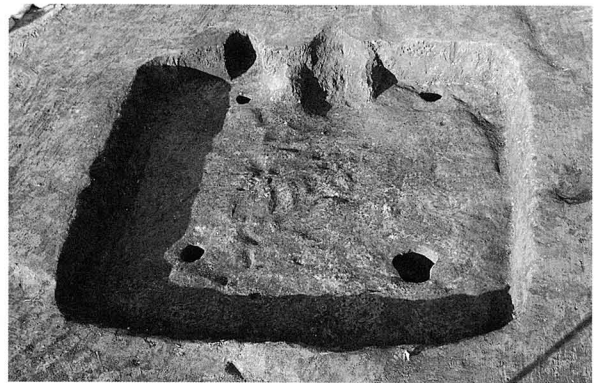
53号住居跡完掘状況(南から)



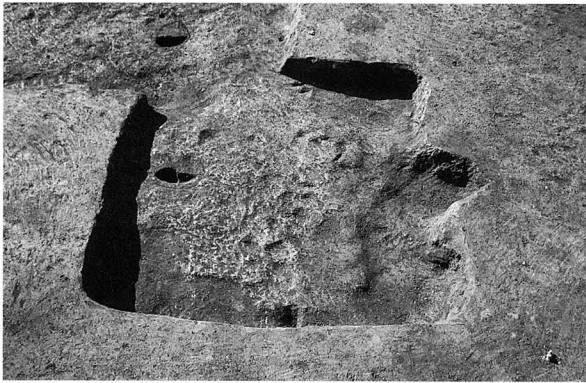
53号住居跡カマド遺物出土状況(南から)



55号住居跡完掘状況(南西から)



59号住居跡完掘状況(南から)



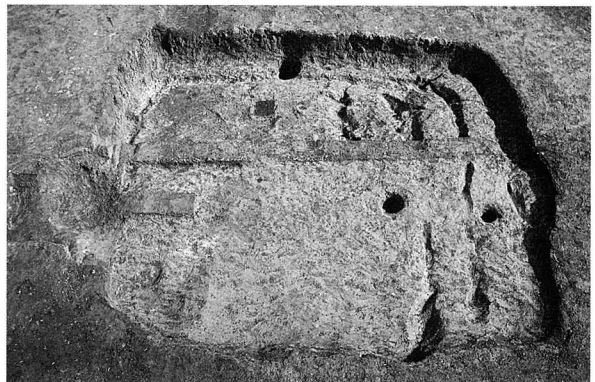
60号住居跡完掘状況(東から)



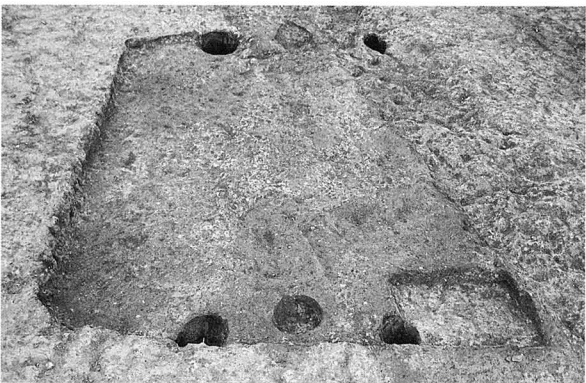
60号住居跡掘り方完掘状況(南から)



65号住居跡完掘状況(西から)



65号住居跡掘り方完掘状況(西から)



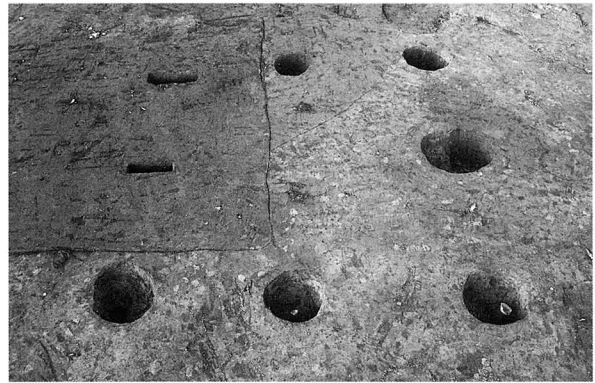
75号住居跡完掘状況(南から)



84号住居跡完掘状況(南東から)



1号掘立柱建物跡完掘状況(南から)



3号掘立柱建物跡完掘状況(南から)



4号掘立柱建物跡完掘状況(南から)



6号掘立柱建物跡完掘状況(南東から)



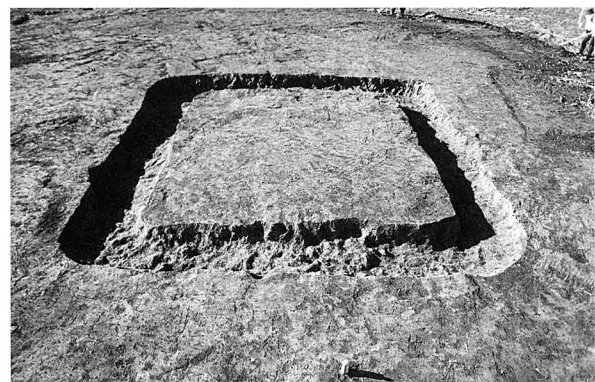
7号掘立柱建物跡完掘状況(南東から)



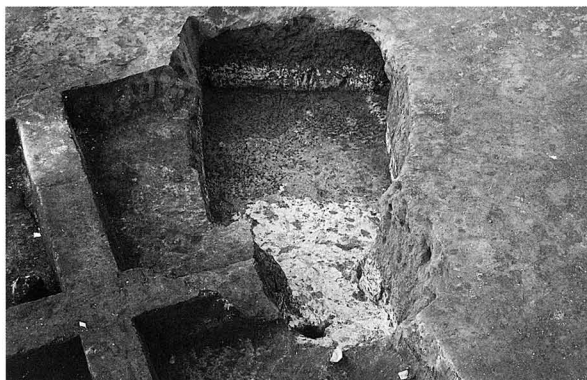
11号掘立柱建物跡完掘状況(南から)



12号掘立柱建物跡完掘状況(南から)



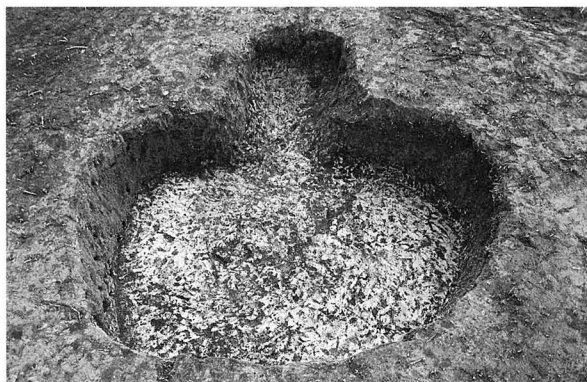
1号方形周溝状遺構完掘状況(南から)



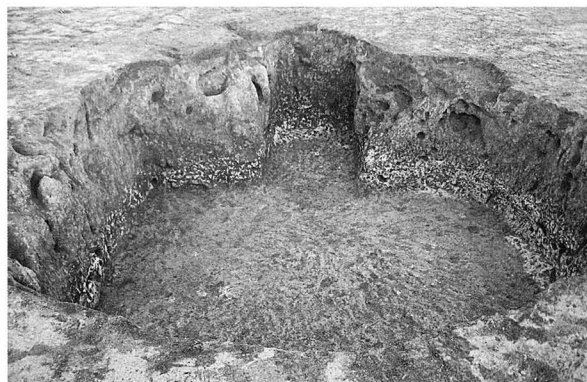
1号地下式坑完掘状況(南東から)



2号地下式坑完掘状況(南から)



3号地下式坑完掘状況(西から)



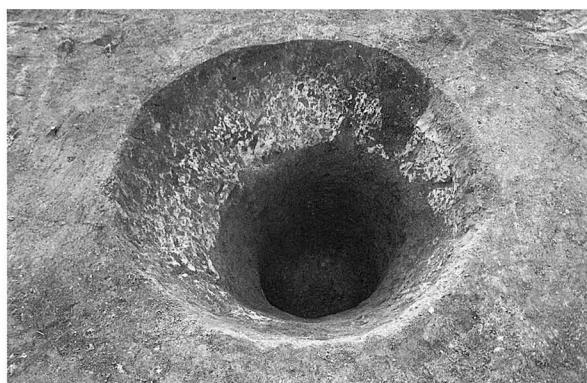
4号地下式坑完掘状況(西から)



7号地下式坑完掘状況(東から)



1号井戸完掘状況(東から)



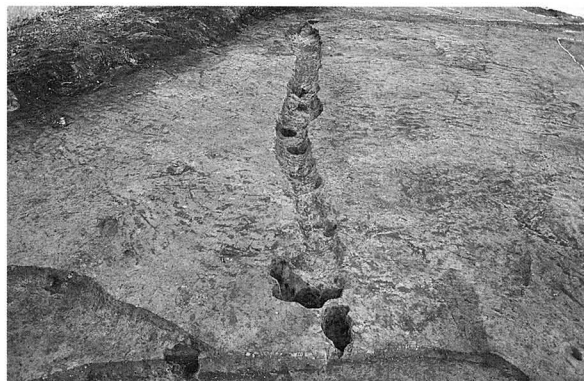
2号井戸完掘状況(東から)



A区北側土坑群完掘状況(東から)



溜井状遺構完掘状況(北東から)



1号溝完掘状況(西から)



2号溝・1号段切り完掘状況(南から)



5号溝完掘状況(北から)



7号溝・1号道路跡完掘状況(東から)



7号溝・1号道路跡完掘状況(西から)



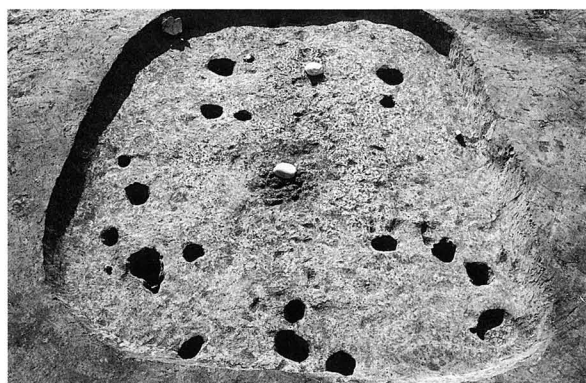
8・9号溝完掘状況(北から)



8・9号溝完掘状況(南から)



1号住居跡完掘状況(南東から)



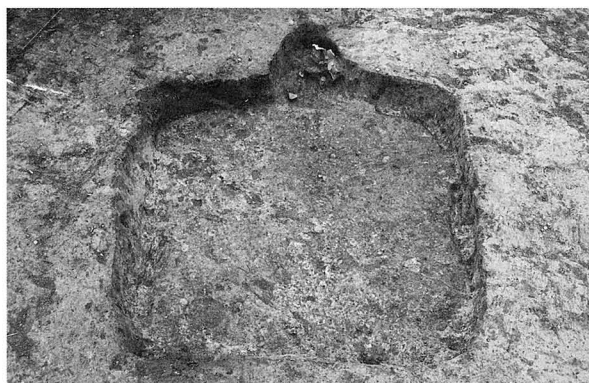
2号住居跡完掘状況(東から)



3号住居跡完掘状況(南東から)



3号住居跡遺物出土状況(北東から)



4号住居跡完掘状況(南から)



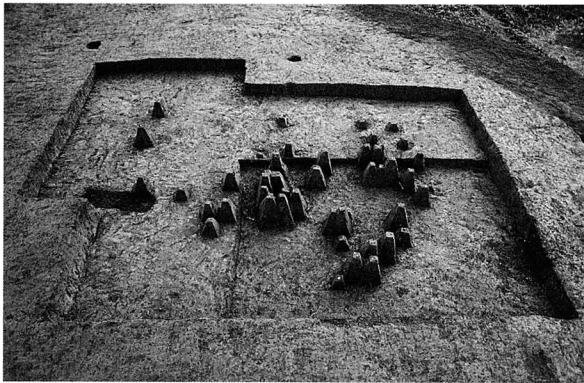
6号住居跡完掘状況(南東から)



7号住居跡完掘状況(南東から)



8号住居跡完掘状況(南東から)



1号石器集中地点遺物出土状況(北から)



1号石器集中地点遺物出土状況(北から)



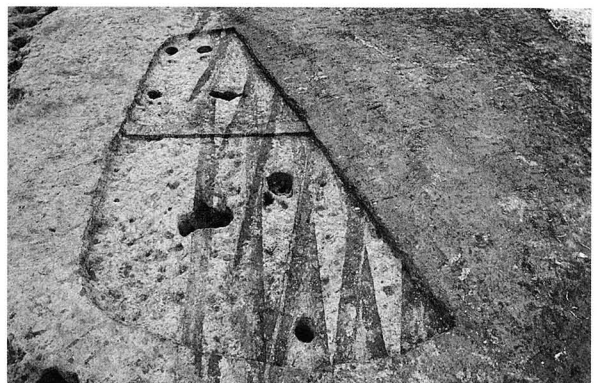
1号住居跡完掘状況(南東から)



1号住居跡掘り方完掘状況(南東から)



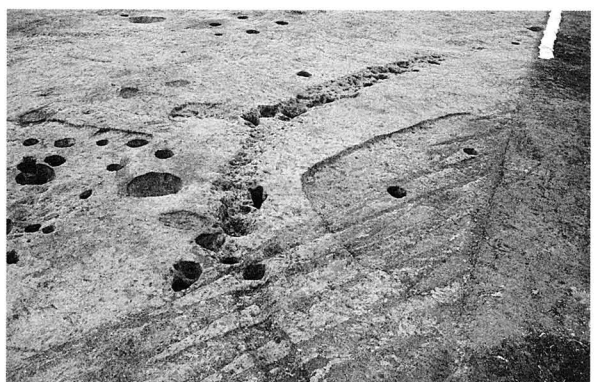
2号住居跡完掘状況(南から)



2号住居跡掘り方完掘状況(南から)



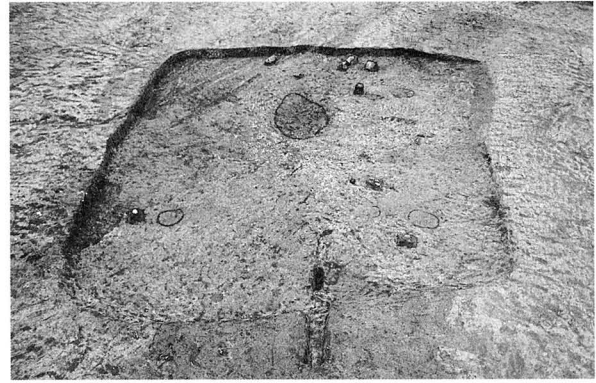
4号住居跡完掘状況(南から)



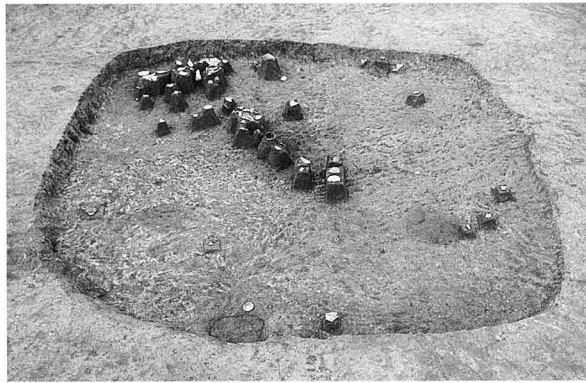
1号溝完掘状況(南東から)



1号住居跡完掘状況(南東から)



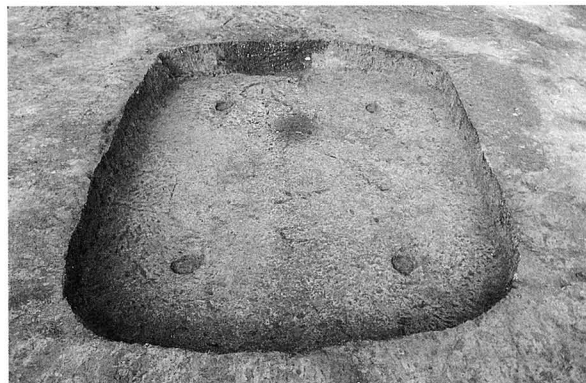
2号住居跡完掘状況(南東から)



3号住居跡遺物出土状況(南から)



3号住居跡遺物出土状況(東から)



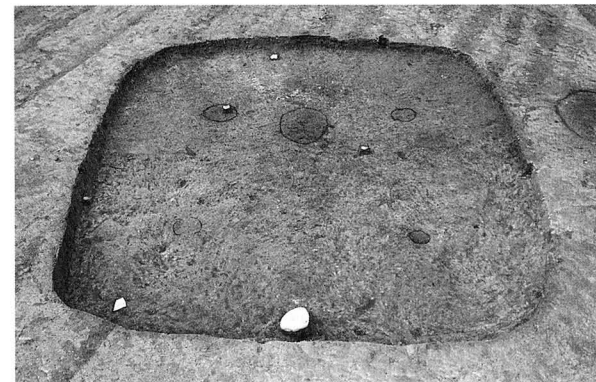
4号住居跡完掘状況(南東から)



5号住居跡完掘状況(南東から)



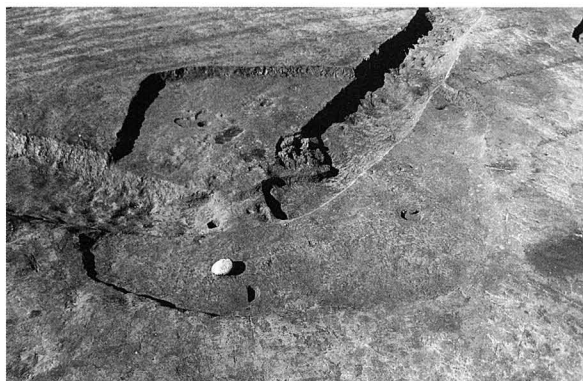
8号住居跡完掘状況(南から)



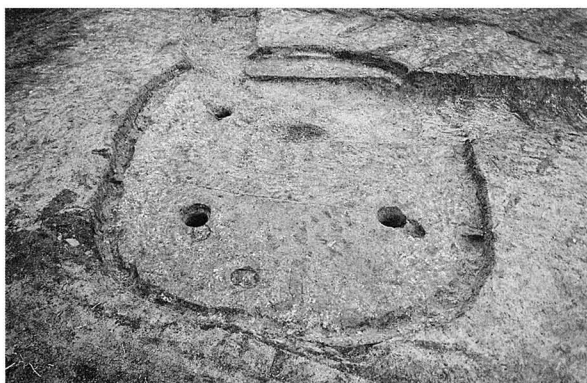
9号住居跡完掘状況(南から)



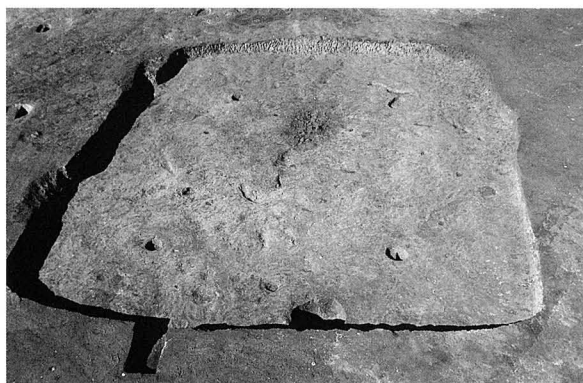
10号住居跡完掘状況(南から)



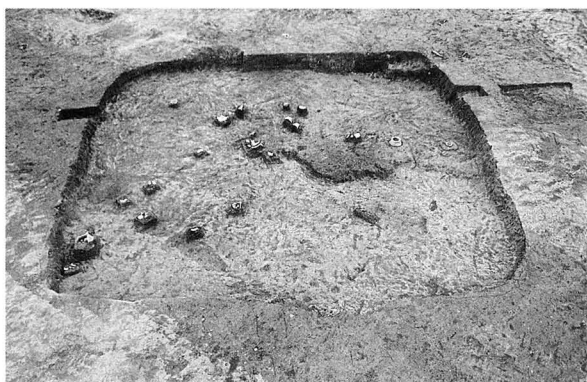
11号住居跡完掘状況(東から)



12号住居跡完掘状況(南東から)



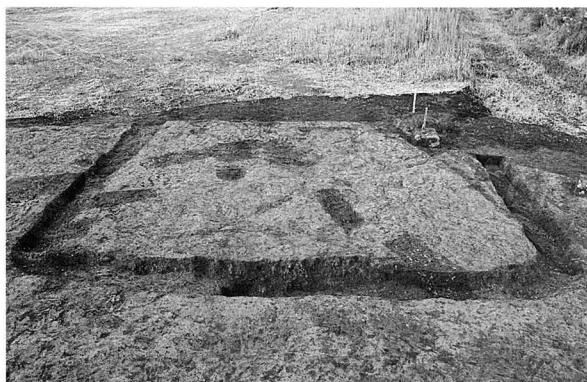
7号住居跡完掘状況(南東から)



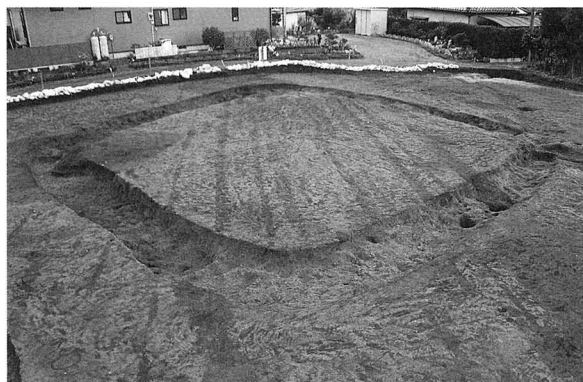
7号住居跡遺物出土状況(北東から)



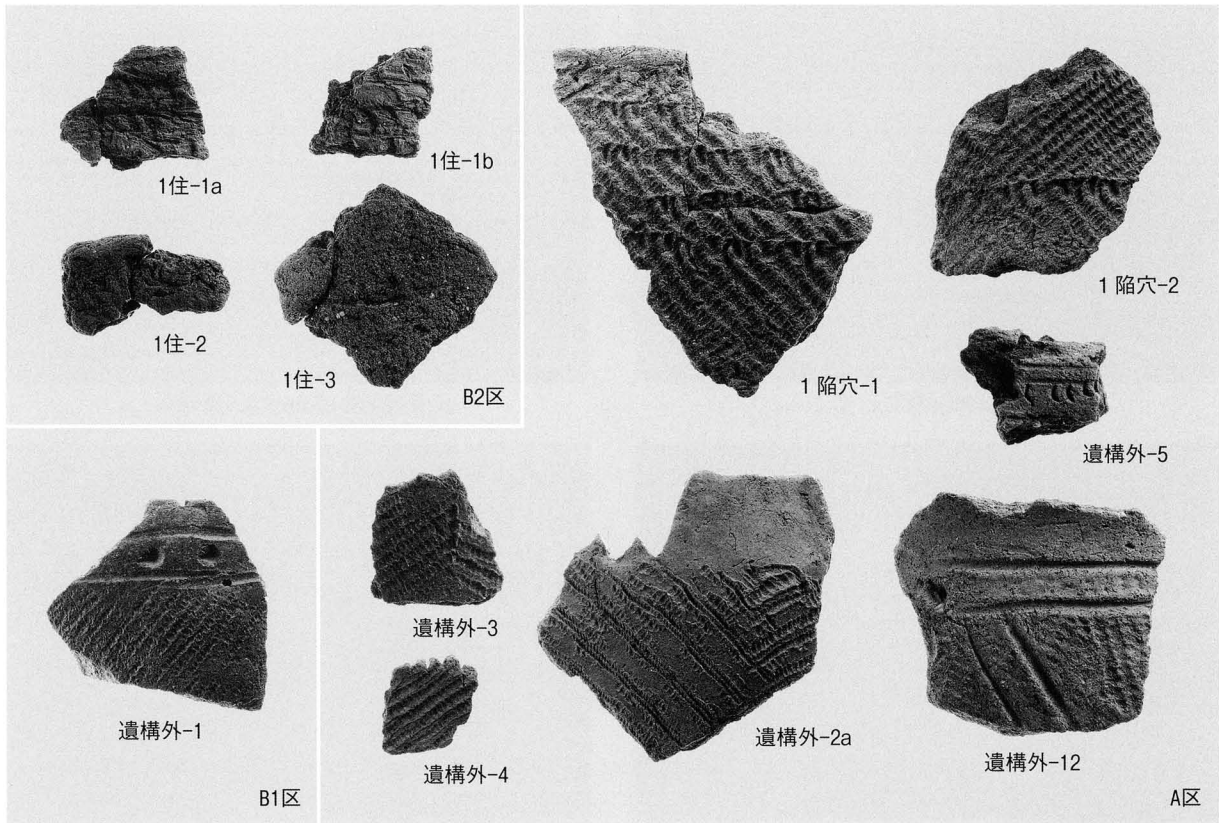
1号周溝墓遠景(北西から)



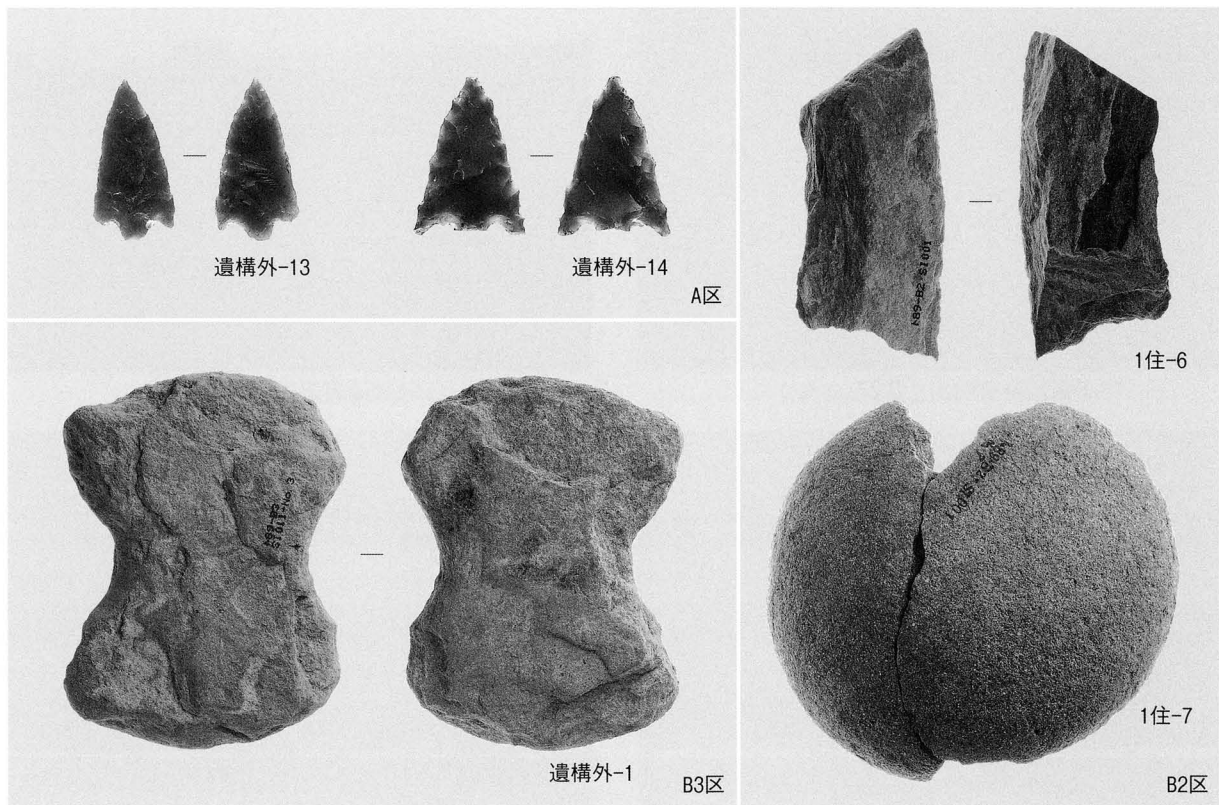
1号周溝墓完掘状況(南から)



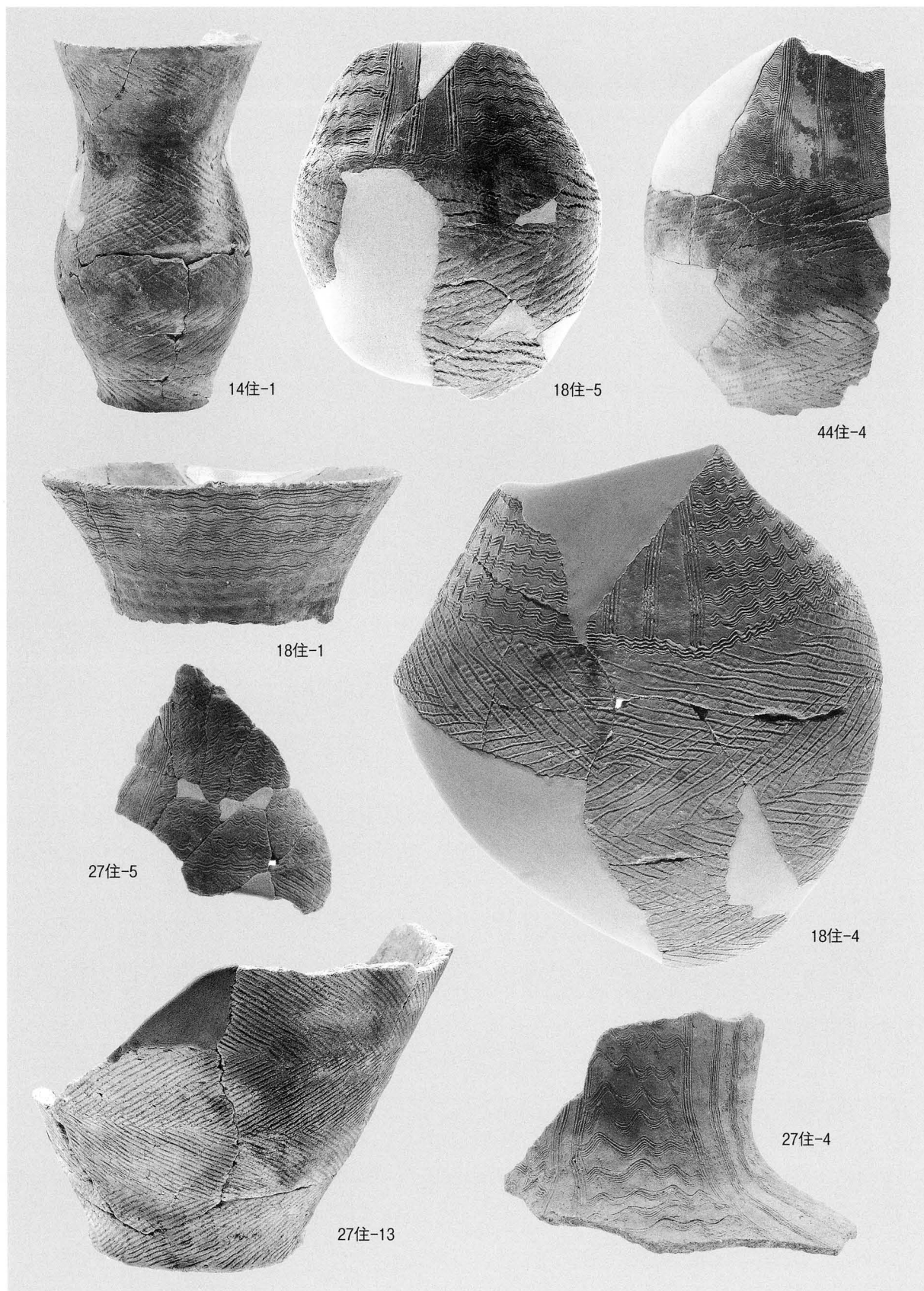
2号周溝墓完掘状況(北から)

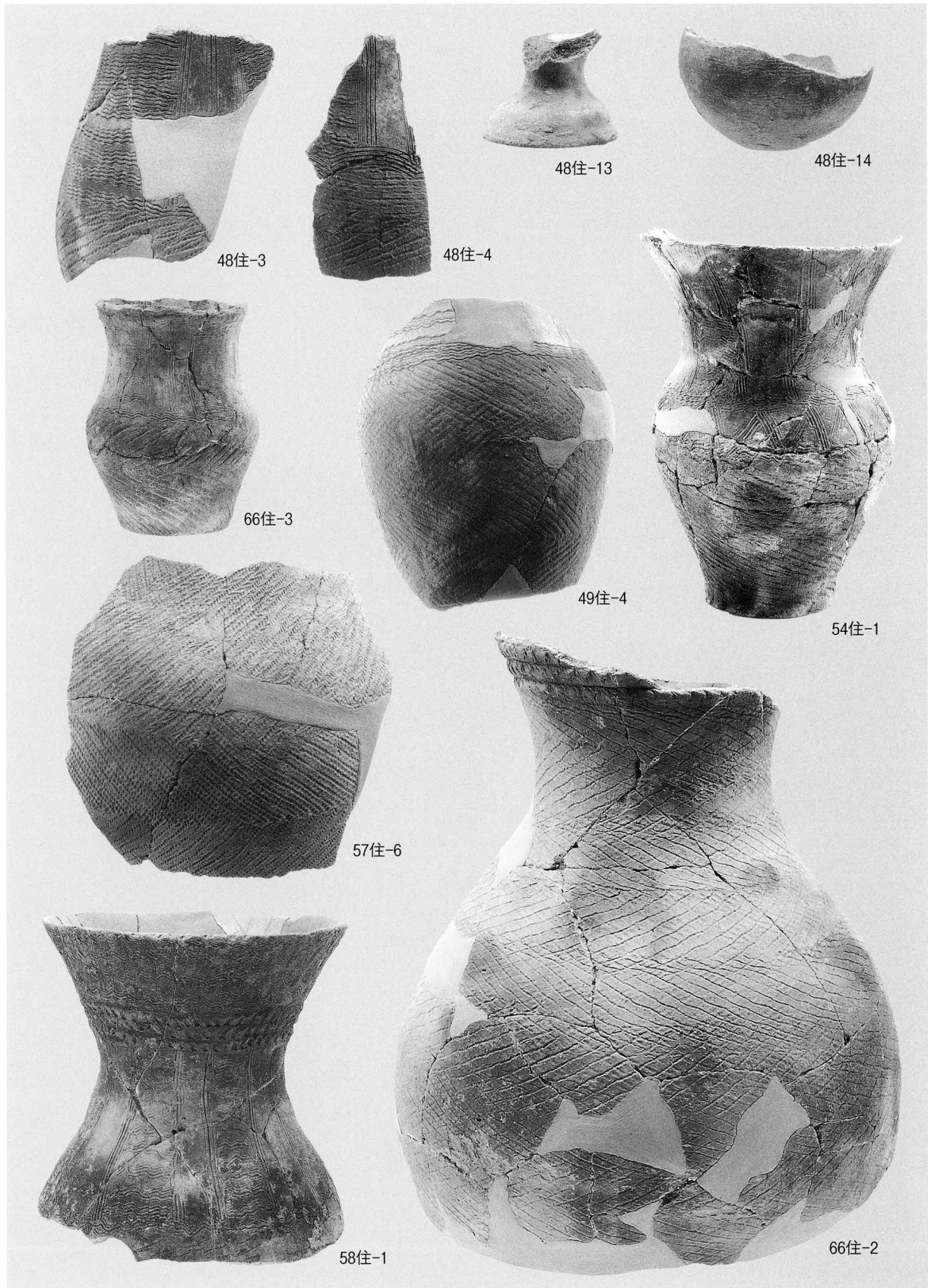


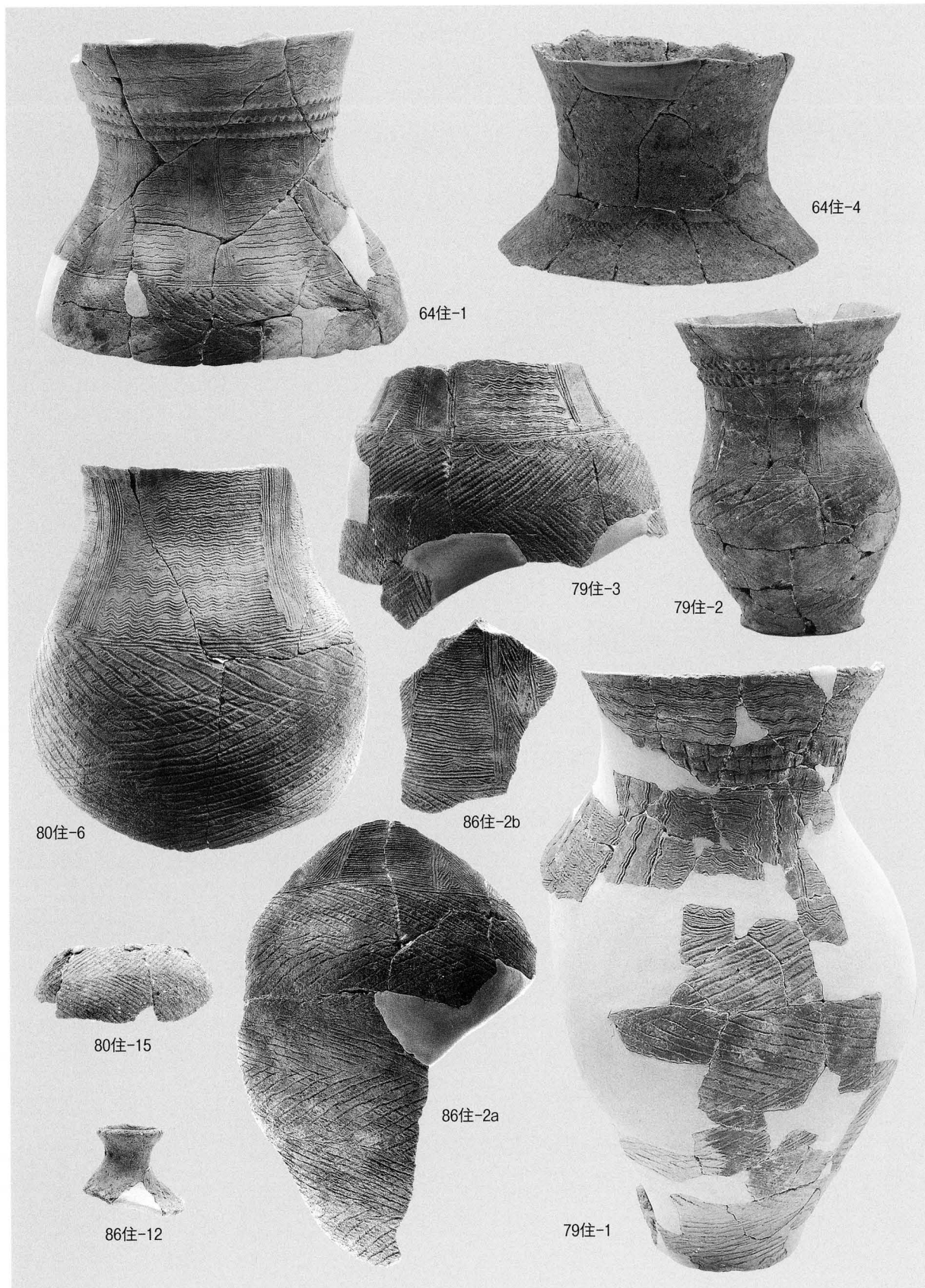
縄文土器 S=1/2

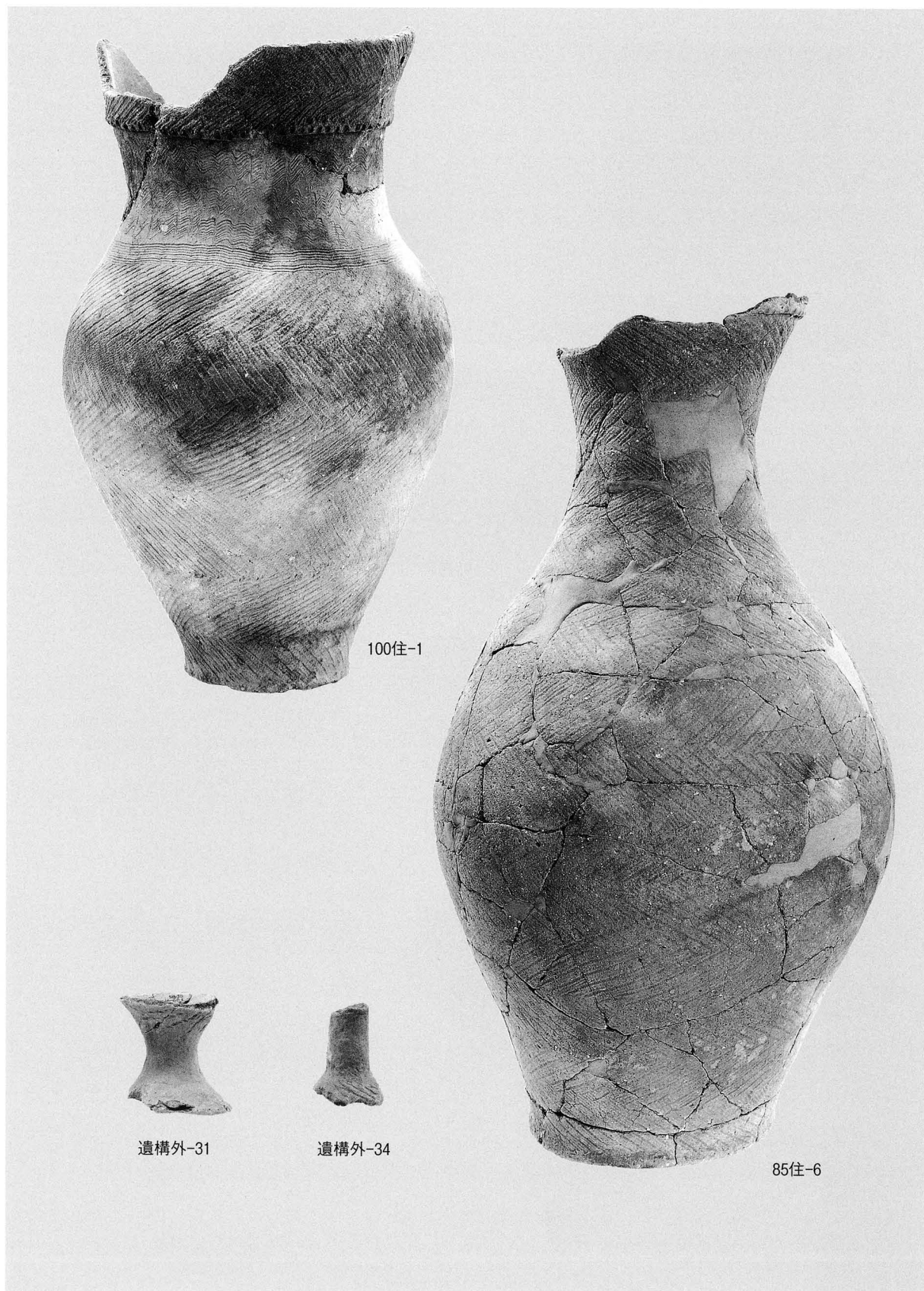


石器 S=1/1, 1/2

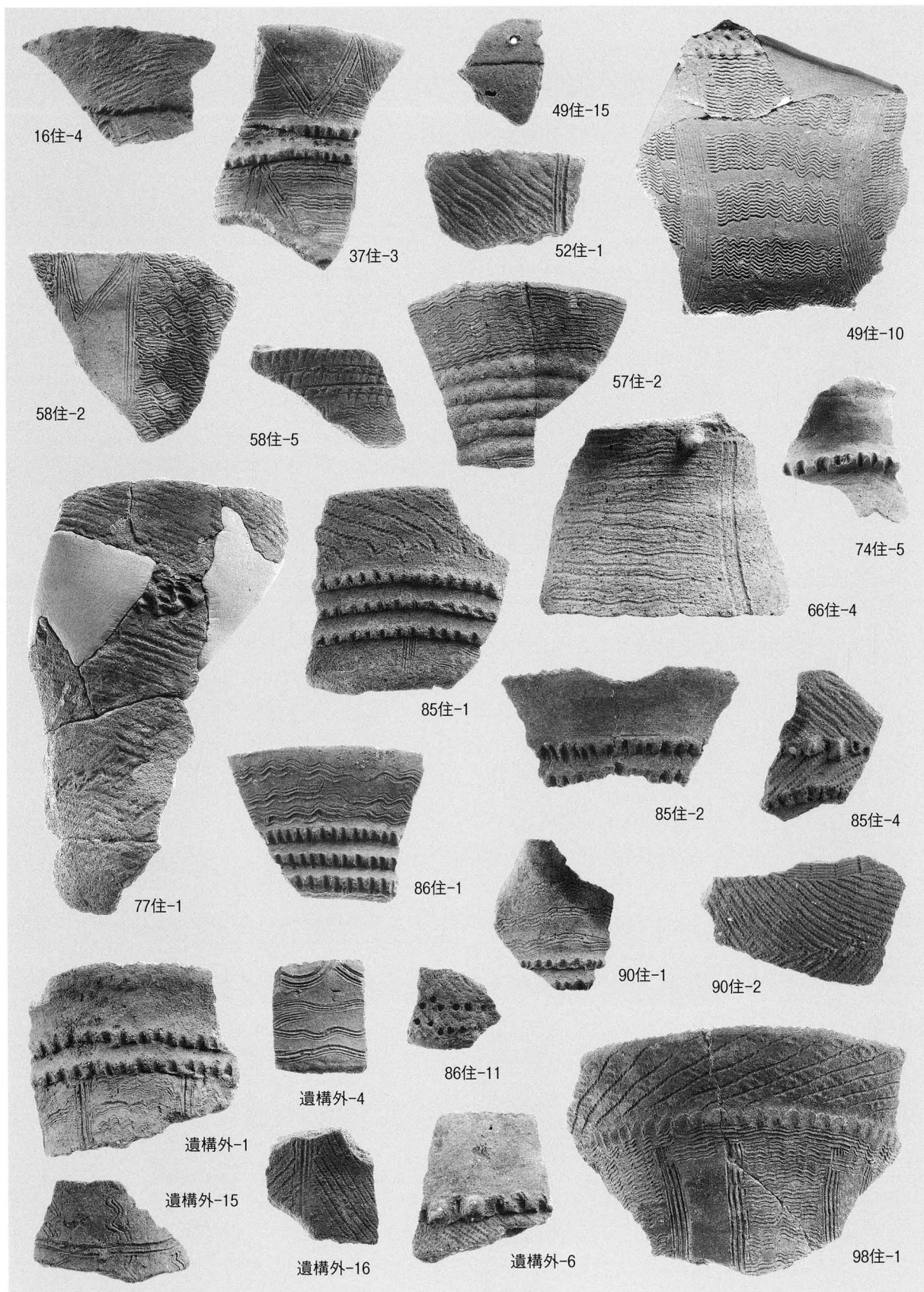


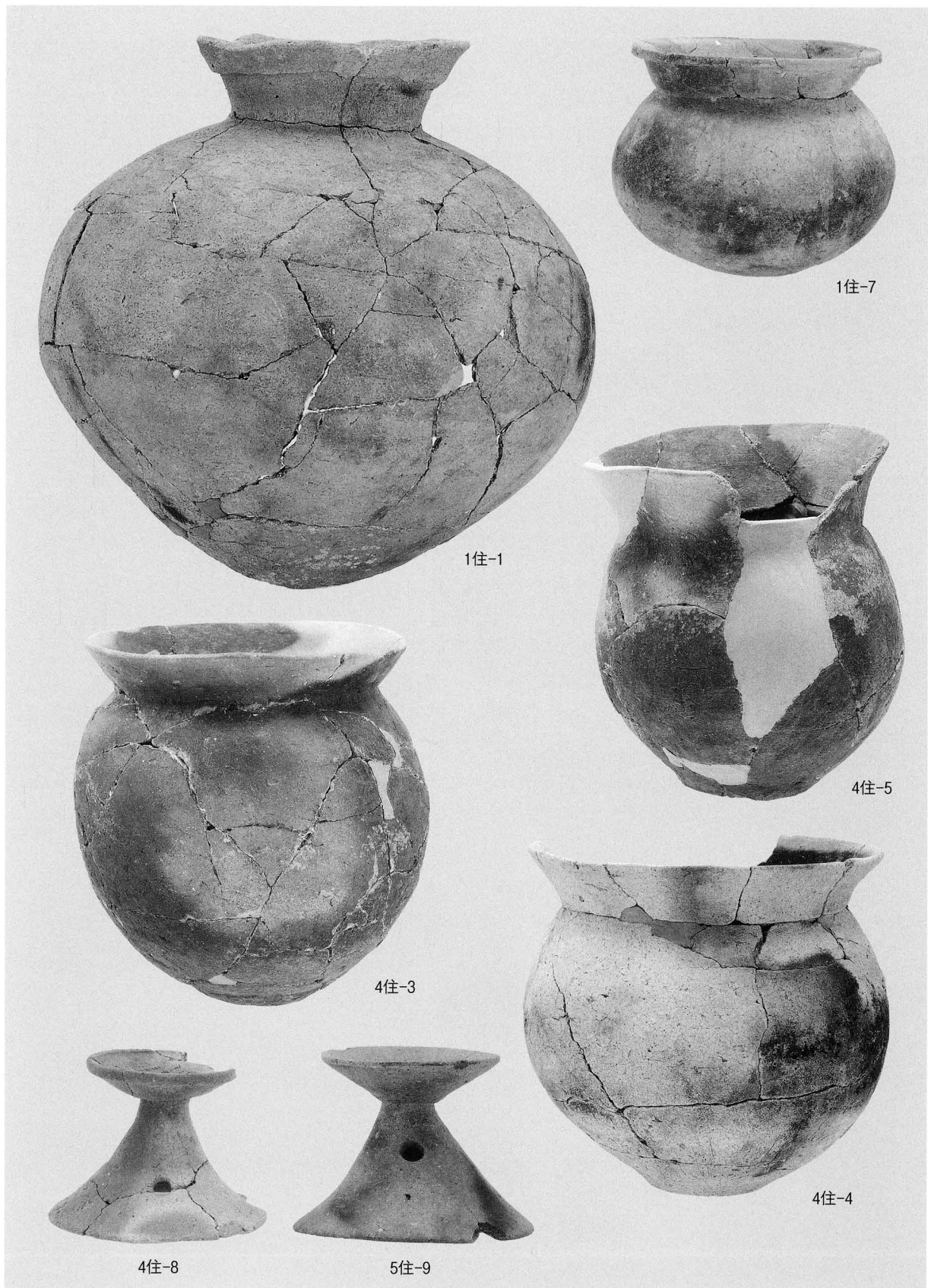


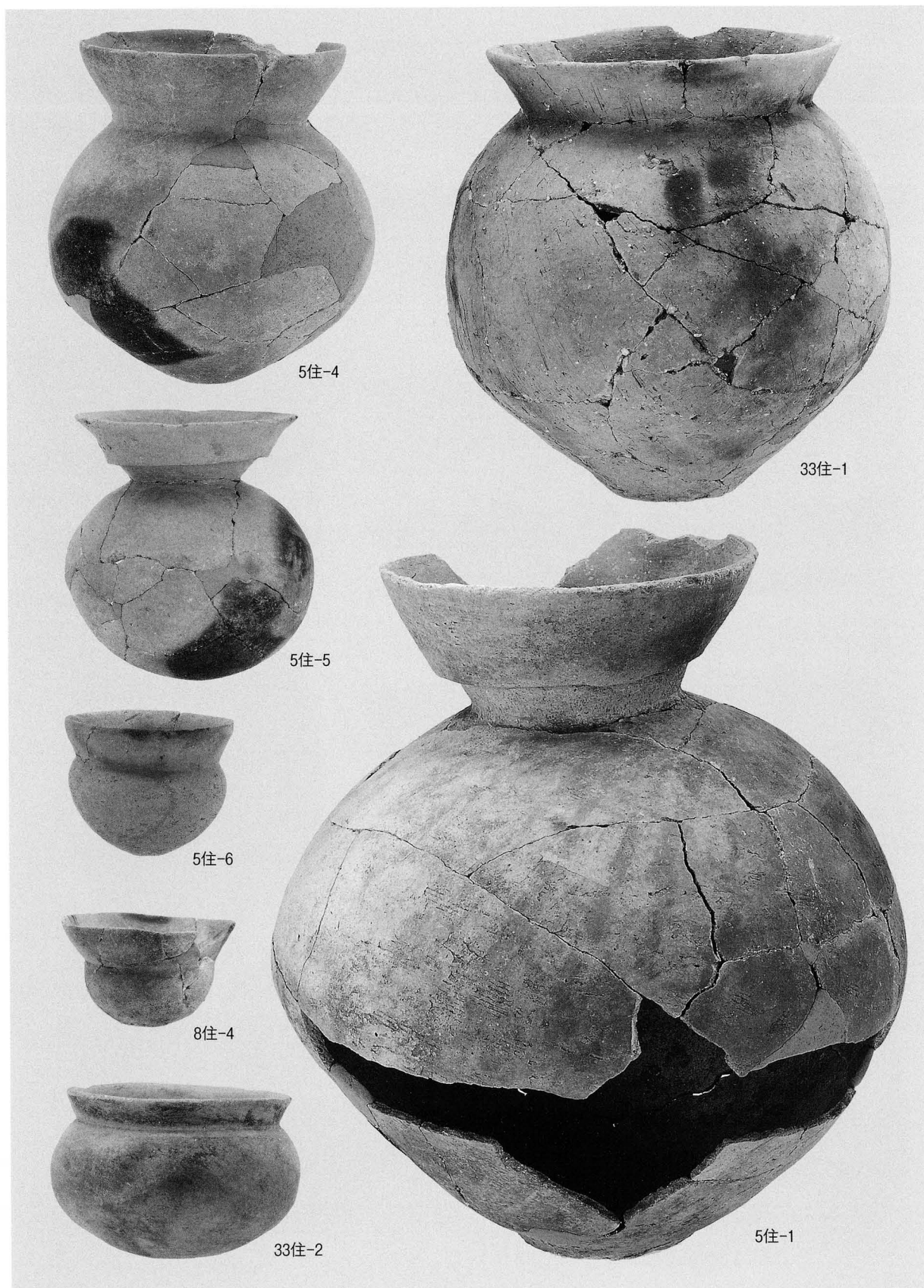


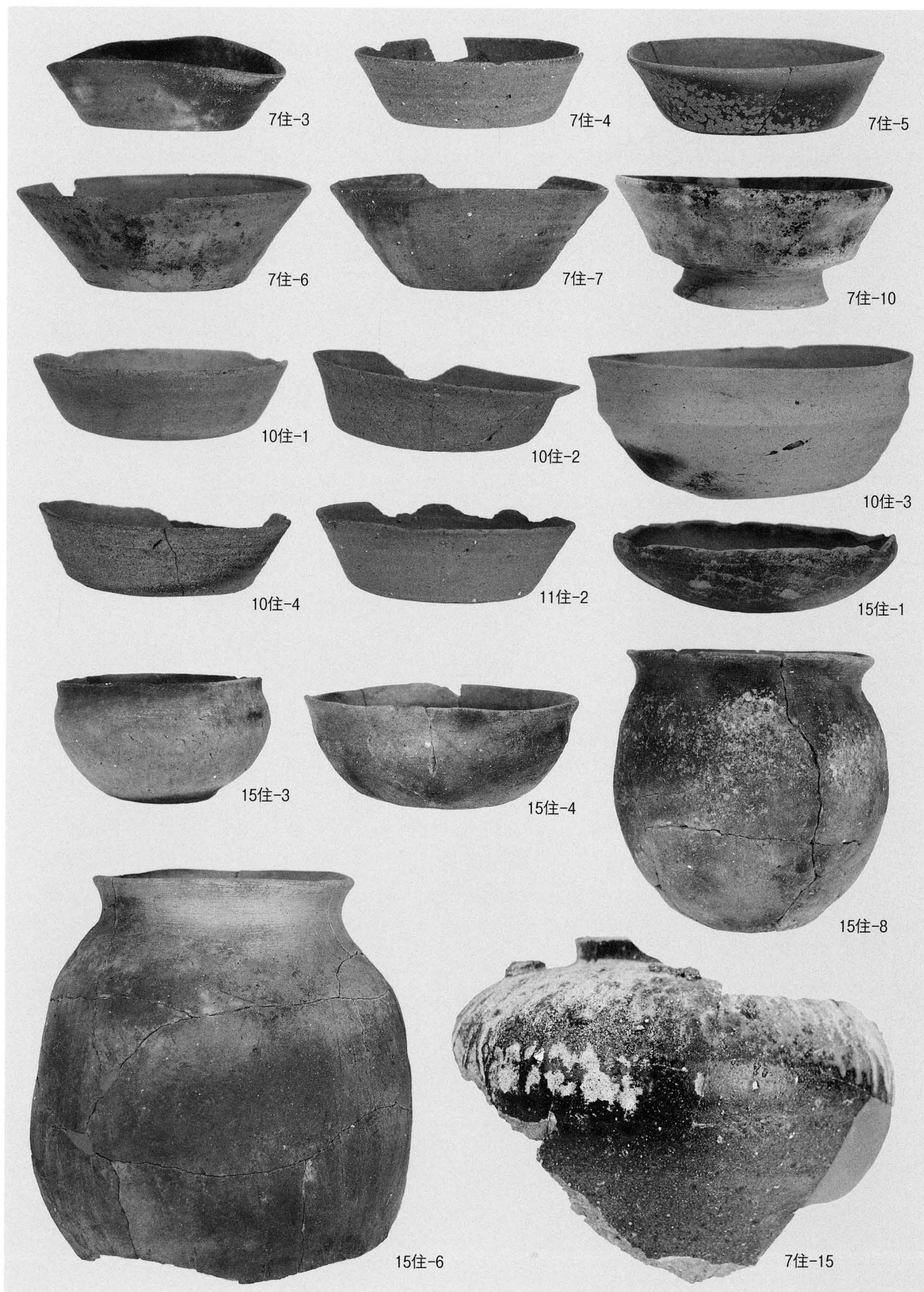


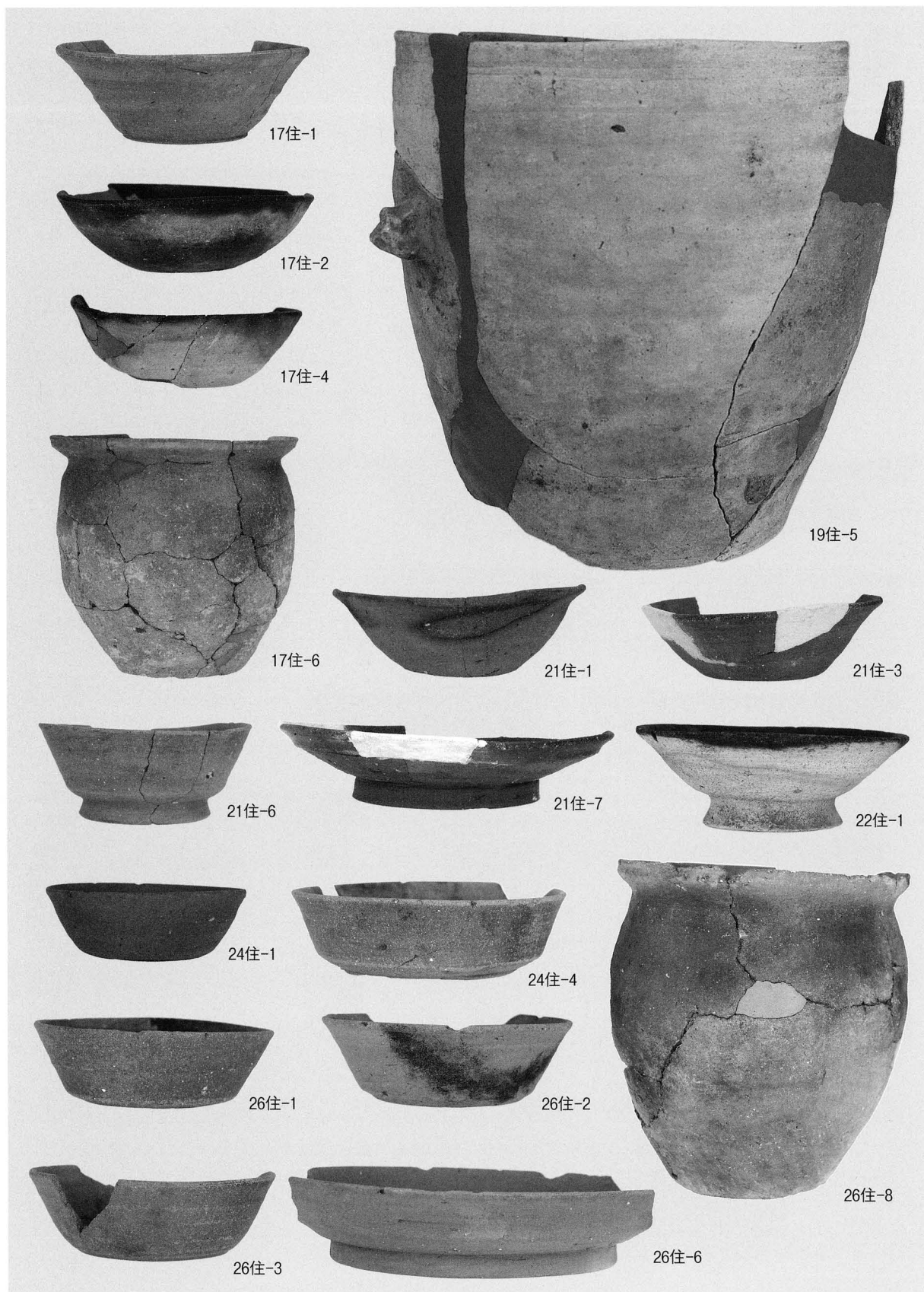
S=1/3(85住-6はS=1/4)

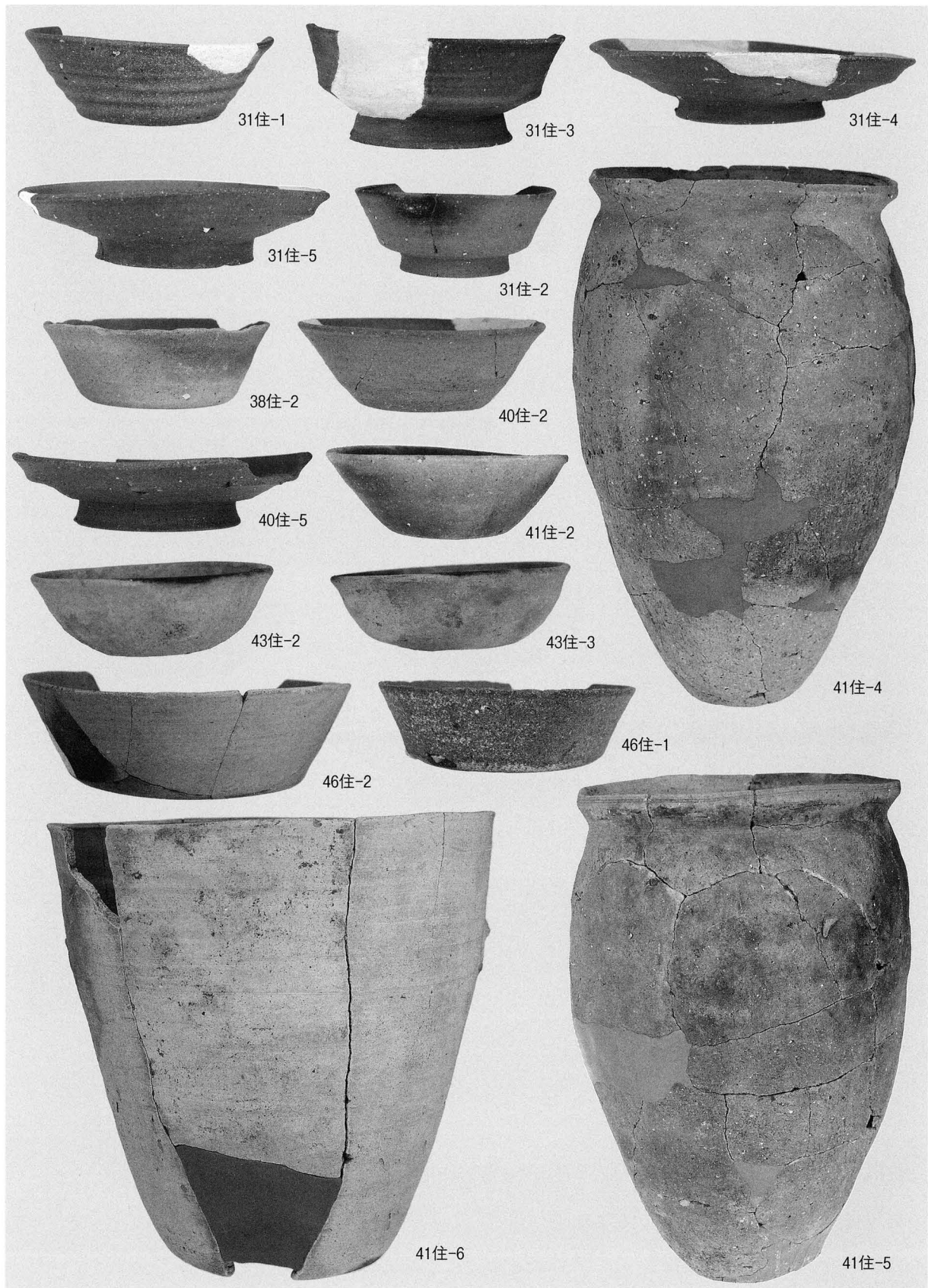




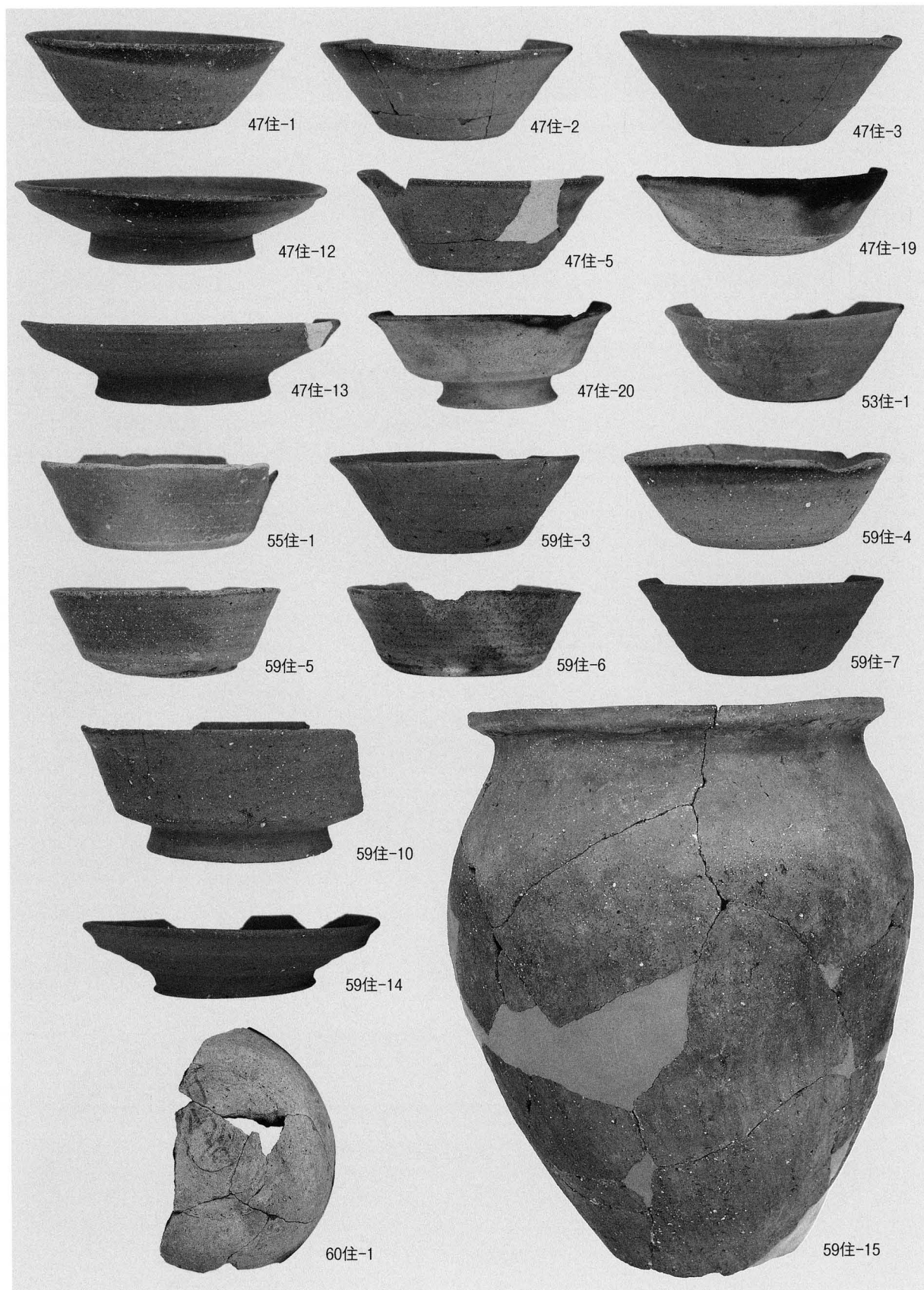


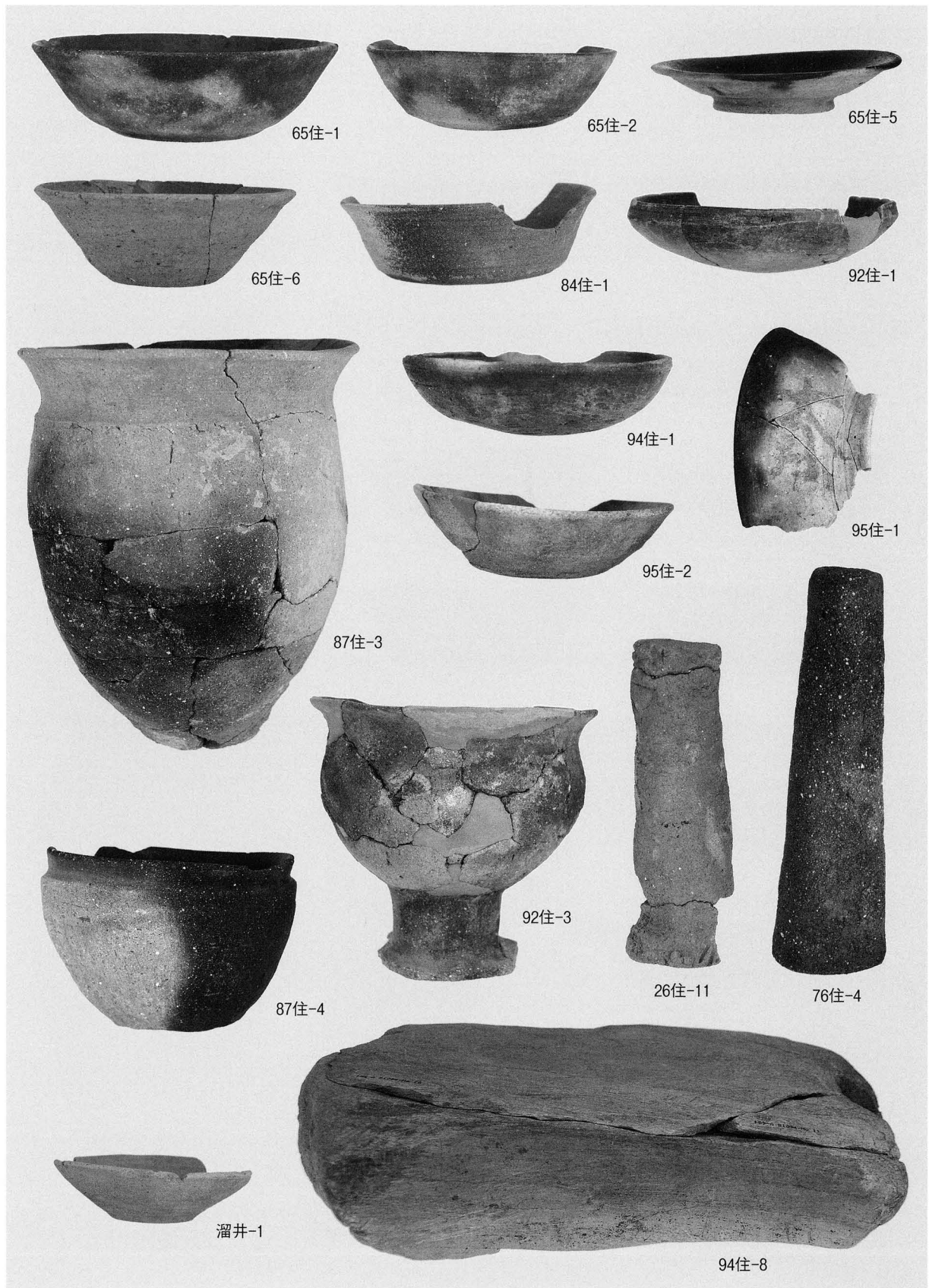


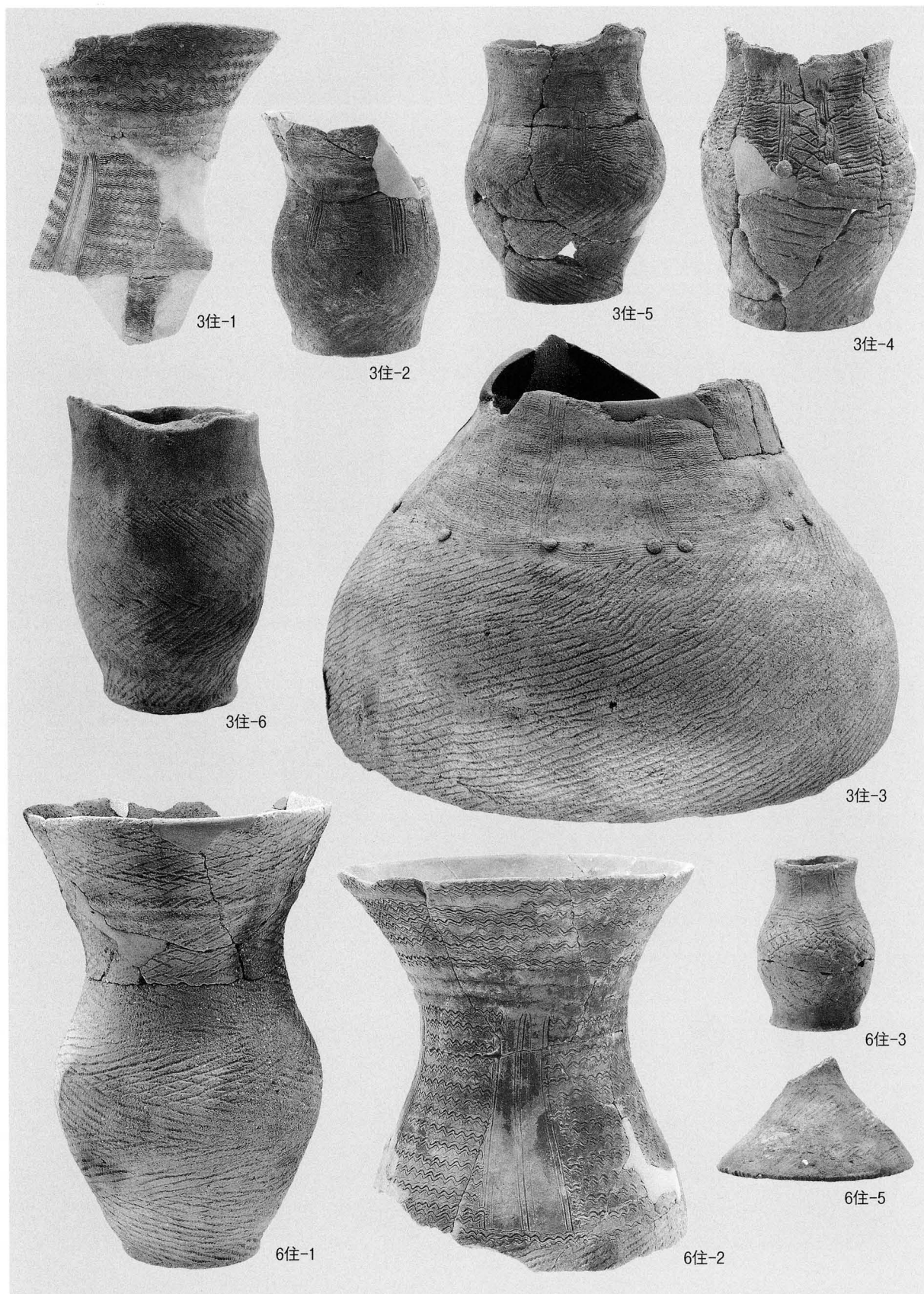


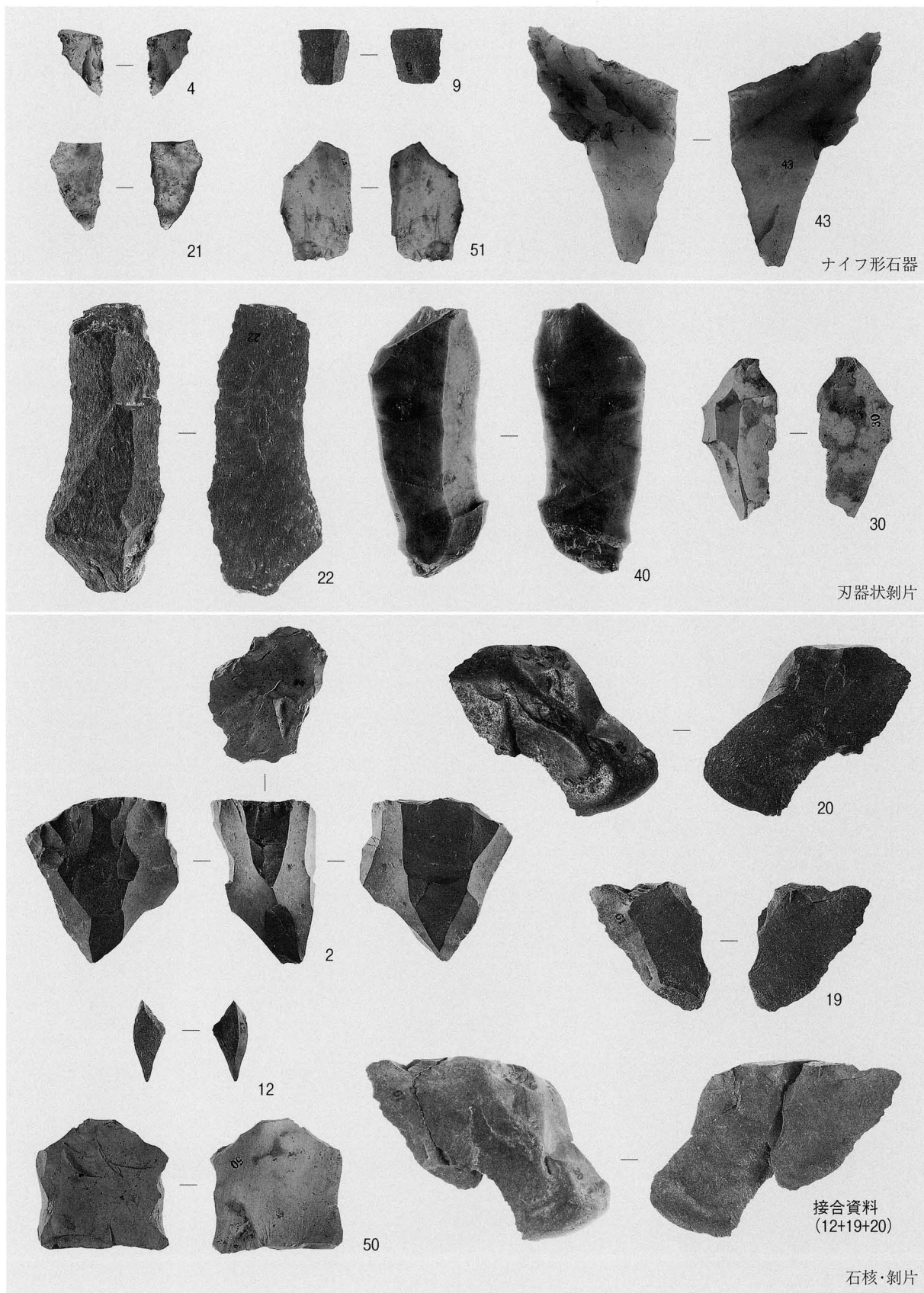


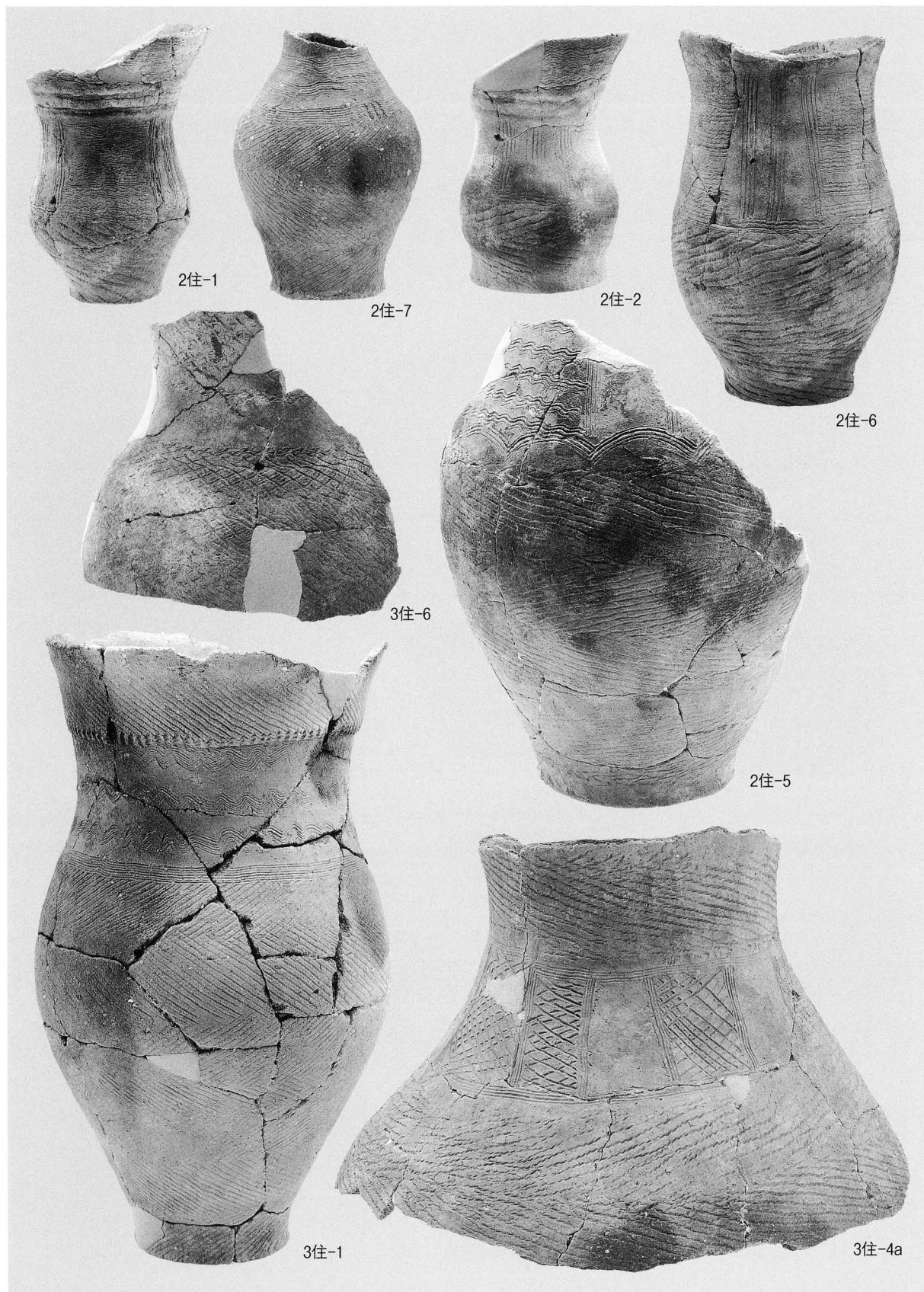
S=1/3(41住-4・5・6はS=1/4)

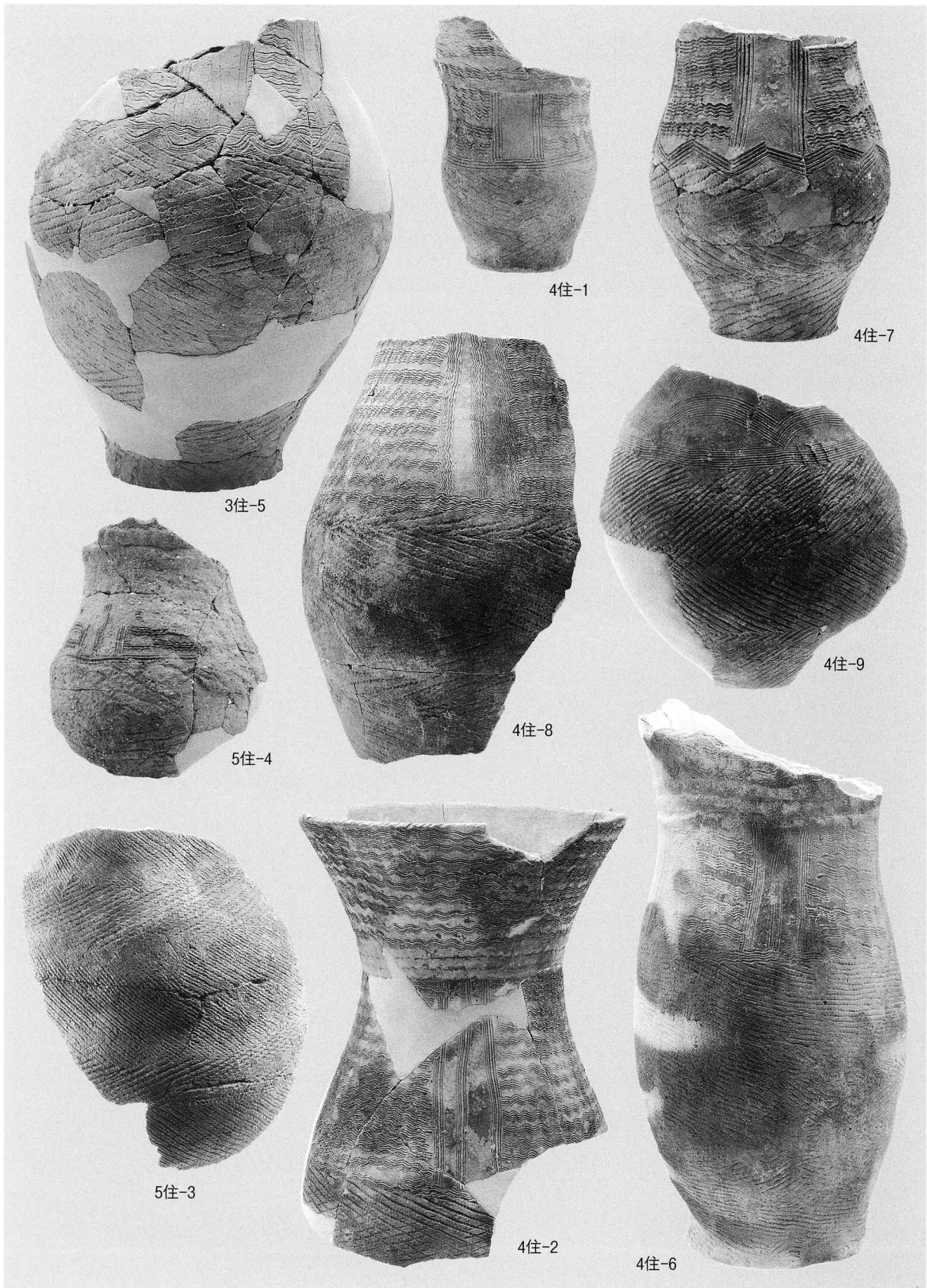


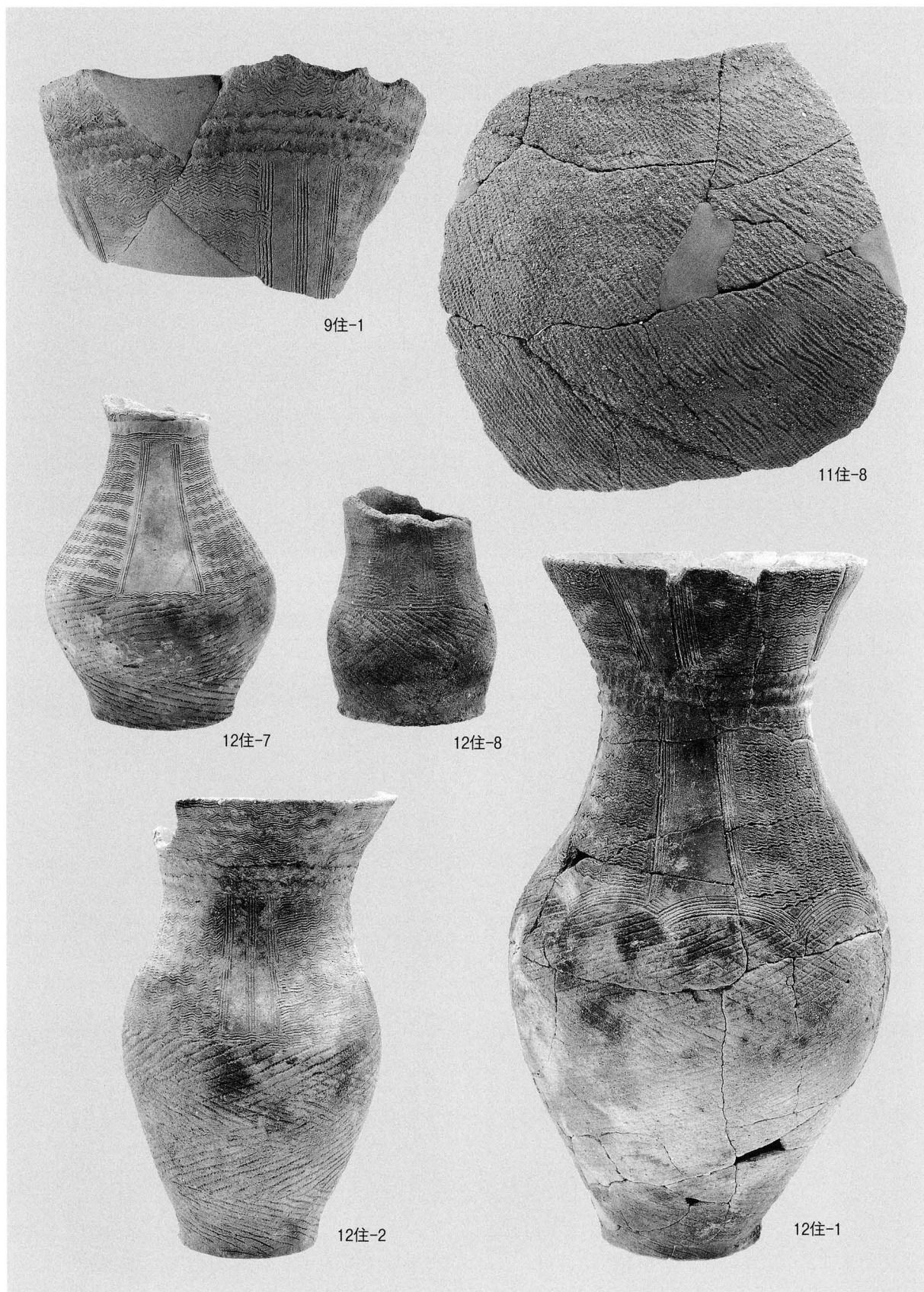


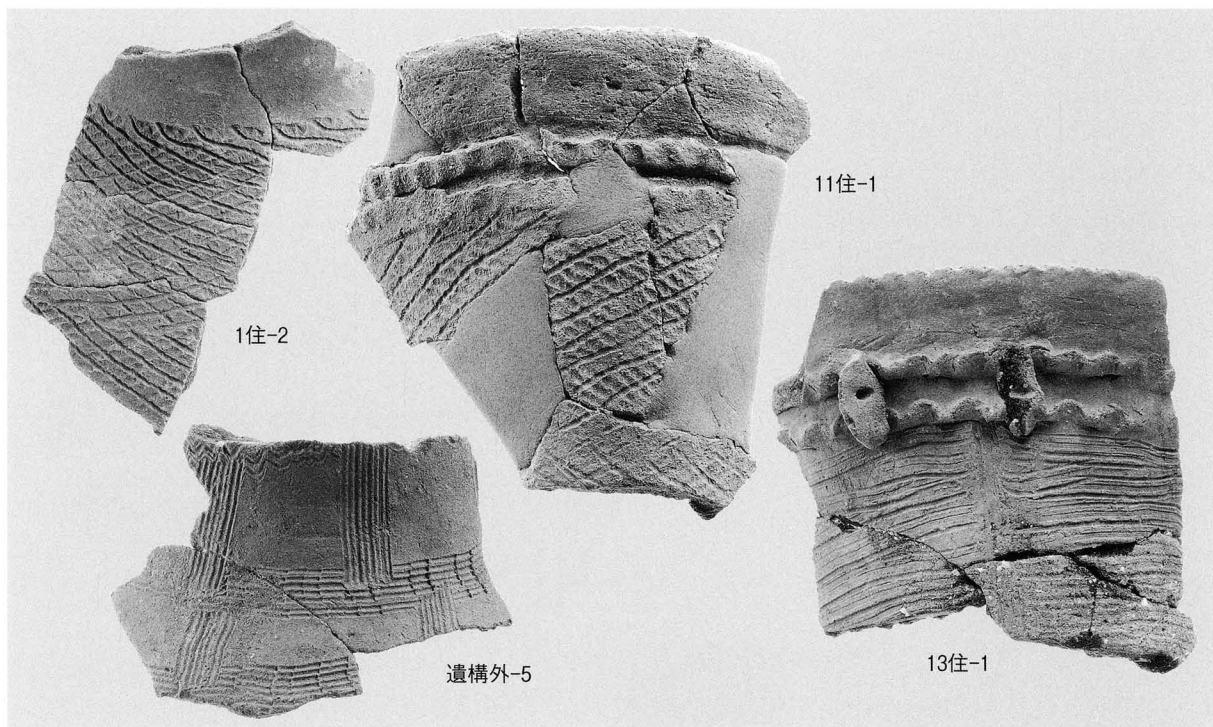












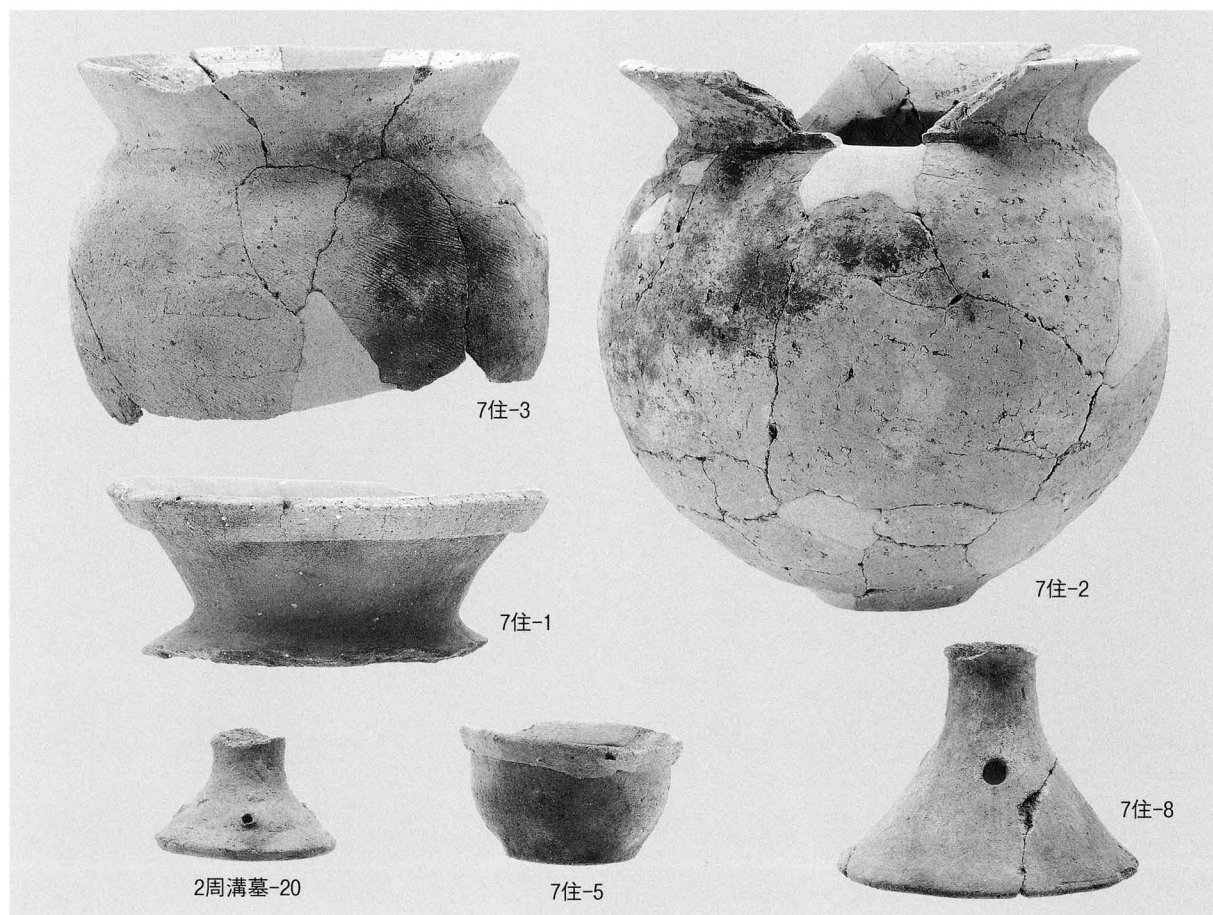
1住-2

11住-1

遺構外-5

13住-1

弥生時代 S=1/2



7住-3

7住-2

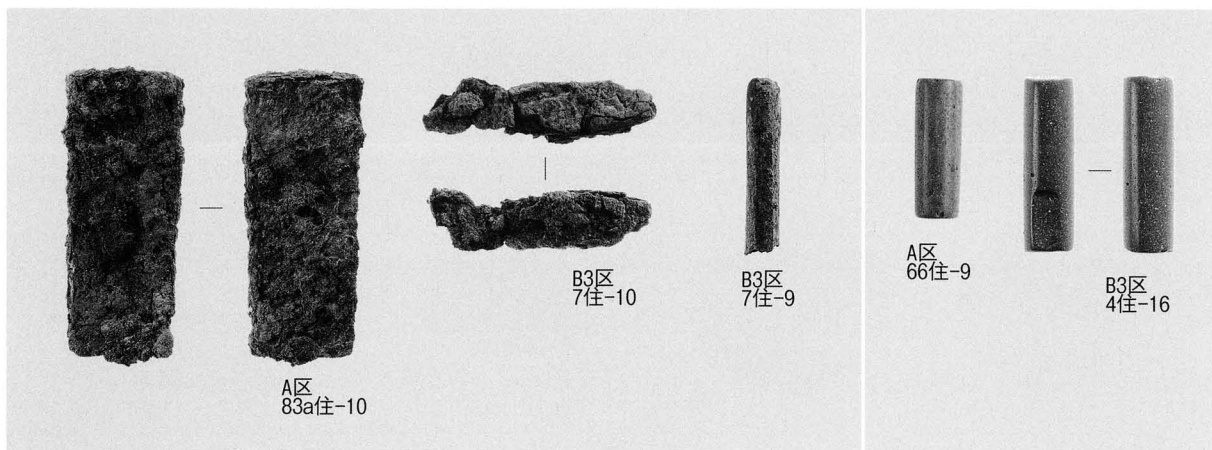
7住-1

7住-8

2周溝墓-20

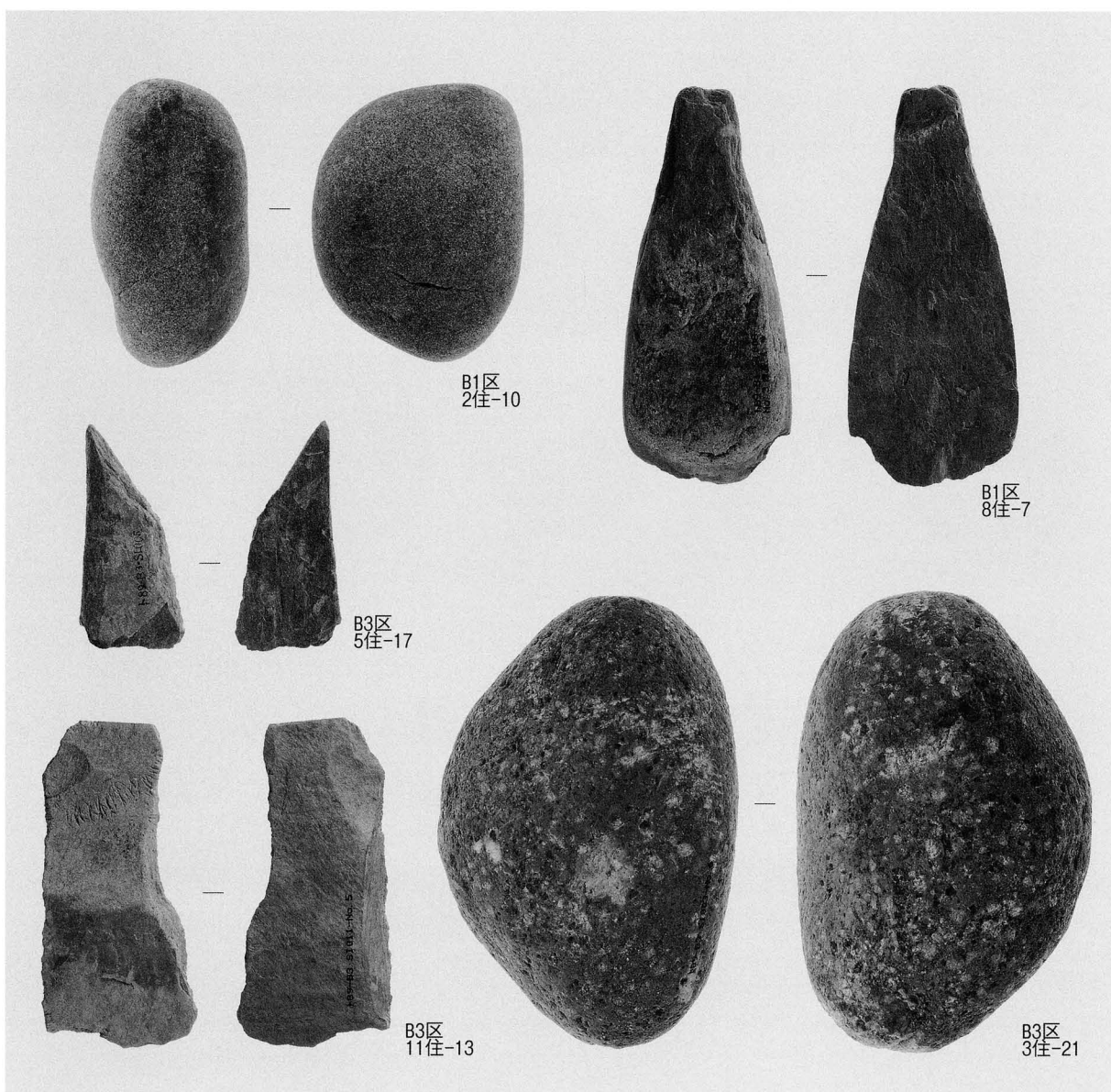
7住-5

古墳時代 S=1/3

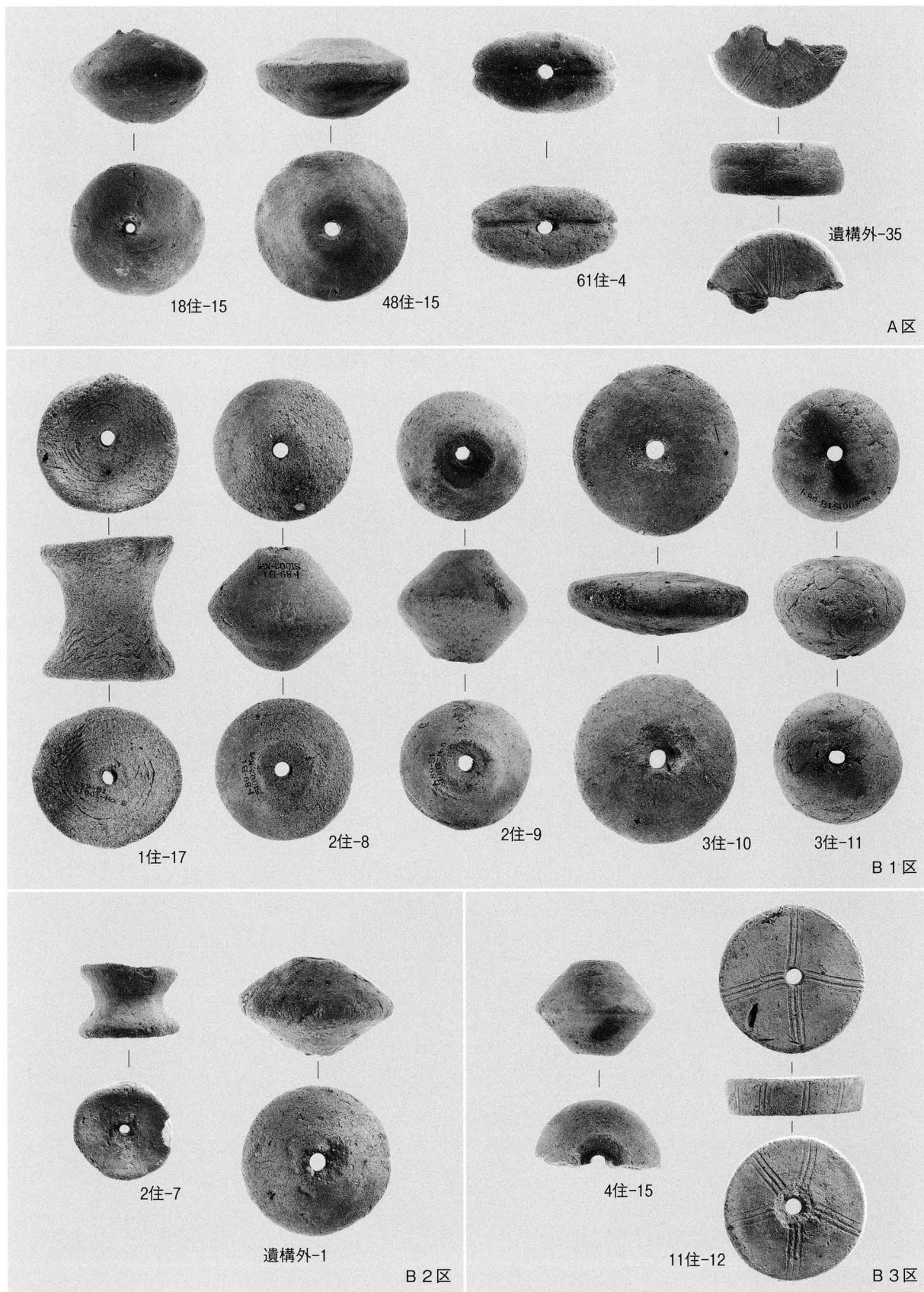


鉄製品 S=1/2、銅製品 S=1/1

石製玉類 S=1/1



石器 S=1/2



報告書抄録

ふりがな	はんがいいせき							
書名	埜谷遺跡2							
副書名	県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	笠間市文化財調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	常深尚、土生朗治、南田法正、浅間陽、高橋清文、土井道昭							
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所							
所在地	〒379-2146 群馬県前橋市公田町 1002 番地 1							
発行機関	笠間市教育委員会							
所在地	〒309-1698 茨城県笠間市石井 717 番地							
発行年月日	平成23年 3月15日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村遺跡番号						
はんがいいせき 埜谷遺跡	かざましおぼら 笠間市小原 48番地ほか	08321089		36° 22′ 10″	140° 19′ 59″	2008.08.18 } 2009.01.30	11,849㎡	県営畑地帯 総合整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
埜谷遺跡	集落	旧石器時代	石器集中地点 1箇所		ナイフ形石器、 刃器状剥片、打 面再生剥片、剥 片、石核、碎片		ナイフ形石器を含む 石器59点が集中する ユニットが1箇所確 認された。 縄文前期中葉の住居 跡が検出された。 弥生後期後半の大規 模な集落を確認、B 3区3・4号住居跡 では十王台式土器と 二軒屋式土器の良好 な個体が出土した。 古墳前期の方形周溝 墓2基が確認され た。	
		縄文時代	竪穴住居跡 1軒 陥穴 2基		縄文土器、石器			
		弥生時代	竪穴住居跡 69軒		弥生土器、土製 紡錘車・土錘、 磨石・台石・砥 石、管玉、鉄斧			
		古墳時代	竪穴住居跡 16軒		土師器、土製紡 錘車・土錘、磨 石・台石・敲石・ 砥石、刀子、銅 製品			
		奈良平安時代	竪穴住居跡 34軒 掘立柱建物跡 7棟 土坑 1基 方形周溝状遺構 1基		土師器、須恵器、 灰釉陶器、刀子、 砥石、紡錘車		奈良・平安時代の60 号住居跡からは「□ 山寺」墨書土器と高 台の付いた鉢形の須 恵器が出土した。 中世の区画溝は台地 上を縦走し、道路跡 がこれと直交する。 地下式坑を7基確認 した。	
		中世以降	地下式坑 7基 井戸 3基 土坑 2基 溜井状遺構 1基 ピット群 1基 ピット列 2条 溝 19条 道路跡 1条 土坑 121基		陶器（古瀬戸、 常滑）、内耳塙、 かわらけ、鉄滓			

茨城県笠間市

埜谷遺跡 2

－ 県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書 －

平成23年 3月10日 印刷

平成23年 3月15日 発行

編 集 有限会社 毛野考古学研究所
〒 379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地 1
電話 027-265-1804 FAX 027-265-5352

発 行 笠間市教育委員会
〒 309-1698 茨城県笠間市石井717番地
電話 0296-77-1101

印 刷 朝日印刷工業株式会社
〒 371-0846 群馬県前橋市元総社町67番地
電話 027-251-1212

